



古今和歌六帖第一

歳時

春立日 親月 元日 残雪 子日 若菜 白馬 仲春 弥生 三日

暮春

初夏 更衣 卯月 卯花 神祭 早苗月 五日 菖蒲 皆尽月 祓

夏尽

秋立日 早秋 七夕 後朝 葉月 十五夜 駒牽 長月 九日 秋尽

初冬

無神月 霜月 神樂 師馳月 仏名 潤月 歳暮

【異同】弥生―三月(大)

無神月―神無月(大)

天

漢渚 照日 春月 夏月 秋月 冬月 雜月 三日月 夕月夜 有明

夕暗

星 春風 夏風 秋風 冬風 山下 嵐 雜風 雨 白雨

寒雨

夕多千 雲 露 志津久 霞 霧 霜 雪 霰 氷 火

【異同】白雨―村雨(大)

春たつひ

古 春上

一 としのうちに春はきにけりひとゝせをこそとやいはんことしとやいはむ  
あり原もとかた

【異同】ナシ

【現代語訳】年内に春は来てしまった。この同じ一年を去年と言おうか、今年と言おうか。

【語句】◎春たつひ 立春の日。「はる立つ日よめる」(後撰集・二)、「立春日」(友則集・一)などと、詞書に

立春の日のことを詠んだ歌であると示す例が見られる。礼記・月令には「立春之日……以迎春於東郊」(立春の日……以て春を東郊に迎へ)とある。「立春」と「春立つ」については、新井栄蔵「万葉集季節観考―漢語へ立

春」と和語（ハルタツ）——『万葉集研究 第五集』塙書房、一九七六年）に詳しい。○としのうちに春はきにけり 年内、すなわち暦の上ではまだ旧年中に、立春になったことを表す。いわゆる年内立春。所載欄の古今集・一の詞書に「ふるとしに春たちける日よめる」とある。年内立春を詠んだ先例に「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか」（二十三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首・万葉集・四五六一（旧四四九二）・大伴家持）がある。菅原道真の漢詩にも年内立春に興を覚えた作がある（菅家文草・二七八、菅家後集・四九二）。当時、年内立春は一・七年に一回の割であった（神尾暢子「在原元方と立春映像——歳内立春と古今巻頭——『王朝国語の表現映像』新典社、一九八二年）。○ひととせ 一年。同じ一年。「こゑたえずなけやうぐひすひととせにふたたびとだにくべき春かは」（古今集・一三二）。

【所載】古今集・春上・一／和漢朗詠集・三／寛平御時中宮歌合・三／後六々撰・九八／定家十体・一六〇／奥儀抄・一三三／古来風体抄・二一五／三五記・九九／桐火桶・三八／沙石集・九

【参考】作者名「在原元方」は、古今集等所載欄の文献に一致する。

## 紀つらゆき

二 同  
そでひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】袖を濡らして手ですくった水が凍っていたのを、立春の今日の風が解かしていることだろうか。

【語句】○そでひちて 水につかって袖が濡れる状態。「ひつ」は、「つかる」「ぐつしよりと濡れる」意の自動詞（山内洋一郎「動詞「漬つ」について」『国語学』一九六四年十二月）。「かりてほす山田のいねの袖ひちて植ゑしさなへとみえもするか」（貫之集・四三九）。○春たつけふの風やとくらん 礼記・月令「孟春之月……東風解冻」（孟春の月……東風凍を解く）に拠り、立春解氷を詠んだもの。なお、従来の通説通り礼記・月令を典拠とすることについては、中野方子「魚袋」の歌と詩と——侍宴応制詩から歌へ——『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）に詳しい。「みづのおもにあやふきみだる春風やいけのこほりをけさはとくらん」（後撰集・一一・紀友則）。

【所載】古今集・春上・二／新撰和歌・一／和漢朗詠集・七／俊頼髓脳・九七／奥儀抄・四三三／袖中抄・八六四／古来風体抄・二一六／和歌色葉・二二八／桐火桶・三九

【参考】作者名は所載欄の古今集等の「紀貫之」に一致する。

夏に袖を濡らして手ですくった水が、冬になつて凍り、それを立春の日の今日の春風が解かしているだろうという、一年間の季節の推移が表されている歌。また、「むすぶ」と「とく」との対比がある。「けふとくる水にかけてぞむすぶらしちとせの春にあはんちぎりを」（順集・一六四）は、古今六帖当該歌の影響下で詠まれたものか。

三　としのうちに春たつことをかすが野のわかなさへにもしりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】年内に立春になることを、（暦だけではなく）春日野の若菜によつてまでも、知ったことだよ。

【語句】○としのうちに春たつ　年内立春。一番歌参照。貫之集によると、延喜十二（九一二）年十二月二十二日のことで、当該歌は、藤原定方が、同母妹である尚侍満子の四十賀のために依頼した詠作。実は、満子の四十歳は翌年であつて、醍醐天皇主催の満子四十賀も、延喜十三（九一三）年十月十四日に行われているのだが（日本紀略）、定方は年内立春により前年十二月に行つたものと考えられる。当時は立春とともに（新年となり）齢を重ねるとされていた。「春立つと思ふ心はうれしくて今ひとせのおいぞそひける」（拾遺集・一〇〇〇・凡河内躬恒）。○かすが野　春日野。大和国の歌枕。現在の奈良市街の東南部、春日山麓に展開する野。春の景物を詠むことが多く、若菜が特に多く詠まれた。春日の地には、藤原氏の祖神を祭る春日大社があり、藤原氏の賀を寿ぐのにふさわしい地名でもあつた。○わかなさへにもしりにけるかな　貫之集の注釈書では、「若菜によつてもまた知つたことだよ。」（木村正中『新潮日本古典集成 土佐日記 貫之集』新潮社、一九八八年）、「人々だけでなく、……若菜までが知つていたのだつた。」（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』風間書房、一九九七年）と、解釈が分かれている。「若菜」は、古今六帖では四三番歌から四九番歌までの題となつてゐる。正月子の日などに、若菜を摘み不老長寿を寿いで食した。四十賀を正月子の日に行い、若菜を供した例として、延長二（九二四）年正月二十五日に宇多上皇が催した醍醐天皇の四十賀がある（西宮記など）。源氏物語（若菜上）に、玉鬘が正月子の日に源氏に若菜を奉り、四十賀を祝う例があるが、これは、醍醐天皇の四十賀を典拠とするとされる（花鳥余情）。若菜は、春日野の代表的な景物でもあつた。「あたらしき春くるごとふるさとの春日の野辺に若菜をぞつむ」（能宣集・一二六）等、春になると春日野で若菜を摘むことが詠まれている。「に」は、「……で」「……によつて」の意。「春の野に若菜つまんと来しものを散りかふ花にみちはまどひぬ」（古今集・一一六・貫之）。また、自然現象以外に立春を知るのには暦によつてである。「偏因曆注覚春来」（偏に曆注に因つて春の来る

を覚ゆ）（菅家文章・二七八）、「月よめばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか」（万葉集・四五二六（旧四四九二）・大伴家持）。したがって、曆によるだけではなく、春日野の若菜によっても、年内に立春になることを知った、と解釈した。

【所載】新撰朗詠集・三／夫木抄・一八／貫之集Ⅰ・六八三

【参考】古今六帖には作者名はないが、貫之集等によると、作者は紀貫之。

#### 四 拾一春 春たつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみて今朝はみゆらん みぶのたぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になったというだけで、み吉野の山も霞んで今朝は見えるのだろうか。

【語句】○春たつ 立春になる（一番歌参照）。霞は春の代表的な景物の一つであり、春になれば霞が立つと歌に詠まれた。「ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも」（万葉集・一八一六（旧一八一二））。○みよしのゝ山 吉野山のこと。「み」は、美称の接頭語。吉野山は大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪が景物として知られるが、また霞も詠まれた（斎藤照子「春日」と「吉野」『赤染衛門とその周辺』笠間書院、一九九九年）。「吉野山峯の白雪いつきえてけさは霞の立ちかはるらん」（拾遺集・四・源重之）。

【所載】拾遺抄・春・一／拾遺集・春・一／金玉集・春・二／和漢朗詠集・八／新撰朗詠集・三／忠岑集Ⅰ・二七／忠岑集Ⅱ・一／忠岑集Ⅲ・一／左兵衛佐定文歌合・一／前五番歌合・七／秘藏抄・二／三十人撰・七一／三十六人撰・八〇／深窓秘抄・二／九品和歌・一／秀歌大体・三／俊頼髓脳・九八／奥儀抄・八七／古来風体抄・三四一／和歌色葉・六三／瑩玉集・四／近代秀歌・二八／詠歌大概・一／詠歌一体・四一／三五記・二二一、二五七／井蛙抄・一〇一／沙石集・一九一

【参考】作者名「みぶのたぐみね」は所載欄の文献に一致する。

#### 五 古一 春上 谷イ やまかぜにとくるこほりのひまごとにうちいづるなみや春のはつ花

【異同】ナシ

【現代語訳】山風によって解ける氷の隙間ごとにほとばしり出る波、これが春の最初の花なのか。

【語句】○やまかぜ 古今六帖での傍記異文によると「谷風」の本文が伝えられ、古今集の本文でも「谷風」「山風」の異同があり、その他の文献でも両様の本文が存在する。春風によつて氷が解けるといふ発想は、「孟春之月……東風解凍（孟春の月……東風凍を解く）」（礼記・月令）に淵源が見られる。古今六帖の配列では、当該歌も立春解氷の歌ということになる。山風については、「花の色はかすみにこめて見せずともかをだにぬすめ春の山かぜ」（古今集・九一）などと、春の山風が詠まれた例はある。谷風は、東風すなわち春風とされ、「氷だにとまらぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声」（拾遺集・六・源順）などと、氷を解かす春の谷風が詠まれている。なお、この歌の古今集における本文異同の問題については、奥村恒哉「たにかぜ」「やまかぜ」に関する諸問題——古今集と資料——『古今集の研究』臨川書店、一九八〇年）、増田繁夫「古今集の歌語——山風と谷風——」（『論集古今和歌集』笠間書院、一九八一年）に詳しい。○はつ花 最初に咲く花。「あはゆきのこのころ継ぎてかく降らば梅の初花散りか過ぎなむ」（万葉集・一六五五（旧一六五二）・大伴坂上郎女）。当該歌では、波をその初花に見立てた。

【所載】古今集・春上・一二／新撰万葉集・二三九／金玉和歌集・五／和漢朗詠集・一六／寛平御時后宮歌合・二／寛平御時中宮歌合・一／俊頼髓脳・四九／和歌童蒙抄・一〇六／袋草紙・六一四／古来風体抄・二二三／八雲御抄・七二／桐火桶・四一

【参考】古今六帖に作者名はないが、歌合本文や古今集などによると、作者は源当純。なお古今集などの勅撰集では同じ作者の歌がつづくと二首目以降は作者名が省略される。従つて当該歌のような場合は前歌の作者「みぶのたぐみね」が作者と判断されるが、古今六帖ではそうではない。またすべての歌に作者名が記されるわけではない。

〔以上五首担当 長戸千恵子〕

## む月

### 大伴坂上郎女

六 うちのぼるさほのかはべのあをやぎのもえいづるはるになりけるかな

【異同】あをやきの——青柳（大）

【現代語訳】さかのぼって行く佐保の川辺に見える青柳の芽吹き始める春になったことだよ。

【語句】◎む月 一月。春のはじめの月。「正月立ち春の来たらばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ」（万葉

集・八一九（旧八一五）。○うちのぼる（川原を）さかのぼって行く。「君が代のかずにしとらばうちのぼるさほのかはらの石もたえじな」（永久百首・五一七）。○さほのかはべ 佐保川の川辺。佐保川は春日山中に発し、山麓の北側を迂回してから南下、平城京を南北に通り大和川と合流する。万葉集では「千鳥」と共に詠まれることが多い。「千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ波やむときもなし我が恋ふらくは」（万葉集・五二九（旧五二六））。○あをやぎの 新春の様を詠んだものとしては、万葉集に天平二（七三〇）年正月十三日に筑前の大伴旅人邸で催された宴会での「梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや」（万葉集・八二二（旧八一七））がある。○もえいづる 芽を出す。芽吹く。「もえいづるこのめを見てもねをぞなくかれにし枝の春をしらねば」（後撰集・一四）。以下、所載欄の万葉集では「今は春べとなりになるかも」とする。ここでは次の七番歌の下句と混同したかのような形をとる。

【所載】玉葉集・春上・八七／万葉集・一四三七（旧一四三三） 打上 佐保能河原之 青柳者 今者春部登 成  
尔鶏類鴨 ウチアグルサホノカハラノアヲヤギハイマハルベトナリニケルカモ うちのぼるさほのかはらのあ  
をやぎはいまははるべとなりになるかも／夫木抄・七四七

【参考】作者名は所載欄万葉集に一致する。

七 いはそゝくたるひのうへのさわらびのもえいづるはるになりける哉 志貴王子かゞみの王女とも

【異同】かゝみの王女とも―かゝみの王子とも（大）

【現代語訳】岩に注ぎかかりそうな氷柱のそばの早蕨が芽吹き始める春になったことだよ。

【語句】○たるひ 垂氷。つらら。「みねにひやけさはうららにさしつらむのきのたるひの下の玉水」（好忠集・六）。所載欄の万葉集では「たるみ」とあり、新古今集や俊頼髓脳、古来風体抄なども「たるみ」と伝える。一方で和漢朗詠集や綺語抄など「たるひ」と伝えるものも併存する。○さわらび 芽が出たばかりの蕨。「さわらびのおひいづるのべをたづぬれば道さへみえず空もかすみて」（能宣集・三五五）。○もえいづる 六番歌参照。ここでは「もえ（燃え）」と「さわらび」の「ひ（火）」が縁語。

【所載】新古今集・春上・三三／万葉集・一四二二（旧一四一八） 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔  
成来鴨 イハソソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ いはばしるたるみのうへの  
さわらびのもえいづるはるになりけるかも／和漢朗詠集・一五／夫木抄・八九〇／俊頼髓脳・一七一／綺語抄

・二〇一／和歌童蒙抄・五四〇／袖中抄・一三三／古来風体抄・八四／和歌色葉・七四／三五記・二三六

【参考】万葉集の題詞は「志貴皇子の權（よろこ）びの御歌一首」とする。

八 はるきぬとひといいどもうぐひすのなかぬかぎりはあらじとぞおもふ  
丹生のたぐみね

【異同】ひといいとも―人はいへとも（桂・大） 丹生のたぐみね―丹生たぐみね（大）

【現代語訳】春が来たと言はうけれども、鶯が鳴かないうちはそんなことはあるまいと思うよ。

【語句】○かぎり 時間的に、限定された範囲内をいう。うち。あいだじゅう。「秋の菊にほふかぎりはかざしてむ花よりさきとしらぬわが身を」（古今集・二七六）。○あらじとぞおもふ あるまいと思うよ。「おもふ」の主語は自分。二句目の「ひと」と対比する。

【所載】古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三三／忠岑集Ⅱ・五／忠岑集Ⅲ・五／忠岑集Ⅳ・一四／三十人撰・七三／九品和歌・九／奥儀抄・九五／詠歌一体・四三／三五記・二二三

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。表記「丹生」については古今集・善海所伝本の当該歌に「にふのたぐみね」とある（久曾神昇『古今和歌集成立論・資料編上』風間書房、一九六〇年）。

九 かすがのゝとぶひのゝもりいでゝみよいまいくかありてわかなつみてん  
古一春上

【異同】ナシ

【現代語訳】春日野の飛火野の野守よ、外に出て見ておくれよ。あと何日たてば若菜を摘むことができるのだろうか。

【語句】○かすがのゝとぶひのゝもり 「かすがの」は奈良市の春日山のふもとの野。平城京からは東方の高台にあたり、烽火を置いて外敵に備えたことから「飛火野」ともいい、「とぶひのゝもり」で、この地の番人をいう。「かすがの」とぶひののもり見しものをなきなといはばつみもこそうれ（後撰集・六六三）。○わかなつみてん 「わかな」は春先に見られる食用となる草の総称。宮中では正月の最初の子の日に若菜の羹を天皇に献上したこと、民間にもこの日に若菜を摘む風習が広まったとされる。「てん」は完了の助動詞「つ」の未然形に推量の助動詞「む」が付いたもので、可能の推量。……できるだろう。「梓弓おして春雨けふふりぬあすさへ



ふらばわかなつみてむ」(古今集・二〇)。

【所載】古今集・春上・一八／新撰和歌・二五／秀歌大体・六／俊頼髓腦・三一七／和歌童蒙抄・一一一／奥儀抄・四三八／袖中抄・三一二／和歌色葉・二二九／桐火桶・四二／悦目抄・二四

### 藤原言直

一〇 春<sup>同</sup>やとき花やをそきゝわかむうぐひすだにもなかずもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】春の訪れが早いのか、花の咲くのが遅いのか、と(その声を)聞いて判断しようと思っていた、その鶯でさえも、まだ鳴かずにいることであるよ。

【語句】○花やをそき 花やおそき。○きゝわかむ 鶯の声を聞いて判断しようの意。「む」は詠み手の意志を表わし、連体形。

【所載】古今集・春上・一〇／新撰和歌・一三／奥儀抄・四三九／古来風体抄・二二二

【参考】作者名は古今集に一致する。

〔以上五首担当 青木太朗〕

一一 いまさらに雪ふらめやもかげろふのもゆるはるべ<sup>日</sup>となりにしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】今更雪が降ろうか、もう降るまい。陽炎のもえ立つ春の季節になつてしまったものを。

【語句】○雪ふらめやも 「めや」は推量の反語形。……だろうか……ではないだろう。○かげろふ 晴れた春の日などに地面が熱せられ、立ちのぼる水蒸気が光を受けてゆらめいて見えるもの。「かぎろひ」とも。○はるべ 春のころ。「べ」は「タベ」の「べ」に同じ。上代では「はるへ」「ゆふへ」と清音。

【所載】新古今集・春上・二一／万葉集・一八三九(旧一八三五) 今更 雪零目八方 蜻火之 療留春部常 成西物乎 イマサラニユキフラメヤモカゲロフノモユルハルヘトナリニシモノヲ いまさらにゆきふらめやもかぎろひのもゆるはるべとなりにしものを／人麿集Ⅱ・二〇／人麿集Ⅲ・一／人麿集Ⅳ・一〇七／赤人集Ⅰ・一三四／赤人集Ⅱ・一七／赤人集Ⅲ・二〇／秀歌大体・一四

一二 うぐひすのふゆごもりしてむめるこははるのむ月のなかにこそなけ

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が、長い冬籠もりに耐えて生んだ子は、春の睦月を待ち得て、やわらかな産着に包まれてのどやかに鳴いていることだ。

【語句】○はるのむ月の「睦月」に「襦袢（産着）」を掛ける。「正月一日、子生みたる人にむつきつかはずとてよめる めづらしく今日たちそむる 鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな」（詞花集・一六二）。ここは鶯の雛が産毛に包まれているさまをいう。

【所載】夫木抄・三七七

### ついたちのひ

拾一 春

そせい法師

一三 あらたまのとしたちかへるあしたよりまたるゝものはうぐひすのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】新しい年に改まった、その朝から、待たずにいられないものは鶯の声である。

【語句】◎ついたちのひ「ついたち」は、「月立ち」の意から、一日、特に一月一日、元日をいう。和歌では、新しい年を迎え、鶯や霞が詠まれて、春になる喜びが歌われる。○あらたまの年、月、春などにかかる枕詞。○としたちかへる 年が改まる。新年になる。○あしたより「あした」は朝の意。○またるゝものは「るる」は自発の助動詞。

【所載】拾遺抄・春・四／拾遺集・春・五／和漢朗詠集・七二／素性集Ⅰ・五〇／素性集Ⅱ・四一／素性集Ⅲ・三九／俊頼髓脳・二九一

【参考】作者名「そせい法師」は、所載欄の文献のすべてに一致する。

同

一四 きのふこそとしはくれしかはるがすみかすがの山にはやたちにけり

山辺あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日、年は暮れてしまったばかり。それなのに、元旦の今朝は、早くも春霞が春日の山に立ち懸かっていることだ。

【語句】○きのふこそとしはくれしか 「…こそ…已然形」の形で気持ちがあとにつづく場合、逆接になる例が多い。「きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風の吹く」（古今集・一七二）。○かすがの山現在の奈良市、春日神社の背後一帯の丘陵地。

【所載】拾遺集・春・三／万葉集・一八四七（旧一八四三）昨日社 年耆極之賀 春霞 春日山尔 速立尔来 キノフコトシハクレシカハルカスミカスガノヤマニハヤタチニケリ きのふこそとしははてしかはるかすみかすがのやまにはやたちけり／和漢朗詠集・七七／人麿集Ⅱ・一／人麿集Ⅲ・一四／赤人集Ⅰ・一四一／赤人集Ⅱ・二四／赤人集Ⅲ・二七／家持集Ⅰ・二／家持集Ⅱ・二／和歌体十種・三一／和歌十体・一三／三十人撰・一／三十六人撰・一／深窓秘抄・一／秀歌大体・一／奥儀抄・一一七／柿本人麻呂勘文・三九／古来風体抄・九九、三四三【参考】作者については拾遺集においても「山辺赤人」とするが、万葉集では不明。所載欄の諸家集は問題多く、赤人である可能性は低い。

一五 きライのふよりのちをばしらずもゝとせのはるのはじめはけふつらゆきにぞ有ける

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日以前のこととは知りません。それはさておき、百年もつづく春のはじめは今日の元旦でした。

【語句】○きのふよりのちをばしらず 「昨日より後」では解しがたい。傍記異文や所載欄の拾遺集や貫之集により、「昨日よりをち（遠）」として考えた。

【所載】拾遺集・雑賀・一一五九／貫之集Ⅰ・一三九／奥儀抄・四四二

【参考】賀の屏風歌で、所載欄の文献により貫之詠と確認できる。なお貫之集Ⅰの詞書には、「延喜二年五月、中宮の御屏風の和歌廿六首、あつまりて元日さけのむ所」とあり、田中喜美春、田中恭子『貫之集全釈』では、その「延喜二年五月」を「延長二年五月」の誤りとし、

底本、諸本、及び拾遺集詞書（雑賀・一一五九）などいずれも「延長」を「延喜」とし、さらに、この屏風

歌を資料とした勅撰集入集歌も「延喜」としているが、家集のこの位置に延喜初年の歌が収録されるのは疑問。私見により「延長」に改めた。

とする。延長二年であれば醍醐天皇の中宮穩子はちょうど四十歳。前年の四月二十六日に女御から立后したばかりで、四十賀の屏風歌ということになるうか。なお冷泉家新出の素寂本「貫之集」は非常に特異な本文を持ち、納得できることが多いが、ここはまさしく「延長二年五月」となっている。

〔以上五首担当 大養廉・久保木哲夫〕

一六 あたらしくあくるこよひをもゝとせのはるのはじめとうぐひすぞなく

【異同】 あたらしく―あらしふく（大）

【現代語訳】 新しく（年が）明ける今宵を「百年続く春の始め」と鶯が鳴いている。

【語句】 ○あくるこよひを（年が）明ける今宵を。所載欄の風雅集では「あくるとしをば」。貫之集では「あくることしをも」。○もゝとせのはるのはじめ 百年続く春の始め。賀意を表す。

【所載】 風雅集・賀・二二六八／貫之集Ⅰ・二二八

拾一春

一七 よしの山みねのしら雪いつきえてけさはかすみのたちかはるらん

源しげゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吉野山の峰に残っていた白雪はいつの間にか消えて、（立春の）今朝は霞が代わりに立っているのだろうか。

【語句】 ○よしの山 奈良県吉野郡吉野町にある山。四番既出。○けさはかすみの（立春の）今朝は霞が。所載欄の三十人撰と深窓秘抄では「けふはかすみの」。○たちかはる 古いものが新しいものと入れ替わる。交替する。接頭語「たち」に「霞が」立ち」を掛ける。「たこの浦の風ものどけき春の日は霞ぞ浪にたちかはるらん」（続拾遺集・三三三）。

【所載】 拾遺集・春・四／金葉集三奏本・春・一／重之集・二二二／金玉集・三／玄玄集・二九／三十人撰・七四／深窓秘抄・三／古来風体抄・三四四

【参考】作者名「源しげゆき」は所載欄の文献に一致する。

一八 むめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあは雪ぞふる  
のこりのゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の枝に鳴きながら飛び移っている鶯の羽を真つ白にして淡雪が降っていることだ。

【語句】◎のこりのゆき 春になって降る雪。また、春に消え残る雪。古今六帖では初春に降る雪の歌が並んでいる。○はねしろたへに 羽を真つ白にして。「しろたへ」は白い色。○あは雪 淡雪。春先などに降る消えやすい淡い雪。万葉集の沫雪（あわゆき）は降ったばかりの、沫のように溶けやすい柔らかな雪で、冬の歌にもみえるが、中古に入ると淡雪（あはゆき）と理解されるようになり、春の雪とされた。

【所載】新古今集・春上・三〇／万葉集・一八四四（旧一八四〇）梅枝尔 鳴而移徒 鶯之 翼白妙尔 沫雪曾落 ウメガエニナキテウツロフウグヒスノハネシロタヘニアワユキゾフル うめがえになきてうつろふうぐひすのはねしろたへにあわゆきぞふる／人麿集Ⅲ・六九／赤人集Ⅰ・一三九／赤人集Ⅱ・二二

一九 かすみたちこのめもはるのゆきふればはなゝきさともはなぞちりける  
古一春上 つらゆき

【異同】このめもはるの―木のめをはるの（大）

【現代語訳】霞が立ち、木の芽もふくらむ春の雪が降るというと、花の咲いていないこの里にも花が散るように見えることだ。

【語句】○このめもはるの 「張る」は芽や根が伸びること。「春」と掛詞。「かすみたちこのめも」までが「はる」の序詞。「よも山にこのめ春さめふりぬればかぞいろはとや花のたのまん」（千載集・三二）。○はなゝきさと 花の咲いていない里。

【所載】古今集・春上・九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

凡河内みつね

二〇 はるたちてなをふるゆきはむめの花さくほどもなくちるかとおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】立春を過ぎてまだ降る雪は、梅の花が咲く間もなく散るのか、と思うことだよ。

【語句】○はるたちてなをふるゆき 春立ちてなほ降る雪。立春を過ぎてなお降る雪。「うちきらし猶ふる雪も春たつといふばかりにや花とみゆらん」（玉葉集・三〇）。○ちるかとおおもふ 所載欄の他文献では全て「ちるかとおもふ」。

【所載】拾遺抄・春・五／拾遺集・春上・八／躬恒集・三八五／左兵衛佐定文朝臣歌合・二

【参考】作者名「凡河内みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦狭依〕

あか人

二一 うちなびきはるさめくらししかすがにあまぐもきりあひゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】春になって春雨が一日中降り暮らしている、それなのにまだ空には霧がたちこめて雪が降っていることよ。

【語句】○うちなびき 枕詞。草木の枝葉が萌え出、伸びてなびき茂るので「春」に、なびく様子から「草」「黒髪」にかかる。○はるさめくらし 春雨が一日中ふり「暮らし」と春雨が降って「暗し」と掛ける。○しかすがに それなのに。そうはいうものの。○きりあひ 霧がたちこめ。○ふりつゝ 降り降りしていることよ。「つゝ」は詠嘆の余情をこめて反復継続の意を表す。

【所載】万葉集・一八三六（旧一八三二）打麿 春去来者 然為蟹 天雲霧相 雪者零管 ウチナビキハルサリ クレバシカスガニアマクモキリアヒユキハフリツツ うちなびくはるさりくればしかすがにあまぐもきらひゆきはふりつゝ／人麻呂集Ⅲ・一三／赤人集Ⅰ・一一九／赤人集Ⅱ・三／赤人集Ⅲ・一八／綺語抄・五八／和歌童蒙抄・九五

【参考】作者名「あか人」とあり、赤人集には当該歌があるが、人麻呂集にもあり、万葉集には作者名なしで載

る。

二二 　はるがすみたちよらねばやみよしのゝやまにいまさへゆきのふるらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞がたちよってこないから、それで吉野の山には今でも雪が降っているのだろうか。

【語句】○たちよらねばや　立ちよらないからか。「たち」は春霞立ちと、立ち寄るの掛詞。○みよしの　大和国の歌枕。奈良県吉野川流域一帯をいう。「み」は美称。吉野山の桜、雪、吉野川の滝瀬などが歌に詠まれる。

○いまさへ　今でも。○ふるらん　降っているのだらう。「らん」は目前に見えないことを推量する助動詞。

【所載】貫之集Ⅰ・二〇一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二三 　うちきらしゆきはふりつゝしかすがにわがいのそのにうぐひすぞ鳴  
已下十一首無之イ  
あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】空全体を曇らせて雪は降り続いている、それでもさすがに我が家の庭では鶯が鳴いている。春なのだなあ。

【語句】○うちきらし　空全体を曇らせて。「うち」は接頭語。「きらし」は「霧る」の他動詞形。○ゆきはふりつゝ　「つゝ」は同じ動作の反復される意を表す。○しかすがに　そうはいうものの。

【所載】後撰集・春上・三三／拾遺集・春・一一／万葉集・一四四五（旧一四四一）打霧之　雪者零乍　然為我二  
吾宅乃苑尔　鶯鳴裳　ウチキラシユキハフリツツシカスガニワギヘノソノニウグヒスナクモ　うちきらしゆき  
はふりつつしかすがにわぎへのそのにうぐひすなくも／夫木抄・三七五／綺語抄・五九

【参考】作者名「あか人」とあるが、所載欄の後撰集はよみ人知らず、その他の文献すべて大伴家持とする。

二四 はるのひにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】春の日に霞がたなびいていても哀しい。この夕暮れの光のなかで鶯が鳴いていることよ。

【語句】○うらがなし ものかなし。○ゆふかげ 夕方の日の光。○うぐひすなくも 「も」は詠嘆を表す。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三八八／万葉集・四三二四（旧四二九〇）春野尔 霞多奈毘伎 宇良悲 許能暮影尔 鶯奈久母 ハルノノニカスミタナビキウラガナシコノユフカゲニウグヒスナクモ はるのひにかすみたなびきうらがなしこのゆふかげにうぐひすなくも

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

二五 うぐひすのたにのそこにてなくこゑはみねにこたふるやまびこもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が谷の底で鳴くその声は、山頂にまだ残りの雪があつて、春を告げる鶯に應えるこだまもないなあ。

【語句】○たにのそこ 谷の底。「底」に「其処」をかける。○みね 山頂。谷の底との対比。山頂には題「のこりのゆき」がある。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三八九／躬恒集Ⅱ・一五／躬恒集Ⅲ・一五／躬恒集Ⅳ・三六一

〔以上五首担当 橋本智美・林マリヤ〕

二六 ふくかぜをなきてうらみようぐひすはわれやははなにてだにふれたる

【異同】ナシ

【現代語訳】吹いて、花を散らす風を泣いて恨んでおくれ、鶯よ―おまえは私を恨んでいるようだが―私は花に手だって触れてはいないのだから。

【語句】○なきて 「泣き」と「鳴き」の懸詞。○うぐひすは 「鶯よ」とほぼ同じ気持ち。新編日本古典文学



全集『古今和歌集』頭注では『うぐひす』は四字なので下に『は』をつけた」と指摘する。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九〇／古今集・春下・一〇六

二七 まつひとこぬものからにうぐひすのなきつるえだを<sup>花</sup>りてけるかな  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】待つ人も来ないのに、さつきまで鶯が愛し惜しんで鳴いていた枝を折ってしまったのだよ（あの人とともにめでようとして……）。

【語句】○ものから ……のに。逆接条件。○なきつるえだ 鶯が寄るのであるから、花のついた枝。傍記の「なきつる花」と等価。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九二／古今集・春下・一〇〇

【参考】作者名「みつね」とあるが、所載欄の古今集では「よみ人知らず」。

二八 はるた<sup>て</sup>ゝばはなとやみえんしらゆきのかゝれるえだにうぐひすぞなく

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になったら、（鶯にも）花と見えるのだろうか。白雪のかかっている枝に、鶯が鳴いているよ。

【語句】○はるた<sup>て</sup>ゝば 所載欄にある他の文献では「春立てば」。古今六帖の分類が「残りの雪」であるので、本来「春立てば」とあったものと思われるが、現存本文に従った。○はなとやみえん 雪を花に見立てる。古今集その他では「みらん」とあり、古来風体抄では「みらんの詞、今の世には少し用ひ難きなり」とする。異同にはそのような経緯が関係するか。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九三／古今集・春上・六／新撰万葉集・四一／素性集Ⅰ・一／素性集Ⅱ・三七／素性集Ⅲ・一／古来風体抄・二二〇／桐火桶・四〇

二九 しるしなきねをもなかなうぐひすのことしのみちるはなゝらなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】効のない声を立てて（花を惜しんで）鳴いていることだな、鶯は。今年だけ散る花でもないのに。

【語句】○しるしなき 効のないこと。「ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ」（古今集・六四）。○なく 「鳴く」と「泣く」の懸詞。○うぐひすの 新日本古典文学大系『古今和歌集』脚注では「説が一定しないが、『の』は主語で、作者の万感がこめられた余情表現と解す」とする。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九一／古今集・春下・一一〇／躬恒集Ⅰ・一二〇／躬恒集Ⅱ・二二／躬恒集Ⅲ・二六／躬恒集Ⅳ・三七五

三〇 はなのかをかぜのたよりにたぐへてぞうぐひすさそふしるべにはする<sup>やる</sup>

【異同】する―「する」ト「やる」ヲ割書ノヨウニ書ク（大）

【現代語訳】花の香を風の便りに添えてやって、（まだ訪れのない）鶯を誘い出す案内にしよう。

【語句】○かぜのたより 風という便り。○しるべ 道案内。てびき。

【所載】古今六帖「はるのかぜ」三八五、「うぐひす」四三九四／古今集・春上・一三／新撰万葉集・一一／新撰和歌・一五／新撰朗詠集・六四／友則集・二五／寛平御時后宮歌合・一／綺語抄・四七三

〔以上五首担当 杉本まゆ子〕

三一 たのまれぬはるのこゝろとおもへばやちらぬさきよりうぐひすのなく<sup>な</sup>をきかぜ

【異同】○はるのこゝろと―花の心と（大）

【現代語訳】うつろいやすい心をもった花、と思うからか、まだ散らぬ先から鶯はないているよ。

【語句】○たのまれぬ 頼みにできない。ずっと変わらぬものとして信頼することができない。「君が思ひ雪とつもらばたのまれず春よりのちはあらじと思へば」（古今集・九七八）。○はるのこゝろ 春の心。この歌語の用例はあるが、初句からの続きとして傍書の「はなのこゝろ」の方が自然である。こちらで解釈する。「花の心」は 花の色のあせ、散りやすい性質を「浮気な人」に重ねた表現。「うちはへてはるはさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん」（後撰集・九二）。○おもへばや 「ば」は已然形に接続し、確定条件、この場合、原因・

結果を示す。「や」は係助詞。軽い疑問を表す。思うからか。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九五／続古今集・春下・一二二／新拾遺集・雜上・一五四九／亭子院歌合・一〇／興風集Ⅰ・八

【参考】作者名「をきかぜ（興風）」は亭子院歌合（十卷本）に一致する。

三二　うぐひすの谷よりいづるこゑなくははるくることをたれかしらまし  
ちさと

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯の谷から里へ来鳴く声がなかったら、春の来たことを誰が知ろうか。

【語句】○谷よりいづるこゑ 「伐木丁々 鳥鳴嚶々 出自幽谷 遷于喬木」（毛詩伐木篇）による。原拠詩は「谷より出づ」に「登用される」という人事的意味があるが、この和歌にはそれを含めない。○こゑなくは 声がなかったなら。室町時代以降「声なくば」のように「ば」と解されたが、それ以前、形容詞の語尾「く」について「は」は、係助詞で清音。○たれかしらまし 「か」は反語。「まし」は助動詞。事実と反対のことを想像する場合に用いる。上の「なくは」に呼応し、なかったら、誰が知るだろうか、誰も知る人はいない、の意。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九六／古今集・春上・一四／新撰万葉集・二六一／寛平御時后宮歌合・二二二／俊賴髓脳・一七九／綺語抄・五七〇／和歌童蒙抄・一〇五／奥儀抄・一三五／袋草紙・六〇四／八雲御抄・六二

【参考】作者名「ちさと」は所載欄の古今集に一致する。

三三　むめのはなちるてふなへにはるさめのふりでつゝなくうぐひすのこゑ  
はせを

【異同】ちるてふなへに―ちりてふなへに（大）

【現代語訳】梅の花の散るといふ折に春雨が降り、振り出すように鳴く鶯の声。

【語句】○ちるてふ 散るといふ。○なへに ……と同時に ○ふりでつゝ 春雨に続く「降り」に、鶯の声を振り絞つての意の「ふりいで」を掛ける。鳥の声を「ふりいでて」鳴くとした例には「思ひいづるときはの山の

郭公からくれなゐのふりいでてぞなく」(古今集・一四八、新撰和歌・一三三)など。

【所載】古今六帖「うぐひす」四三九七／後撰集・春上・四〇／伊勢集Ⅰ・三三六／伊勢集Ⅱ・三三六／伊勢集Ⅲ・三三九

【参考】作者名「はせを」は後撰集四〇番歌では「よみ人しらず」。前の三九番の作者が紀長谷雄。「よみ人しらず」という表記が略されるか見落された場合、「はせを」の歌と認識される可能性はある。

三四 としたてばはなてふべくもあらなくにはるいまさらにゆきのふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】新年になったので(もう春の)花と(言ってもよさそうなのに)そうは言えず、(この舞い落ちるのは)春にいまさら雪が降るらしい。

【語句】〇としたてば「たつ」は新しい月あるいは季節がくることをいう。「睦月たつ」「春たつ」など。〇はなてふべく 花といふべく。

【所載】貫之集Ⅰ・三五一

【参考】貫之集には第二句「花こふべくも」とある。

三五 やまのまにうぐひすなきてうちなびきはるとおもへどゆきはふりつゝ

【異同】やまのまに―やまのはに(御・大)

【現代語訳】山の間に鶯が鳴き、草木のなびく春と思うのに、しきりに雪が降る。

【語句】〇やまのま 山と山の間。「うまさけ みわのやま あをによし」ならのやまの やまのまに いかくるまで……」(万葉集・一七)。〇うちなびき 「うちなびく」という枕詞がある。草木の枝葉が伸びてなびき繁ることにより「春」にかかる。しかし万葉集では「うちなびき」は「こころはいもに」などとかかる例もあり、

枕詞ではなく、こころそのようにとる。〇ふりつゝ 助詞「つつ」は動作の反復を表す。何度も降り。

【所載】万葉集・一八四一(旧一八三七) 山際爾 鶯喧而 打靡 春跡雖念 雪落布沼 ヤマノハニウグヒスナキテウチナビキハルトオモヘドユキフリシキヌ やまのまにうぐひすなきてうちなびくはるとおもへどゆきふりしきぬ／人麿集Ⅲ・七一

【参考】初句を「やまきはに」とする類似歌が、赤人集Ⅰ・一三六、赤人集Ⅱ・一九、二三九、赤人集Ⅲ・二二に見える。

〔以上五首担当 平野由紀子〕

### 子日

#### 大伴やかもち

三六 はつはるのはつねのけふのたまばゝきてにとるからにゆらく玉のを

【異同】ナシ

【現代語訳】新春の初子のきよう賜った玉で飾った箸は、手にとるとともに、玉を貫いた緒がゆらゆらと清らかな音をたてるよ。

【語句】◎子日 正月最初の子の日のこと。この日野外に出て、小松を引き若菜を摘み、遊宴して千代を祈った。宮廷で行われた子日宴は、続日本紀天平一五年正月壬子（十二日）条に、「御石原宮楼（在城東北）賜饗於百官及有位人等（石原宮楼に御し（城の東北に在り）饗を百官及び有位の人等に賜ふ）」とあるのが文献上の初例。○たまばゝき 「たまははき」とも、「たまばわき」とも発音される。上代、正月子の日の儀礼用品の一、蚕室を掃く玉で飾った箸をいう。皇后が養蚕を行ったことを表すものとされ、天皇が農耕したことを表す辛鋤（からすき）とともに子の日に飾られる。○からに ただ……だけで。とともに。……と同時に。○ゆらく 玉や鈴が触れあつて音を立てるさま。○玉のを 玉を貫き通したひも状の緒。

【所載】新古今集・賀・七〇八／万葉集・四五一七（旧四四九三）始春乃 波都祢乃家布能 多麻婆波伎 手尔等流可良尔 由良久多麻能乎 ハツハルノハツネノケフノタマバハキテニトルカラニユラクタマノヲ はつはるのはつねのけふのたまばはきてにとるからにゆらくたまのを／夫木抄・一六二／俊頼髓脳・二七八／綺語抄・五五四／和歌童蒙抄・一一四／奥儀抄・三六八／袖中抄・八五三／古来風体抄・二一〇／和歌色葉・一三七／八雲御抄・一六七／太平記・一一七／宝物集・四〇二

【参考】この歌は、聖武天皇天平宝字二年正月三日に内裏で子日宴が行われたときのもの。作者名「大伴やかもち」は所載欄の文献に一致する。

つらゆき

三七 ちとせてふこまつひきつゝはるのゝにとをさもしらずわれはきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】千年のよわいを寿ぐという小松を引きながら、春の野で、その遠さも忘れて、あなたの長寿を祈りながらここまでできてしまったことだ。

【語句】○こまつひきつゝ 「つつ」は反復を表わす。野のあちこちで小松を引いて。松は長寿・不変の象徴とされ、平安時代には、初子の日に野に出て小松を引き千代を祈るならわしがあった。○はるのゝに 春の野において、という意味。○とをさもしらず とほさもしらず。遠さも気にかけず、忘れて。

【所載】貫之集Ⅰ・五一二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

いせ

三八 おふるよりとしさだまれるまつなればひさしきものとたれか見ざらん

【異同】ナシ

【現代語訳】生い出でたその時から、千歳の寿命ときまつている松だから、行く末久しいものと誰が見ないであろうか。誰しも行く末久しくめでたいものと思つて見るであろう。

【語句】○としさだまれるまつ 千年の長寿ときまつている松。○たれか見ざらん 「か」は反語。誰が見ないであろうか、誰しもそう思つて見るであろう。

【所載】新後拾遺集・慶賀・一五五〇／伊勢集Ⅱ・七六／伊勢集Ⅲ・七三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

みつね

三九 ねたくわれねのひのまつにならましをあなうらやまし人にひかるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】 いまいましいことに、私は子の日の松になればよかったのに、ならなかった。ああ、うらやましいことよ。松は人に引かれていたよ。(私も松になって人に引き立てられ用いられたらどんなにかよかったらうに。)

【語句】 ○ねたく 「名痛く」の略。相手の名が高くて自分に痛く感じられる、が原意。憎らしい。いまいましい。小癪だ。○ならましを (実際にはそうではないが) …… だったらよかったらうに。○ひかるゝ 子の日の松が人に「引かれる」ことに、人事面で人に「引き立てられる」ことを言い掛けた。

【所載】 躬恒集Ⅰ・九七／躬恒集Ⅱ・一／躬恒集Ⅲ・一／躬恒集Ⅳ・三四八／躬恒集Ⅴ・三二二

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

四〇 おぼつかなけふはねのひかあまならばうみまつをしぞひくべかりける づらゆき

【異同】 ひくへかりける―ひくへかりけれ(御)

【現代語訳】 心もとないことだ。きょうは子の日なのか。もし私が海人(あま)であるならば、小松ならぬ海松(みる)をこそ引くところであつたよ。

【語句】 ○おぼつかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。対象がはつきりせず、そのために不安になる心という。ここは、海上の旅の途中なので、「けふはねのひか」と「おぼつかな」く思われる、ということ。○あま 漁業、製塩など、海に拠って生活する人々。○うみまつをしぞ 「うみまつ」はみる(海松)のこと。海の岩に生える緑藻。食用になる。「し」は強意の副助詞、「ぞ」は係助詞。

【所載】 土佐日記・三五

【参考】 所載欄に示したとおり、土佐日記の承平五年正月二九日条にある歌、海上での貫之の詠である。

〔以上五首担当 斎藤熙子・山下道代〕

四一 はるがすみたなびくまつのとしあらばいづれのはるかのかのべにこざらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】 春霞がたなびいている松の如き長寿があつたなら、どの春も、寿命を延べるために松を引きに野辺へ来ないことがあるうか。

【語句】○はるがすみたなびくまつ 春霞が横に長く引いてかかっている松。神仙思想への連想も働く。「松」は長寿の象徴で、子の日の行事（三六番歌子の日の項参照）には、その根を引く。霞が「たなびく」の「ひく」から、子の日の行事である松を「引く」と意味を遷移させる工夫がある。「春霞たなびく」は「山」「野辺」にかかる例が多く、直接「松」にかかるのは、他に「久しきをねがふ身なれば春霞たなびく松をいかでとぞ見る」（貫之集・二八一）の一例のみで、漢詩文にみられる「松煙（松にかかる霞）」に導かれた表現。「風竹松煙昼掩閑 意中長似在深山（風竹松煙昼閑を掩ふ 意中長く深山に在るに似たり）」（長安閑居・白氏文集・六六五）、「輕煙松心入 轉鳥葉裡陳（輕煙松心に入り 轉鳥葉裡に陳へつらぬく）」（美努淨麻呂「春日、応詔」・懷風藻・二四）。○いづれのはるかのべにこざらん 「か」は反語の係助詞。「のべ」は「野辺」と寿命を「延べ」る意を掛ける。どの春も、野辺に寿命を延べに来ないことがあるのか、毎春来るの意。類歌「百千鳥木伝ひ散らす桜花いづれの春か来つつ見ざらん」（貫之集・五七）。

【所載】貫之集Ⅰ・九一

【参考】「霞」と「煙」についての参考文献として、小島憲之「上代に於ける詩と歌——『霞』（カ）と『霞』（カすみ）をめぐって」（『万葉学論攷』一九九〇年四月）、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）、田中幹子『和漢・新撰朗詠集の素材研究』（和泉書院、二〇〇八年）等がある。  
古今六帖に作者名はないが、貫之集に入集する。

## 四二 ねのひするのべにこまつのなかりせばちよのためしになにをひかまし

たづみね

【異同】ナシ

【現代語訳】子の日の遊びをする野辺に、もし小松がなかったなら、千代の長寿を保つ例として、いったい何を引いたらよいのだろう。

【語句】○ねのひする 正月の最初の子の日に、野に出て小松の根を引き、長寿を祈る。○ちよのためし 千年の寿命を保つ例。「鶴のすむ松が崎にはならべたる千代のためしを見するなりけり」（拾遺集・六一七・平兼盛）。「子の日の松」と「千年」の取り合わせの例は多く、「ちとせまで限れる松も今日よりは君に引かれて万代や経む」（拾遺集・二四・大中臣能宣）など。○ひかまし 「引く」は子の日の行事である松を「引く」と、言葉、典拠、証拠などを探して例とする、引用する意の「引く」との掛詞、「まし」は反実仮想。



【所載】拾遺抄・春・二〇／拾遺集・春・二三／金玉集・八／和漢朗詠集・三一／忠岑集Ⅳ・一六七／忠見集Ⅰ・八五／忠見集Ⅱ・五六／秘藏抄・五／三十人撰・一〇八／三十六人撰・一二八  
【参考】作者名「たぐみね」は、拾遺抄、拾遺集、金玉集、和漢朗詠集の作者と一致し、忠岑集Ⅳに入集するが、忠見集Ⅰ・Ⅱにも入集する。『忠岑集全釈』は、この歌が忠岑集Ⅳにおいて、忠見歌として異伝を持つあたりの歌群に配置されていること、忠見集が「朱雀院の御屏風に」という詠歌年次を表す詞書をもっており、朱雀院の在位は延長八年（九三〇）～天慶九年（九四六）であるから、忠岑では無理で、忠見の歌人活動時期にふさわしいものとする。この作者名の妥当性については、後考を俟ちたい。

### わかな

あか人

四三 是るたぐみわかなつまんとしめしのにきのふもけふもゆきはふりつゝ

【異同】 是るたぐみは——明日からは（大）

【現代語訳】立春になったら若菜を摘もうと標を張っておいた野に、昨日も今日も雪は降り続けているよ。

【語句】◎わかな 若菜。ゑぐ、莖、薺など早春の野辺に生えた食用の菜。若菜を摘む民俗が、平安時代に入って正月子の日の宮廷行事「供若菜」となったという。「春日野に煙立つ見ゆ娘らし春野のうはぎ摘みて煮らしも」（万葉集・一八八三（旧一八七九））、「春日野に若菜摘みつつ万代を祝ふ心は神ぞ知るらむ」（古今集・三五七・素性）など。○しめし 標をしておいた。「標む」＋過去の助動詞「き」の連体形。「標む」は土地を占有したり場所の区画を示すために、木をたてたり、縄を張ったりして、立ち入りを禁じたりしをつける意。

【所載】新古今集・春上・一一／万葉集・一四三一（旧一四二七） 従明日者 春菜將採跡 標之野尔 昨日毛今日毛 雪波布利管 アスヨリハワカナツマムトシメシノニキノフモケフモユキハフリツツ あすよりははるなつまむとしめしのにきのふもけふもゆきはふりつつ／新撰和歌・二三／和漢朗詠集・三六／赤人集Ⅰ・二／赤人集Ⅱ・二三五／赤人集Ⅲ・二三五／俊成三十六人歌合・一六／時代不同歌合・七／三十六人撰・四四／秀歌大体・八／袖中抄・七六五／桐火桶・一三九／和歌口伝抄・二  
【参考】作者名「あか人」は所載欄の文献に一致する。

四四 ゆきてみぬ人もしのべとはるのゝのかたみにつめるわかなゝりけり つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】子の日の遊びに行かなかった人も様子を思い浮かべなさいよというので、この筐に摘んだ若菜なのだなあ。

【語句】○しのべ 「偲ぶ」の命令形。「偲ぶ」は心ひかれて見えないところに思いを馳せる意。○かたみ 目の細かい竹籠の「筐」と、過去のことなどを思い出す種となる「形見」を掛ける。「形見」は「恋しくは形見にせよと我が背子が植ゑし秋萩花咲きにけり」(万葉集・一二二三(旧二二一九))という例があり、「玉津島見れどもあかずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため」(万葉集・一二二二(旧一二二三))、「故郷の初もみぢ葉を手折り持ち今日ぞ我が来し見ぬ人のため」(万葉集・二二三〇(旧二二二六))のごとく、見ぬ人のために自然の景物を持ち帰るとするのも万葉集以来の類型表現である。

【所載】新古今集・春上・一四／金玉集・春・一〇／和漢朗詠集・三七／貫之集Ⅰ・三／三十人撰・一二／三十六人撰・一二／深窓秘抄・一二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

四五 きみがためはるのゝにいでゝわかなつむわがころもでにゆきはふりつゝ 古一 春上

(仁和のみかどの御哥)

【異同】(仁和のみかどの御哥—ナシ(御所本ハ四六番歌ノ作者トスル)。底本ノ永青文庫本ハ、次ノ行ノ「仁和のみかどの御哥」トコノ歌ヲ線デ結ブ。桂宮本・大久保本ハ四五番歌ノ前ニ「仁和のみかとの御哥」トスル作者記載ガアル。

【現代語訳】あなたにさしあげようと思って、春の野に出て若菜を摘んでいる私の袖に雪が降りかかっています(折りからの雪のなかで摘んだ若菜です)。

【語句】○きみがため 君がため。「君」は若菜を贈る相手。例歌として「君がため山田の沢にゑぐ摘むと雪消の水に裳の裾濡れぬ」(万葉集・一八四三(旧一八三九))、「君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでて摘める若菜ぞ」(大和物語・二九三)等。○ころもで 袖の歌語。○仁和のみかど 光孝天皇。

【所載】古今集・春上・二二／新撰和歌・二九／新撰朗詠集・三三／仁和御集・一／新時代不同歌合・四三／秀歌大体・一一／百人秀歌・一八／百人一首・一五／定家十体・一六一／詠歌大概・二／東野州聞書・一四四

【参考】作者名「仁和のみかど」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野方子〕

四六 古<sup>上</sup> 春<sup>上</sup> かすがのゝわかなつみにやしろたへのそでふりはへて (は□) <sup>人の</sup> ゆくらむ

【異同】四五番歌参照。かすかのゝ―春の野に(大) 人のゆくらむ―底本ハ「は□」(一字分不明)ノ上ニ重ネテ「人の」ト書ク。

【現代語訳】春日野の若菜を摘みに行くのであろうか、女性たちが白い袖を振りながらわざわざ(遠くに)出かけて行くのは。

【語句】○かすがの 「春日野」は大和国の歌枕、現在の奈良市街東南部に位置する野。三番歌参照。○しろたへの 「そで」にかかる枕詞で、こは袖の白さの意味もある。○そでふりはへて 「袖振り」に、「ふりはへて」(わざわざ、ことさらに、の意)を掛ける。袖を振る主体は女性。

【所載】古今集・春上・二二／新撰和歌・三一／和歌体十種・五／秀歌大体・九／綺語抄・五一七／古来風体抄・二二五

【参考】作者名がないが、所載欄の古今集・古来風体抄に貫之とある。古今集の二一番(光孝天皇歌)・二二番(紀貫之歌)という隣合せが、古今六帖の四五・四六番歌となっている。なお、所載欄の古今集の詞書には「歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる」とあり、醍醐天皇に奉った歌で屏風歌と思われる。片桐洋一「古今和歌集全評釈」に、貫之集の「春日野」詠全三首がすべて若菜を詠み込み、屏風歌であると指摘する。

四七 かはかみにあらふわかなのながれてもきみがあたりのせにこそよらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】川上で洗う若菜が流れても下流の浅瀬に寄りつくように、わたしもあなたに寄り添いたいものです。

【語句】○わかなの 若菜のように、の意。○きみがあたりのせ 「せ(瀬)」は川の浅くなったところ。所載欄の万葉集に「妹があたりのせ」とある。万葉集「妹」が古今六帖「君」とある、そのような語の転換例は多い

と指摘されている（平井卓郎『古今和歌六帖の研究』第三章第五節）。当該歌の「きみ」も女性を指すか。

【所載】万葉集・二八四九（旧二八三八）河上ル 洗若菜之 流来而 妹之当乃 瀬社因目 カハカミニアラフ  
ワカナノナガレキテイモガアタリノセニコソヨラメ かはかみにあらふわかなのながれていもがあたりのせに  
こそよらめ 右四首、寄<sub>レ</sub>草喻<sub>レ</sub>思<sub>ノ</sub>人麿集Ⅱ・四九四／人麿集Ⅳ・二六八

【参考】人麿集に見える歌だが、所載欄の万葉集に作者名はない。

四八 わかなつむわれをひと見ばあさみどりのべのかすみとたちかくれなむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】若菜を摘んでいる私をもし人が見るならば、浅緑色に野辺に霞が立つ、その中に私もきつとたち隠れているであろう。

【語句】○あさみどりのべのかすみ この表現は、「あさみどり野辺の霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな」（寛平御時后宮歌合・一）の影響がある。霞の色彩に触れた論考は数あるが、森田直美『『更級日記』「あさみどり花もひとつに霞みつつ」詠再考』（『むらさき』二〇〇九年十二月）によれば、「あさみどり色の霞」という表現（概念）が通行し定着するのは中世期になってからであり、霞の色としては「白（半透明）」が想定される歌が平安和歌に幾つも確認できるといふ。ここは、緑色の野辺の草木に白い霞がかかり、色が薄まったという、写実的な表現であるという指摘を生かした。○とたちかくれなむ 「霞と立ち」と「たち隠れ」（「たち」は接頭語）とを掛け、野辺に霞立つように、私もたち隠れるであろう、の意。格助詞「と」は、「さくら花みかさの山のかけしあれば雪とふれどもぬれじとぞ思ふ」（拾遺集・雑春・一〇五六）や「春たたば花みんと思ふ心こそ野べの霞と立ちまさりけれ」（袋草紙・六一八）等の「と」の用法と同じで、「……のように、……というように」の意味。なお、「かくれなむ」よりも、所載欄の貫之集「……野べの霞も立ちかくさなむ」のように、「隠さなむ」（霞が隠してほしい）の方がわかりやすい。

【所載】貫之集Ⅰ・六八／金葉集初度・三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に同じ。貫之集に「延喜十七年八月、宣旨によりて」とあるが、詳しい詠歌事情は不明。霞が若菜を摘む女性の姿を隠すという類歌「野辺なるを人で見るとて若菜摘む我を霞の立ちかくすらむ」（貫之集Ⅰ・二五〇）は、屏風歌である。

四九 く<sup>ら</sup>にすこのわかなつまんとしめしのゝしばしばわれをおぼせわがせこ

【異同】ナシ

【現代語訳】国栖の子らが若菜を摘もうとして決めていた標（し）めし野、その名のようにしばしば私を心にして思つて下さい、わが恋人よ。

【語句】○くにすこの 「国栖（くにす）」は、『古今和歌六帖標注』に日本書紀神武紀・応神紀を引用するように、吉野川上流に住んだという吉野の国栖を指す。宮中における、元日・白馬・踏歌の節会や新嘗会・大嘗会の折に、大贄（おおいえ）。貢ぎ物を献上し歌笛を奏し、服属儀礼に参与した。管見に入った「くにすこ」はこの一例のみで、「くにすら（が）」「くずひと（の）」の例が多い。なお、「国栖ら」「国栖」の若菜摘みを詠じた歌は参考欄参照。他にも宝治百首・文保百首等に見える。○しめしの 標（しめ）を張つておいた野。四三番歌参照。○しばしば 上三句までが、「しめしの」の類音である「しばしば」を導く序詞。○せこ 女性が夫や恋人である男性を親しんで呼ぶ語。

【所載】ナシ

【参考】初句から「しばしば」までほぼ同じ歌として、万葉集・一九二三（旧一九一九）「国栖等之 春菜将採 司馬乃野之 数君麻 思比日 クニスラガワカナツムラムシバノノシバシバキミヲオモフコノコロ くにすらがはるなつむらむしまのののしばしばきみをおもふこのころ」、袖中抄・七六四「くずひとの若菜摘むらむ司馬（しめ）の野のしばしば君を思ふこのころ」（作者名「吉野国撰」）がある。また、赤人集Ⅰ・二〇二「くにすらが若菜摘まむと標めし野にあまのきみかよぎりころほひ」（赤人集Ⅱ・八三、赤人集Ⅲ・九〇に下句異同）は、下句意味不通ながら、上三句はほぼ同じ。

あをむま

やかもち

見イ

五〇 みづとりのかものはいろのあをきむまをけふくる人はかぎりなしてふ

【異同】ナシ

【現代語訳】水鳥の鴨の羽色をした青い馬、その青馬を今日見る人の寿命は限りがないという（傍書「見る人」で現代語訳した）。

【語句】◎あをむま 青馬（「白馬」とも表記）の節会に牽かれる馬。後年の「あをむま」歌はほとんど節会の折のもので、新撰六帖・夫木抄の同題でも節会の馬の詠がならぶ。白馬の節会は、正月七日に行われ、叙位の儀が済んだ後、紫宸殿の庭に七頭ずつ計二十一頭の馬が牽かれて渡るのを天皇が御覧、その後に宴が持たれた（北山抄）。なお、牽かれる庭は、平安時代初期には豊樂院であった。「馬」は陽獣、「青」は春の色をあらわし、正月七日に青馬を見ると、その年の邪氣が払われるという（年中行事歌合判詞・公事根源）。見物に来る里人も多かった。○みづとりの「かも（鴨）」の枕詞。○かものはいろの「こ」までの初二句は、「あをき」を導く序詞。○あをきむま「青」といわれる馬の毛色は、上代に「青馬」と表記し、白毛に青毛・黒毛のまじる色であった。和名類聚抄「驄馬」の項に、「青白雑毛馬也」の説明を、また、「漢語抄（奈良時代の辞書）云、青馬也」を引用する。平安時代になると、「白馬」節会と表記され、「あをうま」題で、「ふる雪に色もかはらでひくものを誰かあを馬と名付けそめけむ」（兼盛集・一一八）などの歌も見えるが、『小右記』万寿元（一一〇二四）年十一月三十日条に、「葦毛」（あしげ）の馬を、「白馬料」と記すので、やはり雑毛の馬であつたらしい。○けふくる人は「けふ」は正月七日。なお、「くる人」では意味をなさないので、傍記異文や所載欄の「見る人」を生かす。○かぎりなしでふ 寿命の限りがないという。「てふ」は「と言ふ」の縮まった表現。

【所載】万葉集・四五二八（旧四四九四）水鳥乃 可毛羽能伊呂乃 青馬乎 家布美流比等波 可芸利奈之等伊布ミヅトリノカモハノイロノアウマヤケフミルヒトハカギリナシトイフ みづとりのかものはいろのあをう

まをけふみるひとはかぎりなしといふ／和歌童蒙抄・一一三

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集も同じ。万葉集には、天平宝字二（七五八）年正月七日の節会に向けて、家持があらかじめ作つておいたものだが、節会は六日に変更されて歌を奏する機会がなかったとある。

〔以上五首担当 犬養悦子・加藤静子〕

## なかのはる

みつね 或本  
五二 はかなくてはるひとはるはすぎにけり花のさかりはすぎがてにせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】束の間に春はすべて過ぎてしまったことだ。けれども、花の盛りは（そんなふうにあっけなく過ぎてしまうのではなく）なかなか過ぎて行かないようにしておくれ。

【語句】◎なかのはる 仲春。春の三か月のうち、中の月。陰暦二月の異称。○はかなくて あっけない状態で。この「はかなし」は、「束の間である」「あっけない」の意。「はかなくてすぐる秋とは知りながら惜しむ心のなほ飽かぬかな」（陽成院歌合・一六）。○はるひとはる 春の三か月全部。春いっぱい。但し、所載欄の文献ではすべて「はるひとつき」とあり、春の一か月が過ぎたという意になるこちらの本文の方が、「なかのはる」の題にはふさわしい。古今六帖の本文では、春の三か月が過ぎてしまったことになる。○がてに ……できないで。……しかねて。

【所載】躬恒集Ⅰ・五八／躬恒集Ⅲ・一六一／躬恒集Ⅴ・九〇／左兵衛佐定文歌合・四

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

五二 わがこゝろはるの山べにあくがれてなが／＼し日をけふもくらしつ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の心は春の山辺にひかれてさまよい出て、長い長い春の日を日暮まで今日もまた過ごしてしまつた。

【語句】○あくがれて 「あくがる」は、ある対象に心がひかれて、心が体から離れてさまよい出る意。○なが／＼し日を 長い長い春の日を。「ながながし」は、「長い長い」「非常に長い」意。類想歌「あだにこそこのべの花みにわがこしかながながし日をくらしつるかな」（古今六帖・一二二）。

【所載】新古今集・春上・八一／躬恒集Ⅰ・一四八／躬恒集Ⅱ・五九／躬恒集Ⅲ・四七／躬恒集Ⅴ・七三／亭子院歌合・一四／袋草紙・三三五

【参考】古今六帖には作者名がなく、所載欄の新古今集は作者を「紀貫之」とするが、亭子院歌合・袋草紙は「躬恒」とし、躬恒集に見える。

五三 春はなをわれにてしりぬ花ざかりこゝろのどけきひとはあらじな  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】春はどういうものか、やはり自分自身を顧みることによってわかった。花盛りには心のどかでいられる人はいないだろうよ。

【語句】○春はなを 春の季節にはやはり。「なを」は「なほ」。○こゝろのどけきひとはあらじな 心のどかに過す人はないであろうよ。春の花盛りには、自分だけではなく誰もが、花のことが気になって心のどかではないだろう、という気持。「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」（古今集・五三・在原業平）。

【所載】拾遺抄・春・二六／拾遺集・春・四三／和漢朗詠集・二六／忠岑集Ⅰ・二八／忠岑集Ⅱ・六六／忠岑集Ⅲ・二／忠岑集Ⅳ・一六八／左兵衛佐定文歌合・三／三十六人撰・八二

【参考】作者名「たゞみね」は、所載欄の文献に一致する。

五四 うぐひすのはなふみしだくこのもとはいたく雪ふるはるべなりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が花を踏み散らす木の下は、（春とはいっても）ひどく雪が降る春であったよ。

【語句】○ふみしだく 踏みつける。踏み散らす。○はるべ 春の頃。春の季節。○雪ふる 落花を雪が降つたと見立てたもの。

【所載】万代集・春下・四二二／貫之集Ⅰ・二〇四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰによると、当該歌は藤原定方のための屏風歌。

五五 いつまでかのべにこゝろのあくがれんはなしちらずはちよもへぬべし  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】いったいいつまで野辺に心がひかれてさまようのだろうか。花さえ散らないならば、きっと千年も



の長い年月でも野辺で過<sup>ご</sup>してしま<sup>う</sup>だろう。

【語句】○あくがれん 「あくがる」については五二番歌参照。

【所載】古今集・春下・九六／素性集Ⅰ・一四／素性集Ⅱ・二三／素性集Ⅲ・四四

【参考】作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

### やよひ

五六 ちるはなにせきとめらるゝやま川のふかくもはるのなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】散る花に堰き止められた山川の水かさが深くなるように、日が積もり春も深まったことだ。

【語句】◎やよひ 三月。歌題としては他に亭子院歌合（十卷本）に見える。○やま川の 「やま川」は、山あいを流れる川。流れが速く、したがって底は浅い。一方で、散った花や紅葉が堰き止めることで、水かさが深くなったり流れが淀む、などと詠む事例も多い。「山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」（古今集・三〇三）。初句から「こ」までが「ふかく」を導く序詞。○ふかくも 水かさの深さと春が深まるの意を掛け。「みなそこにしづめるはなのかげみればはるのふかくもなりにけるかな」（亭子院歌合・三四）。

【所載】詞花集・春・四四／新撰朗詠集・四四／後葉集・春下・七七

【参考】詞花集では作者を「能宣」とするが現存の能宣集からは見出せない。

五七 まださかぬ花も山べにあるべきをこゝろもとなくすぐるはるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ咲いていない花も山辺にはあるはずなのに、それを待ちきれずに過ぎて行く春であることだ。

【語句】○こゝろもとなく 待ちきれない、じれったい。『古今和歌六帖標注』では用例として土佐日記・二月九日「心もとなきに、明けぬから船を引きつつ上れども」と伊勢物語・八十三段「この馬の頭、心もとながりて」を指摘する。和歌では「ほどもなくくるとおもひし冬の日のこころもとなきをりもありけり」（詞花集・二三一・道命）まで下る。

【所載】ナシ

みかの日

拾五賀

たぐみね

五八

みちとせになるてふもゝのことしよりはなさくはるになりぞしにける

あふ

【異同】ナシ

【現代語訳】三千年に一度実が成るといふ桃の、今年から花が咲くというその春になったということだよ。

【語句】◎みかの日 三月三日。『雑令』に節日とされる。古く持統天皇の頃から宴が持たれ、次第に年中行事「曲水（こくすい・きよくすい）の宴」として定着、賦詩も行われた。私邸においても、この日には桃の花を飾り、節供のものを準備した。和歌では、桃の花や草餅に関わる詠がよく見られる。○みちとせになるてふもゝ 桃の実が三千年に一度実るといふ、仙女の西王母伝説を踏まえた表現。吉兆にめぐり合えたことで賀意を表わす。「みちとせにひらくる桃の花ざかりあまたの春は君のみぞ見む」（兼盛集・一七五）。所載欄の拾遺抄・拾遺集や和漢朗詠集、躬恒集、是則集、元輔集では初句を「みちとせに」とするが、忠岑集と亭子院歌合、また歌学書では「みちよへて」とあり、対立する。袋草子では、「みちとせ」と「ことし」と二箇所「年」を表わす語のあることを歌病の一として指摘する。

【所載】拾遺抄・賀・一八四／拾遺集・賀・二八八／和漢朗詠集・四四／躬恒集Ⅱ・二一一／忠岑集Ⅰ・四八／忠岑集Ⅱ・七七／忠岑集Ⅲ・一一／忠岑集Ⅳ・一四九／是則集・六／元輔集Ⅰ・二五九／亭子院歌合・六／俊頼髓脳・三三／和歌童蒙抄・六六三、九一三／奥儀抄・二五六／袋草紙・三三三／和歌色葉・三五五

【参考】作者記載には忠岑とあり忠岑集にも載るが、亭子院歌合では坂上是則の詠とする。他に躬恒とする文献もあり、作者を断じることが難しい。なお元輔集では、貫之をはじめとする古今集時代の歌人の屏風歌を集めた歌群に収まる。

つらゆき

五九

きみがためわがをるはなははるとをくちとせをみたびありつゝぞさく

【異同】つらゆき―ナシ（大）

【現代語訳】あなたのために私の折る花は、春も行く末遠く、千歳を三度重ねても咲いていることですよ。

【語句】○はるとをく 春遠く。「遠く」は、「きみがため」の繁栄を寿ぐための語。行く末遠く、の意。「散りぬともあだにしもみじ藤花行さきとほく松にさければ」（貫之集・二二五）。○ちとせをみたび 千年を三度経ることで三千年の意。西王母伝説を踏まえ、桃の花が咲き続けるという ○ありつゝぞさく 貫之集をはじめとする所載の文献には「折りつつぞ咲く」とある。

【所載】夫木抄・一七六四／貫之集Ⅰ・一七六／和歌童蒙抄・六六四

【参考】貫之集の詞書には「ももの花をんなのもののをる所」とある。西本願寺本貫之集では下句を「千歳みたびを折りつつぞ咲く」とする。

### 家持宅宴三月三日

新二春下

六〇 から人のふねをうかべてあそびけるけふぞわがせこはなかつらせよ やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】唐の国の人が舟を浮かべて遊宴していたという今日、さあ、皆さんも花かずらを付けましょう。

【語句】○家持宅宴三月三日 万葉集の題詞に「三日守大伴宿祢家持之館宴歌三首」とある。これにより歌中の「ふねをうかべて」が曲水の宴の様子を指すことがわかる。○あそびける 万葉集をはじめとする所載欄の文献では「遊ぶてふ」といふの本文を残すものが多い。○わがせこ 集う官人への呼びかけの語。さあ皆さん。男性が親しみをこめて男性に対して用いる例は万葉集に多く見られる。「秋の田の穂向き見がりてわがせこがふさ手折りける女郎花かも」（三九六五（旧三九四三））は大伴家持の大伴池主への贈歌。○はなかつらせ 花で作った髪飾り。

【所載】新古今集・春下・一五一／万葉集・四一七七（旧四一五三）漢人毛 筏浮而 遊云 今日曾和我勢故花縵世奈 カラヒトモフネヲウカベテアソブテフケフゾワガセコハナカヅラセナ からひともしかだうかべてあそぶといふけふぞわがせこはなかつらせな／新撰朗詠集・四〇／夫木抄・一七四七／定家十体・二六三／綺語抄・三五三／和歌童蒙抄・一一六／袖中抄・一六〇

【参考】作者名は所載欄の万葉集に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

はるのはて

六一 ゆくはるのたそかれどきになりぬればうぐひすのねもくれぬべらなり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】過ぎゆく春がたそがれ時になったので、日が暮れるように鶯の声も聞こえなくなってしまったようだ。

【語句】◎はるのはて 春の終わり。春の末。行く春を惜しみ、鶯や花に愛着を示しながら別れを告げる。○たそかれどき 薄暗くなつてはつきりと人が見わけられず、「誰（た）そ彼」といぶかしく思われる時分。夕暮れ時。春の終わりを一日の終わりに喩えた。○くれぬべらなり 暮れてしまったようだ。鶯の声が聞こえなくなつたことを「たそかれどき」に対応し、「暮れぬ」という。「べらなり」は、さかし↓さかしらなり、うまし↓うまらなり、などと同じように、推量の助動詞「べし」から派生した語。古今集、特に貫之の歌に多く見え、見立ての趣向のおもしろさを見いだす個性的な判断の陳述（藏中スミ「歌語『べらなり』の周辺」『水門』一九七八年八月、「歌語『べらなり』覚え書」『水門』一九八〇年十月）とか、単なる婉曲的表現ではなく、漢籍などの典故に支えられながら、当時の新しい「喩」の表現を確信をもって統括する言辭（中野方子『古今集』における『べらなり』——喩に承接される助動詞——『國文』一九九七年一月）などと説明される。使用例に男女の差はない。

【所載】貫之集Ⅰ・四二七

【参考】作者名「つらゆき」は貫之集とも一致する。なお、聞こえなくなる鶯の声と春の終わりとを結びつけた歌には、同じ貫之集Ⅰに「春のけふくるゝしるしは鶯のなかなずはなりぬる心なりけり」（四二八）や「桜花をるときしも鳴くなればうぐひすの音もくれやしぬらん」（四六三）などがある

六二 つれぐゝと花をみつゝぞくらしつるけふをしはるのかぎりとおもへば  
みつね

【異同】くらしつる—暮しふる（大）

【現代語訳】つくねんと、花を眺めながら一日を暮らしてしまったことだ。今日を春の最後の日と思うので。

【語句】○けふをし まさにこの今日を。「し」は強めの副助詞。平安時代では「し」は「しぞ」「しも」などと他の係助詞を伴う形か、当該歌のように「……し……ば」の形で条件句の中に用いられるのが一般的な用法。

【所載】新後拾遺集・春下・一六二／万代集・四九七／躬恒集Ⅰ・一五八／躬恒集Ⅱ・六八／躬恒集Ⅲ・五七／躬恒集Ⅳ・四〇七

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

六三 こゑたてゝなけやうぐひすひとゝせにふたゝびとだにくべきはるか  
藤原をきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】声を振り絞って鳴け、鶯よ。この一年に二度と春は巡ってくるはずもないのだから。

【語句】○こゑたてゝ 大声を出して。「声たててなきぞしぬべき秋ぎりに友まどはせるしかにはあらねど」（後撰集・三七二・紀友則）。ただし所載欄に見える他文献ではすべて「声絶えず」か「声絶えで」とする。○くべきはるか は来るはずの春であろうか、そんなことはない。「かは」は反語。今年はまだ二度と春は巡ってこないのだから、思う存分悲しめ、の意。

【所載】古今集・春下・一三一／新撰万葉集・二四一／新撰和歌・一一九／興風集Ⅰ・四／興風集Ⅱ・八／寛平御時后宮歌合・四

【参考】作者名「藤原をきかぜ」は、所載欄の文献に一致する。

六四 花もみなちりぬるやどはゆくはるのふるさとゝこそなりぬべらなれ  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】花もすっかり散ってしまった家は、過ぎ去ってゆく春のふるさとなってしまった感じですね。

【語句】○ふるさと 古びて荒れた里、または、昔なじみの懐かしい里。○べらなれ 六一番歌語句欄参照。

【所載】拾遺抄・春・五三／拾遺集・春・七七／金玉集・春・二二／和漢朗詠集・上・春・三月尽／貫之集Ⅰ・八／貫之集Ⅱ・六／三十人撰・一三／三十六人撰・一三／深窓秘抄・二六

【参考】作者名を「そせい」とするが、所載欄の文献にはすべて「貫之」とあり、貫之集にも見える。

六五 はなのもたとつことうくもなりぬるか  
はるはけふをし  
かぎりとおもへば  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】花のもとを立ち去ることがつらく感じられてしまうことだなあ。春はもう今日限りで終わりだと思  
うと。

【語句】○うくもなりぬるか いやになってしまふことだ。つらくなつてしまふことだ。「か」は詠嘆の終助詞。  
○けふをし 「し」は強意の副助詞。

【所載】ナシ

【参考】作者名を「つらゆき」とするが、確認できない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

六六 ちる花のもとにきてしぞくれはつるはるのをしさもまさるべらなれ

【異同】まさるへらなれ—まさるへらなり（大）

【現代語訳】散る花の木の下に実際に来てこそ、暮れ果ててしまった春を惜しむ気持ちも深まってゆくらしいよ。  
【語句】○もとにきてしぞ 木の下に来てこそ。元々は「もとにきてこそ」だったのが、書写の過程で「しそ」  
となったものか。所載欄の貫之集では「本にきつそ」。○くれはつるはる 暮れ果ててしまった春。「くれはつ  
る春はいづくにかへる山ありとしきかばゆきて尋ねん」（新続古今集・二一六）。

【所載】貫之集I・一四四

六七 花みつゝをしむかひなくけふくれてほかのはるとやあすはなりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】花を何度も見ながら惜しむその甲斐もなく今日が暮れると、（夏の来る）明日はよその里の春とな

ってしまうのだろうか。

【語句】○ほかのはる よその春。別の春。今日が暮れるとここでは夏になるが、別の里では春なのだ、ということ。「たちいでてほかの春をもみるべきにやどの花こそうしろめたけれ」（建長八年百首歌合・四二三・左京大夫）。

【所載】新撰朗詠集・五〇／亭子院歌合・三九

### はじめのなつ

つらゆき

六八 花とりもみなゆきかひてむばたまのよのまにけふのなつは来にけり

【異同】ナシ

【現代語訳】花も鳥もみな入れ代わって、一晚のうちに今日の夏が来てしまったことだ。

【語句】◎はじめのなつ 夏の初め。首夏。初夏。○ゆきかひて 交替して。「ゆきかふ」はあるものが去って、他のものが代わって入ること。暦だけでなく、春と夏の風物も交替するとした。○よのまに 一晚のうちに。「このねぬる夜のまに秋はきにけらしあさけの風のきのふにもにぬ」（新古今集・二八七・藤原季通朝臣）。

【所載】万代集・五〇一／夫木抄・二三一七／貫之集Ⅰ・四九六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

いせ

六九 いづこまで春はいぬらむくれはてゝわかれしほどはよるになりにき

【異同】ナシ

【現代語訳】どのあたりまで春は行ってしまったのでしょうか。すっかり暮れ果ててしまつて、春と別れたのは前夜のことになってしまいましたよ。

【語句】○いぬらむ 行ってしまったのだろう。春を擬人化した表現。○くれはてゝ 「春が暮れ果てる」意に「一日が暮れ果てる」意を響かせる。

【所載】伊勢集Ⅰ・一一五／伊勢集Ⅲ・一一四／三十人撰・三五

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

七〇 花ちれば<sup>る</sup>みちのまに／＼とめくれば山には<sup>る</sup>はるものこらざりけり  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】花の散っている道に沿って春を求め来たところが、山にも春は残っていないかったことだよ。

【語句】○花ちれるみちのまに／＼ 花の散っている道にしたがって。道に沿って。「おくれめてこひつつあらばおひゆかんみちのまにまにしめゆへわがせ」（古今六帖・二六一〇）。所載欄の他文献では傍書と同じ「花ちれる水のまにまに」で、「花の散っている水の流れに沿って」となる。○とめくれば（春を）求めて来たところ

【所載】古今集・春下・一二九／深養父集Ⅰ・四／深養父集Ⅱ・三

【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

七一 あけくるゝ月日もあれどほとゝぎすなくこゑにこそ夏はきにけれ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】一日一日と明け暮れて過ぎてゆく月日というものもあるが、（それはそれとして）郭公が鳴く声にこそ夏が来たと気付くことだよ。

【語句】○あけくるゝ 夜が明け日が暮れる。一日一日が過ぎること。○月日もあれど 月日というものもあるが、それとは別に、という気持か。この第二句の逆接は、貫之集の「月日あれども」の方がわかりやすい。○きにけれ 来たことに気づく。

【所載】貫之集Ⅰ・四六八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。



ころもがへ

つらゆき

七二 なつころもたちきるものをあふさかのせきのしみづのさむくもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】薄い夏の衣服を仕立てて着たのだが、その夏ころもでは、逢坂の関の清水は寒さを覚えるほどだなあ。

【語句】◎ころもがへ 季節に応じ、衣服をその季節のものに替える事。陰暦四月一日と十月一日に行うものであった。ここは四月の衣更え。○なつころも 夏の衣服。夏着。○たちきる 裁ち着る。裁ち縫って着る。○あふさかのせきのしみづ 逢坂関付近にあった清水。「関寺よりは西へ二、三町ばかり行きて、道より北の面に少し立上りたる所に、一丈ばかりなる石の塔あり。その塔の東へ三段ばかり下りて窪なる所は、則ち昔の関の清水の跡なり。……今は小家の後に成りて、当時は水もなくて見所もなけれど、昔の名残面影に浮びて優になん覚え侍し」(無名抄「関清水事」)。

【所載】新撰和歌・一四一／夫木抄・二三〇七

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、この歌は貫之集に見えず、また他文献にも「貫之」とするものはない。

七三 はるにだにもありしころを夏ころもいかにうすさのけふまさるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】春のころでさえ薄かったあなたの気持は、夏衣を着るきよう、その夏衣のようにどんなにか薄さがまさることであろうか。

【語句】○はるにだにもありしころ 春のころでさえも薄かったあなたの心。「だにあり」は状態を比較するときの言い方で、「だに」と「あり」のあいだに形容詞的語句が省略されている。ここでは、下句の形容詞「うすし」を補ってみるとわかりやすい。「春にだにもうすくありしころ」ということ。○夏ころもいかにうすさのけふまさるらん 夏衣が薄い事に、気持ちが薄くなる、薄情になる事を掛ける。薄い夏衣のように、どんなにかあなたの気持も薄情になることだろうか。「蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」(古今集・七五)。

【所載】ナシ

七四 花のいろにそめしたものをしければころもかへうきけふにもあるかな  
拾二夏 しげゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春の花を偲ぶよすがとして桜色に染めた袂が惜しいので、衣更えするのがつらいきようであることだなあ。

【語句】○花のいろにそめしたもと 桜色に染めた袂。春の花を惜しむ愛着の形見。「さくらいろに衣はふかく染めて着む花の散りなむのちのかたみに」（古今集・六六）。○ころもかへうき 「うき」は憂き。衣をかえるのがつらい。衣をかえたくない。

【所載】拾遺抄・夏・五五／拾遺集・夏・八一／和漢朗詠集・一四六／玄々集・三二／重之集・二四一／和歌童蒙抄・一二二

【参考】作者名「しげゆき」は、拾遺集・重之集・玄々集等とは一致するが、拾遺抄は作者を「順」としている。

卯月

七五 はるはゝやすぎにしものをうぐひすのまたなくひとのこひしきやなぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】春はもう過ぎてしまったのに、鶯がまた鳴いている。それを聞くと、またとなくあの人が恋しく思われるのはどうしてなのだろうか。

【語句】◎卯月 陰暦四月のこと。この月から夏である。○はるはゝやすぎにしものを 春という季節はもう過ぎてしまったのに。○またなく 鶯が「又鳴く」ことに、またとない意の「またなく」を掛けている。○ひとのこひしきやなぞ あの人が恋しく思われるのはどうしてだろうか。この「ひと」は、特定の人、すなわち恋人をさしている。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 橋本・山下〕

七六 はるすぎてうづきになればさかきばのときはのみこそしげくなりけれ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春が過ぎて卯月（四月）になるといふと、神事に使う榊の常緑の葉だけが茂っていくことだ。

【語句】○うづき 四月の中酉の日には、賀茂の祭（葵祭）が行われる。○さかきば 神事に用いる。古今集・神楽歌の「神垣の御室の山の榊葉は神の御前に茂りあひにけり茂りあひにけり」においては、繁茂の見事さを詠むことは、神を讃えることになるという（新編日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』脚注）。○ときは 常葉。常緑を意味する。永久不変の「常磐」を響かせる。○しげくなりけれ 「常葉」が「繁」し、と賀意を表す。

【所載】貫之集Ⅰ・四三〇

【参考】作者名貫之は、所載欄の文献に一致する。

うの花

七七 山がつかきほにさけるうのはなはたがしろたへころもかけしぞ

【異同】ころもかけしそ—ころもかけしか（大）

【現代語訳】山人の家の垣根に咲いている卯の花は、いったい、誰が白妙の衣をかけたのであろうか。

【語句】◎うの花 落葉灌木ウツギの花。初夏に白い花が穂のように咲く。垣根に使うことが多い。○山がつ山人。山中で暮らす、身分の賤しい者。樵など。○しろたへ 衣の枕詞と見ることも出来るが、ここでは、本来の袴（たえ）で織った白い布の意味でとる。

【所載】拾遺集・夏・九三／躬恒集Ⅲ・一六三／左兵衛佐尉貞文歌合・八

みつね

七八 むかし見しわがふるさとはいまもなをうのはなのみぞめにはみえける

【異同】ナシ

【現代語訳】昔見ていた私の古馴染みのあの場所は（もう変わってしまったのかもしれないが）、今もなお、卯の花だけが私の目には見えてくることだ。

【語句】○ふるさと 昔馴染みの土地。○いまもなを いまもなほ。「昔」と「今」の対比。『和歌文学大系 貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』脚注では、「ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけり」（古今集・九〇）を類歌として挙げる。

【所載】躬恒集Ⅰ・一九三／躬恒集Ⅲ・九八／躬恒集Ⅳ・四四四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

七九 うのはなのさけるあたりにやどりせじねぬにあげぬとをどろかれけり

【異同】ナシ

【現代語訳】卯の花の咲いている辺りに仮寝はすまい。眠りもしないのに、花の白さで、夜が明けたかと思つて目を覚ましてしまうことだ。

【語句】○やどり 仮寝。宿泊。○ねぬにあげぬ 夏の短夜もさることながら、卯の花の白さで夜が明けたと錯覚する。○をどろかれけり 「おどろく」ははつと気づくの意。

【所載】拾遺集・雑春・一〇七二／重之集・二四四

八〇 けふもまたのちもわすれじしろたへのうのはなつらゆき 或本としゆきにほふやどゝみつれば

【異同】ナシ

【現代語訳】今日もまた、さらにこれからも忘れはすまい。白妙の卯の花の見事に咲く家と、あなたの家を見たからには。

【語句】○うのはな 卯の花には、「憂（う）」を掛けることが多いが、ここでは特に掛詞として解釈しない。「否諾（いなう）」の「諾（う）」の意を込める田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』（風間書房、一九九七年）は、「卯の花があると、申し入れを承諾してくれることになる。一般に卯の花は『憂』を込めるが、賀の屏風ゆえ、成就

の意の『諾』が歌われた」と注するが、不審。卯の花に「憂」を掛ける例は、古今集・九四九「世中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色にいでにけむ」など多いが、明らかに卯の花と「諾」の関連が詠まれるのは、管見の範囲では、「とはばこそいなどとも卯花の雪のよそめの道も分れず」（藤川五百首鈔・一〇五・実隆）まで下るためである。

【所載】後拾遺集・異本歌・一二二四／貫之集Ⅰ・一四七／和歌童蒙抄・五五二

【参考】作者名「つらゆき」は、後拾遺集では清原元輔とするが、貫之集に収められている。

〔以上五首担当 杉本〕

八一　ときならぬたまをぞぬけるうのはなはさ月をまたばひさしかるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】まだその時期ではないのに薬玉につくるように花を糸が貫いたようだ。卯の花は（薬玉の時期まで）待つとしたらなかなかの（この四月に）。

【語句】○ときならぬ その時ではないのに。○たまをぞぬける 「玉をぬく」は 玉の穴に糸を通すこと。草に置く露を、草の糸が白珠を通すと歌う。「秋の野の草は糸とも見えなくにおく白露を玉にぬくらん」（古今六帖・五四）。また薬玉にあやめ草を通すこと。「ほととぎす待てど来鳴かずあやめ草玉に貫く日をいまだ遠みか」（万葉集・一四九四（旧一四九〇）、「……卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめ草 珠貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど……」（万葉・四一一三（旧四〇八九））。○さ月をまたばひさしかるべく 五月を待つにはまだまのあるはずだが。五月五日は沈香（じんこう）や丁子（ちようじ）など香料を袋に入れ菖蒲や蓬をあしらひ五色の糸を長く垂らした薬玉（くすだま）が糸所（いとどころ）から献上された。

【所載】万葉集・一九七九（旧一九七五）不時 玉乎曾連有 宇能花乃 五月乎待者 可久有 トキナラヌタマコソヌケルウノハナノサツキヲマタバヒサシカルベク ときならずたまをぞぬけるうのはなのさつきをまたばひさしかるべみ／人麿集Ⅲ・八〇

【参考】卯の花の咲き満ちた様を薬玉とみて歌ったもの。薬玉の時期五月には程遠い四月の卯の花。「時ならで玉をぞぬける」で始まる類歌が赤人集Ⅰ・二五六、赤人集Ⅱ・一三〇、赤人集Ⅲ・一四二にある。

八二　時わかずふれる雪かとみるまでにかきねもたわにさけるうの花

【異同】ナシ

【現代語訳】冬でもないのに降る雪かと見えるまでに垣根もしなるほどたわわに咲いている卵の花。

【語句】○時わかず 季節を区別せず。「時わかず月か雪かとみるまでにかきねのままにさけるうの花」(後撰集・一五五)。○ふれる 動詞「降る」の已然形「降れ」に完了の助動詞「り」の連体形「る」の接続したかたち。

【所載】後撰集・夏・一五三／拾遺集・夏・九四／和歌童蒙抄・五五三

### 神まつり

#### そせい法師

八三 かみまつるうづきにさけるうの花をしるくもきねがしらげたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】賀茂祭りの四月に咲いている卵花を(何と)真白に巫が白くしたこと！

【語句】◎神まつり 神を祭る儀式。祭り。賀茂の祭りは有名。それ以外にも三輪神社、春日神社などをはじめ、各神社ごとに、毎月の例祭をはじめ様々にあるが、ここは四月の祭り。「春風にこずる咲きゆく紀の国やありまの村にかみまつりせよ」(夫木抄・一四八五二)。○きね 巫。かんなぎ。かむなぎ。神意を伺い、神に仕える人。穀物などを臼に入れてつくのに用いる道具の「杵(きね)」をかける。「きねといふはかんなぎの名なり」(俊頼髓脳)。○しらげたるかな 動詞「しらぐ」(下二段)は玄米を搗き糠をのぞいて白くすること。「臼たてたり。臼一つに女ども八人立てり。米しらげたり。」(宇津保物語・吹上 上)、「物しらぐる具にも杵といふものあればそへてよめり」(奥儀抄)。

【所載】拾遺抄・五九／拾遺集・九一／躬恒集Ⅰ・三四四／躬恒集Ⅱ・二〇五／躬恒集Ⅲ・三六八／俊頼髓脳・三四六／奥儀抄・二五一

【参考】作者名「そせい法師」とあるが、拾遺抄・拾遺集では「躬恒」の作。

八四 うの花のいろにまがへるゆふしでゝけふこそ神をいのるべらなれ  
つらゆき

【異同】○いのるへらなれ―まつるへらなれ（大）

【現代語訳】卯の花の色に見まがう白木綿を長くたらし、今日この日神を祈るのだ。

【語句】○ゆふ 木綿。楮の皮の繊維を織った糸。これで織った布を袴という幣帛、として衾にたらず。○してゝ たらして。「しづ」はタ行下二段活用 of 動詞。しだれさせる意。○べらなれ 助動詞「べらなり」の已然形。

【所載】貫之集Ⅰ・四二九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

八五 神まつるときにしなければさかきばのときはのかげはかはらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】神祭る冬になったので（木々の葉は色変わり、落ちたが）榊葉の常緑の木陰は少しも変わらないのだった。

【語句】○神まつるとき 四月の賀茂祭にいうが、当該歌は所載欄の貫之集によれば、一連の屏風絵中の冬の「山里に神祭る」絵に付された歌。○さかきば 榊葉。さかきの葉。榊は賢木とも書くが、葉に光沢のあるツバキ科の常緑樹。古来神事に用いる。○ときは 常磐。永久に変わらないこと。ここは色を変えない榊の、常に緑であることをいう。

【所載】貫之集Ⅰ・二四二

【参考】本来は貫之の屏風歌で、その歌は冬の「山里に神祭る」絵とともに鑑賞される性質のもの。歌意もそれにふさわしい。古今六帖「巻一、歳時部、夏」の中のこの位置にあるのは不審。「神まつる」という語句をもつ歌として注記されていたのが本文化したか。

〔以上五首担当 平野〕

八六 かみのますもりのしたくさ風ふけばなびきてもみなまつるころかな  
したがつ

【異同】ナシ

【現代語訳】御祭神のおわします賀茂の社の森の下草に風が吹きわたると草がなびくように、人々もみななびき

従って神を祭る頃であるよ。

【語句】○かみのますもり この一首は、順集では屏風歌で、「四月、神まつる所」と詞書がある。四月の「まつり」は賀茂社の祭であり、従ってこの「かみ」は賀茂別雷神（上賀茂）、その母玉依媛命と賀茂建角身命（下賀茂）をさす。その神の鎮座まします賀茂の社の森。○なびきて 森の下草が風に「なびく」ことに、人々が神威に「なびき従う」ことを掛けた。

【所載】順集Ⅰ・一〇／順集Ⅱ・一七一

【参考】作者名「したがふ」は所載欄の文献に一致する。

## 五月

八七 さ月やまこずゑをたかみほとゝぎすなくねそらなるこひもするかな  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】五月の山の梢は葉が茂って高いので、その梢あたりで鳴くほととぎすの声も空高く聞こえる。そんな時私も恋をして、心はまさに上の空になっていることだ。

【語句】◎五月 さつき。陰暦五月の称。仲夏。○さ月やま 本来は陰暦五月の山という意であったが、歌枕化して地名のイメーজが生じ、大阪府池田市にある五月山がそれか、と言われるようになった。ただしこの歌では、特定の山をさすものではなく、ただ五月の山、ということであろう。○なくねそらなる ほととぎすの鳴く音が「空」ですることに、恋の思いで心が「うわの空」になることを掛けた。この掛詞により、初句より「なくね」までが、「そらなる」にかかる序詞。

【所載】古今集・恋二・五七九／貫之集Ⅰ・五七八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

八八 さみだれになへひきうふるたごよりもひとをこひちにわれぞぬれぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨にぬれて泥にまみれながら苗を植える農夫も苦勞なことであるが、それよりもなお私は、泥



(こひぢ) ならぬ恋路 (こひぢ) にさまよつて、五月雨ならぬ涙にぬれていることだ。

【語句】○さみだれ 陰暦五月のころに降りつく長雨。梅雨。○なへひきうふる なへひきううる。稲の苗を苗代から引いて水田に植える。○たご 田子。農夫のこと。○こひぢ 泥のこと。ここでは「恋路」を掛けてある。「こひぢ」「ぬれ」は「たご」の縁語。

【所載】 夫木抄・二五七九／和歌童蒙抄・五七／袖中抄・七七五

八九 をしなべてさ月のそらをみわたせばみづもくさばもみなみどりなり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月の空を広く見渡すと、空ばかりでなく、総じて目に入る景はすべて、水も草葉も緑一色であるよ。

【語句】○をしなべて おしなべて。すべて一様に。総じて。この初句は、下句全体にかかる。

【所載】 新勅撰集・夏・一五二／新撰万葉集・三一／寛平御時后宮歌合・七二

九〇 さみだれにみだれそめにしわれなれば人をこひぢにぬれぬ日ぞなき  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】さみだれの降るこの頃、恋に心乱れはじめた私だから、雨降り道の泥 (こひぢ) ならぬ、恋路の涙にぬれぬ日とてない。

【語句】○さみだれ 八八番参照。○みだれそめにし 恋の思いに心の乱れはじめた。「さみだれにみだれ」と同音をくり返した技巧。○こひぢ 八八番参照。

【所載】 玉葉集・恋四・一六二七／躬恒集Ⅰ・一八七／躬恒集Ⅱ・一〇四／躬恒集Ⅲ・九二／躬恒集Ⅳ・二八、四三九

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・山下〕

九一 さみだれにはるのみやびとくるときはほととぎすをやうぐひすにせん  
おほかすがのもののり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨の時期に「春」という名をもつ春宮坊の方がいらっしやる時には、夏の鳥である時鳥を春に因んだ鶯にしてみましようか。

【語句】○さみだれ 五月雨の季節。岩井宏子「歌語さみだれの基層」『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年）によれば、「五月雨」は雨ではなく季節を表す場合があるという。季節の乱れという意味の「さ乱れ」を響かせるか。○はるのみやびと 春宮坊の宮人。「霞たつ山べを君によそへつつ春の宮人なほやたのまん」（貫之集・七八一・東宮かくれたまへるころよめる）。○ほととぎす 時鳥。カッコウ目カッコウ科の鳥。カッコウより小型で山地の樹林に住む。夏を知らせる鳥で鳴き声が珍重され、鶯などの単に托卵する。五月雨と取り合わされた歌「五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ」（古今集・一五三・友則）。○うぐひす 「春の宮人」の「春」に因んで春の鳥を引き合いに出した。ほととぎすとともに詠まれるのは、「うぐひすのかひごのなかに ほととぎす ひとり生まれて なが父に 似ては鳴かず……」（万葉集・一七五九（旧一七五五））という托卵の歌。鶯の巢のなかに郭公が生まれることを逆手にとり、五月雨の季節の郭公ではなく、春宮坊の春に因んだ鶯にしてみおうという趣向。

【所載】後撰集・夏・一六六

【参考】作者名「おほかすがのもののり」は所載欄の文献に一致する。勅撰作者部類に「六位 御書所預 隼人佐」とされる「大春日師範」を指すか。

九二 ほととぎすこゑきしよりあやめぐさかざすさ月としりにしものを  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時鳥の声を聞いた時から、菖蒲草をかざす五月になったと知っていたのだが。

【語句】○ほととぎす 九一番歌参照。○あやめぐさかざすさ月 五月五日の節句には菖蒲髪をつける風習がある。「是ノ日内外ノ群臣皆菖蒲ヲ著ス」（延喜式・太政官式）。「ほととぎす」と「あやめ草」は、「卯の花」「花

橘」とともに万葉集以来の常套的な取り合わせ。「……時鳥 鳴く五月には あやめ草 花橘を 玉に貫き かつらにせむと……」(万葉集・四二六(旧四二三))、「ほととぎす今来鳴きそむあやめ草かつらくまでに離るる日あらめや」(万葉集・四一九七(旧四一七五))、「時鳥鳴くや五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな」(古今集・恋一・四六九)など。○ものを 逆接確定条件。……のになあ。……のだがなあ。

【所載】新勅撰集・夏・一五三／貫之集Ⅰ・二二八  
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九三 さ月くるみちもしらねどほととぎすなくこゑのみぞしるべなりける

【異同】しるへなりける―しるへ也けり(大)

【現代語訳】五月がやってくるという道は知らないけれど、時鳥の鳴く声だけがその訪れを知るたよりだったのだなあ。

【語句】○さ月くるみち 季節の擬人化。「道知らばたづねも行かむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり」(古今集・三二三・躬恒)。○しるべ 知るたより、導き、道案内。五月が来たことを知る「たより」の意だが、五月を導いてくる「道案内」の意を響かせる。ほととぎすの声をしるべとする例は、「時鳥来つつこだかく鳴く声は千世のさ月のしるべなりけり」(貫之集・三三〇)。

【所載】貫之集Ⅰ・二五六

【参考】古今六帖に作者名はないが、貫之集に入集する。

五日

九四 あしひきのやまほととぎすけふとてやあやめのくさのねにたてゝなく

【異同】ナシ

【現代語訳】山郭公は、今日と思い定めて、菖蒲草の根にあやかつて、それで高く声たてて鳴いているのか。

【語句】◎五日 五月五日。端午の節。軒の菖蒲を葺き、競べ馬の行事が催され、粽や薬玉の贈答が行われた。

○あしひきのやまほととぎす 「あしひきの」は山にかかる枕詞。「やまほととぎす」は山に住む郭公。単に郭公をさす場合もある。「あしひきの山郭公我がごとや君に恋ひつついねがてにする」(古今集・四九九)、「いつのま

にさ月来ぬらむあしひきの山郭公今ぞ鳴くなる」(古今集・一四〇)。〇とてや だと思つて、と定めて……か。「や」は疑問の係助詞。〇あやめのくさ 「郭公」と取り合わされる。九二番歌参照。〇ねにたててなく 前句「あやめのくさの」から「根」へと続き、同音の掛詞「音」に転ずる。「ねになく」は声をたてて鳴く。「ね」の一語で、五月の景物である「あやめ草」と「山郭公」を結びつける。「いつかともおもはぬさはのあやめ草ただつくづくとねこそなかるれ」(拾遺集・七六七)、「あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく」(古今集・一五〇)。

【所載】拾遺抄・夏・七一／拾遺集・夏・一一一／新撰和歌・一三五／新撰朗詠集・一四九／元輔集I・二一七／時代不同歌合・七九／秀歌大体・三九

【参考】作者名はないが、拾遺抄、拾遺集、新撰朗詠集、時代不同歌合では「延喜御製」となっている。元輔集Iは竄入の可能性が高い。

九五 ほとゝぎすなくともわ<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>ずあやめ草こぞくすりびのしるしなりける つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時鳥が鳴いているとも知らず、あやめ草を見てこれこそが五月五日、薬日のしるしであると気づいたのだった。

【語句】〇なくともしらず 「とも」は逆接仮定条件を表す接続助詞。たとえ……しても。「夏衣しばしなたちそ時鳥鳴くともいまだ聞えざりけり」(貫之集・七八)。〇くすりび 陰暦五月五日(九四番歌参照)の異称。この日薬玉を掛けたからとも、薬狩をしたからともいう。「薬日のたもとにむすぶあやめ草たまつくりえにひけばなるべし」(惠慶集・二二〇)。〇しるし 他とまぎれないよう見分けるための目印、証拠。「ふればまづ君がすみかを思ふかな雪は山べのしるしなりけり」(公任集・二二七)。

【所載】夫木抄・二六〇七／貫之集I・五二五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野〕

九六 たがさともねやのまに／あやめぐさけふひきかけぬ人はあらじな

【異同】ナシ

【現代語訳】誰の里でも、寝所ごとに、きょうこの日、あやめぐさを引きかけない人はないでしょうね。

【語句】○たがさとも 誰の里でもみんな。○ねやのまに／＼ 寝所ごとにそれぞれ。「ねや」は人が寝るための建物または部屋。○あやめぐさ 菖蒲のこと。池辺・沼沢などに生えるサトイモ科の常緑多年草で、夏、肉穂花序の細かい花を付ける。葉は似ているが現在のあやめとは別。その香気が愛され、邪気を払うものとして端午の節には門口や軒や部屋の入り口などにひき掛けられた。また薬玉を作ったり、鬘として冠や髪に挿したりもした。○けふ 五月五日をさす。端午の節の日。

【所載】ナシ

### あやめぐさ

### つらゆき

九七 さはべなるみこもかりてはあやめぐさそでさへひちてけふやとるらん

【異同】そでさへひちて―そへさへひちて（御）

【現代語訳】沢辺に生えているまこもを刈って、それからあのあやめ草を、袖までもびしよぬれになりながら、きょうは採ることでしようか。

【語句】◎あやめぐさ 菖蒲のこと。九六番歌参照。和歌では、五月五日端午の節の景物として「根」「泥（うき）」「刈り」「引く」などとの関連で詠まれる。○みこも まこも。イネ科の多年草。川や湖沼の浅い所に群生する。○かりては 刈ってからその上で。○そでさへひちて 袖までも濡れて。「さへ」は、添加、累加を表わす副助詞。足や衣の裾はもちろん、その上袖までも濡れて、の意。

【所載】貫之集Ⅰ・三六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。和歌童蒙抄五六二番歌は、この歌の上句と次の歌（九八番）の下句とが結びついた形で一首となっている。

九八 さ月てふさつきにあへるあやめぐさうべもねながくおもひそめけり

【異同】ナシ

【現代語訳】すべての五月にめぐり合うあやめ草は、なるほど根が長いが、思えばわたしも、あの人のことをずいぶん長い以前から思い始めたことだなあ。

【語句】○さ月てふさつき ありとあらゆる五月。年ごとのすべての五月。○うべも いかにも。なるほど。「うべ」は、事情を肯定し納得する気持を表す副詞。「も」は強調の助詞。○ねながくおもひそめけり あやめの「根長く」に、「長く思ひ初め」を言い掛けた。「さ月てふさつきにあへるあやめぐさね」が、「ながく」を言うための序。貫之集Ⅰでは、第五句が「おひそめにけり」となっている。

【所載】貫之集Ⅰ・三九三

【参考】和歌童蒙抄五六二番歌は、前歌（九七番）の上句とこの歌の下句が結びついた形で一首となっている。

九九 あやめぐさねながきのちつげばこそけふとしなれば人のひくらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草は根が長く、長い命を持ち続けるからこそ、五月五日という今日になると、人が抜き取るであろう。

【語句】○ねながきのち 根の「長き」ことに、「長き命」を掛ける。○つげばこそ 引き続き保持しているからこそ。○けふとしなれば きょうというこの日になれば。「し」は強意の助詞。○人のひくらめ 人があやめの根を引くのであろう。「ひく」は、この場合、引いて抜き取ること。

【所載】貫之集Ⅰ・一三二

一〇〇 みがくれておふるさ月のあやめぐさかをたづねてや人のひくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】水中に隠れ生えている五月のあやめ草は、あんなに水に隠れていても、その高い香りをたずね知って、人が引き抜くのでしょうか。

【語句】○みがくれて 水隠れて。水中に隠れて。○かをたづねてや 香りを探してそれによってありかを知つてか。「や」は、軽い疑問の気持を含む係助詞、末句の「ひくらん」へひびく。

【所載】和歌童蒙抄・五六三

【参考】続古今集・夏・二二九番に、貫之の歌として「みがくれておふるさつきのあやめぐさ長きためしに人はひかなん」がある。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

### みつね

一〇一 さみだれのたまにぬく日のあやめぐさねにあらはれてなきぬべらなり

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨が糸として葉玉を貫く日のあやめ草が、雨に洗われ根が顕れて―私も「音に顕れて」声をたてて泣いてしまいうさだ。

【語句】○さみだれのたまにぬく日 五月雨が、糸として葉玉を貫く日。すなわち、五月五日の端午の節の日。

「の」は主格。○ねにあらはれて 「根」に「音」を掛け、「洗はれて」に「顕れて」を掛けて、五月雨に洗われてあやめ草の根が顕れ露出する意と、声を出して泣く意とを表す。「風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり」(古今集・六七二)。○べらなり 確定推量の助動詞。六一番歌参照。藏中スミ「歌語『べらなり』の周辺」『水門』一九七八年八月)、藏中スミ「歌語『べらなり』」『水門』一九八〇年十月)。

中野方子「『古今集』における「べらなり」―喩に承接される助動詞―」『国文』一九九七年一月)。

【所載】躬恒集Ⅱ・九五／躬恒集Ⅲ・八四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一〇二 かくれぬのそこにおふれどあやめぐさねごめにひきて見るひとはみつ

【異同】ナシ

【現代語訳】このあやめ草は隠れ沼の底に生えていたけれど、根こそぎ引いて、見る人は見たよ。

【語句】○かくれぬ 隠れ沼。草などの陰に隠れて見えない沼。「かくれぬにおひそめにけりあやめ草しる人なしに深きしたねを」(蜻蛉日記・一九四)。○ねごめ 根ぐるみ。根こそぎ。「垣越しにちりくる花を見るよりはねごめに風の吹きもこさなん」(後撰集・八五)。

【所載】ナシ

【参考】当該歌は、人に知られぬ女を男が見いだして逢った意を込めるか。その場合、「そこ」は、「底」に「其処」を掛けるか。「かくれぬのその心ぞ恨めしきかにせよとてつれなかるらん」(拾遺集・七五八)。

一〇三 あやめ草ねながきとればさはみづのふかきこゝろもしりぬべらなり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草の根が長いものを取ると、それが生えていた沢水が深いことがわかるように、私の深い心もきつとわかるに違いないよ。

【語句】○ふかき 根の長いあやめ草が生えていた沢水の深さと、心(思い)の深さとを表す。「とぶ鳥のこゑもきこえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」(古今集・五三五)。○べらなり 一〇一番歌参照。

【所載】貫之集I・二二七

【参考】作者名は「つらゆき」とあり、貫之集では「さうふとれる所 又かさせるもあり」という詞書と共に見える。

一〇四 あやめぐさいくよのさつきあひぬらんくるとしごとにわかくみえつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】あやめ草はいつたいどれほど長い年代の間、五月という月に逢ってきたのだろうか。新しい年が巡って来てあやめ草の根を繰る度に、若々しくなるように見えていながら。

【語句】○いくよ どれほどの長い年月。○くる 「来る」に、「あやめ草」の縁語である「繰る」を掛ける。「さみだれにあひくることはあやめぐさねながき命あればなりけり」(貫之集・五〇九)。

【所載】新撰万葉集・六一／寛平御時后宮歌合・七一

【参考】新撰万葉集には、二句「イクツノセチニ(五十人沓之五月)」、五句「ワカクミユレバ(稚見湯札者)」とあり、寛平御時后宮歌合には、二句「いくらの五月」、三句「あひ来らむ」、五句「若くみゆらむ」とある。いずれも作者名の記載はない。



みな月

みつね

一〇五 おほあらきのもりのした草茂りあひてふかくもなつになりけるかな

【異同】 ふかくもなつに—ふかくも夏の（大）

【現代語訳】 大荒木の森の下草が茂りあつて草深くなり、すっかり夏も深くなつたことだ。

【語句】 ◎みな月 陰暦六月の異称。当該歌のように繁茂する夏草が詠まれたり、一〇七番歌のように残暑が詠まれたりした。○おほあらきのもり 大荒木の森。「おほらきのもり」ともいう歌枕。所載欄の躬恒集・忠岑集の伝本によつては、「おほらきのもり」とするものもある。五代集歌枕などは山城国とするが、本来は大和国であつたともいう。平安時代には、下草が生い茂つて訪れる人もいない様が詠まれることが多かつた。「おほあらきの森のした草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」（古今集・八九二）。○ふかく 下草が繁茂して草深くなる意と、夏が深まる意とを表す。「深く」が上の文脈と下の文脈を連結する例については、一〇三番歌に同様の形が見られる。

【所載】 拾遺抄・夏・八六／拾遺集・夏・一三六／新撰朗詠集・一五九／躬恒集Ⅰ・八二／躬恒集Ⅲ・一四三／躬恒集Ⅳ・五／躬恒集Ⅴ・一八／忠岑集Ⅰ・三／忠岑集Ⅱ・五五／忠岑集Ⅲ・八九／忠岑集Ⅳ・一六九／寛平御時中宮歌合・一二／秀歌大概・四一

【参考】 作者名は「みつね」とあり、躬恒集に見え、寛平御時中宮歌合も作者名を「躬恒」とするが、拾遺抄・拾遺集によると作者は壬生忠岑とあり、忠岑集にも見えて、問題が残る。寛平御時中宮歌合は撰歌合と推察されるので、拾遺抄・拾遺集・躬恒集・忠岑集等の詞書を勘案すると、延喜五（九〇五）年、藤原定国の四十賀の屏風歌と認められる。所載欄の他の文献では四句目が「深くも夏の」とあるものが多い。

〔以上五首担当 長戸〕

一〇六 なつはみないづこともなくあしひきの山べも野べもしげりあひつゝ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 夏はみなどこといふこともなく、山辺も野辺も草木が生い茂っているよ。

【語句】○いづこともなく 場所を特定することなく。どこということもなく。「みかさやまさしても見えず夏なればいづこともなくあをみわたれり」(好忠集・一〇三二)。○しげりあひ 一〇五番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】前歌を受けて「しげりあひ」が特定の場所にとどまらずますます広がっている、と言いたげな配列。

一〇七 みな月のつちさへわれてるひにもわが袖ひめやいもにあはずて  
人丸 或本

【異同】ナシ

【現代語訳】六月の土までひび割れるほど強く照る日でも、私の袖が乾くことがあるのだろうか(いや、乾きはしまい)、君に逢わないでは。

【語句】○つちさへわれて 所載欄の文献ではいずれも「土さへさけて」とある。万葉集には「割」がこの歌のほかにも四例あるが、いずれも「さけ」と訓まれている。○わが袖ひめや 「や」は係助詞。反語。○ずて 打消の助動詞「ず」の連用形に接続助詞「て」の付いたもの。……ないで。……なくて。上代に多くみられる。「思ひ遣るすべのたづきも今はなし君に逢はずて年の経ぬれば」(万葉集・三三七五(旧三三六))。

【所載】拾遺抄・恋上・二七七／拾遺集・恋三・八二五／万葉集・一九九九(旧一九九五) 六月之 地副割而照日尔毛 吾袖将乾哉 於君不相四手 ミナツキノツチサヘサケテルヒニモワガソデヒメヤキミニアハズシテ  
みなつきのつちさへさけてるひにもわがそでひめやきみにあはずして／人麿集Ⅰ・七三／人麿集Ⅱ・四〇七／人麿集Ⅲ・二二二／赤人集Ⅰ・二六八

【参考】人麿集にも収められているが、万葉集では「作者未詳」。拾遺抄・拾遺集でも「よみ人知らず」とする。なお、古今六帖・二七四に「つくばねの雲けふまでにてるひにもわがそでひめやいもにあふまで」という、下句の酷似する歌がある。

一〇八 夏ごろもうすきかひなくあきまではこのしたかぜのやまずふかなむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夏衣の薄い甲斐もなく（暑いこの夏なので）、秋までは木の下を抜ける涼しい風が止むことなく吹き続けてほしいものだ。

【語句】○夏ごろもうすきかひなく 薄い夏衣でも甲斐のないほどの暑さをいう。ただし、夏衣の薄さは愛情が薄くなった喩えとして恋歌に用いられることが多い。「蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば」（古今集・恋四・七一五）。○このしたかぜ 木の、枝で覆われた下を吹き抜ける風。ここでは涼風。「かげふかきこのした風の吹きくれば夏のうちながら秋ぞきにける」（貫之集・四八三）。

【所載】貫之集Ⅰ・一五〇／元輔集Ⅰ・二六三

【参考】作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。ただし元輔集は屏風歌を集めた歌群に収め、作者記載はない。

### なごしのはらへ

拾五 賀

一〇九 みな月のなごしのはらへするひとはちとせのいのちのぶといふなり

【異同】ナシ

【現代語訳】六月の夏越の祓をする人は、千歳までも寿命が延びるということです。

【語句】◎なごしのはらへ 六月晦日に行う祓。茅輪をくぐる、人形（ひとがた）を撫で祝詞をあげ川に流す、などを行なったという。和歌では屏風歌に多く見られる。「かはなみもなごしのはらへするけふはうかぶかげさへのどけかりけり」（能宣集・三九七）、「ゆふだちにややくれにけりみなづきのなごしのはらへせでやすごさん」（好忠集・五〇三）。○のぶといふなり 「なり」は伝聞。「すみよしとあまはつぐともながあすな人忘草おふといふなり」（古今集・九一七）、「しらかはのたきのいとなみみだれつつよるをぞ人はまつといふなる」（後撰集・一〇八七）。

【所載】拾遺抄・賀・一八七／拾遺集・賀・二九二

一一〇 おほぬさの川のせごにながれてもちとせの夏はなつばらへせん

【異同】ナシ

【現代語訳】大幣が川の瀬ぐことに流れても、いつまでもめぐつて来る夏には夏越の祓を続けようと思えます。  
【語句】○おほぬさ 大串につけた幣。祓の時に用いて人々の穢れを移し、終わると川に流した。「なげきどをなべてはらふるおほぬさははやかはのせにながれいでぬめり」（伊勢集・四二二）。○川のせぐことにながれても あちこちで大幣を流している。大幣の数だけ思いはそれぞれだが、の意。「みそぎするかはのせぐことにひくあみをおほぬさなりと人やみるらん」（能宣集・八七）。○ちとせの夏 いつまでもめぐり続ける夏。賀意をこめる。「わがやどの池にのみすむ鶴なれば千とせの夏の数はしるらん」（貫之集・四八二）。○なつばらへ「夏越しの祓」に同じ。一〇九番歌参照。「かも河のみなそこすみててる月をゆきて見むとや夏ばらへする」（後撰集・二一五）。

【所載】貫之集Ⅰ・一三二

〔以上五首担当 青木〕

一一一 みそぎつゝおもふことをぞいのりつるやをよろづよの神のまに／＼  
いせ

【異同】おもふことをそ—おもふかとをそ（大）

【現代語訳】禊ぎをしながら、心中の願い事をお祈りしたことでした。八百万代の神様の思し召しのままに。

【語句】○やをよろづよの 「やほよろづ」に「よろづよ」を掛けた言い方。「やほよろづ」は「八百万」で、数の多いこと、無数に、の意。「八百万の神」というように用いられる。また「よろづよ（万代）」には長寿をこゝとほぐ意がこめられており、当該歌は拾遺集等によれば「中宮の賀」における屏風歌なので、中宮に対する賀の気持ちも表されているよう。

【所載】拾遺抄・賀・一八八／拾遺集・賀・二九三／伊勢集Ⅰ・八二／伊勢集Ⅱ・八四／伊勢集Ⅲ・八一／綺語抄・二七二

【参考】作者名は「いせ」とあり、伊勢集にも見えるが、拾遺抄には「寛平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に藤原伊衡朝臣」、拾遺集にも「承平四年、中宮の賀し侍りける屏風 参議伊衡」とあって、いずれも「伊衡」である。そこに多少の問題は残る。また拾遺抄等に見える「中宮の賀」は、伊勢集の詞書では各伝本ともに「后宮五十賀」とあり、醍醐天皇后、藤原穩子の五十賀である可能性が大きいが、穩子の五十賀は承平四年（九三四）三月二十六日のことだから、拾遺抄の詞書に見える「寛平四年」は誤りで、拾遺集の「承平四年」が正しいのであろう。

一一二 この川にはらへてながすことのはなみの花にぞたぐふべらなる つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】この川で祓い清めて流す言の葉は、白く泡立つ波の花と一緒にあって見えることだ。

【語句】○はらへてながす 罪や穢れを祓い清めるために、それを幣に書いて水に流す。○ことのは 祓えの内容、言葉。○なみの花 波が立ったときに見える、白い波がしらをいう。「花」は「葉」の縁語。「言の葉もなくて経にける年月にこの春だにも花は咲かなむ」(後撰集・一二四三)。○たぐふべらなる 寄り添っているようだ。一緒にあっているみたいだ。「べらなる」は推量の助動詞「べらなり」の連体形。

【所載】貫之集Ⅰ・一〇七／夫木抄・三七六一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一三 みそぎ<sup>スイ</sup>つるかはのせみればからころもひもゆふぐれになみぞたちける つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】禊ぎが終わった川の浅瀬を見ると、着替えの衣の紐を結う、その夕暮れ時に波が立っていることだ。

【語句】○ひも 「紐」に「目も」を掛ける。○ゆふぐれに 紐を結ぶ意の「結ふ」に「夕暮」を掛ける。○なみぞたちける 波が「立つ」に「裁つ」を掛ける。「紐」「結ふ」「裁つ」は「からころも」(唐衣)の縁語。

【所載】新古今集・夏・二八四／貫之集Ⅰ・一一／貫之集Ⅱ・九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一四 そらみえてながるゝ川のさやかにもはらふることを神はきかなん みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】空を映して流れる川がはつきりと澄み切っているように、どうぞ神様はお祓いの言葉をはつきりと耳におとどめになつてください。

【語句】○そらみえて 空を川に映して、の意にとつた。拾遺集等には「そこきよみ」とあり、その方がわかりやすい。○さやかにも 上二句を受け、下二句を修飾する。すなわち「空見えて流るる川」がさやかであり、「祓ふることを神は」さやかに聞いてほしい、という意。

【所載】拾遺抄・夏・八四／拾遺集・夏・一三三／躬恒集IV・三五二／躬恒集V・三三／宝物集・二一八

【参考】作者名は「みつね」とあり、躬恒集にも見えるが、拾遺抄等には「題不知 読人不知」とあって、問題が残る。

一一五 <sup>みゝと川イ</sup> みことがはきけばをなじくおほぬさにかくはらふるをかみはきくらむ

【異同】 <sup>みゝと川イ</sup> みことがは <sup>みゝと川イ</sup> みゝもかは (御)、みゝと河 (桂・大) おほぬさに―大麻に (大)

【現代語訳】みみと川で聞くと、その名と同じようによく耳が利き、こうしてお祓いすることをさぞかし神様は聞いてくださるでしょう。

【語句】○みことかは 底本文は「みゝとかは」とも十分に読めるが、わざわざ傍注に「みゝと川イ」とあるので、敢えて異なる読み方に従つた。しかし和歌本文としてはやはり「みゝとかは」が穩当と考え、採用した。「みみと川」は大宮大路に沿つて南流する川。大宮川。内裏に入つて御溝水になり、朱雀門より出る。朱雀門のあたりで大祓え、七瀬の祓えなどが行われた。「耳敏(みみと)」の意を掛ける。○おほぬさ 大串につけた幣で、祓えの具。

【所載】躬恒集I・一八六／躬恒集II・一〇三／躬恒集III・九一／躬恒集IV・四三八／夫木抄・一一二七六

【参考】作者名の記述はないが、当該歌は躬恒集の各伝本に見え、夫木抄にも「みつね」とある。

(以上五首担当 犬養廉・久保木)

一一六 としなかにわがなげきどはなりぬればみそぐともよにうせじとぞおもふ <sup>いせ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】一年の半ばとなつてしまいました。（あなたに顧みられない私の嘆きはとても深いので）襖をしても決して消えることはあるまいと思います。

【語句】○としなか 一年の半ば。半年。六月祓は六月晦日に行われた。○なげきど 用例のないことば。関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』（風間書房、一九九六年）に従い、嘆き所の意と解する。○よにうせじ 決して消えることはない。「世に」は、下に打ち消しの語を伴って、「決して・断じて」の意を表す副詞。

【所載】夫木抄・三八〇九／伊勢集Ⅰ・四一／伊勢集Ⅱ・四三／伊勢集Ⅲ・四〇

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では温子の命により伊勢が詠んだ月次屏風歌の一部で、ⅠⅡⅢとも男が女に詠んだ歌。「なげきどをなべて祓ふるおほぬさはや川の瀬に流れいでぬめり」（伊勢集Ⅰ・四二）との返歌がある。『伊勢集全釈』にあげてあるように、祓によって恋の思いを断とうとした話は伊勢物語六十五段にもあり、「恋せじと御手洗河にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな」と詠まれている。

## 八代女王

一一七 きみによりことのしげさにふるさとのあすかの川にみそぎしにゆく

【異同】八代女王―底本「八代女王」トスル入替符号アリ。八代女王（御・桂・大）

【現代語訳】あなたのせいでひどく噂を立てられますので、昔の都の飛鳥川に襖をしに参ります。

【語句】○八代女王 所載欄の他文献では「八代女王」とする。系譜等未詳。続日本紀によれば、天平九（七三七）年二月無位から正五位上。天平宝字二（七五八）年十二月、先帝（聖武天皇）に愛されていたのにその志を改めたとの理由で従四位下の位記を破棄された。○きみにより あなたのせいで。○ことのしげさに 噂がいっぱいなので。「に」は原因・理由を示す格助詞。○ふるさと 旧都。飛鳥古京をさす。○あすかの川 奈良県明日香地方を流れて大和川に注ぐ川。

【所載】万葉集・相聞・六二九（旧六二六）君尔因 言之繁乎 古郷之 明日香乃河尔 潔身為尔去 一尾云、竜田超 三津之浜辺尔 潔身四二由久 キミニヨリコトノシゲキヲフルサトノアスカノカハニミソギシニユク 一尾云、タツタコエミツノハマヘニミソギシニユク きみによりことのしげきをふるさとのあすかの川にはみそぎしにゆく 一尾云、たつたこえみつのはまへにみそぎしにゆく／夫木抄・三七八五

【参考】万葉集の題詞に見える「八代女王獻天皇歌」の「天皇」は聖武天皇。

一一八 みそぎするならのを川のかは風にいのりぞわたるしたにたえじと

【異同】ナシ

【現代語訳】禊をするならの小川の川風の中で神に祈り続けることだ、恋仲が人に知られないで絶えないようにと。

【語句】○ならのを川 京都市上賀茂神社境内を流れる御手洗川。○いのりぞわたる ずっと祈り続ける。「わたる」は動詞の連用形について「ずっと……続ける」意を表し、「川」の縁語。○したに ひそかに。内密に。「したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人なとがめそ」（古今集・六六七・とものり）。○たえじと 絶えないようにと。「たえ」は「川」の縁語。「じ」は打ち消しの意志の助動詞。

【所載】新古今集・恋五・一三七六／定家十体・二七

【参考】所載欄の他文献には作者名「八代女王」とある。新古今集の諸注釈書はそれを古今和歌六帖一一七番歌の作者名による誤認としている。

一一九 たつた川たきのせきりにはらへつゝいはひくらすはきみがためとぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】竜田川の滝の急流で祓をしながら、無事を祈って一日を過ごすのは、あなたのためというわけですよ。

【語句】○たつた川 奈良県竜田の付近を流れる川。紅葉の名所。○せきり 水が瀬を押し切って流れていくこと。また、その所。早瀬。急流。「たがみそぎゆふだたみして立田川たきのせきりにぬさながすらん」（夫木抄・三八三八）。○いはひくらす 一日中神に無事を祈って過ごす。

【所載】夫木抄・三七八六、一一〇一八

一二〇 ねぎこともきかであらぶる神だにもけふのなごしのはらへといふなり

【異同】ナシ



【現代語訳】願い事もきかずに荒れ狂う神でさえも穏やかになる「和（なご）し」ではないが、今日は夏越（なご）しの祓ということだ。

【語句】○ねぎごと 願い事。○あらぶる神 荒れる神。人間に害をする神。○なごしのはらへ 夏越しの祓。六月の晦日に行った大祓の行事。「なごし」に「和し」（穏やかである意）を掛ける。「さばへなすあらぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり」（拾遺集・一三四・藤原長能）。

【所載】和漢朗詠集・一七〇／順集Ⅰ・一二／深窓秘抄・三五

【参考】順集の詞書によれば源高明の大饗日にたてる屏風の歌。作者名「したがふ」は所載欄の順集と一致するが、深窓秘抄では作者名を高明の妻愛宮とする。和漢朗詠集では作者名記載なし。

〔以上五首担当 三浦〕

## 夏のはて

一二二 ゆふだちに夏はいぬめりそをちつゝあきのさかみにいまやいたらん

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立とともに夏は過ぎ去るようだ。ぬれながら秋への境目に、今なるうとしているのだろうか。

【語句】◎夏のはて 夏の終り。陰暦六月末日。夏は陰暦四、五、六月。○そをちつゝ そほちつゝ。ぬれながら。○あきのさかみ あきのさかひ。夏と秋との境目。

【所載】古今六帖「ゆふだち」五〇九

一二三 こよひしもいなばのつゆのをきしくはあきのとなりになればなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】今宵に限って、稲の葉に露がいちめんに置き広がっているのは、秋が隣まできているからなのだなあ。

【語句】○をきしく おきしく。露や霜がおりて一面に覆いつくす。○あきのとなりになれば 秋が隣まできているから。「あとたえてあれたるやどの月みれば秋のとなりになりぞしにける」（恵慶法師集・一四八）。

【所載】夫木抄・三七四七

一二三 にしへだに夏のいにせばしたひつゝやがてこひしき秋はみてまし

【異同】ナシ

【現代語訳】西へさえ夏が行ってくれたら、なつかしく思っている恋しい秋にまもなく会えるのに。

【語句】○夏のいにせば もし夏が去ってくれたら。五句「秋はみてまし」と呼応して反実仮想となる。○こひしき秋 陰陽五行説では東が春、西が秋、南が夏、北が冬。それで西へ行けば恋しい秋に会えると言ったもの。

「おなじえをわきてこのはのうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」(古今集・二五五)。

【所載】夫木抄・三七四六／和歌童蒙抄・一三一

一二四 夏とあきとゆきかふそらのかよひぢ<sup>に本</sup>はかたへすゞしき風やふくらん みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】去って行く夏とやってくる秋が行き来する空の通り道は、片一方には涼しい風が吹いているのだから。

【語句】○ゆきかふ 往来する。所載欄古今集の詞書に「みな月のつごもりの日よめる」とある。○かたへ 片一方。○すゞしき風 初秋の風として詠まれる。「孟秋之月、涼風至、白露降」(礼記・月令)。

【所載】古今集・夏歌・一六八／新撰朗詠集・一六〇／躬恒集Ⅰ・一九五／躬恒集Ⅱ・一一二／躬恒集Ⅲ・一〇〇／躬恒集Ⅳ・四四六／古来風体抄・二四二／桐火桶・七二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

秋たつひ

古四 秋上

一二五 あきゝぬとめにはさやかに見えねどもかぜのをとにぞをどろかれぬる 藤原敏行朝臣

【異同】ナシ

【現代語訳】秋が来たと目にははつきり見えないが、風の音ではつと秋が感じられることだ。

【語句】◎秋たつひ 立秋の日。二十四節気の一。秋は陰暦のほぼ七、八、九月。暑い夏が去って待ちこがれた秋が来た、という期待をもって涼風とともに詠まれる。和漢朗詠集、千載佳句には「立秋」の題がある。○さやかに はつきりと。○をどろかれぬる おどろかれぬる。 はつと気づかされた。「れ」は自発。

【所載】古今集・秋上・一六九／新撰万葉集・三八八／新撰和歌・二／和漢朗詠集・二〇六／敏行集・一四／寛平御時中宮歌合・一四／俊成三十六人歌合・六一／時代不同歌合・四九／和歌体十種・一三／和歌十体・六／三十人撰・六五／三十六人撰・八九／奥儀抄・一一〇／桐火桶・七三

【参考】作者名「藤原敏行朝臣」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・林〕

一二六 同 河風のすゞしくもあるかうちよするなみとゝもにやあきはたつらん つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】川風がなんと涼しいことだ。この打ち寄せる波が立つように、波とともに秋が立つのであろうか。

【語句】○河風のすゞしくもあるか 当該歌を下敷きにした例として「河かぜのすゞしくもあるか夏ごろも我がみのうへに秋や立つらん」（高遠集・三四六）があげられる。○なみとゝもにやあきはたつらん 川風が吹き、波が立つ、それと同時に立秋になるのか、と詠む。この歌は、所載欄の古今集によれば実際に賀茂川で詠んだ歌。

【所載】古今集・秋上・一七〇／新撰朗詠集・一八八／貫之集I・七九二／秀歌大体・四四／古来風体抄・二四三／桐火桶・七四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。なお、集付けの「同」は一二五番歌に、「古四 秋上」とあるのに同じ、の意。

一二七 同 きのふこそさなへとりしかいつのまにいな葉そよぎて秋風のふく

【異同】いな葉そよきて—いな葉もそよと（大）

【現代語訳】つい昨日、早苗をとって田植をしたように思っていたけれど、いつの間に稲葉が繁りそよそよと

音を立てて秋風が吹くようになったのだろうか。

【語句】○きのふこそ 「昨日こそ……しか」で、つい昨日……したばかりのように思っていたが、の意。「昨日こそ……しか」の表現は、万葉集の「昨日こそきみはありしか」(四四七・旧四四四)、「昨日こそ船出はせしか」(三九一五・旧三八九三)の例や、拾遺集の「昨日こそ年はくれしか春霞かすがの山にはやたちにけり」(三三)の例がある。この拾遺集歌は赤人の詠(和漢朗詠集では人麻呂詠)とされる歌で、「昨日こそ……しか」は古体な感じのする表現。

【所載】古今集・秋上・一七二／新撰和歌・六／和漢朗詠集・五七一／九品和歌・一一／俊賴髓脳・三四二／奥儀抄・九七

一二八 にはかにも風のすゞしくなりゆくか秋たつひとはむべもいひけり

【異同】ナシ

【現代語訳】急に風がすずしくなつてゆくことだよ。だから、秋が動き始める日、「立秋」とはよく言ったものだ。

【語句】○秋たつ 立秋。「たつ」は行動をおこすこと。○むべ だからなるほど、の意。

【所載】後撰集・夏・二二七／新撰万葉集・一二五／新撰朗詠集・一八七

一二九 はつあきのそらにきりたつからころも袖のつゆけきあさぼらけかな  
はつあき

【異同】ナシ

【現代語訳】初秋の空に霧が立ち、袖が露に濡れる朝ぼらけであることよ。

【語句】◎はつあき 初秋。○きりたつ 「霧が立つ」に袖の縁語「裁つ」を掛ける。○からころも 「袖」を導くために用いる。○袖のつゆけき 「涙」の喩か。

【所載】ナシ

一三〇 わぎもこがころものすそをふきかへしうらめづらしき秋のはつかぜ  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしのいい人らしい人の衣のすそを吹き返し、私に裏—心中—を見せる、すばらしい秋の初風よ。

【語句】○うらめづらしき 「うら」は衣の裏と心中を指す。「うらめづらしき」は心引かれるの意。正徹はこの歌を踏まえて「吹きかへしうらめづらしき程もみす衣のすその秋の初風」(草根集・三三三七)と詠む。

【所載】古今六帖「秋のころも」三二九六／古今集・秋上・一七一／新撰和歌・四／家持集Ⅰ・二二一／家持集Ⅱ・二二六／躬恒集Ⅱ・一二五／躬恒集Ⅲ・一〇九／躬恒集Ⅳ・四五八／秀歌大体・四五／能因歌枕・六／綺語抄・三八五

【参考】作者名「みつね」とあるが古今集では「よみ人知らず」となっている。

〔以上五首担当 杉本〕

一二一 あづまちのぬさめのさととははつあきのながきよをひとりあかす我なぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の「ぬさめの里」とは、初秋の長い夜をひとりおきあかす私をいう名であったよ。

【語句】○ぬさめのさと いさめの里。「いさめ」は「ねざめ」(寢覚)。身体は横たわっているが目は覚めている状態。横たわっていて意識を回復すること。「故、遣り下り坐して、玉倉部の清水に到りて息ひ坐しし時、御心稍に寝めましき。故、其の清水を号けて居覚の清水といふ。」(古事記・中巻)、「里は、逢坂の里。ながめの里。寢覚(いさめ)の里……」(枕草子)。場所は未詳。○ひとり 共寝の相手もないで、の意。○あかす 寝ずに明るくなるまで時を過す。○我な わが名。

【所載】古今六帖「さと」一二九五／夫木抄・三九〇七、四五四八

一二二 こがらしのあきのはつかぜふきぬるをなどかくもぬにかりのこゑせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】木枯らしの秋の初風がふいたのに、なぜ（まだ）雲の上に初雁の声がしないのか。

【語句】〇こがらし 秋、冬に木の葉を散らし吹く風。「あさぢふの露吹結ぶ木枯にみだれてもなく虫の声かな」（順集Ⅰ・一五八）。

【所載】順集Ⅰ・二四／順集Ⅱ・一五八／天禄三年八月廿八日規子内親王前栽歌合 別2／和歌一字抄・一〇六〇／和歌童蒙抄・九三八／袋草紙・三七三

【参考】歌合は左右二組に別れて歌のよしあしを競うものであるが、言葉が適切かという非難や、いやこういう例があると証拠の歌を提示する場合もある。所載欄の歌合は秋の草花や虫を歌にしたが、ある歌に対し「木枯らし」は冬の風をいうのではと難じた。それに対し、秋の風を詠んだ例としてあげた。すなわち「木枯らしとは冬の風をこそいへ、このころのかぜをいはば、雨をもしぐれとやいふべからん」というのに対して、御簾の内から「ふるきことをこそはすれ」と「いひいだし」た二首のうちの一首が当該歌。

## 七日の夜

いせ

一三三 めづらしくあふたなばたはよそ人もかげ見まほしきものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】年に一度、彦星・織姫のあい逢う夜は、（恋人の）影を地上の人も見たいのでありましたよ。

【語句】◎七日の夜 七月七日の夜。七夕。天の川を渡り、牽牛と織女が年に一度相逢うという漢代の伝説をふまえ、万葉以後数多くの歌人が歌う。中国では川を渡るのは織女であるが、和歌では渡るのはほとんど彦星である。夜訪れて朝別れる当時の通い婚を背景にしている。多くは二星いづれかの心で詠う。また、恋人同士が天上の恋に較べて我が恋を詠う場合もある。〇たなばた 織女を指す場合と、牽牛と織女の両星を指す場合がある。ここは二星。〇よそ人も 当事者でない者も。〇かげ 二星を盟の水に映して見ることをした。その二星の「影」に「人影」をかける。「やまの井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人のみゆらん」（古今・七六四）のように「影」は正身にたいするもの。

【所載】風雅集・秋上・四六五／伊勢集Ⅰ・八三／伊勢集Ⅲ・八二

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では后宮の賀の屏風歌のうちの一首。

人丸

一三四 あまの川みづかげくさのあきかぜになびくをみればときはきぬらし

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川のほとりに生う草の秋風に揺れるのを見ると、(待ちに待った)年に一度の日が来たらしい。

【語句】○あまの川 銀河。天漢。天空の川に見たて、牽牛と織女の二星が年に一度逢うために渡る。一三三番歌の語句欄「七日の夜」参照。○みづかげくさ 水影草。水陰草。水のほとりに生える草。後の例として、稻をいう。日葡辞書に「まだ穂のついている稻」との説明がある。ここでは「水辺に生える草」と解す。

【所載】続古今集・秋上・三〇七／万葉集・二〇一七(旧二〇一三) 天漢 水陰草 金風 靡見者 時来之 マノガハミズカゲクサノアキカゼニナビクヲミレバトキハキヌラシ あまのがはみづかげくさのあきかぜになびかふみればときはきにけり／人麿集Ⅲ・一二三／赤人集Ⅰ・二八二／赤人集Ⅱ・一六一／赤人集Ⅲ・一七四／袖中抄・七三七・

【参考】当該歌は万葉集に「右は柿本朝臣人麿の歌集に出づ」とする歌群の中にある。古今六帖の作者名「人丸」は、その点で一致する。

ふかやぶ

一三五 わびぬればつねはゆゝしきたなばたもうらやまれぬるものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】(お会いできずにいる) 苦しさのうちひしがれ、(年に一度しか会えないことは間違っても似てはならないと) 忌み避けていた七夕も、(年に一度でも会えるのなら、どんなによいかと) うらやましいと思うのであったよ。

【語句】○わびぬれば 困り果てて。○ゆゝしき 「ゆゆし」は「忌み避けたい」の意。○うらやまれ 「うらやむ」に自発の助動詞「る」の接続したかたち。ついうらやましいと思ってしまう。

【所載】拾遺抄・恋上・二八四／拾遺集・恋二・七七三／深養父集Ⅰ・三二／深養父集Ⅱ・七

【参考】作者名「ふかやぶ」は拾遺抄・拾遺集とは一致しない。

〔以上五首担当 平野〕

拾三秋

一三六 あまの川とをきわたりにあらねどもきみがふなではとしにこそまて

人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】天の河の渡し場は、兩岸が遠く離れている渡し場ではないけれども、あなたの船出は一年にわたって待つのである。

【語句】○とをきわたり とほきわたり。遠き渡り。兩岸の距離が遠く隔っている渡し場。○きみがふなであなたの船出。牽牛が対岸から船で天の川を渡ってくると考えている。織女の立場で詠んだ歌。○としにこそまて一年にわたって待つのだ。

【所載】後撰集・秋上・二三九／拾遺集・秋・一四四／万葉集・二〇五九（旧二〇五五）天河 遠度者 無友 公之舟出者 年尔社候 アマノガハトホキワタリハナケレドモキミガフナデハトシニコソマテ あまのがはとほきわたりはなければどもきみがふなではとしにこそまて／和漢朗詠集・二一八／人麿集Ⅰ・八二／人麿集Ⅱ・三九／古来風体抄・三五六／井蛙抄・一四六

【参考】作者を「人丸」としているが、万葉集では作者不詳歌である。拾遺集、人麿集Ⅰ、人麿集Ⅱ、古来風体抄は、人麿の作としている。

一三七 くにもせにつねにあふなはたつめれどあひみることはたゞこよひなり

【異同】ナシ

【現代語訳】国中に、いつもあなたとの恋の噂は立っているようだけれども、ほんとうは、二人が逢うのは、ただこの夜だけなのだ。

【語句】○くにもせに 「せに」は「狭に」。国も狭く感じられるくらいいっぱい。国中に。○つねにあふなはたつめれど わたしたちが逢っているという噂はいつも立っているようだが。「つねに」は「たつめれど」にかかる。「あふな」は「逢ふ名」、恋の噂。織女牽牛のことは世に知られた伝説だから、「くにもせにつねにあふなはたつ」と言った。

【所載】奥儀抄・二八七／和歌色葉・三一七



一三八 たまかづらたえぬものからさぬるよはとしのわたりにたゞひとよのみ

【異同】ナシ

【現代語訳】二人の間は絶えることのない仲ではあるものの、共寝するのは、年に一度の渡河の折の、ただ一夜だけなのだ。

【語句】○たまかづら 「たえぬ」にかかる枕詞。○たえぬものから 絶えることのない間柄ではあるけれども。

「ものから」は、ここでは逆接。○としのわたり 年の渡り。七夕の星の一年に一度の川渡り。

【所載】後撰集・秋上・二三四／万葉集・二〇八二（旧二〇七八）玉葛 不絶物可良 佐宿者 年之度尔 直一夜耳 タマカヅラタエヌモノカラサヌラクハトシノワタリニタダヒトヨノミ たまかづらたえぬものからさぬくはとしのわたりにただひとよのみ／人麿集Ⅳ・二九〇／綺語抄・一二一、四二一、四八三

一三九 あからひくいろたへのこのかずみれば人づまゆへにわれこひぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】ほんのりとくれないを帯びた容顔うるわしいひとをたびたび見ると、（そのひとが）人妻であるというのに、わたしは恋してしまいそうだ。

【語句】○あからひく ほんのりとくれないの色を帯びた。美麗な容顔の形容。ここは「いろたへのこ」にかかる枕詞。○いろたへのこの ここでは、「いろたへのこを」とする万葉集によつて解した。容色うるわしき美女を。○かずみれば 幾度も見れば。○人づまゆへに 人妻ゆゑに。それが人妻であるにもかかわらず。「ゆゑに」は、ここでは逆接。○こひぬべし 恋してしまふにちがいない。恋してしまいそうだ。

【所載】万葉集・二〇〇三（旧一九九九）朱羅引 色妙子 数見者 人妻故 吾可恋奴 アカラヒクシキ（イロ）タヘノコヲシバミレバヒトヅマユエニアレコヒヌベシ あからひくいろぐはしこをしばみればひとづまゆゑにあれこひぬべし／人麿集Ⅲ・一三八／綺語抄・一三五／奥儀抄・三五一／和歌色葉・二二

【参考】歌意から見て「七日の夜」にかかわりある歌とは思われない。この一首がなぜここに置かれたのか、不審。

古四 秋上

一四〇 あまの川もみぢをはしにわたせばやたなばたつめのあきをしもまつ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋になれば、天の川が紅葉を橋としてかけ渡すから、（牽牛がそれを渡ってくると思つて）たなばたの織女は、秋の季節をひたすら待つのであるうか。

【語句】〇もみぢをはしにわたせばや 秋の紅葉を橋として天の川にかけ渡すからであるうか。「や」は係りの助詞。第五句の句末にひびいて疑問の意を表わす。〇あきをしもまつ 「しも」は強意の助詞。「まつ」には第三句の「や」を受けて疑問の意が生ずる。

【所載】古今集・秋上・一七五／桐火桶・七五／兼載雑談・三四

〔以上五首担当 斎藤・山下〕

一四一 とをづまとたまくらかへてねたるよはとりのねなくにあげばあくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】遠く離れた妻と逢つて手枕をかわして寝ている夜は、夜明けを告げる鶏が鳴いて、夜が明けるなら明けてしまつてもよい。

【語句】〇とをづま とほづま（遠妻）。遠い所に居る妻。織女星を指すことが多い。〇たまくらかへて 互いに相手の手を枕にして。〇とりのねなくに 夜明けを告げる鶏が鳴くことによつて。「に」は原因、理由を表す格助詞。……によつて、……のために。所載欄の万葉集歌は「とりがねななき」と禁止の形となつてゐる。〇あげばあくとも 同じ動詞を重ねた「……ば……とも」は、どうともなれという放任の気持ちを表す。

【所載】玉葉集・秋上・一四三／万葉集・二〇二五（旧二〇二二）遥窄等 手枕易 寐夜 鶏音莫動 明者雖明 トホヅマトタマクラカヘテネタルヨハトリガネナクナアケバアクトモ とほづまとたまくらかへてねたるよはとりがねななきあげばあくとも／夫木抄・一六六一八／人麿集Ⅲ・一四七／和歌童蒙抄・七八六

一四二 としにありてひとよいもにあふひこぼしもわれにまさりておもふらめやは

【異同】ひとよいもにあふ——一夜いもせにあふ（大）

【現代語訳】一年間逢うことなく過ごして、たった一夜だけ恋しい妻に逢う彦星も、私以上に物思いをするだろうか、これほどではあるまい。

【語句】○としにありて 一年間そのままです。○ひこぼしもわれにまさりて 所載欄の万葉集では、遣新羅使人の一人が故郷に残した妻を思慕する歌であり、故郷に帰れない自分と、彦星の心とを対比させる。彦星に比して自らの恋心を訴えるのは万葉集以来のモチーフ。「彦星の思ひますらむ心より見る我苦し夜のふけゆけば」(万葉集・一五四八(旧一五四四)・湯原王)、「七夕に思ふものからあふことのいつとも知らぬ我ぞわびしき」(貫之集・五七〇)。「おもふらめやは」「らめ」は眼前にない現在を推量する助動詞「らむ」の已然形。「やは」は反語。

【所載】拾遺抄・秋・九三／拾遺集・秋・一四八／万葉集・三六七九(旧三六五七)等之尔安里弓 比等欲伊母尔安布 比故保思母 和礼尔麻佐里弓 於毛布良米也母 トシニアリテヒトヨイモニアフヒコホシモワレニマサリテオモフラメヤモ としにありてひとよいもにあふひこほしもわれにまさりておもふらめやも／人麿集Ⅰ・一七四／人麿集Ⅱ・四二／袋草紙・三一／柿本人麿勘文・四九

古四 秋上

一四三 ちぎりけんころろぞつらきたなばたのとしにひとたびあふはあふかは

おき風

【異同】ナシ

【現代語訳】年に一度と約束したという心こそはつれないものだ。織女が一年に一度だけ逢うというのは、逢うことといえようか。

【語句】○ちぎりけん 「けん」は過去の伝聞。○つらき 「つらし」は薄情でつれない、無情だ。相手から受ける仕打ちをこらえかねるほど痛く感じる意。両度聞書は「一夜の飽かぬ悲しみより契りけん心ぞつらきと言ふなり」と、一夜限りの逢瀬の悲しみより、織女が一夜限りの契りと決めた薄情さに焦点を置いた歌とする。○たなばた 織女。下二句の主語だが、初句の「ちぎりけん」の主体でもある。「年ごとに逢ふとはすれどたなばたの寝る夜の数ぞ少なかりける」(古今集・一七九、古今六帖・一四八)。○としにひとたび 一年にたった一度だけというニュアンス。「二年に七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば夜はふけゆくも」(万葉集・二〇三六(旧二〇三二))、「玉かづら絶えぬものからさ寝らくは年の渡りにただ一夜のみ」(万葉集・二〇八二(旧二〇七八))、「一年に一夜と思へどたなばたはふたりともなき妻にざりける」(貫之集・四一六)など、例歌が多い。○かは 反語。

【所載】古今集・秋上・一七八／新撰万葉集・四六〇／新撰和歌・二〇／新撰朗詠集・二〇〇／興風集Ⅰ・五／興風集Ⅱ・一一／寛平御時后宮歌合(十卷本)・一一七、一六三／俊成三十六人歌合・七九／新時代不同歌合・六八／三十人撰・七七／三十六人撰・一〇七

【参考】作者名「おき風」は所載欄の文献に一致する。

#### 人丸

一四四 おほぞらをかよふわれすらなにゆへにあまのかはらをなづみてぞくる

【異同】ナシ

【現代語訳】広い大空を自在に行き来する私でさえ、いったいどういうわけで天の河原を難儀しながら来たのだろう。

【語句】○われ 彥星の自称。星は空を自在に行き来する。○なにゆへに なにゆゑに。所載欄の万葉集の「ながゆゑに」あるいは「なれゆゑに」(あなた〈織女〉ゆゑに)が元の形と思われるが、本文通り、原因、理由を問う形で訳出した。○あまのかはら 天の川の河原の意であるが、「けふよりは天の河原はあせなんそこひともなくだだ渡りなん」(後撰集・二四一・友則)という用例からみて、河岸だけではなく、河全体を指す場合もあったと思われる。所載欄の万葉集の「天漢道(あまのかはぢ)」の方が「なづみてぞ来る」とよく照応する。○なづみてぞ 「泥みてぞ」。歩行や進行が妨げられて難儀して。行き悩んで。通い路の困難さを訴えるための表現。「巻向の檜原に立てる春霞おぼにし思はばなづみ来めやも」(万葉集・一八一七(旧一八一三))。漢詩文では織女が河を渡るとして詠まれるが、我が国では彥星が河を渡るとする表現が多い(小島憲之『上代日本文学と中国文学』(中) 塙書房、一九六四年)。

【所載】万葉集・二〇〇五(旧二〇〇一) 従蒼天 往来吾等須良 汝故 天漢道 名積而叙来 オホソラニカヨフワレスラナレユエニアマノカハヂヲナヅミテゾクル おほそらゆかよふわれすらながゆゑにあまのかはちをなづみてぞこし／人麿集Ⅲ・一二九／赤人集Ⅰ・二七四／赤人集Ⅱ・一五三

【参考】作者名は「人丸」とあるが、万葉集では作者未詳。

#### そせい

一四五 こよひこむ人にはあはじたなばたのひさしきほどにあえもこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】今夜訪れてくる人には会いますまい。織女の逢瀬の久しさにあやかることになつては大変だから。  
【語句】○ひさしきほど 長い時間。○あえもこそすれ 「あえ」は「肖ゆ」(ヤ行下二段)で、形がそっくり似る、あやかるの意。「是肖皇太后為雄装之負輶(肖、此云阿輶)」(日本書紀・応神天皇。「肖、似也、アユ・アエタリ」(色葉字類抄)。「逢うことはたなばたつめにひとしくてたちぬふわざはあえずぞありける」(後撰集・二二五)。「もこそ」は、将来起こり得る悪い事態を予測し、危惧する意。……するといけない。……すると大変だ。所載欄の古今集の第五句は「待ちもこそすれ」(ただし筋切、元永本、基俊本は「あえもこそすれ」)であるが、古今和歌集打聴は「今の本には待ちもこそすれとあれど、紀氏新撰、六帖にも、あえもこそと有をよしとす」とする。

【所載】古今集・秋上・一八一／新撰和歌・一六／素性集Ⅰ・六／素性集Ⅱ・四

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

「こよひこん人にぞあはん七夕のたえぬ契りにあえんとおもへば」(千五百番歌合・一〇八四)は、同じ語を用いて逆の発想を詠んだもの。

〔以上五首担当 中野〕

一四六 あひみまくあきたらずとしのゝめのあけはてにけりふなでせんかは  
人丸

【異同】あきたらずとも―あきたゝすとも(御・桂・大)

【現代語訳】こうして逢つていたいのは、たとえ満ち足りなく思っている、もう空は明るんでしまった。舟出しようか、いやまだしない。

【語句】○あひみまく 「あひ見る」は、男女が逢い契りを交わす意。「まく」は、推量の助動詞「む」の古い未然形「ま」に、準体助詞「く」が付いたもの。○あきたらずとも 満ち足りなく思っている。他本の「秋立たずとも」では歌意が通らない。所載欄の万葉集に「(あひみらく)あきたらねども」(綺語抄「あきたらねども」)、和歌童蒙抄・袖中抄に「あきたらずとも」とある。○しのゝめの 「しのめ(東雲)」は、「しのめのめのほがらほがらとあけゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」(古今・恋三・六三七)のように、空が白んで明けてゆく

ころで、相愛の男女も別れを告げねばならぬ時。所載欄の万葉集では「いなめのめ」（和歌童蒙抄・袖中抄も同じ）とある。「しのめのめ」「いなめのめ」については、窓がわりの明りとりに篠竹や稲藁等を粗めに縦横に編んだ物を用い、その編目を篠目（しのめのめ）、稲目（いなめのめ）と言ひ、夜の明け方に光がさしこんできて明るなることから、ともに「あけ」にかかる枕詞とする説がある。○ふなでせんかは「舟出す」とは、彦星が別れを告げて天の川を舟で帰ること。「かは」の箇所、所載欄の万葉集に「嬬」とあり、旧訓「いも」新訓「つま」と読み、綺語抄・袖中抄に「いも」、童蒙抄に「つま」とあるように、いずれも織姫に呼びかけたかたちとなつて、より歌意がとおる。また、「む・ん（助動詞）十か（助詞）十は（助詞）」を含む歌を検索すると、他は中世以後の四例のみで、いずれも反語の意であつた。

【所載】万葉集・二〇二六（旧二〇二二）相見久 猷雖不足 稻目 明去来理 舟出為牟嬬 アヒミラクアキダ  
ラネドモイナノメノアケユキニケリフナデセムイモ あひみらくあきだらねどもいなめのめあけさりにけりふな  
でせむつま／綺語抄・一三二／和歌童蒙抄・一四五／袖中抄・七三二／古今秘注抄・五一—

【参考】万葉集に作者名の記載なく、作者名「人丸」は疑わしい。なお、赤人集Ⅱ・一六八、赤人集Ⅲ・一八三「あひ見まくあれどもあかずしのめのめの明けにけらしな舟出せむいも」（赤人集Ⅰ・二八八は小異）は、当該歌によく似る。

一四七 <sup>拾十七 雑秋</sup> わたしもりふねは <sup>はや舟かくせイ</sup> やわたせひととせにふたゝびきますきみならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】渡し守よ、はやく舟をこちらに渡してほしい。一年に二度と来て下さるお方ではないのだから。

【語句】○ふねはやわたせ 「舟」は、彦星が織女に逢うために天の川を渡る舟。底本の傍記異文や所載欄の拾遺集では「はや舟かくせ」とあつて、彦星が帰れないように舟を隠してほしい、の意となる。○ならなくに…ではないのだから、の意。

【所載】拾遺集・雑秋・一〇八五／万葉集・二〇八一（旧二〇七七）渡し 舟早渡世 一年尔 二遍往来 君尔  
有勿久尔 ワタリモリフネハヤワタセヒトトセニフタタビカヨフキミニアラナクニ わたりもりふねはやわたせ  
ひととせにふたたびかよふきみにあらなくに／人麿集Ⅰ・八五／人麿集Ⅱ・四一／赤人集Ⅰ・三四〇／赤人集Ⅱ  
・二二—

【参考】所載欄の拾遺集に人麿という作者名があるが、万葉集に作者名の記載はなく、疑わしい。

古四 秋上

一四八 としごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずですくなくりける みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年七月七日に、逢うには逢うけれども、織女星・彦星の共寝する夜の数はほんとうに少なかったことです。

【語句】○たなばたの 古今集の注釈書にあたると、「たなばた」を織女星とする説、織女星・彦星の両星とする説がある。「たなばた」は、「たなばたつめ」の略として織女とする本来の意味から、より範囲が広まり、二星を意味したり、さらに彦星のみを指したりする。ここは、二星に解した。○ぬるよのかず 共寝する夜の数年に一度の逢瀬なので逢う夜が少ない。

【所載】古今集・秋上・一七九／新撰和歌・二二〇／和漢朗詠集・二二〇／躬恒集Ⅰ・二九、六二／躬恒集Ⅱ・一二〇／躬恒集Ⅲ・一五一、一六五／躬恒集Ⅳ・四五四／寛平御時后宮歌合・一一八／左兵衛佐定文歌合・一二一

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

一四九 あさまだきいでゝひろはんけふのをに心ながさをくらべてしかな いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ早朝、庭に出て七夕飾りの糸を引きわたすであろう、その糸の長さと、私の心の長さとを較べてみたいものです（第二句「いでてひくらん」として現代語訳した）。

【語句】○あさまだき 朝早くに。○いでゝひろはん 『古今和歌六帖標注』に「出てひろはんにてはうたの意きこえず」とあるように、「拾ふ」では意味が通らない。所載欄の伊勢集のように、「いでてひくらん」とありたいところなので、「引くらむ」で現代語訳した。○けふのを 今日（を）の緒（を）。この「緒」は、「糸」とも表現されるが、かなりの太さがあつたらしい。七夕の日には、裁縫の具の針や糸などを供えたが、庭の前栽などに糸を引きかける風習があつた。月次屏風の絵柄に、「七月七日、庭に糸引く女あり」（源順集・二三二詞書）や、「七月七日、女ども庭に出でて、尾花に糸かけたり」（兼盛集・一四八詞書）とあり、庭に出て女性が糸を前栽に引

きかけたとわかる。現実にも、栄花物語・卷三七に、「七月七日、中宮の御前に、前栽に村濃の糸を引きて、色々の玉を貫きたり」などと見える。その行為が朝方になされたらしいのは、「七月七日よめる」の詞書で、「たなばたは朝ひく糸の乱れつとくとや今日の暮れを待たらん」（後拾遺集・秋上・二四〇・小左近）や、詞書「七月七日、七夕の糸引くに」で、「たなばたのくれは心にかけながら思ひ乱るるあさの糸かな」（肥後集・八四）等から窺える。なお、和漢朗詠集「七夕」に、「憶得少年長乞巧 竹竿頭上願糸多 おもひえたりせうねんにながくきつかうすることを ちくかんのとうしやうにぐゑんしおほし 白」（二二二）とあり、少年時代、竹竿に「願糸」をかけて芸の上達を祈ったと見える。○心ながさを 自分が心変わりしないことを、糸の長さにひきかけて表現。

【所載】伊勢集Ⅰ・四三／伊勢集Ⅱ・四五

【参考】伊勢集では屏風歌中の一首で、男の立場から女に贈った歌。

一五〇 秋拾三秋かぜによのふけゆけばあまの川河べのなみのたちゐこそまて つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が吹いて、夜もふけてくると、天の川岸の波が立つように、立ったり座ったり落ち着かずに、あなたの訪れを待ちこがれていることです。

【語句】○河べの 所載欄の拾遺抄・貫之集ⅡⅢに「かはべに」とあり、拾遺集・新撰和歌・家持集Ⅱ・貫之集Ⅰには、「かはせに」とある。○なみのたちゐ 波の「立ち」に、織女が立ったり座ったりする意の「立ち居」（連用形）とを掛けた。同様の詠みぶりの歌として、「天の川岩越す波の立ちゐつつ秋の七日の今日をしぞ待つ」（後撰集・秋上・二四〇）がある。

【所載】拾遺抄・秋・九一／拾遺集・秋・一四三／新撰和歌・一八／家持集Ⅱ・二〇八／貫之集Ⅰ・一三／貫之集Ⅱ・一一／貫之集Ⅲ・二九

【参考】貫之集にあり、作者名「つらゆき」は拾遺集・拾遺抄も同じ。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一五一 あまのがはみだえもせなんかさゝぎのはしもわたさでたゞわたりせん



【異同】ナシ

【現代語訳】天の川は水がなくなつてほしい。そうしたら、鵲の橋を渡すまでもなく川を直接渡つて行こう。

【語句】○あまのがは 銀河。牽牛星と織女星が、七月七日の夜、年に一度だけ、この川を渡つて逢うとされる。○みだえもせなん 「みだえ」は、水がなくなること。「小山田のみだえせしよりあめにいますいはとの神をねがぬ日ぞなき」（好忠集・一四五）。「なん」は他へ・逃え望む助詞。所載欄の貫之集Ⅰでは「水たえせん」。○かささぎのはしもわたさでたぐわたりせん 「かささぎのはし」は、七月七日の夜、牽牛・織女の二星が逢う時に、鵲がその翼を天の川の上に並べて渡すという想像上の橋。その鵲の橋も渡さないで、即ち鵲の橋が渡されるのを待つまでもなく、川にじかに入つて渡ろうということか。所載欄の貫之集Ⅰでは、下句「橋をし知らずただ渡りなん」とあり、和歌童蒙抄も五句は「ただわたりなむ」とある。

【所載】貫之集Ⅰ・五九七／和歌童蒙抄・一四六

【参考】作者名の記載はないが、この歌は貫之集に見える。家持集に、「かささぎの橋つくるよりあまのがは水もひななん川渡りせん」（二〇六）という類歌が見える。

#### とものり

一五二 けふよりはあまのかはらもあせなゝんよどみともなくたぐわたりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】今日からは天の川も浅くなつてしまつてほしい。そうしたら、どこが水の淀みということもなく、まっすぐに渡つてしまおう。

【語句】○あまのかはら 天の川の河原。当該歌では、下句の内容により、実質的には天の川全体を指している。「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふや渡らむ」（古今集・一〇一四・藤原兼輔）。また、所載欄の友則集には「あまのかはなみ」とある。○あせなゝん 浅せなん。浅くなつてほしい。水が干上がつてほしい。「なん」は一五一番歌参照。「中にゆくよしの河はあせなんいもせの山をこえてみるべく」（篁集・一）。○よどみともなくたぐわたりなむ どこが深い淀みかと意を払い、渡りやすい浅瀬を探して回り道をするようなことをしないで、まっすぐに渡つてしまおう。「よどみともなく」は、所載欄の後撰集では「そこひとまなく」、家持集Ⅰ・友則集・奥儀抄・和歌色葉では「そよみともなく」、家持集Ⅱでは「ふちせともなく」と見え

る。

【所載】後撰集・秋上・二四一／家持集Ⅰ・一六一／家持集Ⅱ・二〇四／友則集・一三／奥儀抄・二八五／和歌色葉・一一、三一五

【参考】作者名は「どものり」とあり、家持集にもあるが、友則集に見え、後撰集も作者を「紀友則」とする。

一五三 ひととせにひとよばかりをたなばたのいつとあふとかなをばたつらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一夜だけの逢瀬であるものを、織女はいつたいいつ恋人に逢うというので浮き名が立つのだろうか。

【語句】○ひとよばかりを 一夜しか逢えないというのに、の意。○たなばた ここでは、織女のこと。

【所載】ナシ

【参考】作者名は「つらゆき」とあるが、当該歌は貫之集に見えない。

一五四 ひととせにひとよとおもへどたなばたのあひみる秋のかぎりなきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一夜の逢瀬だとは思いうけれど、織女が牽牛に逢う秋は限りなく続くことよ。

【語句】○ひととせにひとよとおもへど 織女星が牽牛星に逢うのは一年にたった一夜だけだと思いうけれど。「一とせに一夜とおもへど七夕はふたりともなきつまにざりける」（貫之集・四一六）。○たなばた 一五三番歌参照。

【所載】拾遺抄・秋・九五／拾遺集・秋・一五〇／和漢朗詠集・二一九／貫之集Ⅰ・三九五

【参考】作者名はないが、所載欄の拾遺抄には「右衛門督源清蔭家屏風歌 貫之」、拾遺集には「右衛門督源清蔭家の屏風に つらゆき」と見え、和漢朗詠集も「貫之」とする。貫之集Ⅰにも見えて同集によると、天慶二（九三九）年閏七月、右衛門督源清蔭の爲の屏風歌中の一首。

一五五 たなばたはいまやわかれんあまのがは川ぎりたちてちどりなくなり

【異同】ナシ

【現代語訳】織女は今牽牛と別れるところであろうか。天の川に川霧が立つて千鳥が鳴く声が聞こえる。

【語句】○いまやわかれん いま、まさに別れるところであろうか。○川ぎり 川霧や千鳥は、「夕されば佐保の川原の河ぎりに友まどはせる千鳥なくなり」（拾遺集・二三八・紀友則）など、佐保川の景物として知られるが、天の川の川霧の詠としては、「ひさかたのあまの川霧たつときはたなばたつめの渡りなるらん」（躬恒集・二七一）などの例がある。

【所載】新古今集・秋上・三二七／貫之集Ⅰ・二五八

【参考】作者名はないが、新古今集に「中納言兼輔家屏風に 貫之」として見える。貫之集Ⅰにも「京極権中納言の屏風のれうの歌廿首」中の一首としてある。

〔以上五首担当 長戸〕

一五六 ゆふづくよひさしからぬをあまの川はやくたなばたこぎわたりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月は長くないので、天の川を早く七夕は漕いでいることだろうよ。

【語句】○ゆふづくよ 夕方の月。夜には隠れてしまう。「夕月夜影立ち寄り合ひ天の川漕ぐ舟人を見るがともしさ」（万葉集・三六八〇〈旧三六五八〉）。○ひさしからぬを 「を」は順接。……から。○たなばた 牽牛、織女二星の一方を指す場合も、両方を指す場合もある。ここは前者。また、舟を漕いで天の川を渡るのには一般には牽牛星だが、織女星の場合もないわけではない。○こぎわたりなむ 「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形に推量の助動詞「む」が付いたもの。ここでは強意の推量。七夕の訪れを待ち望む思いを表わす。所載欄の貫之集では末句「こぎわたらん」とあり、七夕へ直接呼びかける形をとる。

【所載】貫之集Ⅰ・四三二

【参考】作者については一五八番歌参照。

一五七 つもりぬるとしおほけれどあまの川きみがわたれるかずぞすくなき

【異同】ナシ

【現代語訳】積み重なった年数は多いけれども、天の川をあなたが渡ってきた回数は少ないことだ。

【語句】○つもりぬるとし 積み重なった年月。「はるごとにみるとはすれどさくら花あかでもとしのつもりぬるかな」（後拾遺集・九五）。ここでは付き合いを始めてからの年月。

【所載】貫之集Ⅰ・四三三

【参考】一五六・一五七の二首は、貫之集では詞書「七夕」として連続している。作者については一五八番歌参照。

一五八 あまの川よぶかくきみはわたるともひとしれずとおもはざらなむ

已上貫之

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川を夜おそくにあなたは渡っているけれども、人知れずこっそりと渡っているとは思わないで下さいよ。

【語句】○おもはざらなむ 思わないでください。「なむ」は他への願望を表わす終助詞。ここでは、地上から多くの人が七夕の渡っている空を見ていることをいう。

【所載】新千載集・秋上・三三三／家持集Ⅰ・一七一／家持集Ⅱ・二二五／貫之集Ⅰ・一〇八

【参考】新千載集は詞書を「題不知」、作者名を「中納言家持」としており、採歌源が家持集であると知れる。貫之集の詞書には「七月ひこぼし見る所」とある。また「已上貫之」とあるが、一五四から一五八まではいずれも貫之集に見られる。

古四 秋上

一五九 あまの川あさせしら波たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける

とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川の浅瀬に立つ白波をたどりながら渡ろうとしたが、まだ渡りきらないというのに、夜が明けてしまったよ。

【語句】○あさせしらなみ 浅瀬に立つ白波。「天河あさせしらなみたかければただわたりなんまてばすべなし」(人丸集・九二)。○わたりはてねば 「ば」は打消の語に続き、ここでは逆接の確定条件を表わす。……ないのに。「卯の花もいまだ咲かねばほととぎす佐保の山辺に来鳴きとよもす」(万葉集・一四八一(旧一四七七))。

【所載】古今集・秋上・一七七／友則集・一七／兼輔集Ⅰ・三九／兼輔集Ⅱ・一五六／兼輔集Ⅳ・三五／兼輔集Ⅴ・五二／秀歌大体・四九／俊頼髓脳・三四一／八雲御抄・六一

【参考】作者記載「とものり」は古今集と一致する。古今集の詞書には「寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たてまつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる」とある。兼輔集にも「七月七日、哥よみける所にいきて」(Ⅰ三九、Ⅱ一五六)と伝えるものがあり、兼輔が同席した可能性を物語る。なお家持集・三〇四に「あまのがはあさせしらなみかきたどりわたりはてねばあけぞしにける」という、三句目のみ異なる類歌がある。

一六〇 <sup>同</sup> ひさかたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなばかちかくしてよ

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川の渡し守よ、あの人がちちらに渡つて来たならば、(もう帰れないように)梶を隠しておくれよ。

【語句】○ひさかたの 「あま」にかかる枕詞。○かち 梶。舟を漕ぐ道具。「天の川梶の音聞こゆ彦星とたなばたつめとこよひ逢ふらしも」(万葉集・二〇三三(旧二〇二九))。○かくしてよ 「てよ」は完了の助動詞「つ」の命令形。渡し守への呼びかけ。

【所載】古今集・秋上・一七四／新撰髓脳・一六／綺語抄・七／奥儀抄・七六

〔以上五首担当 青木〕

一六一 なぬかびのはやくれなゝんひさかたのあまの川ぎりたちわたるべく <sup>みつね</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】今日の七夕の日が早く暮れてしまつてほしいものだ。天の川の川霧が立ち渡ることく、早く天の川

を立ち渡って行けるように。

【語句】○なぬかび 七月七日、七夕の日をいう。○はやくれなゝん 早く暮れてしまつてほしい。○ひさかたのあまの川ぎり 「たちわたる」を導く序。「ひさかたの」は「あま」の枕詞。○たちわたるべく 牽牛星が天の川を渡り、織女星のもとに通って行けるように。

【所載】風雅集・秋上・四六〇／躬恒集Ⅱ・六／躬恒集Ⅴ・三七／夫木抄・三九九四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一六二 拾三秋 ひこぼしのつまゝつよひの秋風にわれさへあやなひとぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】牽牛星が妻の織女星を待つ七夕の宵の、肌寒く吹く秋風に、私まで、なんともわけのわからないことだ、人が恋しくなってくる。

【語句】○つまゝつよひの 「つま」はここでは織女星を指す。一般に和歌では織女星が牽牛星の訪れを待つ例が多いが、その逆もまったくないわけではない。○あやな 筋が通らない、理屈が立たない意の形容詞「あやなし」の語幹。「われさへひとぞこひしき」にはさみこまれた形で、間投詞的な表現。なんと筋の通らないこと。

【所載】拾遺抄・秋・九〇／拾遺集・秋・一四二／躬恒集Ⅱ・二〇八／躬恒集Ⅲ・七／躬恒集Ⅳ・三五四／躬恒集Ⅴ・三八

【参考】所載欄に示す文献はすべて作者を躬恒とする。なお拾遺集・拾遺抄・躬恒集Ⅱによれば、この歌は「延喜御時屏風歌」。

一六三 ひこぼしのおもひますらんことよりもみるわれくるしよのふけゆけば  
ゆげのわう ゆはらの大きみ或本

【異同】ナシ

【現代語訳】牽牛星がもの思いを募らせているであろう、そのことよりも、空を見上げている私の方が切ないことだ。夜が更けていくと。

【語句】○おもひますらん もの思いが増してゆくであろう。稀にしか逢えないつらさ、嘆きをいう。

【所載】拾遺抄・秋・九二／拾遺集・秋・一四七／万葉集・一五四八（旧一五四四）牽牛之 念座良武 従情  
見吾辛苦 夜之更降去者 ヒコホシノオモヒマスラムココロユモミルワレクルシヨノフケユケバ ひこほしのお  
もひますらむところよりみるわれくるしよのふけゆけば

【参考】所載欄に示す文献はすべて作者を湯原王とする。湯原王は志貴皇子の子。第四期の歌人。なお「ひこぼし」は万葉集では「比故保思」と記されている箇所があり、「ひこほし」と清音。

あした

一六四 <sup>拾十七 雑秋</sup> あさとあけてながめやすらந்தなばたはあかぬわかれのそらをこひつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の戸を開けて、もの思いに耽っているだろうか、織女星は。飽き足りない思いで別れた牽牛星の、立ち去った後の空を恋い慕い恋い慕いして。

【語句】◎あした 本来は、朝、の意。ここは七月七日の翌朝。逢瀬の別れはつらいものだが、一年に一度しか逢えない牽牛・織女の別れは特につらいものとして詠まれる。○あさと 朝起きて開ける戸。万葉以来の歌語。

「朝戸あけてもの思ふ時に白露の置ける秋萩見えつもとな」（万葉集・一五八三（旧一五七九））。○あかぬわかれ 一年に一度だけの逢瀬なので、もっと逢っていたいという、満ち足りない思いでの別れ。

【所載】後撰集・秋上・二四九／拾遺集・雑秋・一〇八四／貫之集Ⅰ・八一二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一六五 <sup>古四 秋上</sup> けふよりはいまこんとしのきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき <sup>みつね</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一度の逢瀬が終わってしまった今日からは、また次にやってくる昨日、七月七日の日を、いつかいつかとばかり待ちつづけるのだろう。

【語句】○けふよりは 古今集の詞書に「八日の日よめる」とあり、七夕の翌日である七月八日を「けふ」と言

っている。○いまこんとしのきのふ　これからやってくる年の昨日、すなわち来年の七月七日。○いつしかとのみ　いつかいつかとばかり、早く。待ち望む意を表す。○まちわたるべき　ずっと待ちつづけるのだろう。「けふよりは」を受ける。

【所載】古今集・秋上・一八三／忠岑集Ⅱ・五七／忠岑集Ⅲ・九二／忠岑集Ⅳ・二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　犬養廉・久保木〕

一六六　たなばたのかへるあしたのあまのがはふねもかよはぬなみもたゝなむ  
かねすけ

【異同】ナシ

【現代語訳】たなばたが帰る朝の天の川は、船も通えないほど高い波が立てばよいのに。

【語句】○たなばた　織女。中国では織女が天の川を渡って会いに来ることになっている。「ひさかたのあまのかはきりたつときは織女つめのわたるなるらん」（躬恒集Ⅰ・三六一）。和歌では日本の実生活通り男性が通って来る形で詠まれることが多いので、この「たなばた」は牽牛をさすとする説もある。○なみもたゝなむ　波がたてばよいのに。「なむ」は願望の意を表す終助詞。

【所載】後撰集・秋上・二四八／兼輔集Ⅲ・三〇／兼輔集Ⅳ・四二／和歌一字抄・一〇五三／袋草紙・七〇八

【参考】作者名「かねすけ」は所載欄の文献に一致する。

## 八月

とものり

一六七　秋かぜにはつかりがねぞひゞくなるたがたまづさをかけてきつらむ  
きこゆい

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風に初雁の音が響いてくる。誰からの手紙を運んできたのだろうか。

【語句】◎八月　葉月。三秋のうちの仲秋。歌語として用いられるようになったのは平安後期か。用例はあまり多くない。○ひゞくなる　古今集以下の所載欄の他文献では、傍書の「きこゆなる」とするものが多い。○たま



づさ 手紙。漢の蘇武の雁信の故事（漢書・蘇武伝）は、古今集の三〇番「春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし」にもひかれている。

【所載】古今集・秋上・二〇七／和漢朗詠集・三二四／友則集・二二／寛平御時后宮歌合・七八／新撰万葉集・九一／三十人撰・七〇／三十六人撰・五八／俊頼髓脳・二七五／綺語抄・六一八、六二〇／和歌童蒙抄・七四四／奥儀抄・四六三／宝物集・二六二

【参考】作者名「どものり」は所載欄の文献に一致する。

一六八 しらつゆはうへしなりけるみづとりのあをばのやまのいろづくみれば

【異同】うへしなりける―うつし也ける（大）

【現代語訳】白露は、移し染めの染料だったのだな。青葉の山が色付くのを見ると。「第二句は傍書により「うつしなりける」として解した。」

【語句】○しらつゆ 白露。万葉集では「秋の露」。○うへし 所載欄の文献はすべて傍書や大久保本と同じ「うつし」。「うへし」では意が通らないので、傍書の「うつし」で解釈する。「うつし」は、草木の花の汁などを含ませた紙を生地の上に置いて染める「移し染め」の染料。「移し紙」「移し花」ともいう。○みづとりの 鴨の羽の色が青いところから「青羽」と同音の「青葉」にかかる枕詞。

【所載】古今六帖「山」九二一／万葉集・一五四七（旧一五四三）秋露者 移尔有家里 水鳥乃 青羽乃山能色付見者 アキノツユハウツシナリケリミヅトリノアヲバノヤマノイロヅクミレバ あきのつゆはうつしにありけりみづとりのあをばのやまのいろづくみれば／夫木抄・八六八九／和歌童蒙抄・一七六

【参考】作者名の記述はないが、所載欄にあげた古今六帖九二一番や万葉集、夫木抄では三原王の作とする。なお古今六帖一四六八番歌の下句は当該歌と同じである。

みつね

一六九 ひとしれぬねをやなくらんあきはぎのいろづくまでにしかのこゑせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】人に知られずに声を出して鳴いているのだろうか。秋萩が色付くまで鹿の声がしないことだ。

【語句】○ねをやなくらん 声を出して鳴いているのだろうか。「音をなく」は「声を出してなく」意。「鳴く」に「泣く」の意を込める。○あきはぎ 歌語。萩のこと。萩は鹿の妻で、鹿はその花妻を求めて鳴くとされる。「我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿」(万葉集・一五四五(旧一五四一))。

【所載】 躬恒集Ⅰ・六三／躬恒集Ⅱ・一三四／躬恒集Ⅲ・一一八、一六六／躬恒集Ⅳ・四六七／躬恒集Ⅴ・五／左兵衛佐定文朝臣歌合・一四／袋草紙・六五三

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

## 十五夜

つらゆき

一七〇 ひさかたのあまつそらよりかげみればよくところなき秋のよの月

【異同】 ナシ

【現代語訳】 天空を渡る月の光を見ると、避ける所がなく一面に照らす秋の夜の月であるよ。

【語句】 ◎十五夜 八月十五夜とも。中国の風習が渡来し、観月の宴を催し詩歌を詠じた。和歌が詠まれたのは醍醐朝以降か。○ひさかたの 天に關係のある「天(あめ、あま)」「雨」「月」「雲」「空」「光」「夜」などにかかる枕詞。○あまつそらより 天空を通りすぎて行く。「より」は経過する場所を示す助詞。○かげ 日・月などの光。○よくところなき (月が) 余す所もなく照らしている。「よく」は避ける意。

【所載】 貫之集Ⅰ・五一九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

一七一 なにはがたしほみちくれば山のはにいづる月さへみちにけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 難波潟に潮が満ちてくると、山の端に出る月までもが満月になったことだよ。

【語句】 ○なにはがた 摂津国淀川の河口あたりの海の古称。○しほみちくれば 満潮になってくれば。

【所載】 夫木抄・五一六二／貫之集Ⅰ・二三二／和歌童蒙抄・一四八／八雲御抄・一八〇

一七二 月ごとにあふ<sup>なれどもイ</sup>なけれどよをへつゝこよひはまさるかげなかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】毎月、十五夜の月にはめぐりあうものだが、幾年過<sup>こ</sup>しても今宵は、これに勝る月の姿はないことだ<sup>な</sup>あ。

【語句】○あふ<sup>なれどもイ</sup>なけれど このままでは全体の歌意が通じない。現代語訳は傍書「なれども」に拠って解した。○よをへつゝ 何年経つても。○かげ 光によってみえるものの姿。こゝは月の姿。

【所載】貫之集Ⅰ・四七七

【参考】「月ごとに見る月なれどこのつきの今宵の月になる月ぞなき」（続古今集・一五九五／万代集・九九五／村上御集・一三八）という類想の歌がある。

一七三 もちづきのこまよりをそくい<sup>そせいほうし</sup>でぬればたどる／＼ぞやまはこえつる

【異同】ナシ

【現代語訳】望の月（満月）がわたしの馬の出立よりも遅く出たので、暗い道をたどりたどりしながら、山越えたことだ。

【語句】○もちづきのこま 毎年八月十五日の駒牽の行事に、信濃の国望月の牧から献上された馬。「望月（陰暦十五日の月）」に信濃の御牧の名「望月」を掛ける。「逢坂の関の清水に影見えて今やひくらん望月のこま」（拾遺集・一七〇）。○をそく おそく。遅く。○たどる／＼ 歩みがおぼつかなく、はかどらないさま。

【所載】後撰集・雑二・一一四四／拾遺集・雜上・四三八／素性集Ⅰ・二七／素性集Ⅱ・五一／素性集Ⅲ・二三

【参考】作者名「そせいほうし」は所載欄の文献に一致する。

一七四 こゝに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとはをそしとやまつ  
或本みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】ここでもまた私がいくら見ても見飽きないこの月を、あの山の端の向うの遠くの里では、(月の出が)遅い、と待っているのだろうか。

【語句】○あかぬ 満ち足りない。満足できない。○をち 遠く隔たった場所。遠方。○をそし おそし。遅し。

【所載】元輔集Ⅰ・二二〇

【参考】「或本みつね」とあるが、他文献でそれを確認することはできない。

一七五 いづこにかこよひの月のみえざらむあかぬは人のこゝろなりけり  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】どこに今宵の月が見えない所があるか。見えない所はないのに、その月をいくら見ても見あきないのが、人の心というもののなのだなあ。

【語句】○いづこにか いっただいどこに。この場合は反語の表現。第三句「みえざらむ」に対応する。○あかぬ 満ち足りない。満足できない。

【所載】拾遺抄・秋・一一七／拾遺集・秋・一七六／躬恒集Ⅲ・八／躬恒集Ⅳ・三五五／躬恒集Ⅴ・三九

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

こまひき

一七六 あふさかのせきのしみづにかげみえていまやひくらんもち月のこま  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関の清水に影を映して、今まさに牽いているであろう、信濃望月の馬を。

【語句】◎こまひき 駒牽。馬を八月中旬に朝廷に献じ、それを天皇が御覧になる行事をいう。信濃国の駒牽は望月が二十三日、それ以外は十五日(村上朝以後は十六日)。なお駒迎は逢坂の関まで馬寮の官人が迎えに行く

ことをいう。駒牽・駒迎とも月次屏風に詠まれる題。○かげ 五句の望月から、月影と馬の影の両義を持たせる。鹿毛を掛けるとする説(片桐洋一『歌枕歌ことば辞典』笠間書院、一九九九年)もある。なお、和歌文学大系『貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』(明治書院、一九九七年)は月影から馬の影に転じたとして「昼の歌」と明記している。また新日本古典文学大系『拾遺和歌集』では、「満月の影が映る逢坂の関の清水に、姿を見せて」と夜の歌のように解釈している。○望月 馬の産地である信濃国望月に、八月十五夜の望月をかける。ここでは望月の駒牽は二十三日なので、実際に満月の中を行くのではないと考えた。

【所載】拾遺抄・秋・一一四／拾遺集・秋・一七〇／金玉集・二四／貫之集Ⅰ・一四／三十人撰・一四／三十六人撰・二〇／深窓秘抄・三八／和歌九品・四／童蒙抄・一五〇／奥儀抄・九〇／古来風体抄・三五八／西行談抄・四一／愚秘抄・一三／井蛙抄・一〇三／十訓抄・八〇／古今著聞集・一四八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一七七 みやこまでなつてひくはをがさはらみづのみまきのこまにやあるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】都まで手なづけてひいてきた小笠原の馬は、美豆の御牧の馬なのであろうか。

【語句】○なづけて 手なづけて。○をがさはら 小笠原は甲斐国の御牧の名。「をがさはらへみのみまきにある馬もとればぞなつくこのわがそでとれ」(古今六帖・一四三二)の例のように荒馬で有名。なお「へみのみまき」ではなく、ここでは「みづのみまき」とある。理由は不明。○みづのみまき 美豆御牧。歌枕名寄では甲斐国とするが、実際は山城国の歌枕(京都市伏見区)。勅撰集では「さみだれはみづのみまきのまこもぐさかりほすひまもあらじとぞ思ふ」(後拾遺集・二〇六・相模)が初出。私家集では、兼盛集・重之集・惠慶集などに見られる。

【所載】貫之集Ⅰ・二九八／夫木抄・雑四・一〇一一五

一七八 もちづきのこまひきこゆるやまみればおぼつかなくもあらずぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】望月の駒を牽いて越える山を見れば、満月の光で、はつきりしないところなどないようだ。

【語句】○望月 一七六番歌参照。○あらずぞありける 「よぶこ鳥いくこゑなきぬ山びこのこたふばかりはあらずぞ有りける」(小馬命婦集・三七)。

【所載】ナシ

【参考】伊勢集Ⅱ・五〇〇に、「もち月の駒引わたす影みればおぼつかなくもみえずぞ有ける」がある。

一七九 あふさかにひくらんこまをあきぐりのたちのかとこそとはまほしけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂で牽いているであろう駒を秋霧のたつという立野のもののかと問うてみたいものだ。

【語句】○たちの 立野。武蔵国都筑郡(現在の横浜市都筑区付近)の御牧。延喜式に立野牧の名が見える。「秋ぎりのたちの駒をひく時は心にのりて君ぞこひしき」(後撰集・三六七・藤原忠房)。

【所載】ナシ

### 藤原たかとを

一八〇 あふさかのせきのいはかどふみならしやまたちいづるきりはらのこま

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関の、ごつごつした岩を音を立てて踏みしめて、逢坂山を、霧の立つ中、出立する桐原の駒よ。

【語句】○いはかど 岩の突き出した所。岩かどは、「岩門(堅固な門の意)」とも考えられるが、「踏みならし」との繋がりから考え、岩の突き出したところ、の意と取る。逢坂は岩間の清水を詠むことも多い。○ふみならし

「踏み慣らし。踏み鳴らしとも」(新日本古典文学大系『拾遺集』脚注)とある。この両方の意を含んでいると見てよいであろう。○たちいづる 出立するの意味に、第五句「きりはらのこま」の霧が立つ、を導く語。○きりはら 桐原の牧。信濃国。現在の長野市桐原とする説、松本市入山辺(東桐原・西桐原)とする説がある。「霧」を掛ける。

【所載】拾遺抄・一一三／拾遺集・秋・一六九／高遠集・四／金玉集・二六／玄玄集・三九／和歌童蒙抄・一〇四九／西行上人談抄・四二／後十五番歌合・二八／後六々撰・一一一／古来風体抄・三五七

【参考】作者名「藤原たかとを」は所載欄の文献に一致する。なお、古今六帖は主として後撰集時代の歌人の詠作までを収めるが、藤原高遠は拾遺集時代の歌人である。しかし、拾遺抄・拾遺集に依れば高遠が「少将」の折（安和二年（九六九）〜天延四年（九七六））の詠となる。後十五番歌合に取り上げられる名歌であるので、早くから著名であったか。

〔以上五首担当 杉本〕

一八一 なにせんにいそぎゝつらんあふさかのせきあけてこそこまもひきけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】どうしてこんなにいそいでやってきたのだろう。逢坂の関は開けてこそ東路からの駒も牽くことができるのに。

【語句】○なにせんに どうして……なのか……しなくてもいいのに。「なにせんにいのち継ぎけむわぎもここにひめさきにも死なましものを」（万葉集・二三八一（旧二三七七））。○いそぎゝつらん 急いできたのか。急いだことを後悔する言葉だが、所載欄の順集には「よはにきつらん」とあり、その本文であると夜の間にやってきたことを後悔する意となる。○あふさかのせき 逢坂関。既出七二番。○あけてこそ 関が開いてこそ。順集の本文であると夜明けの「明け」がかけられたことになる。「あけてこそ……已然形」の例は「……するの夜があけてからこそできる」の意。その例は「ゆふづくよおほかなきをたまくしげふたみのうらはあけてこそめ」（古今集・四一七）。

【所載】順集・一三七

【参考】「なににわれよはにきつらん」という初・二句で順集にはある。

或本忠房

一八二 秋ぎりのたちのゝこまをひくときはこゝろにのりて人ぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧のたつ中、立野の駒を牽く時、（本来はいらっしゃるはずの）あなたのことがこころにかかり、（いらっしゃらなくて）とても残念です。

【語句】○たちのこま 立野の駒。武蔵国の立野の御牧の馬。立野の「たち」に、秋霧が生じるという意の「たち」をかける。「延喜式卷四十八」によれば、武蔵国からは年に五十匹、そのうち立野牧は二十四の馬を献上したという。「みちのくにありたのやまにあきぎりのたちののこまもちかづきぬべし」（好忠集Ⅰ・二三七）。○こゝろにのりて 心を占めて。

【所載】後撰集・秋下・三六七

【参考】後撰集には末句を「君ぞ恋しき」とする。また、詠歌事情の詳細な詞書があり、現代語訳はその事情を踏まえて訳した。

兼輔朝臣左近少将に侍ける時、むさしの御むまむかへにまかりたつ日、にはかにさはることありて、かはりにおなじつかさの少将にてむかへにまかりて、あふさかより隨身をかへしていひおくり侍ける

藤原忠房朝臣

古今六帖の作者注記「或本忠房」もこれを指すか。

## なが月

これのり

一八三 さほ山のはゝそのいろはうすけれどあきはふかくもなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山の柞の葉の色は薄く、まだ深くはないが（九月ともなれば）秋は深くなったことよ。

【語句】◎なが月 長月。旧暦の九月。夜の長い月、の意。秋は七月・八月・九月の三か月であったから、現在とちがい、秋の終わりの頃。紅葉をはじめ周囲の変化は季節の深まりを示す。○うすけれど 紅葉はまだ十分に染まらない。下の「ふかく」と対比させる。

【所載】古今六帖「紅葉」四〇九四／古今集・秋下・二六七／是則集・一六／陽成院親王姫君達歌合・一五／三十人撰・九五／秀歌大体・七七

【参考】作者名「これのり」は所載欄の文献に一致する。

一八四 月をみぬつきはなけれどながつきのみじかくもあるかこよひばかりは



【異同】ナシ

【現代語訳】空の月を見ない月はない、月はいつも眺めているが、(長い夜の)長月も短かく感じられることよ、この美しい満月の今宵ばかりは。

【語句】○ながつき 長月。陰暦九月。夜が長いことからその名がつく。長いはずの一夜が短く感じられるのは美しい月を眺めて時のたつのも忘れるから。

【所載】ナシ

一八五 なが月のしぐれの雨にぬれとをりかすがの山はいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】長月の時雨の雨に打たれ、春日の山はこれまでの色を変えはじめたことだ。

【語句】○ぬれとをり ぬれとほり。濡れ通り、すっかりぬれて。

【所載】万葉集・二一八四(旧二一八〇)九月乃 鍾礼乃雨丹 沽通 春日山者 色付丹来 ナガツキノシグレ  
ノアメニヌレトホリカスガノヤマハイロヅキニケリ ながつきのしぐれのあめにぬれとほりかすがのやまはいろづきにけり／家持集Ⅰ・一三三／家持集Ⅱ・一三三／和歌童蒙抄・五九

〔以上五首担当 平野〕

一八六 ながつきのしぐれの雨にやまきりてけふきわかれん<sup>たイ</sup>かれみばかやまん

【異同】ナシ

【現代語訳】九月の時雨の雨で山は霧が立ちこめたようになり、今日来て別れることになるのだろう、誰を見たらかが晴れるのだろうか。

【語句】○きりて 霧が立って。「霧る」は霧が立つ。

○けふきわかれん 意をとりにくいが、「今日来て別れるのだろう」の意とみる。所載欄の万葉集の第三句「烟寸吾胸」を「ケフキワカムネ」とした西本願寺本の訓にそれに近似した訓読をもとに、「けふきわかれん」とした可能性はある。○かれみばかやまん 未詳。傍記の「た」をとり、「たれみばかやまん」、誰を見たら心が晴れるのだろうかの意とみるが、所載欄の万葉集において、長月の時雨の雨で、山が霧が立ったようにけぶり、それが我が胸の鬱屈した思いの比喩とする方が、一首全体の意味

が通る。

【所載】万葉集・二二六七（旧二二六三）九月 四具礼乃雨之 山霧 烟寸吾胸 誰乎見者将息 ナガツキノシ  
グレノアメノヤマギリニケブキワガムネタレヲミバヤマム ながつきのしぐれのあめのやまぎりのいぶせきあ  
がむねたをみばやまむ／人麿集Ⅲ・二六〇／家持集Ⅰ・二九〇／家持集Ⅱ・二八九

九日

一八七 ながつきのこゝぬかごとにもゝしきのやそうぢびとのわかゆてふきく

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年九月九日の重陽の節供ごとに、宮中に仕える多くの官人たちが、若返るというふうに関く、菊の花です。

【語句】◎九日 陰曆九月九日の節供、重陽節。小高い丘に登って遠望しながら遊宴したり、不老長寿の仙薬である菊の花びらを酒杯に浮かべて飲むという中国の風習が我が国に伝わったもの。天武天皇十四年（六八五）に始まり、嵯峨天皇の頃から年中行事として定着した。特に我が国には、八日の夜、菊花に綿をかぶせ、翌九日の朝、夜露と香のしみ込んだ綿で顔を拭って長寿を祈る被綿（きせわた）の習慣がある。○もゝしきの 枕詞「もしきの（多くの石や木で造り築かれている）」がかかる「大宮」から意味が転じ、宮中、皇居の意。○やそうぢびと 八十氏人。多くの氏族の人々。大勢の人々。九月九日、百敷、八十氏人と数字が連続して織り込まれている。○わかゆ 若くなる。若返る。○きく「聞く」に「菊」を掛ける。

【所載】和歌童蒙抄・一五一

ほうわう

一八八 ながつきの九日ごとにつむきくのはなもかひなくおいにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年九月九日の節供ごとに摘む菊の花にあやかすることもできず、老いてしまったことだなあ。

【語句】○ながつきの九日 一八七番歌参照。○かひなく 効果がなく。効き目がなく。

【所載】拾遺抄・秋・一二三／拾遺集・秋・一八五／新撰朗詠集・二五〇／躬恒集Ⅰ・二六一／躬恒集Ⅱ・二二

○／躬恒集Ⅲ・二八五

【参考】作者名「ほうわう」（宇多法皇を指すか）は、所載欄の文献では凡河内躬恒。

一八九 かぎりなくきみがよはひをのばへつゝなだゝるやどのつゆとならん  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】限りなくご主人様の寿命を延ばしながら、名高いお邸の菊の露となつて欲しいものです。

【語句】○のばへ のばふ（延ばふ）の連用形。長くする。延ばす。○なだゝる 「名立たり（名高い、評判の高い。）」の連体形。連体形として用いられる場合が多い。○つゆ 菊の露。不老長寿の効能があるとされた。一八七番歌及び参考欄参照。○なん あつらえ望む意。終助詞。菊の露に対して人に対するように詠みかけた形とみる。

【所載】後撰集・秋下・三九四／伊勢集Ⅰ・四七〇／伊勢集Ⅱ・四五三／伊勢集Ⅲ・三八三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集、後撰集では初句「数知らず」。伊勢集Ⅰ（西本願寺本）の詞書には「九月八日に隣より、菊に綿おほひにおこせたりける、明日に折りてやるとて」とあり、隣家から伊勢の家の菊で被綿（きせわた）を作つて欲しいとの依頼があり、翌朝、被綿をかぶせたまま菊の花を折つて届けさせた時に添えた歌である。伊勢集Ⅱ、後撰集では返歌「露だにも名だたる宿の菊ならば花のあるじや幾世なるらん」の作者を藤原雅正とする。

一九〇 いのりつゝなをなが月のきくの花いづれのあきかうへて見ざらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたの御寿命がなお一層長かれと祈りつつ、どの秋に長月の菊の花を植えて愛でないことなどあるうか。

【語句】○なをなが月の なほ長月の。「長月（ながつき）」の「なが」は、なお長かれの意と長月を掛ける。○いづれのあきかうへて見ざらん いづれの秋か植ゑて見ざらん。どの秋に植えてみないことがあるうか。「か」

は反語で、いつも菊を植えて賞美する意。

【所載】新古今集・賀・七一八／貫之集Ⅰ・三九七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では天慶二年閏七月右衛門督殿の屏風歌。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

一九一 もゝとせをひとにとゞむるたまなればあだにやはみるきくのうゑのつゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】百年という長寿を人にとどめておく玉であるから、変わりやすいものとしてかりそめに見過ぐすことができれば、菊の上の露を。

【語句】○もゝとせ「ももとせ」は、百年、また多くの年。田島智子『屏風歌の研究』（和泉書院、二〇〇七年）は、「ももとせ」が貫之によつて用いられた表現とする。○とゞむる ひきとめる。おさえて行かせない。「千年をしとどむべければ白玉をぬけるとぞ見る菊の白露」（貫之集・四一八）。○たまなれば 玉であるので。「玉」は露の見立て。菊の露は玉に見立てられる。「今日までに我を思へば菊の上露は千歳の玉にざりける」（貫之集・三二二）、「緒をよりて貫くよしもがな朝ごとに菊の上なる露の白玉」（貫之集・三九〇）など。所載欄の貫之集では「花なれど」（陽明文庫本「花なれば」）となつており、菊の花自体にも長寿の薬効があるとされる。一九二番歌・一九四番歌参照。○あだにやはみる 「あだ」は、「かりそめ」の意に「うつろいやすいこと」の意を掛ける。本来はうつろいやすい露が、菊の上に置くとうつろわぬ長寿をもたらす特別な力を持つとするのである。「やは」は反語。類歌「露とてもあだにやは見る長月の菊は千歳をすぐすと思へば」（新後拾遺集・四三二・貫之）。

【所載】貫之集Ⅰ・五一〇

【参考】作者名はないが、貫之集に入集する。

菊の露を長寿と結びつけるのは「風俗通曰南陽酈県有甘谷、谷水甘美、云其山上大有菊、水從山上流下、得其滋液、谷中有三十余家、不復穿井、悉飲此水、上寿百二、三十、中百余、下七、八十者」（風俗通）に曰く、南陽の酈県に甘谷有り、谷水甘美なり。其の山上に大なる菊有り、水山上より流れ下り、其の滋液を得。谷中に三十余家有り。復井を穿たず。悉く此の水を飲めば、上は寿百二、三十、中は百余、下は七、八十なりと云ふ。」（芸文類聚・菊）という中国の故事に基づくとされる。

菊の歌と漢詩文の関わりについては、本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院・二〇〇二年）に詳しい考証がみられる。

一九二 ぬれぎぬと人にいはすなきくのはなよはひのぶとぞわれそぼちつる<sup>つゆイ</sup>

【異同】 きくのはな―菊の露（大）<sup>つゆイ</sup>

【現代語訳】 根も葉もない濡れ衣だなどと人にいわせないでくれ、菊の花よ、寿命が延びると信じて私は濡れてしまったのだから。

【語句】 ○ぬれぎぬ 「無実の罪」や「根も葉もない浮名」の意に用いられる場合が多いが、ここでは菊の花が寿命を延ばす効力があることが根も葉もないものであるとする。○よはひのぶ 「よはひ」は、人間の重ねた年齢。「のぶ」はのびる、長くなる。菊の花（露）が長寿の効力を持つ。一九一番歌参考欄、一九五番歌参照。「咲くかぎり散らではてぬる菊の花むべしも千代のよはひのぶらむ」（貫之集・四二）。○きくのはな 菊の花。傍記異文の「きくのつゆ」の方が「ぬれぎぬ」「そぼちつる」と照応し、本来は「菊の露」であつたと思われるが、本文で解した。○そぼちつる 「そぼつ」はしみて内部まで濡れる。「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形。「限りなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はん日までに」（古今集・四〇一）。「そぼつ」は奈良時代までは清音。

【所載】 古今六帖「ぬれぎぬ」三三三二

一九三 きくの花つゆとをきゐていざをらんぬれなばそでのかこそにははめ

【異同】 いさをらん―いさほらん（大）

【現代語訳】 菊の花に露のように置いていて、ずっと起きていて、さあその花を折ろう、濡れたら袖に移り香がするであらうから。

【語句】 ○きくの花 菊の花。「露」「折る」「濡る」と取り合わせられた例として、「いかでなほ君が千歳をきくの花折りつつ露にぬれんとぞ思ふ」（貫之集・一九六）がある。○つゆとをきゐて 露とおきゐて。「露」とは、露のように。「をきゐ」は「置きゐ（置いている）」に「起きゐ（起きていて）」を掛ける。「うちとけて君は寝ぬらん我はしも露とおきゐて思ひあかしつ」（新千載集・一五一〇、平中物語・五四）。

【所載】 ナシ

一九四 みな人のおいをわするといふきくはもゝとせをやるはなにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】誰もが老いを忘れるという菊は、百年という長い年月を過ごさせる花であるよ。

【語句】○おいをわする 老いを忘れる。中古の用例はあまり見られないが、類歌に「菊の花植ゑたる宿のあやしきは老いてふことを知らぬなりけり」（貫之集・一八三）がある。所載欄の貫之集には「老いをとどむ」とあり、木村正中（新潮日本古典集成『貫之集』）は「とどむ」と「やる」という反対概念を同一義に用いた面白さがあるとする。○もゝとせ 一九一番歌参照。○やる 物や動作を先方に移動させる。長い歳月を過ごさせる。

【所載】貫之集Ⅰ・四七八

【参考】作者名はないが、貫之集に入集する。

一九五 をるきくのしづくをおほみわかゆてふぬれぎぬをこそおいの身にきれ  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】折る菊の雪が多いので、露に濡れて若返るといふ濡れ衣を老いの身に着ることだ。

【語句】○をるきく 折る菊。「菊」が「折る」「露」「老い」と取り合わされた例として「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」（古今集・二七〇）がある。○しづくをおほみ 雪が多いので。「おほみ」は、形容詞の語幹＋み。○わかゆ 若くなる。若返る。若さを取り戻す。「……老いず死なずの葉もが君が八千代を若えつつ見む」（古今集・一〇〇三）、「菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千世はゆづらむ」（紫式部集Ⅰ・一一四）。○ぬれぎぬをこそおいの身にきれ 実際は年老いた身だが、菊の露によって若返るといふ濡れ衣を着る。一九二番歌の「ぬれぎぬ」参照。

【所載】古今六帖「露」五九九／貫之集Ⅰ・七八七／忠岑集Ⅰ・一二／忠岑集Ⅱ・六〇／忠岑集Ⅲ・九三／夫木抄・五八九二

【参考】作者名は「たゞみね」とあり、忠岑集の各伝本に見え、夫木抄にも「ただみね」とあるので忠岑の作である可能性が高いが、貫之集では「九月九日たゞみねがもとに」とあって、貫之作であり、次の古今六帖一九六

番歌が忠岑の返歌となっている。

〔以上五首担当 中野〕

一九六 つゆふかききくをしをれる心あらばちよのあだなはたゝむとぞおもふ  
つらゆきかへし

【異同】ナシ

【現代語訳】露を深く含んだ菊を手折るような気持があなたにあるのだったら、千代までの長い浮名は、当然立つだろうと思いますよ。

【語句】○つらゆきかへし 前歌（一九五番歌）に対する貫之の返歌、の意。ただし貫之集Ⅰでは、前歌が貫之の歌、こちらが忠岑の返歌、となっている。なお忠岑集Ⅰ・Ⅲには、前歌はあるが、この歌はない。○きくをしをれる心あらば 菊を手折るような気持があなたにあるならば。「し」は強意の助詞。○ちよのあだな 千代までも残るような浮名。「菊を手折る」にことよせて恋の含意を持たせ、たわむれた。

【所載】貫之集Ⅰ・七八八

【参考】作者表示「つらゆきかへし」は、貫之集Ⅰとは一致しない。

秋のはて

おきかぜ

一九七 みやまよりをちくるたきのいろみてぞ秋はかぎりとおもひしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】深い山から流れ落ちてくる滝の水の色を見て、これでもう秋は終りだなあ、と思い知ったことだ。  
【語句】◎秋のはて 秋という季節が終るころ。長月の末をいう。古今六帖歳時部は、春・夏・秋の三つの季に、それぞれ「春のはて」「夏のはて」「秋のはて」の題を立てている。○みやま 深い山。○をちくるたきのいろ おちくるたきのいろ。落ちてくる滝の水の色。古今集に収められた当該歌の詞書には、「寛平御時古き歌奉れとおほせられければ、竜田川もみち葉流るといふ歌を書きてその同じところを詠めりける」とある。すなわち、「竜田川もみち葉流る神南備のみむろの山にしぐれ降るらし」（古今集・二八四）の歌に依拠して、「をちくるたきのい

ろ」が紅葉の色に染まっていると見立てたもの。○秋はかぎり 秋という季節はこれで終りだ。「かぎり」は終り、最後の意。

【所載】古今集・秋下・三一〇／新撰朗詠集・二六三／興風集Ⅰ・一〇／興風集Ⅱ・一六  
【参考】作者名「おきかぜ」は所載欄の文献に一致する。

一九八 けふありてあすゝぎなゝん神な月しぐれにまがふもみちかざゝん  
人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】きようはまだ秋であつても、あすはもうこの秋の季節が過ぎて行つてほしい。あすからは、陰曆十月、冬のしぐれに散りまがう紅葉を、かざすことにしよう。

【語句】○けふありて きようはまだ秋の季節としてあつて。○あすゝぎなゝん あすはこの秋という季節が過ぎて行つてほしい。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「なん」は他へ詠え望む助詞。所載欄の文献ではみな、第二句が「あすは過ぎなむ」となっており、「あすは紅葉が散ってしまうだろう」の意となる。その方が、歌意はよく通る。○神な月 陰曆十月の称。曆の上ではこの月からが冬。○しぐれにまがふ 降るしぐれの中に散りまがう。○かざゝん かざすことにしよう。「かざす」は、草木の花や小枝を髪や冠り物に挿すこと。

【所載】玉葉集・冬・八九〇／万代集・一三二五／人麿集Ⅱ・一五八／人麿集Ⅲ・一八八／人麿集Ⅳ・七九  
【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。

一九九 なが月のあり明の月はみえながらはかなくあきは過ぬべらなり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】陰曆九月の有明の月は空に残つて見えていながら、秋ははかなく過ぎ去つてゆくようだ。

【語句】○ながつき 陰曆九月の称。○あり明の月 暁方の空に残る月。十五日以降の月は翌日の空に残るが、特に二十日以後の月を有明月という。能因歌枕に「廿月よりありあけ」とある。この歌の後撰集における詞書は、「ながつきつごもりに」となっている。○はかなく 「過ぬ」にかかる。秋があとなく去つてゆくさまの形容。



○過ぬべらなり 過ぎてゆくようだ。「べらなり」は推量の助動詞。

【所載】後撰集・秋下・四四一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二〇〇 草も木もみぢゝりぬとみるまでぞあきのくれぬるけふはきにける

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木もすっかりもみぢして散ってしまった、と見えるまで、秋の暮れはてるきょうの日は来たことだなあ。

【語句】○もみぢゝりぬ もみぢして散ってしまった。「もみぢゝり」は、「もみづ」と「散る」の二つの動詞が複合した形。その主語は「草も木も」である。○あきのくれぬるけふ 秋の暮れてしまったきょう。陰暦九月晦日のこと。

【所載】貫之集Ⅰ・四八〇

【参考】作者については二〇一番歌参照。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

二〇一 しぐれふる神なづきこそちかゝらし山のをしなべいろづきにける

已上三首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨の降る神無月が近いと見える。山が一樣に紅葉して色づいたことだよ。

【語句】○しぐれ 時雨。晩秋から初冬にかけて降るにわか雨。「神な月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびのもり」(古今集・二五三)。○神なづき 神無月。陰暦十月の称。冬の初めの月。古今六帖では、二一〇番歌から二一二番歌までの題。○ちかゝらし 近いらしい。あゆひ抄に、「らし」は「らむ」よりは確かに見定めながら心の落ち居ぬ言葉」であると見え、「からし」に「ウアルソウナ」と注する(中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』風間書房、一九六〇年)。○山のをしなべ 山が一樣に。「の」は主格を表し「いろづきにける」に対応する。所載欄の続後撰集・万代集には「山おしなべて」とある。

【所載】続後撰集・秋下・四三九／万代集・秋下・一二一八／貫之集Ⅰ・三八三  
【参考】作者名「已上三首つらゆき」は所載欄の文献に一致する。なお当該歌は、所載欄文献の詞書によると、天慶二年（九三九）四月の、藤原実頼のための屏風歌。

二〇二 みちしらばたづねもゆかんもみぢばをぬさにたむけてあきはいぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】もし（秋の去って行く）道を知っているならば、訪ねても行こう。紅葉の葉を幣として手向けて、秋は去って行ってしまったも。

【語句】○ぬさにたむけて 幣として手向けて。所載欄の文献では「ぬさとたむけて」とある。

【所載】古今集・秋下・三一三／新撰和歌・一一六／躬恒集Ⅰ・二六五／躬恒集Ⅱ・一五三／躬恒集Ⅲ・二八九  
【参考】後撰集に「もみぢばをぬさとたむけて散らしつつ秋とともにやゆかんとすらん」（一三三八・大輔）という類想歌がある。なお、作者については二〇三番歌参照。

二〇三 いづかたによはなりぬらんおぼつかなあけぬかぎりはあきにやあるらん

已上みつね

【異同】あけぬかきりは―あけぬは限は（大）

【現代語訳】夜は、秋と冬とのどちらになったのだろう。はつきりしないよ。夜が明けないうちは、まだ秋なのだろうか。

【語句】○いづかたによはなりぬらん 秋の最後の日の夜、すなわち翌日からは冬になる境目の夜なので、いたい秋と冬のどちらになったのだろうかと自問したことば。「いづかたに更けゆくよはのなりぬらん秋の残か冬のはじめか」（夫木抄・「九月尽」・隆季）。

【所載】後撰集・秋下・四四二／躬恒集Ⅰ・二六四／躬恒集Ⅱ・一九〇／躬恒集Ⅲ・二八八  
【参考】二〇二番・二〇三番についての作者名「已上みつね」は、所載欄の文献に一致する。

或本みつね

二〇四 もみぢばのながれてよどむみなとをぞくれゆくあきのとまりとはみる

【異同】 なかれてよとむ―なかれてとまる（桂）

【現代語訳】 紅葉の葉が流れてきて淀んでいる河口を、ここが、暮れて行く秋の最後に行き着く港なのだなあと  
思っていることだよ。

【語句】 ○みなと 水門。河口など、水の出入り口。船が停泊する所（港）ともなった。「もみぢばの流れてと  
まるみなとには紅深き浪や立つらむ」（古今集・二九三・素性）。○とまり 船が停泊する所。港。また、最後に  
行き着く終着点。「年ごとにもみぢば流す竜田河みなどや秋のとまりなるらん」（古今集・三一・貫之）。

【所載】 ナシ

【参考】 作者名は「或本みつね」とあるが、躬恒集では確認できない。

そせい

二〇五 もみぢばを袖にこきれてもてい<sup>てイ</sup>なむあきはかぎり<sup>てイ</sup>と見ん人のため

【異同】 袖にこきれて―袖にこきいれて（大） もてい<sup>てイ</sup>なむ―もていてなむ（御）

【現代語訳】 紅葉の葉をしごき取り袖に入れて持って帰ろう。秋はもう終わりだと思っているだろう人のために。

【語句】 ○こきれて 所載欄の文献では「こきいれて」とある。「こきる」は「こきいる」を約した語で、枝に  
ついている花などをしごき取って袖などに入れる意。「池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖にこきれ  
な」（万葉集・四五三六（旧四五二））。

【所載】 古今集・秋下・三〇九／新撰和歌・一二二／素性集Ⅰ・四四／素性集Ⅱ・一六／素性集Ⅲ・一〇

【参考】 作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

二〇六 もみぢばにみちはうもれてあともなしいづれよりかはあきはゆくらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】紅葉した葉に道は埋もれて跡形もないことだ。いったいどこを通って秋は行くのだろうか。

【語句】○あともなし 跡形もない。落葉に覆いつくされて道が見えない様子をいう。○いづれよりかは「か」は疑問。○あきはゆくらむ 秋を擬人化して、道もないのにどこを通ってここから立ち去っていくのか、と秋を惜しむ気持ちを表す。秋を擬人化したものとしては「もみちばのながるる時は立田河みなとよりこそ秋は行くらめ」（貫之集・二三八）などがある。

【所載】続後撰集・秋下・四五六

二〇七 ゆふづくよをぐらの山になくしかのこゑのうちにや秋はくるらむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月のようにほの暗い小倉山で鳴く鹿の声の聞こえる中で秋は暮れてゆくのだろうか。

【語句】○ゆふづくよ 「秋のはて」には夕方に月がのぼることはない。夕暮れどきの月の薄暮のイメージが「を暗」の名を持つ「をぐらの山」に通じることによる措辞。○をぐらの山 小倉山。京都市右京区嵯峨。大堰川を挟み嵐山と対する。紅葉の名所として知られ、貴族の山荘も多くあったという。ここでは、ほの暗いの意の「を暗し」を掛ける。「もみちせばあかくなりなんをぐら山秋まつほどのなにこそありけれ」（拾遺集・一三五）。○こゑのうちに 鳴く声の聞こえる中で。貫之には「くれぬとてなかずなりぬる鶯の声の内にや春のへぬらん」（貫之集・三五二）という例もある。○秋はくるらむ 「くる」は下二段活用「暮る」。日が暮れるのと秋が暮れゆく時とを重ね合わせる。

【所載】古今集・秋下・三二二／新撰和歌・一二〇／和漢朗詠集・三三七

【参考】作者名は所載欄の古今集に同じ。古今集の詞書には「なが月のつごもりの日大井にてよめる」とある。

二〇八 こがらしのをとにて秋は過にしをいまもこずゑにたえずふく風  
はつふゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】木枯しの音とともに秋は過ぎて行ったのに、今も木末には絶えず風が吹いているよ。

【語句】◎はつふゆ 冬の初め。歌題としては既に「延喜五年四月廿八日右兵衛少尉貞文歌合」や「天慶二年二月廿八日貫之歌合」に見出せる。○こがらし 晩秋から初冬にかけて吹く風。「うちすててわかるるあきのつらきよにいとどふきそふこがらしのかぜ」（中務集・二五二）。○をとにて秋は 所載欄の歌学書ではいずれも「音聞く秋は」と伝える。○いまも 冬となった今でもなお、の意。秋とともに木枯も過ぎ去ったはずなのにどうしてまだ残っているのか、という思い。季節の到来と眼前の景物とのずれを詠んだものとしては「はるがすみたちにしものをいまもなほよしののやまにゆきのみぞふる」（躬恒集・三〇九）がある。

【所載】袋草紙・六四七／八雲御抄・一〇一

二〇九 神無月ふりみふらずみさだめなきしぐれぞふゆのはじめなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】十月になって、降ったり降らなかったりと定まりのない時雨こそが冬の始まりであったことだ。

【語句】○神無月 旧暦十月の称。「時雨」をと共に詠む場合も多い。二〇一番歌参照。○ふりみふらずみ 「み」は接尾語。動詞の連用形に付いて動作の反復を示す。……たり……たり。「さねかづらいまするいもがうらわかみゑみみいかりみきつつひもとく」（古今六帖・一四一七）。○ふゆのはじめ 冬の到来。和歌に用いられる事例は少ない。「あでのかはけふはなみのおときこえぬはふゆのはじめとこほりすらしも」（惠慶集・二七一）。

【所載】後撰集・冬・四四五／和漢朗詠集・三五五／隆源口伝・二三／綺語抄・五二／古来風体抄・三一五

かみな月

つらゆき

二一〇 かみな月かぎりとおおもふもみぢばのやむときもなくよるさへにちる

【異同】ナシ

【現代語訳】十月となって、もうこれきりと思ったのだろうか。紅葉した葉が、とどまることなく夜になってまで散っているよ。

【語句】◎かみな月 旧暦十月の称。屏風歌の題に多く見られる。景物は紅葉、菊、網代など多岐にわたる。○よるさへにちる 夜になってまで散っている。冬の十月になってしまったので散らなければいけない、という。「も

みちば」を擬人化する。本来は自然であるはずの落葉まで月次意識を優先しているという点に眼目を置く。末句、所載欄の後撰集では「夜さへにふる」とあり、「時雨が降る」と掛けて、紅葉の散る様子を「降る」と喩える。なお後撰集の二荒山本や片仮名本では「ちる」とする。

【所載】後撰集・冬・四五六

【参考】作者名は「つらゆき」とあるが、現存する貫之集には残らない。後撰集も「よみ人知らず」とする。なお、順集に、天曆五年、宣旨により梨壺に五人が召された時に、その別当・藤原伊尹からの「かみなづきのへいはくにいはく、『かみなづきかぎりとおもふもみちばの』」とあり、おのおのうたをたてまつるに」との注文に応じた、

神無月では紅葉もいかなれや時雨とともにふりに降るらん（一一七）  
がある。

〔以上五首担当 青木〕

二二一 ちはやぶるかみなづきこそかなしけれたれをこふとかつねにしぐるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月というのは悲しいものだ。一体、誰を慕って、いつもしぐれ、泣き濡れているのだろうか。

【語句】〇ちはやぶる 「かみなづき」の「神」にかかる枕詞。

【所載】ナシ

【参考】「つねにしぐるゝ」の主語があいまい。「かみなづき」を擬人化し、その「かみなづき」を主語と考えるか、「かみなづき」という季節は悲しいものとし、そうした折の自らの気持ちを推し量っていると考えるか。類歌に「ちはやぶる神な月こそかなしけれわが身時雨にふりぬと思へば」（後撰集・四六九）がある。それによれば後者であろうか。

二二二 たつ田やまにしきをりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

【異同】にしきをりかくもみち織かく（大）

【現代語訳】竜田山は、錦を織って架けたようだ。神無月の時雨の雨を縦糸と横糸にして。

【語句】○たつ田やま 大和国の歌枕。平安期以降はもみじとともに詠まれることが多い。「唐衣たつたの山のもみぢばは物思ふ人のたもとなりけり」（後撰集・三八六）。○にしきをりかく 「をり」は「織（お）り」。錦を織って架ける。全山の紅葉を錦に見立てるのは、古来、漢詩的発想による常套手段。「山機霜杼織葉錦」（懷風藻 大津皇子）。○たてぬきにして 「たて」は経、「ぬき」は緯、織物の縦糸と横糸をいう。

【所載】古今集・冬・三一四／家持集Ⅰ・二六三／家持集Ⅱ・二六九

【参考】古今集には初句を「竜田川」とする本文と「竜田山」とする本文とがあり、当該歌は後者に属するが、片桐洋一は、「織った錦をみずから『架ける』という表現は『山』にふさわしい」（『古今和歌集全評釈』）とする。

## しも月

二二三 さかしらになつは人まねさゝのはにさやぐしもよはわがひとりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】さかしげに、暑い夏の間は、人と同じように独り寝をしたりするが、笹の葉に音を立てて霜の降る寒い夜は、そうした独り寝をするのがつらいことだ。

【語句】◎しも月 陰暦十一月の称。奥儀抄・物異名の項に「しもつき 霜しきりにふるゆゑにしもふり月といふをあやまれり」とある。本来「霜降り月」であつたのを誤つたとするが、霜のおく月なので「霜月」であることは確かであろう。○さかしらに 賢げに。利口ぶつて。よせばいいのに、自分から、という気持ちがある。○なつは人まね わかりにくい。八代集抄に「夏の夜こそ、暑ければ、人の独ぬるやうに我もひとりぬべけれ、冬の上、霜のさむきに、ひとりぬる事のあぢきなきよし也」とあるのに一応従う。「人真似」に「人間寝」（人のいない間に寝る）を掛けるとする説もある。○さゝのはにさやぐしもよは 笹の葉にさやさと音を立てて霜の降る、そんな寒い夜は。「さむしろに思ひこそやれささのはのさやぐ霜夜のをしの独り寝」（堀河百首・九一七）。

【所載】古今六帖「ひとりね」二七〇七／古今集・誹諧歌・一〇四七／八雲御抄・一七四

二二四 冬のよをねざめてきけばをしぞなくはらひもあへずしもやをくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の夜を眠れないで耳を澄ましていると、おしどりが鳴いている。払うこともできないほど上毛に

霜がおいて、それで冷たくて鳴いているのであろうか。

【語句】○ねざめてきけば 「ねざめ」は、必ずしも眠りから覚めた状態をさすのではなく、「寢床に体を横たへたまま、眠りに入ることができずにゐる状態をいふのが原義」（増田繁夫「歌語『ねざめ』について」『人文研究』一九九〇年一月）という。○をし おしどり。和歌ではもっぱら冬の鳥として詠まれ、雌雄相離れることのない鳥として意識された。「かたみにやうはげの霜をはらふらむともねのをしのもろごゑになく」（千載集・四二九）。○はらひもあへず 払おうとしても払いきれず。

【所載】古今六帖「をし」一四七六／後撰集・冬・四七八／拾遺集・冬・二二八／金玉集・三六／和漢朗詠集・三七三／深窓秘抄・五六

【参考】古今六帖以外の本文はすべて初句を「よをさむみ」とする。

二二五 ふく風はいろもみえねどふゆくればひとりぬるよの身にぞしみける

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風は何色なのか見えないけれど、冬が来ると、独り寝をするわが身にはそぞろ身に染みることだ。

【語句】○いろもみえねど 身に染みるのだから色はあるだろうに、という気持ち。

【所載】古今六帖「ふゆのかぜ」四二四／後撰集・冬・四四九／新撰万葉集・四一八／寛平御時后宮歌合・一三〇

【参考】後撰集や歌合に本文異同はないが、古今六帖・四二四番歌のみは第三句を「ゆふくれは」とする。題は「ふゆのかぜ」であり、「夕暮れは」では意に合わない。おそらく「ふゆくれば」を「ゆふくれは」と誤ったのであろう。もともと当該歌もなぜ「しもつき」の項に収められているのかは不審。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

かぐら

つらゆき

二二六 かはやしろしのにをりかけほすころもいかにほせばかなぬかひざらん

はへイ



【異同】 つらゆき―ナシ（桂） しのをりかけ―しのおりはへ（大）

【現代語訳】 川社の篠にたくさん折ってかけて干す衣は、どのように干したから七日乾かないのでしょうか。

【語句】 ◎かぐら 神の心を慰めるように、神を祭るときに奏する舞楽。歌題としての神楽は、十二月吉日に行われた宮中神楽を詠んだものが多い。○かはやしろ 六月祓などの神事に、川のほとりに棚を設け、神や篠を立てて神饌を供え、神楽などを奏して神を祭った社。異説もあり、俊頼髓脳・綺語抄などでも論議された難語である。

○しのに しきりに。たくさん。「篠」を掛ける。「篠」は群生する細い竹の総称。○をりかけ 大久保本と所載欄の他文献では「をりはへ」「をりはふ」は長くのぼして広げる意。「をりかく」は折って掛ける意。「賤の男が篠をりかけて干す衣いかに干せば乾ざらん乾ざらん七日乾ざらん」（梁塵秘抄・四六九）。○ほすころも 干す衣。白波を干してある衣に見立てたとする説もある。○なぬか 七日。

【所載】 新古今集・神祇・一九一五／貫之集Ⅰ・四〇六／俊頼髓脳・三三〇／綺語抄・二六五／奥儀抄・六三五／和歌童蒙抄・五二六／袖中抄・一九五／六百番陳状・二〇八／古来風体抄・一一一／和歌色葉・一九二／八雲御抄・一六九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集によると夏神楽を詠んだ屏風歌。解釈がさまざまあり、濡れ衣の晴れないことを嘆いている歌とも考えられている。

二二七 ゆく水のうへにいのれるかはやしろかみなりたかくあそぶこゑかな

【異同】 かみなりたかく―かみなひたかく（桂）

【現代語訳】 流れ行く水のほとりで（神を）祈る川社では、雷鳴が大きいように、大きな音で神楽を奏していることです。

【語句】 ○いのれる 神や仏の名を呼び幸福を求める。神仏に願いをかける。所載欄の他文献では「いはへる」（神を祭っている意）が多い。○かみなりたかくあそぶこゑかな 雷鳴が大きいように、大きな音で神楽を奏していることです。貫之集をはじめ、所載欄の文献のほとんどには「かはなみたかくあそぶなるかな」とあり、川波が高く立ち、声高く神楽を奏するようですよ、の意となる。「あそぶ」は神遊び、即ち神楽を演じること。

【所載】 夫木抄・三二八〇／貫之集Ⅰ・四七三／和歌童蒙抄・五二七／俊成髓脳・三三一／綺語抄・二六六／袖中抄・一九六、二〇一／奥儀抄・六三六／六百番陳情・二〇九／古来風体抄・一一二

【参考】 貫之集によると夏神楽を詠んだ屏風歌。作者については二二一番歌参照。

二一八 あしひきのやまのさかきのときはなるかげにさかゆる神のきねかも

【異同】ナシ

【現代語訳】山の榊の常緑の木陰で、変わらぬ神のご威光により栄える、神にお仕えする巫覡ですよ。（繁茂するご神木ですよ。）

【語句】○さかき 常緑樹の総称。特に神事に用いる木をいう。○ときは 「常緑」に「永久不変」の意を響かす。○かげ 榊の木の「陰」と、お蔭で、の意味の「蔭」を掛ける。○神のきね 神に仕える人。男女どちらにも言う。「きね」は巫覡と木根（木の意。ネは接尾語）を掛ける。

【所載】拾遺集・神楽歌・六一八／貫之集Ⅰ・一八七

【参考】拾遺集・貫之集の詞書によると、民部卿清貫の六十賀の屏風歌。また、この歌は「しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも」（古今集・神遊びの歌・一〇七五、古今六帖・二二二）をふまえて詠まれている。作者については二二一番歌参照。

二一九 さかき葉のときはにしあればながけくにいのちたもてる神のきねかも

【異同】ナシ

【現代語訳】榊葉は常緑でいつまでも変わらないので、（それを持つことにより）長々と寿命を保つ神の巫覡でありますよ。

【語句】○ながけくに 長い状態で。「に」は状態を表す格助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・五三一

【参考】貫之集詞書によると、神楽を詠んだ屏風歌。作者については二二一番歌参照。

二二〇 こゑたかくあそぶなるかなあしひきのやまいまぞと越るべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】大きな音で神楽を奏でていることですよ。（神楽に招かれた）山人が、（山へ帰るのに）今まさに通

つているところです。

【語句】○あそぶ 二一七番歌参照。○やま 山中に住む人。獵師・炭焼きのたぐいだが、山の神に仕える神人でもあり、平素は山に住み、祭りなどの時だけ里に出た（西角井正慶『神楽研究』壬生書院、一九三四年）。「あしひきのやまゆきしかばやまびとのわれにえしめしやまつとぞこれ（万葉集・四三一七（旧四三九三））。○越るべらなる こゆるべらなる。「越ゆ」は通過する意。所載欄の文献では「かへるべらなる」。

【所載】夫木抄・七四九三／貫之集Ⅰ・五二一

【参考】貫之集・夫木抄の詞書によると、忠平女貴子の四十賀の屏風歌。作者については二二一番歌参照。

〔以上五首担当 三浦〕

二二二 山びとのすれるころもにゆふだすきかけてころをたれによすらん

已上六首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山人は山藍で摺った小忌衣（おみごろも）に木綿襷（ゆうだすき）を掛けて、誰に思いを寄せているのだろうか。

【語句】○山びと 山に住む人。炭焼き人など。また山の神に仕える人。「あふさかをけさこえくれば山人のちとせつけとてきれるつまなり」（拾遺集・五八〇）。所載欄の歌はすべて初句「みやびとの」。○すれるころも 白地に山藍で春草、小鳥などの模様を青く摺りつけた小忌衣。○ゆふだすきかけて 「ゆふだすき」は木綿（ゆう）で作った襷。神事に奉仕するとき掛ける。「かけて」は「襷をかける」に、心をかける意を掛けている。「ちはやぶるかも杜のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし」（古今集・四八七）。

【所載】古今六帖「ころも」三二八二／新古今集・神祇歌・一八七〇／貫之集Ⅰ・二一／貫之集Ⅱ・一九  
【参考】左注「已上六首つらゆき」とする二二六番—二二一番の六首は所載欄の文献に一致する。

或本つらゆき

二二三 しもやたびをけどかれせぬさかきばのたちさかゆべきかみのきねかも

【異同】かみのきねかも—かみのきねかな（御・桂・大）

【現代語訳】霜が幾たび置いても決して枯れない榊葉のように、栄えてゆくに違いない神人よ。

【語句】○やたび 幾度も。「や」は数や量の多いことを表す語。「やくもたついてもやへがきつまごみにやへがきつくるそのやへがきを」(古事記・一)。○たちさかゆべき 目立って栄えてゆくにちがいない。上三句までは「たちさかゆべき」にかかる序詞。○きね 神に奉仕する人。

【所載】古今集・神あそびのうた・一〇七五／和歌童蒙抄・七一〇  
【参考】「或本つらゆき」とあるが、所載欄の文献には作者名なし。

二二三 さかきばにゆふとりしでしでかけてイたれかゝく神のみまへにいはひそめけん

【異同】ナシ

【現代語訳】榊の葉にゆうを取り掛けて、誰がこのように神の御前で穢れを忌みつつしみ、吉事を願いはじめたのだろうか。

【語句】○ゆふ 楮の樹皮をはぎ、裂いて糸にしたもの。幣として祭りの時榊などにかける。また褌として神事につかう。○とりしでゝ 取りかけて。垂らして。○たれかゝく 「誰か掛く」に「かく(このように)」をかける。○いはひそめけん 「いはふ」は、幸福安全を願い、穢れを忌み謹んで神を祭ること。

【所載】拾遺集・神楽歌・五七六／袖中抄・八四四

二二四 わぎもこがあなしの山のやまびとゝ人もみるがべくイね山かづらせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】私のいとしいあの女は、あなしの山の山人と人も見るほど見事に山かずらをしておくれ。

【語句】○わぎもこ 男が妻・愛人など親しい女を呼ぶ語。所載欄の歌は初句「まきもくの」。袖中抄のみ「わぎもこが」。○あなしの山 まきもくのあなしの山。奈良県桜井市三輪町の東方にある山。○やまびと 二二一番歌参照。○みるがね 見るほかに。○やまかづら 山野の蔓性の植物で作った髪飾り。

【所載】古今六帖「やしろ」一〇七二／古今集・神あそびのうた・一〇七六／綺語抄・二六七／奥儀抄・五九二／袖中抄・三四六、三四七／和歌色葉・二九六

二三五 神がきやみむろの山のさかきばゝかみのみまへにしげりあひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】神域の内のみむろの山の神葉は、神の御前でともども繁茂していることだなあ。

【語句】○神がきや 「神がき」は神社や神域の垣。「や」は感動をあらわす助詞。○みむろの山 神が降臨する山。「みむろ」は本来神が降臨する御室の意であるが、「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・二八四）が有名となり、後に奈良県生駒郡斑鳩町の神無備山のことと考えられるようになった（片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』笠間書院、二〇〇一年）。○しげりあひにけり 茂りあつている状態を祝いの気持をこめてよんだもの。

【所載】古今集・神あそびのうた・一〇七四

〔以上五首担当 橋本・林〕

二二六 みやまにはあられふるらしと山なるまさきのかづらいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山には霧が降ったらしい。人里近い山では、まさきの葛が綺麗に色づいている。

【語句】○みやま 木の茂った深い山。また「み」を接頭語とし、神霊の領する山とする意もある。なお笹川博司『深山の思想』（和泉書院、一九九八年）は古今集時代の「み山」は「神の住む山」と解釈すべきであり、「深い山」へと変化していくのは院政期頃とする。○と山 外山。人里に近い山。○まさきのかづら 蔓性植物を指す。定家葛とする説もあるが、定家葛は紅葉しない。神事にちなむ葛を「真栄（まさき）」と賛美したか。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇七七／新撰和歌・一二八／金玉集・三七／和漢朗詠集・三九二／和歌体十種・七／深窓秘抄・五八／九品和歌・三／新撰髓脳・一三／俊頼髓脳・三八、一六九／和歌童蒙抄・九八／奥儀抄・七一、八九、一〇八／袖中抄・三四八／簸河上・四／代集・一／悦目抄・四四／井蛙抄・一〇二

いせ

二二七 としごとに神をぞいのるさかきばのいろもかはらでをらんと思へば

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年毎年神を拝みます。榊葉が色も変わらないように、私たちの仲も変わることなくいたい、そう思うので。

【語句】○さかきば 常緑樹である榊の葉。神樂の際、挿頭などにする。○をらんと 「折る」に「居る」を掛ける。

【所載】伊勢集Ⅰ・八一／伊勢集Ⅱ・八三／伊勢集Ⅲ・七八／中務集Ⅰ・六四／中務集Ⅱ・八一

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の伊勢集に一致する。中務集にあるのは混入か。

二二八 しはすにはあはゆきふるとしらぬかもむめのはなさくふくめらずして

【異同】ナシ

【現代語訳】師走には淡雪が降ると知らないのであらうか、梅の花が咲いたよ、つぼみのままでいないで。

【語句】◎しはす 陰暦十二月。○あはゆき 降るとすぐに消える雪。万葉集・一六四三(旧一六三九)に「沫雪のほどもどろにふりしけば」とする用例がある。仮名の違いによって「あはゆき」(淡雪)「あわゆき」(泡雪)の二通りがある。○ふくめらずして 「ふくむ」は、「含 フクム、クム、フム」(名義抄)。万葉集・七九二(旧七九五)「春雨を待つとにしあらしわがやどの若木の梅もいまだ含めり」などからわかるように、いまだ開ききらないことを言う。「ふくめらずして」で「つぼみのままでいないで開いてしまつて」となる。

【所載】万葉集・一六五二(旧一六四八)十二月尔者 沫雪零跡 不知可毛 梅花開 含不有而 シハスニハアワユキフルトシラヌカモユメノハナサクツホメラズシテ しはすにはあわゆきふるとしらぬかもうめのはなさくふふめらずして／綺語抄・六八／和歌童蒙抄・九〇、一五五／袖中抄・七八六

これのり

二二九 みよしのゝやまのしら雪つもるらしふるさとさむくなりまさるなり

【異同】ナシ

【現代語訳】吉野の山に白雪がつもつたらしい。こんなにこの古里(である奈良)が寒くなつてきている。

【語句】○みよしのゝやま 四番歌参照。○ふるさと 旧都。ここでは所載欄の是則集詞書「ならの京にまかりてやどる所に」や吉野との関わりから奈良の都であることが分かる。○なりまさるなり 下の「なり」は断定の意。古今榮雅抄に「ふるさとのさむくなりまさるは、吉野山に雪のふりつもるらしと也」とあるのが分かり易い。

【所載】古今集・冬・三二五／金玉集・三八／和漢朗詠集・三八二／是則集・二三／寛平御時后宮歌合・二五／左兵衛佐定文歌合・一八／前十五番歌合・一七／俊成三十六人歌合・八五／時代不同歌合・一三三／三十人撰・九三／三十六人撰・一一三／深窓秘抄・六〇／秀歌大体・九〇／西行談抄・一二一

【参考】作者名「これのり」は所載欄の文献に一致する。

二三〇 せきこゆるみちならなくにちかながらとしにさはりて春をまつ哉

【異同】ナシ

【現代語訳】関越えの道のような容易ならぬ道ではなく、近いのに、年という隔てによって（こうして）春を待つていることだ。

【語句】○せきこゆるみち 「関」は障害になる物。○なくに 詠嘆的な否定の表現。○ちかながら 近いのに。○としにさはりて 「年」が障害（関）となつての意。春が来ない理由をあらわす。暦の上で春が来ないことに對する思いを述べた歌。

【所載】後撰集・冬・五〇五／伊勢集Ⅰ・九三／伊勢集Ⅱ・九五／伊勢集Ⅲ・九三

〔以上五首担当 杉本〕

二二一 あらたまのとしのをはりになる時はゆきもわが身もふりまさりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】一年の最後になる時は、雪も降りまさり、わが身も古りまさる。

【語句】○あらたまの 「年」にかかる枕詞。○ふりまさりつゝ 「ふり」は古くなるの意。これに「降り」をかける。「つゝ」はAの年もふり、Bの年もふり、Cの年もふり…というのを「ふりまさりつゝ」という（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』）。

【所載】古今集・冬・三三九／家持集Ⅰ・二六六／家持集Ⅱ・二七二／万葉集時代難事・五七／桐火桶・一二四

二三二 あらたまのとしゆきかへり春たゝばまづわがやどにうぐひすはなけ  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】年が行き、また返って春になったら鶯はまず我が家に鳴けよ。

【語句】○としゆきかへり 古い年が去り、またあらたに新しい年がやってくる。「あらたまのとしゆきかへりつきかさね……」(万葉集・四一四○(旧四一一六))、「あらたまのとしゆきかへりはなのうつろふまでに……」(万葉集・四〇〇二(旧三九七八))など。

【所載】続後拾遺集・冬・四九八／万葉集・四五一四(旧四四九〇) 安良多未能 等之由伎我敝理 波流多多婆 末豆和我夜度爾 宇具比須波奈家 アラタマノトシユキガヘリハルタバマヅワガヤドニウグヒスハナケ あらたまのとしのゆきかへりはるたばまづわがやどにうぐひすはなけ／三十人撰・四九／三十六人撰・四一／夫木抄・八八七五

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

## 仏名

二三三 としのうちにつもれるつみはかきくらしふるしら雪とゝもにきえなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】この年のうちにつもった罪は、空をかきくらし降る雪が消えるようにともに消えてほしい。

【語句】◎仏名 仏名会(ぶつみょうえ)のこと。御仏名(おぶつみょう)ともいう。諸仏の名号を唱え罪障を懺悔する。内裏や寺院で行われた法会。平安中期には毎年十二月二十日前後の一夜。のちに十九日から三日間。屏風の画題としてもあった。和歌の題としてはその年の罪障消滅を祈る心や、会式に際しての導師とのやりとりが詠まれる。○かきくらし 空を暗くして。○きえなん 消えてほしい。「なん」は動詞の未然形に接続し、「…してほしい」の意を表す。

【所載】拾遺抄・冬・一六〇／拾遺集・冬・二五八／新撰朗詠集・三六九／貫之集Ⅰ・二二／貫之集Ⅱ・二〇／



宝物集・四六四

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰには「延喜六年つきなみの屏風八帖がれうのうた四十五首せじにてこれをたてまつる廿首」のうちにある。

二三四 きみさらば山にかへりて冬ごことにゆきふみわけてをりよとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいつてしまわれたら、山にお帰りになってきつと冬ごことに（また仏名の導師として）雪ふみわけて下りてきて下さるようにと願っております。

【語句】○さらば 去らば。「去る」の未然形に仮定の助詞「ば」の接続したかたち。挨拶の語ではない。○冬ごことに 冬になるたびに。○をりよ おりよ。「おりる」の古語「おる」は上二段活用。その命令形。下山して下さ

い。

【所載】貫之集Ⅰ・四〇一  
【参考】仏名のために招く僧侶を「導師」というが、仏名が終わると別れの宴がある。貫之集によればそこでの歌。次の拾遺集の歌が参考になる。

屏風のゑに仏名のあしたに梅の木のもとに導師とあるじとかはらけとりてわかれをしてみたところ

よしのぶ

雪ふかき山地になにかへるらん春まつ花のかげにとまらで（二五九）

うるふ月

いせ

二三五 さくらばなはるくはゝれるとしだにも人のこゝろにあかれやはせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】桜花よ、今年のように春が余分にある年だけでももう十分堪能したと人の心に思われるくらい咲いてくれないか。（いつもあわただしく散ってしまつて……）

【語句】◎うるふ月 閏月。暦月と季節を調節するためもうける。現行の暦では四年に一度二月に一日設けて閏

日とするが、平安時代に用いた宣明暦では、中気のない月を閏月とする。この暦は大の月三十日、小の月二十九日であり、平年を三五四日とするから、約三年に一度は閏月がある。またその時節も異なる。以下、春・夏・秋・冬の順に歌を配置する。○はるくはゝれる 閏三月のある年で春が四ヵ月あるのをいった。道真の漢詩の序に「況んや年の閏月は一歳余分の春……」などとする。平安初期の漢詩の発想を巧みに和歌に移したものの、「つねよりものどけくにはへ桜花春くははれる年のしるしに」（風雅集・二二三・修理大夫顕季）の歌は、詞書に「三月に閏ありける年よめる」とある。

【所載】古今六帖「さくら」四二〇六／古今集・春上・六一／和漢朗詠集・六二／伊勢集Ⅰ・二二五／伊勢集Ⅱ・二二一／伊勢集Ⅲ・二二七／古来風体抄・二三四／和歌色葉・二二三

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

二三六 うるひさへありてゆくべきとしだにも春にかならずあふよしもがな

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】閏月さえあるはずの今年は、せめて人生の春にかならず会いたいです。

【語句】○うるひ 「うるふ」の連用形の名詞化。閏月。○としだにも この年はせめて。○春 所載欄後撰集の詞書に「やよひにうるふ月ある年、つかさめしのころ申文にそへて、左大臣の家につかはしける」とあり、三月が二度ある「春」に我が身の「春叙位」、任官をはたすことを願っている。

【所載】後撰集・春下・一三五／貫之集Ⅰ・八七九／古来風体抄・三〇九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二三七 ほとゝぎすのちのさ月もありとてやながくう月をすぐしはてつる

【異同】ながくう月を―なかくて卯月を（大）

【現代語訳】ほととぎすよ、今年は閏五月もあるからと言って、ゆっくりと四月の初音を楽しんで過ごしているのかな。

【語句】○ほとゝぎす ほととぎすは四月のうちは山で忍び音に鳴き、五月になると里に降りて来て本格的に鳴くとされた。○のちのさ月 閏五月。

【所載】亭子院歌合・五八（二十卷本類聚歌合のみ）

二三八 さみだれにつゞける<sup>のイ</sup>としのながめにはものおもひたえぬ人ぞかなしき<sup>いせ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】さみだれの降る五月が二度もある年の長雨には、雨につきもののもの思いをする私は、ずつとうれいが絶えずかなしいことだ。

【語句】○さみだれにつゞけるとし 「さみだれ」は陰暦五月ごろ降り続く長雨。梅雨。「つゞけるとし」とは古今六帖の題が「うるふ月」なので、さみだれの降る五月が二度続く年の意。所載欄伊勢集Ⅰの詞書に「五月ふたつある年」とある。岩井宏子は古今集撰者時代の「さみだれ」は時候表現であるとし、この歌について「雨が降り続くという意ではなく、五月が連続するということである。」としている（「さみだれ」の生成と基層―季節と歌語『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年）。○ながめ 「長雨」に物思いの「ながめ」をかける。○ものおもひ 岩井宏子は「さみだれ」が「心の乱れを表現する言葉として機能することにより重層的に恋愛心情を表現するものと理解された。」としている（同上著書）。

【所載】後撰集・夏・一九〇／伊勢集Ⅰ・二二九／伊勢集Ⅱ・二三〇／伊勢集Ⅲ・二三〇

【参考】作者名「いせ」は、伊勢集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲには当該歌が載るが、後撰集は「よみ人知らず」である。

二三九 たなばたはあまのかはらをなゝかへりのちのなぬかをみそぎにはせよ

【異同】ナシ

【現代語訳】織女は天の川原で七度被えをし、六月に閏月が加わる今年は、後の六月七日（例年なら彦星と逢えるその日）を禊の日としなさい。

【語句】○なゝかへり 七度の被え。『後撰集新抄』（風間書房、一九八八年）は本居宣長の説として「七かへりとは七度の被への事なり」と記している。○のちのなぬか 閏六月七日。例年なら七月七日。所載欄の後撰集詞

書に「みな月ふたつありけるとし」とある。後撰集と八雲御抄は、第四句「のちのみそかを」である。六月晦日は夏越の祓えの日。

【所載】後撰集・夏・二二六／八雲御抄・一七七

二四〇 神無月ふたつあるとしのしぐれにはひともとぎくぞいるこかりける

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月が二つもある年のしぐれの頃は、一本の菊がことさらに色濃く美しいことだ。

【語句】○神無月 陰暦十月。○しぐれ 晩秋から初冬にかけて、降ったり止んだりする雨。「しぐれ」はひと雨ごとに、木の葉や花の色を濃く染めるとされた。しぐれが二か月も降るのだから菊の色も濃く染まるといった。「白露も時雨もいたくもる山はしたばのこらず色つきにけり」（古今集・二六〇）。○ひともとぎく 一本の菊。「ふたつあるとし」と「ひともと」の対比。

【所載】兼輔集Ⅰ・五六／兼輔集Ⅱ・一一〇／兼輔集Ⅲ・四三／兼輔集Ⅳ・五三／兼輔集Ⅴ・六二

〔以上五首担当 斎藤・林〕

二四一 この月のふゆのあまりにあらざらばうぐひすはゝやなぎぞしなまし

【異同】ナシ

【現代語訳】この月が冬の余りとしてあるのでなかったら、鶯はもうとつくに鳴いていることだろうに。

【語句】○ふゆのあまり 閏十二月。後撰集には「年のあまりに」とあるが、鶯の鳴く春を待つという下の句からみて「冬」の方が妥当。○うぐひす 鶯。万葉集以来、春の最初に鳴く鳥、春を告げる鳥として歌われた。「梅が枝に来ある鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ」（古今集・五）、「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く」（古今集・六）。○なまし 完了の助動詞「ぬ」の未然形＋反実仮想「まし」。「ば」と呼応して実際にありえないことを仮想する。鶯が鳴く春の到来が遅れるのは閏十二月のせいだとした趣向。

【所載】後撰集・冬・五〇四／夫木抄・七六三三

としのくれ

二四二 ゆくとしのおしくもあるかなますかゞみみるかげさへにくれぬとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】去りゆく年が惜しまれることだなあ、鏡に映る姿にさえ、老いのかげりがみえてきたと思うと。

【語句】◎としのくれ 一年の終わり。年末。歳暮。○おしくもあるかな をしくもあるかな。「も」は感動の意を添える係助詞。「かな」は詠嘆の終助詞。○ますかゞみ 澄んでよく映る「真澄鏡（ますみのかがみ）」の転とも、よく整った完全な「真十鏡（まさかがみ）」の転ともいわれるが、ここでは単に「鏡」のこと。○みるかげさへに 「みるかげ」は鏡の中にみる自分の姿。「さへに」は副助詞「さへ」＋格助詞「に」。すでにある事柄の上にさらに別の事柄を添加する。○くれぬ 「くれ」は、動詞「暮る」の連用形で、「季節や年月が終わりに近づく」意と「人生の終わりに近づく、老年になる」意を掛ける。「暮る」を老年の意で用いた例として「齒老ここに至りて暮れぬ」（大唐西域記・卷十一・平安中期点）があり、白居易の詩にも詠まれている。参考欄参照。「むばたまのわが黒髪に年くれて鏡の影に降れる白雪」（貫之集Ⅰ・八一四／拾遺集・一一五八）などの例がある。○とおもへば と思うと。上の句の詠嘆にもどる形。「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば」（古今集・三二五）。

【所載】古今集・冬・三四二／新撰和歌・一六〇／和漢朗詠集・三六一／貫之集Ⅲ・三〇／色葉和難集・六二三  
【参考】古今集・冬部の巻末歌で、歳末に老いを嘆く歌。鏡をみての嘆老は、「晨興照青鏡 形影両寂寞（晨に興きて青鏡に照らせば 形影両つながら寂寞）」（歎老三首・白氏文集・〇四五三）、「前去五十有幾年 把鏡照面心茫然（前五十を去ること幾年か有る 鏡を把って面を照らして心茫然たり）」（浩歌行・白氏文集・五七九）、歳暮と嘆老は、「白頭歳暮苦相思（白頭歳暮苦に相思ふ）」（歳暮寄微之三首・白氏文集・二四五三）といった漢詩文の影響が考えられる。岩井宏子『古今の表現の成立と展開』第三章第二節（和泉書院、二〇〇八年）には、老いを嘆く歌に白居易の詩が与えた影響についての詳しい考察がある。

みつね

二四三 あづさ弓はるたちしよりとし月のいるがごとくもおもほゆるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】立春になってからは、年月の過ぎ去るのが矢を射るように迅（はや）く思われることであるなあ。  
【語句】○あづさ弓 あづさ弓を「張る」ことから「春」にかかる枕詞。○はる 「張る」と「春」の掛詞。○いる 月が「入る」と弓を「射る」の掛詞。「はる」「いる」は「弓」の縁語。「あづさ弓春の山辺にいるときはかざしにのみぞ花は散りける」（貫之集Ⅰ・五）、「青柳をかざしにさしてあづさ弓はるの山辺にいるひとや誰」（躬恒集Ⅰ・一七六）など。

【所載】古今集・春下・一二七／躬恒集Ⅱ・一一／躬恒集Ⅲ・一〇／躬恒集Ⅴ・四一／大和物語・一三二段  
【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

なお、古今六帖では「としのくれ」に配置されるが、古今集では「ゆく春」の歌群のなかに置かれている。

## 二四四 ゆきふりてとしのくれぬるときにこそついにみぢぬまつもみえけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降り、年が暮れてゆくときにはじめて、最後まで色を変えない松のことが目に映るのである。

【語句】○ついにみぢぬまつ つひにもみぢぬ松。最後まで色を変えぬ松。「つひに」は一つの行為や状態が最後まで持続するさまを示す。いつまでも。最後まで。「もみぢぬ」は、紅葉する意の動詞「もみづ」＋打消の助動詞「ず」の連体形。「もみぢぬまつ」とは、常緑で葉の色を変えぬ松。論語・子罕篇の節操が堅固であることを喩えた「歳寒、然後知松柏之後彫也（歳寒くして、然る後に松柏の彫へし）むに後へおくるを知る也」による。○まつ 「松（まつ）」と「雪」の取り合わせは多く、「我が宿の松の木ずゑに住む鶴は千代の雪かと思ふべらなり」（貫之集Ⅰ・五二）、「年経れど色もかはらぬ松が枝にかかれる雪を花かとぞみる」（古今六帖・雪・七四〇）など。○みえけれ 「みえ」は「見ゆ」の連用形で、自然に目に映る。「けれ」は気づきの「けり」の已然形で「こそ」の結び。

【所載】古今集・冬・三四〇／新撰万葉集・九四／宗于集・一〇／寛平御時后宮歌合・一二三／和歌童蒙抄・七〇三／奥儀抄・四七九／古来風体抄・二六一／桐火桶・一二五、三一八

## 二四五 くれてまたあくとのみこそおもひしかことはけふぞかぎりなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】一日が暮れるとまた明けるとばかり思っていたが、今年は今日がその限りであつたのだなあ。

【語句】○くれてまたあくとのみこそ 一日が暮れてまた明けること。「くれ」に「年の暮」をひびかせる。一日の明け暮れと年の明け暮れを詠んだものとしては「年くれて春あけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪」（後撰集・五〇〇）の如き例がみられるが、ここでは、年が「明ける」ことよりも、繰り返される日々の明け暮れのなかでふと気付いた断絶の感覚が詠まれる。

【所載】躬恒集Ⅰ・三七〇／躬恒集Ⅲ・三九四／躬恒集Ⅳ・二六三

【参考】作者名はないが躬恒集に入集する。

〔以上五首担当 中野〕

二四六 いちしろき<sup>るイ</sup>しるしなりけりあらたまのとしのくるゝは雪にぞありける<sup>つらゆき</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】実ははっきりした白い目じるしだったのだなあ。年が暮れるというのは、雪が降るのであつたよ。  
【語句】○いちしろき 「いちしろし」は、顕著な、明白な、の意。傍記異文や所載欄の貫之集の「いちしろし」も同じ意。「いちしろく」と詠まれる歌に、「こもりぬの下ゆ恋ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく」（万葉集・三九五七、〈旧三九三五〉）、「道のべのいちしろの原の白妙のいちしろくしもあれ恋ひめやも」（歌経標式・五）など。古今六帖では、「いちしろし」の表記型が三例、「いちしろし」の方が十例で数多い。○あらたまの「とし」にかかる枕詞。○雪にぞありける 所載欄の貫之集には「雪のふる家」の詞書があつて、理解しやすい。田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』に、「降る」と「古る」が実現する。雪は年が古くなる年の暮れを表すことになる」と語釈する。なお、二三一番歌参照。

【所載】貫之集Ⅰ・四四七

【参考】作者名「つらゆき」は、貫之集により確認される。

二四七 昨日といひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】昨日といい今日といって日を暮らしてもう明日になる。まったく飛鳥川の流れのように、過ぎゆくのがはやい月日であり、年の暮れとなつてしまったなあ。

【語句】○あすか川 「飛鳥川」は奈良県飛鳥地方を流れる川の名で、「明日（あす）」を掛ける。当該歌のように、「きのふ・けふ・あす」と詠み込む例は、万葉集から見える。○ながれてはやき 飛鳥川の流れがはやいことに、月日の経つのがはやいことを掛け、年末に時の経過に驚き嘆く。所載欄の古今集の詞書に「年の果てに詠める」とある。なお、飛鳥川の流れのはやさについては、万葉集から詠まれ、「あすか川行く瀬をはやみはやけむと待つらむ妹をこの日暮らしつ」（巻十一・二七二二（旧二七一三））などがある。

【所載】古今集・冬・三四一／新撰和歌・一五八

【参考】古今六帖には作者名の記載がないが、所載欄の古今集に「はるみちのつらき」、定家八代抄に「春道列樹」（五七二）とある。

二四八 ものおもふとすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いをしていて過ぎゆく月日も気づかずにいるうちに、今年は今日で終わってしまうとか聞くことです。

【語句】○ものおもふ もの思いにふける。恋のものの思いという場合が多い。○はてぬとか 所載欄の敦忠集に「なりぬとか」とある。

【所載】後撰集・冬・五〇六／敦忠集Ⅰ・一三八／俊成三十六人歌合・四三／時代不同歌合・一五七／六百番陳状・五二／大和物語・九二段・一三七

【参考】作者名の記載がないが、所載欄の後撰集・敦忠集・俊成三十六人歌合・時代不同歌合から、藤原敦忠の詠と確認できる。後撰集や敦忠集には、年を経て言い寄っていた「御匣殿別当」という女性に「師走の晦日」に贈った、と詠歌事情が付されている。

二四九 としくれてはるあけがたになり行ばはなのためしにふれるしら雪

【異同】ナシ



【現代語訳】一年も暮れて明ければすぐ春になる時なので、花の手本として降り積もった白雪であるよ。

【語句】○はるあけがた 明ければすぐ春という頃。「暮れ」に「明け」で対比させる。「はるあけがた」の例として後世のものだが、六条修理大夫集に百首歌「除夜」の題で、「門松をいとなみ立つるそのほどに春あけがたになりやしぬらん」(二五〇)や、「おなじ所にて人々、梅告春近題并恋」の詞書で「雪のうちにつぼみにけりな梅の花春あけがたになりやしぬらん」(六六)などがある。○なり行ば 桂宮本・大久保本に「なりゆけば」と表記するように、「なりゆけば」と読んだ。二四五番歌に比して、時を連続性の中に捉えている。○はなのためし まだ咲かない花の手本、の意。○ふれる 降れる。所載欄の後撰集には「まがふ」とある。

【所載】後撰集・冬・五〇〇

二五〇 やまのはにゆふひさしつゝくれぬればはるにいりぬるとしにぞありける  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端に夕日がさしながら落ち最後の日が暮れると、もう春に入りはじめていた年なのであった。  
【語句】○やまのはにゆふひさしつゝ 冬の澄んだ空に美しい落日が山の黒く濃い影を作る。○くれぬれば 暮れてしまったので。この年最後の日が暮れると、年も暮れるのである。所載欄の貫之集には、「くれゆくは」とある。○はるにいりぬる 年が暮れてもう春に入っていた、の意。『貫之集全釈』は「年内立春すでに春になつてしまっている年だったのだ」と解するが、「年内立春」に触れる記述が見出せなかったので採らなかった。

【所載】貫之集I・四一五

【参考】「としのくれ」題の最後の歌である。この年末歌には、「やがて来るものの方へ向かつてはたらく感得力」「まさに未来へ入りつつあるその時間の感知」が指摘される(山下道代『伊勢集の風景』臨川書店、二〇〇三年)。なお、作者名貫之は所載欄の文献に一致する。

(以上五首担当 犬養悦・加藤)

あまのはら

拾八 雑上 其の海に集

人丸

二五一 あまの川くものなみたち月のふねほしのはやしにこぎかへるみゆ  
く集

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川に雲の波が立ち、月の舟が星の林に漕ぎ入って帰っていくのが見える。

【語句】◎あまのはら 天の原。広々としてはてしない大空。○あまの川 「あまのはら」に流れる銀河。所載欄の拾遺集・夫木抄には「そらの海」とあり、万葉集・人麿集には「あめ(天)の海に」とある。○月のふね 月を、大空の天の川に浮かぶ舟にたとえた語。小島憲之『古今集以前』(塙書房、一九七六年)に詳しい。○ほしのはやし 多くの星が集まっているさまを林に見立てた語。

【所載】拾遺集・雑上・四八八／万葉集・一〇七二(旧一〇六八) 天海丹 雲之波立 月船 星之林丹 榜隠所見 アメノウミニクモノナミタチツキノフネホシノハヤシニコギカクルミユ あめのうみにくものなみたちつきのふねほしのはやしにこぎかくるみゆ／夫木抄・七七〇五／人麿集Ⅰ・二三四／人麿集Ⅱ・一八三／人麿集Ⅲ・六七〇／人麿集Ⅳ・五一／和歌童蒙抄・四／和歌初学抄・一／古来風体抄・七三

【参考】作者名は「人丸」とあり、人麿集に所載。万葉集では「右一首柿本朝臣人麿之歌集出」と注する。拾遺集等も「人まろ」とする。

### あべのなか丸

二五二 あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも

【異同】ナシ

【現代語訳】遠く大空を振り仰いで見ると、(あそこにかかっているのは)春日にある三笠の山にかつて出た月なのだなあ。

【語句】○あまの原ふりさけみれば 「天の原振りさけ見れば天の川霧立ち渡る君は来ぬらし」(万葉集・二〇七二(旧二〇六八))などの例がある慣用的表現。「あまの原」は広々とした大空のこと。「ふりさけみれば」は、遠くを仰ぎ見る意。○かすがなる 春日にある。「春日」は、大和国の歌枕。「春日山」「春日野」などの形でも詠まれた。現在の奈良市街東方の丘陵地。○みかさの山 三笠山。大和国の歌枕。春日にあり、春日神社の背後に位置する。続日本紀養老元年(七一七)二月一日条に「遣唐使祠神祇於盖山之南」(遣唐使神祇を盖山の南に祠る)と見え、古くは遣唐使と関わりがあった。

【所載】古今集・羈旅・四〇六／新撰和歌・一八二／金玉和歌集・五一／和漢朗詠集・二五八／和歌体十種・三

五／深窓秘抄・七九／秀歌大体・一一一／百人秀歌・六／百人一首・七／新撰髓腦・五／俊頼髓腦・一七二／綺語抄・一／和歌童蒙抄・九五四／奥儀抄・八〇／万葉集時代難事・四七／柿本人麻呂勘文・三五／古来風体抄・二六七／西行上人談抄・一五／井蛙抄・二／江談抄・五／今昔物語集・一二六／古本説話集・八三／宝物集・二五八／世継物語・七九

【参考】古今集左注等により、安倍仲麿が唐で詠んだ歌として知られている。

二五三 あまのはらくもなきよひにむばたまのよわたる月のかはらくをしも

【異同】ナシ

【現代語訳】広々とした大空に雲一つない宵に、夜空を渡る月が隠れるのは惜しいよ。

【語句】○むばたまの「夜」にかかる枕詞。○かはらく 万葉集等では「入らまく」とある。傍記の「かくらく」の方が、月が隠れるという意になって歌意が通るので、これによって解釈した。

【所載】新千載集・秋上・四五一／万葉集・一七一六（旧一七一）天原 雲無夕尔 烏玉乃 宵度月乃 入卷 倍毛 アマノハラクモナキヨヒニヌバタマノヨワタルツキノイラマクラシモ あまのはらくもなきよひにぬばたまのよわたるつきのいらまくをしも

二五四 はなはだもふらぬ雨ゆへこちたくもあまのみそらのくもりあひつゝ

【異同】はなはだも―たなはたも（大）

【現代語訳】それほどひどくも降らない雨なのに、大仰にも天空がすっかり厚い雲に覆われているよ。

【語句】○ゆへ ゆゑ（故）。こゝは逆接的に原因や理由を表す。……なのに。……にもかかわらず。「はなはだも降らぬ雨故にはたづみいたくな行きそ人の知るべく」（万葉集・一三七四（旧一三七〇））。○こちたくも おおげさにも。大仰にも。○あまのみそら 天空のこと。「み」は美称の接頭語。

【所載】万葉集・二三二六（旧二三二）甚多毛 不零雪故 言多毛 天三空者 陰相管 ハナハダモフラヌユ キユエチタクモアマノミソラハクモリアヒツツ はなはだもふらぬゆきゆゑこちたくもあまつみそらはくもらひにつつ／人麿集Ⅲ・二〇二／夫木抄・七六七五

【参考】家持集Ⅱ・一四四に「いたくしも降らぬ雪ゆゑひさかたのあめより空はくもりあひつつ」という歌があ

る。

二五五 おほぞらはこひしき人のかたみかはおもふごとにながめらるむ  
さかゐの人ざね

【異同】ナシ

【現代語訳】大空は恋しい人の形見だろうか。いや、そうでもないのに、どうして物思いにふけるたびに大空が自然に眺められるのだろう。

【語句】○おほぞら 大空。空の広さ、はてしなさを強調している語。「おほ空はくれゆく秋のかたみかはをしむ袂もうちしぐれつつ」(後鳥羽院御集・八四七)。

【所載】古今集・恋四・七四三

【参考】作者名「さかゐの人ざね」(酒井人真)は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 長戸〕

二五六 おもひやるこゝろしそらになりぬればながむるかたにゆきもあふらん

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたへの思いを馳せた心が空に行ってしまい、私の心も上の空になってしまいましたので、私が物思いにふけて見つけていると、行き逢うこともあることでしよう。

【語句】○おもひやる 空に思いを馳せそこでの邂逅を願うという発想は「おもひやる心のそらにゆきかへりおぼつかなさをかたらましかば」(後拾遺集・七三二)や「思ひやる心はそらにあるものをなどか雲ぬにあひ見ざるらん」(新古今集・一二四九・熙子女王、朱雀院御集にも)などに見られる。○こゝろしそらに 「空」は、心を擬人化して空に在るということと「上の空」を掛ける。「おもひやる心のそらになりぬればけさはしぐるとみゆるなるらん」(蜻蛉日記・一七)。○ながむるかたに 空へ行ってしまった自分の心を「ながむる」という。

【所載】ナシ

二五七 おほぞらにわがおもふ人はやどらなむながむるかたにゆきもあふやと

【異同】ナシ

【現代語訳】大空に、私の思っている人はとどまっていほしいものです。私の物思いにふけているところで行き逢うこともあるうかと思えます。

【語句】○わがおもふ人 私がい思を寄せている人。「月草のうつろひやすく思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ」(万葉集・五八六(旧五八三))、「名にしおはばいざ事とはむ宮ごどりわが思ふ人はありやなしやと」(古今集・四一一)。○やどらなむ 「なむ」は他への願望を表わす終助詞。空での邂逅を期待して、相手へ呼びかけている。自身の心が空へ行ってしまったとする前歌とは逆に、ここではまだ空にさまよい出る以前の段階。○ながむるかたに 新編国歌大観(CD-ROM版)によると奈良・平安時代での「ながむるかた」の使用例は範永と俊成に各一例あるのみ。空を舞台としていることや末句の「ゆきもあふらん」「ゆきもあふやと」の類似も併せ考えると、二五六番歌と非常に近いところで詠まれたもののように思われる。

【所載】ナシ

二五八 おほぞらに我よぶ人もきこえぬにものおもふことになぞといはるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】大空で私を呼ぶ人の声も聞こえないというのに、物思いをすることに「あなたですか」と口に出してしまうことです。

【語句】○なぞ 「どうして」の意。「篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ」(古今集・五二九)。ここでは「我」に対比させ、「汝(な)」を掛けて解しておく。○いはるゝ 「るゝ」は自発。問いかけられてゐるわけでもないのに思わず口に出してしまう。

【所載】ナシ

二五九 あまぐものよそなるおもひつけしよりむなしきそらになりわたるかなきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】空に浮かぶ雲のように遠くにゐる人に思いを寄せた時から、何もない大空のように私の心もなつて

しまったことだ。

【語句】○あまぐものよそ 空に浮かぶ雲のように遠く。「天雲の外に見しより我妹子に心も身さへ寄りにしものを」(万葉集・五五〇(旧五四七))、「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから」(古今集・七八四)。○むなしきそら 漢語「虚空」の訓読。何も無い大空。自分の今の心情を喩える。「わがこひはむなしきそらにみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし」(古今集・四八八)。○なりわたるかな 自分の気持ちは「あまぐものよそなる」所へ行ってしまったので何も残っていない状態をいう。傍記異文「なきわたるかな」では、何も無い大空に向けて泣き続けている状態を表わす。

【所載】ナシ

二六〇 きみによりうきたるものをおもふにはこゝろもそらになりぬるものを

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたのせいであつらい物思ひをしているので、心までもが上の空になつてしまったことだなあ。

【語句】○きみにより あなたによつて。あなたのせいだ。「君により我が名はすでに龍田山絶えたる恋の繁きころかも」(万葉集・三九五三(旧三九三))、「君によりわがなは花に春霞野にも山にもたちみちにけり」(古今集・六七五)。○うき つらいの意の「憂き」に「浮き」を掛ける。「浮き」は「そら」の縁語。「人しれずうきたるこひをするひととそらふくかぜといづれまされり」(忠岑集・一〇二、躬恒)。○こゝろも 物思ひが「うき」て空にあるばかりか、心までもが、の意。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 青木〕

二六一 ひさかたのあまのそら<sup>つイ</sup>にもすまなくにひと<sup>もとかた</sup>はよそにぞおもふべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】遠い空の彼方に住んでいるわけでもないのに、あの人は、私のことをまったくかわりのない人と思つてゐるようだ。

【語句】○ひさかたの 天・雨・日・月・雲・光などを導く枕詞。○すまなくに 住んでいるわけでもないのに。主語を第四句の「ひと」とみる説（新編日本古典文学全集『古今和歌集』もある。○ひと 恋人など、特定の人を指す。○よそにぞおもふべらなる 「よそにおもふ」は、自分とは関係ないものと思う意。恋歌ではしばしば恋人との隔たりを表す語となる。「昨日までよそに思ひしあやめ草けふわが宿のつまと見るかな」（拾遺集・一〇九）。なお「べらなり」は、推定された状態を表す助動詞で、……のようすだ、……らしい、……するそうだ、の意。

【所載】古今集・恋五・七五一／元方集・三／新撰和歌・二〇四／綺語抄・五  
【参考】作者名「もとかた」は所載欄の文献に一致する。

## てるひ

二六二 あさひこがさす<sup>かげ</sup>やをかべのまつがえ<sup>のはイ</sup>のいつもしらぬこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】朝日がさす岡辺の松の枝がいつも変わらないように、絶えざる恋に、私も身を焦がしていることだ。

【語句】◎てるひ 「日の光」はもちろん、「朝日」や「入り日」「夕づく日」なども該当するが、「昼」、暮れる「日」「春の日」、あるいは単に「春」などもこの項には含まれており、必ずしも、照り輝く太陽、という意味ではなさそうである。○あさひこが 朝の太陽が。「あさひこ」は、朝日を擬人化し、親しみをこめた表現。「わが駒は早くゆかなん朝日子がやへさす岡の玉笹の上に」（拾遺集・五八四）。○まつがえの 松の枝が。松は常緑なので季節の区別がつかない、そこから、上三句が「いつともしらぬ」を導く序詞となる。○いつともしらぬ ひとつとわらない。いつもいつも。

【所載】古今六帖「ゆふづくよ」三五五／古今集・恋一・四九〇／猿丸集Ⅰ・二〇／猿丸集Ⅱ・一九／綺語抄・一六／近代秀歌・七三

【参考】古今六帖三五五番歌は「ゆふづくよさすやをかべのまつのはのいつともわかぬこひもするかな」という形になっており、古今集なども同じである。当該歌だけが特殊な本文ということになる。なお猿丸集にも載るが、古今集では「よみ人知らず」歌。

二六三 はるのひのゝどけきときにこぐふねはみなそこさへにしづかなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】春の日ののどかな時に漕ぐ舟は、水底までも静かなことであつた。

【語句】○みなそこさへに 水の底までも。「さへに」は添加の副助詞。「今はとてわが身しぐれにふりぬれば言の葉さへにうつるひにけり」(古今集・七八二)。

【所載】公忠集Ⅰ・三七／公忠集Ⅱ・五

【参考】公忠集には「春の日ののどけき浦をこぐ舟はみなそこさへぞしづかなりける」とあり、中宮の賀における屏風歌である。

二六四 くもはらふてるひもくもるやまなればあかきいせに月もみえぬなるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】雲を払いのける、照る日も曇るような山なので、明るいのにも見えないでしょう。

【語句】○くもはらふてるひもくもるやま 意味不明。伊勢集Ⅰには「……てる日こもれるやま」とあり、それによれば、雲を払いのける、照る日が籠もっている山なので、明るくて月も見えないのでしよう、の意となり、一応意は通じるように思われる。参考欄参照。

【所載】伊勢集Ⅰ・二四六／伊勢集Ⅱ・二四七／伊勢集Ⅲ・二四六

【参考】非常に解しにくい歌だが、伊勢集Ⅰによれば、「白雲のたなびきにけるみ山には照る月影もよそこにこそ聞け」の返歌となっていて、伊勢集Ⅱには「仁和寺なる人の」との詞書がある。仁和寺とはかつての伊勢の恋人であつた宇多法皇の住まわれているところである。白雲のたなびく山では、照る月影も今はよそごとに聞くばかりだ、という歌の「照る月影」は暗に伊勢を指し、返歌の「照る日籠もれる山」とは法皇の御所である仁和寺を指す、と説くのは関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』である。歌本文は伊勢集Ⅰ、詞書本文は伊勢集Ⅱという、系統の異なる本文を取り合わせた上での解に難はあるが、ともかく六帖本文のままでは解しにくい。なお、作者名「いせ」は、伊勢集によっても確認される。



二六五 たわすれていをぞねにけるあかねさすひるはさばかりおもひしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】うっかり忘れて、寝込んでしまったことだ。昼のうちはあれほど思っていたのに。

【語句】○たわすれて 「た」は接頭語。忘れて。「ぬばたまのその夜の梅をたわすれて折らず来にけり思ひしものを」(万葉集・三九五(旧三九二))。○いをぞねにける 「い」は眠る意の名詞。「いをぬ」「いもねられず」などと、寝る意の動詞「ぬ」とともに用いられることが多い。○あかねさす 日・昼・光などを導く枕詞。

【所載】 綺語抄・一〇

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

二六六 ひしくればいざとくねなむなつごろもぬぐかとすればあけぬといふよに

【異同】ナシ

【現代語訳】日が暮れたらさあ早く寝てしまおうよ。夏衣を脱いだかと思うと明けてしまうという(短い)夜に。

【語句】○ひしくれば 日が暮れたら。仮定条件。「し」は強意。○ねなむ 「ね」は動詞「寝」の連用形。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「む」は勧誘の意を表す助動詞。○なつごろも 夏の衣装。夏に着る着物。○ぬぐかとすればあけぬといふよに 暮れたかと思うとすぐに明けてしまう夏の夜の短さを誇張した表現。「夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのめ」(古今集・一五六・紀貫之)と同じ趣向。

【所載】ナシ

二六七 ともにこそ花をもみむとまつ人のこぬものからにをしき春かな

【異同】ナシ

【現代語訳】一緒に花をも見ようと待つ人は来ないにきまつているけれど、(過ぎ去ってしまうのが)惜しい春ですよ。

【語句】○こぬものからに 来ないにきまつているけれど。「ものから」は確定と考えられることの逆接を表す。……だけでも。「来めやとは思ふものから蛸の鳴く夕暮は立ち待たれつつ」(古今集・七七二)。所載欄の後撰

集・貫之集では「こぬものゆゑに」。

【所載】後撰集・春下・一三八／貫之集Ⅰ・八三九

【参考】当該歌がなぜ「てるひ」の項にあるのか、不審。

二六八 いりひさすときぞかなしきむらとりのをのがちりぐしらぬとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】入目がさす時に心が痛みますよ。（朝立つときは）群がっていた鳥が、めいめい散り散りになつて  
いるのを知らないと思うので。

【語句】○かなしき 心が痛む。切ない。悲しい。「かなし」はしみじみと深く感じて心が強く揺り動かされる  
さまを広く表現する語。○むらとり 群がっている鳥。「風わたる梢よりたつむら鳥のおりある見れば木の葉な  
りけり」（夫木抄・六四九一）。

【所載】ナシ

二六九 いづこにかやどりとるらんあさひこがさすやおかべのたまざゝのうへに

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人はどこに宿をとっているのでしょうか。朝日が、丘のあたりの美しい笹の上に射していますよ。

【語句】○あさひこ 朝日。朝の太陽。「こ」は親しみの意を表す接尾語。○たまざゝ 「たま」は美称の接頭  
語。「わが駒ははやくゆかなんあさひこがやへさすをかのたまざさのうへに」（拾遺集・神楽歌・五八四）。

【所載】古今六帖「やどり」一三二一

二七〇 みねたかきかすがの山にいづるひはくもるときなくてらすべらなり  
ないしのすけよるか

【異同】ナシ

【現代語訳】峰高くそびえる春日山から昇る太陽は、曇る時もなくずっと地上を照らすことでしよう。

【語句】 ○ないしのすけよるか 藤原因香。生没年未詳。寛平九（八九七）年従四位下掌侍となり、のちに典侍となる。古今集に四首、後撰集に一首入集。○かすがのやま 藤原氏の氏神である奈良の春日大社の背後の山。

【所載】 古今集・賀・三六四／新撰朗詠集・六二八

【参考】 作者名「ないしのすけよるか」は所載欄の文獻に一致する。古今集の詞書によると醍醐天皇の皇子保明親王の誕生に際して詠まれた歌。保明親王の母は藤原基経女の中宮穩子。藤原氏の女性が生んだ皇子を春日山から出る日にたとえた。

〔以上五首担当 三浦〕

二七一 こひつゝもけふはくらしつあかねさすあすのはるひをいかでくらさむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】（あの人を）恋い慕いながら今日はなんとか暮らした。しかし、明日の長い春の一日をどのようにして過ごそうか。

【語句】 ○こひつゝも 恋しく思いながらも。○あかねさす 「はるひ」の「ひ」にかかる枕詞。○はるひ 春の一日。昼の長い春の日中をいうことが多い。

【所載】 古今六帖「かすみ」六三〇／拾遺抄・恋上・二四八／拾遺集・恋一・六九五／万葉集・一九一八（旧一九一四）恋乍毛 今日者暮都 霞立 明日之春日乎 如何将暮 コヒツツモケフハクラシツカスミタツアスノハルヒイカデクラサム こひつゝもけふはくらしつあすみたつあすのはるひをいかにくらさむ／人麿集Ⅰ・一八九／人麿集Ⅱ・二八七／赤人集Ⅰ・一九五／赤人集Ⅱ・七六／赤人集Ⅲ・八四／綺語抄・一三四／桐火桶・五【参考】 類想の歌として「恋ひつゝもけふはあらめどたましくしげ明けなむあすをいかにくらさむ」（万葉集・二八九六（旧二八八四））、「恋ひつゝもけふは有りなまたましくしげ明けんあしたをいかでくらさむ」（拾遺集・六九六）等がある。

二七二 くもゝなくなぎたるあさのてるひにもおもはれまさるわれやなになり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 雲も無く穏やかに晴れた朝の輝く日の光にも、おのずと悩みが増してくる、この私は、いったい何

なのだろう。

【語句】○くもゝなくなぎたるあさ 雲も無く穏やかな朝。「雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ」(古今集・七五三)。○おもはれまさる 自然にも思いが募ってくる。「れ」は自発の助動詞。「思はれまさる」に「晴れまさる」を掛けている。○われやなになり 私はいったい何なのだろう。山下道代「われやなになり」(『みみらくの島』青簡舎 二〇〇八年)。

【所載】ナシ

二七三 おくやまのいはかげもみぢゝりぬべくてるひのひかりみるときなくて  
せきを

【異同】いはかけもみち―岩垣もみち(大)

【現代語訳】山の奥深くの岩の蔭の紅葉は散ってしまうだろう、明るく照る日の光を見る時もなくて。

【語句】○せきを 藤原閑雄。参議真夏の五男。平安初期の歌人・漢詩人。東山進士と呼ばれた。延暦二四(八〇五)年、仁寿三(八五三)年。○いはかげもみち 岩蔭にあつて、光が当たらない紅葉。作者自身の暗喩。○てるひのひかりみるときなくて 明るく照る太陽の光を見るときもなくて。「てるひのひかり」は、朝廷の恩顧の暗喩。

【所載】古今集・秋歌下・二八二／家持集Ⅰ・二一六／家持集Ⅱ・三〇三／綺語抄・一五七／和歌童蒙抄・六八八／古来風体抄・二五三

【参考】作者名「せきを」は古今集に一致する。

二七四 つくばねの雲けふまでにてるひにもわがそでひめやいもにあふまで  
つイ

【異同】ナシ

【現代語訳】つくば山の峰の雲が今日程までに強く照り輝いている日であっても、私の袖が乾くだろうか、いや乾くことはない。愛しいあの女性に会うまでは。

【語句】○つくばね 常陸国の歌枕。筑波山。○けふまでに 「今日までに」と解しておく。諸本みな「ふ」のところ「つイ」の傍記あり。これに拠って「消つまでに」と読んだ方が、意味はわかりやすい。○わがそで

ひめや 私の袖が乾くだろうか、いや乾くことはない。「ひめや」の「ひ」は上一段活用動詞「乾（ひ）」の未然形、「め」は推量の助動詞「む」の已然形、「や」は反語を表す助詞。○いも 男性から妻や恋人を親しんで呼ぶ語。

【所載】ナシ

【参考】一〇七番歌「みな月のつちさへわれてる日にもわが袖ひめやいもにあはずて」と、下句が非常に類似している。

二七五 ながむればくるしきものを山のはにいりひはやさしはやくもれなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】（照る日の昼間）物思いに耽って過ぎすつらいもののなに（なかなか暮れない）。入り日はやく射して一刻も早く暗くなってほしい。

【所載】○ながむれば もの思いにふけっていると。「ながむ」は、ぼんやりとももの思いにふけるさまを表わす。○いりひはやさし 「入り日はやく射し」と解しておく。入り日はやく射して。○はやくもれなん 解しにくい句だが、はやく暮れ方になって暗くなってほしい、の意と解しておく。この歌の下句は、貫之集Ⅰの「いり日とくさしはやくもれなん」の方がわかりやすい。

【所載】貫之集Ⅰ・六六三

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

二七六 ひのひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとも花さきにけり  
ふるのいまみち

【異同】ナシ

【現代語訳】日の光は藪をも分け隔てなくさして、古く忘れ去られたようなこの里にも花が咲いたことだよ。

【語句】○ひのひかり 日光。所載欄の古今集では「石上のなむまつが宮づかへもせで石上といふ所にこもり侍

りけるを、にはかにかうぶり給はれりければ、よろこび言ひ遣はすとてよみて遣はしける」と詞書にあり、官途が開けたのを機に歌を送る状況から、この日の光は天皇の恩恵の比喩となる。○いそのかみ 奈良県天理市布留町、石上神宮の周辺。「ふる」に掛かる枕詞。古今集では、なむまつが籠もっていた地名でもある。○花 当該歌では実際の開花を指すが、古今集ではそこに、祝意を託す。

【所載】古今集・雑上・八七〇／三五記・二三五

【参考】作者名「ふるのいまみち」は、所載欄の文献に一致する。布留今道は寛平十（八九八）年に三河介。従五位下の記録が確認される。

なお、古今集の詞書に沿って解釈すれば「天皇の恩沢はどんな処にも分け隔てなく及んで、石上のあなたの許にも喜びの花が咲いたことですね」となる。

二七七

つねよりものどけかるべきはるひすらひかりに人のあはざらめやは

太政大臣実頼

【異同】ナシ

【現代語訳】いつもよりもゆつくりと過ぎていくはずの春の日なのだから、その春の光に人（あなた）が出会わないことがあるでしょうか。いや、きっと出会いますよ。

【語句】○つねよりものどけかるべき 所載欄の後撰集によれば、当該歌は「弥生にうるふ月ある年、司召のころ、申文にそへて左大臣の家につかはしける」の詞書を持つ紀貫之の「あまりさへありてゆくべき年だにも春にかならずあふよしもがな」の返歌。左大臣は実頼のこと。つまり閏三月によつて春が四か月間と長くなっているのので、「常よりものどけかるべき」である。なお、閏三月がある年は、貫之と実頼との関係から考えると、天慶五（九四二）年となる（新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注など）。ちなみに、凡河内躬恒には「閏三月侍りけるつごもりに」の詞書で、「つねよりものどけかりつる春なれど今日のくるはあかずぞありける」（拾遺集・七八）がある。○はるひすら 「春日」とは「春の一日」または「春の日差し」を意味する。ここでは前者。「春日すら」は、「春日すら田に立ちつかる君はあはれ若草のつまなき君が田に立ちつかる」（万葉集・一二八九（旧一二八五））など例はあるものの、解しにくい。後撰集の「春なれば」のほうが歌意が通りやすいので、現代語訳にはこちらを用いた。

【所載】後撰集・春下・一三六

【参考】作者名「太政大臣実頼」は藤原実頼のこと。清慎公と諡された。所載欄の後撰集における作者名「左大臣」は、後撰集成立時の官職。

二七八 日のひかりあひみてうとむあさつゆのきえぬさきにもあひみてしがな

【異同】ナシ

【現代語訳】日の光を受けることを嫌う朝露が消えないうちにまた（あなたに）逢いたいことです。

【語句】○うとむ 嫌がる。この歌は『新続古今集』に収められているが、そちらの「消えむ」のほうが意が通りやすい。○あひみてしがな 逢いたいものだ。

【所載】新続古今集・恋二・一一五五

二七九 ゆふづくひさすやをかべのつくるやのかたちをよしみしかぞよりくる

【異同】ナシ

【現代語訳】夕日の射す岡に造った建物の形がいいのでこうして寄ってくるのだ。

【語句】○ゆふづくひ 夕日。○をかべにつくるや 岡の辺りに作った建物。『万葉集』では「かはべにつくるや」。○かたちをよしみ 「容貌（かたち）をよしみ」。姿が良いので。上三句はこの後を導く序詞。○しかぞよりくる このように寄ってくる。万葉集現訓では「うべよそりけり」。

【所載】古今六帖「さふの思」二一五九／万葉集・三八四二（旧三八二〇）夕附日 指哉河辺尔 構屋之 形平宜美 諾所因来 ユフヅクヒサスヤカハヘニツクルヤノカタチヲヨシミシカゾヨリクル ゆふづくひさすやはにつくるやのかたをよろしみうべよそりけり

二八〇 草も木もおもひしあればいづる日のあけぐれこそはたのむべらなれ

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木も思いを持っているので、日が出る、その直前の暗い頃を頼りにしているのです。（同じよ

うに、とるにたりない私共も、あなたさまのご威光に浴せる夜明け頃を頼みにしております」

【語句】○草も木も 草木に人々を喩える。この歌は、貫之集によると「延長五年九月右大臣殿前裁合のまけわざ」の際のもので、この前裁合（せんざいあはせ）の負態（まけわざ）に関わった人々を指す。前裁とは建物の前庭や中庭に草木を植え込むことで、前裁合とは実際の植え込み以外に州浜台（すはまだい）の上に草木を造花などで作り込み、これを物合わせとして行った。○いつる日 この歌では権力者の威勢を示す。○あけぐれ 明け暗とも明け暮れとも取れるが、ここでは前者。夜明け前の暗い状態を指す。「女のもとより、くらきにかへりてつかはしける」の詞書で源順は「あけぐれのそらにぞ我は迷ひぬる思ふ心のゆかぬまにまに」（拾遺集・七三六）と詠んでいる。○たのむべらなれ 「日がでない」と『思ひ』はなくなってしまうので、日が出ようとする明け暗を頼りとする」（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』風間書房、一九九七年）。

【所載】貫之集Ⅰ・六八八／貫之集Ⅱ・七三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本〕

二八一 われおもふきみならんとや山のはにゐるひを見つゝいでゝゆかめや

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしを思つて下さるあなたにちがいないと（一刻も早く）日が山の端に入るのも（もどかしく夜をまちかねて）、家を出て（あなたに会いに）行けるだろうか、行けはしない。

【語句】○山のはにゐるひ 「山のは」は山の端。日が入る、また月が出るところとして歌に詠まれる。山の端に入る太陽。「あふことをこよひとおもはばゆふづくひいるやまのはもうれしからまし」（金葉集二度本・四一四・雅定）。○いでゝゆかめや 家までで行けるか。いや行けない。「め」は推量・仮定の助動詞「む」の已然形。「や」は反語。

【所載】ナシ

【参考】夕刻恋人に会うため家を出たくとも出来ないことを歌ったと解した。

はるの月

二八二 あさがすみはるひのくればこのまよりいさよふ月をいつしかも見ん



【異同】ナシ

【現代語訳】朝霞が立ち、春の夕暮れになったら、木の間よりなかなか出てこない月を、早く見たいものです。  
【語句】◎はるの月 春の月。この前の歌群が「照る日」であつたのに対し、以下「月」の歌は春夏秋冬に分ける。○あさがすみ 朝霞。朝立つ霞。秋にも春にもいう。「秋の田の穂の上に霧らふあさがすみいづへの方にあが恋ひやまむ」（万葉集・八八）。○はるひのくれば 春の日の暮れるならば。「くれば」は動詞「暮る」（下二段）の未然形に「ば」の接続した形。○いさよふ月 出るのをためらっているような月。「いさよふ」は進もうとして進めない状態をいう。○いつしかも いつか早く。

【所載】万葉集・一八八〇（旧一八七六）朝霞 春日之晩者 従木間 移歴月乎 何時可將待 アサカスミハルヒノクレハコノマヨリウツロフツキノイツシカマタム あさがすみはるひのくればこのまよりうつるふつきをいつとかまたむ／人麿集Ⅲ・七／赤人集Ⅰ・一六九／赤人集Ⅱ・五一／赤人集Ⅲ・五七／和歌童蒙抄・二五

二八三 はるくれば葉がくれおほき夕づくよおぼつかなしもはなかげにして

【異同】ナシ

【現代語訳】春となると（木の葉がしげり）葉に隠れた（見えない部分が）多い月、（はつきりとみたいと思つても）なかなか見えない、花にかくれがちで。

【語句】○夕づくよ 夕月夜。夕月のこと。夕月の光。「春霞たなびく今日の夕月夜清く照るらむたかまつの野に」（万葉集・一八七八（旧一八七四））。○おぼつかなし 見たい、聞きたいと願っているのに、かなえられない時のもどかしい気持ちをいう。「夕月夜おぼつかなきをたまくしげふたみの浦はあけてこそ見め」（古今集・四一七）。○はなかげ 花の咲く木の下。

【所載】後撰集・春中・六二／万葉集・一八七九（旧一八七五）春去者 紀之許能暮之 夕月夜 鬱束無裳 山陰尔指天 ハルサレバキノコノクレノユフツクヨオボツカナシモヤマカゲニシテ はるさればこのくれおほみゆふづくよおぼつかなしもやまかげにして／夫木抄・一五八五／人麿集Ⅲ・九／赤人集Ⅰ・一七一／赤人集Ⅱ・五三／赤人集Ⅲ・五六／綺語抄・一八

二八四 あれたればかげもかくれぬわがやどのはのどかなる春のよの月

【異同】ナシ

【現代語訳】荒れていて（遮るものがないため）くつきりとさやかに見える我がやどは、「庭のどかなる」（とでもいうべき）春の夜の月（の欠くところなさよ）。

【語句】○のどかなる 気象や自然現象に用いるのは後代の用例。平安時代の用例は天皇の治世の安泰であることという場合に限られる。従ってここでは庭を称して「のどかなる」といったところに詠み手の興じるころがある。「のどかなる光をそへて池水にちよとすむべき秋の夜の月」（続拾遺集・七四〇・俊忠）、「あまつ空けしきもしるし秋の月のどか成るべき雲の上とは」（拾遺愚草・九九七）。

【所載】ナシ

二八五 わがやどにさきたるむめの月きよみよな／＼見せん君をこそまて

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家に咲く白梅、月の明澄なること、夜毎あなたにこそお見せしたいとお待ちしていますのに。（おいでになりません）。

【語句】○月きよみ 月が清らかなので。「きよみ」は形容詞「清し」の語幹に接尾語「み」のついた形。原因・理由を表す。……なので。……のゆえに。○よな／＼ 夜な夜な。毎晩毎晩。夜毎に。○君をこそまて 「こそ」は係助詞。「まて」は「待つ」の已然形。逆説の意味が生まれる。

【所載】続古今集・春上・六八／万葉集・二三五三（旧二三四九）吾屋戸尔 開有梅乎 月夜好美 夕夕令見 君平祚待也 ワガヤドニサキタルウメヲツキヨミヨナヨナミセムキミヲゾマツヤ わがやどにさきたるうめをつくよよみよひよみせむきみをこそまて／人麿集Ⅰ・一六六／人麿集Ⅱ・一一／家持集Ⅰ・一九／家持集Ⅱ・一九／万代集・一二一

〔以上五首担当 平野〕

## 夏の月

二八六 なつのよのしもやをけるとみるまでにあれたるやどをてらす月かげ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の夜の霜が置いたのかと思うほどに、荒れた家の庭を照らす白じろとした月の光であるよ。

【語句】◎夏の月 二八九番歌のように短か夜との関係で詠まれることが多いが、例歌では明るい月光などもみられる。○しもやをける 霜や置ける。霜が置いたのかしら。夏の月光を霜に見立てた例として「つきかげになべてまさこの照りぬれば夏の夜ふかく霜かとぞみる」（月照平砂夏夜霜）千里集・三三二）などがある。○とみるまでに……と思うほどに。「あさぼらけ有明の月と見るまでによしのの里にふれる白雪」（古今集・三三二）を踏まえ、冬を夏に換え、月の位相を非現実から現実のものに換えた趣向。○やど 屋敷内の庭。

【所載】新撰万葉集・四五／新撰和歌・一五一／万代集・七三〇／寛平御時后宮歌合・五〇

二八七 夏の月ひかりをましてゝるときはながるゝ水にかげろふぞたつ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の月がひとときわ光を増して照るときは、流れる水に光がほのめいて、ゆらゆらとかげろうが立ちのぼるように見えるよ。

【語句】○かげろふ 「かぎろひ」の転。地面から暖かい空気がゆらゆらと立ちのぼる現象。ここでは水にゆらめく月光の比喩。

【所載】新撰万葉集・二八七／興風集Ⅰ・二六／興風集Ⅱ・三四／寛平御時后宮歌合・七四

二八八 かさゝぎのみねとびこえてなきゆけば夏のよわたる月ぞかくるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】カササギが峰を飛び越えて鳴きながら遠くへ行くのを、目で追っていると、夏の短か夜、空を渡って行く月はもう西の山の端にかくれてしまふことだ。

【語句】○かさゝぎ からす科の鳥。鳥よりやや小さく、腹面と肩羽が白、他は黒。○夏のよ 短い夜を意味する。○月ぞかくるゝ 月が西の山の端に沈む。「かささぎ飛びて山の月曙なり」（全唐詩・一函第八冊・上官儀）による（新日本古典文学大系『後撰和歌集』）。

【所載】古今六帖「かささぎ」四四九〇／後撰集・夏・二〇七／新撰万葉集・二八九／夫木抄・一二七一〇／和

歌童蒙抄・七九四／兼載雜談・八

【参考】上句の同じ歌に「かささぎのみねとびこえてなきゆけばみやまくるゝ月かとぞみる」（赤人集Ⅰ・九二、千里集・七三）がある。

二八九 なつのよはまだよひながらあけぬるをくものいづこに月やどるらむ  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の今夜はまだ宵の口だと思っていたら、そのまま夜があけてしまったが、この分では月は西の山に沈むところまで行きつかなかったらう。一体雲の中のどこに宿っているのだらう。

【語句】○よひながら 宵の状態のままで。「よひ」は日が暮れて暗くなった頃から夜中の前まで。○あけぬるを 夜が明けてしまったが。○月やどるらむ 月の擬人化。

【所載】古今集・夏・一六六／新撰和歌・一五九／新撰朗詠集・一四五／深養父集Ⅰ・一一／深養父集Ⅱ・七／時代不同歌合・一三九／後六々撰・七八／百人秀歌・三三／百人一首・三六／近代秀歌・三五／和歌用意条々・九／桐火桶・七一／井蛙抄・一四四

【作者】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

二九〇 こぬ人をしたにしまてば夏のよの月をあはれといひつゝぞをる

【異同】ナシ

【現代語訳】訪ねてこないあの人を、心の中で深く思い待つので、それと人に知られぬように夏の夜の月を、あきれいだ、などと繰り返して言って眺めているのです。

【語句】○したに 心の中で。○あはれ 普通はあまり褒めない夏の月なのに「あはれ」と賛嘆するのである。ああ美しい。○いひつゝぞをる 繰り返し言っては待っていることよ。所載欄の文献は「いはぬ夜ぞなき」が多い。

【所載】拾遺集・雑賀・一一九五／貫之集Ⅰ・八〇／和歌体十種・二三／和歌十体・一〇／三十人撰・一八／三十六人撰・二七／深窓秘抄・七二／奥儀抄・一一四

【参考】作者名はないが貫之の作。延喜一七（九一七）年八月、宣旨による詠進歌。

〔以上五首担当 斎藤・林〕

二九一 ことならばやみにもあらなん夏のよのてる月かげぞ人だのめなる<sup>はい</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】どうせ同じことなら闇夜であつて欲しい、夏の夜に照る月の光はかえつて虚しい期待を抱かせる。

【語句】○ことならば 「こと」は「如」と同根とされる。どうせ同じことならば。「ことならば咲かずやはあらぬ桜花見るわれさへにしづ心なし」（古今集・八二）。○夏のよのてる月かげ 夏の夜に照る月光。夏の夜の月は、「夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ」（古今集・一六六、古今六帖・二八九）や、「夏の夜の月はほどなく明けぬれば朝のまをぞかこちよせつる」（後撰集・二〇六）など、すぐに明けてしまつてよく見ることでできないものとされるが、この歌は特にそうした意味はない。所載欄の拾遺集では「秋の夜のなぞ月影の」となっており、本来は「秋の夜の月」であつた可能性が高いと考えられる。○人だのめ 人をあてにさせること。実際は期待に反する場合に用いられることが多い。「わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふものぞ人頼めなる」（古今集・五六九）。新日本古典文学大系『拾遺和歌集』脚注は「人目を忍んで訪ねてくる人 wait しているのだから、闇夜であつてほしい」と、人の来ないのを明るい月のせいにする と解するが、「月夜」には男性が訪れるものとされる（古橋信孝『雨夜の逢引』大修館書店、一九九六年）から、「月夜」には人が待たれるから、どうせ来ないものならば闇夜がよい」とする『拾遺和歌集増抄』（未刊国文古註釈大系）の一説をとりたい。

【所載】古今六帖「人を待つ」二八二五／拾遺抄・恋・三六二／拾遺集・恋三・七九六

二九二 さみだれのたそがれ時の月かげのおぼろけにやはわが人をまつ

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨の夕暮れ時に見える月光はぼんやりと霞んではつきりしないが、そんなおろそかな気持ちで私は恋しい人を待っているのではない。

【語句】○さみだれのたそがれ時の月かげの ぼんやりと霞んでいるさまを表す「おぼろ」にかかる序詞。○お

ぼろけにやは「おぼろけ」は、並一通りである、いいかげんだの意で、多く打消、反語表現を伴う文脈で用いられる。反語「やは」によって意味が反転する。○わが人「わが」の「が」を主格とみるが、他にあまり例のみられない表現。躬恒集の三本においても全て「わが」となっている。

【所載】古今六帖「人を待つ」二八三〇／玉葉集・恋二・一三九七／万代集・二一〇四／夫木抄・三〇二七／躬恒集Ⅱ・二七一／躬恒集Ⅳ・九四／躬恒集Ⅴ・二二〇

### 秋の月

二九三 このまよりもりくる月のかげみればこゝろづくしのあきはきにけり

【異同】作者名ナシ―いせ（御・桂・大）

【現代語訳】木々の隙間から漏れてくる月の光を見ると、もの思いの限りを尽くす秋がやってきたなあと思うのである。

【語句】◎秋の月 「月」は四季それぞれと結びつくが、秋の月が特に趣深いものとして詠まれるのは拾遺集以後。この歌はその先蹤とされる。○こゝろづくし 心尽くし。もの思いの限りを尽くさせる。秋のもの思い、「悲秋」は、宋玉の「九弁」、潘岳の「秋興賦」などの漢詩に学んだ発想（小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（下・Ⅰ）塙書房、一九八五年）。片桐洋一『古今和歌集全評釈』には「思い悩んで心を使い果たして何も考えられなくなる」とある。「思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふるわれかも」（万葉集・六八五・旧六八二）、「渡りてはあだになるてふ染河の心尽くしになりもこそすれ」（後撰集・一〇四七）など恋歌に用いられる場合が多い。月をみて秋のもの思いを尽くす歌としては「月見ればちぢにものこそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」（古今集・一九三）がよく知られている。

【所載】古今集・秋上・一八四／新撰和歌・二四／小町集Ⅰ・一〇五／古来風体抄・二四四／桐火桶・七七

【参考】底本に作者名はないが、他の三本には「いせ」とある。伊勢集にはみられず、古今集では「よみ人知らず」である。

二九四 こころもではさむからねども月かげをたまらぬあきの雪かとぞみる

【異同】ナシ

【現代語訳】袖のあたりが寒く感じられるわけではないが、袖に映る月光を積もることのない秋の雪かと見まがうのである。

【語句】○ころもで 「袖」の歌語。上二句は「秋田刈る飯廬をつくり我が居れば衣手寒く露ぞおきける」（万葉集・二一七八・〈旧二二七四〉）、「夕されば衣手寒しみ吉野の吉野の山にみ雪降るらし」（古今集・三二七）といった万葉集以来の「衣手寒し」という常套表現をもとにした言い回し。○たまらぬ 積もらぬ。○あきの雪 「月光」を「秋の雪」に見立てる趣向。「雪」を「月光」に見立てた「朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪」（古今集・冬・三三三）とは逆の趣向。類歌に「ひく琴の音のうちつけに月影を秋の雪かとおどろかれつゝ」（貫之集・四四五）がある。

【所載】後撰集・秋中・三二八

【参考】作者については二九八番歌参照。

「月光」を「雪」に見立てるのは漢詩文によく見られる趣向だが、特に「秋の雪」という語は、「遍覧古今集、都無秋雪詩（遍く古今の集をみるに、都て秋雪の詩なし）」（和劉郎中望終南山秋雪・白氏文集・二六二四）という白詩語を利用したものという（渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年）。

二九五 ちるもみぢよるもみよとや月かげのこずゑのこらずてりわたるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】散る紅葉を夜も見よというので、月光が稍全体余すところなく照りわたっているのだろうか。

【語句】○ちるもみぢよるもみよとや 散る紅葉を夜も見よというので……か。「や」は疑問。散る紅葉が夜見えるほど月影が明るいとするのは、「佐保山のははそのもみぢ散りぬべみ夜さへ見よと照らす月影」（古今集・二八一）、「照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉を夜もみよとか」（後撰集・四二八）など例が多い。○てりわたるらん 「らん」は疑問の「や」を受け、現在の事実について、その原因・理由を推量する。「ひさかたの月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ」（古今集・一九四）。

【所載】ナシ

【参考】作者については二九八番歌参照。

〔以上五首担当 中野〕

二九六 秋の月ひかりさやかにもみぢばのおつるかげさへみえわたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月の光が明るく冴えて、もみじ葉の散りゆく姿まで見えわたることよ。

【語句】○さやかに 清かに。はつきりと明るく冴えているさま。○かげさへ 「かげ」は光によって見える物の形や姿のこと。「さへ」によって、「もみぢばのおつるかげ」だけでなく、視界のすべてのものが「さやかにみえわたる」さまを詠み出している。○みえわたる 広い範囲にわたってずっと見える。

【所載】後撰集・秋下・四三四

【参考】後撰集では、「延喜御時、秋歌めしありければ 貫之」となっている。作者については二九八番歌参照。

二九七 つねよりもてりまさるかな山のはのみぢをわけていづる月かげ

【異同】ナシ

【現代語訳】いつもより美しく照り輝いているなあ。山の端の紅葉を押し分けながら昇って出てくる今夜の月の光は。

【語句】○山のはのもみぢをわけていづる月かげ 山の端を出る月が峯の紅葉を分けて出るから、つねよりも照りまさる、とした屏風歌らしい趣向。参考欄参照。

【所載】拾遺抄・雑下・五〇三／拾遺集・雑上・四三九／貫之集Ⅰ・四〇／和歌童蒙抄・三二一

【参考】延喜十四年十一月十九日（貫之集Ⅰが十二月とするは誤）醍醐第一皇女勸子内親王裳着のときの屏風歌。この歌の作者については、二九八番歌参照。

二九八 よにかくれきつるかひなくもみぢ<sup>もイ</sup>ばの月もあかくもてりまさるかな

已上五首貫之

【異同】ナシ

【現代語訳】夜の暗さにかくれてきたかいもなく、もみぢ葉に照る月もいっそう明るく照りまさることだ。

【語訳】○よにかくれ 夜に隠れ。夜の暗さにかくれて。○もみぢばの月もあかくもてりまさるかな 紅葉した



もみぢ葉に照る月も、いつそう明るく照りまさることだ。「もみぢばの」は文脈上「てりまさるかな」へつづく。「の」は主格を表わす。所載欄の貫之集Ⅰでは「もみぢばも月にあかくぞ」となっており、その方が歌意はよく通る。

【所載】貫之集Ⅰ・二四七

【参考】貫之集Ⅰの五〇二番には、「人しれずきつる所に時しもあれ月のあかくもてりわたるかな」という非常に近似した歌がある。当該二九八番歌は延長六（九二八）年、貫之集Ⅰの五〇二番歌は天慶五（九四二）年の作。どちらも貫之の屏風歌。

二九四番から二九八番までの五首を「已上五首貫之」としているが、二九五番を除く四首は所載欄の文献でも貫之の作となっている。

二九九 もゝしきのおほみやながらやそしまをみるこゝちするあきの夜の月  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】ここはもしきの大宮の内でありながら、あたかも大海原に浮かぶ八十島を見ているような気分になる秋の夜の月であることよ。

【語句】もゝしきの「おほみや」にかかる枕詞。○やそしま たくさんの島々。参考欄に述べるように、この歌の詠まれた賀は、延喜十九（九一九）年、九月十三夜の月をめでの催しであったと思われる。「松浦沙」のある前栽を、海原に浮かぶ島々と見立てての詠。

【所載】拾遺集・雑秋・一一〇六／躬恒集Ⅰ・二二〇／躬恒集Ⅲ・一二六／躬恒集Ⅳ・一〇／躬恒集Ⅴ・一〇五／袖中抄・九二三

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

躬恒集Ⅳ・一〇番歌の詞書には、「清涼殿の南のつまにみかは水流れいであり、その前栽に松浦沙あり、延喜九年九月十三日に賀せしめたまふ、題に、月にのりてささらみづをもてあそぶ、詩歌こころにまかす」とある。ただしその年次は、拾遺集や躬恒集Ⅴにより、延喜十九年が正しいと思われる。

三〇〇 しらくもにはねうちかはしとぶかりのかずさへみゆる秋のよのつき

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲のある空に羽を連ねながら飛びゆく雁の、数まで見えるほどにさやかな秋の夜の月であることよ。

【語句】○はねうちかはし 「うち」は接頭語。「かはし」は交はし。羽をまじえ連ねて。

【所載】古今集・秋上・一九一／新撰万葉集・三九四／新撰和歌・四四／和漢朗詠集・二五九／俊頼髓脳・一六二／和歌口伝抄・六

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

三〇一 月みればちづにものこそかなしけれわが身ひとつのあきにはあらねど  
おほえのちさと

【異同】ナシ

【現代語訳】月を見るとあれこれと物悲しい気持ちになるよ。私一人の秋ではないのだけれど。

【語句】○ちづに さまざまに。下句の「ひとつ」と対比。○わが身ひとつのあきにはあらねど 「悲秋」の概念を踏まえた上で「その悲しい秋は我が身だけのものではないけれど」という思いを詠んだもの。「おほかたの秋くるからに我が身こそ悲しきものとおもひしりぬれ」（千里集・三八）。

【所載】古今集・秋上・一九三／是貞親王家歌合・六二／時代不同歌合・一二七／後六々撰・一〇一／百人秀歌・三〇／百人一首・二三／定家十体・二一四／古来風体抄・二四五／西行上人談抄・一〇／近代秀歌・三八／詠歌大概・二七／桐火桶・八〇

【参考】作者名「おほえのちさと」は所載欄の文献に一致する。なお、この歌は、古今集の古注以来、白氏文集・卷十五の「燕子楼中霜月夜 秋来只為一人長」（燕子楼中霜月の夜 秋来りて只一人のために長し）によることが指摘されている。

三〇二 わがやどをてりみつあきの月影はながきよみれどあかずぞありける  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の家を隅々まで照らす秋の月の光は、長い夜の間見ているけれど、それでも見飽きないことだよ。  
【語句】○わがやどを 私の家を。「を」という目的格の格助詞は、第二句の「てりみつ」という四段活用自動詞と整合しないが、諸本のこの部分に異同はない。伊勢集Ⅰではこの部分が不完全であり、Ⅱ・Ⅲでは「わがやど」となっている。ここでは仮に、「てりみつ」を下二段他動詞に置き変えて訳した。○ながきよ 秋の夜長を「ながき夜」と詠んだ。所載欄の伊勢集の詞書によると、八十賀の屏風歌なので、「夜」に「代」を掛けて長寿をことほいだ歌となる。

【所載】伊勢集Ⅰ・一四一／伊勢集Ⅱ・一三九／伊勢集Ⅲ・一三八

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。この歌についての伊勢集の詞書は、人物の呼称について諸本間の異同が大きい。貫之集の詞書に見える呼称など他の資料も参照して検討すると、清和天皇七宮貞辰親王の母、藤原基経女佳珠子の八十賀のために、佳珠子の弟にあたる藤原忠平が伊勢に依頼した屏風歌かと考えられる。参考、山崎正伸『貫之集』における御息所について（『解釈』一九九三年五月）。

三〇三 ひさかたの月のまどかになるころはもみぢゝるともしられざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】月が満月になる頃は、紅葉が散ってもそれとわからないことだよ。

【語句】○ひさかたの 「月」にかかる枕詞。○月のまどかになる 月が満ちて満月になる。伊勢集の詞書には、「円成寺に后宮おはしますおん供に参りて」とある。すなわちこれは伊勢が后宮温子の円成寺行啓に際して詠んだ歌であって、「まどかになる」のところに円成寺の「円成」を詠み込んだものと見られる（関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』風間書房 一九九六年）。○もみぢゝるともしられざりけり 月も紅葉も、どちらも「あかし」なので、月の明るい満月の頃には、紅葉が散っても、紛れてわからないものだったんだあとと詠んだ。「夜にかくれ来るかひなく紅葉ばの月もあかくも照りまさるかな」（古今六帖・二九八）。信明集に「こと御屏風の絵に、もみぢりたるをみる人々」として「ほのぼのとあり明の月の月影にもみぢ吹きおろす山おろしの風」（一八）と見えるように、月と散る紅葉の取り合わせは屏風絵にも描かれる題材だった。なお下句は、伊勢集の本文では、「もみぢはすとしぐれざらん」または「紅葉そむとも時雨ざらん」である。

【所載】伊勢集Ⅰ・三〇九／伊勢集Ⅱ・三〇八／伊勢集Ⅲ・三〇八

三〇四 あきの月ひとつにあらぬものなればなみだをやりてうつしてぞみる

ためイ  
とめイ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月の一つではないもので、涙を袖に流して、そこに映してもう一つの月を見ることだ。

【語句】○ひとつにあらぬものなれば 所載欄の伊勢集では、「ひとへにあかぬものならは」、または「ひとつにあかぬ物なれば」となっている。誤写の可能性もあるが、古今六帖の本文のままで解釈をつけた。○なみだをやりて 涙や露は、「やる」というよりも、「とめる」もしくは「ためる」と詠まれる。「朝ごとに置く露袖にうけためて世のうき時の涙にぞかる」（後撰集・三二五）。伊勢集でも「涙をためて」または「涙をとめて」となっている。ここでは古今六帖の本文により、「涙を遣りて」すなわち、「涙を送って」「涙を流れて行かせて」と解釈したが、「うつしてぞみる」に続くので、結局は、「遣った」涙を、そこ（袖）にためて、水鏡のようにするということになる。○うつしてぞみる 袖に涙をためて月を映して見る。所載欄の伊勢集Ⅰでは「やどしてぞみる」。「あひにあひて物思ふときのわが袖はやどる月さへぬるるがほなる」（伊勢集・二〇八）。

【所載】伊勢集Ⅰ・三〇二／伊勢集Ⅱ・三〇〇／伊勢集Ⅲ・三〇二

三〇五 をとにのみちるときくべきもみぢばをいろしらせつる秋のよの月

かましイ

【異同】ナシ

【現代語訳】散るということを音によつてだけ聞くはずのもみぢ葉を、目に見える色によつて知らせてくれる秋の夜の月であることよ。

【語句】○をとにのみちるときくべき 葉の落ちるのを音によつてのみ聞く。「をと」は「おと」。音。夜の紅葉は暗くて眼に見えにくいから「音にのみ聞く」ことになる。なお「音に聞く」は、噂として聞く、評判として聞く、の意もあり、恋歌などに多く用いられた。○いろしらせつる 目に見える色によつて實際を知らせてくれる、という意味。○秋のよの月 秋の夜の月は明るく照るから、散る紅葉がよく見える、ということ。

【所載】ナシ

【参考】散る紅葉と秋の夜の月とを、恋歌によくある表現を用いて対比的に歌う。

〔以上五首担当 長戸〕

三〇六 まつ人のかげはみえずて秋の夜の月のひかりぞゝでにいりける

【異同】ナシ

【現代語訳】待っている人の姿は見えないで、秋の夜の月の光が涙にぬれた袖に入ってきたことだよ。

【語句】○まつ人のかげ 待っている人の姿。男の来訪を待つ女性の立場での詠。○みえずて 見えないで。「ずて」は打消の助動詞「ず」に接続助詞「て」。「秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずておとのさやけさ」（古今集・二二七）。○月のひかり 部屋に差し込む月の光と、訪れない男とを対比している。○ゝ（そ）でにいりける 「ける」とあるので、気が付いたら月の光が袖に差し込むほど時が経ってしまった、の意。所載欄の重之集では「袖に入りぬる」と末尾が異なり、いたずらに時間が経過したことを嘆く。

【所載】重之集・二六五

【参考】作者名はないが、重之百首の中の一首。

三〇七 ひさかたのつきのかつらもあきはなをもみぢすればやてりまさるらん  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】月の桂も秋はやはり紅葉するので、月も一段と照り輝いているのだろうか。

【語句】○つきのかつら 桂の木が月に生えるというのは中国の故事を踏まえたもの。「俗云、月中仙人桂樹」（初学記・月）。万葉集に既にこれを踏まえた歌「天の海に月の船浮け桂梶かけて漕ぐ見ゆ月人壮士」（二二二七（旧二二三三））がある。○なを なほ（猶）。○てりまさる 月が一段と照り輝いている。秋の月が輝くするのは「つねよりも照りまさるかな秋山の紅葉を分けて出づる月かげ」（貫之集・四〇）など多く見出せるが、その原因を「つきのかつら」が色づいたからとする点に眼目がある。

【所載】古今集・秋上・一九四／新撰和歌・六四／忠岑集Ⅰ・八／忠岑集Ⅱ・一四／忠岑集Ⅲ・二〇／忠岑集Ⅳ・三、一七六／是貞親王家歌合・五八／秀歌大体・七〇／桐火桶・八一／平家物語（延慶本）・二四〇／源平盛衰記・二六五

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。

三〇八 秋のよの月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり  
もとかた

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の月の光がとりわけ明るいので、暗いと言われるくらぶ山もきつと越えられそうだよ。

【語句】○月のひかりし 「し」は副助詞。取り立てて強調する意。「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」（古今集・羈旅・四一〇）。○くらぶの山 暗部山。歌枕。京都市左京区の鞍馬山が比定される。その名から「暗し」を掛けて用いられることが多い。「梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りける」（古今集・三九）、「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」（後撰集・二七一）。

【所載】古今集・秋上・一九五／元方集・一／六百番陳状・一一〇

【参考】作者名は所載欄の文献に一致する。

三〇九 あきの月つねにかくてるものならばやみになるよはまじらざらまし  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月が常にこのように照り輝いているものだとしたら、闇になる夜はまじらないでいるのになあ。

【語句】○やみになるよ 所載欄の後撰集には「やみにふる身」とあり、述懐歌と解せる。○まじらざらまし 三句目をうけて反実仮想。後撰集の諸注は自らの不遇を「やみにふる身」と詠んだ述懐歌と説くが、「古今六帖」内での異文がないこともあり、ここでは採らない。

【所載】後撰集・秋中・三二四

【参考】作者名「ふかやぶ」とあるが、現存の深養父集には不載。次の三一〇番歌は後撰集では清原深養父の作とし、その後に「よみ人知らず」歌一首を置いてこの歌を配す。本来は次の歌の作者記載であるべきなのか、もしくは後撰集の作者記載に影響されたか。なお三一一番歌の後に「三首ふかやふ」とある。三一一番歌参照。

三一〇 あきのうみにうつれる月をたちかへりなみにあらへどいろはかはらず

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の海に映っている月を、繰り返し寄せてくる波で洗うのだけど、色は変わらないでいるよ。

【語句】○たちかへり 繰り返し。「なみ」の縁語。「いしま行く水の白浪立帰りがくこそは見めあかずもあるかな」（古今集・六八二）、「あひだなくよする川浪立ちかへり折りても猶あかずぞ有りける」（貫之集・二八七）。○いるはかはらず 波がかかってもなお元の姿のままでいる。月の明るさをいう。波が洗うことで姿がより一層はつきりするという発想は「水のうへにいろさへすめるあきのつきなみこそかげをあらふべらなれ」（能宣集・三八〇）や、やや時代が下るが「すみよしのまつのしづえはしらなみのあらふにつけていろまさりけり」（経信集・一九〇）がある。

【所載】後撰集・秋中・三三三／深養父集Ⅰ・一三／深養父集Ⅱ・補三

【参考】作者については三一一番歌参照。

〔以上五首担当 青木〕

三二一 秋のよの月のひかりはあかけれど人のこゝろの<sup>くまい</sup>うちはてらさず

三首ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の月の光は明るいけれど、あの人の心のうちまでは照らさないことだ。

【語句】○あかけれど 「あかけれ」は「明かし」の已然形。○人の 思いを寄せているあの人の。

【所載】後撰集・秋中・三三三／是貞親王家歌合・五五

【参考】作者名に関しては、当該歌を含めて「三首ふかやぶ」と注し、深養父の作とするが、三二〇番歌を除いて後撰集ではいずれも「よみ人しらず」とする。なお当該歌に関していえば、後撰集、是貞親王家歌合ともに、三句を「きよけれど」、五句を「くまはてらさず」とする。

三二二 そらとをみあきやよくらんひさかたの月のかつらのいろもかはらぬ  
きのよしみつのあそん

【異同】いろもかはらぬ―色もかはらす（大）

【現代語訳】空が遠いので、秋が避けているのであろうか。月の中に生えているという桂は、秋になっても紅葉しないことだ。

【語句】○そらとをみ 「とをみ」は「遠（とほ）み」。秋のやって来る道から見て、空が遠くにあるという発想。月のある空が遠いので。○月のかつら 月に桂の木が生えているという中国の古伝承による。「久方の月の桂も秋は猶もみちすればやてりまさるらむ」（古今集・一九四）。

【所載】後撰集・秋中・三二七

【参考】作者名は後撰集においても「紀淑光朝臣」とする。

三二二 あきの月いりがてにしつさはやまのみちはいまぞさかりなるらし

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の月が沈みかね、ためらっていることだ。佐保山の紅葉は今が盛りであるらしい。

【語句】○いりがてにしつ 入ることをむずかしがっている。入ることをためらっている。「がてに」は本来可能の意を表す補助動詞「かつ」の未然形に、打消の助動詞の古い形の連用形「に」が伴ったもの。不可能ないし困難の意を表す。ここは「いりがてにす」という動詞に完了の助動詞「つ」が接続した形。○さはやまの 「さはやま（佐保山）」は大和国の歌枕。今の奈良市北部、佐保川北岸の丘陵地帯。○さかりなるらし 盛りであるらしい。「らし」は根拠のある推定。ここは秋の月が「入りがてに」していることを根拠に、きつと紅葉が盛りなのだろう、と推定している。月が沈みかねているのは紅葉が美しいから、というわけである。

【所載】ナシ

三二四 こゝろなきあきの月よのものおもふともねられぬにてりつゝもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】思いやりのない秋の月が、物思いで眠れないでいるのに、いたずらに照りつけることだ。

【語句】○こゝろなき 思慮のない。思いやりのない。○あきの月よの 「月よ」は「月夜」で、月の意。「月よの」の「の」は主格を表す。秋の月が。第五句の「てりつゝもがな」にかかる。○いもねられぬに 「い」は眠りの意の名詞。「いをぬ」「いもねられず」、あるいは「いぬ」などと、寝る意の動詞「ぬ」とともに用いられ



ることが多い。「ねられぬ」の「られ」は可能、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形、「られぬ」で不可能の意を表す。眠ることができない。○てりつゝもがな 「もがな」は願望の終助詞。ただしこのままでは意が通じない。所載欄に示したように、万葉集では「てりつつもとな」とある。「もとな」は、わけもなく、何の根拠もなく、やたらに、無性に、などの意を表す副詞。一般的な用法としては「……まなかひに もとなかりて やすいしなさぬ」（万葉集・八〇六（旧八〇二））や、「ぬばたまの いめにはもとな あひみれど……」（万葉集・四〇〇四（旧三九八〇））などのように、用言の前にくることが多いが、当該歌のように末尾に用いられる例も見いだされる。「さよなかに ともよぶちどり ものもふと わびをとときに なきつつもとな」（万葉集・六二二（旧六一八））。本書の現代語訳は万葉集の本文によった。

【所載】万葉集・二二三〇（旧二二二六）無心 秋月夜之 物念跡 寐不所宿 照乍本名 ココロナキアキノツキヨノモノオモフトイノネラレヌニテリツツモトナ こころなきあきのつくよのものもふといのねらえぬにてりつつもとな／人麿集Ⅱ・一三〇

### ふゆの月

三二五 ふゆのいけのうへはこほりにとぢたるをいかでか月のそらにいらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の池の上は氷でとじているのに、どうして月は底に入っているのだろう。

【語句】◎ふゆの月 秋の月とは異なり、冷え冷えとしている。氷、雪などともに詠まれることも多い。○そらにいらむ 所載欄の文献ではいずれも「そこに入るらん」「そこにみゆらん」「そこにいりけん」「そこにすむらん」など、「そこに」とする。「こ」と「ら」とでは誤りやすいし、歌としても「空に」より「底に」の方がずっとわかりやすいだろう。「池水の底に宿れる月影はとづる氷にさはざりけり」（夫木抄・六六六〇）と同工異曲。従って「底に入るらん」の本文で解した。

【所載】拾遺抄・冬・一五三／拾遺集・冬・二四一／新撰万葉集・四二六／是則集・二四／寛平御時后宮歌合・一三七

【参考】なお作者は、拾遺抄・拾遺集では「よみ人知らず」とするが、是則集に入集し、寛平御時后宮歌合でも「是則」とする。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

つらゆきしレイ

三二六 ふりしけるゆきかとみゆる月なれどぬれてさえたるさころもぞなきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】一面に降り積もっている雪かと思われるほどの月の光ですが、雪に濡れて凍る着物は見当たりませんよ。

【語句】○ふりしける 「降り敷く」は一面に降る意。「よるならば月とぞみましわがやどの庭白妙にふりしける雪」(貫之集・六五)。○ゆきかとみゆる月 月光を雪に見立てる。二九四番参照。○ぬれてさえたるさころもは雪であれば着物が濡れて凍る。「さゆ」は「冷え冷えとする、凍てつく」意。「さころも」は、所載欄の貫之集では傍書と同じ「ころもで」(袖)とある。

【所載】貫之集I・二五九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

をなじ人

三二七 むまたまのよるのみにふれイふるしらゆきはてる月かげのたまるなりけり

【異同】○よるのみにふれイふるのみにふれイふる(大)

【現代語訳】夜にだけ降る白雪は、照る月の光が積もったものでしたよ。

【語句】○むまたまの 「ぬばたまの」の変化したもの。「夜」の枕詞。○月かげ 月の光。○たまる 集まり積もる。「衣手はさむからねども月影をたまらぬ秋の雪かとぞ見る」(古今六帖・二九四)。

【所載】後撰集・冬・五〇三

【参考】作者名は「をなじ人」(つらゆき)とあるが、所載欄の後撰集ではよみ人知らずとなっている。

三二八 おほぞらの月のひかりしさむければかげみしみづぞまづこほりける

【異同】ナシ

【現代語訳】大空の月の光が寒々としているので、その月影を映した水が真つ先に凍ったことですよ。

【語句】○さむければ 寒々としているので。古今集では、「きよければ」とする。○かげみしみづ 月の光を映した水。庭の池などであろう。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。

【所載】古今集・冬・三二六／新撰万葉集・一七七／和漢朗詠集・三八六／古来風体抄・二五九／桐火桶・一一八

三二九 あまのはらそらさへさえやわたるらむこほりとみゆるふゆのよの月

【異同】ナシ

【現代語訳】空までもが一面に凍っているのでしょうか。氷と思うほど寒々とした冬の夜の月が懸かっていますよ。

【語句】○あまのはら 大空の意だが、ここでは「空」の枕詞。「あまのはらそらかきくらしふるゆきにおもひこそやれみよしののやま」（高陽院七番歌合・五一）。○そらさへ 所載欄の今昔物語集・古本説話集では「そこさへ」。○さえやわたるらむ 一面に凍っていることでしょう。「やえわたる」は、あたり一面に凍る意。「やは疑問の意を表す係助詞。「らむ」は目前に見えないことを推測する助動詞。所載欄の恵慶集では「さえやまさるらむ」。「やえまさる」はいっそう澄んで見えること。

【所載】拾遺抄・冬・一五四／拾遺集・冬・二四二／玄々集・三六／恵慶集・一一六／時代不同歌合・二四五／後六々撰・二八／古来風体抄・三六七／近代秀歌・五二／今昔物語集・一三〇／古本説話集・五八

【参考】今昔物語集（巻二十四・第四十六）・古本説話集では安法法師作。所載欄の他の文献では、作者表記なしの近代秀歌以外は恵慶法師作。

### ぎょうの月

三二〇 わがこゝろなぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月をみて

【異同】ナシ

【現代語訳】私の心は慰められませんでした。更級の姨捨山に照る月を見ていると。

【語句】◎ぎうの月 ざふ（雑）の月。「雑」はくさぐさの意で、いろいろのものが混じり集まること。四季の月に入らない歌を集めた。○なぐさめかねつ 慰めることができなかった。「―かぬ」は動詞の連用形に付いて……のが難しい、……ことができない、の意の動詞を作る接尾語。○さらしな 更級は、長野県更級郡。○をばすて山 長野県善光寺平の南にある山。一帯の山々の総称とも、冠着山のことともいう。観月の名所。

【所載】古今集・雑上・八七八／新撰和歌・二五七／俊頼髓脳・二九一／和歌童蒙抄・九五五／和歌初学抄・一七四／袖中抄・八三四／古来風体抄・二八八／和歌色葉・三〇九／今昔物語集・一六六／大和物語・二六一

【参考】大和物語（百五十六段）と今昔物語集（卷三十・第九）では、棄老伝説と結びつけて、おばを捨てた男が、おばを思つて詠んだ歌とする。

〔以上五首担当 三浦〕

三二一 おもふことありとはなしにひさかたの月よとなればねられざりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いがあるというのではないが、美しい月夜となると月に魅せられて、寝られないことだなあ。

【語句】○おもふこと もの思いをすること。○ありとはなしに ありはしないが。○ひさかたの 枕詞。天、雨、月、雲、光などにかかる。○ねられざりけり もの思いがなくても、月が美しいために寝られないという趣向。天慶二（九三九）年四月（田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』、右大将藤原実頼の屏風歌。題「家に女月を見る」。

【所載】拾遺抄・雑下・四九八／拾遺集・雑上・四三三／貫之集I・三七八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。三三五番歌参照。

三二二 あまくものたなびけりともみえぬ夜はゆく月かげぞのどけかりける  
るイ

【異同】ゆく月かけそ―ゆく月そ（大）

【現代語訳】天の雲がたなびいていとも見えない晴れた夜は、空を行く月の姿が穏やかでゆっくり動いているように見えるなあ。

【語句】○ゆく月かげぞのどけかりける 所載欄の貫之集によれば「夜の雲をさまりて月の行くことおそし、といふ題を人のよませ給ふに」と詞書があり、野郢展「水東帰詩」の「秋水漲来船去速 夜雲収尽月行遲」（和漢朗詠集「月」、千載佳句「秋夜」）からとった題詠歌。「のどけかりける」は「月行遲」を和風に言ったもの。

【所載】玉葉集・秋下・六七五／貫之集I・七七一／袋草紙・九一

【参考】作者名はないが、所載欄の文献はいずれも貫之の作。三二五番歌参照。

三二三 かつみれどうとくもあるかな月かげのいたらぬさとはあらじとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】月を美しいと思つて見るが、一方では疎んじたくなくなります。月の光の行き届かない里はあるまいと思ふので。

【語句】○かつみれど 月を美しいと思つて見るが、一方では。○月かげのいたらぬさとはあらじ 月光が自分の所ばかりか、差さない里はないだろう。裏に、月光をひとり占めしたい気持ちをあらわす。所載欄の古今集詞書には「月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる」とあり、貫之の作。

【所載】古今集・雑歌上・八八〇／新撰和歌・二二九／貫之集I・七七二

【参考】作者名はないが、所載欄の古今集には貫之とある。三二五番歌参照。

三二四 ひさかたの月かげ見ればなにはがたしほもたかくぞみえぬべらなる

【異同】みえぬへらなる―みちぬへらなる（大）

【現代語訳】月の光を見ると難波潟は一面に輝き、潮も満潮時で高くなって見えるようだ。

【語句】○ひさかたの 枕詞。天、雨、月、雲などにかかる。○なにはがた 大阪市の淀川河口から海にかけての一带をいう。○みえぬべらなる ……のように見える。……の様子だ。「みえぬ」は動詞「見ゆ」（下二段）の連用形「見え」に完了の助動詞「ぬ」の終止形が付いた形。「べらなる」は助動詞「べし」の語幹「べ」に「ら」が付き、さらに断定の助動詞「なり」の連体形が付いた形。

【所載】万代集・三二八〇／夫木抄・五一六一／貫之集I・二二三

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば貫之の作。三二五番歌参照。

三三五 みやこにて山のはにみし月なれどうみよりいでゝな<sup>み</sup>にこそいれ  
已上五首つらゆき

【異同】うみより―なみより（大）

【現代語訳】都では山の端に見た月だが、ここでは海から昇って波に沈むのだなあ。

【語句】○山のはにみし月（都では）周囲が山に囲まれているので、山の稜線すれすれに昇り、また沈むのを見ていた月。○なみにこそいれ 土佐国から都へ上る途中の船での詠。

【所載】後撰集・羈旅・一三五五／奥儀抄・一七〇／宝物集・二五二／土佐日記・二六

【参考】左注「已上五首つらゆき」とある三二一―三二五番歌の作者名は、いずれも所載欄の文献に一致する。

（以上五首担当 橋本・林）

三二六 ふたつなきものとおもひしをみなそこにやまのはならでいづる月かげ

【異同】ナシ

【現代語訳】この世に二つとないものだと思っていたのに、あの水底に、山の稜線でなくても出ている月だよ。

【語句】○ふたつなき ここでは、月がただ一つのものであることを指す。「二つなき恋をしすればつねの帯をみへむすぶべくあがみはなりぬ」（万葉集・三二八七（旧三二七三））のように、「ふたつなき」は恋・契りや、仏と結びつけて詠まれることが多い。○みなそこに 水中に。水中に宿る月は、大般若経の「水月」の喩や維摩経の「如智者見水中月」喩など諸仏典に登場するため、仏教的に捉えることが多くあった。中野方子は貫之の「手にむすぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にこそありけれ」（拾遺集・一三三二）に、「水月」喩を見ている（『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）。当該歌も貫之の詠であり（参考欄参照）、「ふたつなき」の語から法華経方便品の「十方仏土中 唯一乘法 無二亦無三（ただ十方の仏土の中には、ただ、一乗の法のみありて、二もなくまた三もなし）」を導き、また多くの喩に使われる「水中月」の喩から仏教的な背景を十分に踏まえた上で、機知的に詠じたものと思われる。○やまのは 山の稜線。月は山の端から出て、山の端に沈む。三二七番歌参照。

【所載】古今集・雜上・八八一／新撰和歌・二三一／貫之集Ⅰ・七七六

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば貫之の作。

三二七 あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなむ  
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】まだ十分に満足していないというのに、もう、月が隠れようとしている。山の端よ、逃げて月が沈まないようにしておくれよ。

【語句】○あかなくに まだ十分に満足していないのに。当該歌は伊勢物語の歌で、惟喬親王一行が水無瀬を訪れた折、親王が宴席から外れようとした際詠み送ったもの。つまり「あかなくに」は宴席を十分に満足していない、の意。○月 伊勢物語・古今集では惟喬親王を指す。参考欄に引用した「十一日の月」は夜中過ぎに沈むので、状況に即応した詠みぶりといえよう。

【所載】古今集・雑上・八八四／新撰和歌・二六七／業平集Ⅰ・五六／業平集Ⅱ・四九／業平集Ⅳ・二三／伊勢物語・一四九

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。以下に古今集の詞書を載せる。

これたかのみこのかりしけるとともにまかりてやどりにかへりて夜ひとよさけをのみ物がたりをしけるに、十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこゑひてうちへいりなむとしければよみ侍りける

三二八 いにしへはいりこしものをひさかたの月のひかりのまへわたりする

【異同】ナシ

【現代語訳】昔は奥まで入ってきてくれたのに、今では月の光が私の前を素通りすることよ。

【語句】○いりこしものを 「いりこし」は「入り来し」。「いり」と「わたる」は月の縁語。○まへわたり 前渡りは家の前を素通りすること。ここでは、月光は修辭で、通ってくる男に見立てている。月の満ち欠けによって光が差し込まないことを擬人化した。

【所載】ナシ

みつね

三二九 ひるなれやみぞまどひぬる月かげをけふとやいはんこよひとやいはむ

【異同】みそまとひぬる―闇そまとひぬる(大)

【現代語訳】昼なのだろうか、見ていて混乱してしまうよ。この明るい月光を、今日と言おうか、今宵と言おうか。

【語句】○ひるなれや 昼なのだろうか。「や」は疑問。○みぞまどひぬる 見て混乱する。後撰集では、「見ぞまがへつる」とあるので、見間違ってしまうの意。○けふとやいはんこよひとやいはむ 今日と言おうか、今宵と言おうか。在原元方の「としのうちに春はきにけりひととせをこそとやいはむことしとやいはむ」(古今集・一)を踏まえた表現。「こよひ」は現在考える「今晚」の意味だけでなく、暁から見ての昨夜を指すことがあり、ここでは後者の意。奥儀抄では当該歌を「盗古歌証歌」とする。また和歌初学抄の「似物」に「月は昼に似ず」として当該歌を引く。批判はともかく、元方歌をベースにし、日の光と見紛う月光を眼目とした歌といえよう。

【所載】後撰集・雑一・一一〇〇／躬恒集Ⅰ・二六九／躬恒集Ⅱ・一九五／躬恒集Ⅲ・二九三／躬恒集Ⅴ・一六四／奥儀抄・一三四／和歌初学抄・七七

【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。

いせ

三三〇 あひにあひて物おもふころのわがそでにやどる月さへぬるゝがほなる

【異同】ナシ

【現代語訳】よりにもよって、いろいろと思い煩い、涙に暮れることの多い私の、その涙の溜まった袖に映る月までも、濡れたような顔をしていることだよ。

【語句】○あひにあひて 「合ふ」と「逢ふ」の二通りが考えられる。ちょうどびたりと合って(小町谷照彦訳注『古今和歌集』旺文社、一九八八年)、よくも合ったもので(新日本古典文学大系『平安私家集』、あれほど逢った上で(新日本古典文学大系『後撰和歌集』・同『古今和歌集』、待ちに待ってやっと逢った(工藤重矩校注『後撰和歌集』和泉書院、一九九二年)など、注釈書によって違いがある。ここでは「合ふ」を前面に出した。

○そでにやどる月 涙が溜まって池となり、そこに映った月、の意。「袖に宿る」の形では、伊勢の後、赤染衛



門集に「雲井にてながむるだにもあるものを袖にやどれる月をみるらん」（二六九）がある。

【所載】古今集・恋五・七五六／後撰集・雜四・一二七〇／伊勢集Ⅰ・二〇八／伊勢集Ⅱ・二二二／伊勢集Ⅲ・二二一

【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本〕

三三二 いづこにかこよひの月のくもるべきをぐらのやまはなをやかふらん  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】「いったいどこで、この満月のくもることがあろうか、小倉山は（「小暗し」というが暗い所はひとつもなく）名を変えるのではないだろうか。」

【語句】○をぐらのやま 小倉山・小椋山。京都府右京区の嵯峨、大堰川をへだてて嵐山と対峙する山。○なをやかふらん 名をや変ふらん。「や」は疑問の係助詞。古くは「名」すなわち実体と考えたが、実体が伴わない場合、「名を変ふ」「名のみなりけり」などと歌われた。「大井川うかべる船のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり」（後撰・二二三・業平）。

【所載】新古今集・秋上・四〇五／深養父集Ⅰ・三三／元輔集Ⅰ・二二九

【参考】作者名「ふかやぶ」は、新古今集には「大江千里」とあり、一致しない。

三三三 あはぢにてあはとくも<sup>はるかに</sup>みにみし月のちかきこよひはところ<sup>みつね</sup>がらかも

【異同】ナシ

【現代語訳】淡路島では「彼は」と遙か遠くに見えた月がこんなにも近く大きく見えるのは（月はそれを見る所によってかわるのか）この所がらによるものか。

【語句】○あはぢ 淡路島。○あはと 島名「あはぢ」のアハと同音で指示代名詞のア「彼」と格助詞「は」をかける。「アハ」はすなわち「あれは」。○ところがら 場所による。「大峰のしんせんと申す所にて、月をみて

よみける みねのうへもおなじ月こそてらすらめ所がらなるあはれなるべし」(山家集・一一〇五)。

【所載】新古今集・雑上・一五一五／躬恒集Ⅰ・二二五／躬恒集Ⅱ・一三〇／躬恒集Ⅲ・一一四／躬恒集Ⅳ・四六三／躬恒集Ⅴ・一〇二

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

三三三 てる月をひるかときればあかつきにはねかくしぎもあらじとぞおもふ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】明るく照る月は昼かと見えて(夜か昼かわからないから)、暁に羽掻く鳴もあるまいと思う。

【語句】○はねかくしぎ 羽掻く鳴。有名な古歌「暁の鳴のはね掻き百羽掻き君が来ぬ夜は我ぞ数かく」(古今集・七六)による。来ない恋人を待ち明かし、ひとり暁の鳴の羽掻く音を聞く寂寥を詠んだもの。「数かく」の所作が具体的にはどういうものかは不明。

【所載】貫之集Ⅰ・二六〇／金葉集初度本・秋・二八五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では「京極の権中納言の屏風」の歌二十首のうちの一。

三三四 ますかゞみてる月かげをしろたへのくものかくせるあまつきりかも  
忌部首黒麿 或本をとくろ

【異同】ナシ

【現代語訳】鏡のごとく照る月を白雲が隠してしまった(と思うとそれは)霧であつたよ。

【語句】○ますかゞみ 真澄の鏡。○月かげ 月光。月の形。○あまつきり 天つ霧。大空の霧。「関越ゆる道たどたどし白河の山道をかくすあまつきりかも」(夫木抄・霧・五三七二)。

【所載】万葉集・一〇八三(旧一〇七九)真十鏡 可照月乎 白妙乃 雲香隠流 天津霧鳴 マソカガミテルベキツキラシロタヘノクモカクセルアマツキリカモ まそかがみてるべきつきをしろたへのくもかくせるあまつきりかも／人麿集Ⅱ・一八八／人麿集Ⅳ・四六

【参考】所載欄の万葉集に作者名はない。「忌部首黒麿（いんべのおびとくろまる）」は万葉歌人。宝字二（七八）年八月外従五位下、同三年十二月姓連を賜り、同六年正月内史局（図書）助となる。「をとくる」は、古今六帖・三五六、六七八、一〇六〇、一四一一にも出る。

三三五 山のはにいさよふ月をいでんかとまちつゝをるによぞふけにける

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端に（隠れていてなかなか）出てこない月を今出るか今出るかと待つまに、（こんなにも）夜が更けてしまった。

【語句】○いさよふ ぐずぐずする。ためらう。「いさよふ月」は山の端に出る前の月をも、空ゆく月の動きの遅さにもいう。

【所載】続後撰集・雑中・一一〇五／万葉集・一〇七五（旧一〇七二）山末尔 不知夜歴月乎 将出香登 待乍居尔 夜曾降家類 ヤマノハニイサヨフツキライデムカトマチツツラルニヨヅフケニケル やまのはにいさよふつきをいでんかとまちつゝをるによぞふけにける／綺語抄・三四／和歌童蒙抄・一三／袖中抄・九五二／古来風体抄・七四／八雲御抄・一〇七

【参考】類歌が袖中抄・九五三、九五四にある。

〔以上五首担当 平野〕

三三六 したにのみこふればくるし山のはにいでくる月のあらはればいかに

【異同】ナシ

【現代語訳】心の中でのみ恋い慕っているのは苦しい。山の端に出る月のように、この気持ちこそとに表れたら、どうでしょう。

【語句】○したにのみ 心の中でだけ。「した」は人に隠している心。「したにのみこふればくるし玉のをのたえてみだれむ人などがめそ」（古今集・六六七）。○山のは 山の稜線。尾根。○いでくる月の 昇ってくる月のように。「あらはれ」にかかる。所載欄の万葉集によれば、男との仲を親に打ち明けたいが如何と相手に問う歌。

【所載】万葉集・三八二五（旧三八〇三）隠耳 恋辛苦 山葉従 出来月之 顕者如何 シタニノミコフレバク

ルシヤマノハニイデクルツキノアラハレバイカニ　こもりのみこふればくるしやまのはゆいでくるつきのあらはさばいかに

三三七　をそくいづる月にもあるかなあし引のやまのあなたもおしむべらなり

【異同】あし引の―ひしひきの（御）

【現代語訳】出るのが遅い月だなあ。これはきつと、山の向こう側でも人々が月との別れを惜しんでいるのだらう。

【語句】○あし引の　枕詞。「山」「峰（を）」などに掛かる。○やまのあなたも　山の向こう側でも。人々が月との別れを惜しんでいるので、月がなかなか昇ってこられないと想像。○おしむべらなり　をしむべらなり。惜しむ様子だ。惜しんでいるのであらう。

【所載】古今六帖「さと」一二九一／古今集・雑上・八七七／俊頼髓脳・一一四

三三八　ひさかたのあまてる月をかぐみにてこひしき人のかげをだにみん

【異同】ナシ

【現代語訳】天に照る月を鏡に見立て、せめてそれにうつる恋しい人の面影だけでもみよう。

【語句】○ひさかたの　天空に関係のあるもの、天、雨、空、月、星などにかかる枕詞。○かぐみにて　鏡として。鏡に見立てて。月を鏡に見立てた例として「くまもなき鏡とみゆる月かげに心うつらぬ人はあらじな」（金葉集二度本・二〇五）がある。○かげ　心に思い浮かべる顔形。○だに　せめて……だけでも。

【所載】ナシ

三三九　おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの

【異同】ナシ

【現代語訳】およそ人の愛でるところの月をも私は愛でまい。月を観、愛でる歳月がつもれば、それは人の老いとなるものなのだから。

【語句】○おほかたは おおよそ。ふつうには。○これぞこの 月をめであることを指す。「月」に歳月の「月」をかける。○つもれば 月を愛でる歳月がつもれば。○老となるもの 老いさせる原因となるものだから。「月明に対して往時を思ふことなかれ君の顔色を損じ君の年を減ず」(白氏文集・卷一四・贈内)。

【所載】古今集・仮名序／古今集・雜上・八七九／業平集Ⅰ・五五／業平集Ⅱ・三六／業平集Ⅲ・三〇／業平集Ⅳ・二四／俊賴髓腦・一五八／悦目抄・二七／井蛙抄・一九六／伊勢物語・一六二

三四〇 むばたまのそのよの月はいまゝでもわれはわすれず君によそへて

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたにお会いしたあの月夜の情景は、今でも私は忘れません。あなたの面影によそえて。  
【語句】○むばたまの 「ぬばたまの」とも云う。枕詞。黒、夜、夕、宵、髪、などにかかる。○そのよ 相手に会った夜。○よそへて ことよせて。関係付けて。

【所載】万葉集・七〇五(旧七〇二)夜千玉之 其夜乃月夜 至干今日 吾者不忘 無間苦思念者 ヌバタマノソノヨノツキヨケフマデニワレハワスレズマナクシオモヘバ ぬばたまのそのよのつくよけふまでにわれはわすれずまなくしおもへば

〔以上五首担当 斎藤・林〕

三四一 もゝしきのおほみや人のまかりいでゝあそぶこよひの月のさやけさ

【異同】ナシ

【現代語訳】大宮人たちが退出し、くつろいで宴を楽しんでいる今宵の月のなんと澄みきっていること。

【語句】○もゝしきの 「おほみや(大宮)」にかかる枕詞。○おほみや人 大宮人。宮中に仕える人。○まかりいでゝ 退出して。「まかりいで」は、退出するという意の謙讓語「まかりいづ(罷り出づ)」の連用形。○あそぶ 遊樂や遊宴をする。詩歌、管絃、舞などを行う。○さやけさ 清く澄んでいるさま。

【所載】玉葉集・秋下・六三〇／万葉集・一〇八〇(旧一〇七六)百師木之 大宮人之 退出而 遊今夜之 月清左 モモシキノオホミヤヒトノタイデアソブコヨヒノツキノサヤケサ もしきのおほみやひとのまかりでてあそぶこよひのつきのさやけさ／人麿集Ⅱ・一八七／人麿集Ⅳ・四七

三四二 くらはしの山をたか<sup>か敷</sup>みるこが<sup>に</sup>くれていでくる月のかたま<sup>ひかりともしき</sup>ちがたき

【異同】ナシ

【現代語訳】倉橋の山が高いからか、木の間隠れに昇ってくる月がただもう待ちきれないことだ。

【語句】○くらはしの山 倉橋山。奈良県桜井市倉橋付近の山。最も高い音羽山説。その西方の多武峰説などがある。倉橋の「くら」に「暗」を響かせる。○たかみる 用例もなく、わかりにくい。所載欄の万葉集の訓「高みか」の本文を採り、「る」を「か」の誤写とみて、ミ語法による疑問条件と解す。○こが<sup>に</sup>くれて 木の陰に隠れて。「春くれば木隠れ多き夕月夜おぼつかなしも花かげにして」（後撰集・六二、万葉集・一八七九（旧一八七五）の異伝歌）。○かたまち 終止形は「かた待つ」。ひたすら待つて、一心に待つて。「鶯は今は鳴かむとかた待てば霞たなびき月は経につつ」（万葉集・四〇五四（旧四〇三〇））。

【所載】万葉集・一七六七（旧一七六三） 倉橋之 山平高敷 夜牢尔 出来月之 片待難 クラハシノヤマヲタカミカヨゴモリニイデクルツキノカタマチカタキ くらはしのやまをたかみかよごもりにいでくるつきのかたまちかたき

【参考】所載欄の万葉集では沙弥女王の作。万葉集には当該歌の傍書と関わりが深いとみられる「棕橋乃 山平高可 夜隠尔 出来月乃 光乏寸 クラハシノヤマヲタカミカヨゴモリニイデクルツキノヒカリトモシキ くらはしのやまをたかみかよごもりにいでくるつきのひかりともしき」（二九三（旧二九〇））という歌があり、その作者名「間人宿禰大浦」は、当該歌の作者「はしうとのおほうら」に一致する。この間人宿禰大浦作の万葉歌（二九三（旧二九〇））は猿丸集Ⅰ・八、猿丸集Ⅱ・八に入集する。

ゆげのわう

三四三 あめにます月よみおとこまひなはんこよひのながさいほよつげども

【異同】ナシ

【現代語訳】天にまします月読男に贈り物をしよう、ああ、今夜の時間が五百夜も続いてほしいなあ。

【語句】○月よみおとこ 月読をとこ。月を擬人化した語。○まひなはん 賄（まひなひ）をしよう。「賄（ま

ひな)ふ」は、「幣(まひ)」を神に捧げて祭る。「ん」は意志。○いほよ 五百夜。○つげぞも 「つげ」は、ガ行四段活用「継ぐ」の已然形か命令形、あるいはガ行下二段活用の「告ぐ」の連用形とみられるが、「ぞも」は原則として体言か連体形を受けるので、接続に問題が残る。一応上三句との照応からみて、所載欄の万葉集における「つぎこそ(継ぎこそ)」の「継ぎ」の意とする。「ぞも」は係助詞「ぞ」に、詠嘆の係助詞「も」が付いた感動を込めた強調の表現。上代は「そも」。

【所載】万葉集・九九〇(旧九八五) 天尔座 月詠壮子 幣者将為 今夜乃長者 五百夜継許増 アメニマスツキヨミヲトコマヒハセムコヨヒノナガサイホヨツギコソ あめにますつくよみをとこまひはせむこよひのながさいほよつぎこそ／綺語抄・二七／和歌童蒙抄・一八／袖中抄・七四二

【参考】作者名「ゆげのわう」は所載欄の万葉集では「湯原王」。

### 三四四

おしなべてイ  
おほかたはみねもたひらになりなゝんやまのあればぞ月もかくるゝ

かんつけのみわけ 或本いまを

【異同】ナシ

【現代語訳】一様に峰も平らになつてしまつてほしい、山があるからこそ月も隠れるのだ。

【語句】○おほかたは おおよそ。一様に。「寝ても見ゆ寝でも見えけりおほかたはうつせみの世ぞ夢には有りける」(古今集・八三三)。○なりなゝん 「なゝん」の「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形、「なん」はあつらえ望む意の終助詞。

【所載】後撰集・雑三・一二四九／伊勢物語八二段・一五〇

【参考】作者名「かんつけのみわけ」は、所載欄の後撰集では「上野岑雄」。

なお、伊勢物語・八二段において、酔つて御寝されようとした惟喬親王を月にたえて引き留めた業平歌、あかなくにまだきも月のかくるるか山の端にげて入れずもあらなむ

につづいて、紀有常が詠んだとされる、  
おしなべて峰もたひらになりななむ山の端なくは月も入らじを  
と似ている。

### 三四五 わがせこがふりさけみつゝなげくともきよき月よにくもなたなびき

そイ

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のはるかに仰ぎ見つつ私を偲んで嘆いているとしても、この澄んだ月夜には、雲よ、たなびいて月を隠さないで。

【語句】○ふりさけみつゝ 「ふりさく」は視線を遠く放ちやること。はるか彼方をふり仰いでみながら。「遠き妹がふりさけみつつしのふらむこの月の面に雲なたなびき」（万葉集・二四六四（旧二四六〇））という類歌は男の作。○なげくとも 「とも」は逆接仮定条件。仮に……したとしても。たとえ……でも。所載欄の万葉集における「なげくらむ」の方が下二句との繋がりが自然であるが、本文通りに解した。○なたなびき 「な」は、すぐ下の動詞の動作を禁止する副詞。

【所載】古今六帖「くも」五一三／万葉集・二六七七（旧二六六九）吾背子之 振放見乍 将嘆 清月夜尔 雲莫田名引 ワガセコガフリサケミツツナゲクラムキヨキツキヨニクモナタナビキ わがせこがふりさけみつゝなげくらむきよきつくよにくもなたなびき／綺語抄・三三四

〔以上五首担当 中野〕

### 安郡扉娘女

三四六 みそらゆく月のひかりにたゞひとめあひみし人のゆめにしみゆる

【異同】安郡扉娘女―安部扉郎女（大）

【現代語訳】大空を行く月の光の中で、ほんの一目見ただけの人が、夢に見えることです。

【語句】○みそらゆく 月や雲にかかる枕詞的修辭。○たゞひとめあひみし人 たった一度見ただけの人。一目で激しい恋に落ちたと詠む歌は、「花ぐはし葦垣」しにただ一目あひ見し兒ゆゑ千度嘆きつ」（万葉集・二五七〇（旧二五六五））など他にも多い。○ゆめにしみゆる こちらが思えば相手の夢に見える、という俗信もあるが、ここはもちろん恋い慕っている相手が夢に見えたもの。「ゆめにし」の「し」は強意の副助詞。この結び、万葉集に十一首ほど見られる。

【所載】万葉集・七一三（旧七一〇） 三空去 月之光二 直一目 相三師人之 夢西所見 ミソラクツツキノヒカリニタダヒトメアヒミシヒトノユメニシミュレ（ル） みそらゆくつきのひかりにただひとめあひみしひとのいめにしみゆる／綺語抄・二六



【参考】作者名「安郡扉娘女」とあるが、所載欄の万葉集に「安郡扉娘子（あとのとびらのをとめ）」とあり、「安郡」氏の「扉」という名の女性で、大伴家持周辺の人と解されている。

三四七 あまがくれみかさのやまをたかみかも月のいでこずよはふけにけり  
あべのむしまろ

【異同】ナシ

【現代語訳】三笠山が高いせいであろうか、月がなかなか出てくれず、夜は更けてしまった。

【語句】○あまがくれ 物陰に入って雨を避ける、雨宿り、の意。所載欄の万葉集では「雨隠」とあり、「あまごもる」で「みかさ」に掛かる枕詞の可能性がある。所載欄の夫木抄は「あまがくる」。○みかさのやま 奈良市春日山の前方にそびえる三笠山。麓に阿倍氏の館があったかとされる。ここは固有名詞の三笠山に、「あまがくれ」から「御笠（みかさ）」を響かす。○たかみかも 高いからであろうか、の意。「たかみかも」の語構成は、形容詞語幹「高」に、原因・理由を表す接尾語「み」、詠嘆的に疑問を表す「かも」（係助詞「か」＋係助詞「も」）。なお他例も、「獵高（かりたか）の高円山を高みかも出でくる月の遅く照るらむ」（万葉集・九八六（旧九八二））など、すべて第三句に置く。○月のいでこずよはふけにけり 「かも」の結びとしては、所載欄の万葉集の「いでこぬ」や、夫木抄の「いでこし」の方が自然。他に「いでこず」の例はない。「よはふけにけり」のところ、夫木抄は「よはふけにつつ」。

【所載】万葉集・九八五（旧九八〇）雨隠 三笠乃山平 高御香裳 月乃不出来 夜者更降管 アマゴモリミカサノヤマヲタカミカモツキノイデコヌヨハフケニツツ あまごもるみかさのやまをたかみかもつきのいでこぬよはくたちつつ／夫木抄・八八五二

【参考】作者名「あべのむしまろ」は、所載欄の万葉集「安倍朝臣虫麿」に一致する。虫麿は、母が大伴坂上郎女の母と同母姉妹であり、郎女との戯れの贈答歌が残る（万葉集・六六八（六七〇）（旧六六五（六六七））。天平勝宝四（七五二）年従四位下中務大輔で没。

三四八 おもへばぞ月のわれてもいでつらむかばかりさはぐ雲のうへより  
そらたちイ

【異同】ナシ

【現代語訳】三日月が乱れ動く雲から顔を出す、あなただつて私を思っているからこそ無理してでも出て来たのでしょう。これほど噂のかまびすしい殿上から。

【語句】○おもへばぞ月のわれてもいでつらむ 「思へばぞ」は、思っているからこそ、の意。「われても」は、割れている三日月に、副詞「われて」の、無理に、あながちに、の意を掛ける。続く「出づ」「騒ぐ」「雲の上」も、自然と人事の両意がある。当該歌の上句とほぼ同じくする歌「思へばぞわれても月の出でつらむこらたらちのさねのなかより」（奥儀抄・四二三。和歌初学抄・一〇一、和歌色葉・二〇四にも）がある。奥儀抄は、下の句について、「たらち」を「たらちね」の一字脱と解し、「かばかり親たちのさ寝たる中より」と説明する。なお、当該歌は、男女が丁々発止とやりあう場面での答歌のような詠みぶりである。○かばかり これほど。傍記イ本「そらたち（騒ぐ）」のような表現を含む例歌はない。○雲のうへより 雲の上からと殿上からの意を掛ける。当該歌と似た詠みぶりの歌として、「三日月のおぼるけならぬ恋しさにわれてぞ出づる雲の上より」（金葉集二度本・恋下・四八四・藤原永実）があるが、詞書に「藏人にて侍りけるころ、内裏（うち）をわりなく出でて女のもとにまかりて詠める」とあって、詠歌事情がよくわかる。

【所載】ナシ

三四九 きみまつとおきたるわれもあるものをねまちの月はかたぶきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】あの方のお越しを待つてずっと起きている私がいるのに、遅く出た寝待の月はさらに西に傾いてしまった。

【語句】○ねまちのつき 陰暦十九日の月、月の出の時刻は遅い。起きて待つ我と寝て待つ月、のように対比的に詠む。○かたぶきにけり 月は西の空に傾いてしまった。恋人はまだ来ない。「ま袖もち床うち払ひ君待つと居りしあひだに月傾きぬ」（万葉集・二六七五（旧二六六七））。

【所載】ナシ

三五〇 きみまつとねやにしをればかきまより月のはのぼりぬこじとてならし

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたをお待ちして寝所にじつとしていると、垣の間から月は昇ってしまった。もうお越しにはなるまい、ということらしい。

【語句】○かきまより 垣のすき間から。「垣間」は、「春されば卯の花腐しわが越えし妹が垣間は荒れにけるかも」（万葉集・一九〇三（旧一八九九））のように、男が恋人に逢うために越えて来る所でもある。○こじとてならし 「じ」は打消推量。「ならし」は、「なるらし」の転とも、「なり」の形容詞化されたものともいう。……であるらしい、の意。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

### みか月

#### 坂上らう女

三五一 つきたちてたゞみか月のまゆねかきけながくこひし君にあへるらむ<sup>かもイ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】月が改まってほんの三日目の、三日月のような眉を掻いたので、何日もの間恋いこがれていたあなたにお逢いできたのでしょうか。

【語句】◎みか月 陰暦三日に出る月。その形から眉や弓に見立てられることが多い。また、宵の間に現れてすぐに沈んでしまうさまが詠まれたり、望月ではなく欠けていることから「われて」を導いたりする。○まゆねかき 眉根掻き。眉根は眉のこと。眉がかゆくなるのは、恋しい人に逢える前兆とされていた。さらに、その俗信を裏返して、かゆくなくとも、眉を掻くと恋しい人に逢えると考えられた。「めづらしき君を見えとこそ左手の弓取る方の眉根掻きつれ」（万葉集・二五八〇（旧一五七五））。当該三五一番歌は、後者の発想による。○けながく 日数が長く経過するさま。「け」は「日」の複数名詞。

【所載】万葉集・九九八（旧九九三）月立而 直三日月之 眉根搔 氣長恋之 君尔相有鴨 ツキタチテタダミ カヅキノマユネカキケナガクコヒシキミニアヘルカモ つきたちてたゞみかづきのまよねかきけながくこひしきみにあへるかも／和歌童蒙抄・一〇

【参考】作者名「坂上らう女」は、所載欄の万葉集に「坂上郎女」とあるのに一致する。

三五二 ふりあふぎてみ<sup>か</sup>月みればひとめみし人のまゆびきおもほゆるかも  
やかもち

【異同】み<sup>○</sup>月みれば—みかつきみれば（御・桂・大）

【現代語訳】振り仰いで三日月を見ると、一目見たあの人の、三日月のような、美しい眉のさまが思われるよ。

【語句】○まゆびき 眉引き。細長く美しい眉のさま。

【所載】万葉集・九九九（旧九九四）振仰而 若月見者 一目見之 人乃眉引 所念可聞 フリサケテミカヅキ  
ミレバヒトメミシヒトノマヨビキオモホユルカモ ふりさけてみかつきみればひとめみしひとのまよびきおもほ  
ゆるかも

【参考】作者名「やかもち」は、所載欄の万葉集に「大伴宿祢家持」とあるのに一致する。

三五三 よひのまにいでゝいりぬるみか月のわれてもゝのをおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】宵の間に出て入ってしまう三日月が割れているように、心が碎け割れるほどに思い悩むこの頃であるよ。

【語句】○われて 三日月が片割れ月で「割れて」いる意に、心が「破（わ）れる」、すなわち心が碎けるほどに思い乱れ、悩む意を掛ける。上三句は、「われて」を導く序詞。「みか月のわれては人をおもふともよにふたゝびはいづるものかは」（古今六帖・三五四）。

【所載】古今集・誹諧歌・一〇五九

三五四 みか月のわれては人をおもふともよにふたゝびはいづるものかは

【異同】ナシ

【現代語訳】三日月が割れているように、心も碎けあの人のことを思っても、月は一夜に二度出るものだろうか、いや再びは出ない。そのように、決して二度とはあの人に逢えないだろう。

【語句】○みか月のわれて 三五三番歌参照。

【所載】ナシ

ゆふづくよ

三五五 <sup>古十一恋一</sup> ゆふづくよさすやをかべのまつのはのいつともわかぬこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方の月がさす岡辺の松の葉のように、いつもいつも変らぬ恋をすることだ。

【語句】◎ゆふづくよ 夕方の月。陰曆上旬に、夕方、空に出ている月。または、夕方の月が出る夕暮れ時。古今六帖のこの項には、「夕月夜」という形の他、「よひの月」の形で詠まれたものも見える。○いつともわかぬこひ 常緑の松の葉がいつも変わらないように、いつも変ることのない恋。常に変ることなくその人を思っている、ということ。上三句は、「いつともわかぬ」を導く序詞。

【所載】古今集・恋一・四九〇／猿丸集Ⅰ・二二〇／猿丸集Ⅱ・一九／綺語抄・一六／近代秀歌・七三

【参考】猿丸集にも見えるが、古今集ではよみ人知らずの歌。古今六帖二六二番に、「てるひ」の題で「あさひこがさすやをかべのまつがえのいつともしらぬ恋もするかな」という形で見える。

〔以上五首担当 長戸〕

いべのをとくろまる

三五六 たまだれのこすのまとをりひとりみてみるしるしなきゆふづくよかも

【異同】ナシ

【現代語訳】小さいすだれの間を通して、ひとりで座って見る、何の甲斐もない夕方の月であることよ。

【語句】○たまだれの 「玉」を「緒」に通すことから「小簾」「越智」などに掛かる枕詞。転じて「コ」で始まる語に掛かることもある。「玉垂の小簾のすけきに入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ」（万葉集・二三八八（旧二二六四））、「玉だれのこがめやいづらこよろぎのいその浪わけおきにいでにけり」（古今集・八七四）。○こす もとは「をす」。小さいすだれ。○しるしなき 甲斐がない。効き目がない。ここでは訪れる人もいないことを嘆く。「思へども験もなしと知るものをなにかここたく我が恋ひ渡る」（万葉集・六六一（旧六五八））。

【所載】万葉集・一〇七七（旧一〇七三）玉垂之 小簾之間通 独居而 見驗無 暮月夜鴨 タマダレノコスノ  
マトホシヒトリキテミルシルシナキユフヅクヨカモ たまだれのをすのまとほしひとりみてみるしるしなきゆふ  
づくよかも／夫木抄・五〇九八／人麿集Ⅱ・一八六／人麿集Ⅳ・四八／和歌童蒙抄・一五、四九七／袋草紙・四  
六

【参考】所載欄の万葉集では「古歌集の一」とあり、作者名はない。「いべのをとくろまろ（忌部首黒麿）」は天  
平宝字二（七五八）年八月従五位下が確認され、万葉集には四首残る。古今六帖では「くろまろ」ないし「おと  
くる」はこの他五か所に名が見えるが（三三四、六七八、一〇六〇、一四一一、一八一七）、いずれも万葉集の黒  
麿歌とは一致しない。

三五七 たびなればよひにたちいでゝてる月のたかしまやまにかくるゝをしも

【異同】ナシ

【現代語訳】旅の身なので、宵に現れて照る月が高島山に隠れてしまうのが惜しいことだよ。

【語句】○よひにたちいでゝ 宵に出て。所載欄の万葉集「よなかをさして」では題「ゆふづくよ」に合わない。  
○たかしまやま 近江国。滋賀県西北部、琵琶湖西岸一帯の山々。「たかしまやみをの中山そまたててつくりかさ  
ねよちよのなみくら」（拾遺集・六〇五）。

【所載】万葉集・一六九五（旧一六九二）客在者 三更刺而 照月 高嶋山 隠惜毛 タビニアレバヨナカラサ  
シテテルツキノタカシマヤマニカクラクヲシモ たびにあればよなかをさしててるつきのたかしまやまにかくら  
くをしも／夫木抄・八四〇八／和歌童蒙抄・二一

三五八 はるがすみたなびく山のゆふづくよきよくてゐるらんたかまどのゝに  
あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞のたなびいている山にかかる夕方の月ははっきりと照り輝いていることだろう、高円の野では。

【語句】○たなびく山の 所載欄の万葉集をはじめとする文献の多くは「たなびく今日の」とする。いずれも霞  
に覆われた下界と「きよくてゐる」月との対比。○きよく 月がくもりなく照り輝いているさまをいう。三四五番

歌参照。○たかまどのゝ 高田の野。「高田」は奈良市東郊、春日山の南に広がる丘陵地帯のうち西麓の一带。「高田の野辺のかほ花面影に見えつつ妹は忘れかねつも」(万葉集・一六三四(旧一六三〇))。ただし所載欄の文献では万葉集と同じく「高松の野」とするものが多い。

【所載】新拾遺集・春上・六九／万葉集・一八七八(旧一八七四) 春霞 田菜引今日之 暮三伏一向夜 不穢照良武 高松之野尔 ハルカスミタナビクケフノユフヅクヨキヨクテルラムタカマトノノニ はるかすみたなびく けふのゆふづくよきよくてゐらむたかまつのに／人麿集Ⅲ・八／赤人集Ⅰ・一七〇／赤人集Ⅱ・五二／赤人Ⅲ・五五／能因歌枕・二〇／綺語抄・一四

【参考】作者名「あか人」は赤人集にも見出せるが、万葉集では作者未詳歌である。

### 三五九 ゆふづくよおぼろに人をみてしよりあまぐもはれぬこゝちこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方に出る月がぼんやりと霞んでいるように、かすかにあの人を見たときから、まるで空の雲が晴れないような思いでいるよ。

【語句】○おぼろに 夕月夜の様子と、あの人を「かすかに」見たの意を掛ける。「誰となくおぼろに見えし月影にわたける心を思ひしらなん」(後撰集・七三七)。○みてしより 見たときから。「し」は直接経験を表わす。相手の姿を「みてしより」思いが去らないと歌うものには「我妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり地(つち)は踏めども」(万葉集・二九六二(旧二九五〇))、「うたたねに恋しきひとを見てしより夢てふ物はたのみそめてき」(古今集・五五三)などがある。○あまぐもはれぬ 鬱々とした心情を喩える。「なくなみだそらにもなどかふらざらむあまぐもはれぬものをおもへば」(西宮左大臣集・七二、実頼女)。

【所載】新撰万葉集・四八四／冷泉家承空本敏行集・卷末歌／寛平御時后宮歌合・一八七

### 三六〇 つねはさもおもはれぬものをこの月のすぎかくれゆくをしきよひかも

【異同】ナシ

【現代語訳】日頃はそんなふうにも思わないのだが、この月が過ぎて隠れてしまうのが惜しい今宵であることよ。  
【語句】○さも そのように。そんなふうに。「うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ」

(古今集・六五六)。○をしきよひかも 所載欄の万葉集では巻七・雑歌「月を詠む」にあり、「この月」の見えなくなるのを惜しむ歌。

【所載】万葉集・一〇七三(旧一〇六九) 常者曾 不念物乎 此月之 過匿卷 惜夕香裳 ツネハサモオモハヌ  
モノヲコノツキノスギカクレマクヲシキヨヒカモ つねはかつておもはぬものをこのつきのすぎかくらまくをし  
きよひかも／人麿集Ⅱ・一八四／人麿集Ⅳ・五〇

〔以上五首担当 青木〕

三六一 ゆふづくよころもしらぬにしら露のをぐらのにはなくきりぐす

【異同】ナシ

【現代語訳】月の出ている夕暮れ時、心もしおれてしまうほどに、白露の置いているこの庭にはこおろぎが侘びしげに鳴いていることだ。

【語句】○ころもしらぬに このままでは意が通じにくい。所載欄の他文献ではすべて「心もしのに」とあり、それに従って解した。「心もしのに」は、心もしおれなびくように、しんみりしてしまふように、せつないほどに、の意。「あふみの海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古へ思ほゆ」(万葉集・二六八(旧二六六))。○をぐらのには「小倉の山」の用例は多いが、「小倉の庭」は他に見いだせない。ここも所載欄の文献ではすべて「おくこの庭に」とある。「こ」と「ら」は写本段階では非常に誤りやすいので、やはり他文献本文に従うべきであろう。○きりぐす 今のこおろぎという。

【所載】万葉集・一五五六(旧一五五二) 暮月夜 心毛思努尔 白露乃 置此庭尔 蟋蟀鳴毛 ユフヅクヨコロ  
モシノニシラツユノオクコノニハニキリギリスナクモ ゆふづくよころもしのにしらつゆのおくこのにはに  
こほろぎなくも／玉葉集・秋上・六二二／綺語抄・四七〇／袖中抄・五七九／古来風体抄・九二

ありあけ

たぐみね

三六二 ありあけのつれなく見えしわかれよりありあけのつれなくみえしわかれよりあか  
月ばかりうきものはなし



【異同】底本デハ丁ニ跨ッテ上句ガ二度繰リ返シ書写サレテイルガ、誤リニ氣ツイタノデアロウ、前者ガミセケチニヨッテ抹消サレテイル。他本ニオイテハ問題ガナイ。

【現代語訳】月を残したまま夜が明け初めてゆくころの、あの人が無情に見えたきぬぎぬの別れ——また、そんな私を無表情に照らしていた月影——あの時以来、暁ほどつらいものはないと私は思うようになりました。

【語句】◎ありあけ 月が空にありながら夜の明けること、また、そのころ。あるいは、夜が明けてもなお空に残っている月。月の満ち欠けを中心に考えている陰暦では、毎月十六夜以降がそれに該当する。和歌では「長月のありあけの月」と詠まれることが多く、特に恋歌では、男が女のもとから帰る道、女が男を待ち明かした際などに、つらく、あわれ深いものとして詠まれることが多い。

【所載】古今六帖「くれどあはず」三〇三四／古今集・恋三・六二五／新撰朗詠集・三九三／忠岑集Ⅱ・六一／忠岑集Ⅲ・四七、一二七／忠岑集Ⅳ・一五三／俊成三十六人歌合・五四／時代不同歌合・一一九／百人秀歌・二四／百人一首・三〇／定家十体・六／奥儀抄・五一三／西行上人談抄・二〇／近代秀歌・八六／詠歌大概・九三／竹園抄・四六、六四／三五記・三／古今著聞集・二〇七

【参考】作者名「たぐみね」は所載欄の文献に一致する。なお、「百人一首」の注釈史では、「つれなくみえし」が恋人の態度なのか、ありあけの月なのか、議論が絶えない。

### 三六三 君をのみをきふしまちの月なればうき人しもぞこひしかりける

【異同】月なれば―月みれば（御・桂・大）

【現代語訳】あなたのことばかり四六時中お待ちしていて、やっと出てきた臥し待ちの月を見ると、こんなにもつらい思いをさせた人が無性に恋しくてならないことだ。

【語句】○をきふしまちの月なれば 「起き臥し、待ち」と「臥し待ちの月」の掛詞。「起き臥し」は、いつもいつも。常に。「臥し待ちの月」は、陰暦十九日の月。立ち待ちの月（十七日）、居待ちの月（十八日）につづいて、臥して待って、やっと出てくるような出の遅い月。十九日の月だけではなく、それ以後の月についてもいうことがある。なお他本ではすべて「月みれば」となっており、その方が意が通りやすく、従った。○うき人しもぞ つらい人が。つらい思いをさせる人が。「しも」「ぞ」はいずれも強めの助詞。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖「人をまつ」二八二〇番に上二句のまったく同じ歌がある。下三句は次のとおり。「月影はや

ちよもここにありあけをせよ」。

### 三六四   ながつきのありあけの月のありつゝもきみしきまさばわれもわすれじ   人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】九月のありあけの月、こうしてありつづけ、待ちつづけて、もしもあなたが来てくださったたら、私も決して忘れたりはいしないでしょう。

【語句】○ながつきの 陰暦九月の。上二句は同音反復による序詞。「あり」を導く。○ありつゝも ずつとこのようにありつづけて。ずつとこうして待ちつづけて。○きみしきまさば あなたがいらつしやたら。「し」は強めの副助詞。「きまさば」の「まさ」は尊敬の意を表す補助動詞「ます」の未然形。「ば」は順接仮定条件。

【所載】拾遺集・恋三・七九五／万葉集・二三〇四（旧二三〇〇）九月之 在明能月夜 有乍毛 君之来座者 吾将恋八方 ナガツキノアリアケノツキヨアリツツモキシキマサバワレコヒメヤモ ながつきのありあけのつくよありつゝもきみがきまさばあれこひめやも／人麿集Ⅰ・一五六／人麿集Ⅱ・三〇二／人麿集Ⅲ・四五三／人麿集Ⅳ・二九四／小町集Ⅰ・一〇一

【参考】現存人麿集の所収歌はほとんどが万葉集に見えるものの、人麿詠と確認できるものは少ない。当該歌も万葉集では作者未詳歌である。従って作者名に「人まろ」とあり、人麿集に歌が載っていても、この歌の作者が人麿である保証にはならない。なお万葉集も拾遺集も末句は「われこひめやも」となっていて、それによれば、あなたが来てくださったたらこんなに恋い慕ったりはしない、の意となる。

### 三六五   よの人はつらきこゝろぞありあけの月とやまにやいりもしなまし

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中の人はいつれない心を持っていることだ。ありあけの月と一緒に、私も山に身を隠してしまおうかしら。

【語句】○つらきこゝろぞありあけの 「つらき心ぞあり」と「ありあけの月」の掛詞。○月とやまにやいりもしなまし 月と一緒に山に入ってしまったおうか、どうしよう。当時、月は山の端に沈むと意識されていたし、人が

山に入るのは、出家を意味した。「や……まし」はためらいの気持ちを表す。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

三六六 いでゝこぬ山もかはらぬながつきのありあけの月のかげをこそまで  
くるイ つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】月がなかなか出てこない、山も変わらない、そのような長月の有明の月の光を待つことです。

【語句】○いでゝこぬ 所載欄の貫之集では傍書と同じ「いでてくる」。「いでてくる」の方がわかりやすい。○山もかはらぬ 同じ山から月が出ることで永遠性を表す。○ながつきのありあけの月 「有明の月」は、陰暦十五日以後、特に二十日頃の、夜が明けても、まだ空に残っている月。「長月の有明の月」と続ける形が多かった。三六四番参照。○かげをこそまで 光を待つことです。「かげ」は光の意。貫之集では「影をこそみれ」。同じ山から出る、有明の月の変わらぬ光に、変わらぬもののすばらしさを感じた。

【所載】貫之集Ⅰ・六八九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰ・六八八詞書には「延長五年九月、右大臣殿前裁の合負けわざ、内舍人橘のすけなはつかうまつる州浜に書ける」とあり、「月」の題で当該歌が続く。萩谷朴によると、この前裁合は延長三年三月に忠平に下賜された東院を五年秋に改造新築したときに催された。『平安朝歌合大成』では三三・「延長五年」秋小一条左大臣忠平前裁合の補二としてこの歌をあげる。「すけなは」は伝未詳。貫之集Ⅰ・六八八番から六九四番までの一連の歌群には、不変（永遠）と長寿を寿ぐ賀歌が並ぶ。

三六七 しらつゆをたまになしたるながつきのありあけの月よみれどあかぬかも

【異同】ナシ

【現代語訳】白露を玉かと思わせる長月の有明の月は、いくら見ても飽きませんよ。

【語句】○しらつゆをたまになしたる 露が月光にきらめいて、玉のように見えることをいう。「なす」は、あるものを別の状態のものにする意。所載欄の人麿集では「たまにつくれる」、家持集では「たまにもぬきて」。露を

玉に見立てる歌は古今集二五番「秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ」等数多く見られる。○ながつきのありあけの月よ 人麿集では「長月の有明のかげは」、家持集では「なかつきのありあけのつきを（は）」。「つくよ」は月、月の光。

【所載】万葉集・二二三三（旧二二二九）白露乎 玉作有 九月 在明之月夜 雖見不飽可聞 シラツユヲタマニナシタルナガツキノアリアケノツキヨミレドアカヌカモ しらつゆをたまになしたるながつきのありあけのつくよみれどあかぬかも 人麿集Ⅰ・一三八／家持集Ⅰ・一四四／家持集Ⅱ・一三四

三六八 しぐれふるあか月つきよひもとかできみをかなしとをらましものを

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨の降る暁月夜に、私も紐を解かずに、あなたを愛おしいと思っていたいのに。

【語句】○しぐれふる 時雨は、秋の末から冬の初め頃に、降ったり止んだりする雨。降り続く雨ではないので、暁月夜に続くうる。「神無月あり明の月のしぐるるを又われならぬ人やみるらむ」（時代不同歌合・二八九・赤染衛門）。○あか月つきよ 月の残っている夜明け方。○ひもとかで 下紐（下裳・下袴などの紐）を解かずに。所載欄の万葉集・人麿集ともに「ひもとかず」。「紐解く」は男女が共寝する意を表すことが多い。○きみをかなしと あなたを愛おしいと思つて。万葉集では「恋ふらむ君と」、人麿集では「恋しき君と」。万葉集の本文がわかりやすいが、こゝは六帖の本文によつて解釈しておく。○をらましものを いたいのに。「まし」は願望を表す。【所載】万葉集・二三〇九（旧二二〇六）四具礼零 暁月夜 紐不解 戀君跡 居益物 シグレフルアカツキヅキヨヒモトカズコヒシキキミトララマシモノヲ しぐれふるあかときづくよひもとかずこふらむきみとをらましものを 人麿集Ⅲ・五五四

【参考】万葉集では二二三〇八（旧二三〇五）番「旅尚 襟解物乎 事繁三 丸宿吾為 長此夜（旅にすら紐解くものを言繁みまろ寝ぞ我がする長きこの夜を）」との問答歌。人の噂を訪ねない理由にして、秋の夜長の一人寝の侘しさを訴える男に対して、「紐も解かずに（他の女と共寝することなく）自分を恋しく思っているというあなたと一緒に居られればいいのに」と返したもの。

ゆふやみ

三六九 いもがめのみまくほしけくゆふやみのこのはがくれの月まつがごと

【異同】ナシ

【現代語訳】あの子の顔を見たいと思う気持ちは、夕闇の木の葉に隠れている月を待つのと同じようなものです。

【語句】◎ゆふやみ 日没後まだ月が出なくて暗い頃。特に陰暦二十日前後のことをいうことが多い。○いもがめ 「め」は目に映る顔や姿。「妹が」などの限定を伴って会いたいと思う人の顔や姿をいう。所載欄の人麿集では「いもにより」（妹のせいで）。○みまくほしけく 「見む」のク語法と「欲し」のク語法の複合形で、見たく思う意。○このはがくれの月 木の葉に隠れてなかなか現れない月。人麿集では下句「このはがくれをまてこそゆけ」。女の許へは月の光を頼りに通うのが習いだった。

【所載】万葉集・二六七四（旧二六六） 妹目之 見眷欲家口 夕闇之 木葉隱有 月待如 イモガメノミマクホシケクユフヤミノコノハゴモレル（カクレテ）ツキマツガゴト いもがめのみまくほしけくゆふやみのこのはごもれるつきまつごとし／人麿集Ⅲ・四七〇

【参考】万葉集第四句「隠有」は、コモレルともカクレルとも読めるが、『時代別国語大辞典』（上代編）に「カクレルは視界内から外へ去るといふ動きをあらわし、コモルは対象が奥に入りかくれた状態をあらわす」という点にその差が認められる」とあり、諸注もコモレルとしている。

三七〇 ゆふやみはみちもみえねどふるさとはもとこしこまにまかせてぞくる

【異同】ナシ

【現代語訳】夕闇は暗くて道も見えませんが、昔馴染んだ家には、そのころ通いなれた馬にまかせて来ましたよ。

【語句】○ゆふやみは 所載欄の大和物語では「夕されば」（夕方になると）。○ふるさと 古い馴染みの地。ここでは、かつて通いなれていた女の家をいう。「君しのぶ草にやつるるふるさととは松虫のねぞかなしかりける」（古今集・二〇〇）。○こま 馬の歌語。○まかせてぞくる 随ってきましたよ。「まかす」は随う意。所載欄の文獻では「まかせてぞ行く」が多い。

【所載】後撰集・恋五・九七八／綺語抄・六五三／奥儀抄・三三八／和歌色葉・三三四／大和物語・五十六段・七五

【参考】大和物語によれば、この歌は兼盛が、兵衛の君（藤原兼輔の兄兼茂の娘）に詠んだ歌。後撰集ではよみ人

知らず。返歌「駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな」。『後撰集標柱』は、桓公が雪で道に迷った時、管仲の言に従って老馬を放ち、それに随って帰るを得た、「管仲随馬」（蒙求）の故事によると指摘する。

〔以上五首担当 三浦〕

大□娘女<sup>宅</sup>

三七一 ゆふやみはみちたどくし月まちてかへれわがせこそそのまにも見ん

【異同】作者名、底本ハ「宅」ニ似タ字ノ右ニ改メテ「宅」ヲ記ス。

【現代語訳】夕闇の時は道が薄暗くて分かりにくうございます。月が出るのを待ってお帰りください、あなた。その間にもあなたを見ていましょう。

【語句】○ゆふやみ 夕方、日が落ちてまだ月が上がない間の闇。またその「ゆふやみ」時分のこと。○たどくし 夕やみの薄暗さのために、目標やあたりの様子が分りにくいさま。○かへれわがせこ お帰りください、あなた。

【所載】新勅撰集・恋四・八八一／万葉集・七一二（旧七〇九）夕闇者 路多豆多頭四 待月而行 吾背子 其間尔母将見 ユフヤミハミチタヅタヅシツキマチテユカムワガセコソノマニモミム ゆふやみはみちたづたづしつきまちていませわがせこそそのまにもみむ／伊勢集Ⅰ・四三七／伊勢集Ⅱ・四四二／俊頼髓脳・一三二

【参考】作者名「大宅娘女」は、万葉集の作者名に一致する。

ほし

三七二 ひくるれば山のはにいづるゆふつづのほしとは見れどあはぬ<sup>君イ</sup>ころ哉

【異同】ナシ

【現代語訳】日が暮れると山の端に出てくる宵の明星の、その「星」ではないが、「欲し」いとは思って見るけれども、恋しい人に逢えない今日この頃だ。

【語句】◎ほし 星。太陽・月・地球以外の天体の称。○ゆふつづ 夕方西の空に見える金星。宵の明星。上三句は、「ほし」を導き出すための序詞。○ほしとは見れど 「星」に「欲し」を掛ける。「欲し」は、この場合「逢

いたい」ということ。逢いたいとは思って見るけれども。「あひ見まく星はかずなく有りながら人に月なみ迷ひこそすれ」(古今集・一〇二九)。○あはぬころ哉 (恋しい人に) 逢えない今日この頃だ。

【所載】万代集・三〇五五／夫木抄・七七〇三／忠岑集Ⅱ・四四／忠岑集Ⅲ・六八／忠岑集Ⅳ・六二

### 三七三 わがこひはそらなるほしのかずなれや人にしられでとしのへぬれば

【異同】ナシ

【現代語訳】私の恋は、空にある星の数のようなものだろうか。あの人に知られずに年月ばかりが経ってしまったので。

【語句】○わがこひはそらなるほしのかずなれや わたしの恋は、空にある星の数のようなものだろうか。「なれや」は、「……たろうか」と疑問の形にしながら、「まるで……のようだ」と、それを肯定する言い方。わが恋の思いは、まるで空にある星のように数かぎりもない、ということ。○人にしられで あの人に知ってもらえなくて。「人」は、この場合恋の相手をさしている。「で」は、打消のはたらきをする接続助詞、「ずして」の意。空にある星の数がどれほどあるか人に知られぬように、わが恋の尽きせぬ思いもあの人に知ってもらえない、ということ。

【所載】躬恒集Ⅰ・三〇八／躬恒集Ⅲ・三三二

### 三七四 あづまやのふせやいたまのあはぬよりそらのほしともみゆるきみかな

【異同】ナシ

【現代語訳】屋根を四方に葺き下ろした小さい粗末な家の、ふき板の板間が合わない、ちょうどそのように、逢わなくなつて以来、空の星のように欲しい(逢いたい)と見えるあなたであることよ。

【語句】○あづまや 屋根を四方に葺き下ろした造りの家。○ふせや 屋根を地に伏せたような低い家。小さい粗末な家。○いたま 板間。板ぶき屋根のふき板の板と板のあいだ。初句は、「あはぬ」にかかる序詞。○あはぬより 板間が「合はぬ」ことに恋の「逢はぬ」を掛ける。逢わなくなつて以来。「あはぬ」は、体言的用法。「より」は、「逢はぬ」ようになったことの時間的起点をあらわす。○ほしともみゆる 「星」に「欲し」(逢いたい意)を掛ける。三七二番歌参照。

【所載】ナシ

三七五 月かげにはがくれにけりあかほしのあかぬ心にいでくやくやく

【異同】ナシ

【現代語訳】明けの明星は月の光によつて隠れてしまったなあ。せつかく明星が（私を）眺め足りないような気持ちにさせながら出ていたのに、くやくしいことに隠れてしまった。

【語句】○月かげに 月の光によつて。○はがくれにけり 「はがくれ」は、葉隠れ。草や木の葉の蔭にかくれることだが、ここは月光の明るさによつて「あかほし」の光がかき消されたことを比喩的に言つたものか。蔭にかくれて見えなくなつてしまったなあ。○あかほし 明けの明星。暁方の空に見える金星。○あかぬ心 充分に満足しない気持。ここでは「あかほし」を眺め足りない気持。「あかほしのあかぬ」で、同音がくり返されている。○いでくやくやく せつかく出ていたのに残念なことに。

【所載】ナシ

【参考】明星が「はがくれで」見えなくなつたことを残念がつた歌だが、この下句には、恋の暗喩があるのかもれない。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

三七六 よひごとになちもいでなむゆふつづの月なきそらのひかりとおもはん

【異同】ナシ

【現代語訳】宵ごとに出てきてほしいものです。宵の明星のように、月のない空の光と思ひましよう。

【語句】○たちもいでなむ 出てきてください。接頭語「たち」と詠えの助詞「なむ」を用いる。○ゆふつづ 夕つづ。夕方の星。宵の明星（金星）の異名。次の三七七番歌が万葉集卷十に収載されており、それが古い例。

【所載】夫木抄・七七〇二

三七七 ゆふつづもかよふあまぢのいつしかとあふぎてまたん月人おとこ



【異同】ナシ

【現代語訳】宵の明星も通う大空の道を、早く出たとふり仰いで待とう、月の出るのを。

【語句】○ゆふつゞ 三七六番歌参照。○あまぢ 天路。大空の道。○いつしかと 早く出てほしい、の意。○月人おとこ 月人をとこ。月を擬人化した表現。この歌は万葉集では秋雑歌・七夕歌群に収められているので、本来待っているのは、牽牛を待っていることになる。しかし、古今六帖では、牽牛を待っているのか、月の出を待っているのかは不明。一応、月の出を待っていると解した。

【所載】万葉集・二〇一四（旧二〇一〇）夕星毛 往来天道 及何時鹿 仰而将待 月人壮 ユフツヅモカヨフ アマヂライツマデカアフギテマタムツキヒトヲトコ ゆふつづもかよふあまぢをいつまでかあふぎてまたむつきひとをとこ／夫木抄・七七〇四／人麿集Ⅲ・一三六／赤人集Ⅰ・二八一／赤人集Ⅱ・一六〇

三七八 君にのみあはまくほしのゆふさればそらにみちぬるわがこゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたにただ逢いたいと望んで、夕方になると、空に星が満ちるように、その気持ちでいっばいになつてしまう私の心だよ。

【語句】○あはまくほし 逢いたいと望む。「欲し」に「星」をかける。○ゆふされば 夕方になると。

【所載】ナシ

三七九 はるのかぜ はるのかぜ  
はるのかぜのふきそめしよりたきつせのこほりもとけてはなぞちりける

【異同】ナシ

【現代語訳】春風が吹き始めて、急流の水も溶けて川の水が波の花となり、それが碎けて散っていくことだ。

【語句】◎はるのかぜ 以下、四季の風を題とする。「春の風」は東風解氷に始まり、花散らしの風となる。○はるかぜの 以下「こほりもとけて」まで、いわゆる東風解氷をあらわす。「袖ひちてむすびし水のこほれるを 春立つけふの風やとくらむ」（古今集・二・貫之）が有名。○たきつせ 滝つ瀬。もと「滾（たぎ）つ瀬」で、水の激しく流れる瀬。○はなぞちりける 春のはじめに花が散る、という季節に合わない表現になるが、古今集

・一二・当純の、「谷風にとくるこほりのひま」ことにうちいづる浪や春のはつ花」を視野に入れると、まさに「風で氷が解ける」―「解けた氷が波の花となる」―「波の花がたきつせで散る」となる。

【所載】ナシ

### 良峯宗貞

三八〇 花のいろはかすみにこめて見せずともかをだにぬすめはるの山かぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】花の色は霞で隠して見せなくても、その香りだけは盗み出しておくれ、春の山風よ。

【語句】○かすみにこめて 花を霞が隠すという典型。○かをだにぬすめ 「盗む」は歌語としては珍しいが、小島憲之は、「白詩に多い語」であり、香を盗むとは「花の香をひそかにとり入れる、香をもたらして漂わせること」であると説く『古今集以前』塙書房、一九七六年）。丹羽博之は晋書・賈充伝の偷香の故事が背景にあるとする。女（賈充の娘）が密かに通じる男（韓寿）に父秘蔵の香を盗んで送り、その香によって娘の相手を知ったこの故事に関して、菅原道真も詩に詠んでおり、当時知られたものであったとするが、この故事は隠された裏の意味として捉えるべきだとする（『古今集春上91番歌』『香をだにぬすめ春の山風』と『偷香』の故事）『平安文学研究』一九八三年十二月）。なお、古今六帖には「花の色に雪はまじりて見せずともかをだにぬすめ人のしるべく」（七一六）という歌があるが、これは古今集・三三五では、「かをだににほへ」とする小野篁の詠である。

【所載】古今集・春下・九一／新撰和歌・五五／遍昭集Ⅰ・一／遍昭集Ⅱ・一／和歌体十種・三七

【参考】作者名「良峯宗貞」は遍昭の俗名であり、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本〕

三八一 はるかぜは花のあたりをよきてふけこゝろづからやうつろふと見ん  
ふぢはらのよしかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】春風は（花を散らせるものと言われているが）花のあたりを避けて吹いて見よ、そうすれば、風の仕業か、そうではなく花自身が自分からうつろうのか確かめられるから。

【語句】○よきて 「よく」は上二段。よける。避ける。従来「よぎて」と読まれていたが清音。○こゝろづから 自分の意志で。○うつろふ 色あせる。衰える。

【所載】古今集・春下・八五／興風集Ⅰ・一／興風集Ⅱ・一／俊頼髓脳・一一三／綺語抄・七三四／万葉集時代難事・六六／桐火桶・五七

【参考】作者名「ふちはらのよしかげ」は所載欄の古今集に一致する。興風集は自撰ではなく、別人の歌も含む。藤原好風（良風とも）は古今集に一首を残す。寛平十（八九八）年左兵衛少尉、延喜十一（九一一）年従五位下。出羽介。

### みつね

三八二 吹風をいとひもはてじむめのはなちりくるときぞかはまさりける

【異同】ナシ 「いとひもはてし」細字二行二書ク。「かはまさりける」細字二行二書ク。

【現代語訳】吹く風を（花を散らすものと）嫌い通すまい、花の散りくる時にいつそう花の香がまさるのだった。（風が梅の香を運ぶのだった）。

【語句】○いとひもはてじ 厭ひも果てじ。「厭ひ果つ」に打ち消しの助詞「じ」の接続したかたち。「も」は強意の助詞。最後まできらい通すまい。

【所載】拾遺抄・春・一六／拾遺集・春・三〇／躬恒集Ⅰ・一〇九／躬恒集Ⅱ・二〇／源平盛衰記・一八七

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

### もとかた

三八三 かすみたつはるの山べはとをけれどふきくるかぜは花のかぞする

【異同】ナシ 作者名「もとかた」ハ小字デ書キ入レテイル。

【現代語訳】霞のたなびく春の山辺ははるか遠くにあるが、吹き来る風は（まるで近いかのように）花々の香がする。

【語句】○とをけれど 遠けれど。山べは遠いが風は「近い」とは言わずに「花の香がする」と表現する。対句的である。

【所載】古今集・春下・一〇三／新撰万葉集・二九／寛平御時后宮歌合・二九／時代不同歌合・七三／西行上人談抄・四／桐火桶・五九

【参考】作者名「もとかた」は所載欄の文献に一致する。

三八四 春はまづあづま<sup>ち</sup>よりぞわかくさのことはつてよむさしのゝかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】春は東からくるもの、東国から春の萌え出る若草の言葉を一番先に伝えてよ、武蔵野の風よ。

【語句】○あづまぢ 東路。東国。陰陽五行説では東は春にあたる。春は東から来るとする。これと同様、西は秋にあたり「西こそ秋のはじめなりけり」(古今集・秋下・二五五)などと、西を「秋の来る方角」とする歌もある。○わかくさの 萌え出たばかりの草。「若草の葉」として「ことのは」に掛けられた「葉」に続く。○ことは言葉。○つてよ 「伝える」という意味の動詞「つつ」(下二段活用)の命令形。伝えよ。

【所載】古今六帖「人づて」二八六四

【参考】春が東から来る、ということについて、礼記・月令に「立春之日、天子親帥三公・九卿・諸侯・大夫以迎春於東郊」とある。また、後拾遺集の春の巻頭近くに、春は東より来るということを踏まえた歌がある。

みちのくにははべりけるととき、はるたつひよみはべりける

いでてみよいまはかすみもたちぬらんはるはこれよりすぐとこそきけ (二)

春はひむがしよりきたるといふ心をよみ侍りける

あづまちはなこそせきもあるものをいかでか春のこえてきつらん (三)

とものり

三八五 花のかをかぜのたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

【異同】ナシ

【現代語訳】花の香をむこうへゆく風に伴わせて送り、(こちらはもう花が咲く春と知らせ) 鶯を誘う案内役として遣わします。

【語句】○かぜのたよりにたぐへてぞ 「たより」は名詞で、使者の意。○しるべにはやる 「しるべ」として

違わす、の意。こちらへ案内する者のことを「しるべ」といった。古今六帖三〇番は「しるべにはする」。

【所載】古今六帖「残りの雪」三〇番既出。

【参考】作者名「どものり」は古今集に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

そせい

三八六 はなちらす風のやどりはたれか<sup>そせい</sup>しるわ<sup>そせい</sup>れにを<sup>そせい</sup>しへ<sup>そせい</sup>よ<sup>そせい</sup>ゆ<sup>そせい</sup>きてう<sup>そせい</sup>ら<sup>そせい</sup>み<sup>そせい</sup>ん<sup>そせい</sup>わ<sup>そせい</sup>れにを<sup>そせい</sup>し<sup>そせい</sup>へ<sup>そせい</sup>  
よゆきてうらみん

【異同】底本デハ丁ニ跨ッテ下句ガ二度繰リ返シ書写サレテイルガ、前者ガミセケチニヨッテ抹消サレテイル。  
【現代語訳】桜の花を散らす風の今夜の宿は、誰か知っているか。もし知る人があれば私に教えてほしい。そこへ行って恨みごとを言おう。

【語句】○やどり 宿。自宅以外の宿泊所をいう。

【所載】古今集・春下・七六／素性集Ⅰ・一一／素性集Ⅱ・一七／素性集Ⅲ・三

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

三八七 つれもなき人におもひをはる風はわがもゆるごとふきもつげなん

【異同】ナシ

【現代語訳】冷淡な人に、私の思いを、春風は私の燃えるように烈しい思いそのものように強く吹いて、告げ知らせしてほしいものだ。

【語句】○つれもなき 自分に無関心である。冷淡である。無情な。「つれ」は「連れ」の意で、つながりということ。「つれもなき人を恋ふとて山びこの答へするまでなげきつるかな」(古今集・五二二、古今六帖・九九二)。

【所載】ナシ

三八八 春かぜのいたくふくらしなだのあまのつりするをぶねさしかへる見ゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の突風が強く吹いているらしい。海上の難所に出て釣りをする漁夫の乗る小舟が岸に帰るのが見える。

【語句】○春かぜの 所載欄の文献では「あゆのかぜ」。○なだ 灘。海上の風波が荒く、航行に注意を要するところ。所載欄の文献では「なご」。○あま 漁夫。○さしかへる 「さし」は、語の意味を強めたり、語調を整えたりする接頭語。ここでは「かへる」を強調し、すぐにひきかえすの意。

【所載】万葉集・四〇四一（旧四〇一七）東風（越俗語東風謂<sub>ニ</sub>之安由乃可<sub>一</sub>是アユノカゼ<sub>一</sub>也）伊多久布久良之 奈吳乃安麻能 都利須流乎夫祢 許芸可久流見由 アユノカゼイタクフクラシナゴノアマノツリスルヲブネ  
コギカクルミユ あゆのかぜいたくふくらしなごのあまのつりするをぶねこぎかくるみゆ／夫木抄・七七五二／  
綺語抄・七八／和歌童蒙抄・三六／袖中抄・七六三／古来風体抄・一八七

三八九 はる風は花のなきまにふきはてねさきなば思なくて見るべく

【異同】ナシ

【現代語訳】春風は花の咲かないうちに吹き終わってしまえ。花が咲いたら風の心配なくゆったりと花を見ることのできるように。

【語句】○花のなきまに 花が咲いていないうちに。○ふきはてね 吹き果ててしまえ。「はてね」は、動詞「はつ」の連用形＋助動詞「ぬ」（完了・強意）の命令形。○思 おもひ。気がかりなこと。風で花が散ることに對する心配。

【所載】拾遺集・雑春・一〇三五

三九〇 にほふより心あだなるはなゆへにのどけきはるの風もうらめし

【異同】ナシ

【現代語訳】色美しく咲くとすぐに、浮気心をおこして散ってしまう花のために、のどかな春の風も恨めしいことであるよ。

【語句】○にほふより 「にほふ」は、当該歌では、視覚に関する語。色美しく映える。「より」は、……する

とすぐに、の意。「あづさゆみ春たちしより年月のいるがごとくもおもほゆるかな」（古今集・一二七・みつね）。○あだなる 真実さが無い。移り気で誠実さが無い。浮気である。花の散ることを、風の誘惑のせいと見ている。

【所載】続後撰集・春下・一一八／寛平御時中宮歌合・七

〔以上五首担当 斎藤・長戸〕

三九一 ふく風やはるたちきぬとつげつらんえだにこもれる花さきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風が春が立ってやってきたよと告げたのだろうか、枝のなかに籠もり隠れていた花々も咲き出したことだ。

【語句】○ふく風やはるたちきぬとつげつらん 「はるたちきぬ」は春が立ってやってきたという擬人法。「ふく風」が「つげ」というのも擬人法で、入子型のごとく二重の擬人法が用いられている。このような春と風の擬人は、新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注の指摘にもある通り、白居易の詩「潯陽春 三首」の「春生」の翻案とみられる。参考欄参照。

【所載】後撰集・春上・一二／新撰万葉集・一五／和歌童蒙抄・一〇七。

【参考】白居易の詩には「春生何処闇周遊 海角天涯遍始休 先遣和風報消息 続教啼鳥説来由（春生じて何れの処にか闇に周遊する 海角天涯遍くして始めて休す 先づ和風をして消息を報ぜしめ 続いで啼鳥をして来由を説かしむ）」（潯陽春 三首 春生・白氏文集・一〇二〇）とあり、春が生まれ、あちこちを周遊して海の果て天の果てまでいって漸く休むのである、和やかな風に春が来たという便りを届けて知らせ、鳴く鳥によって、春の来た由来を語らせるのであるという形で、「春」そのものが人であるかのような詠まれ方をしている。春の擬人と漢詩文の関わりについては、田中幹子『古今集』における季の到来と辞去について―三月尽意識の展開―（『中古文学』一九九七年三月）にも詳しく論じられている。

三九二 はるかぜのわがやどにだにふきこずはしらぬさとなるはなをみましや  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】春風がわが宿にまでも吹いて来なかったなら、見知らぬ里に咲いた花を見ただろうか。

【語句】○ずは 打消の順接仮定条件。もし……でないならば。○みましや 見ただろうか、いや見ない。「ましや」は反語の反実仮想。「ずは……みましや」の例歌として「けふこずはあすはゆきとぞふりなましきえずはありともはなとみましや」（古今集・六三）がある。類想の歌としては「吹風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや」（古今集・一一八）。

【所載】ナシ。参考欄参照。

【参考】「おひかぜのわがやどにだにふきこずはあながらそらの花をみましや」（伊勢集Ⅰ・一一二、伊勢集Ⅱ・一一四、伊勢集Ⅲ・一一一）が原歌とみれば、作者名「いせ」と一致する。

三九三 わがためのなにのあたとかはるかぜのをしむとしれる花をしもふく

【異同】ナシ

【現代語訳】私に対して何の恨みがあるというので、春風は、大切にしていると知っている花に限って吹きつけるのだろうか。

【語句】○わがためのなにのあたとか あた（仇）は、恨み。所載欄の伊勢集諸本はすべて「わがために」。貫之集に「わがためのあたにざりける年月は思ひもなさで行きかへりつつ」（五八三）という例があるが、「なにの」といった語句を間に入れた例は見られない。

【所載】続古今集・雑上・一五二五／万代集・三五五／伊勢集Ⅰ・三二〇／伊勢集Ⅱ・三〇九／伊勢集Ⅲ・三〇九

【参考】作者名はないが、続古今集には「伊勢」とあり、伊勢集にも入集する。

夏のかぜ

みつね

三九四 ゆくみちはまだとをけれど夏やまのこのした風はたちうかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】これから行く道はまだ遠いけれども、夏山の木蔭の下を吹く風は涼しく、立ち去るのがつらいこと



だ。

【語句】◎夏のかぜ 夏の風は冬の風とともに、春の風、秋の風ほど多く取り上げられる歌材ではなかったが、納涼の主題と取り合わされる場合が多い。○とをけれど とほけれど。遠いけれど。○このした風 木の下を吹く風で山下風にならった造語。「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」(貫之集・七九四)がよく知られるが、夏の歌としても「夏衣薄きかひなし秋までは木の下風もやまず吹かなん」(貫之集・一五〇)がある。類想歌に「夏山の蔭をしげみや玉ぼこの道行き人も立ちどまるらん」(拾遺集・一三〇、貫之集・一)がある。

【所載】拾遺集・夏・一二九／躬恒集Ⅰ・九五／躬恒集Ⅱ・二〇七／躬恒集Ⅲ・一四二／躬恒集Ⅴ・三〇

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。ただし初句「ゆくみちは」と四句「このした風は」が一致するのは躬恒集Ⅰのみ。他は初句「行末は」四句「木の下蔭ぞ」となっている。拾遺集の詞書に「女四のみこの家の屏風に」とある。女四のみこは勤子内親王。

三九五 なつのかぜわがたもとにしつゝまればこひしき人のつとにしてまし

【異同】ナシ

【現代語訳】涼しい夏の風を私の袂に包むことができるなら、恋しい人のみやげにすることができるとに。

【語句】○つゝまれば 包むことができるなら。「れ」は可能の助動詞「る」の未然形。「ば」は順接仮定条件。

「まし」と呼応して反実仮想となる。「かくばかりおつる涙のつつまれば雲のたよりに見せましものを」(伊勢集・五三三)。○つと みやげ。贈り物。恋しい人のための「つと」は万葉集以来の典型的発想で、「伊勢の海の沖つ白浪花にもが包みて妹が家づとにせむ」(万葉集・三〇九(旧三〇六))、「宇治川に生ふる菅藻を川早み採らず来にけりつとにせましを」(万葉集・一一四〇(旧一一三六))など例歌は多いが、風を「つと」にするという例は珍しい。

【所載】古今六帖「つと」三四七五／新撰万葉集・二九三／夫木抄・七七三〇／寛平御時后宮歌合・五一

【参考】和歌では、袂に包むのは、「つつめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり」(古今集・五五六)のように「涙の玉」とされる場合が多いが、風が袂(袖)に入るという例として「出入君懷袖 動揺微風発(君が懷袖に出入し 動揺して微風発す)」(班婕妤「怨歌行」・文選・樂府上)がある。

〔以上五首担当 中野〕

三九六 ふくかぜはわがやどにくるなつのよは月のかけこそすゞしかりけれ

【異同】 ふくかぜは—ふくかぜの（大）

【現代語訳】 吹く風がわが家に入ってくる夏の夜は、月の光が実に涼しいことだ。

【語句】 ○ふくかぜは 所載欄の文献では「ふくかぜの」となっている。その方がわかりやすい。○わがやどにくるなつのよは わが宿に来る夏の夜は。「くる」は連体形であるから「なつのよ」にかかる。二句切れとはならない。○月のかげ 月の光。

【所載】 新撰万葉集・三〇一／寛平御時后宮歌合・五七

三九七 夏ながらみぎはのかぜのすゞしきはなみにとひてぞしるべなりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 夏でありながら水のほとりの風の涼しいわけは、波に問うて知ることができる。（波がそれを知らせてくれるよすがだ。）

【語句】 ○夏ながら 夏でありながら。夏であるにもかかわらず。○みぎは 水際。水のほとり。○なみにとひてぞしるべなりける 「問ひて知る」に、「しるべ（手引き、よすがの意）」を掛けている。波に問うことによつて知ることができる。

【所載】 ナシ

三九八 ことのねにひゞきかよへるまつかぜにしらべてもなくせみのこゑかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 琴の音と合奏するように鳴っている松風に、さらに音（ね）をととのえ合わせて鳴く蟬の声だなあ。

【語句】 ○ことのねにひゞきかよへるまつかぜ 琴の音にひびきを合わせるように吹いている松風。李嶠百二十詠の「松声入夜琴（松声夜の琴に入る）」の句の想をふまえるか。「松のおと琴にしらぶる山風は滝の糸をやすげてひくらん」（貫之集Ⅰ・九四）。○しらべて 楽の調子や音律を整えて。

【所載】新拾遺集・夏・三〇三／新撰万葉集・七三／夫木抄・三五八四／寛平御時后宮歌合・七五

三九九 雨ふるとふくまつかぜはきこゆれどいけのみぎはゝまさらざりけり  
つらゆき

【異同】いけのみぎはゝ―かけの汀は(大)

【現代語訳】あたかも雨が降るようだと、吹く松風の音は聞こえるけれども、(雨ではないのだから)池のみぎわの水位は増さないよ。

【語句】○雨ふるとふくまつかぜはきこゆれど 雨が降るかのように吹く松風の音は聞こえるが。雨の音を松籟にたぐえる発想は、千載佳句・九九六に「山深野客如禅客 夜久松声似雨声(山深くして野客は禅客のごとし 夜久しくして松声は雨声に似たり)」と見える(渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年)。貫之も、当該歌のほか「雨とのみ風吹く松はきこゆれど声には人もぬれずぞありける」(貫之集I・二五二)など、好んでその想の歌を詠んでいる。○みぎはゝまさらざりけり 「みぎは」は水際。三九七番歌参照。水際の水位は上がらない。

【所載】古今六帖「いけ」一六六六／拾遺抄・雑下・五一八／拾遺集・雑上・四五四／貫之集I・一二〇  
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

四〇〇 かげふかきこのしたかぜのふきくればなつのうち○からあきに○ざりける  
おなじ人  
なイ  
ぞあイ

【異同】ナシ

【現代語訳】深い木蔭を木の下風が吹いてくるので(涼しくて)、まだ夏のうちでありながらも秋であったよ。

【語句】○おなじ人 三九九番歌の「つらゆき」をさす。○かげふかき 木蔭の深い。夏の樹が繁って深い木蔭を作っているさま。○このしたかぜ 樹蔭を吹き通る風。○なつのうちから 傍記「な」を補って「なつのうちながら」として解した。まだ夏のうちでありながら。

【所載】貫之集I・四七二

【参考】作者名「おなじ人」(貫之)は、所載欄の文献に一致する。

あきの風

四〇一 きみまつとこひつゝふればわがやどのすだれうごきてあき風ぞふく

【異同】すたれうこきて―すゝきうこきて（御・桂・大）

【現代語訳】あなたのおいでを待って恋い慕いながら過ごしていると、私の家の簾が動いて秋風が吹くことですよ。

【語句】◎あきの風 秋の訪れを知らせるものとしてよく詠まれる。古今六帖のこの項には、雁が飛来する季節の風、秋萩をいろどる風、という詠み方のもも含まれる。また「秋」は、恋歌では「飽き」と掛けることが多い。○きみまつと あなたを待って。あなたを待つべく。

【所載】新勅撰集・恋四・八八二／万葉集・四九一（旧四八八）君待登 吾恋居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹  
キミマツトワガコヒラレバワガヤドノスダレウゴカシアキノカゼフク きみまつとあがこひをればわがやどのすだれうごかしあきのかぜふく、一六一〇（旧一六〇六）君待跡 吾恋居者 我屋戸乃 簾令動 秋之風吹 キミマツトワガコヒラレバワガヤドノスダレウゴカシアキノカゼフク きみまつとあがこひをればわがやどのすだれうごかしあきのかぜふく／家持集Ⅰ・九九／家持集Ⅱ・九〇／和歌童蒙抄・三九

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると作者は額田王で、近江天皇を思つて作つた歌。古今六帖・一三七九番に「すだれ」の題で、「ひとりしてわがこひをればわがやどのすだれとほりて秋かぜぞふく」の類歌がある。

四〇二 わがやどのおばながうへのしらつゆのをきし日よりぞ秋かぜのふく

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の尾花の上の白露が置いた日から、秋風が吹き始めたよ。

【語句】○おばな をばな。尾花。薄（すすき）のこと。○をきし日 おきし日。

【所載】新古今集・秋下・四六二／家持集Ⅰ・一七七／家持集Ⅱ・二二〇／秀歌大体・五五

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると、作者は家持。万葉集・一五七六（旧一五七二）に「大伴家持

が白露の歌一首」として、「我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫（ぬ）くものにもが」（古今六帖・三六九二番にも「すすき」の題で収載）という、上句の類似した歌が見える。また同一ではないが、類似した歌が、人麿集Ⅲ・一五〇、人麿集Ⅳ・二八八にも見える。

四〇三 うちさはざかりぞきぬらしわがせこがころものひまにときつ風もをイふく

【異同】ころものひまに―衣のひまを（大）

【現代語訳】鳴き騒いで雁が飛んできたらしい。私のいとしい人の衣のすきまに秋の時つ風が吹いている。

【語句】○せこ 一般に女性が男性を親しんで呼ぶ語。○かり 雁。秋に飛来するガンカモ科の渡り鳥。○ときつ風 時つ風。季節・時刻によって吹く風。当該歌では、上句に雁が来たと詠まれていることから、秋の風ということになる。「ひまに」の傍書「ひもを」をとれば、「時つ風」の「時」に「解き」が掛かる。

【所載】夫木抄・五四二五

四〇四 かりがねのつかひなるべしこのゆふべあきかぜさむくふきぞきぬなる

【異同】ナシ

【現代語訳】あれは、雁の使いなのであろう。今夕は、秋風が寒く吹いてきたよ。

【語句】○かりがねのつかひ 昔、中国で、蘇武が雁の足に手紙を結びつけて故国に連絡を取ったという故事『漢書』蘇武伝）により、雁を手紙を運ぶ使いと見立てた。「かりがね」は、ここでは鳥としての雁のこと。雁は秋になると飛来することから、秋風が寒く吹いて来ると、雁の使いがやって来たのだらうと推量した詠。「鴈がねは使ひに来むと騒くらむ秋風寒みその川の上に」（万葉集・三九七五（旧三九五三））。

【所載】ナシ

四〇五 たかまどのおばなふきしく秋風にひもときあけなたゞならずとも

【異同】ナシ

【現代語訳】高円の尾花にしきりに吹く秋風に紐を解き放とう。たとえ直接ではなくても。

【語句】○たかまど 高円。奈良市街地の東南、高円山麓一帯の地。○おばな 四〇二番歌参照。○ひもときあけな 衣の紐を解き放とう。「な」は、ここでは、一座の人に勧誘した言い方。○たゞならずとも 直接ではなくとも。具体的には意味がとりにくい、直に尾花に触れたりするのはなくとも、ということか。

【所載】万葉集・四三一九（旧四二九五）多可麻刀能 乎婆奈布伎故酒 秋風尔 比毛等伎安気奈 多太奈良受等母 タカマトノヲバナフキコスアキカゼニヒモトキアケナタダナラズトモ たかまとのをばなふきこすあきかぜにひもときあけなただならずとも／夫木抄・四三七四

【参考】所載欄の万葉集によると作者は大伴宿祢池主で、官人同土酒を携えて高円山に登った折の歌である。行楽の場で、くつろいで紐を解き放つて風に当たり、尾花には直接触れずとも、それに触れた風に紐を解いて当たらう、と言いなしたもののか。

〔以上五首担当 長戸〕

#### 四〇六 あきかぜはのわけ山わけふくなれどこひのみゝにはわくよしもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】もう飽きたと告げる秋風は野を分け山を分け吹いているけれど、恋をしているわが身の耳にはそれと区別するすべもないことだよ。

【語句】○あきかぜは 「秋風」の「秋」に「飽き」を掛ける ○こひのみゝ 本文不審。「恋の耳」と解す。恋しているがゆえに耳をそばだてるといふ発想は「あか月のねざめのみみにききしかどとりよりほかにこゑもきこえず」（伊勢集・一六七）、「ひとづてにさむしとききし風のおとをわがうたたねのみみなれにけり」（好忠集・二九〇）、「物おもへば雲ゐにみゆる雁金のみみにちかくも聞ゆなるかな」（和泉式部集・一三七）、「聞く人のみみさへさむく秋風に吹きあはせたる笛のこゑかな」（和泉式部集・一九三）など、見出すことができる。『古今和歌六帖標注』には「蔵本における耳とあり、それよろし」とある。ただし「老いの耳」の本文を伝えるものは確認できない。所載欄の夫木抄では三句以下を「ゆくなれど恋のみだれはあくる夜もなし」とあり、解しやすい形で伝わる。

【所載】夫木抄・五四二六

【参考】夫木抄では典拠を「六一」（古今六帖の第一帖）と記す。

四〇七 あきかぜはときとふきぬしろたへの我ときごろもぬふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風はこの時と定めて吹いて来た。けど、私の縫い糸を解きほどこいた衣を縫い合わせてくれる人もいない。

【語句】○ときと 時と定めて。「ひぐらしは時と鳴けども恋ひしにたわやめ我は定まらず泣く」(万葉集・一九八六(旧一九八二))。○ときごろも 縫い糸を解いた衣「ときとふききぬ」の縁。万葉集「解衣(とききぬ)」の転。なお万葉集ではいずれも枕詞で「乱る」に掛かる。「解衣之(とききぬの)思ひ乱れて恋ふれどもなぞ汝が故と問ふ人もなき」(万葉集・二六二七(旧二六二〇))が夫木抄・一五五一四では初句「ときごろも」とある。

【所載】夫木抄・五四二七／家持集Ⅰ・一八二／家持集Ⅱ・二三〇

四〇八 あきはぎをいろどるかぜのふきぬれば人のこゝろもうたがはれけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩を色づかせる風が吹いて来たので、あなたの心も「飽き」風によって変わってしまうのではないかと疑われてしまうことだよ。

【語句】○あきはぎを 「あき」に「飽き」を響かせる。○いろどるかぜ 風によって木の葉が色づくという発想は「打ちはへて影とぞたのむ峰の松色どる秋の風にうつるな」(後撰集・三七四)にある。○人のこゝろも 色変わり、すなわち心変わりするのは秋萩だけではなく、あなたの心も、の意。「秋風に山のこのはのうつろへば人の心もいかがとぞ思ふ」(古今集・七一四)

【所載】後撰集・秋上・二二三／業平集Ⅰ・一一／業平集Ⅱ・八五／大和物語・二六五

【参考】後撰集の詞書には「女のもとより、ふん月ばかりにいひおこせて侍りける」とあり、業平の返歌も載せる。四一六番歌参照。大和物語・一六〇段では染殿内侍と業平との贈答とする。

四〇九 あしひきの山べにをりてあきかぜのひごとにふけばいもをしぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】山辺にいて、秋風が日増しに吹くので、あなたのことが思われてなりません。

【語句】○ひごとに 所載欄の万葉集「日異（ひにけに）」の転だが、ここでは「日増しに」の意。「秋風の日ごと」にふけば水ぐきの岡のこのはも色づくにけり（古今六帖・一〇三八）の場合も、万葉集・二一九七（旧二一九三）では二句目が「日異吹者（ひにけにふけば）」とある。

【所載】玉葉集・恋四・一六三七／万葉集・一六三六（旧一六三三） 足目木乃 山辺尔居而 秋風之 日異吹者 妹乎之曾念 アシヒキノヤマヘニフリテアカゼノヒニケニフケバイモラシゾオモフ あしひきのやまへにをりてあきかぜのひにけにふけばいもをしぞおもふ

【参考】万葉集では、久邇京にいる大伴家持が奈良に留まる坂上大娘へ贈った歌とある。

四一〇 わびしくもをとのさやけくふくかぜのひごとにあきやもしはきぬらん

【異同】もしはきぬらん—もえはきぬらん（御・大）

【現代語訳】やりきれないことに、音をはっきりさせて風が日増しに吹いて秋が深まるように、日が経つにつれて飽きられる日が、もしかしたら、近づいているのだろうか。

【語句】○わびしくも 「わびし」はつらい、やりきれない、の意。「つれもなくあるらんひとを片思ひに我は思へばわびしくもあるか」（万葉集・七二〇（旧七一七）、「なつぐさのかりのよひとはわびしくも我に秋風吹き初めつるか」（古今六帖・三五六〇）。○さやけく はっきりと。声については「さやけさ」という場合が多い。「秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずておとのさやけさ」（古今集・二二七）。○ふくかぜの 初句からここまでが「あき」「きぬ」を導く序詞のようなはたらきをする。○ひごとに 万葉集「日異（ひにけに）」の転だが、ここでは「日増しに」の意。○あき 「秋」と「飽き」を掛ける。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 青木〕

四一一 こひつゝもいなばかきわけいゑみせばともしくもあらじあきのゆふ風

【異同】ナシ

【現代語訳】家人を思いながら、一面の稲穂を掻き分けるようにして小屋にいと、満足できるほどに吹いてく



るようだ、秋の夕風が。

【語句】○いなばかきわけいゑゐせば 「いゑゐ」は「家居（いへゐ）」ここは、稲刈りの前後、一時的に家を離れ、自分の持ち田の周辺に小屋を作り、住むこと、という（日本古典文学全集『万葉集』）。○ともしくもあらじ 「ともし」は、不十分だ、少ない、の意。少なくともはないだろう。秋の夕風を十分に満喫できる、と言っているようでもあるが、やせ我慢か、戯れの気持ちがあるところにはあるのではないか。

【所載】新続古今集・秋下・五〇八／万葉集・二二三四（旧二二三〇）恋乍裳 稲葉搔別 家居者 乏不有 秋之暮風 コヒツツモイナバカキワケイヘキセバトモシクモアラジアキノユフカゼ こひつつもいなばかきわけいへをればともしくもあらずあきのゆふかぜ／人麿集Ⅰ・一三九／人麿集Ⅱ・五七／綺語抄・八三／六百番陳狀・一五

【参考】当該歌は人麿集に見えるが、現存の人麿集は問題が多く、作者を人麿と断定はできない。万葉集では作者名無表記である。また新続古今集にも作者を人麿とするが、これは現存人麿集によった故であろう。

#### 四二二 あきかぜの身にさむければつれもなき人をぞたのむくるゝよごと

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が身に染みて寒いので、つい、つれないあの人を頼りにしてしまうのです。日が暮れてゆく、夜ごと夜ごとに。

【語句】○つれもなき 「つれなし」は、反応がない、無情だ。「も」は強調。

【所載】古今集・恋二・五五五／素性集Ⅰ・二〇／素性集Ⅱ・三五

【参考】作者名は書かれていないが、古今集をはじめ、所載欄の文献はすべて作者を素性とする。

#### 四二三 かぜのをとのあきにもあるかな久かたのあまつそらこそかはるべらなれ

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風の音がいかにも秋らしくなったことだ。地上ではまだ夏だが、当然ながら空ではもう変わっているようだ。

【語句】○久かたの 「あま（天）」「月」「星」「雲」など、空に関係する語にかかる枕詞。○かはるべらなれ

変わっている様子だ。変わっているらしい。「べらなり」は推定された状態をあらわす助動詞。

【所載】貫之集Ⅰ・三八

【参考】貫之集所載歌でもあり、作者は貫之である可能性が大きい。次の歌に注する「二首つらゆき」とも一致する。

#### 四一四 もみぢばのわかれをしみてあき風はけふやみむろの山をこゆらん

二首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】もみぢ葉が別れを惜しんで散ってゆき、秋風は今日、三室の山を今ごろ越えているであろうか。

【語句】○みむろの山 歌枕としては、奈良県生駒郡斑鳩町の神奈備山を指し、紅葉の名所。○こゆらん 「らん」は現在の推量をあらわす助動詞。疑問の係助詞である「けふや」の「や」を受け、ここは連体形。今日、越えているであろうか。

【所載】金葉集（初度本）・秋・三六八／貫之集Ⅰ・九六

【参考】作者は金葉集にも「紀貫之」とあり、作者名はすべて一致する。

素性法師

#### 四一五 すみのえのまつをあきかぜふくからにこゑうちそふるをきつしらなみ

【異同】ナシ

【現代語訳】住の江の松を秋風が吹くにつれ、その松風の音に、さらに音を加える沖の白波だ。

【語句】○すみのえの「すみのえ」は、大阪市住吉区の一帯。具体的な固有名詞としてではなく、浜辺の松を導き出すため、枕詞的に用いられることも多い。○ふくからに 吹くことによつて。吹くにつれて。「からに」は、原因、理由を示す。○こゑうちそふる 「こゑ」は直接的には波の音を指す。すでにある松風の音に、波の音を添えている、という。

【所載】古今集・賀・三六〇／拾遺集・雑秋・一一二／躬恒集Ⅰ・八三／躬恒集Ⅱ・二三二／躬恒集Ⅲ・一四四／躬恒集Ⅳ・六／躬恒集Ⅴ・一九／寛平御時中宮歌合・一六

【参考】作者は「素性法師」とあり、古今集も同じだが、拾遺集には「みつね」とあって、すべての躬恒集伝本にも見え、問題が残る。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

なりひら

四一六 あきはぎをいろどるかぜはやくとも心はかれじ草ばならねば

【異同】はやくとも—さやくとも（大）

【現代語訳】秋萩を色付かせる風は速く激しく吹いても、私の心は枯れはしませんし、飽きて、あなたから離れたりしません。草葉ではないのですから。

【語句】○あきはぎをいろどるかぜ 秋萩を色付かせる風。秋に「飽き」を響かせ、相手の心変わりを疑った。四〇八番歌参照。所載欄の大和物語では初句「秋の野を」。○はやくとも 速く激しくても。「つきもせずうき事のはのおほかるをはやく風の風もふかなむ」（後撰集・一二一一）。所載欄の他文献では後撰集を始めとして「吹きぬとも」とするものが多い。○かれじ 心が「離る」と草葉が「枯る」を掛け、「じ」は打ち消しの意志・推量を表す。所載欄の業平集では「ころろはふかし」が多い。○草ばならねば 草葉ではないので。「人を思ふ心のにはあらばこそ風のまにまにちりもみだれぬ」（古今集・七八三・小野さだき）。

【所載】後撰集・恋五・二二四／業平集Ⅰ・二／業平集Ⅱ・八六／業平集Ⅲ・七／業平集Ⅳ・五／大和物語・一六〇段・二六五

【参考】当該歌は四〇八番への返歌として他文献にみえる。作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

ちざと

四一七 つゆわけてたもとほすまもなきものをなどあきかぜのまだきふくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】（あなたと逢った帰りに）露の置いた草を分けて濡れた袂を干す暇もないほどなのに、どうして秋風ならぬ飽き風がもう吹いたりするでしょうか。

【語句】○つゆわけて （女の許から朝帰りする時に）露の置いた草を分けて。後撰集では「露わけし」。「秋の

のにささわけしあさの袖よりもあはでこしよぞひちまさりける」(古今集・六二二・なりひらの朝臣)○たもとほすま 露に濡れた袂を干す暇。「夏草の露分け衣着けなくに我が衣手の乾る時もなき」(万葉集・一九九八(旧一九九四)、古今六帖・三三九二)○まだき 早くも。もう。○あきかぜ 秋風の「秋」に「飽き」を掛ける。

【所載】後撰集・恋五・二二二

【参考】作者名「ちさと」は所載欄の文献に一致する。

四一八 こひく／＼のちあふものとおもはずはいまはけぬべき秋かぜのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】長い間恋い慕った後にあの人と逢うのだと思わないなら、今すぐ命が消えてしまふでしょう。今すぐに命が消えてしまふそうなら秋風の音がしますよ。

【語句】○こひく／＼で ずっと慕い続けて。動詞の連用形を重ねて、動作を繰り返す意を表す。「こひこひて後もあはむとなくさむる心しなくはいのちあらめや」(拾遺集・八七三・人まろ)。○いまはけぬべき秋かぜのこゑ 今すぐに命が消えてしまふそうなら秋風の音。「秋」に「飽き」を掛ける。

【所載】ナシ

四一九 もみぢせぬときはのやまはふくかぜのをとにや秋をきゝわたるらん

きのよしもち

【異同】ナシ

【現代語訳】(常緑という名をもち)紅葉しない常磐の山は、吹く風の音によって秋を感じ続けるのでしょうか。

【語句】○ときはのやま 京都市右京区常磐の付近にあった山か。葉の緑の変わらない「常磐」の意を掛ける。普通名詞とする説もある。○きゝわたるらん 「わたる」は時間の継続をいう。聞き続けて、秋の到来だけでなく、推移を実感するのである。「らん」は眼前に見えないことを推量する助動詞。「こえぬまはよしのの山のさくら花人づてにのみききわたるかは」(古今集・五八八)。

【所載】古今六帖「山」九一九／古今集・秋・二五二／拾遺集・秋・一八九／小町集Ⅰ・九九／新撰和歌・一二／俊頼髓脳・一七五／奥儀抄・一三九／古来風体抄・二四九

【参考】 所載欄の文献ではほとんどが作者を紀淑望とする。拾遺集では作者は能宣だが、片桐洋一は、一九〇番の能宣の歌「もみぢせぬときはの山にすむしかはおのれなきてや秋をしるらん」の傍注としてあったものが本文化したとする『古今和歌集全評釈』。時代から考えて、淑望作で良いと思われる。

#### とものり

四二〇 あき風は身をわけてしもふかなくに人のこゝろのそらにみゆらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】「飽き」を連想させる秋風は、身と心を分けて吹くわけでもないのに、どうしてあの人の心が上の空のように見えるのでしょうか。

【語句】 ○身をわけてしも 身（体）と心を分けて。下二段活用の「分く」は分割する意。「身を分く」は、「おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる」（古今集・三七三）のように、離別に際して体を分けないことを嘆く用例が多いが、ここではそれとは逆に、体はここにあっても心は上の空であることを嘆いている。「しも」は強調を表す。○そらにみゆらん 「心が空になる」はそわそわと落ち着かないことで、心移りを暗示している。「らん」は原因・理由を推し量って問う意を表す。「どうして……だろうか」。所載欄の古今集では第五句「そらになるらむ」。

【所載】 古今集・恋五・七八七／友則集・四一

【参考】 作者名「とものり」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

四二一 たのめこし人はつれなくあきかぜはけふよりふきぬわが身かなしな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あてにさせていたあの人はすげなくて、私に飽きたという秋の風が立秋の今日から吹いてきた。我が身のなんと悲しいことよ。

【語句】 ○たのめこし わたしに期待を抱かせていた。○つれなく 冷ややかで。○あきかぜ 所載欄後撰集の詞書によれば「秋立つ日人につかはしける」とある。「秋」に「飽き」を掛けて愛情のさめることをたとえている。

○けふ 立秋の日。立秋は涼風と共に歌に詠まれる。

【所載】 後撰集・秋上・二一九

四二二 わがせこがころもありせばあきかぜのさむきこのごろしたにきましを

【異同】 ナシ

【現代語訳】 いとしい夫の着物があつたら、秋風の寒いこの頃じかに着られようものを。

【語句】 ○わがせこ 女性が夫、恋人などを親しんで言う語。○ころも 衣服。「ころも」は散文「きぬ」の歌語として歌に多く用いられた。○したにきましを 下に着ましを。じかに着られたらよいのに。「まし」は二句「ころもありせば」と呼応して反実仮想。もし着物があつたら、下に着られてよかったのに、の意となる。

【所載】 古今六帖「わがせこ」三一〇五、「秋のころも」三三〇〇

【参考】 人麿集Ⅱ・三四七、人麿集Ⅲ・二五〇に、当該歌と下句が同じ表現で、初・二句が「わぎもこがころもならなん」「……ころもあらなん」として見える。

四二三 ふきくれば身にもしみける秋かぜをいろなきものとおもひけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吹いてくると、色が染みつくように我が身に沁みる秋の風を、色がでないものと思っていたことだなあ。

【語句】 ○身にもしみける 秋の冷気が痛切に感じられる。身に「沁む」と、色が「染(し)む」とを掛ける。「染む」と「色なきもの」との対比。

【所載】 続古今集・秋上・三〇六／河海抄・一二一一、一三七二

ふゆのかぜ

四二四 ふくかぜはいろもみえねどゆふぐれはひとりある人の身にぞしみける

【異同】 ナシ

【現代語訳】吹く風は色も見えないけれど、夕暮れ時は独り身の私には、色が染みつくように風が身に沁みるなあ。

【語句】◎ふゆのかぜ 時雨、雪などとともに詠まれることが多い。○ゆふぐれは 題「ふゆのかぜ」の例歌として挙げてあるので「ふゆくれば」の誤りか。所載欄の歌はすべて第三句が「ふゆくれば」である。○ひとりある人 独り身の人。○身にぞしみける 冬の風が寂しく身に「沁む」と、色が「染（し）む」とをかける。「色も見えねど」と「染む」の対比。

【所載】古今六帖「しも月」二一五／後撰集・冬・四四九／新撰万葉集・四一八／寛平御時后宮歌合・一三〇

#### 人まろ

四二五 あしひきの山した風はふかねども君がこぬよはかねてさむしも

【異同】ナシ

【現代語訳】山から麓へ吹き降ろす風は今日は吹いていないけれど、あなたが来ない夜はもう今から寒いのです。  
【語句】○あしひきの 枕詞。山、峰（を） などにかかる。○山した風 山から麓へ吹き降ろす風。山おろし。  
○かねて その時でもないのに早くも。

【所載】新勅撰集・恋四・八六二／万葉集・二三五四（旧二三五〇）足櫓木乃 山下風波 雖不吹 君無夕者  
予寒毛 アシヒキノヤマシタカゼハフカナドモキミナキヨヒハカネテサムシモ あしひきのやまのあらしはふかねどもきみなきよひはかねてさむしも／人麿集Ⅰ・一六七／人麿集Ⅱ・二八二／人麿集Ⅳ・七六

【参考】新勅撰集は作者名を「人麿」とするが、万葉集は作者名なし。なお下句に小異ある類似歌が、家持集Ⅰ・三〇四、家持集Ⅱ・一七二に見える。

〔以上五首担当 橋本・林〕

#### 山をろし

四二六 ころもでに山をろしふきてさむきよをきみまさねばひとりかもねん

【異同】ナシ

【現代語訳】袖に山おろしが吹いて寒い夜を、あなたがいらつしやらないので、ひとりで寝ることでしょうか。

【語句】◎山をろし 山嵐。山から吹きおろす風。万葉集から見いだせる語（一七五五（旧一七五一）など）で、古今集や忠岑集・信明集などにも見られるが、やはり「うかりける人を初瀬の山おろしよ激しかれとは祈らぬものを」（千載集・七〇七・源俊賴、百人一首などにも）が有名で、これ以降、新古今歌人などに用例が多い。○きみきまさねば あなたがいらつしやらないので、の意。所載欄の万葉集の訓（西本願寺本・現訓とも）や、新古今集の「きみきまさずは」ならば、あなたがいらつしやらないのならば、の意。

【所載】新古今集・恋三・一二〇八／万葉集・三二九六（旧三二八二）衣袖丹 山下吹而 寒夜乎 君不来者 独鴨寐 コロモデニヤマオロシフキテサムキヨヲキミサズハヒトリカモノム ころもでにあらしのふきてさむきよをきみきまさずはひとりかもねむ／人麿集Ⅲ・五五二／和歌童蒙抄・三八

四二七 こひしくは見てもしのばむもみぢばをふきなちらしそ山をろしのかぜ  
せきを

【異同】ナシ

【現代語訳】盛りの時が恋しく思い出されたら、よすがとして見たいものだ、そんな紅葉を吹いて散らしてくれ  
るな、山嵐の風よ。

【語句】○こひしくは 「こひしくは」は古今集の「わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎた  
てるかど」（九八二）などにも見られるように、「恋しく思い出されたならば」の意。○見てもしのばん 「偲ぶ」  
は、賞美するの意とよすがとして懐かしく思うの意がある。ここでは後者。

【所載】古今集・秋下・二八五／新撰和歌・五六／秀歌大体・八二

【参考】作者名「せきを」は、藤原関雄を指すと思われる。所載欄の文献にはその名が見出せない。しかし古今  
集のうち、伊達家旧蔵本『新編国歌大観』が底本に採用 などではこの歌の作者を「よみ人知らず」とするが、  
元永本や筋切には「藤原関雄」とある。

四二八 まどごしに月はてらしてあし引のあらしふくよはいもをしぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】窓越しに月がさしこみ、嵐の吹く夜は恋しいあなたのことを思う。



【語句】○まど 窓・牖。窓の形態は不明。『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）の「窓」項で触れている「秋風入窓裡羅帳起飄颻仰頭看明月寄情千里光」（近代呉歌・秋歌）などの孤閨詩の影響が考えられる。○あし引の 普通は「山」にかかるが、ここでは「山から吹き下ろす風」の意で風にかかる。「山」以外に「あしひきの」がかかる例としては、万葉集・四一七五（旧四一五一）に「足引乃 峰上之桜（アシヒキノヲノヘノサクラ）」がある。○いも 女性を指す。所載欄の万葉集では「きみ」とし、詠者の立場が変わる。

【所載】万葉集・二六八七（旧二六七九）窓超尔 月臨照而 足檜乃 下風吹夜者 公乎之其念 マドゴシニツキサシイリテアシヒキノアラシフクヨハキミヲシゾオモフ まどごしにつきおしてりてあしひきのあらしふくよはきみをしぞおもふ／夫木抄・五一八九、一四九一五

あらし

四二九 やまざとにすみにしひよりとふ人もいまはあらしのかぜぞわびしき

【異同】かせそわひしき―山そわひしき（大）

【現代語訳】山里に住んだ日から、訪れる人もいないその嵐の風がわびしいことだ。

【語句】◎あらし 荒く激しく吹く風。はじめは山から吹き下ろす風を指したが、後には暴風をいうようになる。○やまざと 人の訪れのない、孤絶した場所をイメージする語。小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店、一九九四年）によれば、古今集に見られる山里は「わびし」「さびし」「ものうし」などの語で象徴される寂寥・憂愁であり、「見る人もなし」「とふ人もなし」「人目もかれぬ」「住む人さへ思ひ消ゆ」などで表象される孤独・孤絶」であり、後撰集では「都」に対する「ひな」という印象がより鮮明になっているように思われる」とされる。○いまはあらし 「あらし」に「嵐」と「あらし」を掛ける。

【所載】ナシ

つらゆき

四三〇 けさのあらしさむくもふくかあし引のやまかきくもりゆきやふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】今朝の嵐は、とりわけ寒く吹くことだ。山の方はかき曇って雪が降っているのだろうか。

【語句】 ○あし引の あしひきの。 山にかかる枕詞。

【所載】 後撰集・冬・四六六

【参考】 作者名「つらゆき」とあるが、貫之集になく、後撰集では「よみ人知らず」。

〔以上五首担当 杉本〕

四三二 ふくからになべて草木のしほるればむべやまかぜをあらしといふらん  
ふんやのあさやす<sup>やすひでイ</sup>

【異同】 ナシ

【現代語訳】 吹くやいなや、あたり一面草木がしなえてしまいうから、どうりで山の風を「嵐」というのだろう。

【語句】 ○ふくからに 「からに」は「……するとすぐに」の意。○なべて すべて。○むべ なるほど。うべ。合点のゆく時に発する語。

【所載】 古今集・秋下・二四九／後六々撰・一三六／九品和歌・一三／百人秀歌・二七／百人一首・二二／奥儀抄・九九／詠歌大概・四四／和歌用意条・二九／悦目抄・九

【参考】 作者名「ふんやのあさやす」は古今集（古写本）に一致する。また異文の「やすひで」は古今集（定家本）に一致する。「あさやす（朝康）」は「やすひで（康秀）」の子。いずれとも決しがたい。所載欄の文献はどれも第二句を「秋の草木の」とする（ただし、古今集・仮名序の第二句は「野べの草木の」。後六々撰、悦目抄も同じ）。漢字「嵐」を「山」と「風」とに分解し、「あらし」という理由を説明して自ら納得しているのである（片桐洋一『古今和歌集全評釈』。古代中国ではいわゆる離合詩は後漢の頃からあり、六朝後期に流行した。古今集にはこの影響を受けた和歌があり、その一例。

四三二 つねよりもあきのゆふべのわびしきはいとどあらしのかぜやなになり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋のゆうべのいつもよりものわびしいのは、いつそうこの世に生きていたくないという思いにかられる、折しも嵐の風が吹くなんて一体何なのだ。

【語句】 ○あきのゆふべ 秋は悲哀に満ちた季節。その中でも、特に夕方は哀切。○いとど いっそう。○あら

し。「嵐」に「在らじ」をかける。「在らじ」は「在り」の未然形に助動詞「じ」の接続した形。打消の意志を表す。○なになり 一体どういうわけか。強い嘆きの吐露に用いられる慣用句。疑問詞があるのに「なり」は連体形にならない。二七二番歌参照。

【所載】ナシ

#### 四三三 あふさかのあらしのかぜははやけれどゆくゑしらねばわびつゝぞふる

【異同】はやけれど―寒けれど（大）

【現代語訳】逢坂の関に吹く嵐の風はきつく、あなたにお会いする機会はあるまいと、行方もわからずつらい気持ちのまま日を送っています。

【語句】○あふさか 逢坂。歌枕。京から東国への道に逢坂の関がある。越えたと「近江（あふみ）」「逢ふ身」に通じる。恋人に「逢ふ」をかけて用いる。○あらしのかぜ 逢坂の「嵐」に「在らじ」をかける。四三二番歌参照。

【所載】古今集・雑下・九八八／新撰和歌・三四三／和歌童蒙抄・一九四／西行上人談抄・二五

【参考】古今集では第三句「さむければ」第五句「わびつゝぞぬる」。古今集の形では逢坂は「旅立ち」の所であつてさすらいの旅（片桐洋一『古今和歌集全評釈』へ出る歌であると解釈される）。

#### 四三四 われをきみとふや／＼とまつかぜのいまはあらしとなるぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】私をあなたが訪ねて下さるか下さるか待つ甲斐も今はもう決してあるまい、となったことの何と悲しいこと。

【語句】○われをきみ 「われをきみなにはの浦に有りしかばうきめをみつのあまとなりనికి」（古今集・九七三）、「我を君あはぬ恋とやから車やまことひのかげずまひする（夫木抄・一五七二・仲正）。○とふや／＼と 訪ふや訪ふやと。訪れて下さるか下さるか。」「飛ぶや飛ぶやと」とをかける。○まつかぜの 上からの続きでは「我を君訪ふや訪ふやと待つ」となり、下へは「松風の」となる。すなわち「待つ」に「松」をかける。○あらし 上からの続きでは「松風のいまは嵐」となり、下へは「在らじ」と続く。「嵐」に「在らじ」をかける。「飛ぶや

飛ぶやと」「松風」「嵐」の語句が一つの情景を浮かべさせる。

【所載】 夫木抄・七七二九

四三五 とふ人もいまはあらしの風はやくわすれはてにし人にやはあらぬ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 訪う人も今はあるまい。ずっと昔忘れ果てた人ではないか（あの人にとって私という人間は）。

【語句】 ○とふ人もいまはあらし 「在らじ」に「嵐」をかける。四二九番歌参照。「とふ人も今はあらしの山かげに人松虫のこゑぞかなしき」（拾遺集・二〇五）。○はやく 風の激しい意の「速く」に「早く」（以前より）をかける。

【所載】 ナシ

〔以上五首担当 平野〕

ぎょうのかぜ

四三六 かぜふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりゆくらん  
かぐやまのはなのこ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 風が吹くと沖の白波が立つ、その立つという名の龍田山を、夜半に、君はひとりで越えてゆくのだろうか。あのさびしい山路を。

【語句】 ◎ぎょうのかぜ ぎふのかぜ。雑の風。春・夏・秋・冬の季節の風の範疇に入らない風。古今六帖のこの項では、人事と密接に結びついた風の詠を収めるか。この題は、『新編国歌大観』による限りでは、奈良・平安時代を通して他に見えない。○かぜふけばおきつしらなみたつた山 初、二句はたつた山を導く序詞。波が立つにたつた山を掛ける。「海（わた）の底沖つ白波竜田山いつか越えなむ妹があたり見む」（万葉集・八三）。たつた山（龍田山）は、奈良県生駒郡の山。大和・河内間の要路に当たる。「しらなみ（白波）」の意を及ぼして盗賊の出る山の意をこめるとする説もある。

【所載】 古今六帖「山」八五七／古今集・雑下・九九四／新撰和歌・二五九／金玉集・七五／秘蔵抄・三／和歌

体十種・三／新撰髓腦・一／俊頼髓腦・九六／奥儀抄・八四／袖中抄・二五／六百番陳狀・一三五／和歌色葉・六〇／鍬河上・六／悦目抄・一、三四／十訓抄・一三九／伊勢物語・二三段・四九／大和物語・一四九段  
【参考】作者名「かぐやまのはなのこ」は、古今六帖の重出歌では「かこのやまのはな子」。古今集では「よみ人知らず」である。

四三七 ふくかぜにわが身をなして草しげみはわけをしつゝあはんとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風に、わが身を変えて、草が深く生い茂っているので、風のようにその葉をかきわけて行つて逢いたいと思うことだ。

【語句】○わが身をなして わが身をそれに変えて。「もろくともいざ白露に身をなして君があたりの草に消えなん」(忠岑集・四三二)。○はわけ 葉分け。葉と葉のあいだを分けること。

【所載】ナシ

四三八 こがらしのをとはずぎにし時なれどときはにつねにまつにふくかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉を吹き落とす木枯らしの風の音はもはや過ぎ去った時だけれど、葉を落とさぬ常緑樹の松には永久に、いつも風が吹くことだ。

【語句】○こがらし 秋の末から冬の初めにかけて吹く風。○をとは 「をとは」は「おとは」。音は永久不変に。「をとは」と「ときは」で韻を踏むような言葉の遊びか。○まつ 松の木の「松」に「待つ」を掛け、人を待つ自分を暗示する。

【所載】ナシ

四三九 おもへどもきえぬうき身をいかにしてあたりの風にありとしらせん

【異同】ナシ

【現代語訳】消え入りそうになるほど思っているけれども、消えずに生きながらえているつらい我が身のことを、何とかしてあなたのあたりの風に「ここに私がいる」と知らせたいものだ。

【語句】○おもへども 我が身が消え入りそうになるくらいあなたのことを恋しく思うけれども。あるいは、消え失せてしまいたい（消えて死んでしまいたい）と思うけれど、の意か。○いかにして どうにかして……したいの意。○あたり 相手の女の住居のあたり。四三七番歌語句欄に引用の忠岑歌参照。○ありとしらせん ここにいる、と知らせたい。

【所載】続後撰集・恋二・七八九

四四〇 さぐなみのいたやまかぜのうちふけばつりするあまのそでかへるみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】比良山おろしが、湖上に吹きつけると、釣りをする漁夫の袖がひるがえるのが見えるよ。

【語句】○さぐなみの 大津 志賀、近江、比良など琵琶湖周辺の地名にかかる枕詞。○いたやま 傍記異文「ひらやま」がよい。所載欄の万葉集・新古今集・夫木抄では二、三句「ひらやまかぜのうちふけば」。他の文献でも、二句は、「ひらやまかぜの」もしくは「ひら（比良）の山風」となっている。比良山は、比叡山の北に連なる山。近江国の歌枕。山越しの風の烈しさは比良山おろしとして有名。「さざ浪やひらの山風はやからしなまにきゆるあまの釣舟」（続詞花集・七五七・藤原基俊）。ここでは、「ひら（比良）やま」として解釈した。

【所載】新古今集・雑下・一七〇二／万葉集・一七一九（旧一七一五） 栗波之 平山風之 海吹者 釣為海人之 袂変所見 ササナミノヒラヤマカゼノウミフケバツリスルアマノソデカヘルミユ ささなみのひらやまかぜのうちふけばつりするあまのそでかへるみゆ／夫木抄・一〇四〇八／綺語抄・八一／和歌童蒙抄・一八一／奥儀抄・六一七／和歌初学抄・一〇〇／袖中抄・四七九／和歌色葉・八〇

〔以上五首担当 斎藤・長戸〕

四四一 あまつ風くものかよひち吹とちよをとめのすがたしはしとぐめん

【異同】ありはらのむねさた―よしみねの宗さた（大） くものかよひち―底本二行書き しはしとぐめん―底

本二行書キ

【現代語訳】天を吹く風よ、雲の通路を吹き閉ざしておくれ、舞姫の美しい姿を、しばらくとどめておきたいから。

【語句】○あまつ風 天空を吹く風。○くものかよひ路 雲のかよひ路。古今集の諸注は、漢語「雲路」にあたり「雲の往来する路」と解する。「通ひ」は「雲」の述語ではなく、「路」の修飾とみなすべきで「雲の作つた通路」とする説(市村宏『雲の通ひ路』『夢の通ひ路』『東洋大学 王朝文学』一九六四年五月)もあるが、「雲路」は「青山雲路深」(盧照鄰「贈益府裴録事」)の如き用法もみられるので、「雲のなかの(行き来する)路」でよい。「雲路」は、初唐詩に織女の通り道として詠まれることが多く、わが国でもその影響を受けて「鳳駕雲路に飛び、龍車漢流を越ゆ。神仙の会を知らんと欲し、青鳥瓊樓に入る」(懷風藻・七夕・藤原総前)の如き例がみられ、神仙、神女と関わりの深い語である。参考欄参照。

【所載】古今集・雑上・八七二／新撰和歌・二二七／和漢朗詠集・七一八／遍昭集Ⅰ・一〇／遍昭集Ⅱ・一〇／百人秀歌・一五／百人一首・一二／綺語抄・三二四／古来風体抄・二八七／近代秀歌・一〇四

【参考】作者名「ありはらのむねさだ」は、所載欄の文献が「良岑宗貞」としていることから、傍書の「よしみねのむねさだ」が妥当と考えられる。

古今集の詞書によれば「五節のまひひめを見てよめる」。五節舞姫の起源は、天武天皇が琴を弾いた時に、神女が舞い降りてきて「乙女子が乙女さびすもからたまを乙女さびすもその唐玉を」と歌いつつ舞った(袋草紙・上巻、希代の歌)とされ、神女、天女との関わりが深い伝承を持つ。なお金子彦次郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌 千載佳句研究編 増補版』(培風館、一九五五年)は、この歌に「高唐賦」(文選・卷十九)の神女の影響をみる。

#### あめ

四四二 雨ふりてさよはふくともなをゆかんあはんといもにいひてしものを

【異同】あはんといもに―あはんと君に(大)

【現代語訳】雨が降って夜がふけたとしてもやはり行こう。逢おうとあの人にいったのだから。

【語句】◎あめ 恵みの雨、自然の推移を促進させるものとして詠まれるが、恋の歌では恋人の行き来の障害と

なるもの、涙雨、袖を濡らすものとして詠まれる場合が多い。「あめ」の項の前半部には恋の歌が並ぶ。○さよはふくとも「さよ」の「さ」は接頭語。「萩が花ちるらむをのつゆじにもぬれてをゆかむさ夜はふくとも」(古今集・二二四)。○なを なほ。やはり。○ものを 順接確定条件。……ので。……だから。

【所載】ナシ

【参考】四四三番歌と下二句を等しくする類歌。

四四三 いそのかみふるともあめにさはらめやあはんといもにいひてしものを  
おほとものかたみ<sup>よしみねのむねさだい</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】たとえ降ったとしても雨などに妨げられるものか。逢おうとあの子にいったのだから。

【語句】○いそのかみ 大和の地名。奈良県天理市布留町の石上神宮の辺。こゝは、「布留」に掛けて「降る」を起こす枕詞。○さはらめや 「さはる」は、行く手を遮られて行き悩む。障害となる。さしつかえる。「め」は意志を表し、「や」は反語。「大名児を彼方野辺に刈る草の束の間も我忘れめや」(万葉集・一一〇)。

【所載】拾遺抄・恋下・三一六／拾遺集・恋二・七六五／新撰和歌・二六八／万葉集・六六七(旧六六四)石上零十方雨二 将関哉 妹似相武登 言義之鬼尾 イハノカミフルトモアメニサハラメヤイモニアハムトチギリ(イヒテ)シモノヲ いそのかみふるともあめにつつまめやいもにあはむといひてしものを／綺語抄・三五五／袖中抄・五三六

【参考】作者名「おほとものかたみ」は所載欄の文献に一致する。なお袖中抄の下二句は「またんといもがいひてしものを」と女性側の表現を取り入れた形となっている。

四四四 春さめの心はきみもしれるらんぬかしふらばなゝよこじとや

【異同】ナシ

【現代語訳】(さほど濡れないという) 春雨の本意はあなたもご存じでしょう。七日降り続いたら、七夜も来ないおつもりですか。

【語句】○春さめの心 所載欄の万葉集歌にあるように「春雨」はしとしとと降る、あまり衣を濡らさぬ雨で、



通うにさほど障害にならないというのである。「心」は「本意」といったほどの意味。所載欄の万葉集「衣はいたくとほらめや」の方が意味が通りやすいが、本文通りに訳した。当該歌について、沢瀉久孝『万葉集注釈』は、万葉集歌の「ころもは」の「ころ」の連綿体が「こころ」と誤写されたとみる。○しれるらん しれ（ラ行四段活用「しる」の已然形）＋る（存続の助動詞「り」の連体形）＋らむ、知っているでしょうという意となるが、他に「ききしれるらん」（古今六帖・一四三七）があるのみで、あまり例のない表現である。○なぬかし 七日し。「し」は強意の助詞。

【所載】万葉集・一九二一（旧一九一七）春雨尔 衣甚 将通哉 七日四零者 七夜不来哉 ハルサメニコロモハイタクトホラメヤナヌカシフラバナナヨコジトヤ はるさめにころもはいたくとほらめやなぬかしふらばなぬかこじとや／夫木抄・九三七／赤人集Ⅰ・二〇〇／赤人集Ⅱ・八一／赤人集Ⅲ・八八

四四五 いまさらにきみはなゆきそはるさめのころもを人のしらざらなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】いまさらお帰りにならないで下さいね、帰すまいとして降る春雨の心を人が知らないはずはないのですから。

【語句】○はるさめのころも 春雨が降って、去る人をひきとめようとする心、気持ち。四四四番歌参照。○人 第三者をさすが相手の男を意識した表現。○なくに 順接確定条件。……ないのだから。

【所載】万葉集・一九二〇（旧一九一六）今更 君者伊不往 春雨之 情乎人之 不知有名国 イマサラニキミハイユクナハルサメノココロヲヒトノシラザラナクニ いまさらにきみはいゆかじはるさめのころもをひとのしらざあらなくに／赤人集Ⅰ・一九九／赤人集Ⅱ・八〇／赤人集Ⅲ・八七／家持集Ⅰ・二九／家持集Ⅱ・二九／家持集Ⅲ・二九

【参考】四四四、四四五番歌は、万葉集において連続した二首（一九二一、一九二〇）を逆順に採る。

〔以上五首担当 中野〕

四四六 わぎもこがあかものすそをしみぬらんけふのこしあめに我もぬれすな

【校異】我もぬれすな―我もぬらすな（大）

【現代語訳】我妹子の赤い裳裾を今頃は濡らしていることであろう。今日のわか雨に私まで濡らしてくれるな。

【語句】○あかもものすそ 「赤裳の裾」で、女性が赤い裳の裾を長く引いて歩く様をいう。○しみぬらん 「しみ」は、「濡れとおる」意の、自動詞四段活用「しむ（浸む）」の連用形。「すそを」なので、他動詞「しめ（浸め）」とあるか、もしくは「すその」とありたいところ。今頃この雨で裳裾を濡らしているだろう、と助動詞「らむ」で推量する。なお、所載欄の万葉集西本願寺本は「すその」そめひちむ」とあり、現代の万葉集注釈書の訓みは、「すその」ひづちなむ』（『萬葉集注釋』『新潮日本古典集成』、「すその」ひづつらむ』（『萬葉集釋注』『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』など。「ひづつ」は濡れる意。人麿集Ⅲに「すその」そみぬれば、人麿集Ⅳに「すそを」そめむとて、綺語集に「すそを」しめぬらん。○こしあめに「こしあめ」は、色葉字類抄（前田本）は、「驟雨」「シウウ ユシアメナリ」とにわか雨の意とし、観智院本類聚名義抄は、「霖」「ナガメ ユシアメ」と降り続く雨の意として、意味が分かれる。ここは、前者の意味で解した。所載欄の歌集には、みな「こさめ」（小雨）とある。「こしあめ」を詠んだ歌として、柿本集に「わがせこが袴の腰を染めむとて今日のこしあめに我ぞ濡れぬる」（人麿集Ⅱ・一九一）と見え、散木奇歌集に、詞書「摂政殿下にて、雨中のすみれといへる事をよめる」として、「誰れと見てしのびかはさん（かはせん）」を校訂 つれづれとこし雨降りてすみれ咲く野を」（俊頼集Ⅰ・一六〇）とある。○我もぬれすな 「我も濡れずな」でも「我も濡れすな」でも解しにくい。所載欄の万葉集「われさへぬれな」（私も濡れよう）や、綺語抄「われをぬらすな」・和歌童蒙抄「われもぬらすな」（：濡らしてくれるな）の表現の方がわかりやすい。「濡れす」は、後世の例だが、「ぬれぬれす」時雨もいまはずか河伊勢まで秋の色やみゆらん」（建保名所百首・九八〇）や、「時雨にもぬれせぬ山の木の葉かな」（梵灯庵袖下集・二九）などから、「濡れす（サ変）」で濡れる、の意として現代語訳した。「な」は、所載欄の綺語抄や和歌童蒙抄も参考にして、禁止の意とした。

【所載】万葉集・巻七・一〇九四（旧一〇九〇） 吾妹子之 赤裳裾之 将染泥 今日之霏霖尔 吾共所沾名  
ギモコガアカモノスソノソメヒチムケフノコサメニワレトヌレヌナ わぎもこがあかもものすそのひづちなむけふ  
のこさめにわれさへぬれな／人麿集Ⅲ・六七九／人麿集Ⅳ・四四／綺語抄・三二九／和歌童蒙抄・四八

四四七 わがせこをこひてすべなみはるの雨のふりわけしらでいどこしかも

【異同】ふりわけ―ふみわけ（大）

【現代語訳】あなたが恋しくてどうしようもなく苦しくて、春雨が降るのも知らないで家を出てきました。

【語句】○わがせこをこひてすべなみ 「恋ふ」は、上代では、眼前にいない相手に逢いたいと思う意を表し、「……に恋ふ」という形で用いられることが一般的であり、平安時代以降に、思慕する意味に変化して「……を恋ふ」のかたちになるという（小学館『古語大辞典』）。所載欄の歌集は、すべて「わがせこにこひて」とある。「すべなみ」は、形容詞「すべなし」の語幹＋接尾語「み」で、どうしようもなく苦しいので、の意。○はるの雨の 所載欄の歌集ではほとんどが「はるさめの」とある。○ふりわけ このままでは意味不通。所載欄の万葉集や赤人集Ⅰの「ふるわき」とあるのに従い、現代語訳した。「わき」は、わきまえ、分別の意。

【所載】万葉集・一九一九（旧一九一五）吾背子尔 恋而為便莫 春雨之 零別不知 出而來可聞 ワガセコニ コヒテスベナミハルサメノフルワキシラズイデテコシカモ わがせこにこひてすべなみはるさめのふるわきしらずいでてこしかも／人麿集Ⅲ・四三八／赤人集Ⅰ・一九六／赤人集Ⅱ・七七／赤人集Ⅲ・八五

【参考】所載欄の万葉集に作者名なし。

四四八 いもがゝどゆきすぎかねつひちかさあめあめもふらなんあまがくれせん

【異同】ひちかさあめ―ひちかさの（大）

【現代語訳】彼女の家の門を通り過ぎることができない。肱を笠にするにわか雨でも降ってほしい。そしたら物陰で雨宿りができよう。

【語句】○いもがゝど 愛する女性の家の門。○ゆきすぎかねつ 「かね」は、補助動詞「かぬ」（……しようとする気持がありながら、それが出来ない、意）の連用形。所載欄の文献に、「ゆきすぎがてに」と表現するものがある。○ひちかさあめ にわか降る雨。雨にぬれないように、肱（袖）を笠の代わりにすること。源氏物語「須磨」巻、光源氏らが三月上巳に海辺に出た時に、「……にはかに風吹きいでて、空もかきくれぬ。御祓もしはてず、立ち騒ぎたり。肱笠雨（ひちかさあめ）とか降り来て、いとあわたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠もとりあへず」と見える。なお、所載欄の歌論書には、大久保本同様、ほとんどが「ひちかさの」とある。○あまがくれ 物陰に入って雨宿りすること。

【所載】夫木抄・七八九七／俊頼髓脳・二〇七／綺語抄・五一・四四六／和歌童蒙抄・四九／袖中抄・一二、一三、一四

【参考】袖中抄・巻一「ひちかさ雨」の項で、万葉集・二六九三（旧二六八五）「妹が門行き過ぎかねつひさかたの雨も降らぬかそをよしにせむ」を引用し、古今六帖の当該歌について、「万葉の歌をやはらげたる歌也」と

説明し、催馬楽「妹が門」も万葉集を本体に作つたとする。

四四九 からころもきみにうちつけみまほしみこひてくらし雨のふるひを

【異同】ナシ

【現代語訳】逢えないでいるあなたに突然逢いたくなくて日がな恋しい思いで暮らして、雨の降る一日中。

【語句】○からころも 「からころも」について、「めずらしく美しい衣服」という従来の説明を退けたのは、和田早苗「王朝和歌における服飾表現―「からころも」をめぐる」『服飾美学』一九九九年九月）である。実際の歌に注目すると、「からころも」の実体はむしろ肌身に近くまとう私的な衣であり、また、「朝影にわが身はなりぬからころも裾のあはずて久しくなれば」（万葉集・二六二六（旧二六一九）、「からころも裾のうちかへあはねどもけしき心をあが思（も）はなくに」（万葉集・三五〇一（旧三四八二）など、「からころも」の特徴は「裾の裊が重なり合わないこと」であつて、重なりあわないところから自分と逢えない人になぞらえ、いとし人に「逢えない」気持を効果的に詠み込んだものという。○きみにうちつけ 「うちつけ」は、形容動詞「うちつけなり」の語幹で、だしぬけに、突然、の意。所載欄の万葉集では「君内著（きみにうちきせ）……」と、からころもを着せてそれを見たいと続く。なお、壬二集に「初秋」題での「なが月やさえん霜夜のから衣まづうちつけの秋のはつ風」（一四六九）歌は、衣服を着ける意の「うちつけ」と掛けた例と思われるが、当該歌では掛詞と解さなかつた。○みまほしみ 逢いたいので。語構成は、動詞・連用形「見」＋願望の意の助動詞語幹「まほし」＋接尾語「み」。なお、所載欄の万葉集には、西本願寺本「ミマクホリ（ミマクホシ）」、新訓「みまくほり」。助動詞「まほし」は中古になつてから生まれた。○こひてくらし 接続助詞「て」が重なる。「くてくらし」の歌は他に見当たらない。万葉集「こひぞ暮らし」の方がわかりやすい。

【所載】万葉集・二六九〇（旧二六八二）辛衣 君内著 欲見 恋其晩師之 雨零日乎 カラコロモキミニウチキセミマクホリ（ミマクホシ）コヒゾクラシアメノフルヒヲ からころもきみにうちきせみまくほりこひぞくらししあめのふるひを

四五〇 とをるべく雨はなをふるわざもこがかたみのきぬを我したにきて

【異同】我したにきて―わかしたにきて（大）

【現代語訳】衣の下まで濡れとおるほどに雨は依然として降っている。妻の衣を彼女の代わりとして私はじかに着ているのに（濡らさないでほしい）。

【語句】○とをるべく とほるべく。雨が下の着衣にまで濡れとおるほどに。○なをふる なほ降る。副詞「なほ」は、変わることもなく、依然として、の意。○かたみのきぬを、「かたみのきぬ」と詠む例は、当該歌と所載欄の綺語抄にしか見えず、他はほとんどが、「かたみのころも」。「形見」とは、衣に妻が付着しているから。男が妻の衣を着ているのは、家を離れて旅にでもあるのだろうか。「わぎもこが形見の衣下にてただに逢ふまではわれぬかめやも」（万葉集・七五〇〈旧七四七〉）。○我したにきて 「我」は「われ」と読んだ。

【所載】万葉集一〇九五（旧一〇九一）可融 雨者莫零 吾妹子之 形見之服 吾下尔著有 トホルベキアメハナフリソワギモコガカタミノコロモワレシタニキタリ とほるべくあめはなふりそわぎもこがかたみのころもあれしたにけり／綺語抄・三三〇

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

四五一 あきはぎをゝとすながあめのふる程はひとりをきゐてこふるよぞおほき

【異同】ナシ

【語句】○ゝ（を）とす 「をとす」は「おとす」。落とす。○をきゐて おきゐて。起きゐて。

【現代語訳】秋萩の花を落とす長雨が降る頃は、一人で起きていて恋い慕う夜が多いよ。

【所載】玉葉集・恋四・一六五一／万葉集・二二六六（旧二二六二）秋芽子乎 令落長雨之 零比者 一起居而恋夜曾大寸 アキハギヲチラスナガメノフルコロハヒトリオキキテコフルヨゾオホキ あきはぎをちらすながめのふるころはひとりおきゐてこふるよぞおほき／夫木抄・四一三一／人麿集Ⅰ・一五一／人麿集Ⅱ・七九／人麿集Ⅲ・二五九

【参考】人麿集に見え、玉葉集・夫木抄も人丸の詠とするが、古今六帖にも所載欄の万葉集にも作者名はない。古今六帖・二六九三番に「よるひとりをり」の題で、「秋はぎをちらすなあめのふるなへにひとりおきゐてこゆるよぞおほき」という近似した歌がある。

四五二 ひさかたの雨もふらなんあまつかみ君にたぐへてこのひくらさん

【異同】君にたくへて―君にたへて（御）

【現代語訳】雨でも降ってほしい。天つ神よ。そうしたら、（雨に降りこめられて）いとしいあの方に寄り添って今日一日を過ごそう。

【語句】○ひさかたの「雨」にかかる枕詞。○あまつかみ 古今六帖の本文に従い、「天つ神」として解釈した。「天つ神」は通常「国つ神」に対し高天原の神を指す。但し、所載欄の万葉集には「あまつつみ」とある。「あまつつみ」は、「あまつつみ常する君はひさかたのきぞの夜の雨にこりにけむかも」（万葉集・五二二（旧五一九））のように、雨に降られて外に出られず屋内に閉じこもっていることなので、その方が歌意にはふさわしい。

【所載】万葉集・五二三（旧五二〇）久堅乃 雨毛落糠 雨乍見 於君副而 此日令晚 ヒサカタノアメモフラヌカアマツツミキミニタグヒテコノヒクラサム ひさかたのあめもふらぬかあまつつみきみにたぐひてこのひくらさむ／綺語抄・五四

【参考】万葉集では、語句欄に引用した五二二番歌が詠まれた後、別人が唱和して詠んだ歌とされている。

四五三 はるの雨にありけるものをたちかくれいもがいゑぢにこのひくらしつ あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】（ひどくは降らない）春の雨であつたものを、雨宿りをして、あの娘（こ）の家に行く道で今日一日を暮らしてしまった。

【語句】○はるの雨 ひどく降ることはなくたいして濡れない春雨。「春雨はいたくもふらで晴がたき物也」（萬葉拾穂抄（新典社、一九七六年刊影印本））。

【所載】万葉集・一八八一（旧一八七七）春之雨尔 有来物乎 立隠 妹之家道尔 此日晚都 ハルサメニアリケルモノヲタチカクレイモガイヘデニコノヒクラシツ はるのあめにありけるものをたちかくれいもがいへぢにこのひくらしつ／人麿集Ⅲ・二四／赤人集Ⅰ・一七二／赤人集Ⅱ・五四／赤人集Ⅲ・五八

【参考】古今六帖は作者名を「あか人」とし、赤人集・人麿集に載せるが、所載欄の万葉集では作者名の記載はない。

四五四 ひさかたのあめにぬれしをあまつこといづみのこやにわれねしよはも

【異同】ナシ

【現代語訳】雨に濡れたことだよ。海人の娘（こ）と和泉の小屋で私が寝た夜はね。

【語句】○ひさかたの　ここは「雨」にかかる枕詞。○あめにぬれしを　雨に濡れたことだよ。「を」は感動を表わす間投助詞。○あまつこ　海人の娘の意か。○いづみ　畿内五ヶ国の一つ、和泉国。現在の大府南部で西は海に面し、漁業に従事する者が多かった。

【所載】ナシ

四五五　ふしておもひをきてながむる春さめにはなのしたひもいかにとくらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】寝ては思い、起きては物思いにふけりながら眺める春雨に、花の下紐はどのように解けて、蕾をほころばせるのだろう。

【語句】○ふしておもひをきてながむる　「をきて」は「おきて」、起きて。寝ている間も心の中で思い、起きても物思いにふけりながら（春雨を）眺める意。「臥して思ひ起きてかぞふるよろづよは神ぞ知るらむわが君のため」（古今集・三五四・素性法師）。「起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ」（伊勢物語・第二段・三）のように、春雨に終日恋の物思いにふける趣。○はなのしたひもいかにとくらむ　衣の下紐が解けるのになぞらえて、春雨に当たって花の蕾がほころぶことをいう。「山ざとに人め見しよりわがこふる花のしたひもいかにとくらん」（古今六帖「ひも」三三五六・つらゆき）。

【所載】新古今集・春上・八四／和歌童蒙抄・六七五

〔以上五首担当　長戸〕

四五六　はるさめのはなの枝よりもりてこばなをこそぬれめかにゝほふべく  
としゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨が花の枝を伝って洩れ落ちてくるならば、もっと濡れてみよう。香りに匂うことができるよう

に。

【語句】○はな 後撰集では詞書より桜であることがわかる。ここでは種を特定せずに解釈する。○もりてこば 洩れ落ちてくるならば。雨滴が枝を伝って衣服や身体にしみ込む。○なを なほ（猶）。

【所載】後撰集・春下・一一〇／新撰朗詠集・七八／敏行集・二二

【参考】作者名は所載欄の諸文献に一致する。後撰集の詞書には、寛平御時（宇多天皇の御代）に行われた桜花の宴の折に雨が降ったので詠んだ歌とある。なお後撰集では五句「かもやうつると」とする。

四五七 おきもせずねもせでよるをあかしてははるのものとてながめくらしつ  
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】起きるというわけでもなく、かといって寝てしまうというわけでもなく、夜を明かしたら、昼は春のものということで長雨を見ながらぼんやりと一日を過ごしたことだよ。

【語句】○はるのもの 春の景物。ここでは春特有の長雨をいう。○ながめくらしつ 「ながめ」はぼんやり過ごすの意と「長雨」を掛ける。

【所載】古今六帖「あした」二五九三／古今集・恋三・六一六／新撰和歌・二四〇／業平集Ⅰ・七／業平集Ⅱ・五五／業平集Ⅲ・八／業平集Ⅳ・八／伊勢物語・二段・三

【参考】伊勢物語（二段）では、ひそかな逢瀬の後、なお恋しく思ったのか、三月ついたちの雨の降る中、相手へ贈った歌とする。古今集でもほぼ同じ内容の詞書を添え、作者を業平とする。

四五八 つれぐのながめにまさるなみだ川そでのみひちてあふよしもなみ  
としゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】ずっと続く長雨に川の水かさが増すように、することもなくぼんやりと物思いにふけっていると涙が止まず川のように流れ、ただ袖ばかりが濡れて逢うすべもなくて。

【語句】○つれぐ 同じ状態がずっと続くの意と、することもないの意を掛ける。○ながめ 「長雨」とぼ



んやりと過ぐすの意の「ながめ」を掛ける。○なみだ川 涙の出ることを川に喩えた言い方。恋歌に多く見られる。「涙河何みなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり」（古今集・五一）。○あふよしもなみ 「み」は接尾語。形容詞の語幹に付き、原因、理由を表わす。ただし所載欄の文献では古今六帖重出歌をはじめ「あふよしもなし」とする。

【所載】古今六帖「涙川」二〇七八／古今集・恋三・六一七／業平集Ⅰ・二五／業平集Ⅱ・四三／業平集Ⅲ・一三／敏行集・七／八雲御抄・三四／悦目抄・七三／伊勢物語・一〇七段・一八三

【参考】古今集にも敏行の名で採られ、業平の許にいた女への歌とし、その女に代わって業平の詠んだ歌とで贈答歌をなす。伊勢物語（二〇七段）でも敏行は実名で登場し、同様の詠歌事情を伝える。

四五九 さくらがりあめはふりきぬおなじくはぬるともはなのしたにかくれん

【異同】ナシ

【現代語訳】桜狩りをしていたら雨が降ってきたよ。同じことなら、たとえ濡れても、花の下に隠れよう。

【語句】○さくらがり 花見。「さくらがりぬれてぞきにしうぐひすのみやこにをるは色のうすさに」（宇津保物語・三二六）。○おなじくは どうせなら。いつそのことなら。「わびわたるわが身はつゆをおなじくは君がかきねの草にきえなん」（後撰集・六四九）。○したにかくれん 所載欄の文献では「かげに隠れん」とする。

【所載】拾遺抄・春・三二／拾遺集・春・五〇／和漢朗詠集・八五／和歌童蒙抄・六七〇／奥儀抄・二四九／袖中抄・九六四／和歌色葉・三五〇／近代秀歌・三二／詠歌大概・一二／撰集抄・七三

【参考】撰集抄では巻八「実方中将桜狩の歌の事」にこの歌が見える。登場人物の活躍する年代は古今六帖の成立からやや時代が下がる。概略は次の通り。殿上人が東山へ花見に行ったときにわか雨が降ったのを、居合わせた藤原実方が騒がず、桜の木の下に立ち濡れながらこの歌を詠んだ。翌日、やはりその場にいた藤原齊信が帝にこのことを伝えたところ、この時陪席していた藏人頭の藤原行成が「歌はおもしろし。実方は痴（をこ）なり」と言った。これを実方が漏れ聞いて、行成に深く恨みを抱くようになった。

四六〇 水のうへにあやをりみだるはるさめややまのみどりをなべてそむらん

【異同】○水のうへに―水の面に（大） あやをりみたる―あやめをりみたる（桂）

【現代語訳】水の上にきれいな模様を織り込んだ春雨が、山の緑を一面に染め抜くのだろうか。

【語句】○水のうへに 所載欄の新撰万葉集や歌合では「水の上に」とするが、新古今集や伊勢集諸本では大久保本と同じく「水の面に」とある。○あや 織物の模様。○をりみだる 織（お）り乱る。「織り」は「そむ」とともに「あや」の縁語。○はるさめ 水面に映るあたりの景色を、春雨が織りなした文様に見立て、春雨を擬人化する。そして今度は山を染めるのだという趣向。○なべて すべて。総じて。ここでは見わたす限り一面に、の意。

【所載】新古今集・春上・六五／新撰万葉集・一／新撰朗詠集・七七／伊勢集Ⅰ・一〇三／伊勢集Ⅱ・一〇四／伊勢集Ⅲ・五一〇／寛平御時后宮歌合・一九／綺語抄・二二四／和歌童蒙抄・五三

〔以上五首担当 青木〕

四六一 あづさゆみをしてはるさめけふゝりぬあすさへふらばわかなつみてん

【異同】ナシ

【現代語訳】今日、春雨が降った。明日も降ったらきっと若菜を摘んでしまおう。

【語句】○あづさゆみをして 「あづさゆみ」は梓の木で作った弓。梓弓を押して弦を「張る」ことから、「春雨」の「はる」を導く序詞。○わかなつみてん きつと若菜を摘むだろう。「てん」は完了の助動詞「つ」の未然形に、意志、推量の助動詞「む」のついた形。一般に強い意志をあらわす。

【所載】古今集・春上・二〇／新撰和歌・二七／俊賴髓脳・四〇／三五記・二四五／悦目抄・一一、四七

【参考】所載欄の古今集には「よみ人知らず」とある。

四六二 つれぐとそでのみひちてはるのひのながめはこひのつまにぞ有ける

【異同】ナシ

【現代語訳】何事も手につかず、袖が濡れるばかりで、春の日の長雨がつづく、そんな折のもの思いは恋のはじまりだったのですね。

【語句】○つれぐと 何をしてもおもしろくない、する気もない、単調で、退屈、ぼんやりとした状態をあらわす語。○そでのみひちて 袖が濡れるばかりで。長雨のために濡れているようであるが、実は涙で濡れている。

「ひつ」は濡れる意。なお「のみ」はこの場合、いわゆる限定ではなく、そのことがしきりに行われる意をあらわす。「御胸のみつとふたがりて」（源氏物語・桐壺）。○ながめ 春の「長雨」に、もの思いをする意の「眺め」を掛ける。○こひのつま 「つま」は、本来、ものの端、へり、を意味するが、ここは、端緒、きつかけ、はじまりをいう。「あきかぜや涙もよほすつまならむおとづれしより袖のかわかぬ」（千載集・二三四）。

【所載】 夫木抄・九三八

四六三 ふりぬとておもひなわびそはるさめのたぐにやむべき君ならなくに

【異同】 ナシ

【現代語訳】 不遇なまま年をとってしまったらといって、嘆いたりなさいますな。春雨がやむように、このまま終わりになってしまうはずのあなたではありませんのに。

【語句】 ○ふりぬとて 「ふり」は、古くなる、年をとる、人から相手にされなくなる、などの意の「古り」と、雨が降るなどの「降り」との掛詞。「降り」は、「止む」とともに「春雨」の縁語。○おもひなわびそ 心の中で嘆いたり、つらがつたりする意の「思ひ侘ぶ」に、禁止の終助詞「な……そ」が伴った形。嘆いたりするな。○はるさめの 詠作時にたまたま春雨が降っていたのであろうが、ここは「やむ」を導き出すための枕詞的な働きをする。○たぐにやむべき このまま終わりになってしまうはずの。「やむ」には春雨が「やむ」意もこめられている。○君ならなくに あなたではないことなのに。「なくに」は、打消の助動詞のいわゆるク語法「なく」に、助詞の「に」が添えられたもの。

【所載】 後撰集・春中・八〇

【参考】 所載欄の後撰集によれば、壬生忠岑が身の不遇を恨んでよこした文に対して、紀貫之が詠んだ歌。四六六番歌の注記に、「已上四首つらゆき」とある。

四六四 わがせこがころもはるさめふるからにのべのみどりぞいろまさりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 私の夫の衣を洗って張る、そんな春の日、春雨が降ることによって野辺の緑は色がまさることだ。  
【語句】 ○わがせこが 「せこ」は女性の立場から親しい男性を指して言う語。私のいとしい人の。「せこが」

の「が」は連体格助詞。○ころもはるさめ 衣を洗い張りする意から、衣を「張る」といい、同音の「春雨」にかかる。「わがせこがころも」は、「春雨」の序。○ふるからに 降ることによって。降るにつれて。「からに」は、原因、理由を示す。

【所載】古今集・春上・二五／新撰和歌・三三／秀歌大体・一五／俊頼髓脳・四〇九／袖中抄・一九〇／三五記・二四六

【参考】所載欄の古今集では作者が貫之。四六六番歌の注記にも「已上四首つらゆき」とある。

四六五 あめによりたみのゝしまをけふゆけばなにはかくれぬものにぞありける<sup>ど</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】雨に降られて、「田養」の島ならば濡れないだろうと今日やって来たところ、やはり名前には隠れることが出来ないのだった。

【語句】○たみのゝしま 摂津国の歌枕。淀川の河口近くにあった島の一つだったらしいが、現在の大阪市のどのあたりを指すか、具体的にはわからない。田の作業をする時に身につける蓑「田養」を連想させるものとして詠まれている。○なにはかくれぬ 「田養」という名に隠れることは出来ない。びしょ濡れになってしまったことをいう。「名には」に「難波」を隠しているのであろう。

【所載】古今六帖「しま」一九一七／古今集・雑上・九一八／拾遺集・別・三四三／貫之集I・八〇七

【参考】所載欄の文献はすべて作者を貫之とし、四六六番歌の注記にも「已上四首つらゆき」とある。  
〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

四六六 かきくらしあめふるごとにみちしらぬかさとりやまにまどはるゝ哉

已上四首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】空を暗くして雨が降る度に、（笠をさすという名のついた）笠取山で道を知らずに迷うように、私も恋に迷っているのだなあ。

【語句】○かきくらしあめふる 「かきくらす」は雨や雪などがあたり一面を暗くして降ること。「心を暗くする」

「悲しみにくれる」意もかける。即ち、「空を暗くして雨が降る」意に、「心を暗くして涙を流す」意をこめる。貫之集や歌枕名寄では上の句は「かきくもり雨ふることもまたしらぬ」で、「空一面曇つて雨が降ることも未だにない」意となる。○かさとりやま 京都府宇治市の北東にある山。もとは西方の醍醐山を含めた広い範囲をさしたとする説もある。その名に笠を持つので、雨にちなんだ詠まれることが多い。紅葉の名所。「雨降れど露ももらじを笠取の山はいかでもみぢそめけむ」(古今集・二六一・在原元方)。○まどはるゝ哉 迷っているのだなあ。「まどふ」に、「道に迷う」意と「心が乱れる」意をこめる。

【所載】貫之集Ⅰ・六三六

【参考】「已上四首つらゆき」とあるが、四六三番～四六六番の四首は所載欄の文献においても作者貫之とする。

#### 四六七 春さめのふるとみゆるはうぐひすのちるはなをしむなみだなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨が降ると見えたのは、鶯が散る花を惜しんで流す涙でしたよ。

【語句】○うぐひすのちるはなをしむなみだ 鶯が散る花を惜しんで流す涙。春雨の中で鳴く(泣く)鶯の声を聞き、雨を涙と見立てた趣向。「むめの花ちるてふなへにはるさめのふりいでつつなくうぐひすのこゑ」(伊勢集・三三六)。

【所載】ナシ

#### 四六八 はるさめのふるにおもひはきえなくでいとゝおもひのめをもやすらん

【異同】きえなくで—きえなくて(大)

【現代語訳】春雨が降っても「思ひ」の「火」は消えてしまうということはなく、(芽吹かせるように)ますます「思ひ」を燃やすのはどうしてなのだろう。(第三句は大久保本により「きえなくて」として解した。)

【語句】○はるさめのふるに 春雨が降っても。所載欄の後撰集では「はるさめのふらば」。「降る」「芽」「萌やす」は「春雨」の縁語。○おもひはきえなくで このままでは意が通らないので大久保本により「おもひはきえなくて」で解する。「思ひ」に「火」をかける。「消え」「燃やす」は「火」の縁語。所載欄の後撰集では「思ひのきえもせで」。○いとゝおもひのめをもやすらん 芽を萌やすように、ますます「思ひ」の火を燃やすのはどうし

てだろう。「萌やす」と「燃やす」を掛ける。「らん」は物事の理由・原因を推量する語。後撰集では第四句は「いとどなげきの」で、「嘆き」と「投げ木」を掛ける。後撰集の本文の方が意が通る。

【所載】後撰集・春二・六六詞書

【参考】後撰集には女によこした古歌として詞書に載る。これに返した歌が六六番で、「もえ渡る嘆きは春のさかなればおほかたにこそあはれとも見れ」（後撰集・春二・よみ人知らず）。蜻蛉日記の天延元年二月の条にも「かかることを尽きせずながむるほどに、ついたらより雨がちになりにければ、いとど嘆きの芽をもやすとのみなむありける」とある。

四六九 つれづれのながめにわれはなりぬめりつれなきそらをふるこゝちして

【異同】ナシ

【現代語訳】「つれづれのながめ」に、わたしはなつてしまふようです。長雨は変化のない空を降り、わたしはつれなき空を経る心地がして。

【語句】○つれづれ 物事がいつまでも変わらず、長々しく続くさま。所載欄の夫木抄では上句「つれづれとながめに我はなりにけり」。○ながめ 「長雨」に、「眺め」（物思いにふけて長い間ぼんやりと物を見ていること）を掛ける。「つれづれのながめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし」（古今集・六一七・としゆきの朝臣）。「空」「降る」は「長雨」の縁語。○めり 婉曲の用法。……ようだ。……らしい。○つれなきそらをふる 「つれなし」は、①冷淡である、②平然としている、③事態に何の変化もない、などの意がある。「雨がつれなき（変化のない）空に降る」意と、「わたしがつれなき空（冷たい仕打ち）を経る」意を掛ける。「ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがある山の風はやみなり」（古今集・七八五）。

【所載】夫木抄・七八九四

四七〇 あふことのかたいとなればしらたまのをやまぬはるのながめをぞする

【異同】ナシ

【現代語訳】逢うことが難しいので、途切れずに降る春の長雨のように、わたしも止むことなく物思いをしています。

【語句】○かたいと 片糸。より合わせていない糸。これを二本より合わせて糸を作る。「かた」に「難(し)」を掛ける。「逢ふ事のかた糸ぞとはしりながら玉のをばかり何によりけん」(後撰集・五五〇)。○しらたまの 白玉を貫き結ぶ緒の意で、「緒」と同音を含む「をやむ」にかかる枕詞。○をやまぬ 「をやむ」は、「ちよつと止む、途切れる」意。和歌童蒙抄では「をやまず」。「を」に「緒」を掛ける。「緒」は「糸」の縁語。

【所載】和歌童蒙抄・二九三

〔以上五首担当 三浦〕

四七一 ふるとしもみえでふりくるはるさめははなのしめゆふいとにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】降るとも見えずに降って来る春雨は、花にしめを結う糸のようなものであつたなあ。

【語句】○ふるとしもみえで 降っているようにも見えなくて。「し」は強意の副助詞。「で」は打消のはたらきをする接続助詞、「ずして」の意。○しめゆふ 「しめ」は占有物であることを明示するための標識。棒、杭、縄等を用いたり、草を結んだりして区画を示した。それを「しめ結ふ」と言う。可視的な標識がなくても、自己の所有や庇護のもとにあることを示す場合、この語を使うことがある。

【所載】夫木抄・九三九／和歌童蒙抄・五五／八雲御抄・一八二

四七二 はるさめにきみをやりてはあふさかのせきのこなたにこひやわたらん  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨の降る中、あなたを遠方へ行かせて、「逢う坂」という名でありながら逢えないままに) この逢坂の関のこちら側で私は恋い続けるのだろうか。

【語句】○あふさかのせき 逢坂の関。近江国の歌枕。正確な所在は未詳だが、平安時代は、山城と近江の間にある逢坂山の南麓の谷(逢坂越え)を、近江側へ出たあたりにあつたようで、恋歌では「逢ふ」に掛けて詠まれているが多かった(山下道代「逢坂」「逢坂を歩いて」「歌枕新考」青簡舎 二〇一一年)。○こひやわたらん 私は恋い続けるのであろうか。「わたる」は、その状態が時間的に継続しているさまを表わす。

【所載】 夫木抄・九四〇／躬恒集Ⅰ・一七五／躬恒集Ⅱ・八六／躬恒集Ⅲ・七五／躬恒集Ⅳ・四二五／躬恒集Ⅴ・三〇二

【参考】 作者名「みつね」は躬恒集に一致する。

四七三 おもはじとおもふものからなつの雨のふりすてがたきゝみにもあるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 もう思うまいと思うものの、夏の雨が「降る」の「ふり」ではないが、振り切って思い捨てることのできないあなたであることよ。

【語句】 ○おもはじとおもふものから 思うまいと思うものの。「ものから」は、ここでは逆接。○なつの雨の「ふり」を導き出すための措辞。○ふりすてがたき ふり切って思い捨てることができな。雨の「降り」に、思いを「振り捨つ」の「振り」を掛けた。

【所載】 夫木抄・七八九二

四七四 かず／＼におもひおもはずとひがたみ身をしるあめはふりぞまされる  
なりひら

【異同】 ナシ

【現代語訳】 ねんごろに私を思っていてくださるのか、思っていてくださらないのか、尋ねにくいので、わが身の程（あなたが私を思ってくださいその程度）の知られる雨は、いよいよ降りつのつています。

【語句】 ○かず／＼に 数多く、数を尽くして。ねん／＼に、心を尽くして。ここでは恋しく思われる程度を「かず／＼」と言った。「かずかずに我をわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ」（古今集・八五七）。○身をしるあめ わが身の程が知られる雨。我が身の思われようのわかる雨。雨をおして来てくれるならば思いが深いのだとわかる、と言っているのである。

【所載】 古今集・恋四・七〇五／業平集Ⅰ・六一／業平集Ⅱ・四五／業平集Ⅲ・三六／業平集Ⅳ・一八／綺語抄・三七一／奥儀抄・五三一／和歌色葉・二六五／伊勢物語・一一七段・一八五  
【参考】 作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。



或本そせい

四七五 ひぐらしのあめふるかはのさゝらなみまなくもひとのこひらるゝかな

【異同】ナシ

【現代語訳】一日中雨が降る布留川のさざ波のように、絶え間なくあの人が恋しく思われることだ。

【語句】○ひぐらしの 終日の。○ふるかは 「降る川」に「布留川」を掛ける。「布留川」は大和国の歌枕。現天理市布留の地を流れて初瀬川に合流、末は大和川に注ぐ。○さゝらなみ さざなみ。波紋を連ねて寄せる小さな波。上三句は「まなく」にかかる序詞。○こひらるゝかな 恋しく思われることだ。

【所載】拾遺集・恋五・九五六／人麿集Ⅰ・一八四

【参考】万葉集に「との曇り雨ふる川のさざれ波間なくも君は思ほゆるかも」(三〇二六(旧三〇二二))という類似した歌がある。作者について「或本そせい」とあるが、この歌の作者を素性とする文献は他に見あたらない。

〔以上五首担当 橋本・山下〕

そせい

四七六 うくもあるかきのふのこさめわたるせに人のなみだをふちとなさねば

【異同】ナシ

【現代語訳】心憂いことがあることか。昨日の小雨が(あの人の)渡る浅瀬に、涙で淵にしてはいないのに。

【語句】○うくもあるか 心憂いこともあるか、の意。「うくもある」は、当該歌以外に古今六帖に「つもりては山となるてふ物なれどくもあるかなちりひぢの身よ」(八〇〇)があるが、ほかには色葉和難集の用例のみ。○こさめ 万葉集・二四五六「烏玉の黒髪山の山草に小雨ふりしきしくおもほゆ」など万葉集に「小雨」が七例用いられている。○わたるせ 瀬に、逢瀬をかける。万葉集では西本願寺本の訓において「渡瀬」「わたるせ」とする語を、新撰字鏡で「灘、和多利世」とするのを参照し、現在では「わたりぜ」と読んでいる場合が多い(一三一一(旧一三〇七))。わたりぜは、比較的浅く、徒歩または乗馬したままで川を横断できるところを指す。○ふち 瀬と淵は縁語。瀬が淵に、という発想は有名な古今集「世中はなにかつねなるあすかはきのふのふちぞけふはせになる」(九三三)にあり、また涙が淵になってしまうのは、後撰集の「せきもあへず淵にぞ迷

ふ涙河わたるてふせをしるよしもがな」(九四六) などに見られる。

【所載】ナシ

【参考】作者名「そせい」とあるが、他文献に見えない。

四七七 しら雲のうへしるけふぞはるさめのふるにかひある身とはしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】(念願が叶って) 尊い方にお仕えする今日は、長年生きてきた甲斐のあった身であると初めて知ったことです。

【語句】○しら雲のうへ この歌、後撰集の詞書に「ある人のもとにひまありの女の侍りけるが、月日ひさしくへて、む月のついたちごろにまへゆるされたりけるに、雨のふるを見て」とあるように、新参の女性(女房)が月日を経て、一月一日頃に御前への側仕えを許された時の歌。よってこの「白雲の上」は「雲上」すなわち貴所の比喩。この歌は、歌のみでは解しにくいので、後撰集の詞書を用いて解釈した。○ふる 春雨の「降る」に、年「経る」をかける。一月一日で一つ年をとったので、加齢を強調する。「老いを言うのは不遇の嘆き・謝恩の類型」(工藤重矩校注『後撰和歌集』和泉書院、一九九二年)。

【所載】後撰集・春上・四

四七八 春たちてわが身ふりぬるながあめには人のこゝろのはなもちりけり  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来て我が身がまた一つ年をとってしまふ、そんな中降っている長雨には、人の心も移ろいやすい花のように散ってしまうことだ。

【語句】○ふりぬる 後撰集詞書には「ひとにわすられて侍りけるころ、雨のやまずふりければ」とあり、長雨にふりゆくわが身をなぞらえる歌は多いが、特に「花の色は移りにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに」(古今集・小野小町)が有名。「ふり」は「降り」と「古り」の掛詞。春になりまた一つ年を取ってしまったことを「古りぬる」という。○こゝろのはな 古今集・七九七・小野小町の「色見えでうつるふ物は世中の人

の心の花にぞ有りける」にあるように、移ろいゆくものの喩。長雨によって花が散ってしまうように、あの人の心も移ろい離れてしまったことだ、の意。

【所載】後撰集・春上・二一／色葉和難集・四八六

【参考】古今六帖では諸本「いせ」とするが、後撰集では「よみ人知らず」。

四七九 春さめのふらば山べにまじりなんむめの花がさありといふなり  
つらゆき或本

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨が降ったら、山辺に分け入ってしまおう。春の山には、梅の花笠があるというのだから。

【語句】○山べにまじりなん 「山べにまじる」とは、山に分け入ること。「いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは」（古今集・九五・素性）。なお所載欄の後撰集では「野山にまじりなん」。○むめの花がさ 「あをやぎをきたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ」（古今集・神遊びの歌・一〇八一・返しものの歌）に拠る、梅花を指す表現。

【所載】後撰集・春上・三二／和歌童蒙抄・六五三

【参考】作者名は「つらゆき或本」とあるが、後撰集では「よみ人知らず」。

四八〇 おもふ人あめとふりくるものならばもるわがやどはあはせざらまし  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】私の思うあの方が雨となつて訪れるものならば、雨の漏る我が家の板間をあわせることはすまい。

【語句】○あめとふりくる 雨となつて人が訪れる。参考欄の大和物語を参照。○あはせざらまし 板間が合わず、雨がもれる我が家の板目を合わせることはすまい。板間と「あふ」の語の関連は、「てる月ももる板まのあはぬよはぬれこそまされかへすころもで」（順集・五一）などに見られる。荒れた家に人の訪れを待つといった状況を詠む場合に多い。

【所載】ナシ

【参考】大和物語・八三段には、

おなじ女、内裏の曹司にすみける時、忍びてかよひ給ふ人ありけり。頭なりければ殿上につねにありけり。雨のふる夜曹司の菰のつらにたちよりたまへりけるもしらで、雨の漏りければ、むしろをひきかへすとて、おもふ人雨とふりくるものならばわがもる床はかへさざらましとなむうちいひければ、あはれときゝて、ふとはひいりたまひにけりとある。当該歌とよく似た歌いぶりである。

〔以上五首担当 杉本〕

四八一 はるさめのいろかはるにやにほふらんわがみるえだにいろもかはらず

【異同】ナシ

【現代語訳】春雨の色が変わる（と思うとそれは花が）咲き匂っているのでしょうか。（だが、）私の毎日見る枝には色も冬の枝そのままなのです。

【語句】○はるさめのいろかはるに 春雨の色変はるに。「に」は断定の助動詞「なり」。春雨の色変わる時が（花の咲く時）と判断する。○にほふ 色が美しく映える。普通「……あしひきのやまのこぬれもはるされば はなさきにほひ……」（万葉集・四一八四）のように、花が咲いて色が映えるのだが、この歌においては未開花。後代の例だが、「はるさめにまどの梅がえちりにけりいろさへにほふのきのたまみづ」（建保五年十月十九日 四十番歌合）を参考に、春雨の色が「にほふ」原因と解した。

【所載】後撰集・春上・三九

【参考】後撰集によれば、梅の盛りになったのに便りがない、と催促する贈歌への返歌である。

あひしりて侍りける人の家にまかれりけるに、梅の木侍りけり、この花咲きなん時かならずせうそこせむといひ侍りけるを、おとなく侍りければ 朱雀院の兵部卿のみこ

梅花今はさかりになりぬらんだのめし人のおとづれもせぬ

かへし

紀長谷雄朝臣

春雨にいかにぞ梅やにほふらんわが見る枝は色もかはらず

四八二 こぬ人をあめのあしとはおもはねどほどふことはくるしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】来て下さらない人を悪い人とは思わないけれど、あまり長くなるのは苦しくなりません。

【語句】○あめのあし 雨脚。あまあし。降り注ぐ雨が糸すじのように見えるのをいう。「悪し」をかける。○ほどふる 程経る。「経る」に「降る」をかける。

【所載】ナシ

【参考】雨脚を詠む歌は少なくない。

ふる雨のあしともおつる涙かなこまかにものをおもひくだけば（道綱母・玄々集一九）

つくしにくだるにあきのくににあらやまをあめのふるにこゆるとて

ひとたびもまだみぬみねにまどはぬはあめのあしこそしるべなりけれ（忠見集・一四〇）

あめのあしもかずこそまされよどがはのこものみぎはもいかなるらん（保憲女集・二〇九）

四八三 くれなゐのやしほのあめは<sup>ぞイ</sup>ふりく<sup>けイ</sup>らしたつたの山のいろづく見れば

【異同】ナシ

【現代語訳】紅の八入（やしお）の雨が降ったらしい。雨にあたって立田山の木々の色が次第に赤く染まるのを見と。

【語句】○やしほ 八入。染色において一度染液に浸すのを「ひとしほ」と言う。何度も浸して濃い色にすることを「やしほ」に染めるという。○ふりくらし 降り来るらしい。「くらし」は力変動詞「来（く）」の終止形に、推量の助動詞「らし」が接続した形。○たつた山 立田山。古来、大和国と河内国とのゆききの路にあり、伊勢物語「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらん」をはじめ、多く詠まれた歌枕。紅葉の名所。

【所載】新拾遺集・秋下・五三九／人麿集Ⅱ・一四九／人麿集Ⅲ・一五六／人麿集Ⅳ・四二

【参考】当該歌をふまえ、「たつた姫かけてほすてふもみぢはのやしほの衣あめにそめつつ」（夫木抄・六一四四・為家）と詠まれた。

みつね

四八四 やみなばやこゝろをばみん春さめのふるにとまれるわがやど君かとぞイおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】止んだとしたら、あの人の本当の心がわかるでしょうか。来たくてやって来たのか、（そうではなくただ）春雨の雨宿りに泊まっただけのわが家なのかと。

【語句】○やみなばや 動詞「やむ」に、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」、仮定の助詞「ば」、疑問の助詞「や」が接続したかたち。止んだとしたらば。○ふるにとまれる 雨が降ってやむを得ず泊まった。○わがやどゝ 女の立場でいう。訪れる夫が一晚泊ってゆくか、泊まらずに帰るかは平安時代の女にとって常に重大な関心事であった。

【所載】躬恒集Ⅰ・一七三／躬恒集Ⅱ・八四／躬恒集Ⅲ・七三／躬恒集Ⅳ・四二三

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

四八五 しる人もなみだならずはぬらしけんはるさめこそはあはれともみめ いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】（私の恋を）知る人もなく、涙ではないとしたら、袖を濡らした春雨こそは、（私を）あはれと見てくれるでしょう。

【語句】○しる人もなみだ 「知る人も無み」に「涙」をかける。○あはれともみめ 気の毒と見る。いとしいと見る。

【所載】伊勢集Ⅱ・二四五／伊勢集Ⅲ・二四四／伊勢集Ⅳ・二四四

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野〕

四八六 むらさめ  
にはくさにむらさめふりてひぐらしのなくこゑきけば秋はきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】庭の草に俄か雨が降って、蜩の鳴く声を聞くと、ああ秋が来たのだなあと感じられる。

【語句】◎むらさめ 群雨。村雨。ひとしきり烈しく降ったかと思うと、すぐに弱くなったり、止んではまた降る、にわか雨。降り方を主にして言う語。○ひぐらし 蜩。セミ科の昆虫。早朝、夕刻、曇天時に「カナカナ」と高い音で鳴く。古くから歌にも詠まれ、万葉集では夏と秋の両方の季節のものとして、平安以降では「蜩の鳴く山里の夕暮れは風より他にとふ人もなし」（古今集・秋上・二〇五）のように、秋の山里の夕暮れに鳴くという詠まれ方が増えてくる。

【所載】拾遺集・雑秋・一一一〇／万葉集・二一六四（旧二二六〇）庭草尔 村雨落而 蟋蟀之 鳴音聞者 秋付尔家里 ニハクサニムラサメフリテキリギリスナクコエキケバアキヅキニケリ にはくさにむらさめふりてこほろぎのなくこゑきけばあきづきにけり／人麿集Ⅰ・一一六／人麿集Ⅱ・三七／夫木抄・五六一三／秀歌大体・五一／桐火桶・一六

四八七 もるやいづこふるやむらさめおほぞらもおもひおもはずしらぬるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】漏れるほど降っているのはどこなのか、降るのはむらさめか。（そのような雨を降らせることで）大空も思っているか思っていないかが自ずと知れてしまうことだ。

【語句】○ふるや 「もるや」と対になる。いずれの「や」も疑問。○おもひおもはず 恋情の有無をいう語。「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨は降りぞまされる」（古今集・七〇五・業平）のごとく、雨を冒して来るかどうかによって相手の恋情を推し量っている。相手の心を大空の擬人として歌ったもの。

【所載】ナシ

四八八 人しれずものおもふなつのむらさめは身よりふりぬるものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れずひとりものを思う夏、そんな時急に降り出したにわか雨は、天からではなく、我が身から降る雨、すなわち涙そのものでありますよ。

【語句】○むらさめ 「むらさめ」については四八六番歌参照。当該歌では村雨を涙に見立てる。○身より 天からではなく自分自身から。

【所載】伊勢集Ⅰ・一二八／夫木抄・七八九一

【参考】作者名はないが、伊勢集に入集する。

四八九 たまだすきかけぬときなくわがこふるしぐれしふらばぬれつゝもいかなしぐれ

【異同】ナシ

【現代語訳】心にかけてぬ時なくずっと私が恋いこがれている（あの人のもとへ）、時雨が降ったならぬれそぼちながらでも行こうよ。

【語句】◎しぐれ 晩秋から初冬にかけて、降ったりやんだりする小雨。木々を染め、紅葉させるものとして詠まれることが多い。○たまだすき たすきの美称。たすきをかける意から「かく」にかかる枕詞。○わがこふる 私が恋しく思っている。「こふる」は連体形だが、「しぐれ」にかかるのではなく、相手を指す「妹」といった語が省略されているとみる。

【所載】万葉集・二二四〇（旧二二三六）玉手次 不懸時無 吾戀 此具礼志零者 沾乍毛将行 タマタスキカ ケヌトキナシワガコヒハシグレシフラバヌレツツモユカム たまたすきかけぬときなくわがこふるしぐれしふらばぬれつゝもゆかむ／人麿集Ⅰ・一四三／人麿集Ⅱ・一六二、四一二／人麿集Ⅲ・一八六

四九〇 ちゞのいろにうつりし秋はすぎにけりけふのしぐれになにをそめまし

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉がさまざまに色づき、その色が変わって行く秋はもう過ぎてしまった。（時雨はもみぢの色を深く染めるとはいうが）今日、初冬の時雨に何を染めようか。

【語句】○ちゞ 数多いこと。さまざま。紅葉の色がさまざまであることを表すのに用いる例は多い。例えば「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちゞにそむらん」（古今集・二五七）、「ちゞの色にうつるふらめどしらくなくに心し秋のもみぢならねば」（古今集・七二六）など。



【所載】新勅撰集・冬・三六五／大和物語・三段・四

【参考】大和物語では、京極御息所主催の亭子院の六十賀（延長四年九月二八日）のために、源清蔭が、献上品を入れる鬚籠（ひげこ）と敷物の織物をいろいろに染めるよう申しつけたが、その仕事をすべて仕上げ、十月一日に届けた時、としこが申し送った歌とある。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

四九一 秋たかるたびのそらにてしぐれふりわがそでぬれぬほす人なしに  
かりほにイ 人まろイ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田を刈るために旅寝をしている空に時雨が降って、私の袖は濡れてしまった、乾かしてくれる人もないのに。

【語句】○たびのそら 「たび」は自宅以外の所で寝ること。ここは、稲刈りの前後に自家から離れて、持田の近くに小屋を作って泊まることを指す。四一一番歌参照。「旅の空」は、平安中期頃から、「草枕我のみならずかりがねもたびのそらにぞなき渡るなる」（拾遺集・三四五）など、空に関わる景物と取り合わせて詠まれるようになり、時雨との組み合わせとしては「いとどしくなげかしき夜を神無月旅の空にもふる時雨かな」（増基法師集・一四）がある。傍書の「かりほに」の方が、所載欄の万葉集歌や前後のつながりからみて歌意が通るが、本文通りに解した。

【所載】新勅撰集・秋下・二九九／万葉集・二二三九（旧二二三五）秋田苧 客乃廬入尔 四具礼零 我袖沾千人無二、アキタカルタビノイホリニシグレフリワガソデヌレヌホスヒトナシニ あきたかるたびのいほりにしぐれふりわがそでぬれぬほすひとなしに／人麿集Ⅰ・一四二／人麿集Ⅱ・一六六／人麿集Ⅲ・一五二

【参考】傍記異文の作者名「人まろ」は、万葉集では作者記載がなく一致しない。百人一首、天智天皇「秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手は露にぬれつつ」の原歌「秋田刈る刈廬を作り我が居れば衣手寒く露ぞ置きにける」（万葉集・二二七八（旧二二七四））の類想歌。

四九二 一日にもちへにしきしきわがこふるいもがあたりにしぐれふりみん  
はづかしきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】一日のうちにも幾度となく私が恋い焦がれるあの娘の家のあたりに時雨が降っており、それを見よう。

【語句】○一日にも 一日（ひとひ）にも。一日のうちにも。所載欄の万葉集歌の旧訓・現代訓は「一日には」だが、元暦校本には「一日にも」とある。万葉集における「一日」が「ちへ（千重）」の「千」にかかるのは、これを入れて三例、他の二例も「一日には（一日者）千たび参りし東の大き御門を入りかてぬかも」（二八六）、「一日には（一日尔波）千重波しきに思へどもなぞその玉の手に巻きかたき」（四二二）（旧四〇九）と「一日には」とあるが、本文通り「一日にも」として解した。○しきしき 「しくしく」に同じ。頻りに。繰り返して。○ふりみん 「見る」が連用形に後接する場合、通例は「とり見ん」のように主語は統一される。この場合、「降り」の主語は「時雨」だが、「見ん」の主語は「男」となる。所載欄の万葉集歌の西本願寺本の訓は「しぐれふれみむ」だが、現代訓は「礼」を「所」の誤りとする『万葉集略解』に従い、「しぐれふるみゆ」、時雨が降っているのが見えるとしており、解しやすい。一応、本文に即して訳した。雨に降りこめられて恋人の所に逢いに行けない男の歌。

【所載】万葉集・二二三八（旧二二三四）一日 千重敷布 我恋 妹当 為暮零礼見 ヒトヒニハチヘニシキシ  
キワガコフルイモガアタリニシグレフレミム ひとひにはちへしくしくにあがこふるいもがあたりにしぐれふる  
みゆ／人麿集Ⅲ・一八七

【参考】作者名はないが、万葉集では柿本朝臣人麻呂歌集の歌とされる。四九一番歌は、万葉集の二二三九（旧二二三五）番歌、当該歌は万葉集の二二三八（旧二二三四）番歌を原歌としており、古今六帖によくみられる、逆順の採歌方法をとる。

四九三 このしぐれいたくなふりそわざもこがつとにみせんともみちをりてん

【異同】ナシ

【現代語訳】この時雨よ、ひどくは降ってくれるな。愛しい妻への土産としてみせるため紅葉を折ろうと思うのだ。

【語句】○な……そ おだやかな禁止。……してくるな。○つと 「包んだもの」が原義で、土地の産物。旅先から携えてゆく家へのみやげもの。三九五番歌参照。○をりてん 「てん」は確述の助動詞「つ」の未然形＋

意志の助動詞「ん」で、強い意志を表す。

【所載】万葉集・四二四六（旧四二二二） 許能之具礼 伊多久奈布里曾 和芸毛故尔 美勢牟我多米尔 母美知等里氏牟 コノシグレイタクナフリソワギモコニミセムガタメニモミチトリテム このしぐれいたくなふりそわざもここにみせむがためにもみちとりてむ／家持集Ⅰ・二六七／家持集Ⅱ・二七三

【参考】作者名はないが、万葉集では久米朝臣広縄の作とされる。

四九五 しぐれの雨まなくしふれば神なびのもりのこのはもいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨が絶え間なく降るので、神なびの森の木も色づいたことだ。

【語句】○まなく 間無く。休みなく、絶え間なく。○神なびのもり 「神南備」は神の鎮座する神聖な森や山を表す普通名詞だが、大和国の歌枕ともされ、奈良県生駒郡斑鳩町の竜田周辺の森や山（三室山）を指す場合もある。「神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびの森」（古今集・二五三）のごとく、紅葉を色づかせる時雨が景物として詠まれる。

【所載】ナシ

【参考】類歌に、「時雨の雨間なくし降れば御笠山木末あまねく色づきにけり」（万葉集・一五五七（旧一五五三）、「時雨の雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色づきにけり」（万葉集・二二〇〇（旧二二九六）がある。

### 人まろ

四九五 さをしかのこゝろあひおもふ秋はぎのしぐれのふるにちるはをしくも

【異同】ナシ

【現代語訳】雄鹿が心を通わせている秋萩が、時雨が降って散りゆくのが惜しいよ。

【語句】○さをしか 「さ」は接頭語。雄鹿。○こゝろあひおもふ 「あひ」は意味が軽い接頭語。心を通わせている。「萩」は「鹿」の妻とされ、「秋萩の散りゆく見ればおほしき妻恋すらしさを鹿鳴くも」（万葉集・二一五四（旧二一五〇）、「秋萩の咲きたる野辺はさを鹿ぞ露をわけつつ妻問ひしける」（万葉集・二一五七（旧二

一五三) など、万葉集に多くの例がある(吉永登「秋萩の恋」『万葉集研究 第三集』塙書房、一九七四年)。  
【所載】万葉集・二〇九八(旧二〇九四) 竿志鹿之 心相念 秋芽子之 鍾礼零丹 落僧惜毛 サヲシカノココロアヒオモフアキハギノシグレノフルニチリソフヲシモ さをしかのこころあひおもふあきはぎのしぐれのふるにちらくしをしも／夫木抄・四五九〇／人麿集Ⅲ・一七〇

【参考】作者名「人まろ」とあるが、万葉集では柿本朝臣人麻呂歌集の歌とされる。

〔以上五首担当 中野〕

四九六 たれかれとわれをなとひそなが月のしぐれにぬれて君まつ人を

【異同】ナシ

【現代語訳】たれだあれば、とわたしのことを詮索しないでください。長月のしぐれにぬれながらあの人を待っているこの者を。

【語句】○たれかれとわれをなとひそ たれだあの者は、とわたしのことをうるさく詮索するな。「なとひそ」は、訝しんで問い糺すな、の意。「たれかれと問はばこたへんすべをなみ君が使ひをかへしつるかな」(古今六帖・一一〇〇)。○なが月 陰暦九月の称。○しぐれ 秋の末から冬のはじめのころ、降ったりやんだりする雨。能因歌枕に「十月の雨をばしぐれといふ」とあるように、平安時代には神無月のものでして次第に固定していたが、万葉集では長月にも神無月にも詠まれている。○君まつ人を あの人を待っている者を。「君」は待つ相手のこと。「人」は作者自身。自分を客体化した形で三人称的に言った。

【所載】玉葉集・恋二・一四一六／万葉集・二二四四(旧二二四〇) 誰彼 我莫問 九月 露沾乍 君待吾 タゾカレトワレヲナトヒソナガツキノツユニヌレツツキミマツワレヲ たぞかれとわれをなとひそながつきのつゆにぬれつつきみまつわれを／人麿集Ⅰ・一四五／人麿集Ⅲ・五四七

四九七 おほぞらはくもらざりけりかみな月しぐれごちはわれのみぞする

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】大空は曇りもしないなあ。この神無月の、いまにもしぐれそうな涙心地は、わたしだけがすること

だ。

【語句】○かみな月 陰曆十月の称。○しぐれごち いまにもしぐれてきそうな空模様のこと。それを人事に転用して、ともすれば涙ぐみそうになる気持の形容とした。「けふはなほ隙こそなければ曇るしぐれごちはいつもせしかど」(和泉式部続集・六〇八)。

【所載】拾遺集・恋一・六五一／貫之集I・五九五

【参考】作者名「つらゆき」は、貫之集Iとは一致するが、拾遺集は「よみ人知らず」とする。五〇一番歌参照。

四九八 ふるときはなを雨なれどかみな月しぐれにやまのいろはそめけり

【異同】ふるときは——古郷は(大)

【現代語訳】降るときはやはり普通の雨なのだけれども、神無月のしぐれによって、山の色はくれないに染められたことだなあ。

【語句】○なを雨なれど 「なを」は「なほ」。別に特殊なものではなくて、やはり普通の雨なのだが。「雨なれどしぐれといへばくれなぬに木の葉もしみて散らぬ日はなし」(貫之集I・三八四／古今六帖・五〇一)。○しぐれに 山の木々を染めるとされるしぐれによって。「長月のしぐれの雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり」(万葉集・二一八四(旧二一八〇))のように、万葉集以来、しぐれは山の木々を染めるものとして詠まれている。○いろはそめけり 「いろは」に対して「そめけり」の他動詞形は整合しないが、六帖ではこの部分に異同なく、諸本みなこの形。所載欄の貫之集Iでは「しぐれぞ山の色は染めける」とあり、その方が無理がない。

【所載】貫之集I・三八五

【参考】作者については、五〇一番歌参照。

四九九 わび人はときにしらねぬあきなれやわが身ひとつにしぐれのみふる

【異同】ナシ

【現代語訳】世をつらいものと思う人にとっては、時節にかかわりなくいつもが秋なのだろうか。わが身ひとりにだけ、しぐればかりが降ることよ。

【語句】○わび人 この世をつらくてやりきれないと感じている人。失意の人。ここでは作者自身。○ときにし

られぬあきなれや 時節の変化というものによつて知られることのない秋なのだろうか。四季にかかわりなく常に秋という季節なのだろうか。「なれや」は、……なのだろうか、という推定・疑問の言い方。下に推定の根拠を伴なう。○わが身ひとつにしぐれのみふる 自分ひとりにだけしぐればかりが降ることよ。「しぐれのみふる」は、不如意の悲しい状態ばかりがつづいて、ということ。「あきなれや」の縁で「しぐれ」と言った。

【所載】ナシ

【参考】作者については、五〇一番歌参照。貫之集Ⅰの六二二番に「わび人はとしに知られぬ秋なれば我袖にしも時雨ふるらん」という類似した歌がある。

五〇〇 くれなゐのしぐれふればやいそのかみふるたびごとにのべをそむらん

【異同】ナシ

【現代語訳】くれないのしぐれが降るから、降るたびごとに、このように野辺を染めるのであろうか。

【語句】○くれなゐのしぐれ しぐれが山野を染めるという発想（四九八番参照）をさらに進めて、しぐれそのものを「くれなゐ」と見た屏風歌らしいことば。○いそのかみ 奈良県天理市あたりの古い地名。同所の小地名「布留」にかかる枕詞として用いられるが、ここでは、音の共通する「降る」にかかる枕詞として転用した。

【所載】貫之集Ⅰ・三一八

【参考】作者については、五〇一番歌参照。貫之集Ⅰでは、「延喜のすゑよりこなた延長七年よりあなた、うち／＼の仰せにてたてまつれる御屏風の歌廿七首」の中の冬歌のうちにある一首。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

五〇一 あめなれどしぐれといへばくれなゐにこのはのみしてちらぬ日ぞなき

五首つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】（同じ）雨ではあるけれど、時雨というと、木の葉ばかりが紅の色となつて、しきりに散らない日はないよ。

【語句】○あめなれど 雨ではあるけれど。同じ雨でも。「ふる時はなほ雨なれど神無月時雨ぞ山の色は染めけ

る」(貫之集・三九三)。○こののはのみして 木の葉ばかりで。所載欄の貫之集Ⅰには「木のはのしみて」とあり、この本文の方が、「(紅に) 木の葉が染まつて」という穏当な詠となる。

【所載】貫之集Ⅰ・三八四

【参考】「五首つらゆき」とある通り、四九七番歌から五〇一番歌まですべて貫之集に見える。四九八番歌と五〇一番歌はともに天慶二年(九三九年)の屏風歌で、「九月」の題の歌。なお、時雨は、木や草を紅葉させるものとされ、かつ、紅葉を散らすものともされていた。当該歌もこうした通念を踏まえる。

五〇二 人こふるこゝろはあきにかよへばやそらもたもともにしぐるゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】人を恋しく思う心は秋に通じているから、空も私の袂も共に時雨れるのだろうか。

【語句】○そらもたもともにしぐるゝ 秋の空も時雨が降り、自分の袂も涙で濡れていることを「ともにしぐるゝ」と表した。「降らぬより袖はぬれつつしぐるるをけふしも空のしぐるべしやは」(大斎院前の御集・二四〇)、「別るれば心もそらにかよへばや袖にしぐれのひまなかるらむ」(同・二四一)。

【所載】玉葉集・恋四・一六六七／万代集・二三六一／貫之集Ⅰ・五八六

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると作者は貫之。

五〇三 しらつゆにそめはじめたる秋山にしぐれなふりそありわたるがね

【異同】ナシ

【現代語訳】白露で染め始めた秋の山に、時雨よ、降らないでくれ。(紅葉が)ずっとそのままであるように。

【語句】○しらつゆにそめはじめたる 白露で染め始めた。白露によって紅葉し始めたということ。○ありわたるがね そのままの状態でありつづけるように。「がね」は、……するよう。

【所載】万葉集・二一八三(旧二一七九) 朝露尔 染始 秋山尔 鍾礼莫零 在渡金 アサツユニソメハジメタルアキヤマニシグレナフリソアリワタルガネ あさつゆににほひそめたるあきやまにしぐれなふりそありわたるがね／人麿集Ⅲ・一六〇

【参考】作者名はないが、万葉集に「右二首柿本朝臣人麿之歌集出」と見える。

五〇四 かみなづきのこりのきくのをしけくにしぐれのあめはふらずともよし

【異同】ナシ

【現代語訳】神無月には、咲き残っている菊が惜しいから、時雨の雨は降らなくてもよい。

【語句】○かみなづき 神無月。陰暦十月。題で二〇番既出。○のこりのきく 盛りの時期である秋（特に九月九日）を過ぎても咲き残っている菊。色が変わった様が賞美された。「秋すぎて残れる菊はかみな月雲をわけてぞにほふべらなる」（醍醐御時菊合・一・醍醐天皇）。○をしけく 「惜し」のク語法。惜しいこと、の意。

【所載】ナシ

【参考】時雨が、菊とともに詠まれる際には、「秋さける菊にはあれや神無月時雨ぞ花の色はそめける」（貫之集・五〇四・のこれるきく）などのように、残菊の花の色を染め、その濃さを優らせるものとして詠まれる。当該歌では、それを認めながらもなお枯れていくことを惜しんでいる。

五〇五 はつしぐれふればやまべぞおもほゆるいづれのかたかまづもみづらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】初時雨が降ると山辺が思われるよ。今頃は、山のどちらの方が最初に紅葉していることだろうか。

【語句】○はつしぐれ その年はじめて降るしぐれ。○もみづ 紅葉する、の意の動詞。上代には「もみつ」と清音で四段に活用し、平安時代に入ると「もみづ」と濁音化して上二段に活用した。

【所載】後撰集・秋下・三七五／後撰集・冬・四四三／友則集・二八

【参考】当該歌は友則集に見えるが、古今六帖に作者名の記載はなく、後撰集も「よみ人知らず」とする。「たつた河もみちば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・二八三・よみ人知らず）のように、時雨が山の木々を紅葉させるという通念を前提とする歌。

〔以上五首担当 長戸〕

五〇六 はつしぐれふるほどもなくさほ山のみちあまねくいろづきにけり



【異同】ナシ

【現代語訳】初時雨が降ってほんのわずかの間に、佐保山の紅葉は一面みな色づいたことだよ。

【語句】○もみちあまねく 末句に「色づきにけり」とあるので「もみち」とあつては意味が重なってしまう。所載欄の後撰集では「梢あまねく」とあり、この方がわかりやすい。「あまねく」は、ひとつ残らず。すべて。「このゆふべあきかぜふきぬしらつゆにあまねくはなはあすもさきなん」(家持集・一二二)。

【所載】後撰集・冬・四四四／是則集・一〇

【参考】万葉集・一五五七(旧一五五三)に「しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり」という、下句の類似する歌がある。

五〇七 神無月しぐるゝときぞあしひきの山のみゆきはふりはじめける

【異同】ナシ

【現代語訳】十月になって時雨が降るときにまさしく、山の雪は降り始めたことだよ。

【語句】○みゆき 「み」は接頭語。雪の美称。「ふるさとはよしの山しかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし」(古今集・冬・三二二)。

【所載】後撰集・冬・四六五／和歌童蒙抄・六二

五〇八 なみださへしぐれにそひてふるさとはもみちの色もこさまさりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】涙までもが時雨に加わって降る、この思い出の地では、その涙で紅葉もよりいっそう色濃くなったことです。

【語句】○しぐれにそひて 時雨は木々を紅葉させるもの。それに涙が加わるのでよりいっそう色濃くなるという趣向。○ふるさと かつてのなじみの地。「ふる」に涙や時雨の「降る」を掛ける。所載欄の後撰集や伊勢集の詞書によると、通わなくなった男から見ての「ふるさと」(以前は通っていた場所)なので、詠者は今でもこの地にいる。

【所載】後撰集・冬・四五九／伊勢集Ⅰ・二／伊勢集Ⅱ・二／伊勢集Ⅲ・二

【参考】伊勢集では冒頭の贈答。男（藤原仲平）がかつて通っていた女（伊勢）の家に贈った「人住まず荒れたる宿を来てみれば今ぞ木の葉は錦織りける」（伊勢集・一、後撰集・冬・四五八にも）への返歌。また、初句を「神無月」として歌仙家集本索性集にも伝わる。

### ゆふだち

五〇九 ゆふだちてなつはいぬめりそほちつゝあきのさかひにいつかいらん

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立が降って夏は過ぎ去っていくようだ。この雨にぬれながら秋の境にいつ入るのだろうか。

【語句】◎ゆふだち 夏の午後、にわかには雲が立ち短時間に激しく降る雨。○そほちつゝ ぬれながら。「夏」を擬人化したもの。類歌「ふる雪を空にぬさとぞ手向けける春のさかひに年のこゆれば」（貫之集・八九）では「年」を擬人化する。

【所載】古今六帖「夏のはて」一二一番に既出。

【参考】所載欄の「夏のはて」では、初句を「ゆふだちに」、五句を「いまやいたらん」とする。

五一〇 ゆふだちのあめうちふればかすがのゝおばながうへのしらつゆはおもほゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕立の雨がさつと降ると、春日野の尾花の上の白露が思い出されるよ。

【語句】○うちふれば 「うち」は接頭語。さつと、ちよつと。○しらつゆはおもほゆ 所載欄の万葉集では「しらつゆおもほゆ」とあり、その方が自然と思われる。尾花（ススキ）の葉にかかる露が雨上がりの夕日を受けて輝く景色。

【所載】万葉集・二一七三（旧二一六九） 暮立之 雨落毎（一云、打零者） 春日野之 尾花之上乃 白露所念 ユフダチノアメフルゴトニ（一云、ウチフレバ）カスガノノヲバナガウヘノシラツユオモホユ ゆふだちのあめふるごとに（一云、うちふれば）かすがののをばながうへのしらつゆおもほゆ／万葉集・三八四一（旧三八一九） 暮立之 雨打零者 春日野之 草花之末乃 白露於母保遊 ユフダチノアメウチフレバカスガノノヲバナガスエノシラツユオモホユ ゆふだちのあめうちふればかすがののをばながうれのしらつゆおもほゆ／夫木抄・

九六八〇／人麿集Ⅱ・五八

【参考】万葉集・三八四一（旧三八一九）では、小鯛王が家でくつろいで琴を手にするとまっ先にこの歌を口ずさんだと伝える。

〔以上五首担当 青木〕

五一 夏の日のにはかにくもるゆふだちのおもひもかけぬよにもあるかな

【異同】ゆふたちの―夕たちに（大）

【現代語訳】夏の日の、にわかには曇って降り出す夕立が思いもかけないように、思いもかけないことが起こる世の中だなあ。

【語句】〇おもひもかけぬ 上三句は序詞。「ゆふだち」が思いもかけないのと、「よ（世）」が思いもかけないのと、両意を持つ。

【所載】ナシ

五一 ころやいづこあなおぼつかなしらくものやへたつ山をこえてきにけり  
くも

【異同】ナシ

【現代語訳】ここはどこなのか。なんとも心もとないことだ。白雲の幾重にも立つ山々を越えて、はるばるとやってくるってしまったことだ。

【語句】◎くも 遠く、空に浮かんでいるところから、遙かなもの、たゆとうもの、ただよい不安定なもの、また、日や月を遮るところから、隔てるもの、遮るもの、などとして詠まれることが多い。時には満開の桜花や火葬の煙などにも見立てられた。〇あなおぼつかな 「おぼつかな」は、はつきりしない、ぼうつとしている、気がかりだ、など、茫漠とした不安感を表す形容詞「おぼつかなし」の語幹。なお「あな＋形容詞の語幹」は詠嘆の表現となる。〇やへたつ 「やへ」は「八重」で、幾重にも立つ。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖「とほみちへだてたる」二七八九番に、「こにしていづもやいづこしら雲のたなびく山をこえてきにけり」という類歌がある。

五二三 わがせこがふりさけみつゝなげくらんきよき月よにくもたなびきて

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のはるかに仰ぎ見つつ私を偲んで嘆いていることでしょう。この澄んだ月夜に雲がたなびいていて。

【語句】既出、三四五番歌参照。

【所載】古今六帖「ざふのつき」三四五／万葉集・二六七七（旧二六六九）吾背子之 振放見乍 将嘆 清月夜  
尔 雲莫田名引 ワガセコガフリサケミツツナゲクラムキヨキツキヨニクモナタナビキ わがせこがふりさけみつゝなげくらんきよきつよくにくもたなびき／綺語抄・三三四

【参考】三四五番歌では第三句が「なげくとも」、第五句が「雲なたなびき」となっている。所載欄の万葉集には「なげくらむ：くもなたなびき」とあり、雲よたなびいたりするな、の意となつて、この形が最もわかりやすい。

五一四 やくもたついづもやへがきつまごめにやへがきつくるそのやへがきに すさのをのみこと をイ

【異同】ナシ

【現代語訳】出雲の地に、幾重もの垣を造ることだ。妻を籠もらせるために、幾重もの垣を造ることだ。幾重もの垣根を。

【語句】○やくもたつ 多くの雲が立ち出する意で、「出雲」の枕詞。○いづも 今の島根県東部。○やへがき 幾重にもめぐらした垣根。○つまごめに 妻を籠め据えるために。○そのやへがきに 底本の「やへがきに」では意がとりにくい。傍記異文によつた。

【所載】古今集・仮名序／古事記・一／日本書紀・一／俊頼髓脳・一／和歌童蒙抄・八四九／奥儀抄・一八／古来風体抄・一／和歌色葉・一四／和歌無底抄・三五、三七／平家物語（覚一本）・九五／平家物語（延慶本）・二

一九／太平記・八九

【参考】所載欄の文献はすべて作者を素戔鳴尊とし、古今集以下ではこの歌を三十一文字の歌のはじめとする。

五一五 かぜふけばみねにわかるゝしらくものたえてつれなき人のこゝろか  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】風が吹くと、峰から離れて別れ行く雲がまったく素知らぬ顔をしているように、ひどく冷淡なあなたの心ですね。

【語句】○みねにわかるゝ 雲が峰に別れる。峰から雲が離れて行く。峰によつて雲が二つに分かれる意ではない。「あかでも人にわかれぬるかな」（古今集・四〇四）と同じ用法。○たえてつれなき 上三句を序として受け、「人のこゝろ」にかかる。「たえて」は、まったく、ひどく、の意の副詞。

【所載】古今集・恋二・六〇一／忠岑集Ⅰ・一六／忠岑集Ⅱ・三六／忠岑集Ⅲ・五七／忠岑集Ⅳ・五〇／貫之集Ⅰ・五四六／詠歌一体・六二

【参考】作者は「たゞみね」とし、忠岑集の各伝本にも見え、古今集にも「忠岑」として載るが、一部の貫之集伝本にも収められていて、問題は残る。なお貫之集以外は第五句を「君が心か」とする。

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

五一六 白雲のやへかさならんをちにてもおもはん人にこゝろへだつな  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲が八重に重なるような遠くにいても、あなたに思う人がいたとしたら、心を隔てないでください。

【語句】○白雲のやへかさならんをち 手の届かないところにある白雲が、八重に重なることによつて、遙か彼方を表す。「をち」は遠方の意。所載欄の古今集の詞書によれば陸奥国をさす。所載欄の古今集・貫之集Ⅱでは第二句「やへにかさなる」、貫之集Ⅰでは「八重かさなれる」。○おもはん人 自分をさす。「ん（む）」は仮定の

助動詞の連体形。婉曲を表す。○こゝろへだつな（雲によって体は隔てられても）心は隔てないでください。「へだつ」は「雲」の縁語。「わかれちをへだつる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ」（拾遺集・三二一）。  
【所載】古今集・離別・三八〇／貫之集Ⅰ・七〇二／貫之集Ⅱ・三九  
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。古今集の詞書によれば、陸奥国へまかりける人に詠んだ歌。

五一七 おほきみはちとせもまさんしらくものみふねのやまにたゆるひあらめや

【異同】ナシ

【現代語訳】大君は千年も生きていらつしやるでしょう。白雲が三船の山に絶える日があるでしょうか、ありません。（白雲がいつも三船の山にかかっているように、大君の命もいつまでも長く続くことでしょう。）

【語句】○おほきみ 親王の尊称。所載欄の万葉集によると弓削皇子をさす。○まさん 「ます」は「有り」「居り」の尊敬語。○みふねのやま 三船山。舟岡山ともいう。吉野離宮があった吉野町宮滝と吉野川をはさんで東南にある山。懷風藻の吉田宜「從駕吉野宮」にも「雲卷三舟谷」とある。○あらめや あるでしょうか、いやない。「めや」は反語。

【所載】万葉集・二四四（旧二四三）王者 千歳二麻佐武 白雲毛 三船乃山尔 絶日安良米也 オホキミハチトセニマサムシラクモモミフネノヤマニタユルヒアラメヤ おほきみはちとせにまさむしらくもみふねのやまにたゆるひあらめや

【参考】所載欄の万葉集では、弓削皇子が吉野離宮で詠んだ五一八番歌に和え奉って春日王が詠んだ歌。

五一八 たきのうへのみふねの山にゐる雲のつねなるべくもあらぬわが身を  
人まろ 或本

【異同】ナシ

【現代語訳】（吉野川の）激流の上方にそびえる三船の山にいつもかかっている雲のように、いつまでもこの世にあらうはずのないわたしですや。

【語句】○たきのうへの 「滝」は水が激しく流れるところ。激流。所載欄の万葉集詞書によると、吉野町宮滝

付近。家持集では「みかのゝの」。○みふねの山 五一七番歌参照。所載欄の家持集Ⅰでは「みふねのうらに」。  
○ある雲の 「ある」は雲が動かずに同じ場所にじっとしていること。上三句は「つねなるべくもあらぬ」の序  
詞。○つねなるべくもあらぬわが身を いつまでも生きるはずもないわたしだよ。所載欄の万葉集、家持集Ⅱで  
は「つねにあらむとわがおもはななくに」、家持集Ⅰでは「つねならむともわがおもはななくに」。「を」は文末に用  
いられたときに詠嘆を示す。

【所載】万葉集・二四三（旧二四二）瀧上之 三船乃山尔 居雲乃 常将有等 和我不念尔 タキノウヘノミ  
フネノヤマニシルクモノツネニアラムトワガオモハナクニ たきのうへのみふねのやまにあくるものつねにあら  
むとわがおもはななくに／夫木抄・八八七三／家持集Ⅰ・二五六／家持集Ⅱ・一七〇

【参考】古今六帖「山」八四一に下句「つねならぬよをたれたかのまむ」の類歌がある（作者人まろ）。所載欄  
の万葉集・夫木抄では作者は弓削皇子。また、万葉集二四五（旧二四四）番には或本歌一首として「三吉野之  
御船乃山尔 立雲之 常将在跡 我思莫苦ニ ミヨシノノミフネノヤマニタツクモノツネニアラムトワガオモハ  
ナクニ みよしののみふねのやまにたつくものつねにあらむとわがおもはななくに」がある。「柿本朝臣人麿之歌  
集出」と左注がつき、人麿集Ⅲ六七八番にもみえる。

#### 人丸

五一九 ことにのみあふとはいひてくらはしのみねのしら雲たつたひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】くらはしの峰の白雲があちこちと揺れ動くように、ことばだけでは「お会いします」というものの、  
（心は）ためらっているのだな。「第五句は人麿集により「たゆたひにけり」として解した。」

【語句】○ことにのみ ことばだけでは。「こと」は話したり語ったりすること。所載欄の人麿集Ⅲ・三一〇番  
歌では「こゑにだに」。○あふとはいひて 「お会いします」というものの。所載欄の人麿集Ⅲ・六七七番歌で  
は「あひぬといひし」と過去形。人麿集Ⅲ・三一〇番歌では「あひぬといはで」、人麿集Ⅳでは「あひ見ぬとお  
もへ」。○くらはし 奈良県桜井市の東南端にある音羽山のこと。○たつたひ 意味不明。所載欄の人麿集では  
「たゆたひ」。人麿集により「たゆたひ」で解釈する。「たゆたふ」は位置が固定せず不安定に揺れ動くこと。「心  
が動揺して決断しかねる」意をかける。「あさかやまあさある雲の風をいたみたゆたふこころわれはもたらじ」（夫  
木抄・八六八二）。

【所載】人麿集Ⅲ・三一〇、六七七／人麿集Ⅳ・一〇二  
【参考】作者名「人丸」は、人麿集そのものに問題はああるものの、一応人麿集にも見える。

五二〇 あづさゆみいまはゝるやまゆく雲のゆきやわかれんこひしき物を  
おなじ人

【異同】ナシ

【現代語訳】梓弓を今張る、そのハルならぬ春山を今行く雲のように、わたしはあなたと別れて行くのでしょうか、恋しくてならないのに。

【語句】○あづさゆみ 梓の木で作った弓。梓弓の弦をひく、または張るところから、「い・いる・ひく・はる」にかかる枕詞。所載欄の他文献では「しらまゆみ」。○いまはゝるやま 春山の「春」に「張る」をかける。所載欄の赤人集ⅠⅡでは「いまはるのゝに」、赤人集Ⅲでは「いまはるのべに」。人麿集では「いそはの山に」。○ゆきやわかれん 「行きわかる」は行って別れ別れになる意。上三句は同音によって「ゆき」を導く序詞。所載欄の人麿集では「たちやわかれむ」。

【所載】万葉集・一九二七（旧一九二三） 白檀弓 今春山尔 去雲之 逝哉将別 恋敷物乎 シラマユミイマハルヤ マニユクモノユキヤワカレムコヒシキモノヲ しらまゆみいまはるやまにゆくくものゆきやわかれむこほしきものを／人麿集Ⅳ・二九一／赤人集Ⅰ・二〇三／赤人集Ⅱ・八四／赤人集Ⅲ・九四

【参考】作者名に「おなじ人」とあるが、万葉集では作者名がなく、人麿集Ⅳと赤人集ⅠⅢに見える。

〔以上五首担当 三浦〕

五二一 ゆふさればくものはたてにものぞおもふあまつそらなる人をこふとて

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると雲の果てを見てもの思いにふけるのです。天上はるかに手のとどかないあの人を、恋しく思っているのだ。

【語句】○ゆふされば 夕方になると。○くものはたて 雲の果て。一説に「夕焼け雲が旗のようにたなびいたものを「雲の旗手」（豊旗雲とも）」といい、物思いの乱れにたとえた」（新編日本古典文学全集『古今和歌集』）。



○あまつそら 天上。雲居。「あまつそらなる人」で天上にいるような手の届かぬ高貴な人。

【所載】古今集・恋一・四八四／新撰和歌・二二六／俊頼髓腦・二二〇／綺語抄・六三一／奥儀抄・四九五／袖中抄・二八／和歌色葉・二四八／詠歌大概・八四

五二二 はる山にたちゐるくもに身<sup>とイ</sup>をなしてそらなる人にあふよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】春山に浮かんでいる雲に我が身を変えて、心が浮ついているあの人に逢う方法があればよいのになあ。

【語句】○たちゐるくも 浮かんでいる雲。○そらなる人 心が浮ついている人。実のない人。「そら」は「くも」の縁語。○あふよしもがな 逢う方法があればよいのになあ。「よし」は手段、方法。

【所載】ナシ

五二三 おもはずにあひもやするとあま雲のゆきてはそらにかへりきぬるを

【異同】ナシ

【現代語訳】思いがけず逢うかもしれないと、雨雲が空を行き来するように、行つてはむなく帰つて来るのだなあ。

【語句】○おもはずに 思いがけず。○あひもやすると 逢うかもしれないと。「ひとめみし君もやくると桜花けふはまちみてちらばちりなん」(古今集・七八)。○あま雲の 「ゆきてはそらに」を導き出す語。○そらに むなく。うわのそらで。「そら」は「あま雲」の縁語。○かへりきぬるを 帰つて来るのだなあ。「を」は詠嘆を表す間投助詞。

【所載】夫木抄・七八四二

五二四 かすが山あさゐるくものしら／＼にわがこひまさる月に日ごとに

【異同】ナシ

【現代語訳】春日山に朝たなびいている雲がどんどん明るくなるように、わが恋心が募ります。月ごと日ごとに。  
【語句】○かすが山 奈良市春日の地の東方に聳える山。高円山と若草山の間にあり、三笠山ともいう。○しら／＼に (東の空が) 見る見る白くなるように。所載欄の万葉集は「しくしくに」。後から後から絶えないでの意。  
○月に日ごとに 月日を重ねるに従って。

【所載】万葉集・七〇一(旧六九八)春日野尔 朝居雲之 敷布二 吾者恋益 月二日二異二 カスガノニアサ  
牟ルクモノシクシクニワレハコヒマスツキニヒニケニ かすがのにあさぬくものしくしくにあればこひますつ  
きにひにけに／夫木抄・九六八五／綺語抄・四三

### ちふる

五二五 あしたづのひとりをくれてなくこゑはくものうへまできこえつがなん

【異同】ナシ

【現代語訳】芦辺に一羽だけ取り残された鶴の鳴く声が、雲の上まで聞こえるように、私の声も宮中まで届いてほしいものです。

【語句】○あしたづ 葦の生えている水辺の鶴。○をくれて おくれて。後に取り残されて。他人に劣って。  
○なくこゑ 所載欄の古今集詞書に「寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける」とあり、一人だけ官位昇進の遅れた作者の嘆き。○くものうへ 天空と宮中の意を掛ける。鶴の鳴く声が天に届くというのは「鶴鳴于九臯 声聞于天」(詩経)による。○きこえつがなん 伝えるように届いてほしい。

【所載】古今集・雑下・九九八／赤人集Ⅰ・一一〇／千里集・一二一／後六々撰・一〇二／奥儀抄・五七四  
【参考】作者名「ちふる」とあるが、古今集・後六々撰では「大江千里」である。

〔以上五首担当 橋本・林〕

五二六 こゝろなきものとやいひしらくものかくせばをしき月にやはあらぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲は思いやりのないものだと言ったのだろうか。雲が隠すからこそ、よけいに惜しまれる月なのではないか。

【語句】○こゝろなきもの 雲は、「三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなむ隠さふべしや」(万葉集・一八)で知られるように、情のないものだという考え方が定着している。○月 「おほぞらをてりゆく月しきよければ雲かくせどもひかりけなくに」(古今集・八八五)など、月と雲とは、ある人とそれを妨げる者の喩として用いられる。○にやはあらぬ ……ではないことがあるだろうか、反語を用いた表現。

【所載】ナシ

【参考】もうひとつの現代語訳を以下に挙げる。月は常に惜しまれる存在であるので、「雲が心ないものだというだろうか。白雲が隠すから惜しい月なのではないですよ」とする。

五二七 あしひきの山べにをへばしらくものいかにせよとかはるゝときなき

【異同】ナシ

【現代語訳】山辺に籠もっていると、白雲はこれ以上どうせよといって、晴れるときもないのか。

【語句】○あしひきの 山にかかる枕詞。○いかにせよとか 口語的な表現。どうせよというのか。○はるゝときなき 白雲の山にかかっている様子を、思いの鬱屈しているさまに例えた。

【所載】古今集・物名・四六一／拾遺抄・雑上・四七九／拾遺集・物名・三八〇

五二八 おもひやるこゝろばかりはさはらじをなにへだつらんみねのしら雲  
たちばなのなをもと

【異同】ナシ

【現代語訳】思いやる心は障害になどならないものを、どうしてへだてるのか、峰の白雲は。

【語句】○さはらじ 「さはる」は障害になる。○なにへだつらん どうして隔てるのだろうか。

【所載】後撰集・離別・一三〇六／和漢朗詠集・六三八／金玉集・五八／深窓秘抄・八八

【参考】作者名「たちばなのなをもと」(橘直幹)は所載欄の文献に一致する。

五二九 雨ふればきたにたなびくしら雲を君によそへてながめつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】雨がふると北にたなびいている白い雲を、あなたによそえて眺めていることです。

【語句】○きたにたなびくしら雲 所載欄の貫之集詞書に「こしのかたなる人にやる」とある。言うまでもなく、都から見て越の国は北側。新潮日本古典集成『貫之集』の頭注には同想の歌として「雨やまぬ山の雨雲立ちあつてやすけくもなき君をしぞ思ふ」（貫之集Ⅰ・五九四）を挙げる。○よそへて 「よそふ」は、たとえること。なぞらえること。「ながからじと思ふ心は水のあわによそふる人のたのまれぬかな」（拾遺集・六三七）。

【所載】夫木抄・七八七六／貫之集Ⅰ・七八〇

五三〇 さよふけていづらん月をたかやまのみによそへてながめつるかな  
のしらくもかくしてしかなイ つるかなイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夜ふけて出ているであろう月を、高い山の峰を口実にして眺めたことだよ。

【語句】○たかやま 八雲御抄では常陸国にこの地名があるが、特にどの山と特定する必要はないか。○みによそへて 「によそへて」以下、前歌の目移りであつて、本来は傍記の「みねのしらくもかくしてしかな」が古今六帖の本文であつたと推定される。そうでないと「くも」題にそぐわない。

【所載】ナシ

【参考】本来の歌本文（下句「みねのしらくもかくしてしがな」）ならば、万葉集・二三三六（旧二三三二）に「左夜深者 出来牟月乎 高山之 峰白雲 将隠鴨 サヨフケバイデコムツキヲタカヤマノミネノシラクモカク シテムカモ さよふけばいでこむつきをたかやまのみねのしらくも かくすらむかも」とあり、人麿集Ⅲ・六七一にも見える。

〔以上五首担当 杉本〕

五三一 をのが身にくもたちのぼりしぐれふりぬれとをとるもわがゝへらめや

【異同】わかゝへらめや―われ帰らめや（大）

【現代語訳】男体山に雲がたちのぼり時雨が降って全身ずぶ濡れになっても、帰るだろうか、いや私は帰りはし

ない。

【語句】○をのが身に 本来「男神に」。漢字「男神」を「をのかみ」と読んだものの、表記が変じた。筑波山は高低二つの峰から成る霊峰で、男神と女神の二神と考えられた。「をの神もゆるしたまひ、女の神も、ちはひたまひて」（万葉集・一七五三）という例は「男神毛 許賜 女神毛 千羽費給而」を訓じたもの。男体山。○しぐれふり 時雨降り。時雨は、晩秋から初冬にかけて降ったり止んだりする雨。○ぬれとをる 濡れ通る。雨や水などがしみとおる。「九月の時雨の雨に沾れ通り春日の山は色づきにけり」（万葉集・二二八〇）。雨が衣にしみ通り濡らす。○わがゝへらめや わたしの帰ることがあるうか、決してない、の意味、「われかへらめや」のかたちが多い。

【所載】万葉集・一七六四（旧一七六〇）男神尔 雲立登 斯具礼等 沾通友 吾将反哉 ヲノカミニクモタチノボリシグレフリヌレトホルトモワレカヘラメヤ ひこかみにくもたちのぼりしぐれふりぬれとほとともわれかへらめや／歌枕名寄・五六七三

【参考】筑波山の歌垣を詠んだ長歌の反歌として万葉集には在る。

五三二 うらぶりてもものなおもひそあまぐものたゆたふ心わがおもはなくて

【異同】ナシ

【現代語訳】うれえしおれて物思いなさるな。私の心はゆらいでおりませんから。

【語句】○うらぶりて しおれて。思いわびて。「うらぶれて」の例はあるが、「うらぶりて」はこの歌の他は「人知れずちがへしそでのうらぶりてうへは涙のかかるめぞみぬ」（輔尹集・二三）のみ。○たゆたふ ゆらぐ。動揺して一所に固定しない。浮動する。「春日山あさめるくもの風をいたみたゆたふころ我はしもただ」（奈良御集・一一）。○わがおもはなくて 私にはそのような思いは決してないのに、の意。「たきのうへのみふねのやまにゐるくものつねにあらむとわがおもはなくて」（万葉集・二四三）、「あさかやまかげさへみゆるやまのゐのあさきころをわがおもはなくて」（万葉集・三八二九）など用例は数多い。

【所載】風雅集・恋三・一二〇七／万葉集・二八二七（旧二八一六）浦触而 物莫念 天雲之 絶多不心 吾念莫国 ウラブレテモノナオモヒソアマクモノタユタフココロワガオモハナクニ うらぶれてものなおもひそあまぐものたゆたふころわがおもはなくて／和歌童蒙抄・四四／人麿集Ⅲ・四六九／人麿集Ⅳ・二六三

【参考】所載欄の万葉集では卷十一問答にある。男の歌に対する女の返歌は二八二八（旧二八一七）「うらぶれて

ものはおもはじめなせがはありてもみづはゆくといふものを」。古今六帖・二六九四番歌と第三句以下同じ。

五三三 さほ山にたなびく雲のたゆたひはおもふこゝろをいまぞさだむる  
にイ 人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山のたなびく雲が（一所に定めなく）ゆらいでいる、ゆらいでいる心を今こそ定め、決心します。

【語句】○たゆたひに 「たゆたふ」（五三三番歌参照）の連用形で、ここでは名詞として助詞が続く。「たゆたふ」は人目を気にして会うことを躊躇すること。傍記異文の「たゆたひに」のかたちが通例。「おほぶねのはつるとまりのたゆたひにものもひやせぬひとのこゆゑに」（万葉集・一二二、古今六帖・三〇〇三）。

【所載】人麿集Ⅱ・二〇六／人麿集Ⅲ・二二二／人麿集Ⅳ・一七

【参考】作者名「人まろ」は確証がない。人麿集に載る歌ではあるが、人麿集そのものに問題がある。

五三四 わぎもこにわれこふらくははるやまにたなびくものたゆるひもなし  
おなじ

【異同】○わぎもこに―わぎもこか（大）

【現代語訳】いとしいあの子を私がどんなに恋しく思っているか、思いの絶える日はない、春山に雲の絶える日はない。

【語句】○われこふらくは 私が恋しく思うことは。万葉集には「吾恋苦波」（わがこふらくは）の例が多い。「つばなぬくあさがはらのつぼすみれいまさかりなりわがこふらくは」（万葉集・一四五三〔旧一四四八〕）（ただし、『新編国歌大観』の新訓は「あがこふらくは」とする）。○たなびくもの 「たなびく雲」は「過ぐ」「遠（をち）にあるらし」など導く。ここでは「絶ゆる日もなし」を導く。

【所載】ナシ

【参考】作者名を前歌に「おなじ（人まろ）」とするが、その根拠は不明。人麿集Ⅳ・五五に類似歌がある。

五三五 しらくものたなびきかゝるみ山にはてる月かけをよそにこそ見れ  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲のたなびきかかるこの深い山にいる私には、照らす月は無縁のものと見ることよ。

【語句】○よそにこそ見れ 「よそに見る」は自分とは関係のないものと見る、の意。

【所載】伊勢集Ⅰ・二四五／伊勢集Ⅱ・二四六／伊勢集Ⅲ・二四五

【参考】伊勢集Ⅰには詞書のない贈答として載せる。

しらくものたなびきにけるみ山にはてる月影もよそにこそきけ（二四五）  
返し

雲はらふてる日こもれるやまなればあかき月にもみえぬなるらん（二四六）

仁和寺に居所を移した宇多法皇に仕える人からの贈歌と関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』は解す。とすれば、作者名「いせ」は伊勢集の記載には合致しない。

〔以上五首担当 平野〕

五三六 のべなるを人もなしとてわがやどにみねのしらくもをりやいるらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】我々が野辺に遠出をして遊んでいるのを、我が家に人がいないと思って（留守なのをよいことにして）峰の白雲がおりてきて居座っているのだろう。

【語句】○のべなるを 野辺に遊んでいるのを。○人もなしとて 人がいないと思って。○をりやいるらん 「をり」は「降り」。「いる」は「入る」とも「居（ゐ）る」とも解せるが、後者で現代語訳した。「白雲のおりる山」とみえつるはふりつむ雪のきえぬなりけり」（後撰集・冬・四八四・よみ人知らず）。「や」は疑問の係助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・二二〇

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

おなじ人

五三七 たちねとやいひにやらまししら雲のとふ人もなくやどにゐらん

【異同】ナシ

【現代語訳】そこを離れろと人を遣わして言つてやろうかしら。白雲が他に訪う人もないことをよいことにして居座っているのだらう。

【語句】○たちね 立ち去りなさい。「立つ」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の命令形。○とやいひにやらまし「と言いに人をやろうかしら」の意。「まし」は、疑問の「や」を伴い、ためらう気持ちを表す。○とふ人もなく 所載欄の貫之集では「とふこともなく」、和歌童蒙抄・和歌初学抄では「とひごともなく」。○ある 座つてゐる。「立つ」の対語。

【所載】貫之集Ⅰ・二二一／和歌童蒙抄・九〇九／和歌初学抄・四

【参考】「おなじ人（つらゆき）」は、和歌初学抄（作者名表記なし）を除く所載欄の文献に一致する。古今六帖五三六・五三七番の二首は貫之集に連続して載る。「延喜御時内裏御屏風のうた廿六首」とある中の二首。

五三八

よとゝもにみねへふもとへをりのぼりよとゝもにみねへふもとへをりのぼりゆく  
ゝものみはわれにざりける  
たひらのなかき

【異同】底本ハ上三句ミセケチ

【現代語訳】峰に上ったり麓へ下りたりしている雲のように、時の流れにもてあそばれている身は、他でもない私自身なのです。

【語句】○よとゝもにみねへふもとへをりのぼり 雲が峰に上ったり麓へ下りたりする様を、都で殿上に上げられたり、地方へ地下となつて下ったりする我が身に譬えた表現。参考欄参照。○われにざりける 私自身なのです。【「むり」は「ぞあり」の約。 所載欄の後撰集では「われにぞありける」。

【所載】後撰集・雑一・一〇七九

【参考】作者名「たひらのなかき」は所載欄の文献に一致する。後撰集の詞書によれば、平中興（生年未詳）延



長八（九三〇）年）が外吏（地方官）として赴任していて、殿上での藏人の職から離れていた時、早期の中央官吏復帰を願って詠んだ歌。

つゆ

さかのきさき

五三九　ことしげしゝばしはたてれよひのまにをけらむつゆはいでゝはらはん

【異同】ナシ

【現代語訳】人々の口がうるさいことです。噂の種となりますので、少しの間、外に立っていていらして下さい。そうして立って待っていらつしやる宵の間に御衣に置いた露は、私が後に出て行つて払いますから。

【語句】◎つゆ　歌では主として秋の景物として詠まれ、萩や菊とよく取り合わされる。また、涙や玉、はかないものに譬えられることも多い。○ことしげし　「言繁し」。人の噂がうるさい意。○たてれ　「立つ」の已然形＋「り」の未然形＋推量の助動詞「む」の連体形。○いでゝはらはん　（皆が寝静まった後で）私が出て行つて払います。

【所載】後撰集・雑一・一〇八〇／俊頼髓脳・五七、二八九／宝物集・四〇八

【参考】作者名「さかのきさき」は、所載欄の文献に一致する。嵯峨后は檀林皇后とも称される橘嘉智子。後撰集の詞書によれば、他の女御達の目を氣にした立后前の作者が、帝に対面せずに奉った歌。嘉智子の立后は弘仁六（八一五）年、三十歳の時。

つらゆき

五四〇　さをしかのたちなくをのゝ秋はぎにをけるしらつゆわれもけぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】牡鹿が立って鳴く小野の秋萩に置いている白露のように、すぐにも消えてしまいそうな私の命です。よ、恋の切なさに。

【語句】○さをしか　牡鹿の歌語。「さ」は美称接頭語。萩と鹿の取り合わせに恋をからませて詠む歌は、万葉集はじめ多く見られる。○たちなく　立って鳴く。所載欄の後撰集では「立ちならす」で、しばしば行き来する意。

○われもけぬべし 今にも消えてしまいうな私の命ですよ。第四句までは自分の恋情の比喩で、第五句に對して序詞とほぼ同様な働きをもつ。貫之集には他に、「さをしかのつまにしがらむ秋はぎにおけるしら露我もけぬべし」(貫之集Ⅰ・五八二)、「つまこふる鹿のしがらむ秋はぎにおける白露我もけぬべし」(同・六一四)がある。

【所載】後撰集・秋中・三〇六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・三浦〕

### おなじ人

五四一 秋のゝのくさはいとゝもみえなくにをくしら露をたまにぬくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野の草は糸であるようにも見えないのに、どうして置く白露を玉として貫いているのだろうか。

【語句】○くさはいとゝもみえなくに 「草」を「糸」に見立てながら、一度それを否定する。この見立ては、和歌に先例はないが、「柳糸嫋々風繰出 草縷葺葺雨剪齊(柳糸嫋々として風繰り出だし 草縷葺葺として雨剪り齊(ひとし)うす」(天津橋・白氏文集・二八七五)の草縷(縷)は、衣服の破れたもの、ぼろぎれを意味する。ここでは草の比喩。前句の「柳糸」の「糸」の縁語となっている)に拠るかという説がある(渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年)。「なくに」は、詠嘆を含んだ逆接確定条件を表す。……ないことなのに、ないのに。「深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜摘みけり」(古今集・一八)、「糸によるものならなくにわかれ路の心細くも思ほゆるかな」(古今集・四一五)など。○しら露をたまにぬくらん 白露を玉に見立て、玉として貫くのだろうか。「浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」(古今集・二七)、「秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ」(古今集・二二五)、「白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける」(後撰集・三〇八)など、例が多い表現。上句の「なくに」によって一旦否定された「草」―「糸」の見立てを、この「露」―「玉」の見立てによって再び想起させる手法。○らん 目にみえている事実について、その原因、理由を疑いながら推量する。どうして……だろうか。「ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」(古今集・八四)。

【所載】後撰集・秋中・三〇七／寛平御時后宮歌合・八一／新撰万葉集・三二七

【参考】作者名「おなじ人」(紀貫之)は、後撰集、寛平御時后宮歌合の作者記載と一致する。

新撰万葉集においてこの所載歌と対になる漢詩の一、二句「白蔵野草芽華宜 嗤見玉露貫非糸（白き蔵野の草芽の華宜し 嗤ひて見る玉露の貫くこと糸に非ず）」は、当該歌と発想が類似する。

五四二 なつの日にこがるゝやぶのくさなれやしばしのつゆに心をくらんよるイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏の日に焼けるやぶの草だからか、ほんの束の間置く露に心をとどめるのであろう。

【語句】○なつの日にこがるゝ 夏の日（太陽）に焦がれる。火や太陽に焼かれて黒くなる。恋心で胸が焦がれるの意を掛ける。○やぶ 「日」との取り合わせでは、「日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにしさとに花もさきけり」（古今集・八七〇）、日の光を恩顧、恩寵に譬え、光の及ばぬ「やぶ」にも分け隔てなく届くとする歌がよく知られているが、この場合は「日」に焦がれる「藪」という異色な取り合わせ。所載欄の夫木抄では「山」となっている。○なれや 「なり」の已然形＋疑問の係助詞「や」。「わが恋はみ山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき」（古今集・五六〇）。○心をくらん 心置（お）くらん。心を留めるのだろうか。「なれや……らん」の場合「冬河の上はこほれる我なれやしたにながれてこひわたるらむ」（古今集・五九一）のごとく、「らむ」に上接する文節ではなく、上句の「なれや」に上接する部分の原因、理由を推量する。所載欄の夫木抄では「心やるらむ」。

【所載】夫木抄・三三〇九

【参考】「夏草裳 夜之間者露丹 憩濫 常焦留 吾曾金敷（ナツクサモヨマハツユニコフランツネニコガ ルルワレソカナシキ）」（新撰万葉集・三二一）は類想歌。

五四三 みさぶらひみかさとまうせみやぎのゝこのしたつゆは雨にまされり

【異同】ナシ

【現代語訳】お供の人よ、「お笠をどうぞ」と申し上げて下さい。こゝ宮城野の木の下露は雨よりも繁く滴り落ちますので。

【語句】○みさぶらひ 御侍。貴人の側に仕える従者。「み」は敬称。従者に対する口頭の呼びかけをそのまま歌にした形。○まうせ 申し上げて下さい。「言ふ」の謙譲語「申す」の命令形。○みやぎの 宮城野。宮城県

仙台市東方一帯の広大な野。萩の名所として有名で、露、虫などの秋の景物とともによまれる。「宮城野のもとあらのはぎ露をおもみ風をまつ」ときみをこそまで」（古今集・六九四）。「みさぶらひ」「みかさ」「みやぎの」と「み」の頭音の連続に特色がある。○このしたつゆ木の下露。木の枝、葉から滴る露。「相坂のこのした露にぬれしよりわが衣手は今もかわかず」（後撰集・七三三）。

【所載】古今集・東歌・一〇九一／新撰髓脳・一二／奥儀抄・七二／和歌色葉・五四

五四四

わびわたる我身はつゆぞおなじくは君があたりのべにきえなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】せつない思いを抱き続けている我が身は露のようなものです。いつそあなたの家のあたりの野辺で消えてしまいたいです。

【語句】○我身はつゆぞ わが身のはかなさを「露」に譬える。「命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへばをしからなくに」（古今集・六一五）、「露をなどあだなる物と思ひけむわが身も草におかぬばかりを」（古今集・八六〇）など。○おなじくは 同じことなら。いつそのこと。「桜狩雨はふりきぬおなじくはぬるとも花の影にかくれむ」（拾遺集・五〇）。○きえなん 消えてしまいたい。「消ゆ」は「露」の縁語。「我が身」と「露」が消える。「なん」は完了の助動詞「ぬ」の未然形＋希望の助動詞「む」。

【所載】後撰集・恋二・六四九／貫之集Ⅰ・六二四

【参考】作者名貫之は所載欄の文献に一致する。なお、貫之集、後撰集では四、五句が「君がかきねの草にきえなん」となっており、忠岑集（Ⅳ・四三）には、「もろくともいぎ白露に身をなして君があたりの草に消えなん」という類想歌がみられる。

五四五

しらつゆをとればけぬべしいざとらじつゆふきそひてはぎのあそびせん  
ことちイ  
さらばイ  
やかもち  
にイ

【異同】とればけぬへしーとらはけぬへし（桂） つゆふきそひてーつゆふきそひて（御・大） はきのあそひせんーはきのあそひけん（御・大）

【現代語訳】白露を手にとったら消えてしまうだろう。さあ、取らないでにおいて、露と競い合って萩の遊びをしよう。

【語句】○とれば とうとうとしたところ。とうとうすると。所載欄の万葉集では「とらば」となっているが、本文のまま解し、順接の恒常条件を表す「已然形＋ば」とみる。○いざとらじ 「いざ」という誘いかけは「とらじ」という打消推量の形と照応せず、原歌の二句「いざこども」がもとの形と思われるが、本文通りに解した。○つゆにきそひて ミセケチの異文傍記「に」をとり、「つゆにきそひて」とみる。露と競い合って。○はぎのあそび 萩の花を見ながら宴を催すことをいうか。

【所載】万葉集・二一七七（旧二一七三）白露乎 取者可消 去来子等 露尔争而 芽子之遊將為 シラツユヲトラバケヌベシイザコドモツユニイソヒテハギノアソビセム しらつゆをとらばけぬべしいざこどもつゆにきほひてはぎのあそびせむ／夫木抄・四二〇六／人麿集Ⅱ・一一八

【参考】作者名「やかもち」は万葉集では作者未詳歌であり、一致しない。

〔以上五首担当 中野〕

五四六 はかなくてきゆるものからつゆの身のくさばにをくとみえにけるかな いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】むなしく消えていくものの露が草葉の上にあやうく置いている、我が身も露と同然、ほんのわずかの世にあると見えてしまうこととです。

【語句】○はかなくて 空しく、あつげなく、の意。「はかなくて雲となりぬるものならばかすまん空をあはれとは見よ」（小町集・九一）のように、「はかなくて」で始まる歌は多い。○ものから 逆接の意の接続助詞。○つゆの身 露のようにはかなく消えてしまう我が身。「けふありてあすは消えぬる露の身の思ひおくべきことのはもがな」（伊勢集・四四二）他よく使われる表現。○くさばにをく 「をく」は「置（お）く」で、草葉の上に露が結ぶこと。「き（消）ゆる」「置く」は、「つゆ（露）」の縁語。自分の命が草葉におく露と同然、と詠む歌に、「露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを」（古今集・八六〇）、「武蔵野の草葉にやどる白露のいくよあるべき我ならなくに」（伊勢集・四二〇）など。

【所載】ナシ

【参考】 作者名「伊勢」とあるが、他の文献で確認できなかった。

五四七 あきのよのゆめちにつゆぞをきけらしかよふとしつるそでひちにけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋の夜には夢路にも露が置いていたらしい。あの娘のもとに通うとしていた私の袖が、びっしょりに濡れていることだ。

【語句】 ○ゆめちにつゆぞ 秋の夜の露はよく歌に詠まれる景物だが、ここは、夢の中で女性のもとへ通う路に、露が置くと詠む。○をきけらし おき（置き）けらし。「けらし」は、「けるらし」の約、根拠に基づいて過去を回想し推定する意を表す。……たにちがいない。○そでひちにけり 「ひつ」（漬つ）はびしょ濡れになる、の意。目覚めてみると、涙で袖が濡れていると気付いた、という表現。夢の通り路で袖が露に濡れるという同様な表現は、古今集の貫之詠「夢ぢにも露やおくらむよもすがらかよへる袖のひちてかわかぬ」（五七四）にも見える。

【所載】 ナシ

五四八 をくつゆをわかれしきみとおもひつゝあさな／＼ぞこひしかりける

【異同】 こひしかりける—こひしかりけり（大）

【現代語訳】 はかなく置く露を亡くなつたあなたそのものと見ながら、毎朝毎朝、恋しい思いにかられています。

【語句】 ○をくつゆを 「をく」はおく（置く）。○わかれしきみ はかなく亡くなつてしまったあなた。所載欄の貫之集では「哀傷」に置かれている。○おもひつゝ 所載欄の貫之集は同じだが、古今六帖「みるゝことに」、河海抄・幻「みるからに」。○あさな／＼ぞこひしかりける 「露」ははかなく消えてしまうもの、その露によそえて、死別した人を毎朝思い出しては、恋い慕っている。

【所載】 古今六帖「かなしび」二四六〇／貫之集Ⅰ・七六三／河海抄・一七六〇

【参考】 作者名が記されないが、所載欄の古今六帖に「つらゆき十四首」「以上貫之」とある間にあり、貫之集にもあり、貫之歌と確認される。

五四九 きみましゝむかしは露かふるさとはなみるごとにそでのひつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいらつしやつた昔は露なのでしょうか。あなたが住んでいた家の花を見るたびに、どうして私の袖が濡れているのでしょうか。

【語句】○きみましゝ あなたが生きていらつしやつた。所載欄の貫之集に「君まさで」、続古今集に「おもひいづる」とあり、表現が異なる。なお、「きみ」とは、詠歌事情を記した貫之集の詞書「泉の大將うせ給ひて後に、隣なる人の家に人々いたりあひて、とかく物語などするついでに、かの殿の桜のおもしろく咲けるを、これかれあはれがりて歌詠むついでに」によれば、「泉大將」藤原定国となる。定国は、高藤男で、延喜六（九〇六）年七月に大納言兼右大將で没、四十歳。醍醐天皇の生母胤子や三条右大臣定方の兄。○むかしは露か 「昔」が「露」であるはずはないが、飛躍した表現をとつて、落涙の理由をたずね、ありし昔が露であるからか、としたもの。この表現は、当該歌や所載欄の歌以外では金槐和歌集に一首見えるのみ。なお、「露」は花をより美しく色づけるもの。○ふるさとの この「古里」は、亡くなった人が住んでいた家の意。○そでのひつらん 助動詞「らむ」は、どうして袖が涙に濡れているのか、その原因・理由を推量する意。

【所載】古今六帖「かなしび」二四六二／続古今集・哀傷・一三九八／新撰朗詠集・四九六／貫之集I・七五三  
【参考】作者名がないが、所載欄の文献により紀貫之の歌。古今六帖・五四八番歌と同じく、「かなしび」題の「つらゆき十四首」中に重出する。

五五〇 しらつゆにくれなぬまさる秋の野ゝうつろひやすき人のこゝろか

【異同】ナシ

【現代語訳】白露に日一日紅色が濃くなる秋の野はうつろいやすい、なんと移りやすいあなたの心であることよ。

【語句】○くれなぬまさる 秋の野に白露が置いていつそう紅葉の色がまさっている。「白（露）」「くれなぬ」と色を対比。○秋の野ゝ 「秋」に「飽き」を響かす。秋の野の景を写しだした第三句までは、「うつろひやすき」を導き出す序詞。○うつろひやすき人のこゝろか 「うつろひ」には、色の変化することと愛情が衰えることとを掛ける。「か」は終助詞で詠嘆を表す。

【所載】ナシ

五五一 ながきよをおもひあかしてあさつゆのをきてしくれそゝでぞひちける

【異同】をきてしくれそ—をきてしくれは(桂・大)

【現代語訳】長い夜を思い明かして、(露の置いた) 朝、起きてむなしく帰って来ると、袖がすっかり濡れてしまったよ。

【語句】○をきてしくれそ 「をきて」は、「おきて」。「唐衣たつ日はきかじあさつゆのおきてしゆけげぬべきものを」(古今集・三七五)、「ほととぎす夢かうつつかあさつゆのおきて別れし暁のころ」(古今集・六四一)のように、「朝露」の縁語の「置きて」に、「起きて」を掛ける。「し」は、強意の副助詞。「しくれそ」は、本文不審。桂宮本・大久保本・古今六帖重出の二七三一番歌などには「しくれば」とあり、これが本来の形かと思われるので、現代語訳はこれに従って、「おきてしくれば」、即ち「朝起きて、(いとしい人と別れて) 帰って来ると」の意と解した。

【所載】古今六帖「ふせり」二七三一／貫之集I・五五四

【参考】作者名はないが、この歌は貫之集に見え、重出の古今六帖・二七三一番も作者名を「つらゆき」とする。

五五二 ゆきなれぬみちのしげきさいに夏のよのあかつきをきは露けかりけり

【異同】みちのしげきさいに—みちのしげきさいに(御・大)

【現代語訳】歩き慣れない道の草が生い茂っているので、短い夏の夜の暁に起きて出てくると、涙に濡れ、露に濡れたことだよ。

【語句】○みちのしげき 「道の草の茂きに」の意。「夏草のしげきにあとも見えぬかな野中ふかみちいづれともなく」(元真集・九三)。○夏のよ 短くて夜が明けやすい。○あかつきをき あかつきおき。暁起き。夜明け前のまだ暗い頃に起きること。「おく霜の暁おきをおもはずは君がよどのによがれせましや」(後撰集・九一四)。○露けかりけり 「露けし」は、露で湿っぽいさま。「ひとりぬるとこは草ばにあらねども秋くるよひはつゆけかりけり」(古今集・一八八)のように、涙に濡れているさまを表すことも多い。当該歌も、暁に起きて、いとしい人と別れて来た悲しみの涙に濡れる意を響かせる。



【所載】重之集・二六〇

【参考】重之集二二一番歌詞書によると、百首歌中の一首。

五五三 あきのよをいたづらにのみをきわたる露はわが身のなにこそありけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜にただむなしく一面に置いている露とは、長い秋の夜に一晚中むなしく続き続けている我が身の名であつたのだなあ。

【語句】○いたづらにのみをきわたる 「のみ」は強意。「をきわたる」は「おきわたる」。一面に露が置く意に、一晚中ただむなしく続き続けている意を掛ける。

【所載】後撰集・秋中・二九〇

【参考】「草の葉におきてぞあかす秋の夜の露ことならぬわが身とおもへば」（能宣集・一七）などのように、むなく消える露に我が身を引き比べた歌。

五五四 あきのつゆいろ／＼ことにをけばこそ山のこの葉のちくさなるらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の露が色とりどりに異なるように置くからこそ、山の木の葉の色が様々なのだろう。

【語句】○いろ／＼ことに 色々異に。所載欄の寛平御時后宮歌合には「色のことごと」、新撰万葉集には「色殊殊丹（イロコトゴトニ）」とある。露は、「白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちちにそむらむ」（古今集・二五七・藤原敏行）のように、木の葉を様々な色に染めるものとして詠まれることが多い。○をけばこそ おけばこそ。置けばこそ。○ちくさ 千種。木の葉の紅葉の色が様々であること。

【所載】古今集・秋下・二五九／寛平御時后宮歌合・一〇九／新撰万葉集・三六〇

五五五 秋はぎにをけるしら露あさな／＼たまとぞみゆるをけるしら露  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩に置いた白露、毎朝毎朝玉に見える、置いた白露。

【語句】○あさな／＼ 毎朝毎朝。朝ごと。上代語では「あさなさな」だったが、平安時代には「あさなあさな」と詠まれた。「うら恋し我が背の君はなでしこが花にもがもな朝なさな（安佐奈佐奈）見む」（万葉集・四〇三四（旧四〇一〇））、「野辺ちかくいへゐしせればうぐひすのなくなるこゑはあさなあさなく」（古今集・一六）。○をけるしら露 おけるしら露。

【所載】万葉集・二二七二（旧二二六八）、冷芽子丹 置白露 朝朝 珠斗曾見流 置白露 アキハギニオケルシラツユアサナサナタマトゾミユルオケルシラツユ あきはぎにおけるしらつゆあさなさなたまとしぞみるおけるしらつゆ／人麿集Ⅰ・一二〇／人麿集Ⅱ・七六／桐火桶・三三三

【参考】作者名は「やかもち」とあるが、所載欄の万葉集では作者不明であり、人麿集にも見える。

〔以上五首担当 長戸〕

五五六 わがやどのおばなをしなみをくつゆにてふれわがせこちらさでもみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の薄の穂を押し靡かせて置く露に手を触れてみなさい、あなた。露を散らさないままでも見ましよう。

【語句】○おばな をばな（尾花）。○をしなみ おしなみ。「おしなむ」が転じた「おしなむ」の連用形。押しふせて。押し靡かせて。万葉集には見えない。「今よりはつぎて降らなむわが宿の薄おしなみ降れる白雪」（古今集・三三八）。○ちらさでもみむ 手が触れば露は消えてしまい、不審。所載欄の万葉集では「ちらまくも見む」とあり、散るさまを見ようとの意となり、わかりやすい。

【所載】万葉集・二二七六（旧二二七二）吾屋戸之 麻花押靡 置露尔 手触吾妹兒 落卷毛将見 ワガヤドノヲバナオシナミオクツユニテフレワギモコチラマクモミム わがやどのをばなおしなべおくつゆにてふれわぎもこちらまくもみむ／人麿集Ⅰ・一二二／人麿集Ⅱ・一〇三／綺語抄・六九二／袖中抄・五八四

五五七 秋の野々さゝわけしあさのそでよりもあはでこしよぞひちまさりける

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野の笹をかき分けて帰って来た朝の袖よりも、逢わないで帰って来た夜の方が、濡れまさっていることだ。

【語句】○あはでこしよ 所載欄の文献では、古今六帖の重出歌をはじめ「あはでぬるよ」とするものが多い。○ひちまさりける 「ひつ」は濡れる。笹におりた露だけでなく、ひとりで夜を明かしたことによる涙も加わるので「まさりける」という。

【所載】古今六帖「くれどあはず」三〇三七／古今集・恋三・六二二／業平集Ⅰ・五一／業平集Ⅱ・一五／業平集Ⅲ・二六／業平集Ⅳ・一六／伊勢物語・二五段・五六

【参考】伊勢物語（二五段）では、古今集でこの歌の次に置かれる小野小町の「みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る」（恋三・六二三）との贈答歌としている。

五五八 ぬきとむるあきしなればしらつゆのちくさにをけるたまもかひなし

【異同】ナシ

【現代語訳】緒に貫いて置き留めてくれる秋というものはないので、白露がたくさん、いろいろな草に置いている珠と見えるのも甲斐のないことだ。

【語句】○ぬきとむる 「たま」の縁語。類想「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」（後撰集・三〇八）。○あきしなければ 「し」は強意の副助詞。秋というものはないので。「あだなりと我は見なくにもみち葉の色のかはれる秋しなければ」（後撰集・三九〇）。ただし用例は少ない。類例に「春しなければ」もある。「とふ人も宿にはあらじ山桜散らでかへりし春しなければ」（後拾遺集・一二三）、「人知れず物思ふことはならひにき花にわかれぬ春しなければ」（詞花集・三一二）。○ちくさ たくさん。数多く。また、色々の種類。ここでは「しらつゆ」の多い様とたくさん草の意とを掛ける。○をける おける（置ける）。

【所載】後撰集・秋中・三三五

五五九 しら露を秋のはぎはらにこきまぜてわくことかたきわがこゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白露を秋の萩原におりまぜて、露と萩との見分けがつかずにいる我が心であるよ。

【語句】○はぎはら 萩の生い茂っている原。白露と紛れるのだからここでの萩は白萩。○こきまぜて 種類の異なるものをまぜる。初句からここまでが「わくことかたき」を導く序詞。○わくことかたき 「わく」は区別する。白露と白萩を区別することができないということ。○わがころかな この句を歌末に置く用例は「夏草の上は繁れる沼水の行く方のなき我が心かな」(古今集・四六二)、「春来れば柳の糸もとけにけりむすぼれたる我が心かな」(拾遺集・八一四)、「君にのみあはまくほしの夕されば空にみちぬる我が心かな」(古今六帖「星」三七八)、「恋てへば知らぬ道にもあらなくにあやしくまどふ我が心かな」(古今六帖「恋」一九七八)などがある。

【所載】新勅撰集・秋上・二三三／万葉集・二二七五(旧二二七二) 白露与 秋芽子者 恋乱 別事難 吾情可聞 シラツユトアキノハギトハコヒミダレワクコトカタキワガココロカモ しらつゆとあきはぎとはこひみだれわくことかたきあがころかも／人麿集Ⅰ・一二一／人麿集Ⅱ・七七

五六〇 しら露のをきふしものをおもふまにわが身はあきもはてにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白露が置き、起きたり臥したりしながら物思いをしている間に、秋も終わり、我が身はすっかり飽きられてしまったことよ。

【語句】○しら露の 「をき(置き)」を導くための措辞。○をきふし おきふし。露の「置き」とわが身の「起き」とを掛ける。「露霜とおきふしいかであかすらむならはぬ旅の草の枕に」(大斎院御集・八二)。○あき 「秋」と「飽き」を掛ける。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 青木〕

五六一 をくからにちくさのいろになるものをしらつゆとのみ人のいふらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】置くとすぐにさまざまな色に染まるというのに、どうしてこれを人が白露とのみ呼ぶのだろう。

【語句】○をくからに 「からに」は、や否や、とともに、とすぐに、の意を表す接統助詞。「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ」（古今集・二四九）。○ちくさ 種類の多いこと。さまざま。いろいろ。千差万別。「秋の露いろいろごとにおけばこそ山の木の葉のちくさなるらめ」（古今集・二五九）。○人のいふらむ この「らむ」は、目の前の事実に対し、その原因、理由などを推量する言い方。「どうして」「なぜ」などの語を補うとわかりやすい。「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（古今集・八四）。

【所載】後撰集・秋中・三一〇

五六二 うへたてゝきみがしめゆふ野べなればたまともみよとつゆやをくらん  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】しっかりと植えて、あなたがわがものとしていらつしやる野辺ですから、美しく変わらない玉とも見なさいと、はかない露は置いているのでしょうか。

【語句】○うへたてゝ 植ゑたてて。わざわざ植えて。きちんと植えて。「たて」は、この場合他の動詞につき、その動詞の意味するところをきわだたせる役割りを果たす。○しめゆふ 縄などを張りめぐらせ、自分の占有物であることを宣言する行為。○たま 移ろいやすいものとしての露に対比させ、変わらない、美しいものとして詠まれている。

【所載】後撰集・秋中・二八〇／拾遺抄・秋・一一〇／拾遺集・秋・一六七／伊勢集Ⅰ・一三六／伊勢集Ⅱ・一三四／伊勢集Ⅲ・一三三

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。なお後撰集や伊勢集Ⅰでは、当該歌は次の五六三番歌（作者宇多法皇）の返歌として詠まれている。

五六三 しら露のかはるもなどかをしからむありてのゝちもあやうきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】白露が形を変え、やがては消えてしまうのも、どうして惜しいことがあるうか。もとのまま変わらずに永らえたとしても、いずれは危うい世の中なのに。

【語句】○ありてのゝちも このままつづいて永らえた後も。○あやうきものを 危ふきものを。危うい、不安定なものなのに。なおこの第五句は、後撰集では「ややうきものを」、伊勢集では「よはうきものを」とする。

【所載】後撰集・秋中・二七九／伊勢集Ⅰ・一三五／伊勢集Ⅲ・一三四

【参考】後撰集や伊勢集では当該歌の作者を宇多法皇とし、前の五六二番歌とは贈答歌の形式になっている。

五六四 秋はぎのさけるをかべのゆふつゆにぬれつゝもませよはふけぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩が咲いている岡辺の夕方の露に、濡れながらもおいでください。たとえ夜は更けたとしても。【語句】○ぬれつゝもませ 「ませ」は、あり、をり、行く、来（く）などの尊敬語「ます」の命令形。いらつしやい。ただし所載欄の他文献はすべて「ぬれつつきませ」とする。

【所載】新古今集・秋上・三三三／万葉集・二二五六（旧二二五二）秋芽子之 開散野辺之 暮露尔 沾乍来益夜者深去鞞 アキハギノサキチルノヘノユフツユニヌレツツキマセヨハフケヌトモ あきはぎのさきちるのへのゆふつゆにぬれつつきませよはふけぬとも／人麿集Ⅰ・一四九／人麿集Ⅱ・三〇一／人麿集Ⅲ・一五三、四五六／家持集Ⅰ・一〇二／秀歌大体・六〇

五六五 あきはぎの<sup>も</sup>□<sup>う</sup>へにをきたるしら露のいちしろくしもわがこひめやも<sup>るイ</sup>

【異同】底本ハ「う□」ノ上ニ抹消記号ヲ施シ、右傍ニ「う」ト記ス（□ハ判読不明ノ文字）。

【現代語訳】秋萩の上に置いている白露のように、はつきりと目につくようになって、私は恋をしたりするでしようか。そんなことはしません。

【語句】○いちしろくしも 「いちしろく」は、はつきり目に見える。はつきりあらわれている。「しも」は強めの助詞。なお上三句は「いちしろく」を導く序。○わがこひめやも 私は恋をするだろうか、したりはしない。推量の助動詞「む」の已然形に「や」が伴った形は、常に反語の意を表す。

【所載】参考欄参照。

【参考】古今六帖「人しれぬ」の項、二六七四番に（人麿集Ⅲ・二五五にも）「わがやどのあきはぎのうへにおくつゆのいちしろくしもわがこひめやは」とあり、一応、類歌と考えられる。ところが万葉集の二二五九（旧二

二五五) 番に、同じ「わがやどの秋萩の上におく露のいちしろくしもあれ恋ひめやも」という歌があつて、その前の二二五八(旧二二五四) 番には「秋萩の上におきたる白露のけかもしなまし恋ひつゝあらずは」という歌がある。両者は並んでいて、一方の上句と他方の下句とが混雑現象を起こした結果がこの歌ということになる。古今六帖における万葉集歌にはさまざまな問題があるが、この場合などは明らかに万葉集という書物からの採歌と考えていいのだろうか。

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

五六六 あきのほをしのにをしな<sup>みイ</sup>べをくつゆのきえもしなましこひつゝあはずは

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の稲穂をしおれるばかりに押し伏せて置く露ははかなく消えてしまうが、わたしも消えて(死んで)しまえば良いのに。こんなに恋しいのにあなたにお逢いできないならば。

【語句】○あきのほを 秋の稲穂を。玉葉集では「秋の田の」。○しのに 草木の萎れ靡くさま、転じて心のしおれるさまなどを表す語。○をしなべ おしなべ。力を加えて靡かせる。一様に靡かせる。所載欄の他文献に多い「おしなみ」も同じ意。○きえもしなまし 「きえ」は露が消えることと死ぬことを掛ける。万葉集をはじめとする所載欄の他文献では「け(消) かもしなまし」が多い。「まし」は仮定の助動詞。非現実的な意思、希望を表す。上三句は「きえ」を導く序詞。○こひつゝあはずは 恋続けても逢えないのであれば。所載欄の人麿集Ⅱでは「君にあはずは」。それ以外の他文献ではすべて「あらずは」で、「恋い続けていないで」の意となる。

【所載】玉葉集・恋四・一六三八／万葉集・二二六〇(旧二二五六) 秋穂乎 之努尔押靡 置露 消鴨死益 恋乍不有者 アキノホラシノニオシナミオクツユノケカモシナマシコヒツアラズハ あきのほをしのにおしなべ おくつゆのけかもしなましこひつゝあらずは／人麿集Ⅱ・五二二／人麿集Ⅲ・二五二／綺語抄・七〇七／古来風体抄・一一〇

【参考】古今六帖「秋の田」一一一九番には「あきのたのほなみをしわけをく露のきえもしなゝん恋てあはずは」がある。

五六七 つゆしもにころもでぬれていまだにもいもがりゆかむよはふけぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】 冷たい露に着物の袖を濡らして、今からでも妻のところへ出かけよう。夜は更けてしまっても。

【語句】○つゆしも 露の冷え冷えとした感じを表した語。「秋さらば妹にみせむとうゑし萩露霜おひて散りにけるかも」（万葉集・二二二一（旧二二二七））。○いまだにも せめて今からでも。「だに」は「む」と呼応して、「せめて……だけでも」と願う意を表す。「だに」を、時を「今」に限定する意とし、「今すぐ」と解する説もある。「山のはに月もいでぬべしいまだにもいがりゆかんおやにまうすな」（古今六帖・三〇九〇）。○いもがりゆかむ妻のところへ行こう。所載欄の万葉集・人麿集の「いもがりゆかな」の「な」は意志を表す終助詞で、同じ意となる。

【所載】 古今六帖「おもひいづ」二八九四／万葉集・二二六一（旧二二五七）露霜尔 衣袖所沾而 今谷毛 妹許行名 夜者雖深 ツユシモノコロモデヌレイマダニモイモガリユカナヨハフケヌトモ つゆしにもにころもでぬれていまだにもいもがりゆかなよはふけぬとも／人麿集Ⅲ・四五八／綺語抄・七二

五六八 あきはぎのうへにしらつゆをくごにみつゝぞしのぶきみがすがたを

【異同】ナシ

【現代語訳】 秋萩の上に白露が置くたびに、それを見ながらお慕いしています。（白露のように美しい）あなたのお姿を。

【語句】○みつゝぞしのぶ （白露を）見ながらお慕いしています。「しのぶ」は遠い人、故人などを思慕する意。奈良時代には「シノフ」と清音。露は多く消えやすいものとして詠まれ、この歌のように恋人の美しさを譬えたり、恋人を連想させるものとして詠まれることは珍しい。○きみがすがたを 所載欄の万葉集では「すがた」を「光儀」と記す。美しい姿や立ち居振舞いをいい、万葉集に十一例ある。日本書紀にもみえ、文選、遊仙窟などに多い漢語。

【所載】 万葉集・二二六三（旧二二五九）秋芽子之 上尔白露 毎置 見管曾思努布 君之光儀乎 アキハギノウヘニシラツユオクゴトニミツツゾシノフキミガサガタヲ あきはぎのうへにしらつゆおくごにみつづしのぶきみがすがたを／人麿集Ⅲ・四五五

五六九 まちかねてうちへはいらじしろたへのわがころもでにつゆはをくとも



【異同】ナシ

【現代語訳】（あの人を）待ちかねて、家の中へは入りますまい。わたしの袖に露は置いても。

【語句】○まちなかねて 所載欄の人麿集では「待わびて」。○うちへは 家の中へは。所載欄の万葉集、奥儀抄では「うちには」。○しろたへの 「ころもで」の枕詞。○わがころもでに 「ころもで」は袖の歌語。所載欄の奥儀抄では「わがそでの上に」。○つゆはをくとも 露は置いても。所載欄の万葉集では「つゆはおきぬとも」、奥儀抄では「しもはおきぬとも」。

【所載】万葉集・二六九六（旧二六八八）待不得而 内者不入 白細布之 吾袖尔 露者置奴軻 マチカネテウ チニハイラジシロタヘノワガコロモデニツユハオキヌトモ まちなかねてうちにはいらじしろたへのわがころもでにつゆはおきぬとも／人麿集Ⅱ・五三五／奥儀抄・一三一

としゆき

五七〇 しらつゆのいろはひとつをいかにしてあきのこのはをちづにそむらん

【異同】ナシ

【現代語訳】白露はただ白一色であるのに、どのようにして秋の木の葉を色とりどりに染めるのだろうか。

【語句】○あきのこのはを 所載欄の敏行集では「秋の山べを」。○ちづに 千々に。種々の色に。上句の「ひとつ」と対になっている。「月見ればちぢに物こそかなしけれわが身一つの秋にあらねど」（古今集・一九三）などと同様に、漢詩の数対の影響を受けている。

【所載】古今集・秋下・二五七／新撰万葉集・一三二／新撰和歌・六八／敏行集・二三

【参考】作者名「としゆき」は所載欄の文献に一致する。また、古今集詞書に「是貞の親王の家の歌合に詠める」とある。

〔以上五首担当 三浦〕

たぐみね

五七一 あきのゝのはぎのしらつゆけさみればたまやさけるとをどろかれつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野の萩の白露を今朝見ると、白玉が咲いたかのように見えてはつとすることだなあ。

【語句】○たまやさけると 白露の玉が咲いたかと。所載欄の歌集すべて「たまやしける」。○をどろかれつゝ おどろかれつゝ。(あたかも……のようだ) はつとすることだなあ。「つつ」止めは和歌では余情、詠嘆の意がある。

【所載】後撰集・秋中・三〇九／家持集Ⅰ・一七六、二三四／家持集Ⅱ・二一九／忠岑集Ⅰ・一〇／忠岑集Ⅲ・三二／忠岑集Ⅳ・一七七

【参考】作者名「たゞみね」は後撰集・忠岑集に一致するが、家持集にもこの歌がある。

五七二 あくるまでをきゐるきくのしらつゆはかりのよをおもふなみだなるべし

【異同】ナシ

【現代語訳】夜が明けるまでずっと置いている菊の白露は、はかない現世を思う涙なのだろうなあ。

【語句】○をきゐる おきゐる。ずっと露が「置いている」に「起きゐる」の意をかける。○きくのしらつゆ 菊の露は当時は飲むと長生きするとされていたが、この歌は「仮の世を思う涙」とみた趣向。○かりのよは かない現世。無常な此の世。

【所載】ナシ

とものり

五七三 草のつゆをきしもあえじあさなけにこゝろかよはぬときしなれば

【異同】ナシ

【現代語訳】草の露が置くことなんかとてもできないだろう。朝に昼に心が君のもとへ通っていかない時などないので。露を置く暇はないはずだよ。

【語句】○をきしもあえじ おきしもあへじ。「おきあへじ」に「しも」が入った形。「あへじ」はいっこうに……ない。全く……ない。○あさなけに 朝に昼に。いつも。

【所載】貫之集Ⅰ・八〇三／宗于集・三六

【参考】作者名「とものり」とあるが、貫之の歌。宗于集によれば、宗于が「きみひとりとひこぬからにわがやどのみちも露けくなりけるかな」（三五）と言いやった返歌として、貫之が詠んだ歌。

五七四 このころのあきかぜさむみはぎのはなしらずしらすつゆさきにけらしも

【異同】はぎのはな―萩かはな（大）

【現代語訳】この頃の秋風は寒いので、萩の花に白露が知らないうちに置いたらしいな。

【語句】○あきかぜさむみ 秋風が寒いので。○しらす 知らないうちに。「ちらす」の誤りか。所載欄の文献すべて「ちらす」。○さきにけらしも 咲いたらしいな。白露が置いたことの比喩的表現。

【所載】新勅撰集・秋上・二三一／万葉集・二二七九（旧二二七五）以来之 秋風寒 芽子之花 令散白露 置尔来下 コノコロノアキカゼサムシハギノハナチラスシラツユオキニケラシモ このころのあきかぜさむしはぎのはなしらずしらすつゆおきにけらしも／人麿集Ⅰ・一二四／人麿集Ⅱ・四一一／和歌一字抄・一一一九／袋草紙・七八九

五七五 しろたへのわがころもでにつゆはをけどいもにはあはずたゆたひにして

【異同】いもにはあはず―いもにもあはず（大）

【現代語訳】私の袖には一晩中むなく待つて露がおくけれど、あの娘には逢えない。彼女は心を決めかねていて。

【語句】○しろたへの 枕詞。衣服に関する語の衣、衣手、袖などにかかる。○ころもで 袖。○つゆはをけど つゆはおけど。一晩中戸外に待つて袖に露が置くけれど。○たゆたひ 心が決まらず、ぐずぐずすること。

【所載】万葉集・二六九八（旧二六九〇）白細布乃 吾袖尔 露者置 妹者不相 猶予四手 シロタヘノワガコロモデニツユハオキテイモニハアハズタユタヒニシテ しろたへのわがころもでにつゆはおけどいもにはあはなきたゆたひにして

〔以上五首担当 橋本・林〕

五七六 ゆふとけてわがころもでにくつゆをきみに見せんとゝればきえつゝ<sup>けとふイ</sup>

【異同】をくつゆを―をくつゆの（御・大）

【現代語訳】夕占をする私の袖に置いた露を、あなたに見せようと取るとその度に消えていつてしまふ。

【語句】○ゆふとけて 所載欄の万葉集では「ゆふけとふ（夕占問ふ）。夕占（ゆううら）は相手の男が来るか来ないかを占うもの。古今六帖では異文注記はあるものの、本文は「ゆふとけて」。そのままだと、露が結んで、そして解けていく、の意か。但し、「ゆふとけて」の使用例は新編国歌大観でこの一例のみで、他にも「木綿とく」「タとく」などを検討した結果、万葉集の本文に従って現代語訳した。○ゝ（と）ればきえつゝ つつ止めで反復を表す。

【所載】万葉集・二六九四（旧二六八六）夜占問 吾袖尔 置露乎 於公令視跡 取者消管 ユフケトフワガコロモデニオクツユヲキミニシテムトトレバキエツツ ゆふけとふわがころもでにくつゆをきみにみせむととればけにつつ／人麿集Ⅱ・五三四／人麿集Ⅲ・六八〇／人麿集Ⅳ・一六六／夫木抄・一七一四四

五七七 われならぬ草葉もゝのはおもひけりそでよりほかにをけるしら露

【異同】ナシ

【現代語訳】私だけかと思っていたけれど、草葉ももの思いはするのだなあ。私の袖以外にも置いているよ、白露が。

【語句】○われならぬ 私だけだと思っていたが、の意。「われならぬ」は「人」と続き「私以外の人」と詠まれることが多いが、ここでは、人ならぬ植物が、となる。同様に植物を「我ならぬ」と取り上げる例に、「われならぬ菊のはなさへ世の中をうらむるさまにうつろへるかな」（敦忠集・一二六）がある。○そでよりほかにをけるしら露 涙を露によそえる例は多いが、それを逆転させたもの。

【所載】後撰集・雑四・一二八―古来風体抄・三三七／定家八代集抄・一二八二  
【参考】後撰集では、藤原のただくにが左大臣藤原実頼家の歌会で、露という字を採題で得て詠んだ歌とする。

五七八 ほにいでぬ山だをもるとからころもいなばのつゆにぬれぬひぞなき

【異同】 から衣―藤衣（大）

【現代語訳】まだ穂が出ていない山田の番をするので、私の着ている韓衣が稲葉の露に濡れない日はない。―まだ態度に表せないのも、私の衣はしのび涙に濡れない日はない。

【語句】○ほにいでぬ 穂に出ていない。「穂にいつ」とは「花すすき我こそしたに思ひしかほにいでて人にむすばれにけり」（古今集・七四八）などにも見られるように、態度をあらわにすること。○山だをもる 山田を守る。○からころも 韓衣。唐衣。大陸風の装束。古今集や一部の古今六帖の写本では「藤衣」で、粗末な衣のこと。

【所載】 古今集・秋下・三〇七／猿丸集Ⅰ・四三

五七九 このころのあか月つゆにわがやどのはぎのしたばゝいろづきにけり

【異同】 このころの―このころも（大）

【現代語訳】近頃の暁ごろに置く露で、我が家の萩の下葉は色づいてきたことだ。

【語句】○このころの 近頃の。○あか月つゆ 万葉集では暁露（あかときつゆ）。まだ暗い時分に置く露のこと。

【所載】 拾遺集・雑秋・一一一八／万葉集・二一八六（旧二二八二）比目之 暁露丹 吾屋前之 芽子乃下葉者 色付尔家里 ユノコロノアカツキツユニワガヤドノハギノシタバハイロヅキニケリ このころのあかときつゆにわがやどのはぎのしたばはいろづきにけり／人麿集Ⅰ・一二五／人麿集Ⅱ・七八

五八〇 をりてみばおちぞしぬべき秋はぎのえだもとをゝにをけるしらつゆ

【異同】 ナシ

【現代語訳】折って見ようとしたら落ちてしまうだろう、秋萩の枝もたわんでしまうほどに置いている白露は。

【語句】○とをゝ タワワの母音交替形。万葉集では「十尾」と表記する例がある。

【所載】 古今集・秋上・二二三／家持集Ⅰ・二一四／家持集Ⅱ・三〇一

〔以上五首担当 杉本〕

五八一 いつとてもかはかぬ袖のあきのよはつゆをきそへてもものぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】何時乾くといつてそのような時はなく、常に涙で濡れている私の袖だが、秋の夜はさらに露が加わり悲しくてならない。

【語句】○つゆをきそへて つゆおきそへて。露にさらに露を加えて。中世に多用された。「ふるさととあれにしにはのあさちにもつゆおきそへて秋はきにけり」(千五百番歌合・一〇七七)。

【所載】ナシ

【参考】秋の夜は人をもの悲しくさせる。悲秋の題は漢詩の世界から導入された。万葉集には顕著でなく平安和歌に多く見られる。「秋の夜のあくるもしらずなく虫はわがこと物やかなしかるらん」(古今集・一九七)、「ゆふさればいとどひがたきわがそでに秋のつゆさへおきそはりつつ」(古今集・五四五)。

五八二 あきはぎにをくしらつゆのかげろふはおつるなみだのとどめかねつも

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩においている白露の光がさつと暗くなるのは(私の涙のふりかかるせいで)こぼれ落ちる涙はとめようにもとめられません。

【語句】○かげろふ 「かげる」ことをくりかえす。「かげる」は「翳る」「陰になる」「曇る」。「いなづまはかげろふばかりありしより秋のたのみは人しりにけり」(古今六帖・八一六)、「うづらなきくれゆくべの秋風にゆふひのをばなすゑぞかげろふ」(伏見院御集・二〇八九)。

【所載】玉葉集・恋四・一六三九／万葉集・一六二二(旧一六一七) 秋芽子尔 置有露乃 風吹而 落涙者 留不勝都毛 アキハギニオキタルツユノカゼフキテオツルナミダハトドメカネツモ あきはぎにおきたるつゆのかけふきておつるなみだはとどめかねつも

五八三 あきはぎのえだもとを<sup>たわゝにイ</sup>に露をきてさむくもときのなりにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】秋萩の枝もしなるばかり露がたくさん置いて、（一段と秋も深く）寒い時節となったことよ。

【語句】○えだもとをゝに 異文として「えだもたわゝに」。両方とも万葉集に例がある。「あきはぎのえだもとををにおくつゆのけなげぬともいろにいでめやも」（万葉集・一五九九（旧一五九五））、「あきはぎのえだもとををにおくつゆのけかもしなましこひつつあらずは」（万葉集・二二六二（旧二二五八））、「あしひきのやまちもしらずしらかしのえだもとををにゆきのふれば」（万葉集・二二一九（旧二二一五））或云「たわわに」。○ときのならにけるかな 通常の語順であれば「時の寒くもなりにけるかな」。「時になる」の例としては「吾妹子がゆきあひのいねのかるときになりけるかな萩の花さく」（人麿集・一三四）など。

【所載】続後撰集・秋下・四〇九／万葉集・二一七四（旧二二七〇）秋芽子之 枝毛十尾丹 露霜置 寒毛時者 成尔家類可聞 アキハギノエダモトラヲニツユシモオキサムクモトキハナリニケルカモ あきはぎのえだもとををににつゆしもおきさむくもときはなりにけるかも／人麿集Ⅱ・一三九／綺語抄・七〇四

五八四 あきのよの露をばつゆとをきながらかりのなみだやのべをそむらん  
たゞみね或本

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の間に置く露はそのままにして、（このように色が変わったのは）雁の血の涙がふりかかって野辺を染めたのだろう。

【語句】○露をばつゆとをきながら 「をき」は「おき」。露が置くのはそのままにして。「露のごとはかなき身をばおきながら君が千歳を思ひやるかな」（高光集・八）。露は草葉を色づかせるものと考えられた。○かりのなみだ 雁の涙。鳴く「雁」は「泣く」と擬人化され、人のように「紅涙」をこぼすと歌われた。紅涙は悲しみ極まる時に出る涙。当該歌の影響として「野辺におつる雁の涙や染めつらん霧までふかきもとあらの小萩」（範宗集・二八六）、「露は野べわがゆふ暮の袖をまたかりの涙のそめて過ぎぬ」（拾玉集・三〇二二）などがある。

【所載】忠岑集Ⅰ・九／忠岑集Ⅱ・五八／忠岑集Ⅳ・一七九

【参考】作者名「たゞみね」は所載欄の文献に一致する。

五八五 カリナキテサムキアサケノツユナラシカスガノ山ヲモミダスモノハイ

【異同】コノ一首、片仮名ニテ行間ニ細字書き入レ、一行書き（底本・御）―平仮名ニテ本行ニ書ク（桂・大）

【現代語訳】雁の鳴いて寒い朝の露なのだろう、春日山一面の草葉を紅葉させるものは。

【語句】○もみだす もみじさせる。紅葉させる。「もみだ」は四段動詞「もみづ」の未然形。「す」は使役の助動詞。

【所載】後撰集・秋下・三七七／万葉集・二一八五（旧・二一八一）雁鳴之 寒朝開之 露有之 春日山平 令黄物者 カリガネノサムキアサケノツユナシカスガノヤマヲモミダスモノハ かりがねのさむきあさけのつゆならしかすがのやまをもみだすものは

【参考】類似歌が人麿集Ⅱ・九二にある。

〔以上五首担当 平野〕

五八六 露ならぬころをはなにをきそめてかぜふく<sup>たぐみね</sup>ことに物をこそおもへ<sup>或本</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】露ではない私の心を花の上に置きはじめてからというものの、風が吹くたびに花がどうなるかと思ひ煩うことであるよ。

【語句】○露ならぬ 二句の「ころ」にかかる。「露ならぬわが身と思へど秋の夜をかくこそ明かせおきぬながらに」（後撰集・二九二）、「露ならぬ心も花のほど過ぎておきどころなく散る桜かな」（延文百首・二二二七）。○ころをはなにをきそめて 「をき」は「おき」（置き）で、露の縁語。花の上に関心を持ちはじめ、の意。○物をこそおもへ 所載欄の古今集には「物思ひぞつく」。

【所載】古今集・恋二・五八九

【参考】作者「忠岑」の下に小字で「或本」とのみ記すが、所載欄の古今集では作者は紀貫之。またその詞書に、「やよひばかりに、ものたうびける人のもとに、また人まかりつつ消息すと聞きて、遣はしける」と詠作事情が記され、「花」は親しくなった女性を喩えている。

五八七 つゆふすぶあき<sup>本</sup>りけりむべしこそうちとけぬまにむしはなき<sup>もきに</sup>けれ



【異同】つゆふすふ—つゆむすふ（桂・大） あきゝりけり—秋もきにけり（桂・大）

【現代語訳】草葉に露がむすぶ秋も来たことであるよ。なるほどほんとうに、心はうち解けないままに、虫が鳴きはじめたことだ。ふたりの間に秋ならぬ飽きが来てしまった。

【語句】○つゆふすぶ 「ふすぶ」は、他本の「むすぶ」の誤写と解した。○あきゝりけり 歌意がとおらないので、傍書や他本の「あきもきにけり」で解す。所載欄の文獻は「あきはきにけり」。○むべしこそ 「むべ」は「うべ」とも。なるほど、ほんとうに、の意。助詞「し」「こそ」で、その肯定の意味を強く表す。○うちとけぬまに 「露」の縁語「とく」を用い、心がうち解けない、の意を掛ける。「とく」「むすぶ」は対義語。なお、所載欄の文獻「うちとけぬねに」の方が解しやすい。○むしはなきけれ 「むべしこそ」を受け、秋の到来を現実の虫の鳴くことで示す。二句の「秋」に「飽き」の意味を帯びさせる。

【所載】保明親王帯刀陣歌合・一／秋風集・二八七

【参考】所載欄の歌合によれば、保明皇太子の帯刀たちが「秋の物ども」を詠んだ歌合での一番左の歌であり、作者「さかのへのくずすけ」とある。

五八八 つゆとてもあだにやは見るながつきあのきくはちとせをすぐとおもへばたどみね或本  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】はかない露だと言つて、むなしなものだと見るであろうか、いやそうは見ない。九月の菊は、千年の寿を過ぎすと思うので。

【語句】○あだにやは見る 「あだ（なり）」の原義について『古語大辞典』では、実（じつ）のないさま、むなしいさまであらうとする。ここは、一時的なさま、かりそめ、の意。「やは」は反語。「露」と「あだ（なり）」とを詠みこむ例歌は多い。「百とせを人にとどむる花なればあだにやはみる菊の上の露」（貫之集・五二二「九月九日」）や古今集・哀傷・八六〇、古今六帖・一九一など。○きくはちとせを 初句の「露」、三句の「長月」の続きから、陰暦九月九日重陽の節句での菊の着綿（きせわた）や菊酒を飲む長寿を祈る風習が思いうかぶ。着綿とは、前夜に菊に綿を置き露にしめらせその綿で身をぬぐうと千年の長寿が得られるというもので、紫式部日記に、「菊の露若ゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむ」（四）とある。○すぐとおもへば 「過ぐ」（自動詞）は、経過する、時がたつ、の意。所載欄の新後拾遺集「すぐす（と思へば）」（他動詞・過ごさせる）の方

が解しやすい。

【所載】新後拾遺集・秋下・四三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。その詞書に「小野宮おほいまうちぎみの屏風の絵に、長月の九日の日の絵（かた）かけるを詠める」とある。

しづく

おほともの王子

五八九 あしひきの山のしづくにいまつとわれたちぬれぬやまのしづくに

【異同】ナシ

【現代語訳】山の雪に、あなたを待ちして立ちつくし、しとどに濡れました。あの山の雪に。

【語句】◎しづく 水のしたたり、水滴のこと。「露」が静的であるのに対して、「雪」は動的に詠まれる傾向がある。「山の雪」「菊の雪」「花の雪」「むすぶ手の雪」など特定の語と結びつく歌がある。また涙を比喻する「雪」もある。○あしひきの 「山」に掛かる枕詞。○山のしづくに 「雪」は山の木々から落ちる夜露のこと。なお、第五句でさらにこの第二句を繰り返す。○いまつと 「妹」は男が女を親しみをこめていう語。「待つと」は、待つと言って、待つために、の意。本来なら待つのは女性であるが、男性が、それも山の中で待つというのは、人目を憚らねばならない恋なのである。

○たちぬれぬ 立ったまま濡れた。四句切れ。  
【所載】玉葉集・恋二・一三七七／万葉集・一〇七（旧一〇七）足日木乃 山之四付二 妹待跡 吾立所沾 山之四附二 アシヒキノヤマノシヅクニイモマツトワレタチヌレヌヤマノシヅクニ あしひきのやまのしづくにいまつとわれたちぬれぬやまのしづくに／古来風体抄・二九

【参考】作者名「おほともの王子」は所載欄の文献に「大津皇子」とある。万葉集によれば、大津皇子が石川郎女に送った歌。石川郎女は大津皇子の異母兄草壁皇子の恋人であった。

かへし

石川女郎  
わうい

五九〇 我まつときみがぬれけんあしひきの山のしづくにならまし物を

【異同】ナシ

【現代語訳】私を待つといつてあなたが夜露にお濡れになったという、その山の雪に私がなればよかったのに。

【語句】○きみがぬれけん 助動詞「けむ」は、ここは過去の事柄についての伝聞を表し、贈歌の内容を指して「……たとかいう」の意であり、連体形。この句は「山の雪」にかかる。○ならまし物を 実際そうではないが……だったらよかったろうに、の意の「まし」に、逆接条件を表す接続助詞「ものを」が付いた形。山の雪であつたならずつと寄り添っていられたであろうに、という気持である。

【所載】続後撰集・恋二・七八七／万葉集・一〇八 吾乎待跡 君之沾計武 足日本能 山之四附二 成益物平ワレマツトキミガヌレケムアシヒキノヤマノシヅクニナラマシモノヲ わをまつときみがぬれけむあしひきのやまのしづくにならましものを／夫木抄・七九〇二／古来風体抄・三〇

【参考】作者名「石川女郎」は、所載欄の万葉集では「石川郎女」とあり、五八九番に対する返歌。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

五九一 このはちるあきのしづくにそほちつゝしかのたびねによひ／ぞなく

つらゆきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉が散る秋の雪にしとどに濡れながら、鹿が旅寝で夜ごと鳴くように、私も旅にあつて毎夜泣いています。

【語句】○このはちるあき 木の葉散る秋。「うちつけに物ぞ悲しき木の葉散る秋の初めをけふぞと思へば」（後撰集・二一八）のごとく、秋が悲しい季節であることを暗示する。「木の葉散る秋の山べはうかりけりたへでや鹿のひとり鳴くらん」（金槐集・三一〇）、「木の葉散る峰のあらしに夢さめて涙もよほす鹿の声かな」（散木奇歌集・四四八・夜深聞鹿）などは影響歌。○あきのしづくにそほちつゝ 「もりのしづく」「軒のしづく」、「袖のしづく」「山のしづく」などといった造語は多いが、「秋のしづく」はこの歌のみである。「そほちつゝ」は、内部まで濡れ通りながら。「心から花のしづくにそほちつゝうくひずとのみ鳥のなくらむ」（古今集・物名・四二二）。○しかのたびね 「旅寝」は、自宅を離れて別のところで寝ること。「鹿の旅寝」という例は他にないが、旅寝で

鹿鳴を聞く寂しさを詠んだものとして、「なにゆゑに都のほかには旅寝して鹿の鳴く音をそふらん」（弁乳母集・二九）、「旅寝するさよの中山さよ中に鹿も鳴くなり妻や恋しき」（為仲集・一三四）などがある。

【所載】ナシ

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、貫之集には見られない。

五九二 きくのはなしづくをちそひゆく水のふかきこゝろとたれかしるらん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】菊の花から滴る雪が落ち添って流れが深くなる、そのようにあなたの長寿を祈る私の心の深さは誰も知らないのです。

【語句】○きくのはなしづくをちそひ 菊の花の雪が落ち添って。菊の露が長寿をもたらすという故事による。一八七番歌「九日」の項参照。「水にさへ流れて深き我が宿は菊の淵とぞなりぬべらなる」（貫之集・五四二）など例歌は多い。雪ではないが、涙が落ち添って川が深くなるというものは、やはり貫之によって「君惜しむ涙落ちそふこの川のみぎはまさりて流るべらなり」（貫之集・七三〇）と詠まれている。○ふかきこゝろとたれかしるらん「たれか」は反語。「菊水の深さを誰が知りましよう。誰にも知りえないほどのあなたさまの深いお心に思いをいたしております」（新潮日本古典集成『貫之集』頭注）と、慶賀される人物の長寿をことほぐとともに陰徳を称えたとする解釈もあるが、「飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山の深き心を人は知らなむ」（古今集・五三五）のごとく、自分の心の深さを知る人もいないという意とみて、歌の主体である画中人物、さらには慶賀者の心とする。

【所載】貫之集Ⅰ・五八

【参考】作者名「つらゆき」とあり、貫之集に入集する。歌仙家集本貫之集の詞書「延喜十五年九月廿二日右大將御六十賀清和の七宮御息所のつかうまつりたまひける時屏風料歌四首」によれば、清和帝の七宮（貞辰親王）の母御息所佳珠子が、右大將藤原道明の賀を行ったことになるが、両者の関係が不明のため、山崎正伸「貫之集における御息所について」『解釈』三九巻五号、一九九三年五月）は、清和帝の七宮（貞辰親王）の母御息所の佳珠子の賀を、右大臣忠平が行ったとする西本願寺本の詞書を妥当であろうとする。

五九三 すゑのつゆもとのしづくやよのなかのをくれさきだつためしなるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】葉末に宿る露と根元に滴る雫は、遅速の差はあつてもついには落ちて消えゆくもの、それは人に後れたり先立ったりして死にゆくこの世の慣らいであらうか。

【語句】○すゑのつゆ 枝の先端に置く露。○もとのしづく 草木の根元の水の滴り。○をくれさきだつ おくれさきだつ。人に後れたり、先立ったりしてあの世にゆく。「風早み萩の葉ごとにおく露のおくれ先だつほどのはかなさ」（新古今集・一八四九）。「末の露もとのしづく」とともに歌のなかでの対。○ためし 例。先例。証拠。

【所載】新古今集・哀傷・七五七／和漢朗詠集・無常・七九八／遍昭集Ⅰ・五／遍昭集Ⅱ・五／前十五番歌合・六／俊成三十六人歌合・二四／時代不同歌合・三五／三十人撰・四一／三十六人撰・五〇／深窓秘抄・八五／近代秀歌・五七／詠歌大概・六六／平家物語（延慶本）・二四六

【参考】作者名はないが、新古今集、和漢朗詠集では遍昭の作。遍昭集にも載る。

またこの歌は、法華経・方便品において、諸法の実相のあり方を示す十の範疇「十如是」（相・性・体・力作・因・縁・果・報・本末究竟等）の一つで、「相」から「報」に至るまでの九つの事柄が究極的には平等であるという「本末究竟等」の思想によって無常観を表したものの（中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）。やや後代のものだが、参考歌として次のものがある。

本末究竟等

後京極摂政前太政大臣

末の露もとの雫を一つぞと思ひはてても袖はぬれけり（続拾遺集・釈教・一三四四）

五九四 ほとゝぎすまつときなかずこのくれやしづくをおほみみちやよくらむ

つらゆき或本

【異同】つらゆき 或本——つらゆき（大）

【現代語訳】ほととぎすは待っているもやって来て鳴いてくれない。木が小暗く繁っているあたりは雫が多いの道を避けて通るからなのだろうか。

【語句】○まつときなかず 「まつと」の「と」は、逆接の仮定条件をあらわす接続助詞。「きなかず」は、「来

鳴かず。待っていてもやって来て鳴かない。所載欄の家持集「まつによふけぬ」の方がわかりやすいが、万葉集の家持歌「ほととぎす待てど来鳴かずあやめぐさ玉に貫く日をいまだ遠みか」(一四九四(旧一四九〇))に見られるごとく、郭公は待っていてもなかなか声を聞くことができない意とみて、本文通りに解す。○このくれや「このくれ」は、木の暗。木が繁つて下蔭が暗くなること。「木の暗の茂き峰の上をほととぎす鳴きて越ゆなり今し来らしも」(万葉集・四三二九(旧四三〇五)・家持)。「や」は詠嘆。○しづくをおほみ しづくが多いので。

【所載】家持集Ⅰ・八一／家持集Ⅱ・七三／新撰和歌・一四三

【参考】作者名は「つらゆき<sup>或本</sup>」となっているが、貫之集には見られず、家持集に入集する。

五九五 あしひきのやまのもみぢにしづくあひてをつるやまべをきみやこゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】山の紅葉に雪までが加わって落ちる山辺をあなたは越えているのだろうか。

【語句】○しづくあひてをつる しづくあひておつる。「あふ」は二つ以上のものが一つになる。紅葉に雪までが加わって落ちる。山路の労苦をいう。

【所載】万葉集・四二四九(旧四二二五) 足日木之 山黄葉尔 四頭久相而 将落山道乎 公之超麻久 アシヒキノヤマノモミチニシヅクアヒテチラムヤマヂヲキミガコエマク あしひきのやまのもみぢにしづくあひてちらむやまぢをきみがこえまく／僻案抄・二七

【参考】五九七番に「已上三首つらゆき」とあるが、所載欄の万葉集の左注「右一首同月十六日餞之朝集使少目秦伊美吉石竹時守大伴宿祢家持作之」によれば、家持の作である。

〔以上五首担当 中野〕

五九六 ほととぎすいくこゑなきししづくにかあやめもしらぬゝれぎぬはきし

【異同】ナシ

【現代語訳】ほととぎすよ。いったい幾声鳴いた涙のしづくで、そんなにいわれもない濡れ衣を着たのかね。

【語句】○いくこゑなきししづくにか いっぱい幾声鳴いた涙の、そのしづくによつてなのか。「鳴く」に「泣く」を掛けた。○あやめもしらぬ 条理の立たない。いわれない。条理、筋目の意の「あやめ」に、植物のア

ヤメ(菖蒲)を掛けた。「ほととぎす」と「アヤメ」は、共に五月の景物。「ほととぎすなくやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もするかな」(古今集・四六九)。○ぬれぎぬ 根拠のない非難。根も葉もない噂。ここは恋の濡れ衣であろう。

【所載】ナシ

【参考】五九七番に「已上三首つらゆき」とあるが、この歌は貫之集にもなく、これを貫之の作とする文献も他に見出せない。

五九七 こゝろからはなのしづくにそほちつゝうくひずとのみとりのなくらむ

已上三首つらゆき

【異同】已上三首つらゆき―已上二首つらゆき(御・桂・大)

【現代語訳】わが心から好んで花のしづくにぬれていながら、どうして、つらいことに乾かないよとばかり、あの鳥は鳴いているのかな。

【語句】○こゝろから わが心から。自分の気持から。○そほちつゝ 中までしみとおるほどぬれながら。○うくひずとのみ 憂く干ずとのみ。つらいことに乾かないよ、とばかり。「憂く干ず」に物名として「うぐひす」を詠み隠す。

【所載】古今集・物名・四二／敏行集・二四／三十人撰・六七／三十六人撰・九一

【参考】「已上三首つらゆき」とあるが、五九五、五九六番歌も問題があり、当該歌も所載欄の文献すべてが藤原敏行の作としている。

五九八 むまたまのくろかみやまをけふこえてしづくにいたくぬれにけるかな

けさい  
あさい

人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】黒髪山をきょう越えて、山のしづくにひどくぬれてしまったなあ。

【語句】○むまたまの 「ぬばたまの」に同じ。「くろ」にかかる枕詞。○くろかみやま 黒髪山。奈良市の北

に連なる佐保佐紀丘陵の東北部分の丘。○いたく はなはだしく。ひどく。

【所載】古今六帖「山」八六三／続古今集・羈旅・八七一／万葉集・一二四五（旧一二四一）黒玉之 玄髪山乎 朝越而 山下露尔 沾来鴨 ヌバタマノクロカミヤマヲアサコエテヤマシタツユニヌレニケルカモ ぬばたまのくろかみやまをあさこえてやましたつゆにぬれにけるかも／人麿集Ⅱ・二〇五／人麿集Ⅲ・六〇四／人麿集Ⅳ・一六／綺語抄・一一八／袖中抄・四四五

【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。

五九九 をるきくのしづくをおほみわかゆくさかゆてふイ トテイにぬれぎぬをこそおいの身にきれ たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】（一九五番既出。ただし第三句が異なる。）手折る菊のしづくが多いので、それにぬれて若やいでゆき、若返るという（ありもせぬ）ぬれぎぬを老いの身に着ることだ。

【語句】○わかゆくに 意味のとりにくい語だが、既出の一九五番歌や、所載欄の諸文献、忠岑集・貫之集などの「わかゆてふ」を参考にし、「若行くに」と解した。

【所載】古今六帖「九日」一九五番既出

六〇〇 にほふかのきみおもほゆるはなゝればいせをれるしづくにけさぞぬれぬる そでイ

【異同】ナシ

【現代語訳】かぐわしい香りの、あなたのことが思われる花ですから、手折ったしづくによって（あなたのことがしのばれて）けさは袖がぬれたことです。

【語句】○にほふかの 匂う香の。におい立つ香りの。文脈上は「はなゝれば」へつづく。「にほふかのしるべならずは梅の花くらぶの山に折りまどはまし」（中務集Ⅰ・七八）。○をれるしづくに 手折ったときにこぼれ落ちたしづくによって。○けさぞぬれぬる けさこそぬれたことだ。「ぬれ」るのは、この場合、袖であろう。

【所載】伊勢集Ⅰ・三三五／伊勢集Ⅲ・三四三



【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

六〇一 しもゆきのきえてうき身のしづくこそそでたわむまでさえかゝりけれ  
をなじ

【異同】ナシ

【現代語訳】霜や雪が消えて滴る雪のように、憂き我が身が流す涙の雪こそは、袖がたわむほどに冷え冷えと滴り掛かることよ。

【語句】○しもゆきのきえてうき身 霜や雪がはかなく消えるように消えてしまいそうな、はかなくつらい我が身。「流れての世をもたのまず水の上のあわに消えぬるうき身とおもへば」（後撰集・一一一五）。○しづく 霜や雪が解けて滴る雪と、憂き身の雪すなわち涙とを表す。「いはしろの森のいはじと思へどもしづくにぬる身をいかにせん」（恵慶法師集・二五〇）。「うき身より木ごとしづくはこぼるともいつまもらばかもあるもしるべき」（伊勢集・四七五）。○さえかゝりけれ 冴え掛かりけれ。「さえ」は冷え冷えとつめたいさま。「けれ」は詠嘆。「こそ」の結びで已然形となっている。所載欄の伊勢集Ⅲでは、「さやけかりけれ」。

【所載】伊勢集Ⅱ・三四二／伊勢集Ⅲ・三四七

【参考】作者について「をなじ」とあるのは、六〇〇番に「伊勢」とあるのをさす。当該歌も伊勢集に見える。

六〇二 冬すぎてはるたちぬらしあさ日さすかすがのやまにかすみたなびく  
かすみ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬が過ぎて春になったらしい。朝日のさす春日の山に霞がたなびいている。

【語句】◎かすみ 霞。春の代表的な景物であり、春になったことを知らせるものとして和歌に詠まれる。「昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり」（万葉集・一八四七（旧一八四三））、「鶯の春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども」（万葉集・一八四九（旧一八四五））。○かすがのやま 春日山。大和国の歌枕。現在の奈良市街地東方、春日神社の背後の山。所載欄の文献のうち、赤人集Ⅰでは「しかのやまへに」。

【所載】新勅撰集・春上・四／万葉集・一八四八（旧一八四四）、寒過 暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞輕引 フユスギテハルハキヌラシアサヒサスカスガノヤマニカスミタナビク ふゆすぎてはるきたるらしあさひさすかすがのやまにかすみたなびく／人麿集Ⅲ・一六／赤人集Ⅰ・一四二／赤人集Ⅱ・二五／赤人集Ⅲ・二八

【参考】人麿集・赤人集に入るが、当該歌は万葉集にも作者名はなく、新勅撰集も「よみ人知らず」とする。

六〇三 はるがすみたてるやいづこみよしのゝよしのゝやまにゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞が立っているのはどこだろう。み吉野の吉野の山に雪は降っていないながら……。

【語句】○よしのゝやま 大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪の名所として、春になって他所よりも遅くまで雪が降る所として和歌に詠まれた。「吉野山雪はふりつつ春霞たつは春日の野辺にさりける」（躬恒集・二五五）、「春霞たちにしものをいまもなほ吉野の山に雪のみぞふる」（躬恒集・三〇九）。○ゆきはふりつゝ 雪は降っていないながら。「つゝ」は、動作が反復・継続して行われるのと並行して、他の事態が存在することを表す接続助詞。歌の最後にあると、余情を込めた詠嘆の措辞となる。

【所載】古今集・春上・三／新撰和歌・三／和漢朗詠集・七八／秀歌大体・四／俊頼髓脳・一一五／和歌初学抄・一一七／古来風体抄・二二七／無名抄・二／西行上人談抄・一／和歌口伝・四四

六〇四 ひとしれずおもふこゝろははるがすみたちいでゝきみがめにもみえなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れず思う私の心は、春霞が立ち現れるように現れ出て、あなたの目にも見えてほしいものです。

【語句】○たちいでゝ 霞が生じる意と、自分の心が外に現れる意とを掛け、「春霞」によって導き出されている。「春くれば花見んとおもふ心こそ野べのかすみとともにたちいづれ」（古今六帖・一二一一）、「くもゐにもなりけるかな春山のかすみたちいでてほどやへぬらん」（一条摂政御集・一五八）。

【所載】古今集・雑下・九九九／新撰和歌・二〇三

【参考】古今集には、「ふちはらのちちおむ」が「寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける」（九九八詞書）歌として見え、これによると「きみ」は宇多天皇を指すことになる。古今六帖で詠歌事情と切り離して当

該歌のみを見ると、「きみ」は恋しい人を指すようにも読める。なお、片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、古今集九九九番歌について、作者の藤原勝臣は清和天皇の貞観年間に活躍した人物であることから、「題知らず」とする異文に従って「誰だかわからぬが、高貴なあたりから歌を召されて奉った時に、みずからの思いを訴えた歌と見るべきか」としている。

六〇五 かはとみるみちだにあるを春がすみかすめるかたのはるかなるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あれが私の行く道だと思つて見る道でさえ遙かに遠いの、春霞が霞んでいる行く手の方はなおさら遙かなことだよ。

【語句】○かは 彼は。あれは。「おもへども人めづつみのたかければかはと見ながらそこそわたらね」（古今集・六五九）。○だにあるを ……でさえ……なのに。「……なのに」の部分に後出の意味内容を補つて解釈する語法（原田芳起『平安時代文学語彙の研究』風間書房、一九六二年、中村幸弘・碁石雅利『古典語の構文』おうふう、二〇〇〇年）。当該歌の場合は、第五句の「はるかなる」を補つて訳した。

【所載】貫之集Ⅰ・三七一

【参考】作者名はないが、貫之集には「天慶三年四月右大將殿御屏風の歌廿首」のうちの一首として収める。なお貫之集の詞書に見える「右大將」は藤原実頼。「天慶三年」は「二年」（九三九）の誤り（新潮日本古典集成『土佐日記 貫之集』という。

〔以上五首担当 長戸〕

六〇六 やまかぜの花のかかどふふもとにははるのかすみぞほだしなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】山風が花の香りを誘い出そうとしているその麓では、春の霞がさまたげとなって（花を隠して）いることだ。

【語句】○かどふ だまして誘い出す。誘惑する。和歌での用例は他に見出せない。新撰字鏡に「詠 玄音折曲也 加止不 又久自久」とある。○ほだし 人を束縛するもの。人の妨げとなるもの。ここでは「山風」と「春

の霞」それぞれを擬人化する。

【所載】後撰集・春中・七三／興風集Ⅰ・一九／興風集Ⅱ・五／和歌童蒙抄・六六

【参考】後撰集の詞書によると、古今集に入る僧正遍昭の「花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」（春下・九一）の歌の心を詠めという宇多天皇の求めに応じたもの。

六〇七 春のきるかすみのころもぬきをうすみやまかぜにこそみだるべらなれ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の着ている霞の衣は横糸が薄く弱いので、山風に乱れているようだ。

【語句】○春のきる 「春」を擬人化して、霞の衣を身にまとうという趣向。○ぬきをうすみ 「ぬき」は、織物の横糸。「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦の織ればかつ散る」（古今集・秋下・二九一）。「み」は接尾語。形容詞語幹に付き「……を……み」の形で「……が……で」の意。

【所載】古今集・春上・二三／新撰和歌・七三／和歌童蒙抄・六五／桐火桶・四三／悦目抄・三〇

六〇八 しがらきのみねたちこゆるはるがすみはれずもゝのをおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】信楽の峰を越えるほどまでにたちこめた春霞が晴れる気配のないように、私の心も晴れる時なく、物思いをし続けているよ。

【語句】○しがらき 滋賀県甲賀市の一部（旧、甲賀郡信楽町）。紫香楽宮（聖武天皇）の置かれた地。万葉集・古今集・後撰集には見られない。「春たちてほどはへぬらししがらきの山は霞にうづもれにけり」（重之集・二二六）、「昨日かもあられふりしはしがらきと山の霞春めきにけり」（詞花集・二、寛和二年六月十日内裏歌合・二二）など平安中期から用例が見出せるようになり、春霞との結びつきが強い。○はれずも 春霞が晴れないの意と自分の心が晴れないの意を掛ける。「秋山にあさたつ霧のみねこめてはれずもものを思ふべらなる」（是則集・二九）。

【所載】古今六帖「岑」一〇〇八

六〇九 きみがなもまだきもをな<sup>まだきイ</sup>じはるがすみ野にもやまにもたちみちにけり

【異同】またきもをなし—わか名もおなし（御・桂・大）  
まだきイ

【現代語訳】あなたのうわさも私のうわさも同じように、春霞が野にも山にもたちこめるように、あちらこちらに広まってしまったことだ。

【語句】○まだきもおなじ 他本ではいずれも「わが名もおなじ」とあり、それに従う。○のにもやまにも 野にも山にも、から、あちらこちら至るところに通じる。「いづこにか世をばいとはむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ」（古今集・九四七）、「人目をいまはつつまじ春霞野にも山にも名は立たば立て」（躬恒集・二〇一）。○たちみちにけり 「たち」は、霞が立つ意と噂が立つ意とを掛ける。

【所載】古今集・恋三・六七五

六一〇 こゝろうきものにざりけるはるがすみたなびくときにこひのしげきは  
ぞあい

【異同】ナシ

【現代語訳】つらいものであったなあ。春霞のたなびく時に恋の思いが募ってくるのは。

【語句】○こゝろうき つらい。所載欄の万葉集では「心ぐき」とあり、心が晴れ晴れとしない様の意。「坂上郎女、大伴家持たち周辺で好まれた言葉」（伊藤博『萬葉集釋注』）、「春日山霞たなびき心ぐく照れる月夜にひとりかも寝む」（万葉集・七三八（旧七三五））「心ぐく思ほゆるかも春霞たなびくときに言の通へば」（万葉集・七九二（旧七八九））。○はるがすみたなびくときに 立ちこめた春霞に、拭い去ることのできない恋情を重ね合わせる発想の歌は「春霞たなびく今日の夕月夜おぼつかなくもこひわたるかな」（古今六帖「知らぬ人」二五二九）、「春霞たなびく空は人知れず我が身より立つけぶりなりけり」（兼盛集・一六）など。○こひのしげきは 「こひのしげき」という形が万葉集に八例（……は）はこの歌のみ。以後ほとんど用いられない。「木綿懸けて斎（いは）ふこの神社（もり）越えぬべく思ほゆるかも恋の繁きに」（万葉集・一三八二（旧一三七八））、「夢にだに何かも見えぬ見ゆれども我かもまどふ恋の繁きに」（万葉集・二六〇〇（旧二五九五））。平安期の例では「夕月夜あかつきかげのあさかげに我が身はなりぬ恋のしげきに」（猿丸集・四四）、「奥山の昔の根しのぎふる雪のけぬとかいはむ恋のしげきに」（古今集・五五二）と比較的古いものとどまる。

【所載】新続古今集・恋五・一五〇一／万葉集・一四五四（旧一四五〇） 情具伎 物尔曾有鶏類 春霞 多奈引 時尔 恋乃繁者 ココログキモノニゾアリケルハルカスミタナビクトキノコヒノシゲレバ こころぐきものにぞ

ありけるはるかすみたなびくときにこひのしげきは

〔以上五首担当 青木〕

六一一 やまごと<sup>ニ</sup>にたちもかくすか春がすみ人にしられぬはなやさくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】どの山にもどの山にも立ちこめて隠していることか、春霞よ。霞の向こうでは人に知られぬ花が咲いていることだろうか。

【語句】○やまごと<sup>ニ</sup>に 山という山にみな。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらむ」（古今集・春下・九四・貫之）がある。

六一二 花のいろをやすくもみせずたちかくすかすみぞつらきはるのやまべは

【異同】ナシ

【現代語訳】美しい花の色を簡単には見せてくれず、立ち隠している霞が何ともつれないことだ、春の山辺は。

【語句】○花のいろ 花の容色。「花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」（古今集・九一）、「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（古今集・一一三）。○やすくもみせず もつたいぶつて、容易には見せてくれず。「散りぬべき山の紅葉を秋ぎりのやすくもみせず立ちかくすらん」（拾遺集・二〇六）。

【所載】ナシ

【参考】類歌「立ち隠す霞ぞつらき山ざくら風だにのこす花のかたみを」（肥後集・五四）。

六一三 はるがすみてにしとらればやまがつのころもにいまはたちぞきてまし<sup>もイ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】あのたなびいている霞がもし手に取ることができたら、木こりなどはきつといま着物に仕立てて着ているに違いないでしょうに。

【語句】○てにしとられば 手に取ることができたなら。「し」は強めの副助詞、「れ」は可能な助動詞の未然形、「ば」は順接仮定条件をあらわす接続助詞。○やまがつの 「やまがつ」は木こりや猟師、炭焼きなど、山で働く人。「の」はここでは主格。○たちぞきてまし きつと裁つて着たであろうに。複合動詞「裁ち着る」の間に強意の係助詞「ぞ」が割って入り、完了の助動詞「つ」の未然形と仮定の助動詞「まし」とを伴った形。「まし」は「ぞ」との係り結びでここは連体形。なお「てまし」は一般に、非現実的な事柄についての推量を、ほとんど実現するかのようにな強くあらわす。また「たち」は「裁ち」と「立ち」の掛詞で、「立ち」は「霞」の縁語。

【所載】ナシ

【参考】たなびく霞を衣に見立てる歌としては、「春の着る霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ」（古今集・春上・二三・在原行平）が有名。「霞衣霞錦千般状 雲峰雲岫百重生」（石淙詩・唐中宗）「霞衣席上転 花袖雪前明」（舞詩・李喬）など、唐詩からの影響を受けている。

六一四 やまがつのなげきこりつむいほりにはかすみやきつゝけぶりともなる

【異同】ナシ

【現代語訳】木こりなどが薪を伐り、つらい思いを重ねながら暮らしている庵には、霞が立ち、それがあの煙となっているのだろうか。

【語句】○やまがつ 六一三番歌参照。○なげきこりつむ 「なげき」は、「投げ木」と「嘆き」の掛詞。「投げ木」は薪の意。薪を伐り積む、嘆きを重ねる。「なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり」（古今集・一〇五七）。○かすみやきつゝ 意不明。あるいは「霞や来つゝ」で、「かすみ」に「炭」の意をこめ、炭を焼きながら、ちょうど霞が立っているの、それが煙ともなっている、の意にもとれそうに思われるが、無理であろうか。夫木抄には「かすみやたちて」とあり、一応その本文に従った。

【所載】夫木抄・一六七―

六一五 かすみたつやまのこゝろはしらねどもこのはかきわけいらむとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】霞のかかっている春の山の気持ちは知らないけれど、私は敢えて木の葉をかきわけかきわけ入ろうと思っています。

【語句】○かすみたつやまのこゝろ 霞立つ春の山の気持ち。○このはかきわけ 秋ないし冬の情景をいうか。「このは」は散り積もった落ち葉をいうのであろう。

【所載】ナシ

【参考】どういう折に、どういうことを言おうとして詠んだ歌なのか、「かすみたつやまのこゝろ」に女性の面影があるようでもあり、恋の歌かもしれないが、はつきりしない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

六一六 うぐひすのはかぜをさむみかすが野のかすみのころもいま<sup>けさはイ</sup>やたつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯の羽風が寒いので、春日野が霞の衣を着ようとして、今裁っているのでしょうか。（春日野に霞が今立っているのでしょうか。）

【語句】○はかぜ 鳥や虫が羽を動かすことによつて生ずる風。○かすが野 奈良市の春日山西麓の野。所載欄の宇津保物語・風葉集では第三句「春日山」。○かすみのころも 霞を衣に見立てた表現。「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ」（古今集・二三）。○いまやたつらん 「たつ」は「霞が」立つ」と「衣を」裁つ」を掛ける。「裁つ」は「衣」の縁語。所載欄の続後撰集では「いまはたつらん」、宇津保物語では「けさはたつかも」。

【所載】続後撰集・春上・一七／風葉集・三／宇津保物語・一三六

六一七 こゝにしてかすがのやまを見わたせばこまつがえだにかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】ここから春日の山を見渡すと、小松を引くかのように、小松の枝の所に霞がたなびいていることです。



【語句】○こゝにして　ここにおいて。「に」しては「……にあつて」「……に居て」の意。所載欄の続古今集などは「ここにきて」とする。○かすがのやま　奈良市の春日神社の後方にある山。所載欄の続古今集では「かすがのさと」、人麿集Ⅱでは「かすがのはら」。○こまつがえだに　「こまつ」は小さな松。正月最初の子の日には、野辺に出て若菜を摘み小松を引き抜いて長寿を祈る、小松引き（子の日の遊び）という行事が行われた。「千代ふべき春日ののべのひめこ松ながくたもてるためしにぞひく」（玄玉集・三七三）。所載欄の続古今集・人麿集Ⅱでは「こまつのうち」に、人麿集Ⅲ・万代集では「こまつのはだに」。○かすみたなびく　「たなびく」の「ひく」に、人ならぬ霞が小松を引いている意を掛けた表現。「ねのびする人なきのべのひめこまつかすみにのみやたなびかるらん」（教長集・一九）。

【所載】続古今集・春上・四一／万代集・二六／人麿集Ⅱ・二二／人麿集Ⅲ・一七／人麿集Ⅳ・一〇八

六一八　山のはを見ざらましかばはるがすみたてるもしらでへぬべかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山の端をもしも見なかったなら、春霞が立って、春が来たのも知らずにすごしてしまうところでしたよ。

【語句】○山のは　山の端。遠く望んだ山の、空に接する部分。○はるがすみたてる　「春霞が立つ」に「春が立つ」即ち立春を掛ける。

【所載】貫之集Ⅰ・九七

【参考】貫之集の詞書によると、醍醐天皇の第四皇女勤子内親王の御髪上げの屏風のために詠まれた歌である。

六一九　まきもくのひばらのかすみたちかへりみれども花におどろかれつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】巻向の檜原に霞が立つ。その「立つ」ではないが、立ち返り（繰り返し）見ても花の美しさに驚いてしまいますよ。

【語句】○まきもくのひばら　巻向の檜原。奈良県桜井市北部の地区の檜原。大和国の歌枕。霞や若菜・雪の歌が多く詠まれた。所載欄の夫木抄では二句まで「まきもくのくひばらの山に」。○たちかへり　繰り返し。「たち」

に「霞が」立ち」を掛ける。二句までは「たちかへり」の序詞。○花におどろかれつゝ 所載欄の寛平御時后宮歌合では「花のおどろかれつゝ」、人麿集では「花のあかずもあるかな」。

【所載】新撰万葉集・一七／夫木抄・一一〇〇／人麿集Ⅲ・五九／寛平御時后宮歌合・二七

【参考】拾遺集八一六番には「まきもくのひばらの霞立返りかくこそは見めあかぬ君かな」という上三句の同じ歌がある。

六二〇 はるがすみいろの千くさにみえつるはたなびくやまのはなのかげかも

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞の色が様々に見えたのは、霞がたなびいている山に咲く花が映っている影だったのだなあ。

【語句】○千くさに 千種に。様々に。(花や紅葉の)色の種類が多いことを表す。○みえつるは 見えたのは。

「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形で、近い過去を表す。所載欄の興風集Ⅱでは「みつるは」。○はなのかげ 花が霞に映った影。○かも 詠嘆の表現。古今集の注釈書では当該歌の「かも」を疑問の表現とする説もある。

【所載】古今集・春下・一〇二／新撰万葉集・二五／興風集Ⅰ・三／興風集Ⅱ・四／寛平御時后宮歌合・三七／俊頼髓脳・一七〇

【参考】古今集一〇一番歌に作者名「藤原おきかぜ」とあり、寛平御時后宮歌合にも作者名「興風」とある。新撰万葉集と俊頼髓脳では作者名記載なし。

〔以上五首担当 三浦〕

六二一 われをこそとふにうからめはるがすみはなにつけてもたちよらぬかな

【異同】ナシ

【現代語訳】私のところへこそ訪れるとなると気がすすまないでしょうが、花にかこつけてでも、春霞が立つように立ちよってくれないかしら。

【語句】○うからめ 「憂からむ」の已然形。「こそ」の結び。○はなにつけても 花にかこつけてでも。所載欄後撰集の詞書に「あひしれりける人のひさしうとはざりければ、花盛りにつかはしける」とある。○たちよらぬかな 「立ち寄らぬ」に霞が「立ち」をかける。

【所載】後撰集・春下・一一三

六二二 うつくしきいもおもふとかすみたつはる日もくれにこひわたるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしいあの人を思っていると、霞の立つ長い春の日も暮れるまで恋い続けてしまうことよ。

【語句】○いも 男が女を親しんで言う語。○はる日もくれに 長い春の日も暮れるまで。○こひわたる 恋い続ける。

【所載】万葉集・一九一五（旧一九一一）左丹頰経 妹乎念登 霞立 春日毛晩尔 恋度可母 サニツラフイモ  
ヲオモフトカスミタツハルヒモクレニコヒワタルカモ さにつらふいもおもふとかすみたつはるひもくれにこひわたるかも／綺語抄・三二三／袖中抄・一六四

六二三 せながてをまきもくやまをこのゆふべこのはしのぎてかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい夫の手を巻くと言う名の、巻向山にはこの夕方、木の葉に覆いかぶさるように霞がたなびいている。

【語句】○せながてを 「せな」は女が夫または親しい男を呼ぶ語。いとしい夫の手を巻く意から同音の「巻向（まきもく）山」にかかる。所載欄の文献には「こらがてを」「とくかみを」などとするものがある。○まきもくやま 奈良県桜井市北部の山。痛足山（あなしやま）東南の弓月ヶ岳と合わせていう時もある。○しのぎて 対象に覆い被さるように。

【所載】風雅集・春上・三一／万葉集・一八一九（旧一八一五）子等我手乎 巻向山丹 春去者 木葉凌而 霞  
霏微 コラガテヲマキモクヤマニハルサレバコノハシノギテカスミタナビク こらがてをまきむくやまにはるさればこのはしのぎてかすみたなびく／夫木抄・五〇一、八五八七／人麿集Ⅲ・二〇／赤人集Ⅰ・一二三／赤人集Ⅱ・六／赤人集Ⅲ・三／和歌一字抄・一〇六五／袋草紙・七二一／袖中抄・六二五

六二四 かげろふのゆふさりくればさと人のつゆをきかたにかすみたなびく

ゆくべきイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると里の人が帰っていく方向には、露が置き霞がたなびいているよ。

【語句】○かげろふの 枕詞。はかないものたえとして、「あるかなきか」「それかあらぬか」などにかかるが、当該歌の原歌と思われる所載欄万葉集の訓は「かげろふの」と「たまかぎる」があり、「たまかぎる」ならば玉がほのかに光を出すことから「夕」「日」にかかる枕詞となる。○つゆをきかた 里人が露の置いている方へ帰って行くと。傍記の本文によって解釈した。

【所載】万葉集・一八二〇（旧一八一六）玉蜻 夕去来者 佐豆人之 弓月我高荷 霞霏霏 カゲロフノユフサ  
リクレバサツヒトノユツキガタケニカスミタナビク たまかぎるゆふさりくればさつひとのゆつきがたけにかす  
みたなびく／夫木抄・九一〇一／人麿集Ⅲ・一九／赤人集Ⅰ・一二五／赤人集Ⅱ・八／赤人集Ⅲ・四

六二五 このなかにさよのよろしきあづまのい<sup>あづまのイ</sup>みかた山のべにかすみたなびく<sup>ぎしイ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】木立の中に梓弓にするのに良い木がある。その木の有る山の片側には霞がたなびいている。

【語句】○このなかに 木立の中に。○さよのよろしき 「さよの」はよろしきを言い出す語か。所載欄万葉集は「関之宜」とあり、「ツケノヨロシキ」、「かけのよろしき」と訓じている。○あづさゆみ 梓の木で作った弓。呪力のあるものとされた。○かた山のべ 山の片側の所。山裾の丘のあたり。

【所載】万葉集・一八二二（旧一八一八）子等名丹 関之宜 朝妻之 片山木之尔 霞多奈引 コラガナニツケ  
ノヨロシキアサヅマノカタヤマキシニカスミタナビク こらがなにかけのよろしきあづまのかたやまきしにか  
すみたなびく／夫木抄・八七〇二／人麿集Ⅲ・二二／赤人集Ⅱ・二三七／赤人集Ⅲ・六

〔以上五首担当 橋本・林〕

六二六 たまきはるわがやどのうへにたつかすみたちてもゐてもかみのまに／

【異同】ナシ

【現代語訳】私の家の上に立つ霞は、立つのも座るのも神のご意志のままです。

【語句】○たまきはる 枕詞。命・うち・世などにかかるほか、「たま」は玉で、玉の輪を刻む意から、同音の「我（わ）」にかかるという。ここでは「わが」の「わ」にかかるか。「たつかすみ」までが「たち」を導く序詞。○かみのまに／＼ 所載欄の綺語抄などは万葉集と同じく「きみのまにまに」。「まにまに」は、……の思うとおりに、の意。「このたびはぬさもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」（古今集・四二〇）。

【所載】万葉集・一九一六（旧一九一二） 靈寸春 吾山之於尔 立霞 雖立雖座 君之随意 タマキハルワガヤ マノウヘニタツカスミタテモキミガマニマニ たまきはるわがやまのうへにたつかすみたつともうとも きみがまにまに／綺語抄・三九七／袖中抄・四一二

六二七 見わたせばかすがのつゞきたつかすみまくのほしききみがすがたか

【異同】ナシ

【現代語訳】見渡すと春日の山の峰続きに霞が立っている。その霞のようにいつも見ていたものだ、あなたの姿よ。

【語句】○かすがのつゞき 万葉集・赤人集では「春日の野辺に」。「かすがのつゞき」の用例は新編国歌大観中、当該歌と建長八年百首歌合の二例のみ。金葉集・源師光の「かすがやまみねつづきてる月かげにしられぬたにのまつもありけり」（五三七）の用例などから考えると、春日山の峰続きを略した形か。○みまくのほしき 見ていたい。上三句、いつも立っている霞のように、いつもいつも、の意と解釈した。

【所載】万葉集・一九一七（旧一九一三） 見渡者 春日之野辺 立霞 見卷之欲 君之容儀香 ミワタセバカス ガノノヘニタツカスミミマクノホシキキミガスガタカ みわたせばかすがのへにたつかすみまくのほしききみがすがたか／赤人Ⅰ・一九三

六二八 あしひきの山のへた／＼見えつるははるのかすみのたてるなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】連なっている山が「へたへた」見えるのは、春の霞が立っているからだつたよ。

【語句】○へた／＼ 互いに間が隔たっている意の「へだへだ（隔隔）」、あるいは「へた（端）」などが考えられるが、和歌では他の用例が見いだせない。「へだて／＼」の誤写か。所載欄の新後拾遺集では「たえだえ」とあ

る。○なりけり「……は……なりけり」の形で「……なのは、……であつた」。気づきの表現。「山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」(古今集・三〇三)。

【所載】新後拾遺集・春上・三六

六二九　ときはいまはるになりぬとみゆきふるとをきやまべにかすみたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】今がちょうど春になつたと、雪の降る遠い山辺にも霞がたなびいていることだ。

【語句】○ときはいまは　今がちょうどその時とばかりに。所載欄の万葉集では「今者」の「者」は助字と解する。建保名所百首に「ときはいま春に成りぬとみしまえの角ぐむあしにあは雪ぞふる」(一一〇)と当該歌を利用した例が見られる。○とをきやまべ　とほきやまべ。所載欄の万葉集西本願寺本の訓と同じ。

【所載】新古今集・春上・九／万葉集・一四四三(旧一四三九) 時者今者 春尔成跡 三雪零 遠山辺尔 霞多奈婢久 トキハイマハハルニナリヌトミユキフルトホキヤマヘニカスミタナビク　ときはいまはるになりぬとみゆきふるとほやまのへにかすみたなびく

六三〇　こひつゝもけふはくらしつかすみたつあすのはる日をいかでくらさむ

【異同】ナシ

【現代語訳】恋しく思いながらもどうにか今日は暮らした。霞の立ちこめる明日の長い春の日を日がな一日どうやって暮らそうか。

【語句】○かすみたつ

新日本古典文学大系『拾遺和歌集』の注では、この「霞」は憂愁の表象とする。

【所載】古今六帖・第一帖・二七一 一番既出。第三句「あかねさす」。

〔以上五首担当　杉本〕

六三一　のべなるを人<sup>にくるイ</sup>やみるらん<sup>とてイ</sup>わかなつむ<sup>つらゆきある本</sup>われをか<sup>すイ</sup>すみのたち<sup>すイ</sup>かくるらむ

【異同】たちかくるらむ―たちかくすらむ（桂・大）

【現代語訳】野辺に私がいるのを人が見るかもしれないと、若菜摘む私を、霞は（見られないように）隠すのだらう。

【語句】○のべなるを 野辺にあるを。野辺にいるのを。○人やみるらん 歌末にも「らむ」があり不審。○たちかくる 「たちかくす」の方が自然。それによつて訳した。

【所載】貫之集Ⅰ・二五〇

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。京極の権中納言の屏風の歌廿首のうちの一首。

### きり

人まろ

六三二 はるやまのきりにまがへるうぐひすもわれにまさりてものおもふらんやは

【異同】ナシ

【現代語訳】春山の霧中にまじり見分けられない鶯も、今の私の物思い以上に物思うだろうか。いや思いはしないだらう。

【語句】◎きり 霧は、山辺にも川辺にもかかる。視界がさえぎられ見えなかった状態から次第に晴れてゆく動きを詠む場合、夕方の霧、朝の霧を詠む場合などがある。多くは秋の歌だが、この歌のように春の歌もある。○まがへる 見分けがつかない。○おもふらんやは 「やは」は反語。

【所載】万葉集・一八九六（旧一八九二）春山 霧惑在 鶯 我益 物念哉 ハルヤマノキリニマトヘルウグヒ スモワレニマサリテモノオモハメヤ はるやまのきりにまとへるうぐひすもわれにまさりてものもはめやも／人麿集Ⅱ・五〇〇／人麿集Ⅲ二〇七／人麿集Ⅴ・二八八／夫木抄・三五五／和歌一字抄・一〇六九／奥儀抄・六一三／袋草紙・七二五

【参考】作者名「人まろ」は所載欄の文献に一致する。万葉集では四首あとの左注に「右は柿本人麻呂の歌集に出づ」とある。

六三三 ゆふぎりにころもはぬれて草まくらたびねするかもあはぬきみゆへ

【異同】ナシ

【現代語訳】夕霧に衣は濡れて旅寝することよ。会えない君であるのに。

【語句】○草まくら 「旅」にかかる枕詞。○あはぬきみゆへ 「故」は……だのに。……であるが。「人妻故に」（万葉集・二二）に同じ。人妻だのに。また、「ただ一目相見し児ゆゑに」（万葉集・二五七〇（二五六五））は、ただ一目見た子だのに。

【所載】古今六帖「くれどあはず」三〇二五／万葉集・一九四 夕霧尔 衣者沾而 草枕 旅寝鴨為留 不相君故 ユフギリニコロモハヌレテクサマクラタビネカモスルアハヌキミユエ ゆふぎりにころもはぬれてくさくらたびねするかもあはぬきみゆゑ／夫木抄・五三九一

【参考】万葉集・一九四の長歌の末尾五句が短歌の形で古今六帖に収載されている。

六三四 かりのくるみねのあさぎりはれずのみおもひつきせぬよのなかのうさ

【異同】ナシ

【現代語訳】雁の来る峰の朝霧がずっと晴れずにいる——晴れない気持のまま、物思いの尽きせぬこの世の厭わしいこと。

【語句】○かりのくるみねの 物名の「くるみ」が隠されている。○はれずのみ 霧が「はれず」と自らの気持ちが「晴れず」をかける。「しがらきのみねたちこゆるはるがすみはれずも」のおもふころかな」（古今六帖・六〇八）。

【所載】古今集・物名・九三五／新撰和歌・二五五／藤六集（輔相集）・二七

六三五 あきぶりのたつをけぶりとみしほどにやまのこのはもいろづきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧の立つのを煙とばかり思っているうちに、山の木々の木の葉の色がかわり、秋も深まっているのだった。

【語句】○けぶり 木を燃やす、藻塩を燃やすなどして煙が立つ。当該歌には霧を煙と見る。また次の例歌のように霞と煙の類似を歌ったものもある。「山がつのなげきこりつむいほりには霞やきつつけぶりとものなる」（古今



六帖・六一四)。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野〕

六三六 秋ぎりのはるゝときなきこゝろにはたちぬのそらもおぼえざりけり<sup>もイ  
なくにイ</sup>

【異同】おほえざりけり—おもほえざりけり(御)

【現代語訳】秋霧の晴れる時がないと同様に晴れることのない私の心には、日常の立ち居の間も、上の空のよう  
なとりとめのない気持ちで、物もはつきりわからないことであるよ。

【語句】○たちぬ 立つこととすわること、ごく普通の日常の動作。「たち」「そら」は、「秋ぎり」の縁語。「秋  
霧のたちぬるときはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける」(古今六帖・六四七)。○そら 空中・虚空。(お  
ぼつかない気持ちでいう) 所、場所、方向、また心、気持等の意がある。ここでは第五句に打消を伴って、空虚  
なおぼつかない状態を示している。○おぼえざりけり 「おぼゆ」の分別、判断力がある、わきまえる、の意を  
打消したもの。はつきり分別がつかない。傍記異文では、「おもほえなくに」と読める。所載欄の古今集でも「お  
もほえなくに」であり、その方がことばつきとしては自然である。

【所載】古今集・恋二・五八〇／躬恒集Ⅰ・二八九／躬恒集Ⅲ・三二三

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によると作者は凡河内躬恒。

六三七 をとにきく花みにくればあきづりのみちさまたげにたちわたりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】噂に名高い花を見に来たら、秋霧が道の妨げとなって一面に立ちこめていたのであったよ。花を隠  
してしまつて。

【語句】○をとにきく 「をと」は「おと」。うわさ、風聞のこと。「おと(音)にきく花」には美女の誉れ高い  
女を寓するか。○みちさまたげ 通行の妨げとなること。また、そのもの。「思ふ事ありてこそゆけ春がすみ道  
さまたげにたちわたるらん」(貫之集・四五)という用例がある。○たちわたりつゝ 一面に立ちこめているの  
だった。「わたる」は、時間的・空間的に動作が広くゆきわたり、長く続く意。「つゝ」は動作の反復を表し、し

きりに……するの意。文末にある時は詠嘆の意も表す。

【所載】ナシ

【参考】新撰万葉集に「音丹菊 花見来礼者 秋之野之 道迷左右奇 霧曾起塗 オトニキクハナミニクレバ  
アキノノミチマヨフマデニキリゾタチヌル」（三五八）があり、寛平御時后宮歌合に「音にきく花見にくれば  
秋の野の（下句を欠く）」（二〇五）がある。

六三八 しら雲のおりゐる山のからにしきかねてぞあきのきりはたちける

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲が降りている山の唐錦のように美しい紅葉に、以前から秋の霧が立ちこめていたのであるよ。  
— 白雲が織っている山の唐錦を、以前から秋の霧が裁っていたのだなあ。

【語句】○しら雲のおりゐる山 白雲がおりている山。「降り」に「織り」を掛ける。○からにしき 唐織りの  
錦。舶来もので、紅色のまじった美しい模様が賞された。ここでは山の紅葉のたとえ。○きりはたちける 霧が  
立ちこめているよ。「立ち」に「裁ち」を掛ける。「織り」と「裁ち」が対比され、同時にそれは「唐錦」の縁語  
となり、白雲が織っている山の唐錦を重ねて秋の霧は裁っていることだよ」の意となり、この方が意が通りや  
すい。この場合は、「重ね」に「襲」を掛ける。

【所載】重之集・二七七

【参考】作者名はないが、重之集では百首歌の一首。

六三九 あさな／＼たつかはぎりのそらにのみうきておもひのあるよなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】毎朝立ち上る川霧が空に浮きただようように、ただ、うわの空で落ちつかない。こんなつらい思い  
のあるのが、男女の仲らいというものだったのだなあ。

【語句】○あさな／＼ 毎朝。○そら 川霧の立ちのぼって行く空の意と、思いがうわの空であることを掛ける。  
初、二句が第三、四句の序詞。○うきておもひの 落ちつかない恋の思いが。「しほがまの前に浮きたる浮島の

浮きてももひのあるよなりけり」(古今六帖「しほがま」一七九六・山ぐちの女ろう、新古今集・一三七九・山口女王)は、当該歌と下句が同じ。○よ 世。男女の仲らい。

【所載】古今集・恋一・五二三

六四〇 ちどりなくさほの川ぎりたちかへりつれなきひとをこひわたるかな  
みつね<sup>或本</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】千鳥の鳴く佐保川に川霧が立つ、それが立ちこめるように、たちかえりくりかえし、私は無情なあの人を恋い続けるのであるよ。

【語句】○さほの川ぎり 「さほ」は「佐保」。佐保山・佐保川は大和国の歌枕として有名。佐保川は千鳥・霧・紅葉が主要な歌材として詠まれた。「千鳥なくさほの河ぎりたちぬらし山のこのは色まさりゆく」(古今集・三六一)。○たちかへり 繰り返し。ひっきりなしに。「たち」は、川霧の「立ち」に、「立ちかへり」の「立ち」を掛け、初、二句が「立ちかへり」を導く序詞。「わたつみのわが身こそ浪立返りあまのすむてふうらみつるかな」(古今集・八一六)。○つれなきひと 無関心な人。薄情な人。○こひわたる 長きにわたって恋い続ける。「わたる」はここでは「川」の縁語。六三七番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖では作者名を「みつね<sup>或本</sup>」とするが、確認できない。

〔以上五首担当 斎藤・長戸〕

六四一 つれもなき人にこゝろをつくばねのみねのあさぎりはれずのこそ思へ

【異同】ナシ

【現代語訳】薄情な人に心を寄せて、筑波嶺の嶺にかかる朝霧が晴れない、そのように晴れぬもの思いをすることだ。

【語句】○つくばね 筑波嶺。茨城県つくば市にある歌枕。万葉集では嬬歌を詠んだ長歌(一七六三(旧一七五九))が知られるが、平安期においても恋歌として詠まれることが多い。「(心を)つく」と「筑」が掛詞。「限な

く思ふ心はつくばねのこのもやいかあらんとすらん」(後撰集・一一五〇)、「おとにきく人に心をつくばねのみねど恋しき君にもあるかな」(拾遺集・六二七)、「おとにきく人に心をつくばねのみねども思ふ思はんや君」(古今六帖・二五四五)。○あきぎりはれず 「晴れず」は、「朝霧が晴れない」と「心が晴れない」との両意がある。

「雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世中のうさ」(古今集・九三五、古今六帖・六三四)。

【所載】ナシ

六四二 あきぎりのたちのみかくすもみちばのおぼつかなくてやみぬべらなり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧が立って隠してばかりいるもみち葉のように、はつきりとわからぬままで終わってしまいそうだ。

【語句】○あきぐり 秋霧。秋に立つ霧。秋の景物を隠し隔てるものとして多く詠まれる。紅葉との取り合わせは「散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくもみせず立ち隠すらん」(貫之集・一五六)、「秋霧は今日はな立ちそ竜田山はその紅葉よそにても見む」(古今集・二六六)など。○おぼつかなくて 上三句は「おぼつかなくて」の序。はつきり確認できない状態で。「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」(後撰集・二七一)。○やみぬべらなり 「やむ(止む)」は、中断する、終息する。もみじ葉が散ってしまった。「べらなり」は確率的の高い推量(中野方子『古今集』における『べらなり』—喩に承接される助動詞—『國文』一九九七年一月)。なお新日本古典文学大系『後撰和歌集』は当該歌を引用し、「もみち葉」を女に見立てた男の恋歌の雰囲気が強いとする。「祝部(はふり)らが斎(いは)ふ社の黄葉(もみちば)も標縄(しめなは)越えて散るといふものを」(万葉集・二二三三(旧二三〇九)、拾遺集・雑秋・一一三五)と、親の監視が厳しくても逢瀬をもつ女性を黄葉にたとえているものや、「もみち葉は秋の風こそ誘ひけれ霧のなき名をたつぞあやしき」(陽成院一親王姫君達歌合・三一)といった例から考えて従うべき見解であろう。

【所載】後撰集・秋下・三九二

【参考】作者名はないが、後撰集では貫之の作。

六四三 しぐれにもあめにもあらぬはつぎりのたつにもそらはかきくもりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨でも雨でもない秋の初霧が立つことによっても、空は急に曇ることだ。

【語句】○はつぎり 初霧。初秋（七月）に立つ霧。「初霧もたちそめにけりたれにかは人わたるらむかさざぎのはし」（元輔集・二三〇、夫木抄・三九一三）。○たつにも 立つにも。「にも」は断定の助動詞「なり」の連用形「に」＋係助詞「も」。立つのも。立つのでも。○かきくもり 雲や霧などに覆われ、空が急に曇る。「月夜にはこぬ人待たるかきくもり雨もふらなむわびつつもねむ」（古今集・七七五）。

【所載】左兵衛佐定文歌合・一一／夫木抄・三九一二

【参考】作者名はないが、夫木抄では忠岑の作となっている。

六四四 あきとてやいまかは<sup>はかい</sup>ぎりのたちぬらんおもひにあへぬものならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】飽きたからといって、今秋の川霧が立つようにお発ちになるのでしょうか。霧はもの思ひの「日」に堪えられぬようなものではありませんのに。

【語句】○あき 「秋」と「飽き」の掛詞。○いまかはぎりの 「かはぎり」は川霧。川面や川辺に立ちこめる霧。秋は川霧のたつ季節とされる。「秋されば川霧立てる天の川川に向き居て恋ふる夜ぞ多き」（万葉集・二〇三四（旧二〇三〇）、「川霧のふもとをこめてたちぬれば空にぞ秋の山はみえける」（和漢朗詠集・三四三）。傍記異文「いまはかぎりの」は、所載欄の後撰集・伊勢集の歌と同じ形である。伊勢集I・二二六の詞書は、「怨みて、いまは物いはじ、といふ人に」とあるが、後撰集の詞書では「秋霧の立ちたるつとめて、いとつらければ、このたびばかりなん言ふべきといひたりければ」と「秋霧」が明記されているため、「かぎり」に「霧」が掛けられていると考えられる。「いまはかぎりの」の方が、「秋」の掛詞「飽き」とも呼応して解しやすが、本文通りとして訳した。○たちぬらん 川霧が「立つ」と相手が「発つ」との掛詞。○おもひにあへぬ 「思ひ」と「日」を掛け、「霧」と対比させる。「秋霧のともにたちいでわかれなばはれぬ思ひに恋ひや渡らむ」（古今集・三八六）。「あへ」は、下二段動詞「敢ふ」の未然形。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。「あへぬ」で、堪えようとしても堪えることができない。○ものならなくに 「なくに」は、打消「ず」＋準体助詞「く」＋格助詞「に」。詠嘆を含んだ打消表現。「ふりぬとていたくなわびそ春雨のただにやむべき物ならなくに」（後撰集・八〇）。「あへぬものならなくに」で二重否定となる。所載欄の後撰集は同じく「あへぬ」だが、伊勢集では「あへむ」とあ

り、逆の意となる。

【所載】古今六帖「たのむる」二九六一／後撰集・恋四・八二四／伊勢集Ⅰ・二三六／伊勢集Ⅱ・二三六／伊勢集Ⅲ・二三六

【参考】作者名はないが、後撰集では伊勢の歌、伊勢集に入集する。

六四五 ある本 いかねればかしひなるらんあきぐりのまがふまただにもかなしきものを 如本

【異同】かしひなるらん—こしひなるらん（御）  
如本

【現代語訳】どういうわけで「かしひ」なのだろう。秋の霧にまぎれている間さえ、悲しいのに。

【語句】○いかなれば 「いかなり」の已然形＋接続助詞「ば」。理由を疑い、問い質す。どういうわけで。○かしひ 未詳。本文でも「如本」とあり、もとから未詳であったか。「香椎」ならば、「椎」、あるいは「椎の実」の異名となるが、歌意が通らない。所載欄の歌仙家集本伊勢集では、「いかなればみしよ成らむ」とあるが、いずれにしても解し難いため、本文通りに解す。○かなしきものを 「ものを」は詠嘆の終助詞。悲しいことだなあ。「松山につらきながらも波越さむことはさすがに悲しきものを」（後撰集・七五五）。秋霧を悲しいものとしたのは、「晴れずのみものぞかなしき秋ぎりは心のうちにたつにやあるらん」（後拾遺集・二九三・和泉式部）。

【所載】伊勢集Ⅲ・一三七

【参考】伊勢集には「思ふ人をいまはみじなどいひて」という詞書がある。

〔以上五首担当 中野〕

六四六 やまぢにはひとやまどはすかはぎりのたちこぬさきにいまわたりなん さい

【異同】ナシ

【現代語訳】山道では霧が人を道に迷わすであろうか。この河に霧が立たない前に今すぐ渡ってしまおう。

【語句】○やまぢにはひとやまどはす 所載欄の玉葉集・万代和歌集「……人やまどはん」、貫之集Ⅰ「山ぢに人も人やまどはん」とあり、「まどはむ」の方が意が通じるが、「まどはす」（他動詞・四段）で現代語訳した。○いまわたりなん 「いま」は、所載欄の歌集にすべて「いざ」とある。

【所載】玉葉集・秋下・七三二／万代集・一〇三五／貫之集Ⅰ・一五七

【参考】作者は、所載欄の文献から紀貫之。貫之集Ⅰに「延喜二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首」とあるうちの一首だが、万代集の詞書「延長二年中宮御賀月次屏風に」より、延長二年中宮穩子の四十賀の屏風歌と知られる。所載欄の貫之集Ⅰには、直前の一五六番に「九月霧山をこめたり 散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立ち隠すらん」とあり、また、一五七番には詞書「河のわたりに舟ある所」とある。絵には山と川と霧とが描かれていたものか。

六四七 あきぶりのたちあるときはくらぶやまやみにこゆれどしるくぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】「下句が意味不通なので、傍記異文で現代語訳した」秋霧が立っている時は、暗部山は、暗いというその名のように、全体にぼんやりと見えることです。

【語句】○たちあるときは 「霧」「たちある」を含む例歌を新編国歌大観に見ると、他には、延文百首「雲霧のたちぬになるそれならでともはあらしの山ふかき宿」(三九五)のみ。傍記のように「たちぬる」の誤写であろうか。参考欄の後撰集に、「たちぬる」とある。○くらぶやま 暗部山。歌枕。京都市左京区にある鞍馬山のこと。歌には「暗し」の意を持たせて詠まれる。○やみにこゆれどしるくぞありける 暗いという名の暗部山を闇夜に越えてもはつきりしていた、の意であるが、上句との繋がりが悪い。参考欄に述べたように、「くらぶやま」まで含む上句と、この下句とがなんらかの手違いで合成されてしまったと推定する。傍記および参考欄の後撰集が本来のかたちとして現代語訳した。なお、「見えわたりける」は、貫之が好んで用いた表現と指摘されている。

【所載】ナシ

【参考】後撰集・秋中・二七一に、作者名紀貫之で、「秋霧のたちぬるときはくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」とある。また、古今集に同じ作者名で、「くらぶ山にてよめる」の詞書のもとに「梅花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける」(春上・三九)とある。貫之詠の「くらぶ山」を詠み込んだ二首が何らかの手違いで交錯し、当該歌のような歌形を生んだものであろう。

六四八 みることにあきにもあるかたつたひめもみちそむとやゝまはきるらん

【異同】ゝまはきるらん—山のてるらん(大)

【現代語訳】見るたびに山は秋であるなあ。竜田姫が紅葉を染めるというので、山は霧が立ち、紅葉を着ているのであろうか。

【語句】○あきにもあるか 所載欄の歌合は同じだが、後撰集には「秋にもなるかな」とある。○たつたひめ 奈良県竜田山に鎮座する竜田神社の祭神。竜田山が平城京の西にあたることから、五行説により秋を司る女神とされる。○ゝ(や)まはきるらん 「きる」は、「霧(き)る」に、「染(そ)む」の縁語「着る」を掛ける。霧は紅葉の色を増させるもの。大久保本の「山のてるらん」は、紫明抄帚木卷引用歌五五三に同じ。

【所載】後撰集・秋下・三七八／友則集・二七／是貞親王家歌合・四六  
【参考】後撰集に「よみ人知らず」とある。

六四九 かはぎりのふもとをこめてたちぬればそらにぞあきのやまはみえける

【異同】やまはみえける—山は見えけり(大)

【現代語訳】川霧が山の麓を隠すように立ちこめてきたので、空に浮かんで秋の山は見えることです。

【語句】○かはぎりのふもとをこめて 山裾近く川が流れている景。発生した川霧が麓にたなびいて。○そらにぞあきのやまはみえける 「秋の山」は紅葉の美しい山。麓を霧がぼかすように立ちこめて、山が宙に浮かんでいるように見えた。

【所載】拾遺集・秋・二〇二／金玉集・二八／和漢朗詠集・三四三／深養父集Ⅲ・二／寛平御時中宮歌合・一七  
／深窓秘抄・四七／奥儀抄・一七八

【参考】所載欄の文献に、作者を「深養父」とする。公任の秀歌撰集にもとられ、人口に膾炙した歌。山が空に浮かぶという構図は後の作歌にも影響を与えていて、女四宮歌合に女房日向の歌(一一)の判詞や、袋草子に堀河百首「霧」題の公実詠(八二)に言及がある。

六五〇 あきぶりのたゝずもあらなむあしひきの山のにしきをむらながらみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧が立たないでほしい。山の紅葉を錦の織物を広げたようなままで見ていたいから。



【語句】○あきぶりのたゞずもあらなむ 「たたず」は、「立たず」と「裁たず」（下句の「錦」の縁語）の掛詞。秋霧が立たないでほしい、の意に、（錦を）裁ち切らないでほしい、の意を掛けた。なお、所載欄の深養父集に「あきゝりは」とある。○山のにしきをむらながらみむ 秋山の紅葉を美しい絹織物「錦」に喩える。「むら（足）」は、絹織物などを数える単位、「錦」の縁語。「むらながら」は、反物（たんもの）を広げたようなままで、の意。当該歌と同じような見立ての歌に、「むらむらの錦とぞ見る佐保山の柞（ははそ）の黄葉（もみぢ）霧立たたぬ間は」（和漢朗詠集・三〇六・清正）がある。なお、所載欄の深養父集「やまのにしきは……」とある。

【所載】深養父集Ⅲ・三

【参考】作者名はないが、深養父集Ⅲに見える。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

六五 一 こゝろみにわがこひめやはあきぶりのをともせでふるものにざりける

【異同】ナシ

【現代語訳】まあ試しに、というようにいいかげんな気持ちで、私がこの恋をしているだろうか。（そうではない。本心からの恋なのに）あの人には、まるで秋霧が音もせず降るように、音沙汰もなしに目を経るものだなあ。  
【語句】○こゝろみに 試しに。本気ではなく試験的に。○わがこひめやは わたしがこの恋をしているだろうか、いやそうではない。「やは」は反語。○あきぶりの 「ふる」を導き出すための措辞。○をともせでふる おともせでふる。「をと」は秋霧の音とおとずれの意の「音」とを言い重ねたもの。「ふる」は「降る」に「経る」を掛けた。秋霧が「音もせで降る」ことと相手の男が「音もせで経る」ことと同時に言っている。

【所載】夫木抄・五三五

【参考】一条摂政御集の一二五番に、「こゝろみにわれ恋ひめやは音もせでふる秋霧にぬるる袖かな」という類似した歌がある。

六五 二 うらちかくたつ秋ざりはもしほやくけぶりとのみぞみえわたりける

【異同】ナシ

【現代語訳】浦近く立つ秋霧は、まるで藻塩を焼く煙とばかりに見えわたることだなあ。

【語句】○うら 海や湖が湾曲して陸地に入りこんだところ。○もしほやく 製塩のために海水をかけた海藻を焼くこと。○けぶりとのみぞ まるで煙そつくり。「のみ」はそれだけに似ていることを強調した語。○みえわたり 空間的に遠方まで同じ状態が見えているさま。

【所載】後撰集・秋中・二七三／新撰万葉集・三二五／興風集Ⅰ・三七／興風集Ⅱ・五三／寛平御時后宮歌合・七九

六五三 あきぶりのはれぬあしたのおほぞらを見るがごとくもみえぬきみかな

【異同】みるかごとくも—みるかごとくに（大）

【現代語訳】秋霧の晴れぬ朝の大空は見えないものだが、その見えぬ大空を見るがごとくに、すこしも姿を見せないあなたですね。

【語句】○あした

夜の明けた朝のこと。○みるがごとくもみえぬきみかな 「みる」は視覚によつてものを見ること。「みえぬ」は相手が姿を見せぬこと、すなわち訪ねて来ないこと。初句から第四句の「みるが」までが

「ごとく」にかかり、初句から第四句までの全体が第五句にかかる。従つて上句から下句への意味のつづき方は、「あたかも見えぬ大空を見るがごとくに、見えない」ということ。「ごとく」という同一を表わす助動詞を使いながら、直前に「見る」を置き直後に「見えぬ」を置いているため、語句の表面では撞着した印象を与えるが、歌意として矛盾はない。

【所載】拾遺集・恋二・七四八／躬恒集Ⅳ・六八

六五四 秋の山のもみぢのにしきいくきともしらできりたつそらのはかなさ

【異同】秋の山の—秋の山（大）

【現代語訳】秋の山の錦のように美しい紅葉。それがどれだけ織られているかもわからぬほどに霧のたちこめた空の、おぼつかないことよ。

【語句】○もみぢのにしき 秋の山の紅葉の美しさを、織物の錦に見立てた。○いくき 「いく」は「幾」、数量について問う語。「き」は布などの長さを示す助数詞、「寸」「疋」「匹」等の字を宛てる。紅葉を錦に見立てたので、「いくき」と問うた。「いくきともえこそ見わかね秋山のもみぢの錦よそに立てれば」（後撰集・三八七）。

○きりたつ 「たつ」は、霧が生じる意の「立つ」に、「錦」「いくき」と縁語の「裁つ」をかける。○はかなさはつきりわからずに、心もとないさま。

【所載】忠見集Ⅰ・一〇／忠見集Ⅱ・一一、九四

六五五 あぶくまにきりたちわたりあけぬともせなをばやらじまてばすべなし

【異同】ナシ

【現代語訳】阿武隈川に霧が立ちわたり、夜が明けてしまっても、思う人をここから帰すまい。次のおとずれを待つことになれば、どうしようもなくつらいから。

【語句】○あぶくま 阿武隈川のこと。那須山地福島県側に源を発し、北流して宮城県に入り、仙台市の南方で太平洋に注ぐ一級河川。○たちわたり ずっと霧が立ちわたって。「わたり」は六五二番歌参照。○あけぬとも 夜がすっかりあけてしまっても。女の許を訪れた男は夜の明けきらぬうちに帰るものであった。○せな 女の側から、夫や兄に対して親しみをこめていう呼称。こは恋人。「せ」には、「兄」「夫」「背」等を宛てる。「な」は、親しみを表わす接尾語。○まてばすべなし いま恋人を帰して次の訪れを待つことになれば、それはどうしようもなくつらい。

【所載】古今集・東歌・一〇八七／綺語抄・三三五

〔以上五首担当 山下〕

六五六 ことならばゝれずもあらなん秋ぎりのまぎれには<sup>みえぬ</sup>れ<sup>えぬ</sup>ぎみとおもはん

【異同】ゝれずもあらなん―晴すもあらん(大)

【現代語訳】おなじ会えないのならば、霧は晴れずにあつてほしいものだ。秋霧がたちこめて、それで見えない君だと思おう。

【語句】○ことならば おなじことなら。○ゝ(は) れずもあらなん 晴れないでくれないかなあ。「なん」は他にたいして願望む意。「も」は「はれずあらなん」を和らげた表現。○秋ぎりのまぎれ 秋霧がたちこめてよく見えないこと。○みえぬ 所載欄の歌も「みえぬ」とある。

【所載】在原元方集・五／大和物語・二八段

六五七 かはぎりのなかにきみますものならばはるゝまに／＼うれしからまし

【異同】ナシ

【現代語訳】川霧の立ちこめるなかに君がおいでになるものならば、霧が晴れるにつれてお姿が現れて嬉しいことだろうに。

【語句】○かはぎり 川に立つ霧。○ます いらつしやる。「あり」「をり」の尊敬語。○まに／＼ ……につれて。○うれしからまし 嬉しいことだろうに。

【所載】大和物語・二八段・三九

【参考】所載欄の大和物語では、戒仙法師の父が亡くなったのを偲んで戒仙の友が詠んだ歌で、初句「朝霧の」。六五六番歌はそれに対する戒仙の返歌となっている。

六五八 むばたまの<sup>よるきわたらぬイ</sup>よる／＼たえぬころもでのたかやのうへにたなびくまでに

【異同】ナシ

【現代語訳】日が暮れて夜霧が立つてきたことだ。あの高屋の上に棚引くほどに。

【語句】○むばたまの 枕詞。「ぬばたまの」とも。「黒」「夜」「髪」などにかかる。○よる／＼たえぬ 傍記異文によれば「よるきわたらぬ」である。所載欄の万葉集は「夜霧は立ちぬ」なので、「よるきりたちぬ」の誤写とみて解した。○ころもでの 枕詞。「た（手）」や、地名の「田上（たなかみ）」、「高屋（たかや）」などにかかる。○までに ……ほどに。動作、作用の程度をはっきりあらわす。

【所載】万葉集・一七一〇（旧一七〇六）黒玉 夜霧立 衣手 高屋於 霏霰麻天尔 ヌバタマノヨギリハタチ  
ヌコロモデノタカヤノウヘニタナビクマデニ むばたまのよぎりはたちぬころもでをたかやのうへにたなびくまでに

六五九 あきぐりのたちまふみねの山ぐちはかねてぞしるきうつろはんとて

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧がたちのぼり、漂う峰の麓のあたりは、もう既にはっきり見えているなあ、色づこうとしている気配が。

【語句】○たちまふ（霧が）立ちのぼりただよ。○山ぐち 山の入り口。麓の登り口。○かねてぞしるき もう既にはっきりしている。○うつろはんとて 色づこうとしているさまが。

【所載】ナシ

### つらゆき

六六〇 ちりぬべきやまのみちを秋ぎりのやすくもみえずたちかくすらん

【異同】ナシ

【現代語訳】今にも散ってしまう山の紅葉を、秋霧はどうしてたやすくも見えないように立ち隠すのだろう。

【語句】○ちりぬべき 今にも散ってしまいそう。な。「ぬべき」は確実性の強い推量。○みえず 「みゆ」の未然形に打消しの「ず」がついたもので、見ることができない意。○たちかくすらん どうして立ち隠すのだろう。「らん」は原因、理由などを疑っている意を表す。「たち」は霧の縁語。

【所載】拾遺抄・秋・一二七／拾遺集・秋・二〇六／貫之集I・一五六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。所載欄歌集の詞書はいずれも「延喜御時中宮御屏風歌」とあるが、新日本古典文学大系『拾遺和歌集』や『貫之集全釈』によれば、実は「延長二年中宮藤原穩子屏風歌」が正しい。

〔以上五首担当 林〕

六六一 あきぶりにぬれにしそでのほさずしてひとりやきみがやまちこゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】秋霧で濡れてしまった袖を干しもしないで、たった一人であの方は山路を越えていることだろうか。

【語句】○ひとりやきみがやまちこゆらん 一人であの人は山路を越えているのであろうか。「玉かつま島熊山の夕暮れにひとりか君が山道（やまち）越ゆらむ」（万葉集・三三二〇七（旧三一九三三）、「風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ」（古今集・九九四、伊勢物語・二三段、大和物語・一四九段）。

【所載】新古今集・羈旅・九〇二／万葉集・一六七〇（旧一六六六）朝霧尔 沾尔之衣 不干而 一哉君之山道将越 アサギリニヌレニシコロモホサズシテヒトリカキミガヤマデコユラム あさぎりにぬれにしころもほさずしてひとりかきみがやまちこゆらむ／夫木抄・五三四七／和歌童蒙抄・七三／袋草紙・七二八

【参考】所載欄の万葉集も作者未詳だが、題詞には「岡本宮御宇天皇幸紀伊国時歌二首」とあり、日本書紀の記述に照らして斉明天皇の四（六五八）年から五年にかけての紀伊国行幸の際のものかとされている。

六六二 あすか川かはよどさらずたつきりのおもひすつべき君ならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】明日香川の川淀を離れず立つ霧が消えることがないように、思い切ることができないあなたではないのに。

【語句】○あすか川 明日香（飛鳥）川。奈良県高市郡の山中に発して飛鳥地方を北流し、大和川に注ぐ川。○おもひすつべき君ならなくに 所載欄の万葉集では、「おもひすつべきこひにあらなくに」。三句目までは下句を導く序。「片貝川の清き瀬に朝夕（あさよひ）ごとに立つ霧の思ひすぎめや」（万葉集・四〇二四（旧四〇〇〇））。【所載】続千載集・雑体・七一〇／新千載集・恋四・一五一七／万葉集・三二八（旧三二五）明日香河 川余藤不去 立霧乃 念応過 孤悲尔不有国 アスカガハカハヨドサラズタツキリノオモヒスグベキコヒニアラナクニアすかがはかはよどさらずたつきりのおもひすつべきこひにあらなくに／赤人集Ⅰ・三五三／赤人集Ⅱ・二三四／和歌童蒙抄・七一

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集によると、作者は山部宿弥赤人。

六六三 はるさればみくさのうへにをくしもものけつゝもわれがこひわたるかな

しも

【異同】ナシ

【現代語訳】春になると水草の上に置く霜が消える、そんな消え入るばかりの思いをしながらも、私は恋い続けているよ。

【語句】◎しも 霜。「置く」とも「降る」とも詠む。晩秋から冬にかけて地面や草葉を白く覆う寒々とした景

物で、春になると消えるということも詠まれた。○けつゝも 消つつも。「消」は、春になって霜が消える意と、「我」が恋の思いに消え入りそうになる意とを掛けて、三句目までは「消」を導く序。「秋付けば尾花が上に置く露の消ぬべくも我（わ）は思ほゆるかも」（万葉集・一五六八（旧一五六四））。

【所載】続後撰集・恋四・九〇六／万葉集・一九一二（旧一九〇八）春去者 水草之上尔 置霜乃 消乍毛我者 恋度鴨 ハルサレバミクサノウヘニオクシモノケツツモワレハコヒワタルカモ はるさればみくさのうへにおくしものけにつつもあればこひわたるかも／夫木抄・六三一／人麿集Ⅲ・二二四／赤人集Ⅰ・一八九／赤人集Ⅱ・七〇／赤人集Ⅲ・七八／和歌一字抄・一〇七五／綺語抄・七三／袋草紙・七三二

六六四 みづくきのをかのやかたにいもはあれどねてのあしたのしものふりはも

【異同】 いもはあれとーいもとあれと（大） ねてのあしたのーねての朝けの（大）  
さけイ

【現代語訳】岡の仮屋に彼女は（私と一緒に） いるけれど、共寝をした翌朝の霜の降りようといったら、まあ。（なんとひどいことか）

【語句】○みづくきの 水茎の。「岡」にかかる枕詞。「秋風の日に異（け）に吹けば水茎の岡の木の葉も色付きにけり」（万葉集・二一九七（旧二一九三））。○をか 岡。普通名詞と解する説が多いが、福岡県遠賀郡芦屋町遠賀川河口の地名とする説もある（奥村恒哉「古今集「岡のやかた」考」『国語国文』一九七九年五月）。また、近江の地名とも言われる（吉田東伍『大日本地名辞書』）。○いもはあれど 恋人はいるけれども。所載欄の古今集では、「いもは」の部分が「いもと」となっているで、「妹と我と」と解せる。しかし当該歌の本文では「妹は」なので、「あれと」はラ変動詞「あり」の已然形に逆接の確定条件を表す接続助詞「ど」が付いたものとして解釈した。「妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにそありける」（万葉集・三六一三（旧三五九一））等、「……はあれど」「……はあれども」の例は多い。○ふりはも 「ふり」は四段動詞「降る」の連用形の体言用法、「はも」は強い詠嘆の表現。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇七二

六六五 あさな／＼みぎはの草にをくしものけつゝもわれはこひわたるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】毎朝毎朝、水際の草に置く霜が、置いては消える、そのように消え入るばかりの思いをしながらも、私は恋い続けているよ。

【語句】○あさな／＼ あさなあさな。毎朝毎朝。朝ごとに。「野辺ちかくいへぬしればうぐひすのなくなる声はあさなあさなく」(古今集・一六)。○をくしもの おくしもの。置く霜の。○けつゝも 消つつも。「消つつ」は、水際の草に置いた霜が朝になると消えるということが毎日繰り返される意と、「われ」が恋の思いに消え入りそうになりつつげながらという意を掛け、三句目までは「消つつ」を導く序。六六三番歌参照。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 長戸〕

六六六 しもがれのゝべとわが身をおもひせばもえてもはるをまたまし物を

にあはイ

【異同】ナシ

【現代語訳】もし、霜枯れの野辺であると我が身を思いなぞらえることができたなら、野焼きで燃えても再び春の到来を待つように、私も恋の思いに燃えつきてもめぐり会える春を待つのにあ。

【語句】○しもがれの 万葉集に既に見られる言い方。「霜枯れの冬のやなぎは見る人のかづらにすべく萌えにけるかも」(万葉集・一八五〇(旧一八四六))、「霜枯れの草葉をうしと思へばや冬野の野辺は人のかるらん」(貫之集・二〇)。所載欄の古今集や伊勢集では「冬枯れの」とある。○思ひせば 反実仮想。実際にはこのように思ひなすこともできず、春を心待ちにする心境にはない。○もえても 草木が萌えてもの意と、恋の「思ひ(火)」に燃えてもの意を掛ける。

【所載】古今六帖「冬の野」一一五四／古今集・恋五・七九一／伊勢集Ⅰ・二九一／伊勢集Ⅱ・二九〇／伊勢集Ⅲ・二九二

【参考】古今集の詞書には「物おもひけるころ、ものへまかりけるみちに野火のもえけるを見てよめる」とある。また古今集では初句「冬枯れの」に關しての異文はない。ここで「霜枯れの」とあるのは「霜」という題に影響されたか。あるいは、古今六帖「冬の野」での重出歌も「霜枯れの」とすることから、当該本文での伝誦もあったか。

六六七 身をわけてしもやをくらんあだ人のことはさへもかれわたるかなイごとにかれもてくかな



【異同】ナシ

【現代語訳】他の人と区別して私の上に霜が降りているのだろうか。草葉が霜枯れるように、移り気なあの人の言葉の一言一言に二人の心が離れてくることだよ。

【語句】○身をわけて 区別して。ある人の上には霜を置かないで、よりによって我が身の上に置いての意を含む。「秋風は身を分けてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ」(古今集・七八七)。○ことのはごとに 言葉に葉に見立てて、そのひとつひとつに。「あはれてふことのはごとに置く露は昔を恋ふる涙なりけり」(古今集・九四〇)。○かれもてく 霜が降りることで草葉が枯れるように、相手の一言一言によって思いが離れてくる。「枯れ」と「離れ」を掛ける。「もてく」は「もて来」。所載欄の後撰集では「かれもゆくかな」とあり、わかりやすい。

【所載】後撰集・冬・四六二

六六八 さゝのはにをくしもよりもひとりぬるわがころもでぞさえまさりける

【異同】ナシ

【現代語訳】笹の葉に降りる霜よりも、独り寝をする私の袖の方が(涙で凍って)いつそう冷えまさることだよ。

【語句】○さゝのは 笹の葉に霜が降りる景は万葉集にも見える。「笹が葉のさやく霜夜にななへかる衣にませる子ろが肌はも」(万葉集・四四五五(旧四四三))。○さえまさり 霜に加えて涙が凍ることで一段と冷え冷えとする。「君恋ふと霜とわが身のなりぬれば袖のしづくぞさえまさりける」(新撰万葉集・二三二)。

【所載】古今集・恋二・五六三／新撰万葉集・一五九／友則集・四二／寛平御時后宮歌合・一二二

六六九 しもぐもりするにやあらん久かたのよわたるつきのみえずとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】霜が降りるというので曇っているのだろうか。夜空を渡り行く月が見えないと思うと。

【語句】○しもぐもり 他に用例なし。万葉集の注釈では、「霜がおりるために空が曇ること(気象上、そのようなことはないが、当時の人々はそう考えたらしい)」(日本古典文学大系『萬葉集』)、「降霜を見るころの初冬の曇

天という意か」(中西進『万葉集全訳注』講談社文庫)、「寒い夜空が曇って霜が降るという考えに基づく表現か」(伊藤博『万葉集釋注』)、「霜は地に置くものではなく、空に充滿する冷気を含めて言う。その白い霜氣によつて霞むことを『霜靄』と言う。『玉墀の皎皎を照らし、霜靄の濛濛を含む』(南朝梁・沈約「八詠、望秋月・芸文類聚・月」)は、秋月が霜靄に曇るさまを描く。『霜曇り』の語は、この漢語『霜靄』に当たる」(新日本古典文学大系『萬葉集』などと言う。○よわたるつき 万葉集に多く見られる言い方。「あかねさす日は照らせれどむばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」(万葉集・一六九)、「天の原雲なき宵にぬばたまの夜渡る月の入らまく惜しも」(万葉集・一七一六(旧一七一二))、「ぬばたまの夜渡る月の清けくはよく見てましを君が姿を」(万葉集・三〇二一(旧三〇〇七))など。

【所載】万葉集・一〇八七(旧一〇八三) 霜雲入 為登尔可将有 久堅之 夜度月乃 不見念者 シモグモリス トニカアラムヒサカタノヨワタルツキノミエヌオモヘバ しもぐもりすとかあるらむひさかたのよわたるつきのみえなくおもへば／和歌一字抄・一〇七七／袋草紙・七三四

六七〇 なよ竹のよながきがうへにはつしものをきゐてものをおもふころかな  
たゞふさ

【異同】よなかきがうへに―よなかきかうへに(御・大)

【現代語訳】夜の長い間、ずっと起きたまま物思いをして過ごしている今日このごろだ。

【語句】○なよたけの 「よ」に掛かる枕詞。「なびく方ありけるものをなよ竹の世にへぬものと思ひけるかな」(後撰集・九〇六)、「なよ竹のよながき秋の露をおきときはに花の色も見えなん」(元輔集・一四八)。○よながきがうへに 「よ」は、竹の「節間(よ)」と「夜」を掛ける。底本「が」にミセケチ記号を施し「イ」と記す。所載欄の古今集では「よながきうへに」とする。○はつしもの 「おき」を導く措辞。○おきゐて 霜が「置き」と自身が「起き」たままでいることを掛ける。

【所載】古今集・雑下・九九三／新撰和歌・二四一

【参考】作者名「たゞふさ」は所載欄の古今集に一致する。古今集の詞書によると、遣唐使に任命されたことへの悩みを歌ったものという。

〔以上五首担当 青木〕

六七一 きみこずはねやえもいらじこむらさきわがもとゆひにしもはをくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが来ないなら、私は寝室へも入りますまい。たとえこの濃い紫色の元結いに霜が置いたとしても。

【語句】○ねやえもいらじ 「閨(寢屋)へも入らじ」で、寝室へも入らないだろう、入りますまい、の意。○こむらさき 濃い紫。「こ」は接頭語で、単に「紫」の意ともいう。○もとゆひ 髻(もとどり 髪を束ねたところ)を結ぶ紐。

【所載】古今六帖「もとゆひ」三一七七／古今集・恋四・六九三／奥儀抄・一三二

【参考】万葉集・二六九六(旧二六八八)に「まちなかねてうちにはいらじしろたへのわがころもでにつゆはおきぬとも」(古今六帖・五六九にも)という類歌がある。

六七二 やまかげにあれたるしものわれなれやおもふころのとけでのみ<sup>みゆらんイ</sup>ふる

【異同】ナシ

【現代語訳】山かげで荒れている霜が、私なのかしら。あなたを思う心がいつまでもとけずに過ぐすばかりですよ。

【語句】○やまかげにあれたるしものわれなれや 山かげの霜はいつまでもとけないことを前提にしているのであるが、「あれたる」は不審。「われなれや」の「なれや」は、そこで言い切りの形。下句で謎解きをする。「雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみ世をばへぬらむ」(古今集・七五三)。○とけでのみふる 「とけで」は、霜がとけない意と、思う心がとけずに晴れ晴れとしない意とを掛ける。「ふる」は「経(ふ)」の連体形。連体形止めで詠嘆の気持ちを表す。

【所載】ナシ

六七三 さをしかのつまゝつやまのをかべなるわさ田はからじしもはをくとも

【異同】ナシ

【現代語訳】牡鹿が妻を待っている岡のほとりの早稲の田は、当分刈るまいよ。たとえ霜は置いても。

【語句】○さをしか 「さ」は接頭語。牡鹿。○わさ田はからじ 「わさ田」は、早稲を作っている田。早稲田は刈るまい。稲穂を鹿が食べるものとして詠んでいるのであろう。妻を慕う鹿への思いやり。○しもはをくともたとえ霜が置き、収穫に障りが生じても、の意。

【所載】新古今集・秋下・四五九／万葉集・二二二四（旧二二二〇）左小牡鹿之 妻喚山之 岳辺在 早田者不  
苅 霜者雖零 サヲシカノツマヨブヤマノワカヘナルワサダハカラズシモハフルトモ さをしかのつまよぶやま  
のをかへにあるわさだはからじしもはふるとも／人麿集Ⅰ・一三三／人麿集Ⅱ・一六八／家持集Ⅰ・一四〇／家  
持集Ⅱ・一三〇／秀歌大体・七三／定家十体・一三／近代秀歌・四六／詠歌大概・四五／桐火桶・一三二

六七四 うきてぬるかものうはげにおくしものこゝろとけなきよをもふるかな

【異同】よをもふるかな―世にもふる哉（大）

【現代語訳】つらい思いで、水の上に浮き寝をしている鴨の上毛に置く霜は、夜どおしとけない、私の心も、くつろぐことのない世を過ごしていることです。

【語句】○うきてぬる 「浮きて」に「憂」を掛ける。○こゝろとけなき 「心とけなし」は、他に用例を見ない。「とけなし」については、「これを聞きてぞ、とけなきものをばあへなしと言ひける」（竹取物語）があり、「とけなき」と読んで、「利気なし」あるいは「遂げなし」と考えられているが、当該歌の場合は、「解けなし」の解もあり得るか。また、霜がとけることがない意に、心がとけ、安まることがない意を掛けるか。いずれにしても上三句は「こゝろとけなき」の序。○よをもふるかな 「よ」に「夜」と「世」を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】興風集Ⅰ・四八ならびに興風集Ⅱ・五〇に、上三句のまったく同じ歌がある。下句はいずれも「きえてものおもふころにもあるかな」とあり、この方が理解しやすい。

六七五 このはみなからくれなゐにくゝるとしてしものあとにもをきまさるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】木の葉は皆、真っ赤に括り染めにしようとして、真っ白な霜の跡に置き、一層際だたせていること

だ。

【語句】○からくれなゐにくゝるとて 「からくれなゐ」は、韓より渡来した紅の意で、深紅。「くゝる」は、ここでは括り染めにすること。「ちはやぶる神代もきかず竜田河からくれなゐに水くくるとは」(古今集・二九四)。  
○をきまさるかな お(置) きまさるかな。

【所載】 赤人集Ⅰ・七三／千里集・五〇

【参考】 赤人集や千里集では四句を「しものさらにも」とする。

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

六七六 おもひ草<sup>にはイ</sup>きゆるものとはしりながらけさしもをきてな<sup>しにイ</sup>にきつらん  
をきかぜ

【異同】 ナシ

【現代語訳】陽が出ると霜が消えるように、あなたへの思いで自分が死んでしまいそうになるとわかつているのに、霜の置いた今朝、どうして私も起きて帰ってきたのでしょうか。

【語句】○おもひ草 (首を垂れて) 物思いするように見える草。キセルソウのことという。ツユクサ等の別名とも。「物思いの種」の意をかける。また「ひ」に「陽」をかける。所載欄の他文献では「おもひには」。○きゆる物とは 「きゆる」に「霜が」消える」意と「命がなくなる」意をかける。所載欄の他文献では「きゆるものぞと」。○けさしもをきて 「しも」は強意。「霜」をかける。「をきて」は「起きて」と「置きて」をかける。「陽」消ゆる「置き」は「霜」の縁語。「けさはしもおきけむ方もしらざりつ思ひいづるぞきえてかなしき」(古今集・六四三・大江千里)と同じ趣向。所載欄の興風集では下句「けさしもなにゝおきてきつらん」。

【所載】 後撰集・雑二・一一三四／興風集Ⅰ・五九・七四／興風集Ⅱ・二四

【参考】 後撰集の詞書によると、集まりの翌朝に詠まれた歌で、名残惜しさを恋の後朝のように詠みなしたものが。作者名「をきかぜ」は所載欄の文献に一致する。

六七七 まこもかるほりえにうきてぬるかものこよひのしもにいかにわぶらむ

【異同】 ぬるかものゝあるかもの(御・大)

【現代語訳】堀で浮いたままで寝る鴨が、今宵の冷たい霜のためにどんなにつらく思っているでしようか。

【語句】○まこもかる 「堀江」の枕詞。「まこも」は「こも」（浅い水中に群生するイネ科の草の一種）の歌語。

○ほりえ 舟などを通すために人工的に掘って作った川。運河。特に、難波堀江をさすことが多い。○ぬるかもの 寝る鴨の。鴨が霜とともに詠まれる例には「あしべゆくかものはがひにしもふりてさむきゆふばはやまとしおもほゆ」（万葉集・六四）などがある。

【所載】後撰集・冬・四八三／和歌童蒙抄・七四五

六七八 あまくものよそにかりがねきしよりはだれしもふりさむしこのよは  
をとくろ

【異同】ナシ

【現代語訳】はるか遠く雲のかなたに雁の声を聞いてから、薄霜が降りて、とりわけ寒いな、今夜は。

【語句】○あまくものよそ はるか遠くの雲のかなたに。○はだれしも うつすらとまだらに置いた霜。「はだれ」は雪がはらはらと散って積もるさまを表す。「風さやぐさ夜のねざめのさびしきはだれしもふりつるさばになく」（玉葉集・二〇三七）。

【所載】新拾遺集・秋下・五二五／万葉集・二一三六（旧二二三）天雲之 外鴈鳴 從聞之 薄垂霜零 寒此夜者 一云、弥益々 戀許曾増焉 アマクモノヨソニカリガネキシヨリハダレシモフリサムシコノヨハ一云、イヤマスマスニコヒコソマサレ あまくものよそにかりがねきしよりはだれしもふりさむしこのよは一云、いやますますにこひこそまされ／人麿集Ⅰ・一〇九／人麿集Ⅱ・一六七／家持集Ⅰ・二〇一／家持集Ⅱ・二四九／和歌童蒙抄・八二

【参考】作者名「をとくろ」とあるが、所載欄の新拾遺集では作者名は人丸、万葉集・和歌童蒙抄には作者表記がない。なお、古今六帖三三四番の作者名には「忌部首黒麿或本をとくろ」とある。黒麿は万葉集歌人。

六七九 さゝのはにをきゐるしものさむければしみはしつとも色にいでめや  
つくイ

【異同】ナシ

【現代語訳】ささの葉に置いてとどまっている霜が、（夜が）寒いので凍りついてしまっても、その葉が色付くこ

とがあるでしょうが、ありはしません。それと同じように、私が恋しく思う気持ちは、ささの葉に冷たい霜が置く寒い夜故に心に深く感じられても、表に出ずでしょうが、出しはしませんよ。

【語句】○をきあるしものさむければ 古今集をはじめ所載欄の他文献では「おくはつしもの夜をさむみ」とするものが多い。○しみはしつとも 「霜がささの葉に凍みる」意と「恋心が染みる」意をかける。所載欄の他文献では「しみはつくとも」。○色にいでめや 反語表現。「ささの葉の色がかわらない」意と「恋心を表面に出さない」意をかける。

【所載】古今六帖「人しれぬ」二六六二／古今集・恋三・六六三／躬恒集Ⅰ・二二七、三七二／躬恒集Ⅱ・一六八／躬恒集Ⅲ・三九六／躬恒集Ⅴ・一〇九

六八〇 ふけしよのゆきあひのしもにうてしかどなど身にさむくあたらざりけん

【異同】ナシ

【現代語訳】夜更けに折からの霜に打たれましたが、その霜はどうして私の身には寒くあたらなかったのでしょうか。

【語句】○ゆきあひのしも 折からの霜。「行き合ひ」はちょうど行き合わせること。○うてしかど 打たれたけれども。「うて」は下二段活用の「うつ」（打たれる意）の連用形。○あたらざりけん 所載欄の伊勢集Ⅱでは「あたらざるらん」。

【所載】夫木抄・六五六一／伊勢集Ⅰ・二七六／伊勢集Ⅱ・二七七／伊勢集Ⅲ・二七九

【参考】伊勢集の詞書によれば、ある人の家を秋頃訪ねて行き、夜更けの帰り道に霜に打たれた翌朝、その人のもとへ贈った歌である。

〔以上五首担当 三浦〕

六八一 ゆき  
やまのかひそこともみえずをとゝひもきのふもけふもゆきのふれゝば

【異同】ナシ

【現代語訳】山あいはそのこともはっきりも見えません。一昨日も昨日も今日も雪が降っているのだ。

【語句】◎ゆき 雪の自然現象を見たまま詠むほか、雪を「花」や「白髪」に見立てたり、「溶く」「消ゆ」の縁語と共に用いて、心の比喩として詠まれる。○やまのかひ 山すそと山すそとの交わりあっている所。山のさかい。「山のかひたなびきわたるしらくもは遠き桜の見ゆるなりけり」（貫之集・三二）。○ゆきのふれゝば 「（れ）」は助動詞「り」の已然形。雪の降っている状態がひき続き継続している意を表す。

【所載】万葉集・三九四六（旧三九二四）山乃可比 曾許登母見延受 乎登都日毛 昨日毛今日毛 由吉能布礼礼波 ヤマノカヒソコトモミエズトツヒモキノフモケフモユキノフレレバ やまのかひそこともみえずをとつひもきのふもけふもゆきのふれれば／夫木抄・七二六三／綺語抄・一五三

六八二 あしひきのやまちもしらずしらがしの枝にもはにもゆきのふれゝば

【異同】ナシ

【現代語訳】山道もどこだかわかりません。白樫の枝にも葉にも、雪が降り積もっているのです。

【語句】○あしひきの 枕詞。山、峰（を）、尾上、岩などにかかる。○しらがし ブナ科の常緑高木。少し厚手の葉で裏側は灰白色。雪の白に白樫の白が紛れた面白さ。

【所載】拾遺抄・冬・一五〇／拾遺集・冬・二五二／万葉集・二三一九（旧二三一五）足引 山道不知 白牝阿枝母等乎平尔 雪落者 アシヒキノヤマヂモシラズシラカシノエダモトラヲニユキノフレレバ あしひきのやまちもしらずしらかしのえだもとををにゆきのふれれば／新撰朗詠集・七四六／人麿集Ⅰ／人麿集Ⅱ・四二一／人麿集Ⅲ・一九九／家持集Ⅰ・二七三／家持集Ⅱ・二七九／綺語抄・四五三、七〇二／和歌童蒙抄・一六四／和歌色葉・一二一／桐火桶・二二五

六八三 ふりしけばかずなくたまるしら雪のなにをうしかしたにきゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】しきりに降ると数え切れないほど積もる白雪は、いったい何をっらいと思つてひそかに溶けてなくなるのだろう。

【語句】○ふりしけば しきりに降ると。○かずなく 限りなく。○なにをうしか なにをっらいと思つて。○したにきゆ 隠れて見えないところで消える。



【所載】ナシ

【参考】当該歌は雪の性状を擬人的に詠んだとも、恋の比喻とも考えられる。

六八四 まつのうへにふりおほふゆきはあしたづのちよのゆかりにきぬるとぞみる<sup>おもふイ</sup>

【異同】ふりおほふ<sup>をけるイ</sup>—おほふ（御） きぬるとぞみる—きぬるとぞみる<sup>おもふイ</sup>（大）

【現代語訳】松の上に降り覆っている雪は、千年の寿命をもつめたい鶴が常葉の縁で来て座っていると見ることだ。

【語句】○まつのうへにふりおほふ 松を隠すように降りかぶさる。松の上の雪を鶴にたとえて賀意をあらわす。「我が宿の松のこずゑにすむ鶴は千代の雪かと思ふべらなり」（貫之集Ⅰ・五一）。○あしたづのちよのゆかりに千年の寿命をもつという鶴が、松の常葉の縁で。○きぬる 来て座っている。

【所載】古今六帖「いはひ」二二七二／貫之集Ⅰ・二七八

【参考】所載欄の貫之集について、『新編国歌大観』（底本 陽明文庫蔵本）解題では、「底本において隣りあつた二首が合体して一首となつてしまつた歌を、西本願寺本や御所本によつてそれぞれもとの二首に分離した」としている。『新編私家集大成』貫之集Ⅰ・二七八では「松が枝にふりしく雪をあしたづのもと色かへぬ松にざりける」となっている。

六八五 ふるゆきは枝にしばしもたまらなむはなもゝみぢもたえてなきまは

【異同】ナシ

【現代語訳】降る雪は枝にしばらくでもつもつていてほしい。花も紅葉も全く無いこの季節のあいだは。

【語句】○たまらなん 積もつていてほしい。○たえて 下に打消しの語をともなつて、全く。すっかり。

【所載】新撰和歌・一四六／寛平御時后宮歌合・一三六

〔以上五首担当 橋本・林〕

六八六 よをさむきあさとをあけていでみればにはもはだらにゆきはふりつゝ<sup>みイ</sup>

【異同】にはもはたらに―にはもまたらに（大）

【現代語訳】夜が寒いので、朝、戸を開けて出してみると、庭に薄くまだらに雪が降っていることだ。

【語句】○よをさむき 文法的な面からも傍記異文を採用して「夜を寒み」とするべきであろう。夜が寒いので。

○はだらに 綺語抄に「はだら まだらといふ事也」とある。

【所載】続後撰集・冬・五〇五／万葉集・二三二二（旧二三二八）夜乎寒三 朝戸乎開 出見者 庭毛薄太良尔  
三雪落有 ヨヲサムミアサトヲアケテイデミレバニハモハダラニミユキフリタリ よをさむみあさとをひらき  
いでみればにはもはだらにみゆきふりたり／人麿集Ⅰ・二二〇／人麿集Ⅲ・一九三／家持集Ⅰ・二七二／家持集  
Ⅱ・二七八

六八七 ときしらぬやまはふじのねいつとてかかのこまだらにゆきのふるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】時節をわきまえない山はこの富士山だ。今をいつだというので、鹿の子斑に雪が降っているのだからか。

【語句】○ときしらぬ 時節をわきまえないこと。夏のさなかに雪をいただく山に対する驚き。○いつとてか  
いつというので。○かのこまだら 鹿の斑点のような模様。

【所載】新古今集・雑中・一六一六／業平集Ⅰ・六六／今昔物語集・八四／伊勢物語・九段・一二

六八八 おほぞらにふるしらゆきのつちにをちばけぬべきこひも我はするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】大空に降る白雪が土に落ちたら消えてしまいうに違いない。そんな消えてしまうような恋を私はしていることだ。

【語句】○つちにをちばけぬべき 「をちば」は「お（落）ちば」。土に落ちたら消えてしまいうに違いない。「おくやまのまきのこのはふる雪のふりはますともつちにおちめや」（家持集・一五四）。○こひも我はするかな  
恋を私はしていることだ。「たきつせにねざしとどめぬうき草のうきたるこひも我はするかな」（古今集・五九二・忠岑）など、不安定な恋をしている自分を表す。

【所載】ナシ

六八九 まきのうへにふりをける雪のしば／＼もおもほゆるかもさよとわがせゆイ

【異同】ナシ

【現代語訳】真木の上に降り置く雪のようにしきりと、慕わしく思っています。夜においで下さい、あなた。

【語句】○ふりをける ふりおける。○しば／＼も しきりに。意味としては、「しくしくに」に同じ。「まきのうへにふりおける雪の」は「しば／＼も」を導く序。○さよと 所載欄の万葉集では「さよ問ふ（へ）」。底本の通りでは解しがたく、傍記でも訳しがたいので、万葉集によって解す。

【所載】万葉集・一六六三（旧一六五九）真木乃於尔 零置有雪乃 敷布毛 所念可聞 佐夜問吾背 マキノウヘニフリオケルユキノシクシクモオモホユルカモサヨトフワガセ まきのうへにふりおけるゆきのしくしくもおもほゆるかもさよとわがせ／和歌童蒙抄・九一

六九〇 あまぎりてゆきもふらなむいはしろみちしばにイはこのいはえはにふらまくも見む

【異同】いはしろは—岩代の（御・大）  
いちしろくイ

【現代語訳】空が曇って雪も降ってほしい。はつきりとこの道芝に降るのを見よう。

【語句】○あまぎりて 空が曇ること。○いはしろは 所載欄の万葉集本文「灼然」は難訓であったか。なお、古今六帖・五六五番歌の「いちしろくしも」は本文「市白霜」。一応、傍書異文の「いちしろく」で読む。「いちしろく」は、はつきりする、はつきりと見える意。○いはえはに このままでは解せないの、ここも傍書異文「みちしばに」で解す。「みちしば」は道芝、道ばたに生えている芝草。「葉ずゑこそ秋をもしらめねをふかみそれみちしばのいつか忘れん」（宇津保物語・九）。○ふらまくも 「まく」は……だろうこと、の意。推量の助動詞「む」の未然形「ま」に、準体助詞「く」のついたもの。

【所載】万葉集・一六四七（旧一六四三）天霧之 雪毛零奴可 灼然 此五柴尔 零卷乎将見 アマガラシユキモフラスカイチシロクコノイツシバニフラマクラミム あまぎらしゆきもふらぬかいちしろくこのいつしばにふらまくをみむ

〔以上五首担当 杉本〕

六九一 おほうちのまそでの<sup>まかみのイ</sup>はらにふるゆきはいたくなふりそい<sup>いへもあらイ</sup>もしあはなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】大内のまそでの原の降る雪は激しく降らないでくれ、(この野で逢う約束をした)あの子に逢えないじゃないか。

【語句】○おほうちのまそでのはら 所在不明。後代の例歌に「なきてくるかりのなみだかはなすきまそでのはらにおけるしら露」(夫木抄・九九〇・正三位重氏卿)。所載欄の万葉集には「おほくちのまかみのはら」。傍書異文「まかみのはら」は、奈良県高市郡明日香村。飛鳥寺南方一帯の地。「明日香乃 真神乃原」と万葉集・一九九、人麿の高市皇子挽歌にある。また「みもの 神名火山ゆ との曇り 雨は降りきぬ 雨霧らひ 風さへ吹きぬ 大口の 真神の原ゆ 偲ひつつ 帰りにし人 家に到りにきや」(万葉集・三二八二(旧三二六八))。

【所載】万葉集・一六四〇(旧一六三六) 大口能 真神之原尔 零雪者 甚莫零 家母不有国 オホクチノマカミノハラニフルユキハイタクナフリソイヘモアラナクニ おほくちのまかみのはらにふるゆきはいたくなふりそいへもあらなくに

六九二 きえつゝも猶ふるものは人こふる我たましひとゆきとなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】消えては、やはりフルもの―それは命絶えそうになりながら生きている恋に苦しむ私の魂と雪とであつたよ。

【語句】○きえつゝも猶ふるもの 「きえ」は(雪が)消滅する意味と、人間が死にそうになる意味とをかける。「フル」は「降る」に「経る(月日を過ぐす)」をかける。「猶」(なほ)は「そうはいつてもやはり」の意。○たましひ たましひ。靈魂。古代人は肉体を「カラ(容器)」と言い、そこに「靈魂」が入ると考えた。恋する場合や懊悩によつて魂はしばしばカラを離れる。「恋しさにわびてたましひ迷ひなばむなしきからのなにやのこらむ」(古今集・五七一)、「あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心地する(古今集・九九二) など。

【所載】ナシ

人丸

六九三 あはぬよのふるしら雪とつもりなばわれさへともにけぬべきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】お逢い出来ない夜が、降る白雪のつもるように重なり積もるなら、（雪の消えるように）私まで（雪と）ともに消えてしまいたいそうなのに。

【語句】○ふるしら雪と 「つもりなば」に続く。逢えない夜が「つもったなら」というのが主意である。下の「けぬべき」は「死んでしまいたいそう」の意の「消ぬ」と（雪の）消えてしまいたいそう」の意味をかける。

【所載】古今集・恋三・六二一／人麿集Ⅰ・一七九／人麿集Ⅱ・三二三／人麿集Ⅲ・四六六／和歌初学抄・一〇／万葉集時代難事・三一

【参考】作者名「人丸」は、所載欄の古今集の歌の左注「この歌はある人のいはく、柿本人麿が歌なり」とあるのに一致する。

六九四 しらやまにふるしらゆきのこぞのうへにことしもつもるこひもするか

【異同】ナシ

【現代語訳】白山に降る白雪が去年の消えずに残るその上に（さらに）今年も降り積もる、そのように去年より今年もいつそう募る恋を私はしていることだ。

【語句】○しらやま 越の白山。石川県・岐阜県にある白山（はくさん）。雪深い山として屏風絵に描かれた。○こぞのうへにことしもつもる この語句を用いた後代の歌人真観の歌がある。「冬かけて花さく梅はこぞのうへにことしもつもる雪かとぞみる」（百首歌合 建長八年）。

【所載】ナシ

六九五 そらにしる人はあらじなしらゆきのきえてものおもふわがこゝろとは

【異同】わかこゝろとは―わかこゝろかな（大）

【現代語訳】それとなく知ってくれる人はいないだろうな、消えそうな思いで恋に苦しむ、わたしの心だとは。

【語句】○そらにしろ それという証拠もないのだが察知する、の意。「そら」に大空の「そら」をかける。○しらゆきの 「きえてものおもふ」を導く序。「そら」「消ゆ」は白雪の縁語。○きえてものおもふ 死にそうに恋しく思う。「かきくらしふるしらゆきのした消えにきえてものおもふころにもあるかな」(古今集・五六六)、「冬の池の鴨のうはげに置く霜のきえてもの思ふころにもあるかな」(後撰集・四六〇)。

【所載】新拾遺集・恋一・九二一

〔以上五首担当 平野〕

六九六 しものうへにふるはつゆきのあさごほりとけずもみゆるきみがころろか

【異同】ナシ

【現代語訳】霜の上に降る初雪が、朝には薄氷となり、それがなかなか溶けないように、一向にうちとけぬように見えるあなたのお心であるよ。(残念なことだ。)

【語句】○あさごほり 初冬、初春の朝、薄く張る氷。○ころろか 「か」は終助詞。詠嘆。「も……か」の形をとることが多い。第三句までが序詞。霜、雪、氷と冬の冷たい天然現象を畳み掛けて、第四句の「とけず」を導き出す。○とけずもみゆるきみがころろか とけないように見えるあなたのお心ですよ。「とけ」は「氷が」溶ける」と「うちとける」意を掛ける。所載欄の拾遺抄・拾遺集では「とけずも物をおもふころかな」。寛平御時中宮歌合では「とけむころこそひさしかりけれ」、左兵衛佐定文歌合では「とけむほどこそひさしかりけれ」。

【所載】拾遺抄・冬・一四六／拾遺集・冬・二二九／寛平御時中宮歌合・二〇／左兵衛佐定文歌合・解一

六九七 しらゆきのふりしくときはあし引の山したかぜに花ぞちりける

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪が降りしきる時は、山おろしの風に花が散るのであったよ。

【語句】○ふりしく 盛んに降る。降りしきる。「頻く」は、盛んにある、度重なる意。一説に、降り敷く、いちめんに地を蔽う意とも。○あし引の 枕詞。山、峰(を) などにかかる。また、山そのものを指して、岩根などにかかることもある。所載欄の他文献は全て「みよしのの」。吉野は桜の名所。○山したかぜ 山より麓に吹きおろす風。○花ぞちりける 霏々と降る雪を、落花の風に舞う様にたとえた。雪を花に、の見立て。「ける」

は詠嘆。

【所載】古今集・賀・三六三／拾遺集・冬・二五三／貫之集Ⅰ・二／元輔集Ⅰ・二二六

六九八 よるならばはなとや見ましわがやどのにはしろたえにふれるしら雪

【異同】ナシ

【現代語訳】夜ならば花と見たであろうか。我が家の庭一面にまつ白に降った白雪を。

【語句】○はなとや見まし 花と見たであろうか。所載欄の他文献では「月とぞ見まし」。○しろたえ しろたへ。梶の木の皮の繊維で織った白い布。白いこと。白色。○やど 屋戸（家の戸口）から転じて、家屋、すみか。「いへ」が家族などをあらわすのに対して「やど」は建物を指すことが多い。平安以降、「いへ」は散文に、「やど」は和歌に多く用いられた。○ふれるしら雪 所載欄の後撰集では「ふりつもる雪」、貫之集では「ふりしける雪」。

【所載】後撰集・冬・四九六／貫之集Ⅰ・六五

六九九 ふゆごもりおもひかけぬをこのまよりはなとみるまでゆきはふりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬ごもりしている今、思いがけないことだが、まるで、花が散っているのかと思われるほどに、木の間から盛んに雪が降ってくるのだ。

【語句】○ふゆごもり 冬の間、動植物が活動を停止し、人も家にこもること。○おもひかけぬを 真冬なので、花のことなど思いもかけないものを。○はなとみるまで 花と見まがうほどに。○ゆきはふりつゝ 「つゝ」は反復を表す助詞。所載欄の古今集では「雪ぞふりける」。

【所載】古今集・冬・三三一

七〇〇 むめがえにふりをけるゆきは春ちかみめのうちつけにはなかとぞみる

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の枝に降り積もっていた雪は、春も近い時であるから、瞬間的にふとそれを見た時には、梅の花かと思っただことだ。

【語句】○ふりをけるゆきは 降り置（お）いた雪は。降り積もった雪は。所載欄の後撰集では「ふりおける雪を」。○ちかみ 近いゆえに。近いものだから。「み」は原因、理由をあらわす接続語。……だから、……なので。○めのうちつけに 何の予備知識も思惑もなく、ひよつと見ると。ひよつと見た感じでは。「こころのなしめのうちつけに、例の猫にはあらず。」（更級日記）。

【所載】後撰集・冬・四九七

〔以上五首担当 斎藤・三浦〕

七〇一 しろたえにゆきのふれゝばこまつはら色のみどりもかくろえにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】真白に雪が降っているので、小松原の色である緑もすっかり隠れてしまったのだなあ。

【語句】○しろたえに しろたへに。白袴（梶の木の繊維で織った布）のように純白で光沢があるようす。「雪」の形容。「白」は小松原の「緑」と対照をなす。○こまつはら 小松原。「小」は接頭語。松の繁っている原。○かくろえにけり 隠ろへにけり。「隠ろふ」は、「隠る」の未然形に継続の助動詞「ふ」がついた「かくらふ」の転。隠れた状態、見えない状態にある。

【所載】貫之集I・一二五

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「延喜八年承香殿御屏風の歌、仰せによりて奉る十四首」のうちの一首、「道行く人の松の雪みたる」。

七〇二 きえやらずゆき<sup>すき</sup>はし<sup>すき</sup>ばしもとまらなんうきことしげきわれにかはりて

【異同】うきことしけき―うきかとしけし（大）

【現代語訳】雪は少しの間でも消えずにとどまっていた欲しい。つらいことが多くて消え去ってしまいそうな私に代わって。

【語句】○きえやらず 「消ゆ」に補助動詞「やる」と打消の助動詞「ず」がついたもの。消えるはずのものが、



まだ消えない。すっかり消えきらない。新編国歌大観で検索すると、用例は、「小笹原風待つ露のきえやらずこのひとふしをおもひおく哉」(新古今集・一二〇五・俊成)以前には、これのみである。傍記異文「きえやすき」ならば「雪」にかかるため、句の続きもよく、所載欄の貫之集とも一致するが、本文通りとして解す。○うきことしげきわれ 苦しいことの多い自分。「有りはてぬ命待つ間のほどばかりうきことしげく思はずもがな」(古今集・九六五・平定文)。所載欄の貫之集歌は恋部にあり、「うきこと」は恋に関わると考えられるが、当該歌では特定できない。「われ」は「雪」と同じくいずれは消え果てる身とする。「恋するにきえかくる身と春たちてふりくる雪といづれまされり」(忠岑集IV・一四五)。

【所載】玉葉集・雜一・二〇四二／貫之集I・六〇二  
【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。

七〇三 はなとみるゆきのいましもふりしくははるちかくなるとしのつねかも  
けふイ しるしかイ

【異同】ナシ

【現代語訳】花と見まがう雪がちようど今しきりに降っているのは、春が間近になる毎年のことだなあ。

【語句】○はなとみるゆき 雪を花に見立てる。○いましも ちようど今。 たった今。 ○ふりしくは しきりに降っているのは。 所載欄の貫之集では「ふりつらん」とあるが本文通りとして解す。○はるちかくなるとしのつねかも 毎年春が近くなると、雪が花のごとくみえる。

【所載】貫之集I・三八七

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「天慶三年四月右大将殿御屏風の歌廿首」のうちの一首、「十二月つごもり、雪人の家にあり」。

七〇四 はるこねど草木にはなのさくことはふるしら雪のかゝるなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】春はまだ来ないけれど草木に花が咲いているのは、降る白雪がかかっているのだった。

【語句】○ふるしら雪のかゝる 「かかる」は対象に全体がかぶさる。 覆いかぶさる。 貫之集では「心」とあるが本文通りとして解す。雪と花の見立て。花と思ってみるが、実は雪であったという趣向。

【所載】貫之集Ⅰ・一三八

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「延喜十九年東宮の御屏風歌内裏より召しし十六首」のうち一首、「雪の降れる」。

七〇五 このまよりかぜにまがひてふるゆきははるくるまでははなかとぞみる

【異同】かぜにまかひて―花にまかひて（大）

【現代語訳】木々の間から風にまぎれて降る雪は、春が来るまでは花かと思つて見ることだ。

【語句】○このま 木々の間。雪、花と取り合わせる類歌「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」（古今集・三三二、古今六帖・六九九）。○かぜにまがひてふるゆき 風にまがひて降る雪。「風にまがひて」は風に入り交じつて。風と雪のまがひはの例は、「ふきまよふ風にまがひて雪ふればあまのみそらにいさごみなぎる」（出観集・六〇六）など。所載欄の躬恒集本文とは一致するが、貫之集では「風にまかせて」とある。

【所載】貫之集Ⅰ・一〇四／躬恒集Ⅰ・九六／躬恒集Ⅴ・三一

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集、躬恒集に入集する。貫之集Ⅰでは「延喜十八年二月女四の皇女の御髪上げの屏風の歌、内裏の召ししにたてまつる」のうちの一首「十二月」。躬恒集Ⅰでは「女四宮の御屏風歌、正月（イしはす）」とある。

〔以上五首担当 中野〕

七〇六 ものごとにふりのみかくすゆきなれど水にはいろものこらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】いろいろなものにそれぞれに降り積つておおい隠す雪だが、水にだけは（降つても消えて）いろいろ残らないことだなあ。

【語句】○ものごとに あらゆるものそれぞれに。○ふりのみかくす 降つて隠す。副助詞「のみ」によつて、直前の「ふり」を強めた。

【所載】風雅集・冬・八五九／貫之集Ⅰ・八八

七〇七 きみまさばさむさもしらじみよしのゝよしのゝやまにゆきはふるとも

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいてくだされば、私は寒さだつて感じないでしょう。たとえ吉野の山に雪が降っても。

【語句】○きみまさば あなたがいてくだされば。「ます」は、「在り」「居り」の尊敬語。○さむさもしらじ 寒ささえもそれとは感じないだろう。寒いとは思わないだろう。○みよしのゝよしのゝやま 大和国の吉野山。雪によって歌に詠まれる。

【所載】万代和歌集・二二四二／貫之集Ⅰ・二二七

七〇八 くろかみのしろくなりゆくみにしあればまづはつゆきをあはれとぞ思

【異同】ナシ

【現代語訳】黒髪が次第に白くなってゆく身でありますから、なによりもまず、初雪をしみじみと切なく思います。

【語句】○くろかみのしろくなりゆくみ 年老いて黒髪が次第に白くなってゆく身。○はつゆきをあはれとぞ思 初雪が降るのを切なく思う。「あはれ」は心に深く感歎する気持を表わす語。ここは、初雪の白さにわが髪の毛くなりゆくことを思い合わせての感慨。

【所載】古今六帖「かみ」三二七〇／後撰集・冬・四六七／躬恒集Ⅰ・二三二／躬恒集Ⅲ・一三〇／躬恒集Ⅳ・二六六／躬恒集Ⅴ・一一三

七〇九 しらゆきのふりてつもれるやまざとはすむ人さへやおもひきゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪が降って積もった山里では、そこに住む人までも（あの雪のように）もの思いゆえ消え入ってしまうのだろうか。

【語句】○すむ人さへ 雪だけでなく住んでいる人までも。「さへ」は、添加の意を表わす副助詞。○おもひき

ゆ 思うことで消える、思いゆえ消える、の意。消えるような思いをすること。「きゆ」は「ゆき」の縁語。

【所載】古今集・冬・三二八／新撰万葉集・一七九／新撰和歌・一五〇／忠岑集Ⅰ・三七／忠岑集Ⅱ・二五／忠岑集Ⅲ・三九／忠岑集Ⅳ・三八

七一〇 かきくらしふるしらゆきのしたもえにきえうせねとや人のつれなき<sup>ぎイ</sup>

【異同】きえうせねとやーきみうせねとや（御・桂）、君うせぬとや（大）

【現代語訳】あたりを暗くして降る雪が（表に見えない）下の方では消えているように、私にも人知れず消えてしまえというつもりで、あの人はこんなにつれないのだろうか。

【語句】○かきくらし あたりいちめんを暗がらせて。「かき」は接頭語、「くらし」は四段活用他動詞の連用形。暗くする。見えにくくする。○したもえに このままでは意が通じない。傍記異文に抛り「したぎえに」とした方が、上二句および第四句とのつづき方に整合性が得られる。上二句は、第三句「したぎえに」を導き出すための序詞。

【所載】ナシ

【参考】古今集・恋一・五六六番に「かきくらし降る白雪のした消えに消えてもの思ふころにもあるかな」という壬生忠岑の歌がある。この古今集歌は、若干の語句異同はありながら、忠岑集Ⅰ・一三、Ⅱ・二六、Ⅲ・四〇、Ⅳ・三九にも見られる。

〔以上五首担当 犬養悦・山下〕

七一一 したぎえのゆきまをみればふゆながらはるのけちかきこゝちこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】下消えによってあらわれた雪間を見ると、まだ冬ではありながら、なんとなく春の近い気がするのとだなあ。

【語句】○したぎえ 積もっている雪が、底の方からとけて消えてくること。○ゆきま 積雪が部分的に消えているところ。○ふゆながら 冬のままで。まだ冬という季節でありながら。○けちかき 近い。「け」は接頭語で、はつきりと指すことはできないがなんとなくそんな感じがある、というさまを表わす。

【所載】左兵衛佐定文歌合・一七

七一二 みよしのゝやまのしらゆきふみわけていりにし人のをとづれもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】あの吉野の山の白雪をふみわけて山中へ行った人の、それきり音沙汰もないことよ。

【語句】○みよしのゝやま 大和の吉野山。○しらゆきふみわけて 白く積もった雪を踏みながら自分で道をつけて。○をとづれ おとづれ。音信、消息。

【所載】古今集・冬・三二七／新撰万葉集・一八三／忠岑集Ⅰ・三六／忠岑集Ⅱ・二七／忠岑集Ⅲ・四一／忠岑集Ⅳ・四〇／寛平御時后宮歌合・一二九

七二三 このふるはむめのはな<sup>ゆきイ</sup>より冬<sup>れどイ</sup>ながらきみがにほひにはるはきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】いま降っているこれは、（雪ではない）梅の花ですよ。季節はまだ冬でありながら、あなたのよい香りに、もう春が来ましたね。

【語句】○このふるは いま現に目の前で降っているのは。「この」という指示のはたらきを持つ語は、通常は体言に接続するが、これを動詞の直前に置く用法は、万葉集によく見られる。「このねぬるあさけのかぜは」（一五五九（旧一五五五）、「このみゆるあまのしらくも」（四一四六（旧四一二二））など。「この」が指示する動詞によって表わされる状態が、現在そこで行われている、という場合の言い方である。○むめのはなより 梅の花ですよ、と強く断定している。ただしここで実際に降っているのは雪であって梅ではない。降る雪を散る梅花に見立てて、その見立てを強調している。○冬ながら 七十一番歌参照。○きみがにほひに あなたのよい香りに。「にほひ」は、そのものの本体から発言する美質をいう。ここでは第二句「梅の花なり」との関係でこの語が用いられており、香りについて言ったものか。

【所載】ナシ

【参考】この歌には、なにか人事的な詠歌事情がありそうに思われるが、詞書がなく他文献にも見えず、手がかりがないため、具体的な歌意までは読み取れない。

七一四 なにせんにそでにしらゆきかゝるともとめてわかれ本かへらぬらむイゝさとせなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】こうして袖に白雪が降りかかっても、それがいったいなんになるというのだろう。この降りかかる雪をいつまでも袖にとどめて、別れることのないぬさとするわけにはいかないのに「第四句は傍書に拠り、」とめておかれぬ」として解した。

【語句】○なにせんに それがなんになるというのか、なんにもなりはしないのに。第二、三句と倒置されている。○ゝ(ぬ)さ 神に祈るときの捧げもの。ここは、当時旅に携帯した「きりぬさ」のこと。麻や紙を細かく切ったもので、「ぬさ袋」に入れて携行し、途中の神社や道祖神の神前にまいて手向け、旅の無事を祈った。「龍田ひめ手向くる神のあればこそ秋のこのはのぬさと散るらめ」(古今集・二九八)や、「漕ぎくるみちに手向けするところあり。楫取りしてぬさ奉らすに、ぬさ東の方へ散れば」(土佐日記・一月二十六日条)などによって、その形状や用いられ方が推測される。また後撰集一三〇五番歌の詞書に、「あひ知りて侍りける人のあづまの方へまかりけるに、さくらの花のかたにぬさをしてつかはしける」とあるのも、旅立つ人へ餞別として贈った「きりぬさ」である

【所載】ナシ

七一五 わすれてはゆめかとぞおもふおもひきやゆきふみわけてきみをみんとは

【異同】ナシ

【現代語訳】いまの現実をふと忘れては、これは夢か、と思うのです。かつて思ったことがあったでしょうが、こんなに雪をふみわけて来て、こうしてお目にかかることがあろうとは。

【語句】○ゆめかとぞおもふ もしや夢か、と思う。この「ゆめ」は、「うつつ」(現実)に対する「ゆめ」。いま直面している現実の信じ難さを言った句。○おもひきや かつて思ったことがあったかどうか、思ったことなどありはしない。「や」は反語。下句と倒置されている。○ふみわけて 七一二番参照。

【所載】古今集・雑下・九七〇／業平集Ⅰ・六〇／業平集Ⅱ・五〇／業平集Ⅲ・三五／業平集Ⅳ・三〇／伊勢物語・八三段・一五二

七一六 はなのいろにゆきはまじりてみせずともかをだにぬすめ人のしるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】白い花に雪が混じりあつて見分けがつかないようにしていても、せめて香りだけでも盗んでおくれ、花が咲いていると人が気づくように。

【語句】○みせずとも 花と雪の区別がつかないようにしていても。○かをだにぬすめ せめて香りだけでも盗んでおくれ。「花の色は霞にこめてみせずとも香をだにぬすめ春のやま風」（古今集・九一）。○人のしるべく 人が気づくように。

【所載】古今集・冬・三三五／新撰和歌・一三六／奥儀抄・一二五

【参考】所載欄古今集の歌本文は「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人のしるべく」とある。

七一七 うらちかくふりくるゆきはしらなみのすゑのまつやまこそすかとぞみる

【異同】ナシ

【現代語訳】海岸近くに降ってくる雪は、白波があゝの越えることがないといわれる末の松山を、越すかと思われほどの大波に見えるよ。

【語句】○うらちかく 海辺の近く。○しらなみの 「ふりくるゆき」の形容であるとともに、「末の松山の波」をもさしている。○すゑのまつやま 陸奥国の歌枕。宮城県多賀城市。波が決して越えることがないといわれる松山。「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」（古今集・一〇九三）。

【所載】古今集・冬・三二六／拾遺集・冬・一三三九／新撰和歌・一四二／興風集Ⅰ・七、六三／興風集Ⅱ・一七／寛平御時后宮歌合・一四三／寛平御時中宮歌合・二四／袖中抄・九〇二／桐火桶・一二一

【参考】所載欄の古今集は、詞書「寛平御時后宮歌合の歌」、作者「藤原興風」。拾遺集は、作者「人麿」。

七一八 しらゆきのところもわかずふりしけばいはほにもさくはなと こそみれ

【異同】底本「はなと■みれ」ノ「■」ノ箇所、墨デ塗りツブシテイル。

【現代語訳】白雪が何処も区別せずに一面に降り積もっているの、花の咲くはずのない大きな岩にまでも、花が咲いたと見ることだ。

【語句】○ところもわかず どこそこの区別なしに。○いはほにもさくはな 巨岩にも咲く花。雪を花に見立てる。

【所載】古今集・冬・三二四

### 左大臣橘諸兄

七一九 たかやまのいはほにをふるすがのねのねもしろたへにふれるしら雪

【異同】ナシ

【現代語訳】高山の大きな岩に生えている菅の根の、黒いはずの根も、白い布のように一面に降り積もっている白雪よ。

【語句】○すがのねの 枕詞。菅の根の長いことから「長し」「乱る」「絶ゆ」に、また「根」にかかる。○しろたへに 真つ白に。「しろたへ」は梶の木の繊維で織った白い布。傍記異文「しろじろに」は目立って白くの意。上三句は「ねもしろたへに」を導く序詞。

【所載】続後撰集・冬・五〇六／万葉集・四四七八（旧四四五四） 高山乃 伊波保尔於布流 須我乃根能 祢母許呂其呂尔 布里於久白雪 タカヤマノイハホニオフルスガノネノネモコロゴロニフリオクシラユキ たかやまのいはほにおふるすがのねのねもころごろにふりおくしらゆき／家持集Ⅱ・一五二

【参考】作者名「左大臣橘諸兄」は所載欄の文献に一致する。

七二〇 ゆきをゝきてむめの花こひそあし引のやまかたかけていゑみせるきみ

【異同】ナシ

【現代語訳】雪をさしおいて梅の花を恋してはいけません。家の片側を山に寄せ掛けて住んでいる君よ。雪だつて梅の花のようにうつくしい。

【語句】○こひそ 恋するな。「そ」は禁止を表す。○あし引の 枕詞。「山」「峰（を）」などにかかる。○やま



かたかけて 家の片側を山に寄せ掛けて。「山にかたかけたる家なれば」(源氏物語・手習)。○いゑゐ 家に住むこと。「野辺ちかくいへゐしせれば鶯の鳴くなる声はあさなあさなき」(古今集・一六)。

【所載】万葉集・一八四六(旧一八四二) 除雪而 梅莫恋 足曳之 山片就而 家居為流君 ユキヲオキテウメヲナコヒソアシヒキノヤマカタヅキテイヘヅセルキミ ゆきをおきてうめをなこひそあしひきのやまかたづきていへゐせるきみ／人麿集Ⅲ・二〇四／俊頼髓脳・二九五／綺語抄・一五五

〔以上五首担当 林〕

七二二 むめのはなえだにかさくとみるまでにかぜにみだれてゆきぞふりける

【異同】ナシ

【現代語訳】梅の花が枝に咲くかと見るほどに、風に乱れて雪が降ることよ。

【語句】○見るまでに 「AをBと見る」「Bと見るまでにAである」などの文型は〈見立て〉の基本文型である。鈴木宏子「雪と花の見立て」考―万葉から古今へ―『古今和歌集表現論』笠間書院、二〇〇〇年。当該歌では、雪を梅の花に見立てた。「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」(古今集・三三一)。

【所載】万葉集・一六五一(旧一六四七) 梅花 枝尔可散登 見左右二 風尔乱而 雪曾落久類 ウメノハナエダニカチルトミルマデニカゼニミダレテユキゾフリクル うめのはなえだにかちるとみるまでにかぜにみだれてゆきぞふりくる

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集には「忌部首黒麿雪歌一首」とある。

七二二 かきたれてふるしらゆきのきみならばあなめづらしといはましものを

【異同】ナシ

【現代語訳】しきりに降る白雪が、もしもあなたならば、ああ珍しいことと言いましようものを。

【語句】○かきたれてふる 雪や雨が激しく降り続く。「いとど愁(うれ)ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり」(源氏物語・未摘花)。○しらゆきならば もし白雪であったならば。○いはましものを 言おうものを。「……ならば……ましものを」は、「……ならば」という仮定に「まし」と応じる反実仮想の語形。激しく降

り続く雪が、めったに訪れてこない「君」の訪れならば、「めづらし」と珍重しようものを、そうではないので珍しくもないと、「かきたれてふる」雪に飽く思いと、「君」が訪れて来ないという、自分の願い通りにならない事実に対する不満・物足りなさを表している。

【所載】ナシ

七二三 おもへども身をしわけねばめかれせぬゆきのとむるぞわがこゝろなる

【異同】ゆきのとむるそ—雪のつもるそ（大）

【現代語訳】あなたのことを思っているけれども、この身を二つに分けることはできないので（いつもは一緒にいることはできませんが）、今日は絶え間なく降り続く雪が私を止め、ずっとあなたと一緒にいられるのは、私の本望です。

【語句】○おもへども身をしわけねば 心ではいつもあなたのことを思っているが、自分の体を分けて常にあなたと一緒にいることはできないでいる、ということを表す。「おもへども身をしわけねばめに見えぬ心を君にたぐへてぞやる」（古今集・三七三）。○めかれせぬ 目離れせぬ。目から離れない。「目離れ」は「目離る」の名詞形。「目離る」は、対象から目が離れる意。「くるとあく」とめかれぬものを梅花いつの人まにうつろひぬらむ」（古今集・四五）。当該歌では、目から離れることなく雪が降り続く意か。○とむる 雪が自分（の帰宅）を止める、ということ。「いとま申さんと思ふに、雪のこぼすがごとくふりて、京へかへさじととむるは、真実、是にありたきとおもふ心のする事也、といへり。」（伊勢物語闕疑抄）『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』付録の翻刻による）

【所載】伊勢物語・八五段・一五五／業平集Ⅰ・六八／業平集Ⅱ・一〇五／業平集Ⅲ・四四

【参考】所載欄の伊勢物語八五段では、「雪に降りこめられたり」という題で、「昔男」が出家した元の主君に対する敬慕の念を詠んだ歌。

七二四 こぬ人をまつのはにふるしらゆきをきえこそかへれこふるおもひに

【異同】こぬ人を—此人を（大） しらゆきを—白雪の（大）

【現代語訳】来ない人を待っているのは、松の葉に降る白雪が日に当たるとすっかり消えるようなもので、私も

消え入りそうになるよ、恋いこがれる思いのために。

【語句】○まつ 「来ぬ人を待つ」の「待つ」に、「松」を掛ける。「久しくもなりにけるかなすみのえの松はくるしき物にぞありける」(古今集・七七八)。○きえこそかへれ 完全に消えること。また、恋の苦しみなどのため、我が身がすっかり消えてなくなるような思いになること。この歌では、松の葉に降る白雪がすっかり消える意と、我が身が消え入りそうになる意とを重ねて言っている。○こふるおもひ 恋ふる思ひ。「思ひ」の「ひ」に「日」を掛ける。所載欄の後撰集では「くゆる思ひ」、元良親王集では「あかぬおもひ」、大和物語では「あはぬおもひ」となっている。

【所載】後撰集・恋四・八五一／元良親王集・一〇五／大和物語・一三九段・二一八

【参考】元良親王集・大和物語によると、醍醐天皇女御源和子に仕える女房、承香殿の中納言の君が、元良親王に贈った歌。

七二五 いはのうへのまつのこずゑにふるゆきはいそかへりふれのちまでもみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】岩の上に生えた松の梢に降る雪は、五十回でも何回でも降れ。後々までもそれを見よう。

【語句】○いはのうへのまつ 永遠盤石のイメージから、長久を寿ぐ表現に用いた。「いはのうへの松のちとせをうちかぞへとしをおひつきみにまかせん」(堀河中納言家歌合・一)。○いそかへり 何回も何回もくり返して。「いそ」は、五十、また数が多いこと。「かへり」は、くり返しの回数を表す。「いそかへり我が世の秋はすぎぬれどこよひの月ぞためしなりける」(清輔集・一三五)。

【所載】ナシ

【参考】万葉集に「池の辺(へ)の松の末葉(うらば)に降る雪は五百重(いはへ)降り敷け明日さへも見む」(一六五四・(旧一六五〇))という類似した歌がある。

〔以上五首担当 長戸〕

七二六 みちもあらじいかでかゆかむしら雪のふりおほふたけのよもふけにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】道もあるまい。どのようにして行けばよいのか。白雪の降り積もった竹の節間ではないが、夜も更けてしまったよ。

【語句】○いかでか 副詞「いかで」に係助詞「か」の付いたもの。ここでは疑問。どのようにして……か。「冬の池のうへは氷にとちられていかでか月のそこにいるらん」（拾遺集・二四一）。○ふりおほふ 降りつもる。六八四番歌参照。○たけの 「よ」を導くための措辞。○よもふけにけり 「夜」と竹の「節間（よ）」を掛ける。

「よ……ふけにけり（ける）」は万葉集に集中して見られる結句。平安期の私家集では人丸集・赤人集・家持集に残るのみ。「山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつつをるに夜そふけにける」（万葉集・一〇七五（旧一〇七一））「妹がりとわが行く道の川にあればつくめ結ぶと夜そふけにける」（万葉集・一五五〇（旧一五四六））など。

【所載】ナシ

【参考】河海抄（藤袴）に初句を「道もなし」として引用されている。

七二七 ゆきふればふゆごもりせる草も木もはるにしられぬはなぞさきける

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降ると、冬ごもりをしている草も木も、春に知られない花が咲いていることだよ。

【語句】○ふゆごもり 万葉集では全十例中九例が「春」に続く。「冬ごもり春さり来れば鳴かざりし鳥も来鳴きぬ……」（万葉集・一六）など。古今集では他に一例「冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける」（古今集・三三三・貫之）。貫之には「梅の花おほかる里に鶯の冬ごもりして春を待つらん」（貫之集・一七一）があり、新撰和歌に「冬ごもり春まだとほき鶯のすのうちのねのかまほしきを」（新撰和歌・一五六）を増補するなど、貫之にとつての「冬ごもり」は冬の季節を歌う際の語彙だったようである。○はるにしられぬはな 雪を、春に知られていない花とする。逆の発想としては「桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」（亭子院歌合・一三、拾遺集・六四）が有名。

【所載】古今集・冬・三三三／桐火桶・一二〇

七二八 ふるゆきやはなとはさきてたのめけむなどかみのよくなりがてにする

【異同】ナシ

【現代語訳】降る雪が、花が咲いたものとしてその気にさせたのだろうか。なのにどうして我が身の上は良くならないのだろうか。

【語句】○たのめけむ あてにさせたのだろう。所載欄に示した貫之集の詞書からは官位が上がることを期待するの意が読み取れる。○などか どうして。「秋の田の穂にこそ人をこひざらめなどか心に忘れしもせむ」（古今集・五四七）。○みのよくなり 「みの」は、所載の貫之集によると「身の」に新たな任地である「美濃」を響かせるのだが、詞書のない古今六帖ではそこまで考慮する必要はない。「（木の）実の良く成り」と「（我が）身の良く成り」を掛ける。また、「花」と対比して、我が身の不遇を強調する。○がてに ……できないで。……しきれなくて。「桜散る花の所は春ながら雪ぞ降りつつ消えがてにする」（古今集・七五）。

【所載】拾遺抄・六〇三（静嘉堂文庫本朱書校合本卷十・五四五ノ次）／貫之集Ⅰ・七七八

【参考】貫之集の詞書には「かうぶり給はりて、加賀の介になりて、美濃の介に移らむと申す間に、内裏の仰せにて歌詠ませ給ふ奥に書きける」とある。

七二九 ゆきふりて人もかよはぬみちなれやあとはか<sup>もイ</sup>となくおもひきゆらん

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降って人も通わなくなった道なのだろうか。（道行く人の足跡が雪に埋もれてすっかり消えてしまったように）あとかたもなく「思ひ」の「火」も消えてしまったようだ。

【語句】○なれや 断定の助動詞「なり」の已然形に係助詞「や」の付いたもの。疑問を表わす。「秋ののにおくしらつゆは玉なれやつらぬきかくるものいとすぢ」（古今集・二二五）。○あとはかとなく 「あとはかなし」ははっきりした形跡がない。跡形もない。「さめてこそ見るべかりけうつつにもあとはかもなき夢としりせば」（和泉式部統集・六一〇）。所載欄にあげた古今集や躬恒集諸本ではいずれも「あとはかもなく」とする。ただし古今集の清輔本には「あとはかとなく」とある。○おもひきゆらん 「思ひ」に「火」を掛ける。すっかり意気消沈してなすすべもない様子。

【所載】古今集・冬・三二九／躬恒集・Ⅰ二六六／躬恒集Ⅱ・一五四／躬恒集・Ⅲ二九〇

七三〇 ふゆながらそらよりはなのちりくるはくものあなたははるにやあるらん

【異同】ふゆなから―冬ちかく（大）

【現代語訳】冬だというのに空から花が散ってくるのは、雲の向こう側ではもう春になっているのだろうか。

【語句】○そらよりはなの 降る雪を散る花に見立てる。七二七番歌参照。 ○くものあなた 深養父には「みなそこにくきなき花ぞ散りまがふ雲のあなたに春やきぬらん」（深養父集・一七）という類想の歌がある。

【所載】古今集・冬・三三〇／深養父集Ⅰ・一九／深養父集Ⅱ・一五／和歌体十種・二六／和歌十体・一一／奥儀抄・一一五

〔以上五首担当 青木〕

七三二 あさぼらけありあけの月とみるまでによしのゝやまにふれるしらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】ほのぼのと夜の明け初めるころ、あたりを見まわしてみると、まるで有明の月がさしているのを見まがうほどに、吉野の山には白雪が降りつもっていることだ。

【語句】○あさぼらけ 夜がほんのりと明け初めるころ。日の出前の明るくなり始めるころから日の出ごろまでを指す。○ありあけの月 陰暦十六日以降、特に二十日以降の月は夜が明けるころになっても東の空に残っている、そうした明け方の月。○とみるまでに と見まがうほどに。「ふゆごもり思ひかけぬをこのまより花と見るまで雪ぞふりける」（古今集・三三二）。

【所載】古今集・冬・三三二／是則集・二二／時代不同歌合・一二五／百人秀歌・二九／百人一首・三一／近代秀歌・五四／詠歌大概・六三

【参考】雪や霜が月の光に、あるいは逆に月の光が雪や霜に、それぞれ見間違えられるという表現には、たとえば和歌では「よるならば月とぞみましわがやどの庭白妙にふりしける雪」（貫之集・六五）などがあり、漢詩では、李白の「牀前看月光 疑是地上霜」などがある。なお、古今集その他では当該歌の作者を坂上是則とする。

七三二 けぬがうへにまたもふりしけ春がすみたちなばみゆきまれにこそみめ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪よ、まだ消え去らないその上に、さらに降り敷いてくれ。春霞が立ってしまったら、こんなに

美しい雪は稀にしか見られないだろうから。

【語句】○けぬがうへに 消えない、その上に。「け」は「消ゆ」の古い形の「消（く）」の未然形で、「ぬ」は打消しの助動詞の連体形。ただし「消（く）」には終止形の用例がきわめて少なく、ほとんどが連用形の「け」に、完了の助動詞「ぬ」の終止形が伴われた形である。「ふる雪はかつぞけぬらしあしひきの山のたきつせおとまざるなり」（古今集・三一九）。○ふりしけ 降り敷け。降り重なれ。○みゆき 「み」は接頭語。

【所載】古今集・冬・三三三／新撰和歌・一五四

七三三 松のうへにかゝれるゆきのうれをこそふゆのはなとはいふべかりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】松の上にかかっている雪、その梢こそ、冬の花とは言うべきであつた。

【語句】○うれをこそ 「うれ」は、植物の葉や枝の先端をいう。梢。ただし「ゆきのうれ」とあるのは不審。傍記異文の「これをこそ」によるべきか。あるいは後撰集には「それをこそ」とあるので、「う」は「そ」の誤写である可能性もあるか。

【所載】後撰集・冬・四九二

【参考】「ひかりまつ枝にかかれる雪をこそ冬の花とはいふべかりけれ」という非常によく似た歌が、新撰万葉集・上・一六一、寛平御時后宮歌合・一四四、秋萩帖・二八などに見える。

七三四 としふかくふりつむ雪をみるときぞふじのたかねにすむ心ちすれ

【異同】すむ心ちすれ—住心ちする（大）

【現代語訳】年が深まってゆき、深く降り積もる雪を見る時は、あの富士の高嶺に住んでいるような気持ちがあることだ。

【語句】○としふかく 一年が終わりに近づく。「ふかく」は「ふりつむ」にもかかる。○ふじのたかねに 所載欄に示した後撰集や躬恒集には「こしのしらねに」とあり、「越の白嶺」のほうが「富士の高嶺」よりは自然か。○すむ心ちすれ 「ぞ」の係り結びとしては、傍記異文や後撰集などのように「すむ心ちする」と連体形でありたい。

【所載】後撰集・冬・四九九／躬恒集Ⅳ・一一二／躬恒集Ⅴ・二三五

【参考】躬恒集に載るが、後撰集でも「よみ人知らず」とする。

七三五 むめがゝのふりをけるゆきにうつりせばたれかはものをわきてをらまし  
こゝろ／＼イ

【異同】ナシ

【現代語訳】梅のかおりがもし降り置いている雪にうつりまじってしまったら、一体誰が梅の花をそれだと区別して手折ることができようか、できはしないだろう。

【語句】○むめがゝの 梅の香が。「うつりせば」にかかる。○ふりをける 降り置（お）ける。○たれかはものをわきてをらまし 誰が梅の花を弁別して折ろうか、折ることはできないだろう。

【所載】古今集・冬・三三六

【参考】梅と雪との区別がつかないことを言っているのであろう。古今集の直前の歌（三三五）にも、「花の色は雪にまじりて見えずともかをだににほへ人のしるべく」とある。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

七三六 ゆきふればきごとにはなぞさきにけるいづれをむめとわきてをらまし

【異同】ナシ

【現代語訳】雪が降ったので、どの木にも（真つ白な）花が咲いたなあ。どれを梅の花だと区別して折りまじょうか。

【語句】○きごとに この木にもあの木にも。「きごと」は「木毎」で、「木」と「毎」で「梅」。漢詩の離合詩をまねた表現。「はるちかきえだにや花のこもるらむ木ごとにむめと見ゆるしら雪」（新撰六帖・一九七）。○わきて（梅の花と雪を）区別して。○まし 疑問表現とともに用いて、決断しかねる意を表す。

【所載】古今集・冬・三三七／新撰和歌・一三八／和歌朗詠集・三八三／友則集・七／三十六人撰・五七

七三七 ゆふぐれはこゝろもでさむしきよしのゝたかきみやまにみゆきふるらし  
さい



【異同】ナシ

【現代語訳】夕暮れは袖のあたりが寒いことです。み吉野の高い山に雪が降っているらしいよ。

【語句】○ゆふぐれは 夕暮れ時は。所載欄の家持集Ⅰでは「ゆふされば」。それ以外の所載欄の他文献では全て傍書と同じ「ゆふされば」（夕方になると）の意。○たかきみやまに 高い山に。「み」は「みよしの」「みゆき」の「み」と共に調子をとるための接頭語。所載欄の古今集・秀歌大体では「よしのの山に」、家持集Ⅰでは「たかき山べに」、家持集Ⅱでは「たかまの山に」。「たかまの山」は奈良県御所市高天にある金剛山。古今集の諸本では「たかきの山」（吉野郡の天川村と西吉野村の境界にある高城山）となっている。「みよしののたかきのやまに」らくものゆきはばかりてたなびけりみゆ」（万葉集・三五六（旧三五三））。

【所載】古今集・冬・三一七／家持集Ⅰ・二二七／家持集Ⅱ・一四〇／秀歌大体・八八

七三八 きえはつるときしなればこしぢなるしらやまは猶<sup>のなはい</sup>ゆきにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】完全に消えてしまう時などないので、越路にある白山には相変わらず雪が降り積もっていましたよ。

【語句】○こしぢ 越路は北陸道の古名の一つ。○しらやまは猶 「しらやま」は石川県・福井県・岐阜県にまたがる白山。「しらやま」という名前から、雪を連想した歌が多く詠まれた。所載欄の他文献では全て傍書と同じ「白山の名は」で、「白山という名は雪によって付けられた名だったのですね」の意。そちらが本来の形かと思われるが、ここでは一応古今六帖の本文によって解釈しておく。

【所載】古今集・羈旅・四一四／躬恒集Ⅰ・二八三／躬恒集Ⅱ・一五九／躬恒集Ⅲ・三〇七

七三九 わがせこにみせんとおもひしむめの花それともみえずゆきのふれゝば  
あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】愛しいあの人に見せようと思った梅の花は、どれが花だか区別がつきません。雪が降って（あたり一面真っ白になって）いるので。

【語句】○せこ 女性が男性を親しんで呼ぶ語。○それともみえず （雪のために）梅の花がどれであるとも見

分けがつかない。「梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば」(古今集・三三四)。

【所載】後撰集・春上・二二／万葉集・一四三〇(旧一四二六) 吾勢子尔 令見常念之 梅花 其十方不所見  
雪乃零有者 ワガセコニミセムトオモヒシウメノハナソレトモミエズユキノフレレバ わがせこにみせむとおも  
ひしうめのはなそれともみえずゆきのふれば／金玉集・七／和漢朗詠集・九四／人麿集Ⅱ・七／赤人集Ⅰ・三  
／家持集Ⅰ・一一／家持集Ⅱ・一一／三十六人撰・四五／深窓秘抄・九／俊頼髓脳・四〇八／袖中抄・一八九／  
古来風体抄・八六、三〇一

【参考】所載欄の文献では、後撰集では「よみ人しらず」、俊頼髓脳は「ある人」作とするが、この二つと私家集を除く他の全ての他文献では作者名を赤人とし、古今六帖の作者名と一致する。

七四〇 としふれどいろもかはらぬまつがえにかゝれるゆきをはなかとぞみる<sup>はい</sup>

【異同】としふれととしふれは(御)

【現代語訳】長年経つけれど(緑の)色も変わらない松の枝に降りかかっている雪を、花かと思つて見ることで

【語句】○まつがえに 松の枝に。所載欄の新撰万葉集では「まつのはに」、和歌童蒙抄では「まつのはに」。○  
かゝれる 降りかかっている。所載欄の新撰万葉集では「やどれる」。○ゆきをはなかとぞみる 雪を花だと思つ  
て見る。七三三番歌と同じ見立て。五句は所載欄の後撰集・和歌童蒙抄では「花とこそ見れ」、新撰万葉集では「は  
なとこそみれ」。

【所載】後撰集・冬・四七五／新撰万葉集・一九七／和歌童蒙抄・九四

〔以上五首担当 三浦〕

七四一 ゆきふればころもでさむしたかまとのやまの木ごとにゆきぞふるらし<sup>ふさい</sup>

【異同】ゆきふれば―ゆふされば(大)<sup>ふさい</sup>

【現代語訳】雪が降るので袖のあたりがさむいなあ。たかまとの山の木にはみんな雪が降り積もっているのだろ  
う。

【語句】○ゆきふれば 所載欄の万葉集(二三三三(旧三三一九))は「ゆふされば」であり、この方が歌意が通

る。○ころもで 袖。○たかまと 大和国の歌枕。奈良市白毫寺高円町。奈良市東郊の春日山の南に続く丘陵地帯。○木ごとに 木にはすべて。「こ」は例外のない意を表す。

【所載】万葉集・二三三(旧二二九) 暮去者 衣袖寒之 高松之 山木毎 雪曾零有 ユフサレバコロモデサ ムシタカマトノヤマノキゴトニユキヅフリタル ゆふさればころもでさむしたかまつのやまのきごとにゆきぞふりたる／夫木抄・七一九三／人麿集Ⅲ・一九七／家持集Ⅱ・一四〇

七四二 我せこをけさか／＼といでみればあはゆきふれるにはもほ<sup>はだら</sup>どろに

【異同】ナシ

【現代語訳】わが夫が来るのを今朝か今朝かと待ちかねて外に出てみると、まあ淡雪が降っている、庭にうつすらと。

【語句】○我せこ 我が夫。○あはゆき 淡雪。軽くて溶けやすい雪。所載欄の万葉集は「沫雪」。アワユキと訓読。七四六番歌参照。○ほどろに 雪などが薄くまだらに降り積もったさま。「淡雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも」(万葉集・一六四三(旧一六三九))。

【所載】万葉集・二三二七(旧二三三三) 吾背子乎 且今且今 出見者 沫雪零有 庭毛保杼呂尔 ワガセコヲ ケフカケフカトイデミレバアワユキフレリニハモホドロニ わがせこをいまかといでみればあわゆきふれりにはもほどろに／人麿集Ⅱ・一八二／人麿集Ⅲ・四六五／家持集Ⅰ・二三三／家持集Ⅱ・一四六／袖中抄・二四八

七四三 あしひきのやまにしろきはわがやどにきのふのくれにふりしゆきかも

【異同】ナシ

【現代語訳】山に白く見えるのは、我が家に昨日の夕暮れに降ったあの雪かなあ。

【語句】○あしひきの 枕詞。「山」「峰(を)」「尾の上」などにかかる。○わがやど 私の家。

【所載】新後拾遺集・冬・五三六／万葉集・二三二八(旧二三二四) 足引 山尔白者 我屋戸尔 昨日暮 零之 雪疑意 アシヒキノヤマニシロキハワガヤドニキノフノクレニフリシユキカモ あしひきのやまにしろきはわがやどにきのふのゆふべふりしゆきかも／人麿集Ⅲ・一九二／家持集Ⅰ・二三七／家持集Ⅱ・一五〇／桐火桶・二

七四四 ふなばりのゝぎにふりおほふ白雪のいちしろくしもこふるわれかも

【異同】ナシ

【現代語訳】ふなばりの野の木に降り覆う白雪のように、はつきりと人目に付く恋のそぶりをする私だなあ。

【語句】○ふなばり 地名。奈良県桜井市吉隠（よなばり）の古名。所載欄の西本願寺本万葉集における訓のよ  
うに「よなばり」を「ふなばり」とよんでいる例が他にもある。○ゝ（の）ぎ 野に立っている木。○ふりおほ  
ふ 雪などが降り積もって物を覆い隠す。○いちしろくしも はなはだしくもまあ。三句までは「いちしろく」  
にかかる序詞。

【所載】万葉集・二三四三（旧二三三九）吉名張乃 野木尔零覆 白雪乃 市白霜 将恋吾鴨 フナバリノノギ  
ニフリオホフシラユキノイチシロクシモコヒムワレカモ よなばりののぎにふりおほふしらゆきのいちしろくし  
もこひむあれかも／夫木抄・九七六三

七四五 しもがれのえだもなわびそ白ゆきのきえぬかぎりははなとこそみれ<sup>トイ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】霜にあつて枯れしぼんだ枝も嘆きなさるな、白雪が消えない限りは花だと思つて見ることですよ。

【語句】○しもがれ 霜にあつて草木が枯れしぼむこと。○なわびそ 辛がつてがつくりしなさるな。「な……そ」  
は禁止を表す。○はなとこそみれ 花だと思つて見ることよ。「白雪のところもわかずふりしけばいはほにもさく  
花とこそ見れ」（古今集・三二四）。

【所載】後撰集・冬・四七六

〔以上五首担当 橋本・林〕

七四六 かつきえてそらにみだるゝあはゆきはものおもふひとのこゝろなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】一方では消えて、一方では空に乱れる淡雪は、物思いする人の心であつたのだなあ。

【語句】○かつきえてそらにみだるゝ 一方では消えて、一方では空に降り乱れるの意。「消ゆ」は、恋の歌では死にそうな思いを意味する。恋の思いで消える人事と景物の対比。○あはゆき 和名抄では「沫雪（阿和由岐）其弱如水沫」、名義抄では「沫雪、アハユキ」とある。泡雪ならば「あわゆき」、「淡雪」ならば「あはゆき」の表記となるはずだが、いづれにしても語義としては溶けやすい雪をさす。○ひと 一般的な人とも、自分のこととも取れる。所載欄の後撰集の詞書や「あは雪のたまればがてにくだけつつわが物思ひのしげきころかな」（古今集・五五〇）などからすれば、我が身を詠んだとするべきかもしれないが、自分を含めた一般的な恋の心ととりたい。

【所載】後撰集・冬・四七九

七四七 あらたまのとしをわたりてあるがうへにふりつむゆきのきえぬしらやま

【異同】ナシ

【現代語訳】年を越してなお雪が残っている、その上に、降り積もる雪の消えることのない白山よ。

【語句】○あらたまの「年」にかかる枕詞。○としをわたりて 年を越して、の意。「亭子院殿上人歌合」（延喜一六年七月七日）に「あまのがはとしをわたりてたなばたのあかぬこひするころにもあるかな」（二二五）がある。○しらやま 七三八番歌参照。

【所載】後撰集・冬・四八二／家持集Ⅰ・二七六／家持集Ⅱ・二八二／躬恒集Ⅳ・二六二

七四八 こゝろをきてみばこそわかめしらゆきもいづれかはなのちるにまがへる

【異同】ナシ

【現代語訳】もしも心づもりをして見たら見分けられるでしょうけれども。白雪もどれが花の散るのに紛れているのかしら。

【語句】○こゝろをきて 心置（お）きて。そのつもりで心を配る。「女郎花にほふあたりにむつるればあやなくつゆや心おくらん」（拾遺集・一五九）など、隔意を持つ、の意に解する場合も多いが、ここでは「心づもり」「心配り」の意味で読んでおく。所載欄の後撰集では「心あてに」とあり、躬恒の有名な「心あてに折らばや折

らむ」の歌を想起させる。○いづれか いったいどれが、の意。「河柳糸は緑にある物をいづれか朱の衣なるらん」(拾遺集・五五一・詞書「かうぶり柳を見て」)。

【所載】後撰集・冬・四八七

七四九 をしなべて雪のふれゝばわがやどのまつをたづねてとふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】あたり一面に雪が降ったので、待っている私の家の松を尋ねてくる人もいない。

【語句】○をしなべて おしなべて。あたり一面に。○まつをたづねて 松に「待つ」を掛ける。所載欄の後撰集では「すぎを尋ねて」。杉ならば、「わがいはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(古今集・九八二)を踏まえた表現となる。なお、松は「すぎたてるやどをぞ人はたづねける松はかひなきものにざりける」(拾遺抄・三二五・題不知・よみ人知らず)や「わがやどのまつはしるしもなかりけりすぎむらならばたづねきなまし」(金葉集三奏本・四三八・赤染衛門)にあるように、杉に比べ甲斐のない木とされる。その逆転を狙った歌か。但し、「杉(杣)」と「松」は誤写の可能性もある。

【所載】後撰集・冬・四八九

七五〇 やまちかみめづらしげなくふるゆきのしろくやならむとしつもりなば

【異同】ふるゆきの―古郷の(大)

【現代語訳】山が近いので、珍しげもなく降る雪のように、(私の頭は)白くなることだろうか。年を経たならば。

【語句】○ふるゆきの 初句からここまでが「白く」を導く序。○としつもりなば 我が身が年経ることを、雪の縁で「積もる」とする。白髪を雪に喩える例は、「白頭如雪面猶紅」(菅家文草・路遇白頭翁)や「むばたまのわがくろかみに年くれてかがみのかげにふれるしらゆき」(拾遺集・一一五八・貫之、詞書に「師走の晦日がたに、年の老いぬることをなげきて」とある)などに見られる。

【所載】後撰集・冬・四九一／躬恒集IV・一〇三

【参考】新日本古典文学大系『後撰和歌集』脚注では「山近い所に住む人の立場に立って詠んだ歌であるが、屏

風歌の感じが強い」とする。

〔以上五首担当 杉本〕

七五一 ふるゆきはかつぞけぬらしあしひきのやまのたきつせこゑまさるなり

【異同】ナシ

【現代語訳】降る雪は降る一方で溶けているらしい。山の流れの音が（水かさを増して）音たかくなっているよ。

【語句】○かつ 「……しつ一方では」の意。「降る」一方「消える」。○あしひきの 「山」にかかる枕詞。

○たきつせ 滝つ瀬。水がわき上がる意の動詞「たぎつ」（四段活用）の連体形に「瀬」が伴った「たぎつ瀬」から生じた語。水が激しく流れる瀬。○こゑまさるなり 流水の音が大きくなることをいう。その例として「氷とくはるたちくらしみよしののよしのの滝のこゑまさるなり」（寛平御時中宮歌合・五）がある。所載欄の古今集には末句「おとまさるなり」とある。

【所載】古今集・冬・三一九

七五二 さゝのはにふりつむゆきのすゑを<sup>うれイ</sup>もみもとくたちゆくわが<sup>さかりはもイ</sup>こゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】笹の葉に次第に雪が降り積みその重みで茎の下が下がる、そのように元気がなくなつてゆく私の心よ。

【語句】○すゑ 葉の先。異文の「うれ」も先端の意。「小松がうれゆ淡雪流る」（万葉・二三一四）など。○もと 「末」に対し「もと」という。○くたちゆく 「くたつ」は清音。下降する。衰える。「わが盛りいたくくたち（久多知）ぬ雲に飛ぶ葉はむともまたをちめやも」（万葉集・八五一（旧八四七）。「日斜 ヒクタチ」（名義抄）。初句からの文脈では笹の葉に雪が降り積み茎のもとが「下降する」意。「くたちゆくわがこゝろ」とは衰えてゆく心の意。

【所載】古今集・雑歌上・八九一／奥儀抄・五五三／和歌色葉・二八二

【参考】初句から「くたちゆく」までは、笹の葉の上の雪についての文脈。「くたちゆく」は共通音声部分。共通音声部分については、平野由紀子「古今和歌集表現論―要としての共通音声―」（『平安和歌研究』所収）参照。

七五三 月よには花とぞ見つる竹のはにふりしく雪をたれかはらはむ  
るイ らイ

【異同】ナシ

【現代語訳】月夜には（白い）花と見た。竹の葉に降りつもる雪は（美しくそのままにしておきたい）誰がうち  
払おうか（払いはしない）。

【語句】○ふりしく 二つの意味がある。（1）しきりに降る。「白雪のふりしく時はみ吉野の山下風に花ぞ散り  
ける」（古今集・三六三）、（2）一面に降り敷く。「わが宿は雪ふりしきて道もなし踏み分けてとふ人しなれば  
（古今集・三三二）など。ここは（1）。

【所載】夫木抄・七二六五／寛平御時后宮歌合・一五一／家持集Ⅰ・二七四／家持集Ⅱ・二八〇

七五四 まきもくのひばらもいまだくもみねばこまつがすゑにあはゆきぞふる  
るイ

【異同】○くもみねは―くもらねと（大）

【現代語訳】巻向の檜原にもまだ雲がかからないのに、小松の枝先を淡雪が流れ降る。

【語句】○くもみねば 雲居ねば。「ゐ」は「ある」の未然形。雲のかかることを「雲ゐる」といった。「ね」は  
打消の助動詞「ず」の已然形。「ば」はこの場合、逆接。

【所載】新古今集・春上・二〇／万葉集・二三二八（旧二三二四）巻向之 檜原毛末 雲居者 子松之末由 沫  
雪流 マキモクノヒハラモイマダクモミネバコマツガスエニアウキゾフル まきむくのひはらもいまだくもみ  
ねばこまつがうれゆあわゆきながる／夫木抄・一三九三三／時代不同歌合・一三／人麿集Ⅲ・一九四

七五五 あはゆきはけさはなふりそしろたへの袖まきほさむ人もあらなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】淡雪は今朝は降らないでおくれ、（濡れた）袖を（枕にして、共寝し）乾かしてくれる人もいないの  
に。

【語句】○あはゆき 淡雪。消えやすい雪。平安期の表記とちがい、万葉集では「泡雪（あわゆき）」。



なふりそ 「な……そ」は禁止を表す。今朝は降るな。○まきほさむ 「まき」は枕にする意の動詞「まく」の連用形。「ほす」は乾かす。○あらなくに ないことなのに。ないのに。「なく」は打消の助動詞「ず」のク語法。この歌の場合、逆接。

【所載】万葉集・二三二五（旧二三二二）沫雪者 今日者莫零 白妙之 袖纏将干 人毛不有君 アワユキハケフハナフリシロタヘノソテマキホサムヒトモアラナクニ あわゆきはけふはなふりそしるたへのそでまきほさむひとあらなくに／人麿集Ⅰ・一五九／人麿集Ⅱ・一七四／人麿集Ⅲ・一九八

〔以上五首担当 平野〕

七五六 さゝのはにたれふりをゝひなけばともわすれんといへばましておもほゆ

或本

【異同】ナシ

【現代語訳】「上句の意味不明。なお、参考欄参照。」下句―忘れるであろうと言うので、いつそういしく思われる。

【語句】（所載欄に掲出した古今六帖歌、万葉集歌は、当該歌の原初形か類歌と思われる。これを参考にして語句を検討すると、以下のようになる。）○たれふりをゝひ 「はたれふり覆ひ」の「は」が欠落したものか。「はだれ」は雪や霜の薄くまだらに置いたものをいう。所載欄の万葉集西本願寺本訓では「はたれふり覆ふ」。○なけばとも 意味不明。「けなばかも」の文字順のいれかわり、及び「か」と「と」の違いか。二句までが、薄雪が消える意から、三句の「消なば」の「消（ケ）」を起こす序詞。「けなばかも」は、薄雪が消えるように自分の命が消えたら、即ち、死んだら。○わすれんといへば 自分が死んだときには忘れるでしょう（生きている限りは、決して忘れない）と（女が）いうので。所載欄の袖中抄では「こひんといはば」。○おもほゆ いとしく思われる。所載欄の袖中抄では「おもはん」。

【所載】古今六帖「わすれず」二八八一／万葉集・二三四一（旧二三三七）小竹葉尔 薄太礼零覆 消名羽鴨将忘云者 益所念 ササノハニハダレフリオホフケナバカモワスレムトイヘバマシテオモホユ ささのはにはだれふりおほひけなばかもわすれむといへばましておもほゆ／袖中抄・二五二、七九〇

【参考】所載欄の万葉集・二三四一番を現代語訳すれば、「笹の葉に、うつすらと雪がふり覆い、その雪が消えるように、私の命が消えたらば、あなたを忘れることもありましようなどと言うものだから、一層いとしく思われることだ。」となる。

なお、人麿集Ⅱ・一七八番にも「ささのはにだれふりおほひけながくもわすれずといはゞわれもたのまむ」という歌がある。

## 七五七 ひとめ見し人にこふらくあさぎりのふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

【異同】 あさぎりの―あまぎりの（御・桂） けぬへくおもほゆ―けぬへおもほゆ（大）

【現代語訳】 一目見た人に恋することは、（朝霧の立ち込めるように降ってくる雪の消えるように、）命も消えるほど切々とした思いだ。

【語句】 ○こふらく 「恋ふ」のク語法、恋ふこと。○あさぎりの 所載欄の万葉集では「あまぎらし」。「天霧らす」は空を一面に曇らせる意。異同欄の「あまぎりの」は万葉集「天霧之」からきたものか。所載欄の人麿集では「かきくらし」（辺りを一面に暗くする）意。○けぬべく 身も消えんばかりに激しく。三、四句は五句の「消（ケ）」をおこす序詞。所載欄の人麿集では五句「きえそかへれる」。

【所載】 万葉集・二三四四（旧二三四〇） 一眼見之 人尔戀良久 天霧之 零来雪之 可消所念 ヒトメミシヒトニコフラクアマギラシフリクルユキノケヌベクオモホユ ひとめみしひとにこふらくあまぎらしふりくるゆきのけぬべくおもほゆ／人麿集Ⅱ・五一六

## 七五八 わがせこがことうつくしみいもゆけばもひきもしらずゆきなふりそも

【異同】 ナシ

【現代語訳】 私の愛する夫の言葉につくしたやさしい心にひかれて、私が出て行ったら、裳を引きずって歩いた跡がはつきりつくでしょう。だから、雪よ降らないでくれ。「第四句は万葉集により「もひきしるけむ」として解した。」

【語句】 ○せこ 女性が兄または弟を言う、妻が夫を言う、恋人が恋する男を、また、男同士が親しんで呼ぶ語。

○こと ことば。○うつくしみ やさしくする。動詞「うつくしむ」の連用形。「うつくし」は、本来、親の子に対する、年長者の幼少者に対する愛情、また、夫婦間のいたわりを表す語。所載欄の万葉集新訓では「うるはしみ」。○いも 男が女を親しんで言う語。主として、妻、恋人に対して。また、女同士が親しんで言う語。ここでは、女自身をさすが、初句の「せこ」に対して「いも」を用いたか。また、所載欄の万葉集本文と同様の「い

で」が書写の誤りで「いも」となったか。○もひき 裳の裾を引きずること。ただし、平安時代の女子の正装の裳ではなく、上古の女子の腰から下にまとったものを指す。○しらず 「気にもかけず」の意か。意味がうまくつながらないので、所載欄の万葉集本文の「しるけむ」で解する。「しるけむ」は「著し」の未然形＋推量の助動詞「む」で、はつきりつくでしようの意。○なふりそも 「な」は副詞。「そ」は終助詞。「な―そ」は、「…してくれるな」の意。「も」は終助詞、感動を表す。所載欄の万葉集西本願寺本訓では「なふりこそ」、新訓では「なふりそね」。

【所載】万葉集・二三四七（旧二三四三） 吾背子之 言愛美 出去者 裳引将知 雪勿零 ワガセコガコトウツクシミイデユケバモビキモシラムユキナフリコソ わがせこがことうるはしみいでてゆかばもびきしるけむゆきなふりそね

七五九 むめのはなそれともみえずふるゆきのいはしろけむなまづかひやくは

【異同】 いはしろけむな―いはしろそむな（桂）

【現代語訳】 梅の花がそれとも見分かぬほどに降る雪、その降る雪が目立つようにはつきり目立つだろうな。あなたの許に使いをやったら。

【語句】 ○それともみえず これが花だとはつきり見分けがつかない。梅の枝に雪が積もって、花と雪の区別がつかないことを詠んだ例には、「むめのはなそれともみえず久方のあまぎる雪のなべてふれれば」（拾遺集・一二・人麿）、「わがせこに見せんとおもひしむめのはなそれともみえずゆきのふれれば」（金玉集・七・山辺赤人）などがある。○いはしろけむな 「は」は所載欄の万葉集本文と同様の「いちしろけむな」の「ち」が「者（は）」の行書体と見誤られたことによるか。「いちしろけむ」は、「著けむ」で、はつきりするだろうの意。三句までが、四句にかかる序詞。○まづかひ 間使ひ。男女の間を消息などを持って往来する使者。○やくは 「やらば」の誤写か。遣わしたらば。

【所載】万葉集・二三四八（旧二三四四） 梅花 其跡毛不所見 零雪之 市白兼名 間使遣者 一云 零雪尔間使遣者 其将知名 ウメノハナソレトモミエズフルユキノイチシロケムナマツカヒヤラバ 一云、フルユキニマツカヒヤラバソレシリナムナ うめのはなそれともみえずふるゆきのいちしろけむなまづかひやらば 一云、ふるゆきにまづかひやらばそれとしらむな

七六〇 あまをぶねとませのゝべにふるゆきのけながく思ひしきみをとする

【異同】ナシ

【現代語訳】とませの野辺に降る雪が消える、長い間思い続けた君のおいでになる音がするよ。

【語句】○あまをぶね 海人の乗る小舟。舟が泊まることを「泊（は）つ」というところから、「はつ」にかかる枕詞。○とませ 泊瀬（はつせ）の「泊」を「とま」と読んだ本文。地名「とませ」は、以下のように和歌に詠まれるが、場所を確定できない。泊瀬と同じと見られる。「かくらくのとませの山の山ぎはいさよふ雲はいもにかもあらん」（古今六帖・八六一）、「夕されば浦風寒し海人を舟とませの山に雪ぞ降るらし」（新統古今集・七〇五、実朝）、「吹き送る風をたよりの海人をぶねとませのやまに花の香ぞする」（新六帖・三四八）、「あまを舟とませの山もしろたへにひばらの雪の道見えぬまで」（夫木抄・一三九四〇）。所載欄の万葉集では「初瀬の山に」。八六一番歌参照。○けながく 「消（ケ）」と「日（ケ）」の掛詞。上三句は「けながく」を導く序。日数長く。○をと おと。馬、または車の音。人の訪れを知らせるもの。

【所載】万葉集・二三五一（旧二三四七）海小船 泊瀬乃山尔 落雪之 消長戀師 君之音曾為流 アマヲブネハツセノヤマニフルユキノケナガクコヒシキミガオトゾスル あまをぶねはつせのやまにふるゆきのけながくこひしきみがおとぞする／夫木抄・六四五

〔以上五首担当 斎藤・三浦〕

七六一 とし月のすぎゆきくれば草も木もおいこそすらししろく見ゆれば

【異同】すぎゆきくれば―過行くまは（大）

【現代語訳】年月が過ぎ去つてくると、草も木も年老いるらしい。（雪が降り積もって）白く見えるので。

【語句】○すぎゆきくれば 過ぎ去つてくると。他に用例はみられない。傍記異文「すぎゆきふれば」では、年月が過ぎゆくことに雪が降ることが掛けられ、草木が白く見える理由がより明確となる。「雪」の項に分類された歌でもあり、所載欄の新撰万葉集の本文「雪降往者（ゆきふりゆけば）」が本来の形であったと考えられるが、本文通りに解した。

【所載】新撰万葉集・四三八

あられ

七六二 かきくもりあられふりしけしらたまをしけるにはとも人の見るべく

【異同】ナシ

【現代語訳】空が曇り、霰が一面に降り頻って欲しい。白玉を敷いた庭であると人が見るように。

【語句】◎あられ 空中の水蒸気が氷結し白色の粒となつて降ってくるもの。初冬の景物。寒い夜の孤独感をつのらせるもの、玉のごとく美しいものとして詠まれる。○かきくもり 掻き回したように空が一面に曇り。所載欄の後撰集、新撰万葉集では他動詞「かきくらし」であるが、本文通りとした。○ふりしけ 降り頻け。降り頻って欲しい。命令形で霰に呼びかけた形。○しらたま 白玉。霰の見立て。「宿はあれてあられふれ」(マ)ば白玉をしけるがごとくもみゆるにはかな」(和泉式部集・六八)、「ねやのうへにあられもふれば時のほど心にもあらぬ玉をこそしけ」(相模集・二七〇)。

【所載】後撰集・冬・四六四／新撰万葉集・一六五／寛平御時后宮歌合・一一八／和歌初学抄・八〇／秋萩集・八

七六三 あられふりたまとはみれどひろいをきてころのごとくぬかばけぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】霰が降り、玉と思つて見るが、拾つておいて思うままに取り出してみたら消えてしまふに違いない。

【語句】◎あられふりたまとはみれど 霰を玉に見立てる。七六二番歌参照。○ひろいをきて 拾ひおきて。拾つておいて。○ころのごとく 意のままに。思う通りに。心と同じように。「ひく琴の音」ことに思ふ心あるを心のごとく聞きもなさなん」(貫之集・四三七)。○ぬかばけぬべし 取り出してみると、きつと消えてしまうだろう。「ぬかば」の「ぬく」は選んで取り出す。「玉」の縁語だが、ここでは貫き通す意ではない。

【所載】家持集Ⅰ・二七一／家持集Ⅱ・二七七

七六四 わが袖にあられたばしりまきかくしけたずてあらんいもがみむため

【異同】まきかくし—まきかへし(御・大)

【現代語訳】私の袖に霰がばらばらとどび跳ね、それを包み隠して消さないでおこう。あの娘が見るように。

【語句】○たばしり 「た」は接頭語。飛び散つて。飛び跳ねて、「走る」の連用形。所載欄の万葉集の現代訓である「あられたばしる」の方が解しやすが、本文通りに解した。○まきかくし 巻き隠し。袖などに包み隠す。○けたずてあらん 消さないでいよう。「消つ」は「消す」の古語。「てあり」は、動作・作用の存続の状態を表す。……いる。……ある。「ん」は意志。

【所載】万葉集・二三一六（旧二三一一）我袖尔 電手走 巻隠 妹為見 ワガソデニアラレタバシリ マキカクシケズカモアレヤイモガミムタメ わがそでにあられたばしるまきかくしけたずてあらむいもがみむため／人麿集Ⅲ・一九一／綺語抄・五六

七六五 あられふりいたまかせ吹きむきよにはたやくよひも我ひとりねむ

【異同】さむきよに―さむよに（大）

【現代語訳】霰が降り、板間から隙間風が吹いてきて、寒い夜にやはり今夜も私は一人で寝るのだろうか。

【語句】○いたまかせ吹 板間風吹き。「板間」は板と板とのすき間。多く粗末な家、荒れた家の描写に用いる。○はたや 「はた」は、二つ並んだ状態があるときに、もしや一方であるかなどと判断する場合に用いる。あるいは。ひよつとして。やはり。「や」は疑問。所載欄の万葉集では「旗野尔（はたのに）」。

【所載】万葉集・二三四二（旧二三三八）霰落 板敢風吹 寒夜也 旗野尔今夜 吾独寐牟 ミゾレ（アラレ）フリイタマカゼフキサムキヨヤハタノニコヨヒワガヒトリネム あられふりいたまかせふきさむきよやはたのにこよひわがひとりねむ／人麿集Ⅱ・一七九／和歌童蒙抄・九六

〔以上五首担当 中野〕

七六六 もののうへにあられちりしきいやましにあらはますともしのをながく

【異同】あれはますとも―あれはますとて（大）

【現代語訳】霜の上に霰が散りしいて、ますますはげしく、私はあなたのもとにやって来ますよ、将来もずっと。

【語句】○しものうへに 霜がおりたその上に。○あられちりしき 霰が降つて散り敷いて。「あられ」の歌で、「玉」が「散る」とは詠まれるが、霰が「散る」と詠む例は、中世以降にしか見えない。所載欄の文献すべて「あ

られたばしり」。○いやましに いっそう増さつて。○あれはますとも 「荒れは増すとも」とし、天候が荒れると解しても、家が荒れ増さるとしてもかなり無理がある。「しがらきのと山のあられふりすさびあれゆくころの雲の色かな」（拾遺愚草・二四一七）、「霰降るあれたる宿にながめつつみやまのけしき思ひこそやれ」（重之女・五八）。こゝは、所載欄の万葉集、綺語抄、和歌童蒙抄・九七の「我（あ）れは参（まゐ）こむ」（私はますます足繁く参上しよう）の方が歌として意が通る。○としのをながく 「年の緒」は、年月が長く続くのを緒にたとえていう。将来もずっと。この句が掛かつていく言葉がなく、所載欄の万葉集を参考に現代語には意識した。

【所載】万葉集・四三二二（旧四二九八）霜上尔 安良礼多波之里 伊夜麻之尔 安礼婆麻為許牟 年緒奈我久（古今未詳） シモノウヘニアラレタバシリイヤマシニアレハマキコムトシノヲナガク しものうへにあられたばしりいやましにあれはまゐこむとしのをながく／綺語抄・五七／和歌童蒙抄・八〇、九七／古来風体抄・二〇四

【参考】所載欄の万葉集の詞書・左注によると、天平勝宝六（七五四）年正月四日、少納言大伴家持宅の祝賀の宴に大伴氏の一族が集まったときに詠まれた一首で、作者は大伴千室とある。

### こほり

七六七 ほりてをきしいけはかゞみとこほれるをみることなくとしぞへにける

【異同】ナシ

【現代語訳】掘り作っておいた池は鏡のように凍っているけれども、鏡なら影が映って見えるものなのに、あの人の姿を見ることもなく年月がたつてしまった。

【語句】◎こほり 水が氷点下の寒さで固体化したもの。和名類聚抄（真福寺本）に「水寒凍結也」とある。名詞「氷」、動詞「こほる」で詠まれる。凍る冬の氷や融ける春の水など感覚的に季節を捉えたり、心情に絡んで比喩的にも詠まれる。○いけはかゞみとこほれるを 「と」（格助詞）は、状態を指示して下に続ける用法で、「……のように、……として」の意。○みることなくて 鏡なら映る影を見るのだが、姿を見ることなくて、の意。

【所載】新撰万葉集・一五七／寛平御時歌合・一二七

七六八 みづのおもにあやふきみだるはるさめやいけのこほりをけふはとくらん

かぜい

【異同】はるさめや—春風や（大）  
かせイ

【現代語訳】水面に紋様を吹き乱す春風は、池の水を今日とかがしていることであろう。

【語句】○あやふきみだるはるさめ 「あや」は、水面に描かれる模様。「ふきみだる」は他動詞。吹いて乱れさす。なお、吹き乱すのが「春雨」では歌意が通らず、また水をとかすのも春の風なので、ここは、傍書異文・大久保本・所載欄の歌集のように「春風」とありたいところ。一応「春風」として現代語訳した。○けふはとくらん 所載欄の後撰集は同じだが、友則集に「けさはとくらん」。

【所載】後撰集・春上・一一／友則集・一

【参考】作者名がないが、所載欄の歌集により紀友則の歌と知られる。なお、当該歌は、白氏文集卷二八「府西池」の「池有ニ波文一氷尽開、春風春水一時来」の翻案という。また、伊勢集の「水のおもにあやおりみだる春雨や山の緑をなべて染むらん」（伊勢集Ⅰ・一〇三）との類似が指摘されている。

七六九 ふるかはのうへはこほれる我なれやしたにながれてこひしかるらむ  
ゆイ

【異同】ナシ

【現代語訳】表面が凍っている布留川が私であるからか。それで氷の下には水が流れているように、私も心の中では泣かれるほどに恋しいのだろう。

【語句】○ふるかはの 「布留川」は、天理市布留の地を流れる川。傍書異文や所載欄の歌集「冬川の」の方が解しやすい。○我なれや こゝで切れる。六七二番歌参照。○したにながれて 「した」は、水面下と心中の意とを掛け、「ながれて」は、「流れて」と「泣かれて」とを掛ける。「したにのみながれわたるは冬かはのこほれるみづとわれとなりけり」（敦忠集・二九）とほぼ同内容の歌。○こひしかるらむ 所載欄の歌集に「こひわたるらむ」。

【所載】古今六帖「人しれぬ」二六七一／古今集・恋二・五九一

【参考】作者名はないが、所載欄の古今集には作者「むねをかのおほより（宗岳大頼）」とある。

七七〇 こほりこそいまはすらしもたきつせのたぎつをとさへをとほたえぬや  
たえにけりイ



【異同】いまはすらしも—今は涼しも(大)

【現代語訳】今は水が凍ったようだな。浅瀬をわき返る水音までもすつかり聞こえなくなってしまった。

【語句】○こほりこそいまはすらしも 助動詞「らし」は、確かな根拠に基づいて現在の状況を推量する。○たきつせのたぎつをとさへをとしたえぬや 「たきつせ」は、激しく流れる段差のある浅瀬。「たぎつ」は、水が激しくわきあがる、の意。「たきつせ」「たぎつ」と繰り返し、また、「音さへ」「音は」と繰り返す。聞こえていた激しい水音と今の静寂とを対照させる。「や」は詠嘆。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「氷こそ今はすらしもみよしの山のたきつせこゑもきこえず」(後撰集・冬・四七七)。なお、「氷とくはるたちくらしみよしののたきのこゑまさるなり」(寛平御時中宮歌合・五)が、当該歌と反対の状況を詠む。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

七七一 あまのがはふゆはそらまでこほればやしにたぎつをとだにもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】天の川は、冬は空まで凍るからだろうか、石のあいだに水のわき返り流れる音さえもしない。

【語句】○あまのがは 銀河。天上を流れる川と思われていた。○いしま 石と石とのあいだ。「石間ゆく水の白波たちかへりかくこそは見めあかずもあるかな」(古今集・六八二)○たぎつ ここでは、石間をゆく水が石にあたってわき返り流れるさま。

【所載】後撰集・冬・四八八／新撰万葉集・四〇〇／寛平御時后宮歌合・一二〇

七七二 かぜはやみ水のおもにかゝるますかゞみくもりわれなんものにやはあらぬ<sup>たらい</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】風が激しいので、水の面にかかっているあのますがみは、曇ったりわれたりするものでありはしないかね。

【語句】○かぜはやみ 風の勢いが激しいので。「み」は形容詞および形容詞型活用語の語幹に付く接尾語。原

因・理由を表わす。この初句は、文脈としては下句へつづく。○ますかゞみ 真澄鏡。澄みきった鏡の意、「ま  
そかがみ」ともいう。ここは凍結した水面の水を鏡と見たもの。○くもりわれなん 曇りかつ割れるであろう。  
○ものにやはあらぬ ものでありはしないか。ものなのだ、の意。「やは」は反語。

【所載】ナシ

七七三 ふゆのいけにすむにほどりのつれもなくこほりのしたをわれはかよはん  
にイ

【異同】ナシ

【現代語訳】冬の池に棲む鴉鳥が、なにごともないようすで氷の下をくぐるように、わたしはそしらぬふりをし  
て、人目につかぬようにあなたのとこに通いましょう。

【語句】○にほどり かいつぶり。湖沼に棲む水鳥で、水によく潜り魚をとる。初・二句は「つれもなく」にか  
かる序詞。○つれもなく なにごともないふうで。そしらぬふりをして。○こほりのしたを 「氷の下」に、表  
面に見えないところの意の「した」を掛ける。傍記「こほりのしたに」の方が、歌意はなだらかに通じる。

【所載】古今集・恋三・六六二／後撰集・冬・五〇二／躬恒集Ⅰ・二二九・二九七／躬恒集Ⅱ・一六七／躬恒集  
Ⅲ・三二一／躬恒集Ⅴ・一一一／和歌初学抄・七一

七七四 なきつめし冬のなみだはこほりにきとけんはる日は身もやながれん  
ベイ

【異同】ナシ

【現代語訳】泣き詰めた冬の涙は、すっかり凍ってしまいました。これがとける春の日になったら、（おびただ  
しい涙の量に）身も流れてしまうことでしょうか。

【語句】○なきつめし 泣き詰めし。限度いっぱいまで泣いた、の意。「詰め」は下二段活用他動詞、すきまな  
くいつぱいにする。こと。「わたつみと人を見るらむ逢ふこと」のなみだをふさになきつめれば」（大和物語・一四  
四段・二三一）。○身もやながれん 身も流れてしまうことだろうか。「流れん」に「泣かれん」を掛けた。

【所載】ナシ

七七五 なみだ川身なぐばかりのふちはあれどこほりとけねばかげはうかばず

【異同】 かけはうかはすーかけはうこかす（大）

【現代語訳】 この涙川には、身を投げることもできそうな深い淵はあるけれども、氷が張っていてとけないので、（身を投げてても）この身の姿は川の面には浮かばない。

【語句】 ○なみだ川 涙がおびただしくあふれることを誇張して川にたとえた語。恋歌によく用いられる。○ふち 水の流れがよどみ、水深が深くなっているところ。○かけはうかばず 姿は川の面には浮かばない。

【所載】 後撰集・冬・四九四／新撰万葉集・一八九／寛平御時后宮歌合・一四二

〔以上五首担当 山下〕

七七六 あさひさすかたやまかげのいたまにもてのうちさむきこほりとかなむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 朝日がさす片山陰の板屋根葺きの粗末な我が家にも、朝日の光で手のひらを凍えさせる氷を溶かしてほしいことです。

【語句】 ○かたやま ひとつだけぼつんと立っている山。または一方が山か斜面になっている地形の山の側。「ひさぎおふる片山陰にしのびつつふきくるものを秋の夕風」（新古今集・二七四）。○いたまにも 「いたま」は、板屋根の葺き板などの隙間や裂け目。雨や月光などが漏れる粗末な家をいうことが多い。「わがやどのしのぶぐさおふるいたまあらみ」（古今集・一〇〇二）。傍記異文と所載欄の貫之集は「いまだにも」であり、「今でさえも」の意となる。○てのうち 手のひら。貫之集は「てのうら」。○こほりとかなむ 氷をとかしてほしい。貫之集の詞書によれば除目に漏れ善処を願う意をこめた歌。

【所載】 貫之集Ⅰ・八三一／貫之集Ⅱ・三二

火

七七七 よとゝにもえゆくふじのやまよりもたえぬおもひはわれぞまされる

【異同】 ナシ

【現代語訳】 常に燃えている富士の山よりも、絶えない君への思いは私の方が勝っているよ。

【語句】◎火 用例としては富士の火、海人の焚く火、漁火、衛士の焚く火、蚊遣火、などいろいろあるが、思い（ひ）と掛詞にし、これらの火によそえて胸の熱い思いを詠むものが多い。○よとゝもに 常々。いつも。○ふじのやま 駿河国の歌枕。噴火、噴煙を詠むものと、雪を詠むものが多い。○おもひ 恋の熱い思「ひ」と「火」の掛詞。

【所載】詞花集・恋上・二〇二／新勅選集・恋二・七一〇／新撰万葉集・四七八／寛平御時后宮歌合・一八一

七七八 みわたせばあかしのうらにもゆるひのほにぞいでぬるをイいもこひつゝイしくて

【異同】ナシ

【現代語訳】見渡すと明石の浦にあかあかと燃える火が見える。あのように私の思いは、はつきりと人目についてしまった。あの娘が恋しくて。

【語句】○あかしのうら 播磨国の歌枕。明石大門を隔てて淡路島に対している。白砂青松の美景で名高い。○もゆるひ 藻塩焼く火。漁火。○ほにぞいでぬる 目につくようになつてしまった。「ほ」は稲穂、山の峰などのように突き出たもの。三句まで「ほ」にかかる序詞。○いも 妻。恋人。

【所載】万葉集・三二九（旧三二六）見渡者 明石之浦尔 焼火乃 保尔曾出流 妹尔恋久 ミワタセバアカシノウラニタケルヒノホニゾイデヌルイモニコフラク みわたせばあかしのうらにともすひのほにぞいでぬるいもにこふらく／夫木和歌抄・二一六一九

七七九 わがやどのしもよのかぜをさむみこそあまのたくひをよそにながむれ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の霜夜の風はあまりに寒いので、遠くの海人の焚く火を見ても心温まるどころか、関係のないものとして眺めることだ。

【語句】○かぜをさむみこそ 風がとてもさむいので。○あまのたくひ 漁夫が夜、漁をする時船上で焚く火。○よそに 無縁なものとして。「海人の焚く火」は「燃え」「煙」とともに詠まれることが多いが、「よそ」の例として次のものがある。「すずきつるあまのたく火のよそにだにみぬ人ゆゑにこふるこのごろ」（古今和歌六帖「すずき」一五一九）。

【所載】ナシ

七八〇 ひとをおもふころのをきは身をぞやくけぶりとみえぬものから  
こふるイ

【異同】ナシ

【現代語訳】人を恋い慕う熱い思いの残り火は、今もこの身を焼いている。煙が立つようには見えないものの。  
【語句】○をき 熾き。灰のなかでおこっている炭火。薪などが燃え終わって焰がでなくなり炭火のようになったもの。「心の熾き」は表面は平静を装っていても、心の中は赤く燃えている思いをいう。○けぶりとみえぬものから 人目につくとは見えないけれども。

【所載】新撰万葉集・二二三／寛平御時后宮歌合・一六九／袋草子・五九八／八雲御抄・五五

〔以上五首担当 林〕

七八一 きみがもるゑじのたくひのひるはたへよるはもえつゝ物をこそおもへ  
みかきもりイ

【異同】きみかもる―みかき守（大） 　　ひるはたへ―ひるはきえ（大）  
みかきもりイ

【現代語訳】あなたが守る、衛士の焚く火のように、昼は絶えいるばかりになり、夜は恋の思いに燃え続けて、物思いをしている私です。

【語句】○きみがもる 君が守る。所載欄の文献のほとんどに「みかきもり」、もしくは「みかきもる」とあり、和歌童蒙抄には「きみまもる」と見える。○ゑじ 衛士。諸国から選拔され衛士府（弘仁二（八一）年「衛門府」と改称）に配属された兵士。夜は火を焚いて宮門などの警護に当たった。「みかきもる衛士のたく火にあらねどもわれもころのうちにこそ思へ」（和漢朗詠集・五二六）。

【所載】詞花集・恋上・二二五／後葉集・二九四／俊成三十六人歌合・九八／時代不同歌合・二二三／百人秀歌・四八／百人一首・四九／和歌童蒙抄・五一五／和歌色葉・二九

【参考】作者名はないが、所載欄の文献では作者を大中臣能宣とする。

七八二 なつくればやどにふすぶるかやりびのいつまでわが身したもえにせん  
をイ

【異同】ナシ

【現代語訳】夏が来ると家でくすぶる蚊遣火のように、いつまで私の身は、ひそかに恋の思いを燃やし続けるのだろうか。

【語句】○かやりび 蚊遣火。蚊を追い払うためにいぶす火。○したもえ 下燃え。この歌では、蚊遣火が表面に燃え立たないでくすぶることと、心の中で人知れず恋い焦がれることの両意を掛けて、三句目までは「下燃え」を導く。「かやり火のしたに燃えつつあやめ草あやめも知らぬ恋のかなしき」（好忠集・五三九）。

【所載】古今集・恋一・五〇〇／新撰和歌・二五六／俊頼髓脳・三一五

【参考】万葉集二六五七（旧二六四九）番歌、古今六帖・七八三番歌と類想。

七八三 あしひきの山田もるを<sup>田に</sup>のをくかひ<sup>のイ</sup>はしたこがれ<sup>つゝ</sup>のみわれ<sup>が</sup>こひ<sup>ふらくは</sup>をらむ

【異同】したこがれ<sup>つゝ</sup>のみ—下こかれ<sup>つゝ</sup>ゝ（大）

【現代語訳】山の田の見張りをする男が置く蚊遣火はくすぶるばかり、私はそれと同じように、ひそかに恋い焦がれたままでいるのだろう。

【語句】○あしひきの 「山田」に掛かる枕詞。○山田もるを 山田の番をする農夫。○かひ 蚊火。蚊遣火のこと。また鹿火（鹿や猪を追い払うために焚く火）とする説もある。中世における万葉語「かひ」「かひや」の撰取態度については、平田英夫「二条派歌人の万葉語撰取について―「かひや」を中心に―」（『和歌文学研究』一九九六年十二月）に詳しい。○したこがれ 下焦がれ。「か火」の炎が表に見えないで底の方でくすぶることと、「われ」が心の中でひそかに恋い焦がれることを重ね合わせて言ったことば。「かやり火のさよふけがたの下こがれ苦しやわが身ひと知れずのみ」（好忠集・一六〇）。

【所載】新古今集・恋一・九九二／万葉集・二六五七（旧二六四九）足目木之 山田守翁 置蚊火之 下粉枯耳 余恋居久 アシヒキノヤマダモルヲノオクカヒノシタコガレノミワガコヒヲラク あしひきのやまだもるをちがおくかひのしたこがれのみあがこひをらく／人麿集Ⅰ・一五／人麿集Ⅱ・二九七／人麿集Ⅳ・一五二／古来風体抄・一三二／秀歌大体・一〇一／俊頼髓脳・三一六

【参考】人麿集にあり、新古今集も作者を「人麿」とするが、万葉集に作者名はない。

七八四 めたつく<sup>らにイ</sup>とあまのともせるいざりびのほにかいでなむわがした思を

【異同】ナシ

【現代語訳】漁に努めようと海人がもしている漁り火のように、はつきり表に現れてしまうのだろうか、私のひそかな思いであるものを。

【語句】○あたつく 「苦労する」「努める」意の「いたつく」として解釈した。所載の万葉集では「しびつく」となっている。傍記異文によれば「いたづらに」となるが、『校本万葉集』（佐々木信綱編・岩波書店）の「諸説」に、「代精」「イタズラニ」「ト訓ズルヲ否トス」と見える。○あま 海人。漁夫。漁業や海辺での塩焼きで生活している人。○ほにかいでなむ 秀にか出でなむ。「秀に出づ」は、表に現れ出る、人目につく意。「秀」に「火」を掛け、三句目までは「ほ」を導く序。「見渡せば明石の浦にともす火のほにそ出でぬる妹に恋ふらく」（万葉集・三二九（旧三二六））。○した思 表面に出さないで心に秘めた思い。「湊葦にまじれる草のしり草の人皆知りぬ我が下思ひは」（万葉集・二四七二（旧二四六八））。

【所載】万葉集・四二四二（旧四二二八） 鮪衝等 海人之燭有 伊射里火之 保尔可将出 吾之下念乎 シビツク（カニサス）トアマノトモセルイザリヒノホニカイデナムワガシタオモヒヲ しびつくとあまのともせるいざりひのほにかいださむわがしたもひを

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集には、大伴家持が「見漁夫火光歌一首（漁夫火光を見るの歌一首）」として見える。

七八五 もしほやくあまくらめやとまつほどにあなけふすまのうらにたくひや

【異同】ナシ

【現代語訳】藻塩を焼く海人が来るだろうかと思つて待つ間に、ああ、今日、この須磨の浦で焚いている塩焼きの火よ。

【語句】○もしほやく 「もしほ（藻塩）」は、海藻から採る塩。海藻に海水をかけて焼き、それを水に溶かし、その上澄みを釜で煮詰めた。「もしほ焼くけぶりになれし須磨のあまは秋たつ霧もわかずやありけむ」（中務集・二七）。○あま 海人。七八四番歌参照。○くらめや 語義がとりにくい。動詞「来（く）」に推量の助動詞の已然形「らめ」と反語「や」が付いたものか。来るだろうか、いや来ないかもしれない、というような気持ちか。○すま 須磨。摂津国の歌枕。現在の兵庫県神戸市須磨区の一部。須磨の浦の海人や塩焼きがよく歌に詠まれた。

「須磨のあまの塩焼く煙風をいたみおもはぬ方にたなびきにけり」(古今集・七〇八)、「須磨のうらの塩焼くけぶり風をいたみたちはのぼらで山にたなびく」(古今六帖・七九七)。

【所載】ナシ

【参考】契沖は、「是はまくらと、ふすまとをかくし題によめり。」『和歌拾遺六帖』としている。それを証明できる資料的根拠はないが、あるいは、そうかもしれない。

〔以上五首担当 長戸〕

七八六 なにはめのこやによふけてあまのたくしのびにだにもあふよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】難波女の小屋で夜更けまで海人のひっそりと焚いている火のように、せめて人目につかずにでも逢いたいのだなあ。

【語句】○なにはめ 難波の海女。藻を焚くことから「火」「煙」などの語を伴うことが多い。「なにはめの衣ほす」とかりてたく蘆火の煙たため目ぞなき」(貫之集・一五九)。所載欄の新勅撰集では傍記異文と同じく「なにはえの」とする。○あまのたく 初句からここまでが「しのび」の「ひ(火)」を導く序詞。○しのび 「忍び」に「火」を掛ける。「なにはがたすくもたく火のうちのびしたもえにてやよをばつくさん」(古今六帖「人知れぬ」二六六八)。○あふよしもがな 逢いたいのものだ。結句に用いられる例として既出の古今六帖・五二二のほか「敷島の大和にはあらぬから衣ころもへずしてあふよしもがな」(古今集・六九七)、「沼水のなみには立てで底深み草がくれつつあふよしもがな」(古今六帖「水」一四六一)などがある。

【所載】新勅撰集・恋一・六三三

七八七 をり／＼にうちてたくひのけぶりあらばこころざすかをしのべとぞおもふ

【異同】○うちてたくひの―うちて焼火の(大)

【現代語訳】旅の先々で火打ちを打って焚く煙の出る折があったら、あなたのことを思って贈るこの薫物の香りで私のことをなつかしんでほしいものだと思います。

【語句】○たくひの 火打ち石をたく。火打ちは旅の必需品。○こころざすか 「こころざす」は、心をこめ



て物を贈るの意。「か」は薰物の「香」。旅の縁で「さすが（鑑の金具）」を響かせる。「武蔵鑑さすがにかけてたのむには問はぬもつらし問ふもうるさし」（伊勢物語・一三段）。〇しのべとぞ思ふ「命令形十とぞ思ふ」は貫之の好みであった。「君さらば山にかへりて冬」ことに雪ふみわけておりよとぞ思ふ（貫之集・四一〇）、「あふ事を月日にそへて待つ時はけふ行末になりねとぞ思ふ」（貫之集・五七九）、「ゆくけふもかへらん時も玉鉾のひきものかみをいのれとぞ思ふ」（貫之集・七三二）など。

【所載】後撰集・離別・一三〇四／貫之集Ⅰ・七一九／貫之集Ⅱ・五九

【参考】所載欄の後撰集詞書には「陸奥へまかりける人に、火うちつかはすとて、書きつけ侍りける」とあり、作者を貫之とする。貫之集では依頼の贈り主を藤原師氏（忠平男）とする。

七八八 人こふるなみだははるぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のことを恋しく思つての涙は春になるとぬるむものですね。絶えることのない思いの「火」が沸かしたに違いないことです。

【語句】〇ぬるみける 春になると涙もあたたかくなるといふ趣向。原因は「おもひ」の「火」にある。〇わかす 涙を沸かす発想としては「おもひせくむねのほむらはつれなくてなみだをわかす物にざりける」（蜻蛉日記・一六〇）が知られる。

【所載】後撰集・恋一・五四六／伊勢集Ⅰ・二七九／伊勢集Ⅱ・三〇三／伊勢集Ⅲ・一四五

【参考】所載欄の後撰集では藤原時平の「心ざしありながら、え逢はず侍りける女のもとにつかはしける」という詞書を持つ「頃をへて逢ひ見ぬときは白玉の涙も春は色まさりけり」に対する伊勢の返歌（伊勢集Ⅰも同様）とする。この場合、上句は、相手の涙がぬるくなつた、ととれる。しかし伊勢集Ⅱ、Ⅲではこの時平の歌とは無関係の位置にある。ここでは単独詠として解しておく。

けぶり

七八九 いせのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり

【異同】○いせのあまの―すまのあまの（大）

【現代語訳】伊勢の海人の塩を焼く煙が、風が強いので思ってもみない方向になびくように、あの人の気持ちも思いもかけぬ方向になびいてしまったことだ。

【語句】◎けぶり 物を燃やしたときに生じる粒子。和歌では「なびく」「立つ」といった語とともに詠まれることが多く、寄せる思いの喩えの代表的な一。題としては人麿集Ⅲ・六八〇に見える。また伊勢集・七三には「あまのいへよりけぶりとつ」という絵柄を詠んだ屏風歌「そでぬれてあまのたくひはもえねばや雲とけぶりのたちのぼらん」がある。○いせのあまの 所載欄に示した古今六帖の重出歌はこれと同じだが、古今集や伊勢物語などは「須磨の海人の」とする。○風をいたみ 風が強いので。「いたみ」は形容詞「いたし」の語幹に、原因や理由を表す接尾語「み」の付いたもの。類想のものとしては「しかの海人のしほ焼く煙風をいたみ立ちほのぼらで山にたなびく」（万葉集・二二五〇（旧二二四六））がある。七九七番歌参照。○おもはぬかた 思ってもみない方向。自分のもとから離れて他の人のもとへなびくことをいう。

【所載】古今六帖「しほ」一七八三／古今集・恋四・七〇八／八雲御抄・六／代集・一一／伊勢物語・一二二段・一九三

七九〇 いつとてかわがこひざらむちはやぶるあさまのやまはけぶりとつとも

【異同】ナシ

【現代語訳】いつといって、私が恋しく思わない時があるうか。たとえ浅間の山が煙を絶つことがあっても。

【語句】○ちはやぶる ここでは、神の縁で「あさま」に掛かる枕詞。所載欄の貫之集や拾遺集もこれに同じ。

一方で、重出の一六八四番歌では「信濃なる浅間の沼は」とあり、貫之集の中にも「信濃なる浅間の山は」と伝える本文（御所本）もある。○あさまのやま 浅間山。信濃国と上野国の境。和歌では信濃にあるものとして詠まれる。「しなのなるあさまの山ももゆなればふじのけぶりのかひやなからん」（後撰集・一三〇八）。○たつ「絶つ」と解す。「わびぬればけぶりをだにも絶たじとて柴折り焚ける冬の山里」（和泉式部集・七三）。所載欄の文献では「絶ゆ」とするものが多い。

【所載】古今六帖「ぬま」一六八四／拾遺集・恋一・六五六／続古今集・恋二・一〇七六／貫之集Ⅰ・六五六

【参考】所載欄の拾遺集では作者を「よみ人知らず」、続古今集では「紀貫之」とする。

〔以上五首担当 青木〕

七九一 つちにたくけぶりぞたちておほぞらのひかりをかくすくもとなるめる

【異同】くもとなるめる―雲と成ける（大）

【現代語訳】地上に焚く煙が、立ち昇って大空の光を隠す雲となるものようですね。

【語句】○つち 「天（あめ）」「空」に対して、大地、地上の意。○けぶりぞ 文法上は「たちて」にかかるのではなく、「くもとなるめる」にかかる。係り結び。

【所載】ナシ

七九二 ふじのねのならぬおもひにもえばもへかみだにけたぬむなしけぶりを

【異同】かみだにけたぬ―かたみにけたぬ（大）

【現代語訳】富士の嶺が、くすぶるばかりで燃え上がらない火、成就しない思いの火に燃えるなら燃えてくれない。神様さえ消すことのない、むなし煙ですもの。どうしようもありません。

【語句】○ならぬおもひ 「おもひ」に「火」を掛ける。富士の煙のようにくすぶるばかりで燃え上がらない火と、成就しない恋の思いの両意。○もえばもへ 燃えるなら燃えてくれ。「ば」は順接仮定条件。「もへ」の仮名遣いは本来「もえ」で、「燃えよ」の意。○かみだにけたぬ 神でさえ消すことのない。「けたぬ」は動詞「消（け）つ」の未然形に打消の助動詞「ず」の連体形を伴った形。○むなしけぶりを 「むなし」は形容詞シク活用の語幹で、「むなしけぶりを」の意。「ながながし夜」「なまなまし身」などと同じ用法。

【所載】古今集・雑体・一〇二九／平中物語・第一段・五九

【参考】古今集では作者を「紀乳母」とする。また平中物語では、

また、この男、人ともものいふに、返りごとはするものから、逢はでほど経ければ、男、  
我のみや燃えてかへらむよとともに思ひもならぬ富士の嶺のごと  
女、返し、

富士の嶺のならぬおもひも燃えば燃え神だに消たぬむなしけぶりを  
また、男、返し、

神よりも君はけたななたれによりなまなまし身の燃ゆる思ひぞ

また、女、返し、

かれぬ身を燃ゆと聞くとはいかたがせむ消ちこそ知らぬみづならぬ身は

とあり、「思ひもならぬ富士の嶺のごと」と詠んでよこした男への返歌で、「燃えるならいくらでも燃えていてください」と男に対する揶揄の形になっている。

なお、古今集・仮名序には「今は富士の煙も立たずなり」とあって、休火山のように記されているが、同じ古今集の恋一（五三四）には「人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそわが身なりけれ」とあり、更級日記にも「山のいただきの少し平らぎたるより煙はたちのぼる。夕ぐれは火の燃え立つも見ゆ」と見える。当該歌も活火山の富士である。

七九三 かれぬ身をもゆとのもえわたるともイきくともいかにせむカイけちこそしらねみづならぬ身は

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが生身の体を焦がしていると聞いても、私はどうしようもありません。消し方を知らないのですもの、水でない身は。「見つ」という関係でもありませんし。

【語句】○かれぬ身 枯れない身。生身。○けちこそしらね 消し方を知らない。「けち」は動詞「消（け）つ」の名詞形。○みづならぬ身は 「水」に「見つ」（逢う、契りを結ぶ意）を掛ける。

【所載】後撰集・恋二・六四八／平中物語・第一段

【参考】平中物語・第一段に関しては七九二番歌参考欄参照。男が「なまなまし身の燃ゆる思ひぞ」と言っているの、「かれぬ身を」と返していることがわかる。もつとも後撰集では「我のみや」の歌と贈答形式になっており、その「富士の嶺のごと」を受け、「かれぬ身を」ではなく、「富士の嶺の燃えわたるともいかがせむ」となっている。作者は七九二番歌が古今集で「紀乳母」とあるように、当該歌も後撰集では「紀乳母」とする。なおこの歌が「けぶり」の項に入っている理由はよくわからない。「燃ゆ」との関係か。

七九四 すみのえのまつのけぶりはよとゝもになみのなかにぞかよふべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】住の江の松にかかっている煙のようなものは、いつまでも絶えることなく、それが波に通いあって、

波も絶えることなく打ち寄せているようだ。

【語句】○すみのえ 摂津の国の歌枕。今の大阪市住吉区の一帯。「松」「波」などとともに詠まれることが多い。○まつのかぶり 松にかかっている霞や靄など。あるいは霞んでるように見える松の遠景。松の長寿から、絶えないもの、常なるものとして詠まれる。「よそなりし同じときはの心にて絶えずや今も松のかぶりは」(和泉式部続集・四六五)、「君が代に立てしそむれば山下の松のかぶりはいつか絶ゆべき」(続詞花集・三五四)。○よとゝもに 永遠に変わることなく。常に。ずうと。○なみのなかにぞかよふべらなる 松の千歳が波に通い、波も永遠に打ち寄せているようだ、の意。「べらなる」は、推定された状態を表す助動詞「べらなり」の連体形。……のようすだ。……らしい。

【所載】貫之集Ⅰ・六八四

【参考】所載欄の貫之集によれば、「延喜十二年十二月、春立つあしたに、定方の左衛門督の尚侍に賀たてまつれる時のうた」五首のうちの一首。尚侍満子(定方妹)の四十の賀の折に詠まれたもの。

七九五 はてはみのふじの山ともなりぬるかもゆるなげきのけぶりたへねば

【異同】ナシ

【現代語訳】ついにこの身は富士の山ともなってしまうのか。胸のうちに燃えさかる、恋の嘆きの煙は絶えることがないので。

【語句】○はてはみの 「はて」は「果つ」の名詞形で、最後、結末、行きつく先。「みの」は「身の」。○もゆるなげきの 燃えるような恋の嘆きの。「嘆き」に薪の意の「投げ木」を掛け、「もゆる」「投げ木」は「けぶり」の縁語。○けぶりたへねば 「たへねば」は「たえねば」。煙が絶えないので。

【所載】続後撰集・恋五・九四一／伊勢集Ⅰ・二〇七／伊勢集Ⅱ・二二一／伊勢集Ⅲ・二二〇

【参考】富士と煙については七九二番歌参照。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

七九六 袖ぬれてあまのたくひはもえねばやくもとけぶりのたちのぼるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】（海の潮に）ぬれた袖で海人が焚く火は、（しめって）燃えないから、雲のように煙が立ち昇るのでしようか。

【語句】○袖ぬれて 海人は海で働くので潮のために袖が常に濡れていると考えられていた。「しほたるる袖のひるまはありやともあはでのうらのあまにとはばや」（千載集・七五五）。○あま 海で漁業や製塩に従事する人。○もえねばや 燃えないからであろうか。「もえ（自下二・未然形）＋ね（打消の助動詞「ず」の已然形）＋ば」で条件を示し、「や」でそれに対する疑問を表す。伊勢集Ⅱでは「もえねども」。○くもとけぶりの 雲のように煙が。「と」は比喻を表す。

【所載】伊勢集Ⅰ・七三／伊勢集Ⅱ・七五／伊勢集Ⅲ・七二

七九七 すまのあまのしほやくけぶりかぜをいたみたちはのぼらでやまにたなびく

【異同】ナシ

【現代語訳】須磨の浦の塩焼きの煙は、風が強いのでまっすぐに立ち上らず、山にかかってたなびいています。

【語句】○すまのうら 七八五番参照。神戸市須磨区の海岸。傍書の「しかのあま」は、博多湾入り口の志賀島の海人。所載欄の万葉集は初句「しかのあまの」。○かぜをいたみ 風が強いので。「いたし」は甚だしい、激しいの意。

【所載】万葉集・一二五〇（旧一二四六）之加乃白水郎之 焼塩煙 風乎疾 立者不上 山尔軽引 シカノアマノシホヤクケブリカゼライタミタチハノボラデヤマニタナビク しかのあまのしほやくけぶりかぜをいたみたちはのぼらずやまにたなびく

【参考】古今集仮名序「たとへうた」割注、同集・恋四・七〇八、伊勢物語一二二段に「すまのあまのしほやくけぶり風をいたみおもはぬかたにたなびきにけり」がある。

七九八 かぜのうへにありかさだめぬちりのみはゆくゑもしらずなりぬべら也

【異同】ナシ

【現代語訳】風に乗ってありかを定めない塵のように軽い我が身は、どこへ行くのか行方しれずになってしまい

そうですよ。

【語句】◎ちり ほこり。ごみ。無価値なもの、取るに足らないものの比喩に用いられることが多い。また、夜離（よが）れのために寢床に積もるものとして歌う。○かぜのうへにありかさだめぬ 風に吹かれてあちこちに舞う塵が、軽々としているのを言った語。○ちりのみ 塵のように小さな軽い身。古今集の諸注釈は上句を「風前の塵」あるいは「風塵」をふまえた表現と指摘している。

【所載】古今集・雑下・九八九／新撰和歌集・三五五

七九九 はきたむるちりのかずにもおもはぬをうづもることのあやしとぞみる  
（とイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】掃き集めた塵のように取るに足らない身とも私は思わないのに、世に知られず埋もれているのは不本意なことです。

【語句】○はきたむる 「はきたむ」はごみなどを掃き寄せたまま集めておくこと。○かず 数が多いこと。たくさん。また、数え上げる価値のあること。○うづもる ラ行四段活用 of 動詞「うづもる」の連体形。物におおわれて見えなくなる。うずまる。「世に知られずにいる」の意。四段活用は例が少なく、下二段活用が普通。○あやし 理解できない。不思議である。

【所載】ナシ

八〇〇 つもりては山となるてふものなれどうくもあるかなちりひちの身よ  
（はイ）

【異同】ちりひちの身よ—ちりひちの身は（大）  
（はイ）

【現代語訳】塵泥は積もると（高い）山になるというものだけれど、つらいことですよ。塵泥のようにとるに足らない身の私は（低いままで）。

【語句】○つもりては山となるてふものなれど 積もれば高大な山になるというものだけれど。塵をいう。「てふ」は「といふ」の約。「しら雲の八重たつみねのちりひちのつもりてなれる山にしあらずや」（風雅和歌集・一七〇二）。○ちりひち 細かい土と泥。多く、小さなものや価値のないもののたとえに用いる。「ちりひちのかずにもあらぬ我ゆゑに思ひわづらんいもがかなしさ」（万葉集・三七四九（旧三七二七）、拾遺集・八七二）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 三浦〕

八〇一 わがたまはとこのちりともまどふらむよひく／＼あらくはらはざらなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の魂は寢床の塵とでもいうように、あなたの所に戸惑っていることでしょう。だから夜毎邪陰に振り払わないでほしいのです。

【語句】○たま 魂。人間の精霊。体内から抜け出して行動する遊離魂。「もの思へばさはの蛍をわが身よりあくがれにけるたまかとぞみる」(後拾遺集・一一六二)。○とこのちり 夜離れのために寢床に積もる塵。「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこ夏の花」(古今集・一六七)。○よひく／＼ 夜毎に。○あらく 手荒く。邪陰に。

【所載】ナシ

八〇二 しるといへばまくらだにせでねしものをちりならぬなのそらにたつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】秘め事を知ってしまうというので、枕さえしないで寝たのに、塵でもない浮名がなぜいかげんに高くてたっているのだろうか。

【語句】○しるといへば 枕が恋の秘め事を知ってしまうというので。「わがこひを人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ」(古今集・五〇四)。○ねしものを (枕さえしないで) 寝たのに。「ものを」は逆接であとへ続く助詞。○ちりならぬな 塵でもない恋の噂。評判。○そらにたつらん 「空に塵が立つ」意と「そらごと」(いいかげんな噂) が「立つ」意をかける。「らん」は噂が立った原因や理由を推量する意を表す助動詞。

【所載】古今集・恋三・六七六／伊勢集Ⅰ・一五四／伊勢集Ⅱ・一五三／伊勢集Ⅲ・一五五

なるかみ

八〇三 おほきみは神にしませばあまぐものみかづきがうへにいほりすらしも

いかづち山にイ



【異同】 <sup>いかつち山にイ</sup>みかつきかうへに―みかつき山に(大)

【現代語訳】わが大君は神でいらつしやるので、天上昇にいる雷の上に仮の宮を造って、住んでおられるらしいな。

【語句】◎なるかみ 雷。雷の恐ろしき、すさまじさを、神として崇めたり、人間界の権威あるものに喩えたりして詠んでいる。○おほきみ 天皇の敬称。○神にしませば 神でいらつしやるので。「し」は強めの助詞。「ませ」は「あり」「をり」の尊敬語「ます」の已然形。○みかづき 題は「なるかみ」なので「いかづち」(雷)が正しく、「みかづき」は誤写であろう。○いほりすらしも 仮の住まいを造って、住んでいるらしいよ。「らし」は客観的な事実の推定。「も」は詠嘆。

【所載】万葉集・二三五(旧二三三) 皇者 神二四座者 天雲之 雷之上 廬為流鴨 スメロキハカミニシマセバアマクモノイカヅチノウヘニイホリスルカモ おほきみはかみにしませばあまくものいかづちのうへにいほりせるかも／夫木抄・一六四八六

八〇四 あまくもを<sup>そらにイ</sup>ほろに<sup>ない</sup>ふみあらし<sup>な</sup>なるかみも<sup>か</sup>けふに<sup>こけむかもイ</sup>まさりてこしらへむやは

【異同】 けふにまさりて―けふまさりてか(大)

【現代語訳】天雲をばらばらに踏み散らして鳴る雷も、今日の天皇以上に恐れ多いことがありますようか。

【語句】○ほろにふみあらし ばらばらに踏み散らし。○こしらへ 「こしらふ」は言葉を尽くして人の気をさそう、機嫌をとるの意。所載欄の万葉集「かしこけめやも」によって訳した。

【所載】万葉集・四二五九(旧四二三三) 天雲乎 富呂尔布美安太之 鳴神毛 今日尔益而 可之古家米也母アマグモヲホロニフミアダシナルカミモケフニマサリテカシコケメヤモ あまくもをほろにふみあだしなるかみもけふにまさりてかしこけめやも

【参考】所載欄の万葉集によれば縣犬養命婦(光明皇后の母)が天皇に奉った歌。

八〇五 あまのはらふみとゞろかし<sup>な</sup>なるかみもおもふなかをばさくる物かは

【異同】 ナシ

【現代語訳】大空を踏みとどろかして鳴る雷でも、恋人の仲を引き離せようか、いや引き離せはしない。

【語句】○あまのはら 天上界。大空。○ふみとどろかし 雷鳴を擬人的に表現したもの。○さくる物かは 引き離せようか、いやそうではない。「かは」は反語を表す。雷は落ちて木を割くことがあり、二人の仲を「さく」に、その「割く」をかける。

【所載】古今集・恋四・七〇一

〔以上五首担当 橋本・林〕

八〇六 ちはやぶる神にもあらぬわが中のくもぬはるかになりまさるかな もゆくイ

【異同】ナシ

【現代語訳】雷でもない私たちの仲は、雲がかかっているあの空ではるかに鳴るように遠くにますますなっていくことだなあ。

【語句】○ちはやぶる 神にかかる枕詞。神は「雷（神鳴り）」の意。○わが中 私たちの間柄。「神かけて君がちかひしわが仲のあふひはよそにならんとや見し」（兼澄集・一三六）などに見られる。○なりまさるかな 「なり」は「成り」と「鳴り」を懸ける。「鳴り」は雷の縁語。ますますなつてゆくなあ、の意。

【所載】後撰集・恋六・一〇二五

【参考】当該歌は、後撰集では贈答歌になっている。返しは「千早振神にも何にたとふらんおのれくもぬに人をなしつつ」（一〇二六）である。

八〇七 あまのはらなるかみいかにおもふらんけふは身をしるあめとこそふれ

【異同】ナシ

【現代語訳】雷はどう思っているだろう。今日は身を知るものとして雨がしきりに降っていることだ。この雨の中、あの人はい来ますまい。

【語句】○あまのはらなるかみ 「なるかみ」は雷のこと。当該歌は八〇五番歌「あまのはらふみとどろかしなるかみも」を踏まえる。どれほど激しい雷でも割けない二人の仲を歌った八〇五番歌に対し、それほど深く思われていない自分を嘆く。○身をしる雨 自分の身の程を知る雨。相手が雨をおしても来るか否かで思いの深淺

がわかる。「かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」(古今集・七〇五)。

【所載】ナシ

八〇八 ながめしてふればなるべしあまつそらかみのこゝろのそらになりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】長雨が降り、私ももの思いして過ごしているからであろう。雷も空で鳴り、私も上の空で、不安定な心持ちになったままだよ。

【語句】○ながめ 長雨の意の「ながめ」ともの思いをするの意の「眺め」とを掛ける。○ふれば 「降れば」と「経れば」を懸ける。○空 天象の空と、不安定な落ち着かない心境を指す空の両意を持つ。○なり かみ(雷)が「鳴り」、不安定な心境に「なり」の意を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】「長雨」「降れ」「天つ空」「空に鳴り」は、「かみ(雷)」の縁語。天象を示す。

八〇九 あまぐものやへくもがくれなるかみのをとにのみやはきゝわたりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】大空の厚く重なった雲に隠れて鳴る雷のように、遠く、あなたのことを噂として聞きつづけるばかりなのだろうか。いや、そんなことはできない。

【語句】○あまぐも 天雲。「なるかみの」までが「音」を導く序。○やへくもがくれ 存在の遠さを表す。和歌童蒙抄に「八重雲隠れとは、必ず八重と云ふにあらず。雲厚しといふ心也」とある。○をとにのみやは「おと(音)」は、雷の音であるとともに、「噂」の意。「やは」は反語。○きゝわたりなん 「……わたる」は、……しつづけるの意。「なん」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「む」のついたもの。聞きつづけてしまうだろう。

【所載】拾遺集・恋一・六二八／万葉集・二六六六(旧二六五八) 天雲之 八重雲隠 鳴神之 音耳耳八方 開度南 アマクモノヤヘクモガクレナルカミノオトノミヤモキキワタリナム あまぐものやへくもがくりなるかみのおとのみにやもききわたりなん 人麿集Ⅰ・一九／人麿集Ⅱ・三四六／人麿集Ⅳ・一五七／和歌童蒙抄・四

八一〇 あふことはくもゐはるかになるかみのをとにきゝつゝこひやわたらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢うことは雲がかかるほど遙か遠いものとなり、その遙か遠くで鳴っている雷の音のように聞こえてくる噂を聞きながら、恋い続けるのだらうか。

【語句】○くもゐはるかに 雲のかかる遙か遠く、の意。○なる 「成る」と「鳴る」の掛詞。○をと 八〇九番歌参照。当該歌は全体的な発想が八〇九番歌と通ずる。

【所載】古今集・恋一・四八二／新撰万葉・四九八／貫之集I・五三七

〔以上五首担当 杉本〕

八一 一 あまぐものちかくひかりてなるかみの見ればおそろしみねばこひしも

【異同】ナシ

【現代語訳】雨雲の近く光つてとどろく雷鳴。空を見ると（見ることができないほど）恐ろしい。かといって見ないでいるとあなたが恋しくてならない。

【語句】○あまぐも 雨雲。空を覆う雨を降らせる雲。時に雷を伴う。「あまぐものやへ雲がくれなる神のおとにのみやはきき渡るべき」（拾遺集・六二八）。○なるかみ 雷、雷神、雷鳴。音のとどろきを歌う。前の「あまぐも」の項に所引の拾遺集歌参照。「なるかみのすこしとよみてふらずともわれはとどまらむいもしとどめば」（万葉集・二五一九（旧二五一四））。

【所載】万葉集・一三七三（旧一三六九）天雲 近光而 響神之 見者恐 不見者悲毛 アマクモニチカクヒカリテ（ハシリテ）ナルカミノミレバカシコシミネバカナシモ あまぐもにちかくひかりてなるかみのみればかしこしみねばかなしも

【参考】下句は女性に対して詠んでいるか。

八二 一 あだ人のこゝろはそれのかみなれやくもゐにのみもなりまさるかな

【異同】ナシ

【現代語釈】浮気なあの人のは空の鳴神なのか。雲居はるかにへだたるばかりであるよ（私から遠くなつてゆくよ）。

【語句】○そらのかみ 空の雷。「そらのかみ」という複合語は珍しいが、八〇八番歌に見えるように、「あまつそらかみもころも」という言い方はある。続き方はこの歌の他に例が見当たらない。○くもぬにのみもなりまさる 「雲居になる」とはかけへだてたものとなるの意。「成り」に雷の縁語「鳴り」をかける。

【所載】ナシ

八一二 秋のたのほのうへてらすいなづまのひかりのまにもきみぞこひしき  
いなづま われやわするこひ

【異同】ナシ

【現代語釈】秋の田の穂の上を照らすいなづまの一瞬の光の間もあなたのことが恋しくてならない。

【語句】◎いなづま 雷光。いなびかり。雷の閃光。古代の農民の間では、稲といなづまとの交接によつて稲穂が実ると信じられていた。「つま」は現代では「妻」の意だが、古代では「夫」をもいう。類聚名義抄「雷」には「イナヒカリ、一日イナツルヒ、又イナツマ、ヒカリ、ヒラメク、イナタマ」とある。「瞬時」「はかなさ」などの表現に用いる。○ほのうへてらす 穂の上照らす。

【所載】古今集・恋一・五四八

【参考】所載欄の歌「秋の田のほのうへてらすいなづまのひかりのまにも我や忘るる」、これを異文として脇に記し、「イ」としたのが傍書。一瞬光る雷光は、「世中をなにととへむ秋のたのほのうへてらすよひのいなづま」（和歌初学抄・一一二）とも詠まれた。

八一二 いなづまのひかりのまにもわすれじといひしは人のことにぞありける

【異同】ナシ

【現代語釈】いなづまの光の照らすわずかな一瞬たりとも忘れはしなかったのは、人の言葉であつた（変わ

りやすいものであった。

【語句】○人のこと 人の言葉。「心には忘るる日なく思へども人の言こそしげき君にあれ」(万葉集・六五〇(旧六四七))。

【所載】ナシ

八一五 まちかね<sup>わびイ</sup>て心あかねばいなづまのひかりにのみぞをどろかれつる

【異同】○をとろかれつる―をとろかれける(御・桂)、驚かれぬる(大)

【現代語訳】今いらつしやるかとお出でを待ちかねて、そこを立ち去り難く(一心に待ち) 一瞬光った稲妻にだけはつとして我にかえつた。

【語句】○心あかねば 十分満足したとは言えず立ち去りがたいので。「見て帰る心あかねば桜花咲けるあたりに宿や借らまし」(亭子院歌合・二二)。○をどろかれつる おどろかれつる。「おどろく」は「はつと気がつく」の意。「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。「をどろかれつる」は誤写である。完了の助動詞「つ」がこのように接続する例はない。「ける」という本文に依拠して訳した。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野〕

八一六 いなづまはかげろふばかりありしときあきのたのみは人しりにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】稲妻がかげろうのようにほんの一瞬だけ光った時、秋の逢瀬の見込みがどの程度であるか人は知ったのであったよ。

【語句】○いなづま 稲妻。電。稲のつま。瞬時の恋情の喩えとされることが多い。「秋の田の穂の上を照らす稲妻の光の間にも我や忘るる」(古今集・五四八) ○かげろふ 春の晴れた日、地表近くの風景がゆらめいて見える現象。ここでは、はかなく消えやすく、捉えどころがないことのたとえ。八二〇番歌参照。○ばかり 副助詞。ほど。ぐらい。平安以降は限定の「だけ」の意にも用いる。○あきのたのみ 秋の田の実。田で熟した稲の実。古代には、稲光によって稲が実ると考えられていたから、「たのみ」は「稲妻」の縁語。逢瀬への期待を

こめた「頼み」にかけることが多く、ここではその意とみる。「のちまきの遅れて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞ聞く」(古今集・四六七)、「秋風にあふ田の実こそ悲しけれ我が身むなしくなりぬと思へば」(古今集・八二二)などの例がある。「ほのめきし光ばかりに秋のたのみもりわびしきころの風かな」(保憲女集・七八)と、「秋のたのみ」を物名として、稻妻と組み合わせせて詠む似た発想の歌もある。

【所載】ナシ

八一七 ともにぬるものとはなしになづまのあきのたのみをそらにたつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】ともに寝るといふわけでもないのに、稻妻は、どうして秋の田の実を空に向けて立てるのであろうか(秋に逢うという願いを、たとえ空だのみで終わるものであっても空しく立てるのだらうか)。

【語句】○ぬる 寝る。動詞ナ行下二段活用「ぬ」の連体形。○ものとはなしに ……ものでもないのに。「とどむべきものとはなしにはかなくもちる花」(とにたぐふ心か) (古今集・一三二)、「さかざらむものとはなしに桜花おもかげにのみまだき見ゆらん」(拾遺集・一〇三六)。○あきのたのみ 「たのみ」は、稻妻の縁語「田の実」と「頼み」の掛詞。八一六番歌参照。「契りおきしたのみむなしき」(く)なりにしに光かはらぬ秋の稻妻」(大斎院前御集・一四二)。○そらにたつらん 「そら」は稻妻の縁語の「空」と、あてにならない頼みの「空頼み」とをかける。「たつ」ものは、塵、名、煙、鳥などが多く、「たのみ」では解しにくいが、「願を立つ」、思いを天に聞き届けてもらうために願をたてるとみる。秋の田の実(稻)が実る前に空に向かって穂を立てる様子とのダブル・イメージ。

【所載】隆源口伝・五四

【参考】隆源口伝の巻末四首「つま」の中の一首として次のような記載がある。

共にぬるものとはなしに稻妻の秋のたのみを空にたつらむ

これは男をいふと見えたり。万葉集には、己妻と書きてつまとよみたり。是を見ぬ人の男といふなるべし。或人云、つまはとりからと云ふ。これ男をいふなるべし、云々。されどもつまとは、おほやうは、妻をいふなるべし。

八一八 あしひきのやまだをうへていなづまのともにあきにはあはんとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】山田に稲を植え、光つて稲を実らせる稲妻、妻とともに、秋になったら逢おうと思う。

【語句】○あしひきの 山または山の熟語にかかる枕詞。○うへて 植ゑて。○いなづま 「あしひきのやまだをうへて」は「稲妻」の「稲」を導く序詞。「いなづま」の「つま」に「妻」を掛ける。○ともに 「いなづま」が稲を実らせる時期とともにの意と、妻とともにの両義的用法。○あはん 「あふ」は男女が恋愛関係を結ぶ。結婚する意。頭韻「あ」の繰り返しが特徴的。

【所載】貫之集Ⅰ・四九九

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「天慶五年亭子院の屏風歌二十一首」のうちの一首。

八一九 あまつゆのおくてのいねはいなづまをこふとぬれてやかはかざるらん  
しらイ さイ いひイ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝露の置く晩稲の稲は、稲を実らせるといふ稲妻を恋い慕って、濡れて乾かないでいるのだろうか。

【語句】○あさつゆの 「消ゆ」「命」「置く」にかかる枕詞。ここでは「置く」と同音の「おくて」の「おく」にかかる。○おくて 成熟するのが遅い稲。晩稲。晩稲に朝露が置いて濡れるのをいなづまを恋う涙とみる。「秋田みな刈り果てつれど初霜のおくての稲は ひさしかりけり」（家持集・二七四）。晩稲の実る時期は稲妻の時期をはずれるか。○こふと 恋う、恋い慕うとて。○ぬれてや 「ぬれて」は、朝露に濡れる意と恋うる涙に濡れる意とを兼ねる。「や」は疑問の係助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・五一

【参考】作者名はないが、当該歌は貫之集に入集する。「天慶五年九月、内裏御屏風歌五首」のうちの一首。詞書に「稲刈りほせる」とある。

かげろふ  
八二〇 世の中とおもひしものをかげろふのあるかなきかのよに。そありけれ  
こイ



【異同】よにこイそありけれ—よにこそありけれ（御・桂・大）

【現代語訳】これが世の中、男女の間柄だとは思っていたけれど、かげろうのようにあるかないかはつきりせぬはかない仲であつたことよ。

【語句】◎かげろふ 春の晴れた日、地表近くの風景がゆらめいて見える現象。「かぎろひ」の転じたもの。「いとゆふ」とも。はかなく消えやすく、捉えどころがないことから「ほのめく」「ほのか」、また「あるかなきか」に続くことが多い。仏典における無常、在非在の喩えの一つでもある。○よのなかとおもひしものを「よのなか」は男女の仲。「ものを」は逆接の接続助詞。所載欄の後撰集では「世の中と言ひつる物か」となっており、意味がとりやすい。○かげろふのあるかなきか 仏典において「かげろふ」は存在の不確かさを表す比喩で、それを歌に用いた。「於諸法門勝解觀察。如幻如陽炎。如夢如水月。如響如空花。如像如光影。如變化事。如尋香城。雖皆無実而現似有（諸々の法門に於いて勝解觀察すること、幻の如く、陽炎の如く、夢の如く、水月の如く、響の如く、空花の如く、像の如く、光影の如く、変化の事の如く、尋香城の如し。皆実無しと雖も而も現じて有るに似たり）」（大般若經・卷一）。「あはれともうしとも言はじかげろふのあるかなきかに消ぬる世なれば」（後撰集・一一九二）。八二五番歌参照。○よ 男女の仲。夫婦の関係。

【所載】後撰集・雜四・一二六四

【参考】かげろうと仏典についての論文に、新間一美「平安朝文学における「かげろふ」について—その仏教的背景—」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、二〇〇三年）がある。

〔以上五首担当 斎藤・中野〕

八二二 かげろふのそれかあらぬかはるさめのふるひと見ればそでぞぬれぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】（かげろうのようにはつきりしないが）あれはあの人だったのかそうでないのか、それほど久しぶりの懐かしい人に逢ったので、（春雨の降る日のように）涙で袖が濡れてしまったのです。

【語句】○かげろふの 「それかあらぬか」を導く措辞。「かげろふ」は「陽炎」。八二〇番歌参照。春の日に地表近くから立ち上る水蒸気が、光を屈折させてゆらゆらと揺らめいて見える現象で、おぼつかないもの、実体のはつきりしないものの喩えとされる。○それかあらぬか それと同じなのか、違うのか、はつきりしない。「去

年の夏鳴きふるしてし郭公それかあらぬか声のかはらぬ」（古今集・一五九）について、新日本古典文学大系『古今和歌集』脚注は、白楽天の詩などに多い「其不」の語法の訓読による表現で、李夫人「是耶非耶」の古訓点（神田本）に、「ソレカアラヌカ」があるとする。○はるさめの「ふる」にかかる枕詞。なお、第五句の「ぬれ」は「はるさめ」の縁語。○ふるひと「降る日と」に「古人」を掛ける。「古人」は、万葉集に二例。「妹らがり今木の嶺に茂り立つつま松の木は古人見けむ」（万葉集・一七九九（旧一七九五））など。同じような「ふりたる君」の例としては、「現にも夢にも吾は思はずきふりたる君にここにあはむとは」（万葉集・二六〇六（旧二六〇一）、古今六帖・二九一六）。

【所載】古今集・恋四・七三一／奥儀抄・五三六／和歌色葉・二六九／色葉和難集・三二七

八二二 かげろふのさやにこそみねむまたまのよるのひとめはこひしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】かげろふのように、はつきりと姿は見ませんでしたけれど、夜に少しだけお逢いするのは、かえって恋しさがつのることです。

【語句】○かげろふの「かげろふ」は八二〇番歌参照。○さやにこそみね はつきりとは見なかったけれど。「さや」は、万葉集からみられる表現で、形容詞「さやかし」、形容動詞「さやか」と同源。はつきりと、鮮やかに、くつきりと。「ね」は「こそ」の結びで打消の助動詞「ず」の已然形。「こそ…已然形」が文中に挿入されている場合、下に続く逆接の条件句となる。「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみね香やはかくるる」（古今集・四二）。傍記「さやかにみえぬ」の方が文意が通るが、本文通りに解した。○むまたまの「夜」「闇」「髪」「夢」にかかる枕詞「むばたまの」の「ば」が「ま」に転じたもの。「むばたまの」「ぬばたまの」と同じ用法である。○ひとめ 一目。僅かばかり逢うこと。「夜の一目」は用例なし。

【所載】ナシ

八二三 かげろふのひとめからにやあやしくもおもわすれせぬいにもあるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】現れてはすぐ消えるかげろふのように、たった一目お逢いしたからでしょうか、不思議にも面影が

忘れられないあなたでありますよ。

【語句】○かげろふの「かげろふ」は八二〇番歌参照。すぐに消えてしまうことから「ひとめ」を導く措辞。「ほのめく」「ほのか」を導くことが多い。「ひとめ」と結びつくのはこの歌と八二二番歌、八二四番歌、及び万葉集旋頭歌（西本願寺本の訓「しの薄穂には咲き出でぬ恋をわがするかげろふのただ一目のみ見し人ゆゑに」）（二三一五（旧二三一一）の三例である。○ひとめ 八二二番歌参照。○からにや「からに」に疑問の係助詞「や」がついた形。「からに」は、原因、結果を順接の関係において示す。……ので。……ゆえに。「君ひとりとはぬからにやわがやどの道も露けく成りぬべらなり」（貫之集・八二六）。○あやしくも「あやし」は、理解し難い。不思議だ。「も」は主題を詠嘆的に提示。○おもわすれ 人の顔を見忘れること。「面忘れいかなる人のするものぞわれはしかねつ継ぎてし思へば」（万葉集・二五三八（旧二五三三）、古今六帖・二八八二）、「見し人はそれかあらぬかおぼつかなおもわすれせじと思ひしものを」（色葉和難集・二五九）。

【所載】ナシ

八二四 かげろふのひとめばかりはほのめきてこぬよあまたになりにイけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】かげろふのように、ほんの一目ばかりお逢いして、あとは訪れない夜が多くなってしまうした。  
【語句】○かげろふのひとめ 八二三番歌参照。○ほのめきて かすかに……して。「かげろふ」と結びつく例は、「かげろふのあるかなきかにほのめきてあるはあとも思はざらん」（宇津保物語・七）。○こぬよあまたに 訪れない夜が多くなって。「たのめつつこぬ夜あまたになりぬれば待たじとおもふぞ待つにまされる」（拾遺集・八四八、和漢朗詠集・七八八）。「あまた」は「ひとめ（一目）」と対比の妙。

【所載】夫木抄・一三一二〇

八二五 ありと見てたのむぞかたきかげろふのいつともしらぬ身とはしる／＼

【異同】ナシ

【現代語訳】あると思つて頼りにすることは難しい。かげろふのように、いつともしれぬ身の上であることは充分承知しつつ。

【語句】○ありとみて 実在すると見て。あると思つて。「ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ」(古今集・物名・四四三)と上二句が共通する。○かげろふ あるかなきかのはかないものであることから、仏典において、無常と在不在の喩えの一つとされる。八二〇番歌参照。「いつをいつとおもひたゆみてかげろふのかげろふほどの世をすぐすらん」(金葉集二度本・雑下・六四一・懷尋法師「依他の八つのたとひを人々よみけるに、この身かげろふのごとしといへることをよめる」)。上二句は「かげろふ」の在不在の喩えであり、「いつともしらぬ」は無常の喩えである。「ありとみて」と結びつく例は「ありとみて手にはとられずみればまたゆくへもしらず消えしかげろふ」(源氏物語・蜻蛉・七六六)。○いつともしらぬ 一つであるとも知れぬ。類歌「露の命何時ともしらぬ世の中になどかつらしと思ひおかるる」(後撰集・一〇〇八)、「あふことをいつともしらぬ夏虫のおもひはかぎりなくやあるらん」(陽成院歌合・一一)など。○しる／＼ 十分に知りながら。知りつつ。「世の中にふるぞはかなき白雪のかつは消えぬる物としる／＼」(拾遺集・一三三三)。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

八二六 かげろふのほのめくかげにみてしよりたれともしらぬこひもするかな

【異同】ほのめくかけに―ほのめく影を(大)

【現代語訳】ちらちらと揺れ立つ陽炎のようなさだかでない姿として見て以来、たれともわからぬあの人への恋をすることだ。

【語句】○かげろふの ここでは「ほのめく」を導き出すための措辞。「かげろふ」は、ちらちらと揺れながら立つ陽炎のこと。○ほのめくかけに はつきりとさだかでない姿として。「ほのめく」は、明確な色や形が見えずほんのりとかすかなさま。「かげ」は、この場合人影、人の姿の意。「に」は、……の状態で、ということ。

【所載】続古今集・恋一・一〇二七

八二七 つれづれのはるひにまよふかげろふのかげ見しよりぞひとはこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】所在なくものさびしい春の日に、入り乱れてまぎれ立つ陽炎(かげろう)。そのかげのようにさだ

かでない姿を見てからというもの、あの人のことが恋しい。

【語句】○つれ／＼ ものごとに動きや変化がなく、所在なくさびしいさま。心の満たされない状態がつづくさまの形容として言われることが多い。○はるひにまよふかげろふ 「まよふ」は、入り乱れてまぎれる、の意。春の日に、入り乱れてちらちらと揺れながら立っている陽炎。「かげろふ」は前歌参照。上三句は「かげ」にかかる序詞。○ひと あの人。ここは第三人称。

【所載】新後拾遺集・恋二・一〇〇六／綺語抄・九九／和歌童蒙抄・八四三／和歌色葉・二七〇

八二八 てにとれどたえてとられぬかげろふのうつろひやすき／＼みがこ／＼ろよ<sup>カイ</sup>

【異同】てにとれとーてにとれは（御）

【現代語訳】手に取っても、まったく取ることでできない陽炎。その陽炎のように、まことにあてにならず変りやすいあなたのこころよ。

【語句】○てにとれど 手に取っても。ここでは手に取ったつもりでもの意。○たえてとられぬ 決して取ることでできない。「たえて」は、下に打消の語を伴うことによって、全面的な否定を表わす副詞。上三句は「うつろひやすき」にかかる序詞。○かげろふの 八二六番歌参照。○うつろひやすき ほかへ移りやすい。気が変りやすい。

【所載】ナシ

〔以上三首担当 犬養悦・山下〕

本云

以民部卿本書了。此本有僻事

之由被申之間、又以他本手自校合了。

嘉祿第二歴中春下旬之候、兩人

能々校合了。

前和歌所開闔從四位上源朝臣

家長也  
在判

すべてこの六帖、いかにやらん、いづれもく  
みなかくのみしどけなき物にて  
侍れば、本のまゝにしるしをく。のち  
に見ん人心えさせ給べし。

八百廿五首

一校了

校了

【異同】本云―ナシ（御・大） 一校了―ナシ（桂・大） 校了―ナシ（御・桂・大）  
ナオ大久保本ハ、最末尾ニ「此六帖 禁裏御本并一品式部卿宮以御本書写校合畢」ノ一文ヲ有ス



古今和歌六帖 第二

山 やま やまどり さる しか とら くま むさゝび やまがは 山だ  
 山ざと 山の井 やまびこ いはほ みね たに そま をのゝえ すみが  
 ま せき はら をか もり やしろ みち つかひ むまや

【異同】ナシ

田 はるのた 夏のた あきのた ふゆのた かりほ いなおほせどり そぼづ  
 【異同】ナシ

野 はるのゝ なつのゝ 秋のゝ 冬のゝ ぎうのゝ かり ともし わし お  
 ほたか こたか きじ はと うづら 大たかづり こたかづり みゆき

【異同】ナシ

都 みやこ みやこどり もゝしき  
 【異同】ナシ

田舎 くに こほり さと ふるさと やど やどり かきほ  
 【異同】ナシ

宅 いゑ となり 井 まがき には にはとり かど と すだれ とこ



むしろ

【異同】 ナシ

人

をきな

をんな

をや

うなゐ

わかいこ

くるま

うし

むま

【異同】 ナシ

仏事

てら

かね

ほうし

あま

【異同】 ナシ

山

八二九

おほなむちすくなびこなのつくりたるいもせのやまを見るはしもよし

【異同】 ナシ

【現代語訳】 大己貴の神と少彦名命とが力を合わせて作った妹背の山を見るのは、いいなあ。

【語句】 ◎山 陸地の中で、盛り上がってまわりより高くなっているところ。野や里に対して言われる。古今六帖では、第二帖の大項目として「山」があり、その中の最初の歌題がこの「山」である。歌題「山」の下には、具体的な固有名詞で呼ばれる山を詠んだ歌が、九十四首収められている。○おほなむち 大己貴。出雲神話の主神大国主命のこと。少彦名命と協力して国造りをしたと、記紀神話に見える。○すくなびこな 神話に出てくる少彦名命。○いもせのやま 妹背の山。万葉集における妹背の山の所在は紀伊国。現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町。紀川をはさんで北岸にあるのが勢能山（背山）。これに対する形で南岸にある丘が、妹山だと言われている。（山下道代『歌枕新考』（青簡舎）。○見るはしもよし 見るのはよい。「見るは」が主語、「し」は強意の副助詞、「も」は係助詞、「よし」は形容詞。

【所載】 拾遺集・神楽歌・六一九／万葉集・一二五一（旧一二四七）大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉 才ホナムチスクナミカミノツクリタルイモセノヤマヲミルハシヨシモ おほなむちすくなみかみのつくらししいも

せのやまをみらくしよしも／人麿集Ⅰ・二三八／人麿集Ⅱ・二〇九／人麿集Ⅲ・六〇〇／和歌童蒙抄・一六七／  
興儀抄・三八九／袖中抄・六三四／和歌色葉・一五四

【参考】 大國主命と少彥名命が「妹背の山」を作ったという伝承は、この歌以外のところには見出せない。

八三〇 みむろのやその山なかにこなからをまきもく山につぎてよろしも

【異同】 ナシ

【現代語訳】「第三句に意味不明の語があるため、完全な訳が示せない。」三輪山の、その山の中に「こなからを」、巻向山につづいているのがよろしいなあ。

【語句】○みむろのや 「みむろ」は、神の降臨するところ、の意。ここは、奈良県桜井市三輪にある三輪山のこと。「や」は詠嘆を表す終助詞。○その山なかに その山の中に。所載欄にあげたとおり、万葉集では「そのやまなみに」である。○こなからを 意味不明。万葉集では「こらがてを」であり、それに従うならば「子らが手を」であり、「手を纏く」から「まきもく山」を言うための枕詞となる。○まきもく山 巻向山。桜井市穴師前にあり、三輪山とは峯つづきである。○つぎて 次ぎて。その次に続いて。「つぎ」は、連続するものの順序が、前のものの直後に接して在ることをいう。

【所載】 万葉集・一〇九七（旧一〇九三）三毛侶之 其山奈美尔 児等手乎 巻向山者 継之宜霜 ミモロノヤソノヤマナミニコラガテヲマキモクヤマハツギテシヨシモ みもろのそのやまなみにこらがてをまきむくやまはつぎしよろしも

【参考】この一首は、所載欄にあげた万葉集の歌の異伝歌と思われる。二・三句を万葉集の形にもどせば、三輪山から巻向山へとつづく山並のよさをほめた歌となる。

〔以上二首担当 犬養悦子・山下道代〕

八三一 いはがねのこりしく山にいりそめて山なつかしみいでかてぬかも  
ひとまる

【異同】 ナシ

【現代語訳】大岩が凝り固まっている山に入りはじめてみると、山がなつかしくて、出ることができないなあ。

【語句】○いはがね 岩が根。大地にしつかりと根を張った岩の、大地に接する部分。○こりしく 凝り固まっている。「いはがねのこりしく」は、万葉集に見られる「いはがねのこごしき」が変形したもので、平安末期から中世の和歌には、この「いはがねのこりしく」の形が用いられる。○山なつかしみ 山にこころひかれて。山がなつかしくて。「み」は、形容詞および形容詞型活用の助動詞の語幹（シク活用の場合は語幹相当の終止形）に付く接尾語。原因・理由を表わす。○いでかてぬかも 出ることができないなあ。「かてぬ」は、……することが不可能である、……しきれない、の意。「かも」は詠嘆。

【所載】万葉集・一三三六（旧一三三三） 石金之 凝木敷山尔 入始而 山名付染 出不勝鴨 イハガネノコゴシキヤマニイリソメテヤマナツカシミイデカテヌカモ いはがねのこごしきやまにいりそめてやまなつかしきみい

【参考】万葉集では巻七比喩歌の中の「寄山」歌。作者名「ひとまる」は根拠不明。万葉集では特に柿本人麿歌集との関係も言われていない。

## 八三二 かね山のしたひがしたになくかはづこゑだにきかばなになげかん

人まる

【異同】ナシ

【現代語訳】かね山の紅葉の下でないでいる河鹿よ。その声のように、せめてあの人の声だけでも聞くことができるならば、なにをこんなに嘆こうか。

【語句】○かね山 所在不明。所載欄万葉集の歌の初句「金山（アキヤマ）」（五行説において秋は「金」にあたる）を「かねやま」と訓み、それが六帖で本文化しているのであろう。夫木抄に「金山」の所在を「山城又陸奥」としているのは、付会である。○したひ 色づいた木の葉のこと。「したふ」（木の葉が色づくの意）という四段動詞の連用形の体言的用法。○かはづ 河鹿のこと。谷川などの清流に棲息する小さな蛙。晩春から夏のころ澄んだ美しい声でなく。○なになげかん 「か」は反語の意を含む疑問。なにを嘆こうか。なにも嘆きはしない。

【所載】万葉集・二二四三（旧二二三九） 金山 舌日下 鳴鳥 音谷聞 何嘆 アキ（カナ）ヤマノシタヒガシタニナクトリノコエダニキカバナニカナゲカム あきやまのしたひがしたになくとのこゑだにきかばなになげかん

【参考】作者名「人まる」は根拠不明。万葉集では特に柿本人麿歌集との関係も言われていない。

八三三 さほやまをよそに見しかどけふみればやまなつかしみかぜなふきそも

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山を、これまでは自分にかかわりのないものと思つて見てきたが、今日見るとなつかしくてならない。風よ、吹くなよ。

【語句】○さほやま 佐保山。大和国の歌枕。現在の奈良市街の北方郊外にある丘陵。ここでは恋人の暗喩として言われている。○よそに見しかど 自分には無縁のものとして見てきたが。○やまなつかしみ 八三一番歌参照。○かぜなふきそも 風よ、吹くな。「な……そ」は禁止、「も」は詠嘆。「かぜ」はこの恋を妨げるものの暗喩か。

【所載】万葉集・一三三七（旧一三三三）佐保山乎 於凡尔見之鹿跡 今見者 山夏香思母 風吹莫勤 サホヤマヲオホニミシカドイマミレバヤマナツカシモカゼフクナユメ さほやまをおほにみしかどいまみればやまなつかしもかぜふくなゆめ

八三四 なぐさ山ことにもあらじわがこひはちへにひとつもなぐさまなくに  
ふゆのことぬし

【異同】ナシ

【現代語訳】（慰めるといふ名の）名草山だなんて、なんのことでもありはしまい。わたしの恋の切なさは、千のうち一つも慰みはしないのに。

【語句】○なぐさ山 名草山。紀伊国の歌枕。現和歌山市の南部にある山。山腹に紀三井寺がある。「なぐさ」の音に「慰め」の意を通わせた。○ことにもあらじ 格別なほどのことでもあるまい。たいしたことでもあるまい。失望の表明。○ちへにひとつ 通常は「ちへのひとへ」という。千重のうちの一重。あまたの中のごくわずか。○なぐさまなくに 心が慰みはしないのに。「なぐさま」は自動詞「なぐさむ」の未然形、「なく」は打消の助動詞「ず」のク語法、「に」は助詞。

【所載】万葉集・一二〇三（旧一二二三）名草山 事西在来 吾恋 千重一重 名草目名国 ナグサヤマコトニシアリケリワガコヒノチヘノヒトヘモナグサメナクニ なぐさやまことにしありけりあがこふるちへのひとへも

なぐさめなくに／袋草紙・八四九／袖中抄・四

【参考】作者名「ふゆのことぬし」は根拠不明。またその人の伝不詳。万葉集では作者名のない歌。

八三五 まきのはのしなふせ山のしのたすきわがこえくればこのはしげるも  
をだのことぬし

【異同】しなふせ山の—しのふせ山の（大）

【現代語訳】「第三句に意味不明の語があるため、完全な訳が示せない。」真木の葉がしなやかにたわんでいる背山の「しのたすき」。わたしが山を越えてくると、木の葉が茂っているなあ。

【語句】○まき 真木。木の美称。桧・杉・榎など良材となる木。○しなふ しなやかにたわむこと。ここは、真木の葉がやわらかに茂っているさまを言ったか。○せ山 背山。兄山とも。万葉集では「勢能山」と表記される。現和歌山県伊都郡かつらぎ町、紀ノ川北岸にある山。日本書紀大化二年正月一日の詔において畿内四至の南限とされた山である。八二九番歌参照。○しのたすき 所載欄万葉集の歌の第三句「しのはずて」が変形したものと思われるが、このままでは意をとり難い。

【所載】万葉集・二九四（旧二九一） 真木葉乃 之奈布勢能山 之努波受而 吾超去者 木葉知家武 マキノハノシナフセノヤマシノハズテワガコエユケバコノハシリケム まきのはのしなふせのやましのはずてわがこえゆけばこのはしりけむ／夫木抄・八二三七

【参考】作者名「をだのことぬし」は、万葉集二九四（旧二九二）の題詞に、「小田事勢能山歌一首」とあるに拠ったものである。「小田事」は万葉集に当該歌一首あるのみの作者、伝不詳。

〔以上五首担当 山下〕

八三六 わがせこがいるさのやまのやまあららきてなとりふれそかもまさるがに  
大伴良女 おなじ

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい夫が分け入るさの山に生えている山あららき、それを手にとって触れないでね、いやな匂いがつくく付くでしょうから。

【語句】○せこ 兄弟、夫、恋人などの男性を親しんで言う語。○いるさのやま 八雲御抄に但馬の歌枕とあるが所在不明。「いるさ」に「入る」を掛ける。○やまあらさき ノビルの古名。○てなとりふれそ 手で触れないでください。「な……そ」で、どうか……してくれるなど懇願する意。○まさるがに まさるだろうから。

「……がに」は和歌の第五句に用いられる時は、終助詞として前句の理由を述べるはたらきをする。

【所載】ナシ

【参考】作者名「大伴良女 おなじ」とあり、古今六帖では前歌の作者名と同じ場合「おなじ」とする。しかし前歌（八三五）の作者名は「をだのことぬし」である。

八三七 わがせこそこさせのやまと人はいへどきみもきませぬ山のなゝらし

いしかはのらう女

【異同】こさせのやまとこませの山と（桂・大）  
主殿

【現代語訳】いとしい夫のことを、こさせの山と人は言うけれど、あなたはちつともおいでにならない。こさせの山とは山の名だけらしいなあ。

【語句】○わがせこそ 「せこ」は恋人・夫を女が親しんで呼ぶ語。初句は下の「来させ」を導く働きをする。○こさせのやま 不明。所載欄の拾遺集・人麿集では「きませのやま」。○きませぬ 来ませぬ。おいでにならない。○山のなゝらし 山の名であるらしい。「山のなるらし」のつまったもの。

【所載】拾遺集・恋三・八一八／人麿集Ⅰ・二二／人麿集Ⅱ・三三六

【参考】作者名「いしかはのらう女」とあるが所載欄の文献では「人麿」である。

八三八 するがなるうつのを山のうつゝにもゆめにも見ぬに人のこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】現実にも夢にもあの人に逢えないので、恋しいことだなあ。

【語句】○するがなるうつのを山 駿河国にある宇津山。歌枕。静岡市と西隣の岡部町との間の峠。「するがなるうつのを山の」までは同音の「うつつ」を言い出すための序詞。「駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」（伊勢物語・一一）。○見ぬに 見ないので。「に」はあとで述べる事柄の原因・理由を表す

助詞。

【所載】伊勢物語・一一

八三九 かしまなるつくまのやまのつくぐとわが身ひとつにこひをつむかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のことを思つて、つくぐと自分ひとりで恋の悩みを深めていることだなあ。

【語句】○かしまなるつくまのやま 常陸国の鹿島にある筑波山。歌枕。つくば市真壁町と八郷町の境にある山。つくばね、ともいう。「かしまなるつくまのやまの」までは同音の「つくぐと」を導くための序詞。○わが身ひとつに 自分ひとりだけで。○こひをつむ 恋心を一層ふかめる。

【所載】拾遺集・恋五・九九九／新撰万葉集・二〇三／寛平御時后宮歌合・一七一

八四〇 おほはらやをしほのやまの小松原はやこだかゝれちよのかげ見む

【異同】ナシ

【現代語訳】大原の小塩の山の小松原は、はやく小高くおなりなさい。千年も経た大樹のように長寿の姿を見たいので。

【語句】○おほはらやをしほのやま 山城国の歌枕。京都市西京区。市の南西端の丘陵。藤原氏の氏神、大原神社がある。○小松原 小塩山に生えている松原。子供を喻えている。所載欄の後撰集詞書に「左大臣の家のをのこご、をんなご、冠し、裳着侍りけるに」とあり、左大臣藤原実頼の男君、女君が、冠し、裳着した時に貫之が詠んだ歌。○ちよのかげ見む 長寿を祈る言葉。松は常緑なので長寿を象徴する木とされた。

【所載】古今六帖・第六帖「松」四一〇七／後撰集・慶賀・一三七三／金玉集・七七（群書類従本・巻末）／新撰朗詠集・四〇〇／貫之集Ⅰ・六九八／貫之集Ⅱ・五五／奥儀抄・三四〇／袖中抄・二八七／六百番陳状・一四五／古来風体抄・三三八／和歌色葉・三四九／東野州聞書・一三二一

〔以上五首担当 林マリヤ〕

人まろ

八四一 たきのうへのみふねの山にのある雲のつねならぬよをたれかたのまむ

【異同】ナシ

【現代語訳】（吉野川の）激流の上方にそびえる三船の山にかかっている雲は常にあるわけではない、そのように定めないこの世を、いったい誰が頼みにしましょうか（当てにはできませんよ）。

【語句】○たきのうへの 吉野町宮滝付近。「滝」は水が激しく流れる所。五一八番歌参照。○みふねの山 三船の山。大和国の歌枕。吉野町宮滝の南にある山。「みよしのの」「たきのうへの」を冠して詠まれることが多い。○ある雲の 五一八番歌参照。三句目までは「つねならぬ」を導く序。

【所載】ナシ

【参考】作者名「人まろ」とあるが、他文献には見えない。上句が同じ歌として古今六帖「くも」五一八番歌に下句「つねなるべくもあらぬ我が身を」という類歌があり、その作者名は「人まろ或本」となっている。また、万葉集・二四三（旧二四二）番歌に下句「常にあらむとわが思はなくに」という類歌があるが、その作者名は「弓削皇子」となっている。

八四二 君が代にあふさかやまのいはしみづこがくれたりとおもひけるかな  
忠峯

【異同】ナシ

【現代語訳】我が君の御代に生まれ合わせた私は、今まで、逢坂山の岩清水が木陰に隠れて見えないように、人目に付かず埋もれていると思っていたことですよ。

【語句】○あふさかやま 逢坂山。近江国の歌枕。山城国と近江国の境にある山で、麓に逢坂の関があった。「あふ」は、「君が代にあふ」の「あふ」と「逢坂山」の「逢」とを掛ける。「我妹子に逢坂山を越えて来て泣きつつ居れど逢ふよしもなし」（万葉集・三七八四（旧三七六二））。○いはしみづ 岩（石）清水。岩間からわき出る清水。逢坂の岩清水は歌によく詠まれた。「相坂の関に流るいはし水いはで心に思ひこそすれ」（古今集・五三七）。○こがくれたり 「木隠る」は、木の陰に隠れて人目に付かない意。「葦引の山下水の木隠れてたぎつ心をせきぞかねつる」（古今集・四九一）。

【所載】古今六帖・第三帖「水」一四六五／古今集・雑体・一〇〇四／忠岑集Ⅰ・二／忠岑集Ⅱ・八一／忠岑



集Ⅲ・一四六／忠岑集Ⅳ・八二／古来風体抄・二九五

【参考】作者名「忠岑」は、所載欄の文献によっても「忠岑」の作で一致する。古今集・忠岑集によると、当該歌は、忠岑が撰集の材料として古歌を醍醐天皇に献上する際に添えた歌。

八四三 みよしのゝよしのゝ山はもゝとせのゆきのみつもとところなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】み吉野の吉野の山は、百年も、雪がどんどん積もるばかりの所だったんだなあ。

【語句】○みよしの 「吉野」に美称の接頭語「み」を付けた語。○よしのゝ山 吉野の山。大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪が景物として知られ、後には桜の名所として有名になった。「春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪はふりつつ」（古今集・三、古今六帖・六〇三）。

【所載】貫之集Ⅰ・一七二

【参考】貫之集によると、作者は貫之で、延長二（九二四）年、左大臣藤原忠平室源順子の賀の屏風歌。なお、貫之集Ⅰ・一六一詞書に「延喜」と見えるのは「延長」、「十首」とあるのは「十二首」の誤り。

八四四 すがはらのふしみのくれに見わたせばかすみにまがふをはつせのやま

【異同】すかはらの―すかはらや（桂）

【現代語訳】菅原の伏見の里の夕暮れに見渡すと、霞に見紛う小初瀬の山よ。

【語句】○すがはらのふしみ 菅原の伏見。大和国生駒郡伏見、現在の奈良市菅原町の辺り。菅原氏の本貫の地として知られ、「菅原や伏見の里」と歌に詠まれることが多かった。「いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくをし」（古今集・九八一）。所載欄の文献には「すがはらやふしみ」と見える。○をはつせのやま 小初瀬の山。大和国の歌枕である「初瀬の山」（現在の奈良県桜井市初瀬一帯の山）に接頭語「を」が付いた呼称。

【所載】後撰集・雑三・一二四二／奥儀抄・五七二／和歌初学抄・一七八／袖中抄・四九六／井蛙抄・三二九

八四五 しらやまにゆきふりぬればあとたえていまはこしぢに人もかよはず

【異同】ナシ

【現代語訳】白山に雪が降ったので人の足跡もなくなつて、今はもう、かつては人がやつて来た越路に人も通いません。

【語句】○しらやま 越前国の歌枕。現在の石川・富山・福井・岐阜の各県にまたがる白山。雪深い地として歌に詠まれた。「君がゆく越のしら山しらねども雪のまにまにあとはたづねむ」（古今集・三九一）。○こしち越路。北陸道。現在の福井・石川・富山・新潟県。「来し路」を掛けるか。「君をのみ思ひこしちのしら山はいつかは雪の消ゆる時ある」（古今集・九七九）。

【所載】後撰集・冬・四七〇／大和物語・九十五段・一四三

【参考】大和物語によると、醍醐天皇没後、右大臣定方の娘で醍醐天皇の女御であつた能子に、天皇の同母弟敦実親王が通うようになったものの、その訪れが途絶えた頃に、能子が詠んだ歌。

〔以上五首担当 長戸千恵子〕

八四六 つまかくすやのゝはぎはら露じもににほひそむらしちらまくもしみ

カミヤイ

【異同】ちらまくもしみ—ちらまくほしみ（大）

【現代語訳】矢野の萩原が露や霜に色づき始めたようだ。（ここの紅葉の）散るのも惜しいことよ。

【語句】○つまかくす 所載欄の万葉集「つまごもる」の転。人麿集Ⅲ、夫木抄とともに「つまかくす」とある。万葉集を参考に、「やの」にかかる枕詞とする。○やのゝはぎはら 「やの」は所在未詳。○ちらまくもしみ 「まく」は推量「む」のク語法。「もしみ」は万葉集での形を参考に「惜しみ」の意と解する。

【所載】玉葉集・秋下・七九三／万葉集・二二八二（旧二二七八）妻隠 矢野神山 露霜尔 尔宝比始 散卷惜 ツマゴモルヤノカミヤマツユシモニホヒソメタリチラマクラシモ つまごもるやののかむやまつゆし

【参考】古今六帖の本文からは「山」の歌であるとはうかがえないが、所載欄の諸文献では二句目が「矢野の神山」とある。

八四七 あづまぢのさやのなか山さやかに見ぬ人ゆへにこひやわたらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】東路のさやの中山のさやかではないが、あの人のことをさやかに、はつきりと姿を見ないがゆえに恋しつづけるのだろうか。

【語句】○さやの中山 遠江国の歌枕。現在の静岡県掛川市佐夜鹿にある峠。箱根峠、鈴鹿峠と並ぶ難所。初二句は「さやか」を導く序詞。「あづまぢのさやの中山さやかにも見えぬくもぬによをやつくさん」（忠岑集・四七）。○見ぬ人ゆへに 見ぬ人ゆゑに。見ていない人であるがゆゑに。

【所載】ナシ

八四八 みまさかやくめのさら山さら／＼にわがなはたてじよろづよまでに

【異同】ナシ

【現代語訳】あの美作の久米の佐良山ではないが、さらさら私の恋のうわさは立てますまい、万代までも。

【語句】○みまさかやくめのさらやま 「くめのさらやま」は美作国の歌枕。現在の岡山県津山市にある山。ここでは「さら／＼に」を導く序詞。「美作や久米のさら山さらさらにむかしの今もこひしきやなぞ」（伊勢集・三九八）。○さら／＼に 打消を伴っているので「決して」の意で解す。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇八三／袖中抄・二六六

【参考】催馬楽・美作に「美作や 久米の 久米の佐良山 さらに なよや さらに さらさらに 我が名 我が名は立てじ 万代までにや 万代までにや」とある。

八四九 くものうへにかりぞなくなるうねび山みかきのはらにもみぢすらしも  
たぢまのわう女

【異同】みかきのはらに―みかきかはらに（桂）

【現代語訳】雲の上では雁が鳴いているようだ。畝傍山のふもとの御垣が原では紅葉しているに違いないことだ。

【語句】○くものうへに 所載欄の夫木抄と家持集はいずれも「おほぞらに」とする。○うねび山 大和国の

歌枕。現在の奈良県橿原市にある山。天の香具山、耳成山とともに大和三山の一。「うねび山ほのかに霞たつからに春めきにける心ちかもする」（好忠集・四八六）。平安以降の用例は少ない。○みかきのほら 大和国の地名。吉野離宮に属する「みかきがほら」と同一か。「ふるさと春めきにけりみ吉野のみかきがほらをかすみこめたり」（詞花集・三）。

【所載】 夫木抄・六二六七／家持集Ⅰ・二〇〇／家持集Ⅱ・二四八  
【参考】 作者名「たちまのわう女」とあるが、所載欄の文献からは確認できない。

八五〇 しながどりゐなのをゆけばありま山ゆきふりしきてあけぬこのよは  
ひとまろ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 猪名野を過ぎて行けば、有馬山では雪が降りしきっているうちに明けてしまったよ、今夜は。

【語句】 ○しながどり 「猪名野」に掛かる枕詞。○ゐなの 摂津国の地名。現在の兵庫県伊丹市の猪名川流域の平野。「猪名」とも。○ありま山 摂津国の地名。現在の兵庫県神戸市北区のあたり。○ゆきふりしきて雪が降りしきるので旅程がはかどらない。○あけぬこのよは 意のままに進まなかったことを嘆じる。

【所載】 新古今集・羈旅・九一〇／万葉集・一一四四（旧一一四〇） 志長鳥 居名野乎来者 有間山 夕霧立宿者無而 シナガトリキナノラクレバアリマヤムフグリタチヌヤドハナクシテ しながとりゐなのをくればありまやまゆふざりたちぬやどりはなくて／夫木抄・八七一六／猿丸集Ⅰ・二七／猿丸集Ⅱ・二四／俊賴髓脳・二五九／綺語抄・一七三／奥儀抄・三七三／和歌初学抄・一五一／袖中抄・二八一

【参考】 作者名「ひとまろ」とあるが、所載欄の万葉集では作者未詳歌、新古今集でも「よみ人知らず」とあり、人麿集諸本にもない。また元永本古今集・羈旅・四〇八の次に作者を「よみ人知らず」として載る。

〔以上五首担当 青木太朗〕

八五一 やたのゝのあさぢいろづくあらちやまみねのあはゆきさむくぞあるらし

【異同】 ナシ

【現代語訳】 矢田の野の浅茅が色づいていることだ。有乳山の峰の沫雪は寒々としているらしい。

【語句】○やた 奈良県大和郡山市矢田。石川県小松市矢田とする説もある。○あさぢ まばらに生えた茅萱。○あらちやま 越前国の歌枕。今の滋賀県高島市から福井県敦賀市に至る、いわば越路の途中にある山。有乳山。愛発山とも。万葉時代、不破、鈴鹿とともに三関と呼ばれた。「人心あらちの山になるときぞ契りこしちの道はくやしき」（古今六帖・九〇五）。○さむくぞあるらし 「らし」は明確な根拠に基づく推量。ここは浅茅が色づきはじめていることを根拠にしている。

【所載】新古今集・冬・六五七／万葉集・二二三五（旧二三三一）八田乃野之 浅茅色付 有乳山 峰之沫雪 寒零良之 ヤタノノアサヂイロヅクアラチヤマミネノアワユキサムクフルラシ やたののあさぢいるづくあらちやまみねのあわゆきさむくふるらし／夫木抄・七一四四／人麿集Ⅰ・一六三／人麿集Ⅱ・一七一／人麿集Ⅲ・二〇五／家持集Ⅰ・二三〇／家持集Ⅱ・一四三／秀歌大体・八九／和歌初学抄・一九四／詠歌大概・六〇

八五二 あすかぢはもみぢばながるかづらきの山にはいまぞしぐれふるらし

【異同】ナシ

【現代語訳】飛鳥川にもみじ葉が流れていることだ。葛城の山には今まさに時雨が降っているらしい。

【語句】○あすかぢは 大和の飛鳥川とする説と河内の飛鳥川とする説とがある。大和の飛鳥川は飛鳥山中に発して稻渚を経、細川を合わせて藤原宮址を斜めに横切り、寺川と曾我川の間を北流して大和川に合流する。一方、河内の飛鳥川は二上山の西麓に発して羽曳野市の飛鳥・駒ヶ谷を経、北西流して石川に合流する。二上山は葛城連山の一だから、河内の飛鳥川に流れるもみじ葉を見て推量したと考えるほうが理に合っている。○かづらきの山 大阪府と奈良県の境に連なる葛城連山の総称。○しぐれふるらし 「らし」については八五一番歌参照。もみじ葉が流れていることをこの場合は根拠にしている。

【所載】新古今集・秋下・五四一／万葉集・二二二四（旧二二二〇）明日香河 黄葉流 葛木 山之木葉者今之散疑 アスカガハモミチバナガルカヅラキノヤマノコノハハイマシチルラシ あすかがはもみぢばながるかづらきのやまのこのはいましちるらし／和漢朗詠集・三二四／夫木抄・六二八一／家持集Ⅰ・一三六／家持集Ⅱ・一二七／三十六人撰・五／秀歌大体・七八

【参考】発想や表現の類似した歌に、「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・秋下・二八四）や、「この河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし」（古今集・冬・三二〇）などが

ある。

八五三 なるかみのをとにのみきくまきもくのひばらのやまをけふ見つるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】評判が高く、噂に聞けばかりであつた巻向の桧原の山を、まさしく今日この目で見たことであつた。

【語句】○なるかみの 「音」の枕詞。「なるかみ」は雷の意。○まきもくのひばらのやま 「まきもく」は巻向。大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市穴師一帯。「ひばら」は桧原で、「三輪の桧原」「初瀬の桧原」など、このあたり一帯には桧の木立が多かつた。

【所載】拾遺集・雜上・四九〇／万葉集・一〇九六（旧一〇九二）動神之 音耳聞 巻向之 檜原山乎 今日見鶴鴨 ナルカミノオトニノミキクマキモクノヒハラノヤマヲケフミツルカモ なるかみのおとのみききしまきむくのひばらのやまをけふみつるかも／夫木抄・八五八六／人麿集Ⅰ・二二一／人麿集Ⅱ・一九二／人麿集Ⅲ・六八三／人麿集Ⅳ・一

八五四 いちしろくしぐれのふればつくしなるおほのゝ山もうつろひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】はつきりと時雨が降つたので、筑紫にある大野の山も色づきはじめてことだ。

【語句】○いちしろく 明白に。目立って。○つくしなるおほのゝ山 福岡県の太宰府北部にある山。大野山。また大城山ともいう。そのあたり一帯の総称として四王寺山とも。

【所載】万葉集・二二〇一（旧二二九七）灼然 四具礼乃雨者 零勿国 大城山者 色付尔家里 イチシロクシグレノアメハフラナクニオホキノヤマハイロヅキニケリ いちしろくしぐれのあめはふらなくにおほきのやまはいろづきにけり

【参考】所載欄の万葉集では「しぐれのあめはふらなくに」とあり、当該歌の「しぐれのふれば」と逆の形になっている。また「大野の山」は「大城の山」とあり、万葉集には注があつて、「大城の山と謂へるは、筑前国御笠郡の大野山の頂に在り、号して大城と曰へる者也」とする。

八五五 よをうしといとひし人は神なびのみむろのやまにいりにけるかな<sup>も</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中をつらい、厭わしいと言っていたあの人は、神無備の三室の山に入っていつてしまったことだ。

【語句】○よをうしと 「う(憂)し」は物事が思うとおりにならないことを嘆き、厭わしく思う心情を表す。つらい。わずらわしい。不快だ。○神なびのみむろのやま 「神なび」とは本来神のいらつしやる所の意で、神聖な森や山を示す普通名詞。「みむろ」あるいは「みもろ」も神の鎮座する御室の意で、ある特定の地を示す語ではなかったが、古今集の「竜田川もみぢ葉流る神なびのみむろのやまに時雨降るらし」(秋下・二八四)あたりが有名になったことから、次第に奈良県生駒郡斑鳩町にある三室山のことと考えられ、紅葉の名所として詠まれるようになった。しかしここは必ずしも特定の地と結びつけて解する必要はないかもしれない。

【所載】夫木抄・八八四四

〔以上五首担当 大養廉・久保木哲夫〕

八五六 ものゝふのたつといふなるすゞかやまならむかたこそきかまほしけれ

【異同】すゞかやま―すしかやま(御)

【現代語訳】武士が立っていると聞く鈴鹿山よ。その「鈴」が鳴るではないが、私がこの先どうなるのか、聞きたいものです。

【語句】○ものゝふ 上代は、朝廷に仕える全ての人、文武百官の意。平安時代以降、武士、つわもの。「ものふのたつといふなるませきにもとまらではるのこよひすぎぬる」(夫木抄・九五二二)。「養老令」軍防令には、関には武士を配置したと記されている。○すゞかやま 三重県と滋賀県との境にある鈴鹿峠付近の山々の称。東海道の難所の一つとされ、三関の一つである鈴鹿の関が置かれていた。「鈴」の連想で、「音」「鳴る」「ふる」などと共に詠まれることが多い。「すずか山うき世をよそにふりすていかになり行く我が身なるらむ」(新古今集・一六一三)。○ならむかた 自分の行く末がどうなるのか。「成る」に「鳴る」を掛ける。「鳴る」は鈴の縁語。参考欄の歌枕名寄では第四句「ならんさかこそ」。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄・四六三二に載る。

八五七 かぜふけばをきつしらなみたつたやまよはにや君がひとりゆくらむ  
かこのやまのはな子

【異同】ナシ

【現代語訳】古今六帖・第一帖「ぎふのかぜ」四三六番既出（作者名 かぐやまのはなのこ）。  
【所載】古今六帖・第一帖「ぎふのかぜ」四三六番既出

八五八 いにしへのことはしらぬをわれみてもひさしくなりぬあまのかご山

【異同】ナシ

【現代語訳】昔のことは知らないけれども、私が見始めてからでも長い間、変わることなくありますよ、あの天の香具山は。

【語句】○いにしへのこと 古代の神話時代のこと。香具山についての神話や伝説。所載欄の和歌童蒙抄では上二句は「いにしへのひとをばしらず」。○われみてもひさしくなりぬ 私が親しく見始めてからでも長い年月がたっている。「我見てもひさしく成りぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ」（古今集・九〇五）。○あまのかご山 天の香具山（あまのかぐやま）。大和三山の一つ。所載欄の他文献では「あまのかぐ山」「あめのかぐやま」。

【所載】続古今集・雑下・一七四六／万葉集・一一〇〇（旧一〇九六）昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山 イニシヘノコトハシラヌワレミテモヒサシクナリヌアマノカグヤマ いにしへのことはしらぬをわれみてもひさしくなりぬあめのかぐやま／人麿集Ⅱ・一九三／人麿集Ⅳ・二／和歌童蒙抄・一六六／古来風体抄・七七

八五九 わぎもこがゐなのは見せてなつぎやまつのゝ松原いつしかゆかむ  
たけちのくろ人  
カシメサン



【異同】ナシ

【現代語訳】愛しい人に猪名野を見せて、名次山や角の松原へいつ行こうか、早く行きたいものです。

【語句】○わぎもこが 所載欄の万葉集では「わぎもこに」。その方が意が通るので万葉集に従う。○あなの兵庫伊丹市を中心に広がる猪名川流域の平野。○なつぎやま 兵庫県西宮市名次町の丘陵。万葉集では「なすきやま」とも読む。○つの松原 兵庫県西宮市松原町津門の海岸。○いつしかゆかむ 一つになったら行こうか、早く行きたいものです。「いつしか」は副詞。待ち望む気持ちをこめて使う。所載欄の文献では「いつかしまさむ」（いつ見せようか、早く見せたいものです）となっている。

【所載】万葉集・二八二（旧二七九） 吾妹兒二 猪名野者令見都 名次山 角松原 何時可將示 ワギモコニナノハミセツナツギヤマツノノマツバライツカシメサム わぎもこにゐなのはみせつなすぎやまつののまつばらいつかしめさむ／和歌童蒙抄・七〇一

【参考】作者名「たけちのくる人」は所載欄の万葉集に一致する。和歌童蒙抄には作者表記なし。万葉集によると、高市黒人が妻を伴い、従者を連れて、摂津国を旅した時の詠。

八六〇 あふことをとをたふみなるたかし山たかしやむねにもゆる思は

【異同】とをたふみなる——とを遠江なる（大）

【現代語訳】「なかなか逢うことができない」という名の遠江国にある、高師山よ。その「たかし」ではないけれど、私の胸の思いの火は高く燃えているのです。

【語句】○あふことを 所載欄の夫木抄では「あふことは」。「あふことの雲井とほくてわがこひはいのちにかよふほどぞかなしき」（保憲女集Ⅰ・一四九）。○とをたふみ 正しくは「とほたふみ」。「とほつあふみ」の転。現在の静岡県西半部。（逢うことが）遠い意を掛ける。○たかし山 高師山。三河国渥美郡（愛知県豊橋市）と遠江国浜名郡（静岡県湖西市）の境にある山。上三句は「たかし」を導く序詞。○たかしやむねにもゆる思は 高いのですよ、胸に燃える思いの火は。「思（おもひ）」の「ひ」に「火」を掛ける。「火」「燃ゆ」は縁語。

【所載】夫木抄・八四三五

〔以上五首担当 三浦狭依〕

八六一 かくらくの<sup>ハッ</sup>とませのやまの山ぎはにいさよふくもはいもにかもあらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】とませの山の山際にただよう雲はいとしいあの人なのだろうか。

【語句】○かくらくの「かくらく」は「隠る」のク語法。隠れる場所の意。ここでは「とませ」にかかる枕詞的に用いられたもの。古今六帖・三四八四では「かくらくのとませの山をすそへらとよすめ神のまきしくれなる」。所載欄の夫木抄など、「はつせ」にかかる例もみえる。「はつせ」の枕詞「こもりく」の「隠りく」は山に囲まれた所の意。「隠口」。所載欄の和歌一字抄・袖中抄では「かくれぬの」。所載欄の万葉集歌「隠口能泊瀬山之」から発生した誤読か。○とませのやま 所載欄の文献では全て「はつせの山」。「泊瀬」の読みによるか。『平安和歌歌枕地名索引』は「はつせと同名歟」とする。「はつせ」は泊瀬・初瀬・長谷とも書く。初瀬川の峡谷に開けた、奈良県桜井市の一地区。泊瀬は墓所でもあった。万葉集の「隠口能泊瀬」は、今は「こもりくのはつせ」と読むのが一般的である。○山ぎは 空の、山に接する境目のあたり。○いさよふ雲 ぐずぐずして進みかねている雲。「いさよふ」は動かずに停滞している意。

【所載】万葉集・四三一（旧四二八）隠口能 泊瀬山之 山際尔 伊佐夜歴雲者 妹鴨有牟 コモリクノハツセノヤマノヤマノハニイサヨフクモハイモニカモアラム こもりくのはつせのやまのやまのまにいさよふくもはいもにかもあらむ／夫木抄・七八七○／人麿集Ⅲ・六三三／和歌一字抄・一〇五八／奥儀抄・五二八／袖中抄・九六〇

【参考】万葉歌の詞書によると、土形娘子（伝未詳）を火葬した煙を白雲に見立てて人麻呂が詠んだ歌。「ヤマギハ」の語は奈良時代にはなかった（西宮一民『万葉集全注』有斐閣、一九八四年）ので、万葉集の上句の現代語訳は、「（こもりく）泊瀬の山の山と山との間に」となる。また、類歌に万葉集・一四一一（旧一四〇七）「こもりくのはつせの山に霞立ちたなびく雲は妹にかもあらむ」がある。

八六二 ますかぢみゝるふち山はけふもかもしらつゆをきてみちふるらし

【異同】 みちふるらしーもみちふるらし（御・桂・大）

【現代語訳】（ますかがみ）みるふち山は今日も、白露が置いて紅葉が降っているらしいよ。

【語句】○ますかぢみ きれいに澄み、はつきり映る鏡。ますかがみ。ますみかがみ。ます鏡を見る意で「みなふち山（みるふち山）」の枕詞。○ゝ（み）るふち山 未詳。所載欄の他文献では「みなふち

山。「る」は「な」の誤写か。南淵山は多武峰の南方、飛鳥川上流の山。○しらつゆをきて しらつゆおきて。白露が置いて。白露は木の葉を染めるものと考えられていた。「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらむ」(古今集・二五七)。○みちふるらし 他本にならない「もみちふるらし」として解釈する。「ふるらし」は降っているらしい。

【所載】万葉集・二二一〇(旧二二〇六) 真十鏡 見名淵山者 今日鴨 白露置而 黄葉将散 マソカガミミナ  
ブチヤマハケフモカモシラツユオキテモミチチルラム まそかがみみなぶちやまはけふもかしらつゆおきても  
みちちるらむ／夫木抄・八八九五

八六三 むばたまのくろかみやまをあさこえてこのしたつゆにぬれにけるかな

【異同】 むはたまの―うは玉の(大) ぬれにけるかな―ぬれにけるかも(御・桂・大)

【現代語訳】黒髪山を朝越えて、木の枝葉から落ちる露に濡れてしまったことだな。

【語句】○むばたまの むば玉(ひおうぎの実)が黒いことから、「黒」「髪」「夜」などにかかる枕詞。「ぬばたまの」「うばたまの」とも。○くろかみやま 黒髪山。奈良市北端の佐保山丘陵に続く山地。日光市にある男体山や岡山県新見市の黒髪山とする説もあるが、特定はできない。○このしたつゆ 木の枝葉から落ちる露。既出歌(五九八番)の所載欄に掲げた万葉集では「山下露」。山下露は山の木の枝葉から落ちかかる露、あるいは山の下草に置く露。

【所載】古今六帖・第一帖「しづく」五九八番既出

八六四 夏ごろもうたしのやまのほとゝぎすなくこゑしげくなりまさるなり

【異同】 うたしのやまの―うたしめ山の(御・桂・大)

【現代語訳】夏ごろも打つといううたしの山のほととぎすが鳴く声は、ますます絶え間なくなつたことだ。

【語句】○夏ごろも 夏に着る単の薄い着物。「衣打つ」(布につやを出したり、糊をやわらかくするために砑で打つ)意で「うたしのやま」を導く。○うたしのやま 未詳。他本と所載欄の家持集の「うたしめ山」、夫木抄の「うたたね山」も未詳。陸奥国の「うたたねの森」は枕草子にある。○しげくなりまさる ますます絶え間なくなる。「しげく」は形容詞「しげし」(空間的・時間的にすまがない意)の連用形。下句は所載欄の家持集で

は「いまはきとときに（ママ）たちかへりなけ」、夫木抄では「いまはきとときに立ちかへりなく」となっている。島田良二『家持集全釈』（風間書房、二〇〇三年）では西本願寺本の本文「いまはきとよみ」をとり、「今は来て、声を響かせて何度も鳴け」と解している。

【所載】 夫木抄・八五・二／家持集Ⅰ・八四／家持集Ⅱ・七六

【参考】 拾遺集一二三番に「夏来れば深草山の郭公なくこゑしげくなりまさるなり」という類歌がある。

八六五 かへる山なにそもありてあるかひはきてもとまらぬなにこそありけれ  
いちはらのおほ君

【異同】 ナシ

【現代語訳】「帰る山」って何なのだ、存在している価値は。「来ても留まらないで帰る」という名だつたのだな。

【語句】 ○かへる山 今の福井県南条郡にある歌枕。鹿蒜山。「帰る」を連想して詠まれることが多い。「かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば恋しかるべし」（古今集・三七〇）。○なにそもありてあるかひは「ありてあるかひはなにそも」を倒置した形。（かへる山の）存在価値は何なのだ、という意を強めている。値うちの意味の「かひ」には山の縁語「峽」を掛ける。○きてもとまらぬなにこそありけれ 「帰る山」の「帰る」は、「都に」帰るのではなく「来ても留まらずにまた帰る」という名だと今気付いたよ。所載欄の古今集の詞書に「あひしれりける人の越の国にまかりて、年経て京にまうできて又帰りける時によめる」とある。

【所載】 古今集・離別・三八二／躬恒集Ⅰ・二八〇／躬恒集Ⅱ・一五六／躬恒集Ⅲ・三〇四

【参考】 作者名「いちはらのおほ君」とあるが、所載欄の古今集の作者名は凡河内躬恒で、躬恒集にもみえることから、作者は躬恒だと考えられる。「いちはらのおほ君」は市原王。生没年未詳。天智天皇五世の孫で安貴王の子。春日王の孫。

〔以上五首担当 三浦〕

八六六 しのぶやましのびにこえむみちもがな人のこゝろのおくもみるべく  
テカヨフ

【異同】 しのびにこえむ―しのひにこえて（大）  
テカヨフ

【現代語訳】 信夫山をこつそり越える道があればいいのになあ。あなたの心の奥も見られるように。

【語句】○しのぶやま 陸奥の歌枕。今の福島市あたりを「信夫」と言った。百人一首にも収められた源融の「陸奥のしのぶもぢずり」（古今集・七二四）の歌で有名な地。○しのびに 「しのぶ」「しのび」と同音反復で用いた。「しのびに」は隠れて、こっそり、の意。○みちもがな 道があるといいなあ。願望の意。○人のこゝろの「人のこゝろ」は古今集だけで十六例、三代集で四十四例を見いだせる。三代集時代に流行した語のひとつ。○おくもみるべく 奥も見ることができるように。心の奥から山の奥を連想し、そこから信夫山に関係づける。

【所載】新勅撰集・恋五・九四二／伊勢物語・一五段・二三

八六七 みな月のなごしのやまのよぶこどりおほぬさにのみこゑのきこゆる

【異同】ナシ

【現代語訳】水無月の、名越の山の呼子鳥は、（いくら名を呼んでも相手ではなく）大幣にだけ声が聞こえてくることだ。

【語句】○みな月の 「なごし（夏越）」を導く。夏越祓（なごしのはらへ）は六月祓ともいい、六月晦日におこなう大祓の行事。茅（ちがや）で作った輪をくぐり、人形（ひとがた）を作つて罪・穢れをうつし流し清めた。古今六帖には「夏越の祓」が立項されている（一〇九番歌参照）。○なごしのやま 所在不明。万葉集にも「莫越山」（一八二六（旧一八二二））があり、延喜式神名帳の安房国朝夷郡莫越山神社に擬する説もある（『新日本古典文学全集 万葉集』）。また五代集歌枕以降は土佐の歌枕とする。○よぶこどり 呼子鳥は古今伝受三鳥の一つで、カッコウ、ホトトギス、ツツドリのほか、猿という説もある。中ではカッコウとする説が有力か。春に詠まれることが多く、水無月の例は珍しい。○おほぬさにのみ おほぬさ（大幣）は、大祓の際に用いる大きな串につけた幣帛。「なごし」と「ぬさ」は縁語。古今集・七〇六（伊勢物語四七段）の「大幣のひくてあまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」の歌は、業平の好色ぶりを大幣にたとえた歌で、大幣は人々が自らに引き寄せて祈るものとして詠まれる。つまり当該歌でも、幣に祈るように、呼子鳥が名を呼んで祈る声は大幣には聞こえるが肝心の相手には届かない、の意か。

【所載】夫木抄・一八三六

八六八 わがこふるみのゝをやまのひとつまつちぎりしこゝろいまもわき<sup>す</sup>れず

【異同】ナシ

【現代語訳】私が恋しく思っている、美濃の御山のひとつ松、結んで約束したあの心は今も忘れてはいないのですよ。

【語句】○みのゝをやま 美濃の御山。岐阜県垂井町の南宮山（なんぐうさん）を指す。南宮神社の神体であることから「御山」と書いた。南宮神社は美濃国一宮であり、古来より信仰を集めていた。○ひとつまつ 一本松。その枝を変わらぬ契りの印として結んだ。馬内侍集に「ひとつ松結びけりともいまぞ知るとくる心はときはならじを」（二三）がある。

【所載】新古今集・恋五・一四〇八／夫木抄・一三六九四／伊勢集Ⅰ・三八一／伊勢集Ⅱ・三八五／伊勢集Ⅲ・四三一

八六九 しらまゆみいるさのやまのときはなるいのちかあやなこひひてやあらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】入佐山の常磐のような命なのか、無意味にも恋い続けているのだろうか。

【語句】○しらまゆみ 「いるさ」にかかる枕詞。射（い）と同音の地名にかかる。万葉集・一九二七（旧一九二三）に「白檀弓今春山に去く雲の逝きや別れむ恋しき物を」がある。○いるさのやまの 入佐山は但馬国の歌枕。「梓弓いるさの山は秋ぎりのあたるごとく」にや色まさるらむ（後撰集・三七九）。○ときはなる 万葉集では「常石有」で、大岩のように不滅のものだ、の意となる。なお、「ときは木」の意で用いる例が多いが、檀は落葉樹なのでここでは用いない。○あやな 「あやなし」の語幹。条理に合わないことを意味する。無意味に。わけもなく。○こひひてやあらん 諸本「こひひてやあらん」だが、衍字と解し、本文を「こひてやあらん」として解釈した。

【所載】万葉集・二四四八（旧二四四四）白檀 石辺山 常石有 命哉 恋乍居 シラマユミイソヘノヤマノトキハナルイノチナラバヤコヒツツヲラム しらまゆみいしへのやまのときはなるいのちなれやもこひつつをらむ／夫木抄・八一二七／家持集Ⅱ・三一六

八七〇 わがこひはみくらのやまにうつしてむほどなき身にはをきゐてどころなし

【異同】ナシ

【現代語訳】私の恋は、御蔵の山に移して、しまつてしまおう。たいした身ではない私は、身の置き所もないのだから。

【語句】○みくらのやま 御蔵山は所在不明であるが八代集抄では山城とする。○うつしてむ うつしてしまおう。「うつし（移し）」をき（置き）「は蔵の縁語。我が恋を蔵に移すという面白い表現がこの歌の眼目。○ほどなき身には 「ほど」は、身分や年齢・技量などを指す語。「ほどなき身」で「たいした身では無い」の意となる。○をきどころなし おきどころなし。置き所がない。「秋」とにかくつるいねはつみつれど老いける身ぞおき所なき」（拾遺集・一二四）では稲は積むが我が身は置き所がない、と詠む。そのように保管する場合（当該歌では蔵）があるものと、置き所が無いもの、との対比を詠んでいる。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 杉本まゆ子〕

八七一 つのくにのまつかねやまのよぶこどりなくといまくといふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】待兼山の呼ぶ子鳥は（その名の通り「待ち兼ねて呼ぶ」のだから）鳴いても「今すぐ行くよ」と言う人もいない。（やはりあの人は来ない）。

【語句】○つのくに 摂津国。○まつかねやま 例がない。ただ、「まちかねやま」と同じとすれば、摂津国の歌枕。能因歌枕に「摂津」とあり、和歌初学抄、八雲御抄も同じ。山の名に「待ち兼ね」をかける。「こぬ人」をまちかねやまのよぶこどりおなじころにあはれとぞきく」（堀河百首・二二二）。○よぶこどり 人を「呼ぶ」をかけて使う。「大和には鳴きてか来らむ呼子鳥きさのなかやま呼びぞ越ゆなる」（万葉集・七〇）とあるのが古い例。具体的に何を指すかは、「はこ鳥」「つつ鳥」「郭公の異名」など諸説あつて不明。古今集の秘説三鳥の一つ。「をちこちのたづきも知らぬ山なかにおぼつかなくもよぶこどりかな」（古今集・二九）から春の鳥であることとはわかる。○なくといまくと 鳴くと今来（いまく）と。「鳴くと」の「と」は逆接の仮定条件接続助詞。「とも」に同じ。「あらしのみ吹くめる宿に花すき穂に出でたりとかひやなからむ」（蜻蛉日記）。「今来」は「すぐに来る」「すぐに行く」の意。所載欄の夫木抄では下句「なといまくとはいふ人のなき」とある。

【所載】夫木抄・一八三七

八七二 春くさをむまくひやまをこえてくるかりのつかひはやどりすぐなり  
人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】昨山（くひやま）を越えて春やつてくる雁の使は（故郷からのたよりかとなつかしく思っているが、）この宿の上を通り過ぎてゆくようだ。

【語句】○春くさを 「むま」まで「昨山」を導く序。春に「萌え出た草を馬が喰ひ」という続き。○くひやま 昨山。山城国綴喜郡昨岡神社。現在、飯岡。木津川の西。○かりのつかひ 春、北よりやつて来る雁。匈奴に捕われた蘇武が南へゆく雁の足を書結び放った。それが天子に得られその生存を知られたという故事（漢書・蘇武伝）による。「ながつきのそのはつかりの使ひにも思ふころは聞こえこぬかも」（万葉集・一六八（旧一六一四）、「あまとぶや雁のつかひにいつしかもならのみやこにことつてやらん」（拾遺集・三五三）。

【所載】万葉集・一七一二（旧一七〇八）春草 馬昨山自 越来奈流 雁使者 宿過奈利 ハルクサヲウマクヒ ヤマヲコエクナルカリノツカヒハヤドリスギヌナリ はるくさをうまくひやまをこえくなるかりのつかひはやどりすぎぬなり／和歌一字抄・一〇九二／奥儀抄・四六四／袋草紙・七五三

【参考】作者名「人まろ」は、万葉集で人麿歌集にあるとする歌と一致する。万葉集巻第九・一七一三（旧一七〇九）のあとの「右柿本朝臣人麻呂之歌集所出」という記述の指す範囲（一六八六―一七一三（旧一六八二―一七〇九）にある。

八七三 よのなかをなげきにくゆるかまど山はれぬおもひをなにしそめけむ

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中を嘆き、（したことを）悔い、（うつうつと）晴れない思いをどうしてし始めたのか。

【語句】○なげきにくゆる 嘆きに悔ゆる。これに「投木に燐る」をかけた。「投木」は火にくべる木。「燐る」は「ふすぶる」の意。○かまど山 筑前国筑紫郡に在る宝湯山の別名。かまど神社がある。「筑紫へまかりける時に、竈山のもとに宿りて侍けるに、道つらに侍ける木に古く書き付けて侍ける／春はもえ秋はこがるゝ竈山／元輔／霞も霧も煙とぞ見る」（拾遺集・一一八〇）。○おもひ 「思ひ」に「火」を掛ける。○しそめ 終止形「し



そむ」は、動詞「す」と始める意の「そむ」の複合語。しはじめる。

【所載】 夫木抄・三六一三

【参考】「思ひ」にかけた「火」、「投木に燠ゆる」は「かまど」の縁語。所載欄の夫木抄では第三句「けふり山」。

八七四 しほりしてゆか<sup>ま</sup>むしものをあひづ山イルヨリマドフミチトシリセバ

【異同】 底本ハ下句ヲ行間ニ小サクカタカナデ補入。桂宮本ハ下句ミセケチ。右傍ニヒラガナデ「いるよりまどふ道としりせは」ト書ク。大久保本ハ全部ヒラガナデ一行ニ書ク。

【現代語訳】（どこを通過してきたのか目印に）枝を折って行けばよかったのに。会津山は入るなりわからなくなつてしまふ道と知っていたなら。

【語句】 ○しほり しをり、枝折。木の枝を折つて道しるべとすること。○ゆかましものを 「まし」は反実仮想の助動詞。現実には枝折してゆかなかつたが、その反対であつたならと仮想する。「ものを」は逆接を表す。○あひづ山 会津山。磐梯山のこと。「会津山すその原にともしすとほぐしに火をまかけあかしつる」（堀河百首・四二三）。

【所載】 夫木抄・八七〇七

八七五 オモヒイデ、ミチキツレトシミカハヤマ君にしあらねば猶ぞ恋しき

【異同】 底本ハ上句カタカナデ前歌下句ノカタカナ書キノ左ニ並ベテ細字書キ入レ。桂宮本ハ一首全体ヲ行間ニカタカナデ補入ノカタチ。大久保本ハ一首ヲヒラガナ書キデ行間ニハサム。

ミチキツレトシ—ミチキツレトモ（桂）、みちきわれとし（大）

【現代語訳】 思出して山道をやってきたが、みかは山は、あなたではないので、いつそう恋しさが募る。

【語句】 ○ミチキツレトシ 意味不明。御所本は底本に同じ。「シ」は「モ」の誤写か。「道来つれども」の意で訳した。○ミカハヤマ みかは山。所在不明。「かなしさはこのはのみかは山里のかけひの水の流れをもとへ」（林下集・二五四）。

【所載】 ナシ

【参考】 底本と御所本は、この歌と前歌の、二首の書き様は同じ。

〔以上五首担当 平野由紀子〕

八七六 いはで山いはでながらの身のはては思ひしことゝたれかつげまし

【異同】ナシ

【現代語訳】「いはで山」の名のように、言わないままで過ごした我が身の終わりの時には、私が深く思っていたと誰があの人に告げてくれるだろうか、誰も告げてくれまい。（そう思うと、この思いを口に出不きすることが苦しく、悲しい。）

【語句】○いはで山 陸奥国にある山。岩手山。「いはで」にかかる枕詞。「いはでのやま」は「言はで」と掛詞となる例が多い。「思へどもいはでの山に年をへてくちやはてなん谷の埋木」（千載集・六五二）。○いはでながら 言わないままで。○身のはて 身の行く末。最期。「命さへあらばみつべき身の果てを忍ばむ人のなきぞ悲しき」（新古今集・一七三八）。○たれかつげまし 誰が告げるだろうか、いや誰も告げない。「か」は反語。「まし」は仮定の上にたつて仮想する意を表す。「うぐひすの谷よりいづるこゑなくは春くることをたれか知らまし」（古今集・一四）。

【所載】ナシ

八七七 おぐら山みねふみならしきにしかばけふはなにともおもほえぬかな

【異同】ナシ

【現代語訳】をぐら山の峰を踏みしめて来たのだから、人々が暗いというその道も、今日の私には何とも思わないことだ。（いよいよ恋しい人に会えるという期待で。）

【語句】○おぐら山 をぐら山。小倉山・小椋山。山城国、現在の京都市右京区嵯峨の有名な山だが、その他大和国、現在の桜井市付近にも、また紀伊国（能因歌枕）出雲国（出雲風土記）にもある。ここでは「小暗」の意をこめたか。○ふみならし 平らになるほど同じ所を往来して。または、踏み均らして。ここでは「均す」の意をとったが、恋人と会える喜びを心に秘めて、地を踏み足音も高鳴る意を響かせたともいえる。「相坂の関のいはかどふみならし山たちいづる桐原の駒」（拾遺集・一六九）。○おもほえぬ 思われない。「おもほえ」は「おもほゆ」の未然形で、自然に思われるの意。何を「おもほえぬ」のかは明確でないが、この山の名から連

想される暗さへの怖れを指すか。

【所載】ナシ

八七八 みわのやまいかにまちみむとしふともたづぬる人もあらじと思へば  
伊勢

【異同】 あらしと思へは―あらしと思ふ(桂)

【現代語訳】私はどのように人を待ちつつ三輪山を眺めていればよいというのだろう。何年たっても訪ねる人などあるまいと思うので。

【語句】○みわのやま 三輪の山。大和国、今の奈良県桜井市にある山。夜毎に来る男の衣につけた糸をたどって男の正体を確かめたという三輪山説話で名高い。「わがいははみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(古今集・九八二)により、山麓の杉立てる門の女が、杉を目印にして訪れる男を待つという恋歌の詠法の一つの型を生ぜしめた。○いかにまちみむ 私はどのように「たづぬる人」を待ち、「みわのやま」を眺めようか。古今集の注釈書には「まちみむ」の主語を三輪山の神とし、作者をそれになぞらえているとする説もある。その場合「三輪山はどんなに待つているのだろう。(私はどんなに待つているだろう。)」となる。

【所載】古今六帖・第五帖「わする」二八七〇／古今集・恋五・七八〇／新撰和歌・三五八／金玉集・六三／伊勢集Ⅰ・三／伊勢集Ⅱ・三／伊勢集Ⅲ・三／俊成三十六人歌合・一一／時代不同歌合・五七／三十人撰・四〇／三十六人撰・三七／深窓秘抄・一〇〇／俊頼髓脳・六六／和歌童蒙抄・一八三・八五六／袖中抄・三一一、三六〇／西行上人談抄・二二／近代秀歌・九七／井蛙抄・一八〇

【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。古今集の詞書「仲平朝臣あひしりて侍りけるをかれがたになりければ、父が大和守に侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける」や、伊勢集Ⅰの詞書「かく人のむこになりければ、いまはとはじと思ひてかく言ひやりける」により詠歌事情が知られる。

八七九 おとは山おとにきゝつゝあふさかのせきのこなたにとしをふるかな  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたのことを噂にはしばしば聞き、会いたい気持ちをかきたてられながら、逢坂の関を越えて行くのがためらわれて、関のこちら側にとどまって何年も過ぎてしまったことだ。

【語句】○おとは山 山城国と近江国の境、現在の京都市山科区にある音羽山。同音から「音」の枕詞。更に「音」から時鳥の声を連想して時鳥の名所としても詠まれた。また、この山は逢坂関の南に位置し、都から東国へ下るコースにも隣接していたので、当該歌のように逢坂関が詠みこまれることもあった。○おとにきゝつゝ 「音に聞く」は噂・風聞を耳にする意。「つつ」は反復・継続の意的接続助詞。○あふさかのせき 近江国滋賀郡にあった関所。大化二（六四六）年設置、延暦十四（七九五）年一時廃止、天安元（八五七）年に再設置。東国との往来で都と鄙を分かつ場所として多くの歌が詠まれた。○せきのこなた 関のこちら側。関を越えていない、すなわち恋の場で逢瀬が実現していない状態を示す。○としをふるかな 年を過ごしていることだ。所載欄の定文歌合では「人を待つかな」。

【所載】古今集・恋一・四七三／左兵衛佐定文歌合・二七／時代不同歌合・七五／西行上人談抄・一八／井蛙抄・二〇七、三二四

【参考】古今六帖は作者を「つらゆき」と記すが、貫之集にはこの歌は見えない。所載欄の古今集と定文歌合では作者を在原元方とするが、元方集断簡にもこの歌は見えない。

八八〇 のちせ山のちにあひみむと思へばぞしぬべきものをけふまでもふる

【異同】ナシ

【現代語訳】後瀬山の名のように、後に逢おうと思えばこそ、死ぬはずのところを今日までも生きながらえているのだ。

【語句】○のちせ山 若狭国の歌枕。現在の福井県小浜市南方の後瀬山をさす。同音から「のち」にかかる枕詞。○のちにあひみむと 「あひみる」は男女が関係を結ぶ意。○思へばぞ 思うからこそ。所載欄の新拾遺集では「思ふにぞ」、万葉集では「おもへ（ふ）こそ」。○しぬべきものを 恋の苦しさ故に死ぬはずのところを。○けふまでもふる 今日までも生きながらえているのだ。所載欄の他文献では「けふまでもあれ」「けふまでもいけれ」。

【所載】新拾遺集・恋四・一二三二／万葉集・七四二（旧七三九）後湍山 後毛将相常 念社 可死物乎 至今日毛生有 ノチセヤマノチモアハムトオモフコソシヌベキモノヲケフマデモアレ（イケレ） のちせやまのちも

あはむとおもへこそしぬべきものをけふまでもいけれ

〔以上五首担当 斎藤熙子・三浦〕

八八一 かゞみやま山かきくもりしぐるれどもみぢは猶ぞてりまさりける  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】鏡山は山一面曇つてしぐれているが、紅葉はさらに輝きを増していることだ。

【語句】○かゞみ山 近江国の歌枕。滋賀県南部竜王町と野洲市の上に位置するなだらかな山。標高三八五メートル。「鏡」の掛詞となる場合が多い。○かきくもり 空が一面に曇つて暗くなる状態。「くもり」は「鏡」の縁語。○てりまさりける 照り輝いていることだ。紅葉は、「ひさかたの月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ」（古今集・一九四）など、月や月光と相俟つて「照りまさる」と詠まれることが多いが、当該歌はかきくもりしぐれているが、逆に紅葉が照りまさるという趣向である。

【所載】古今六帖・第六帖「紅葉」四〇六九／後撰集・秋下・三九三／拾遺抄・冬・一三六／拾遺集・冬・二一五／素性集Ⅰ・二五／素性集Ⅱ・四〇

【参考】作者名「そせい」は、後撰集と一致し、素性集に見える歌である。拾遺集、拾遺抄の作者名は貫之。

八八二 おほえ山かすみたなびきかぜふきてわれふねとめむとまりとめずも

【異同】ナシ

【現代語訳】大江山に霞がたなびき、風が吹いている、私が舟を停める港はわからないよ。

【語句】○おほえ山 大江山。丹波国の歌枕。京都府北西部、丹波・丹後地方の境をなす山。標高八三三メートル。千丈ヶ岳ともいう。山陰道の老ノ坂峠付近の大枝山とは異なる。「山」の縁で「木」「茂み」「雲」「月」などを取り合わせた叙景歌が多く、「舟」「泊」と組合わされるのはこの歌のみ。○とまりとめずも 「とまり」は船の停泊するところ。船着き場。港。「も」は詠嘆の終助詞。「とまりとめずも」は解しにくいいため、所載欄の万葉集歌に拠り「とまりしらずも」として解した。

【所載】古今六帖・第三帖「とまり」一九七一／万葉集・一二二八（旧一二二四）大葉山 霞蒙 狭夜深而

吾船將泊 停不知文 オホバヤマカスミタナビキサヨフケテワガフネハテムトマリシラズモ おほばやまかす  
 みたなびきさよふけてわがふねはてむとまりしらずも、一七三六(旧一七三二) 母山 霞棚引 左夜深而 吾  
 舟將泊 等万里不知母 オモヤマニカスミタナビキサヨフケテワガフネハテムトマリシラズモ おほばやまか  
 すみたなびきさよふけてわがふねはてむとまりしらずも／夫木抄・八五四二

八八三 くらはしの山のゆきにもあらなくにまつ人なきに身のふりぬらん

【異同】まつ人なきに―まつ人さきに(御・桂・大)

【現代語訳】倉橋の山の雪でもないが、どうして待つ人もいないのに我が身は年をとってしまったのだろう。

【語句】○くらはしの山 三四二番歌参照。大和国の歌枕。奈良県桜井市倉橋の東南の最も高い音羽山説、西方の多武峰説、多武峰北方の崇峻天皇梯岡陵近くの峰とする説などがある。万葉集では白雲が立ち、月の出を遮る高峻な山とされたが、平安時代以後「くら」に「暗」を掛け、暗い山とするイメージが定着した。三四二番歌では山が高いことと月が歌われるが、当該歌では雪が歌われ、「年をへてむなくみえしくらはしの山に白雪ふりぞつみける」(千穎集・四〇)などにその影響がみられる。○あらなくに 動詞「あり」の未然形＋打消の助動詞「ず」のク語法「なく」＋助詞「に」。……でもないのに。「わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞ悲しき」(古今集・一八六)。○まつ人なきに 待つ人もいないのに。恋人もなく、一人で年をとってしまった。底本以外は、すべて「まつ人さきに」となっており、雪よりも先にまず人が年をとってしまったという意味になっている。○ふりぬらん 「ふり」は雪の縁語。雪が「降り」、身が「古り」を掛ける。「らん」は現在の事実についての原因、理由を推量する。八八五番歌参照。

【所載】ナシ

八八四 すみぞめのくらまのやまにいりし人まどふ／もかへりき<sup>な</sup>む

【異同】くらまのやまに―くらふの山に(大)

【現代語訳】暗いという鞍馬の山に入ってしまった方、迷いながらも帰ってきて下さいな。

【語句】○すみぞめの 墨染の色が暗いことから「鞍馬」にかかる枕詞。相手が墨染の衣を着る僧であることを示唆する。○くらまのやま 鞍馬の山。山城国(現在は京都府左京区)の歌枕。都の北東に位置し、平安時

代以後、王城の北方鎮護として信仰を集めた鞍馬寺がある。「昔よりくらまの山といひけるはわがごと人も夜や越えけむ」（後撰集・一一四〇）の如く、「鞍馬」の「鞍」には暗い意の「暗」を掛けることが多い。○まどふ／＼も「まどふ」は道に迷う。さまよう。暗い山で道を求めて迷う。所載欄の後撰集、大和物語の歌では後に仏道修行的意味合いが込められる。参考欄参照。○きなゝむ 動詞「来」の連用形＋完了助動詞「ぬ」の未然形（強意）＋終助詞「なむ」（願望）。どうか来て下さい。

【所載】後撰集・恋四・八三二／今昔物語集・一五八／大和物語・一五六

【参考】作者名はないが、後撰集では平中興の娘の歌とする。「浄蔵くらまの山へなんいるといへりければ」という詞書があることから、浄蔵が鞍馬に修行にゆく時に中興の娘がよこした歌と考えられるが、大和物語（一〇五段）では、物怪にわずらっていた中興の娘が、験者である浄蔵と恋をし、浄蔵が鞍馬に籠もった時によこした歌とあり、今昔物語集（巻三〇第三）も大和物語とほぼ同じ話を載せる。

八八五 わがやどはみやこのたつみしかぞすむよをうち山と人もいふらん  
きせんほうし

【異同】わかやとは―わか庵は（大）

【現代語訳】私の住まいは都の東南、このように（やすらかに）住んでいる。どうして世を憂しとして住む宇治山だと人もいうのだろう。

【語句】○やど 家。すみか。所載欄における全ての歌の初句は、大久保本と同じ「わが庵は」となっている。○たつみ 辰巳（東南の方角）。宇治山は都の東南にある。○しかぞ そのように。このように。「ぞ」は強意。「しか」は副詞。代名詞「し」に状態を表す接尾語「か」がついてできた語で、叙述される内容を指示する。「しかぞはさぞといふ詞にて、心はかくぞといふに通ず」（古今余材抄）。「鹿」が掛詞になっているとする説もある。○うち山 宇治山。京都府宇治市の南東部にあり、喜撰山ともいう。標高四一六メートル。「宇治山」の「宇」に「憂」を掛ける。○人もいふらん 「らん」は現在の事実について、言外にその原因、理由を疑う意。どうして……だろう。所載欄における全ての歌の第五句は「人はいふなり」。

【所載】古今集・仮名序、雑下・九八三／秀歌大体・一〇七／百人秀歌・一四／百人一首・八／袋草紙・一三三／悦目抄・一〇七／井蛙抄・三九七／十訓抄・一八

【参考】作者名「きせんほうし」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野方子〕

八八六 みちのくにあぶくまがはのあ<sup>た</sup>な<sup>〇</sup>にや人わすれずの山はさがしき

【異同】ナシ

【現代語訳】阿武隈川を渡ると向こうには忘れず山、その山道は険しいのであろうか。逢って後に人に忘れられないというのは、難しいことなのであろうか。

【語句】○みちのくに 「みちのく」に同じ。和名抄「陸奥」に「美知乃於久」とある。東海道・東山道の「道の奥」の意で、現在の東北地方をいう。所載欄の夫木抄に、初句「陸奥の」とあるように、和歌では「みちのく」が多く、「みちのくに」は一般的に散文で用いられる。「みちのくに」のぶることの洩り出でてつきなとり川騒ぐ波かな（肥後集・一七五）は、「みちのくに」を詠んだ数少ない歌であるが、久保木哲夫『肥後集全注釈』（新典社、二〇〇六年）は、「みちのくに」（助詞）では解しえず、「しのぶ（信夫）」の枕詞的用法と説明する。当該歌も、「あぶくま川」にかかる枕詞的用法と解す。○あぶくまがは 阿武隈川。陸奥国の歌枕。「あぶくま川」に「逢ふ」を掛ける。阿武隈川は、福島県旭岳から流れ出し北流して宮城県に入り太平洋にそそぐ。○人わすれずの山 「人わすれず」と「わすれずの山」の掛詞。枕草子「山は」段に「わすれずの山」が見える。蔵王山の古名。現在の地図にも蔵王連峰に「忘れず山」が確認できる。○さがしき 「さがし」は、山などの険阻なさまを言う。ここは、人事のけわしく、平穏でないことの意を掛ける。

【所載】夫木抄・八二六七／和歌初学抄・一八三

八八七 かたときもみねばこひしきおほえ山なげきこ<sup>す</sup>らきる人はよきかは

【異同】なげきこ<sup>す</sup>らきる—なげきこえする（御・大）

【現代語訳】ほんの少しの間も逢えないでいると恋しい思いでいっぱいになる。私をこんな嘆きに固まらせるあなたは、善き人でしようか、いやそうではありますまい。

【語句】○かたときもみねばこひしき この初二句が同じ歌に、「かた時も見ねば恋ひしき君をおきてあやしやいく夜ほかに寝ぬらん」（後撰集・恋二・六七七）がある。○おほえ山 「おほえ山」（大江山）に「多し」を掛ける。「大江山」については八八二番歌参照。○なげきこ<sup>す</sup>らする 「なげき」は、薪の意の「投げ木」と「嘆き」



を掛け、「こらする」の「こら」は、木を切る意味の「伐（こ）る」の未然形と「凝（こ）る」の未然形とを掛ける。「する」は使役の意。「大原や炭焼き来たる妹をして小野の山なるなげきこらせじ」（相模集・三七三）歌が参考になる。○よきかは「よき」は、「善き」に「斧（よき）」を掛ける。「かは」は反語の意。「斧」「伐る」は、「投げ木」の縁語。同様の縁語仕立ての歌に、「はかるめることのよきのみおほかればそらなげきをばこるにやあるらん」（金葉集・四九九）。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄「丹波国 大江山」七六四五に、「六帖」歌として当該歌を引くが、下句を「なげきしらすな人のこるかは」とする。

八八九 春きぬといまはいぶきのやまべにもまだしかりけりうぐひすのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来たと今は言っても、伊吹山の辺りにもまだなのでした。春を告げる鶯の声は。

【語句】○いぶきのやまべ 「いぶきの山」（伊吹の山）に「言ふ」を掛ける。伊吹山は、和歌初学抄に近江、八雲御抄に美濃とある。滋賀県と岐阜県の境に位置する山。古来、葉草の艾（もぐさ）の産地として有名。「なほざりにいぶきの山のさしも草さしも思はぬことにやはあらぬ」（古今六帖・三五八八）。○まだしかりけり 「未だし」は、まだその時期ではない、の意。○うぐひすのこゑ 鶯の鳴き声は待望の春の訪れを告げるとされる。

【所載】夫木抄・四六〇

【参考】夫木抄・二〇三二に、古今六帖の二帖にある歌として、「春めきぬ今はいぶきの山べにもまだしかりける山吹の花」と、わずかに表現が異なる歌が見える。

八八九 いづこにぞありときゝしいはたやまきみがこゝろのなれるなりけり

【異同】きみがこゝろの―君は心の（大）

【現代語訳】どこそこにあると聞いた岩田山、それは他ならぬあなたの頑な心が成った山だったのですね。

【語句】○いづこにぞあり どことかにある。そのことの不確実さを言う。「ありしだに憂かりしものを逢はずしていつこにそふるつらさなるらん」（女房三十六人歌合・一五・中務）。○いはたやま 所在不明。「いはた山」

を詠んだ歌は、他には、「いはたやまよにあげがたき冬の夜のあまの関守たれか据ゑけん」（好忠集・二九七）の一首しか見出せなかった。『古今和歌六帖標注』には、「異本にいはき山とあるよろし」と、感情のない「石木」（木石）の意味の「いはき山」として、例歌や漢籍を引用する。参考欄参照。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄「未勘国上」九二二三に「六帖」歌として当該歌をあげ、上句「いづくにかありとききしやはきやま」として「磐城山」に入れ、国を諸説あげて未決とする。

八九〇 むかしわがたとてにしてしひえの山心よわくはかへるものかは

【異同】たとてにしてし—ことてにしてし（御・大）

【現代語訳】「第二句の意味が判然としないので、正確な訳が示せない」昔、自身から言い出して修行に入った比叡山である。だからその意志が弱くなつて古里に帰るなんてあろうか、いやそれはない。

【語句】〇たとてにしてし 意味不通。御所本・大久保本に「ことでにしてし」、所載欄の夫木抄に「かどで（門出）にしてし」とある。「言出にす」（自分の口から言い出して）として現代語訳した。〇ひえの山 比叡山は滋賀県と京都市の境の山。天台宗の大本山延暦寺がある。こゝは山そのものではなく、修行する寺院などを指すか。〇心よわくは 「心弱し」は、意志が弱い、意。〇かへるものかは 帰ったりするものか、いやしない。「かは」は、反語を表す。所載欄の夫木抄「いづるものかは」。

【所載】夫木抄・八九三四

〔以上五首担当 犬養悦・加藤静子〕

八九一 わがためになにのあたごのやまなれやこひしとおもふ人のいるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしに対してなんの仇敵のつもりなのか、あのあたごの山は。どうしてわたしの恋しく思う人が、あの山に入るのだろう。

【語句】〇わがために わたしにとって。わたしに対して。〇あたごのやま 愛宕山。山城国の歌枕。現在は京都市右京区に属す。平安京の西北郊外にそびえて、山城と丹波の境をなす山であった。「なにのあた（仇）」に「愛

宕の山」を掛けている。「仇」は、自分に対して害をなすものこと。○人のいるらん なぜ山に入るのであるうか。この「らん」は、原因・理由を推量する助動詞。上に「なぜ」を補って解するとわかりやすい。人が「山に入る」のはこの世を厭うてのこと、とする通念があった。次歌八九二番参照。

【所載】夫木抄・八七三二

【参考】「わがためになにのあたとか春風の惜しむと知れる花にしも吹く」（古今六帖・三九三、伊勢集・三一〇）と、初・二句が類似している。

八九二 よをうしとおもひいれもあかはだの山はみをこそかくさざりけれ<sup>ど</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】この世をつらいと思つて逃れ入ったけれども、あかはだの山はこの身をかくしてはくれなかったなあ。

【語句】○よをうしとおもひいれども この世をつらいところだと思つて山に入つてみたけれども。世を厭うて山に逃れ入ると詠む歌は多い。「よをうし」といひし人は神なびのみむろの山に入りけるかも」（古今六帖・八五五）。○あかはだの山 「あかはだ」は、なにもまとはぬまるはだか、赤裸の意、ここは草木が生えず地肌の露出した山の形容か。「衣だに二つありせばあかはだの山に一つはかさましものを」（伊勢物語・二四二）ただしこれは定家本にはない歌である。夫木抄は「あかはだ山 大和」として例歌二首をあげているが、所在を大和とする根拠は不明。能因歌枕、八雲御抄にこの山の名は見えない。○みをこそかくさざりけれ 人がそこへ逃れ入つても、「あかはだの山」には草木がないから、人の身をかくさない。「かくさざりけり」の主語は「あかはだの山」。「かくす」は、この場合他動詞。

【所載】ナシ

【参考】第二句「おもひいれども」の「ど」は、「れ」と「も」の間の右傍に、細字傍記の形で書き入れられている。

八九三 うらみてもしるしなけれどしなのなるあさまの山のあさましや君

【異同】ナシ

【現代語訳】恨んでもかいのないことだけれど、ほんとにひどいではありませんか、あなた。

【語句】○うらみてもしるしなけれど 「しるし」は効験、ききめ。恨むことによつてなにか効果があるわけではないが。○あさまの山 浅間山。現長野県北佐久郡から群馬県吾妻郡にまたがる活火山。歌枕としての所在は信濃国とされてきた。「しなのなるあさまのやまの」は同音繰り返しによつて「あさまし」を導き出す序詞。○あさましや あまりにひどい。あんまりだ。「あさまし」は事の善悪にかかわらずその程度の甚だしいことを言うが、ここでは相手の仕打ちに対する強い恨みの念の表明。「や」は強調。

【所載】ナシ

八九四 いつかからかしらべのころゑのたえにけんことひきやまのおとのきこえぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】いったい、いつから琴の演奏の音が絶えてしまったのだらう。ことひき山の音が聞こえないよ。

【語句】○いつから 「から」は時間的または空間的に動作の起点を表す格助詞。ここは時間的起点を表している。このような場合、上代では「より」が使われ、「から」が使われることはあまりない。○しらべのころゑ 樂器の演奏の音。○ことひきやま 出雲国風土記に「琴引山」の名が見え、現島根県飯石郡にある琴引山がこれに比定されているが、この山が歌枕としての「ことひきやま」であるかどうかは定かでない。能因歌枕、夫木抄などは「ことひきやま」の所在を「但馬」としているが、その根拠は不明。

【所載】夫木抄・八六六七

【参考】あるいは、恋人からの便りの絶えたことを恨む歌か。

八九五 ころもでの色まさりつゝしなのなるくらゐの山は君がまに／＼

【異同】ナシ

【現代語訳】衣の色が次第に濃くなられて、あなたの位階はこれからもお心のままに高くなってゆくことでしょう。

【語句】○ころもでの色 位階を表わす衣（きぬ）の色。礼服の大袖、朝服の袍または襖の表の色は、衣服令により位階相当の色が定められていた。すなわち、一位は深紫、二・三位は浅紫、四位は深緋、五位は浅緋、六位

は深緑、七位は浅緑、八位は深縹、初位は浅縹、とされ、上位の階の方が色が濃かった。従って「ころもでの色まさる」とは、位階の上昇を意味する。○くらゐの山 位山。飛驒国の歌枕。飛驒高地のほぼ中央に位置する山。笏の材料となる櫟（いちい）の産地であったといい、歌では「位（位階）」に掛けて詠まれる。この歌は「しなのなるくらゐの山」と詠んでいるが、八雲御抄は、「位山」を「飛驒」とし、能因歌枕は「美濃」、五代集歌枕は「飛驒又在信濃」として一定しない。所在の認識は不確かであつたらしい。○君がまに／＼ あなたの思うがままに。下に「高くなってゆくであろう」の意が省略されている。

【所載】万代集・三一一九

【参考】だれかの位階昇叙を祝った歌であろう。

〔以上五首担当 山下〕

八九六 雨はふるみちはまどひぬやましなのかさとoryamaのいづこなるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】雨は降るし、道には迷ってしまった。やましなの笠とり山はどこなのだろう。早く笠を手執っているという笠とり山へ行つて笠を着けたいものだ。

【語句】○まよひぬ 「まよふ」は思い悩む意。ミセケチの「まどふ」は方向を見失う意。上に「みちは」とあるので「まどふ」の方が適切か。異同はないが所載欄の夫木抄・和歌初学抄は「まどひぬ」である。○やましな 山科。京都市東山区山科町。京都から東国へ通じる門戸にあたる。○かさとoryama 笠取山。山城国の歌枕。滋賀県と京都府の境界をなす山。同山は「山城国」の歌枕だが、山城国の山科に笠とり山があるので、「山科の笠とり山」といったもの。歌では笠を手取っている意だが、逆に笠を盗る意にも用いられた。「五月雨にかさとoryamaはこえゆかじ花いろごろもかへりもぞする」（続詞花集・一三二）。

【所載】夫木抄・八三三三／和歌初学抄・一八四

八九七 むかしみし人をぞいまはわきれゆくやつくろ山のふもとばかりに

【異同】ナシ

【現代語訳】昔親しかった人を、今は忘れてゆくのだなあ、あのはるかに遠いやつくろ山の麓ほどにも思い出

しはしない。

【語句】○みし人 男女の間で親しく交際していた人。恋人。夫。妻。○やつくろ山 不明。所載欄の夫木抄は「あぶくま山」。類歌に「むかしみし人をぞいまはよそにきくあさくら山のくもあはるかに」（夫木抄・八七六六）がある。夫木抄の「あさくら山」の例歌では「よそにきく」「よそに見る」など、自分と縁のない遠い山として詠んでいる。それから類推すると、「やつくろ山」も自分よりはるかに遠い存在の山という意か。○ふもとばかりに 麓ほどに。麓ぐらいに。下に「忘れてしまっている」の意がこめられている。

【所載】夫木抄・八七七三

八九八 しるしなきものならなくにあしがらの山のやまずげやまずこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしの熱い思いにあの人は応えてくれないものではないが、どういうわけか、私はたえまなく恋しいことだなあ。

【語句】○しるしなき 効き目がない。効果が無い。「しるしなき思ひやなぞと葦鶴のねになくまでに逢はずわびしき」（後撰集・六四五）。○ならなくに ……ではないのに。○あしがらの山 足柄山。相模国の歌枕。箱根外輪山の金時山の北にある山。東海道の相模国と駿河国を往来する時必ず越える所。○やまずげ 山菅。野生の菅。「あしがらの山のやまずげ」は「やまず」を言いだすための序詞。「あしびきの山の山すげやまずのみ見ねば恋しき君にもあるかな」（拾遺集・七八〇）。

【所載】ナシ

八九九 あはたやまこゆともこゆとおもへども猶あふさかははるけかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】栗田山は越えようとすれば越えられると思うけれど、やはりそのさきの逢坂山は遠くてあの人と逢うのはむずかしいことだなあ。

【語句】○あはたやま 栗田山。京都市東山区華頂山から日の岡に至る山の総称。一説に古代は愛宕・宇治両郡の境界につらなる山地の総称。○こゆともこゆ 越えようとすれば越えられる。○あふさか 逢坂。近江国

の歌枕。近江国と山城国の国境にある山。関所がある。地名としての「逢坂」には男女の「逢ふ」意を掛けている。「人しれぬ身は急げども年をへてなどこえがたき逢坂のせき」（後撰集・七三二）。

【所載】夫木抄・八七二八／和歌初学抄・一八五

九〇〇 いなり山すぎのむらだちおしなべてこのもとごとにくるよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】稲荷山に群生している杉、そのすべての木のもとごとに、あの人が来るという方法があればよいなあ。

【語句】○いなり山 山城国の歌枕。京都市伏見区。山麓、山腹、頂上に伏見稲荷三座がある。○すぎのむらだち 杉の群生していること。稲荷山の杉は「しるしの杉」と言われ、参詣人がこの枝を折って帰り自邸に植え、根付くと願い事が叶うとされた。「稲荷山おほくの年ぞこえにける祈るしるしの杉をたのみて」（蜻蛉日記・一〇三三）。○おしなべて 一緒に。○このもとごとに 木の根元ごとに。来る回数が多いことを祈る。「世をいとひこのもとごとくにたちよりてうつぶしぞめのあさのきぬなり」（古今集・一〇六八）。○くるよしもがな 私の所へ来る方法があればよいなあ。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 林〕

九〇一 みやこよりにしにありてふかまどやまけぶりたえせぬこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】都から西にあると言う竈山は煙が絶えない、私も絶えることのない恋をすることだよ。

【語句】○かまどやま 竈山。筑前国の歌枕。現在の福岡県太宰府市宝満山のこと。「煙」などの語とともに歌に詠まれることが多かった。古くから柱に書き付けてあった上句に元輔が下句を付けた「春はもえ秋はこがるかまど山／霞も霧も煙とぞ見る」（拾遺集・一一八〇、重之集・二二）という連歌がある。「けぶり」、「恋」の「ひ」に掛けた「火」は、「かまど」の縁語。○たえせぬ 竈山から立つ煙が絶えない意と、恋の思いが絶えない意の両意を掛け、自分の恋情が尽きないことを、竈山の煙が絶えないことによそえた。「いつとてかわが恋や

まむちはやぶるあさまのたけの煙絶ゆとも」(拾遺集・六五六)。当該歌では、「みやこよりにしにありてふかまどやまけぶり」までが「たえせぬ」を導く序。

【所載】夫木抄・八三六五

九〇二 ちはやぶる神がきやまのさかきばに<sup>は</sup>しぐれにいろもませらざりけり

【異同】ませらざりけり—まさらざりけり(御・桂・大)

【現代語訳】神垣山の榊の葉は、時雨に降られても、色も増さなかったよ。

【語句】○ちはやぶる 「神」もしくは神に関する語にかかる枕詞。○神がきやま 神のいます山。神がき(垣)は、神域を区別するしるしとなる垣。神楽歌の表記に「加美加幾」と見えるので、「神がき」と濁らなかつたとも思われる。当該歌の「神垣山」を伊勢国の神路山とする説(『日本国語大辞典』第二版、和歌文学大系『躬恒集』)もある。○さかきは 榊の葉。榊は神事に使う常緑樹。ツバキ科のサカキがその代表。「神がきのみむろの山のさかきは神のみまへにしげりあひにけり」(古今集・一〇七四)。○しぐれ 時雨。秋から冬にかけて降るにわか雨。木の葉を紅葉させるものとされた。「しぐれの雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色付きにけり」(万葉集・二二〇〇(旧二一九六))。○ませらざりけり 他本に「まさらざりけり」とあるのに拠って解釈した。増さなかったよ。

【所載】後撰集・冬・四五七／躬恒集IV・二六四

【参考】古今六帖に作者名はなく、後撰集でもよみ人知らずとし、躬恒集にはIVのみに見える。常緑の榊でも神域にあるので、木々の葉を色づかせる時雨にあたっても紅葉しないと詠んだ歌。

九〇三 雨ふればみかさのやまのこのしたもぬれぬいほりもなしとこそきけ

【異同】ナシ

【現代語訳】雨が降ったので(笠という名を持ち、濡れないはずの)三笠山の木々の下でも、濡れてしまった。濡れずにすむような庵もないと聞くと。

【語句】○みかさのやま 三笠山。御蓋山とも。大和国の歌枕。奈良市東郊、春日大社の背後の山。「雨」「月」などの語とともに歌に詠まれることが多かった。「しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり」



(万葉集・一五五七(旧一五五三))。○このした 木の下。「みさぶらひ御笠と申せ宮木野の木の下露は雨にまされり」(古今集・一〇九一)。

【所載】 夫木抄・一四三六五

【参考】 笠という名を持ち、濡れずにすんでもよさそうな三笠山の木の下でも濡れてしまうという発想による歌。「雨」と「かさ」は縁語。「さして来と思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな」(後撰集・一〇二九)。上三句は「ぬれ」を導く序詞。「あられふる交野の御野のかりころも濡れぬ宿かす人しなければ」(詞花集・一五二・藤原長能)という例のように、上句からは「濡れてしまった」の意で続くか。

九〇四 つのくにのいくたのやまのいくたびかわがいたづらにゆきかへるらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 津の国の生田の山、(その「いく」ではないけれど、)幾たび、私はむなしく行つてはまた帰るのだろうか。

【語句】 ○つのくに 津の国。撰津国。現在の大阪府西北部と兵庫県東南部。○いくた 生田。撰津国の歌枕。現在の兵庫県神戸市中央区の辺り。「生田の森」「生田の池」などがよく詠まれた。二句目までは「いくたび」を導く序。「津の国の生田の池のいくたびかつらき心を我に見すらん」(拾遺集・八八四)。

【所載】 ナシ

九〇五 人ごころあらちのやまになるときぞちぎりこしちのみちはくやしき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あの人(の)の心が、(有乳の山ではないけれど)私から離れてしまった今こそ、契り続けて通ったこれまでのことは、悔やまれることだ。

【語句】 ○あらちのやま 有乳(愛発)山。越前国の歌枕。現在の福井県敦賀市の南部で滋賀県との境界に近い山。「雪」や「越路」とともに歌に詠まれることが多かった。当該歌では、「離(あ)る」を掛ける。「うち頼む人の心はあらち山越路くやしきたびにもあるかな」(金葉集・五九六)。○こしち 越路。北陸道。現在の福井・石川・富山・新潟県。「こし」は、「越」と「来し」とを掛ける。

【所載】 夫木抄・八七二〇

〔以上五首担当 長戸〕

九〇六 つらしとてもろはの山にかくるともわれやまびこになりてたづねむ

【異同】 なりてたづねむ―なりてたつらん（大）

【現代語訳】 私のことを薄情だと言って葉のたくさん繁る「もろ葉の山」に隠れたとしても、私は山彦になってあなたを尋ねるつもりです。

【語句】 ○つらし 情がない、薄情であるの意。ここでは、相手がこちらのことを「つらし」と思っている。○もろはの山 未詳。所載欄の夫木抄では国名を「山城」とし、歌枕名寄では「未勘国」とする。「もろは」は「諸葉」すなわち多くの葉の意。○やまびこになりてたづねむ やまびこになってあなたの所在を尋ねよう。「やまびこ」は、山中などで起こる音の反響を擬人化した言い方。

【所載】 夫木抄・八九五五

九〇七 しもつけやふたごの山のふたごゝろありける人をたのみけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 下野のふたごの山ならぬ、ふた心、浮気な心を持っていた人を頼りにしてしまったことだなあ。

【語句】 ○しもつけやふたごの山の 下野国の「ふたご山」。現在の栃木県日光市足尾町と群馬県みどり市東町沢入の境にある二子山か。「ふたご山ともにこえねどもすがみそこなる影をたぐへてぞやる」（後撰集・一三〇七）。詞書に「下野にまかりける女に、鏡にそへてつかはしける」とある。初・二句は「ふたごころ」を導く序詞。○ふたごゝろ あだし心。浮気心。

【所載】 夫木抄・八六四五

九〇八 われをのみいはせのやまにこるなげきくやしともえぬひぞなかりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】私だけがあれこれと言われ、まるで岩瀬の山の木を切った後で投げ木を集めるように嘆いてばかりで、「残念なことだ」と物思いの火に燃えない日のないことであるよ。

【語句】○いはせのやま 大和国、竜田川の東側にあり対岸の三室山に対する岩瀬の森付近の山か。能因歌枕では撰津国とする。「いはせ山谷のした水うちしのび人のみぬまは流れてぞふる」(後撰集・五五七)。ここでは「言は」を掛ける。○こるなげき 木を「伐(こ)る」に、寄り集まる意の「凝る」を、「投げ木」に「嘆き」を掛ける。「なげきこる山としたかくなりぬればつらづ多のみぞまつつかれる」(古今集・一〇五六)。○もえぬひ ぞなかりける 苦しい思いをしない日はない。「ひ」は「日」と「火」を掛ける。「なげき」「もえ」「ひ」は縁語。

【所載】ナシ

九〇九 ふじのねをたかみかしこみあま雲のいさりびばかりたなびくもの あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】富士の嶺が高く畏れ多くて、天雲も漁火のようにほのかにたなびいていることよ。

【語句】○いさりびばかり 「いさりび」を、「ほのか」を導く序として用いる用例のあることから、漁火のよ  
うにほのかに、の意で解す。「いさり火のよるほのかにかくしつ有りへばこひのしたにけぬべし」(後撰集・  
六八二)。なお所載欄の万葉集での漢字表記「伊去羽斤」の「去」を「さり」と読んだか。

【所載】万葉集・三二四(旧三二二) 布土能嶺乎 高見恐見 天雲毛 伊去羽斤 田菜引物緒 フジノネヲタカ  
ミカシコミアマクモモイユキハバカリタナビクモノヲ ふじのねをたかみかしこみあまくもいゆきはばかりた  
なびくものを

【参考】作者名「あか人」とあるが、所載欄の万葉集では高橋虫麻呂と伝える。

九一〇 なつてしもいろかはらねばときはなる山には秋もしられざりけり べ

【異同】ナシ

【現代語訳】必ずしもすべての色が変わるわけではないから、この常緑の山では秋の訪れも知られないのだよ。

【語句】○なべてしも 「なべて」は、総じて、すべて、の意。「梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪

のなべて降れば」(古今集・三三四)。「しも」は、下に打消を伴い部分否定。必ずしもすべての色が変わるわけではない。○いろかはらねば 「ねば」は打消「ず」の已然形「ね」に接続助詞「ば」の付いたもの。「天の川浅瀬しらなみたどりつつ渡りはてねば明けぞしにける」(古今集・一七七)。

【所載】新続古今集・秋下・五六六／貫之集Ⅰ・五三

〔以上五首担当 青木〕

九一一 かくばかりうつろふ色のこければやにしたつたのやまといふらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】これほどまでに紅葉する色が濃いので、錦に見立てて、錦を裁つ、竜田山というのであろうか。

【語句】○うつろふ色の「うつろふ」は紅葉する意。○こければや 濃いので……か。○にしたつたの このままでは意不明。後掲の後撰集などには「錦たつたの」とあり、「にしに」は「にしき」の誤写であろう。現代語訳はこれによって訳した。「錦裁つ」に「竜田の山」を掛ける。

【所載】後撰集・秋下・三八二／友則集・二六

【参考】後撰集には、

たつた山をこゆとて

とものり

かくばかりもみづる色のこければや錦たつたの山といふらんとあり、歌本文は友則集も同じ。

九一二 みてもおもひみずてもおもひおほかたはわが身ひとつやものおもふやま

【異同】ナシ

【現代語訳】逢つてもつらく思い、逢わなくてもつらく思い、おおよそ、わが身ひとつがもの思う山なのかしら。

【語句】○みてもおもひ 逢つた場合でも、やがては別れなくてはならず、そのことがつらい、の意か。○みずても 逢わなくても。○ものおもふやま 途方に暮れている自分自身をたとえているのであろう。夫木抄・八九六〇に「物おもひの山、陸奥」とあり、「見てもおもふ見ぬにも思ふふたまはるか心ひとつにものおもひの山」という、よみ人知らずの歌を挙げる。

【所載】 万代集・二二六一

九一二 くらぶ山くらしとなにはたてね<sup>れ</sup>どもいもがりといはぶよるもこえなん

【異同】 いもかりといはゝーいもかりといはく(御)

【現代語訳】 くらぶ山は、その名のように暗いと評判にはなっているけれども、恋人のもとにというのでしたら、夜だつて越えて行つてしまふでしょう。

【語句】 ○くらぶ山 京都鞍馬山の古名といわれるが、はつきりしない。「秋の夜の月の光しあかければくらぶの山も越えぬべらなり」(古今集・一九五) などのように、「暗し」あるいは「比ぶ」などとともに用いられることが多い。○なにはたてれども 名には立つているけれども。評判にはなっているけれども。○いもがり いも(妹)のもとに。「いも」は妻や恋人、あるいは姉妹など、男が女を親しんでいる語。

【所載】 ナシ

九一四 しとみ山おろしのかぜのはやければかぜにはつねになきてこそふれ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 山から吹きおろす風が激しいので、風にはいつも泣いて過<sup>こ</sup>していることです。

【語句】 ○しとみ山 夫木抄に「しとみ山、紀伊」とあり、当該歌とともに俊頼の「しとみ山風はおろせどほととぎす声はこもらぬ物にぞありける」を挙げる。葩は上下に開閉するものなので、「おろす」を導くための、いわば枕詞的用法か。○はやければ 激しいので。参考欄参照。○なきてこそふれ 「ふれ」は下二段活用動詞「経(ふ)」の已然形で、泣いて過<sup>こ</sup>していることだ。

【所載】 夫木抄・八九一一

【参考】 相手のつれなき、すげなきを恨んでいる恋の歌か。千載集・恋二・七〇八に見える源俊頼の有名な、うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬものを  
などが参考になろう。

九一五 わがこひはおほえのやまのあきかぜはふきてしそらのこゑにぞあ<sup>りけ</sup>る

【異同】あきかせは—あきかせの(大)

【現代語訳】私の恋は、大江山の秋風が吹きすぎた、空の声のようなものでした。ただむなく吹いては消えていくばかりです。

【語句】○おほえのやま 百人一首で有名な「大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」(金葉集・五五〇)の場合もそうだが、京都市西京区大枝にある「大江山」のことか、福知山市北方にある酒吞童子で有名な「大江山」のことか、いずれとも決しがたい。また、なぜ「わが恋」を詠む歌に「大江の山」が関係するのか、それもわかりにくい。○あきかぜは 初句に「わがこひは」とあり、また三句で「あきかぜは」とあるのは不可解。異同欄に見える「あきかぜの」でも落ち着かないが、一応「ふきてし」の主語と認め、こちらを採用した。「秋風」にあるいは「飽き」をひびかせるか。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 大養廉・久保木〕

九一六 わかれてはいくらのやまをこえぬればあふことかたくなりもてくらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】お別れして、生倉の山を越えてしまったので、お会いすることも次第に難しくなってくるでしょう。  
【語句】○いくらのやま 「いくら」は長門国豊浦郡の生倉。現在の下関市西部の伊倉。数量を表す「幾ら」と掛けて用いられることが多いが、ここでは「いく」に「別れて」行く」を掛ける。○あふことかた 逢うことが難しく。「あふことのかたの」今はなりぬれば思ふがりのみゆくにやあるらん」(金葉集・五〇二)。○なりもてくらむ 『新編国歌大観』にこの一例のみ。「なりもてく」は、「次第に……となってくる」意。

【所載】ナシ

九一七 おほはらやをしほの山もけふしこそ神世のこともおもひいづらめ  
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】大原の小塩山も今日こそ、神代のことを思い出していることでしょう。

【語句】○おほはらや「大原の」「大原にある」の意。大原は京都市西京区大原野町。奈良の春日大社を勧請した藤原氏の氏神である大原野神社がある。○をしほの山 小塩山。大原野神社の背後にある山。○けふしこそきょうという日こそ。「し」は強意。所載欄の他文献では古今集をはじめほとんどが「けふこそは」。○神世のこと 神代のこと。大原野神社の祭神であり、藤原氏の祖神である天児屋根命（あめのこやねのみこと）が、皇祖瓊々杵命（にぎのみこと）の降臨の先導を務めたことを指す。

【所載】古今集・雜上・八七一／業平集Ⅰ・一／業平集Ⅱ・三五／業平集Ⅲ・一／業平集Ⅳ・二五／和歌初学抄・一七五／六百番陳状・四四、一四四／古来風体抄・二八六／井蛙抄・三八四／世継物語・六四／伊勢物語・一三九／大和物語・二七〇

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。古今集などによると、二条后（藤原高子）が大原野神社に参詣した折に詠まれた歌。伊勢物語、大和物語では「神世のこと」に業平と高子の昔の恋愛関係もこめていることになっている。

九一八 秋のよの月のひかりしきよければこねの山のうちさへぞてる

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の月の光が清らかで美しいので、箱の名の付く箱根の山の内側まで照り映え、輝いています。

【語句】○はこねの山 神奈川県と静岡県のある山。「箱」を掛ける。○うち 内側。箱の内側。○てる 美しく輝く。照り映える。「あめふればかさとり山のもみちばはゆきかふ人のそでさへぞてる」（古今集・二六三）。

【所載】ナシ

九一九 もみぢせぬときはの山はふくかぜのおとにや秋をきゝわたるらん  
きのよしもち

【異同】ナシ

【現代語訳】古今六帖・第一帖「あきの風」四一九番既出。

九二〇 あづさゆみいるさの山を秋ぎりのあたるごとくや色まさるらん  
むねゆきのあそん

【異同】 いるさの山を―いるさの山は（大）

【現代語訳】 入佐の山を秋霧が当たる度に、紅葉の色が濃くなるのでしょうか。

【語句】 ○あづさゆみ 弓の縁で「射る」と同音の「入る」にかかる枕詞。○いるさの山を 「入佐山」は但馬国の歌枕。「いる」に「射る」を掛ける。所載欄の後撰集では「いるさの山は」、宗于集では「いるさの山の」。○あたる ここでは「霧が」かかる「意」。「あたる」「射る」は「弓」の縁語。○色まさる 色が濃くなる。「春深くなりぬる時の野べみれば草の緑も色まさりけり」（古今六帖・一一三六）。

【所載】 後撰集・秋下・三七九／宗于集・二三

【参考】 作者名「むねゆきのあそん」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

九二一 しらつゆはうつしなりけりみづとりのあをばのやまの色づくみれば  
みはらのおほきみ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 白露は、移し染めの染料だったのだな。青葉の山が色付くのを見ると。

【語句】 ○しらつゆ 白露。○うつし 「うつし」は、草木の花の汁などを含ませた紙を生地の上に置いて染める「移し染め」の染料。「移し紙」「移し花」ともいう。○みづとりの 鴨の羽の色が青いところから「青羽」と同音の「青葉」にかかる枕詞。

【所載】 古今六帖・第一帖「八月」一六八番既出

【参考】 古今六帖・一六八番の所載欄に掲げた万葉集・一五四七（旧一五四二）と作者名が一致する。

九二二 あめふらばきむとおもひしかさの山人になきせそぬれはぬるとも  
いその神のおとまろ



【異同】ナシ

【現代語訳】雨が降ったら私が着ようと思っていた笠の山よ、その笠を他人には着せてくれるな。たとえびつより濡れてしまおうとしても。

【語句】○あめふらば 雨が降ったら。「ふら」「ふる」の未然形 + 「ば」は仮定条件を示す。○きむとおもひし 着ようと思っていた。「し」は過去。笠は「きる」ものであった。「あて宮見給ひて、蓑虫つける花折らせ給ひて、それが下に笠著せたる物ども立てて」(宇津保物語・梅の花笠)。○かさの山 奈良市の三笠山とする説と、桜井市の笠山とする説がある。いずれにせよ、「笠」の名を持つ山に対して、遊戲的に呼びかけた歌。○ぬれはぬるとも ぬれにぬれたとしても。助詞「とも」は不確定な判断で終止する。

【所載】万葉集・三七七(旧三七四) 雨零者 将蓋跡念有 笠乃山 人尔莫令盖 霑者漬跡裳 アメフレバササムトオモヘルカサノヤマヒトニササスナヌレハヒツトモ あめふらばきむとおもへるかさのやまひとになきせそぬれはひつとも

【参考】作者名「いその神のおとまろ」は所載欄の万葉集に「石上乙麿朝臣」とあり、一致する。

## 山どり

九二三 雲のゐるとをやまどりのよそにてもありとしきけばわびつゝぞぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】雲のかかる遠い山の山鳥がそうであるように、あなたがよそにいつも無事でいると聞くので、つらく思いながらも独り寝をします。

【語句】◎山どり キジ科の鳥。日本固有種で山地にすむ。オスの尾はとても長い。俊頼髓脳に「山鳥といふ鳥の、雌、雄はあれど、夜になれば、山の尾をへだてて、ひとつ所には臥さぬものなれば、夜の長く、たへがたく思ふらむ」とあるように雌雄が峰を隔てて別々に寝るとされ、独り寝の喩えに用いられた。○雲のゐる 雲のかかる。「とをやまどりの」までが「よそ」を導く序詞。「雲のゐる」という表現は、当該歌と、深窓秘抄で壬生忠見作とする「雲のゐる越のしら山おいにけりおほくの年の雪つもりつつ」(六一)が早い例。○とをやまどり とはやまどり。遠山にいる山鳥。○ありとしきけば 無事でいると聞くので。○わびつゝぞぬる かえすがえすつらく思いながらも独り寝る。「相坂の嵐のかぜはさむけれど行方しらねば侘びつゝぞ寝る」(古今集・九八八)。

【所載】新古今集・恋五・一三七

九二四 あしひきのやまどりのをのしだりをのながくしよをわがひとりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】山鳥の尾のしだれた尾のように長い長い夜を、私一人で寝ることだ。

【語句】○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○しだりを しだれた尾。上三句は「ながくし」を導く序詞。○ながくしよ 長々し夜。山鳥の尾の「長々し」さに、ひとり寝の夜の「長々し」さをかける。○わがひとりぬる 私一人で寝ることだ。所載欄の諸文献は万葉集同様「ひとりかもねむ」とする。

【所載】拾遺集・恋三・七七八／万葉集・二八一三(旧二八〇二) 足日木乃 山鳥之尾乃 四垂尾乃 長永夜乎  
一鴨将宿 アシヒキノヤマドリノヲノシダリヲノナガナガシヨヲヒトリカモネム あしひきのやまどりのをの  
しだりをのながながしよをひとりかもねむ／和漢朗詠集・二三八／人麿集Ⅰ・二〇七／人麿集Ⅱ・三三三／俊頼  
髓脳・二六二／俊成三十六人歌合・二／時代不同歌合・三／三十人撰・八／三十六人撰・八／秀歌大体・九三／  
百人秀歌・三／百人一首・三／綺語抄・六一〇／和歌童蒙抄・七八三／奥儀抄・三五〇／柿本人麻呂勘文・四六  
／袖中抄・五一五／和歌色葉・一二〇／近代秀歌・九一／詠歌大概・九七

九二五 秋風のふきよるごとにやまどりのひとりしぬればものぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風の吹き寄る、その夜毎に、山鳥のように独り寝をするとももの悲しくなることだ。

【語句】○ふきよるごとに 秋風の「吹き寄る」に「夜」を掛ける。○ものぞかなしき もの悲しくなる。

【所載】夫木抄・一二七三〇

〔以上五首担当 杉本〕

九二六 ゆふされば君をまつちやまどりのなくくぬるをたちもきかなん

【異同】君をまつち―きみをまつちの(御・桂・大)

【現代語訳】夕方になると、あなたを待って待乳山の山鳥のように鳴きながら寝るのを、耳をそばだてて聞いて

ほしい。

【語句】○ゆふされば 夕方になると。「夕去れば君きますやと待ちし夜の名こりぞ今もいねがてにする」(万葉集・二五九三(旧二五八八))。○まつちやまどりの 待乳山(真土山)。御所本以下の「まつちのやまどりの」に拠って解す。「まつちのやま」は、大和国の歌枕。奈良県五條市と和歌山県橋本市の境にある。「いであが駒早くゆきこそまつち山待つらむ妹を去きてはや見む」(万葉集・三一六八(旧三一五四))など、待つと関連して詠まれることが多い。「まつちのやま」の「やまどり」の意。○なくくぬる 泣きながら寝る。「相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見め」(古今集・七四)。○たちもきかなん 耳をそばだてて聞いてほしい。「なん」(なむ)は詠えの動詞。

【所載】 夫木抄・八四五七

九二七 はなのちることやかなしきかすみたつたつたの山のやまどりのこゑ  
ふぢはらののち風

【異同】 ナシ

【現代語訳】 花の散ることが悲しくて鳴いているのだろうか。春霞の立つ、竜田の山の山鳥の声が聞こえてくるのは。

【語句】○たつたの山の 「かすみ」が「た(立)つ」により「竜田山」を導いているが、竜田山は勿論、紅葉の名所なので、霞と関連づけた使用例は少ない。但し、万葉集に、「朝霞止まずたなびく竜田山船出せむ日は吾恋ひめかも」(二一八五(旧二一八一))がある。

【所載】 古今集・春下・一〇八／新撰和歌・一〇九／家持集Ⅰ・六六／家持集Ⅱ・三〇六／興風集Ⅰ・七一

【参考】 古今集ではこの歌は藤原後蔭の作とする。

九二八 あしひきの山のたえまにつまこふとしかなん<sup>き</sup>まさるこゑきこゆなり  
猿

【異同】 しかなん<sup>き</sup>まさる—しかなんまさる(御・桂・大)

【現代語訳】 (あしひきの) 山々の途切れているところから、相手を恋うと、鹿がさかんに鳴いている声が聞こ

えてくることだ。

【語句】◎猿 霊長目のサル。歌語では「ましら」。古来身近な動物で、厩の守り神として飼われたり（厩猿信仰）したが、和歌ではもっぱら鳴き声の哀切な響きを詠む。これは「巴東三峽猿鳴悲し 猿鳴三声涙衣を霑（うるお）す」（芸文類聚・巻九五）などの漢詩文が大きく影響している。○あしひきの 山にかかる枕詞。○山のたえま 山の途切れているところ。切れ目。「たえま」（絶え間）との組み合わせとして、雲・霧・糸・花・松などとの組み合わせで詠まれているが、三代集前後に「山の絶え間」の表現は見あたらない。○しかなきまさる そのようにどんな強く鳴いている。「鹿」と、「そのように」の意の「しか」とが掛けられ、「まさる」に「猿」がこめられており、この歌が猿の項にあるのは、この物名的な位置づけによる。

【所載】和歌童蒙抄・八二一

九二九 わびしらにましらなくきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ  
みつね

【異同】けふにやはあらぬ―けふにやあらぬ（大）

【現代語訳】そんなに心細げに猿よ、鳴くな。この峽のある山が、（法皇をお迎えするという）甲斐のある今日ではないか。

【語句】○わびしらに 心細げに。○ましら 猿。九二八番歌「猿」の項参照。○かひ 「峽（かひ）」と「甲斐」とを掛ける。「峽」は山と山とに挟まれた所。所載欄の古今集には「法皇西川におはしましたりける日、猿山のかひに叫ぶといふことを題にて詠ませたまうける」とあり、当該歌は延喜七（九〇七）年九月十一日、宇多法皇の大堰川御幸の際、題を九つ設けたうちの「猿、峽になく」題で詠まれたものである。御幸がある「甲斐」と「峽」を掛けている。○けふにやはあらぬ 今日ではないのか、まさに今日であるよ。「やは」は反語。

【所載】古今集・雑体・一〇六七／和漢朗詠集・四六一／躬恒集Ⅰ・四四／躬恒集Ⅲ・二〇五／躬恒集Ⅳ・二四／躬恒集Ⅴ・六五

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

九三〇 こゝろあらばみたびふたゝびなくこゑをものおもふ人にきかせざるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】心があるのならば、何度も何度も鳴く猿の声を、物思いに耽っている人にどうして聞かせないのだろう。

【語句】○こゝろあらば 物事の風流・雅を解する心を持つているならば。動物や植物に人間と同じく風流を解する心があるなら、と用いる。「ふかくさののべの桜し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ」（古今集・八三二）。○みたびふたゝび ここでは、何度も何度も、の意。「ひととせにふたたび」など、数を重ねる時は、一・二が多いが、ここでは、三度二度とする。○なくこゑを なく猿の声を。○きかせざらん 所載欄に掲げた躬恒集などから、「きかせざらん」（きかせないでくれ）の誤写と解した。

【所載】躬恒集Ⅰ・四五／躬恒集Ⅲ・二〇六／躬恒集Ⅳ・二五、四一二／躬恒集Ⅴ・六六

【参考】九二九番歌と同時の詠であることが所載欄の躬恒集によってわかる。

〔以上五首担当 杉本〕

九三二 ゆふさればおぐらのやまになくしかのこよひはなかずいねにけらしも  
しか

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると小倉山に鳴く鹿のいつもの声が今宵は聞こえない、寝てしまったらしい。

【語句】◎しか 鹿。山中で雌鹿を求めて牡鹿の鳴く哀切な声を、上代、平安時代の人々はよく聞いていた。萩の花を踏みしだき、萩を鹿の妻とも歌う。主として秋の題材。○ゆふされば 夕方になると。○けらし「けるらし」の約。○おぐらのやま をぐらのやま。奈良県桜井市今井谷のあたり。〔倉 村上方峰名小倉〕『大和志』。

「岡本宮に近い多武峰の端山」『大和志考』。

【所載】続古今集・秋下・四四四／万葉集・一五一五（旧一五一）暮去者 小倉乃 山尔鳴鹿者 今夜波不鳴 寐宿家良思母 ユフサレバヲグラノヤマニナクシカノコヨヒハナカズイネニケラシモ ゆふさればをぐらのやまになくしかはこよひはなかずいねにけらしも、一六六八（旧一六六四）暮去者 小椋山尔 臥鹿乃 今夜者不鳴 寐家良霜 ユフサレバヲグラノヤマニフスシカノコヨヒハナカズイネニケラシモ ゆふさればをぐらのやまにふすしかしこよひはなかずいねにけらしも／夫木抄・四五八六／古来風体抄・九一／井蛙抄・三一四

九三二 夏のゆくをじかのつゝつかのまもみねばこひしき君にもあるかな  
野 人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】ほんのわずかのまも会えないと恋しくてならないあなたなのだなあ。

【語句】○夏のゆくをじかのつゝ 夏野行く雄鹿の角の。夏の鹿は角が生え代わって、新しい角は短い。初句・二句は「つかのま」を導く序。○つかのま 少しの間。「つか」は束。古代の長さの単位。一握りの幅の長さ。○みねばこひしき君にもあるかな 会えないと恋しいあなたであることよ。所載欄の万葉集では「いもがこころをわすれておもへや」とある。

【所載】古今六帖・第二帖「なつ」一一四一／新古今集・恋五・一三七四／万葉集・五〇五（旧五〇二）夏野去小壮鹿之角乃 束間毛 妹之心乎 忘而念哉 ナツノユクラシカノツノノツカノマモイモガココロワスレテオモヘヤ なつのゆくをしかのつゝつかのまもいもがこころをわすれておもへや／人麿集Ⅰ・七／人麿集Ⅱ・三四三／人麿集Ⅲ・四四九／人麿集解題『古筆学大成17』白鶴美術館蔵『手鏡』伝為家筆切／綺語抄・一三七／柿本人麻呂勘文・七三

【参考】作者名「人まろ」は万葉集に一致する。しかし、下句の相違を重視すれば同一歌とはいえないかもしれない。

九三三 なくしかのこゑうらぶれぬときはいまは秋とやいはむはぎのはなさく

【異同】ナシ

【現代語訳】鳴く鹿の声がさびしげに変わった。時は今秋となったと言おうか。萩の花の咲く。

【語句】○うらぶれぬ 動詞「うらぶる」は心の拠り所をなくして力を落とす意。「雁来れば萩はちりぬとさをしかの鳴くなる声もうらぶれにけり」（古今六帖・九四五）。「ぬ」は完了の助動詞。○はぎのはなさく 秋の時節を萩の花の咲くのを見て知る。「をとめらにゆきあひの早稲を刈るときになりにけらしも萩の花咲く」（万葉集・二二二）（旧二二一七）、「垣根なる萩の花咲く秋風の吹くなるなへに雁鳴き渡る」（人麿集・一一〇）。第五句は第四句と倒置の関係ではなく、あえていえば併置、余韻がある。

【所載】ナシ

【参考】上三句が全く等しい歌がある（家持集Ⅱ・一二二）。下句は「あきのなかばになりぬべらなり」。

九三四 いもにわがうらごひをればあし引の山したとよみしかぞなくなる

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい人の恋しくてならない折も折、山を響かせ牡鹿が（雌鹿を求め）鳴いている声が聞こえる。

【語句】○うらごひをれば 「うらごふ」は心に秘めて恋しく思う。心の中で恋しく思う。「わがせこにうらごひをればあまのがはよふねこぐなる梶の音聞こゆ」（万葉集・二〇一九（旧二〇一五））。○とよみ 響き渡って、鳴り響いて。○なくなる 鳴いているのが聞こえる。「なる」は伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形。

【所載】ナシ

【参考】「あきはぎにうらごひをればあしびきのやましたとよみしかのなくらむ」という類似した歌が、和歌童蒙抄・八一四、奥儀抄・四六九、和歌色葉・二四五にある。

九三五 たかやまのみねゆくしかのともをおほみそでふりこぬをわするとおもふな

【異同】ナシ

【現代語訳】連れ立つ人が多いので（目立つわけにゆかず）袖を振って来なかったのを、お前を嫌いになったからだと勘違いしないでくれ。

【語句】○たかやまのみねゆくしかの 高山の峰行く鹿の。初句・二句は群れて動く鹿を表し、「ともをおほみ」を導く序。口語訳には入れない。○ともをおほみ 友を多み。「おほみ」は多いので。○そでふりこぬ 袖を振るといふ動作をせずに来てしまったこと。○わする 忘れる。恋人の間では「訪れない、疎遠になったこと」を「忘る」という。

【所載】万葉集・二四九八（旧二四九三） 高山 峰行完 友衆 袖不振来 忘念勿 タカヤマノミネユクシシノ（シカノ）トモヲオホミノデフリコヌヲワスレオモフナ たかやまのみねゆくししのともをおほみそでふらずきぬわするとおもふな／夫木抄・四五九七

〔以上五首担当 平野〕

九三六 さをしかのつまをしのぶとなくこゑのいたらんかぎりなびけはぎ原

【異同】ナシ

【現代語訳】雄鹿が妻を恋い慕うと言つて鳴く声が届く果てまで、一面に靡け、萩原よ。

【語句】○さをしか 雄の鹿。「さ」は接頭語。○つまをしのぶと 妻を恋い慕うとして。「しのぶ」は、ひそかに恋い慕う意。格助詞「と」は、……と思つて、……と言つて、の意。「妻をしのぶ」鹿の声は、「よもすがらしづくの山にうらぶれて妻をしのぶるさをしかの声」（夫木抄・四六〇八・顕季）と悲しみに沈んでいるように歌われている。なお、所載欄の万葉集・綺語抄には「つまとのふと」（妻たちを呼びよせよう）とあり、その表現なら、雄鹿に呼びよせられ複数の雌鹿が並ぶ習性があるので、「靡け萩原」の意がよくとおる。○なびけはぎ原 「はぎ原」は、萩が一面に生いしげる原。このように植物が繁った「原」に向かつて「靡け」と命ずる歌に、「妹らがりわが通ひぢのしのすきわれし通はばなびけ篠原」（万葉集・一二二五（旧一二二二））がある。

【所載】万葉集・二二四六（旧二二四二） 左男壮鹿之 妻整登 鳴音之 将至極 靡芽子原 サラシカノツマトトノフトナクコエノイタラムカギリナビケハギハラ さをしかのつまとのふとなくこゑのいたらむきはみ  
なびけはぎはら／隆源口伝・五三／綺語抄・六四二

九三七 あさみちのふるみちわけてなくしかのたちわかれにしつまや恋しき

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の道の、通いなれた古い道をかき分けながら鳴いている鹿のように、（私がうつうつとしているのは）別れてきた妻が恋しいのであろうか。

【語句】○あさみちの 朝道の。「うちはへてあな風さむの冬の夜やま白に霜のおける朝道」（人丸集・二三六）。○わけて 押し分けて。道を開いて進む様。「秋萩の咲きたる野辺はさを鹿ぞ露を分けつつ妻どひしける」（万葉集・二二五七（旧二二五三））。○なくしかの 格助詞「の」は、……のように、……のごとく、の意。「恋しき」にかかる。所載欄の夫木抄に「なくしかは」。○つまやこひしき 妻が恋しいのであろうか。鹿が鳴いている声に、わが心を重ねて詠んだ。「さを鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露」（万葉集・一六〇二（旧一五九八））では、「白露」にたった今妻と別れてきた鹿の涙を暗示している。なお、所載欄の夫木抄には、



結句「人や恋しき」とある。

【所載】 夫木抄・四八五四

九三八 秋やまにつまなきしかのとしをへてなぞやいきてのかひよとぞなく  
伊勢 わがこひの

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋山で妻のいない鹿が何年もたって、「どうしてこうなのか。生きている甲斐はこんなものか」とカヒヨと鳴いている。

【語句】 ○なぞやいきてのかひよとぞなく 「なぞや」は、「どうしてこうなのか」と自問する意。「かひよ」は、鹿の鳴き声「カヒヨ」に「甲斐よ」（値打ちがあるよ）を掛ける。所載欄の古今集「誹諧歌」にあり、下句は、「なぞわが恋のかひよとぞ鳴く」とある。

【所載】 古今集・雑体・一〇三四

【参考】 作者「伊勢」とあるが、伊勢集には見えない。所載欄の古今集では作者名「紀淑人」。

九三九 春のゝのしげきくさばのつまごひになぞわがこひのかひよとぞなく  
さだふ

【異同】 春のゝの―春の野（大）

【現代語訳】 春の野の茂った草葉の中で妻を恋慕って……。……「どうしてこうなのか。生きている甲斐はこんなものか」とカヒヨと鳴いている。

【語句】 ○さだふ 作者名「さだふ」は、「さだふん（む）」で平定文（貞文）とも。古今集の一〇三三番歌に、定文の作として、「春の野のしげき草葉の妻恋ひにとびたつ雉のほろるとぞなく」と、当該歌と上三句がまったく同じ歌がある。○しげきくさばのつまごひに 繁った草葉の中で、妻を恋い求めて。○なぞわがこひのかひよとぞなく 春の季節に妻恋しくて鹿の鳴くのは不審。『古今和歌六帖標注』に、「此うたはきじのうた也。こゝに鹿の歌とせるはわろし。又下の句はまたくまへの歌の下の句をふとうつしあやまれりとみゆ」と指摘するように、古今集の定文詠の一〇三三番歌の上句と、一〇三四番歌「秋の野に妻なき鹿の……」（古今

六帖では九三八番歌)の下句と、雉と鹿を詠んだ連なる二首が誤って合成されて一首となったものであろう。何らかの理由から、古今六帖ではこれを鹿の歌と見てここに置いたと思われる。

【所載】ナシ

【参考】作者名「平定文」は、語句欄に説明したように、古今集では上三句のみの作者。

九四〇 このころの秋のあさけにきりがくれつまよぶしかのおとのさびしさ

【異同】ナシ

【現代語訳】この頃の秋の明け方時分に、たちこめた霧の中姿を見せずに、妻を呼んで鳴く鹿の声がなんとさびしいことよ。

【語句】○あさけ 「あさあけ」(朝明け)の約。明け方。「水ぐきの岡のやかたに妹とあれと寝てのあさけの霜の降りほも」(古今集・一〇七二)。○きりがくれ 「霧隠る」は、自動詞・下二段活用で、霧に姿が隠れること。○つまよぶしかの 秋の夜明けに鹿が鳴く類歌に、「このころの朝けに聞けばあしひきの山呼びとよめさ雄鹿鳴くも」(万葉集・一六〇七(旧一六〇三))。○おとのさびしさ 鹿の鳴き声を「音」と表現する例歌は少ないが、「秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずておとのさやけさ」(古今集・二二七)などがある。

【所載】続古今集・秋下・四四五／万葉集・二二四五(旧二二四) 比日之 秋朝開尔 霧隠 妻呼雄鹿之音之亮左 コノコロノアキノアサケニキリガクレツマヨブシカノオトノハルケサ このころのあきのあさけにきりがもりつまよぶしかのこのさやけさ／人麿集Ⅱ・一一四／綺語抄・六四〇

【参考】所載欄の続古今集に作者名「人丸」とあり、人麿集にも見えるが、万葉集には作者名なし。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

九四一 たれきけとこゑたかさこのさをしかのなが／しよをなきあかすらむ

とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】誰に聞けとって、声高く、小高い山にいる牡鹿がこの長すぎる夜を鳴き明かしているのであろうか。

【語句】○こゑたかき、「声が高い」の「たか」と、「高砂」の「高」を掛ける。当該歌の「高砂」は固有名詞ではなく、普通名詞で、小高い丘、山の意。「高砂」と「鹿」の取り合わせは、「秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらむ」（古今集・二一八）など。「声高砂」の例としては、「さを鹿の声高砂に聞こえしは妻なき時の音（ね）にこそ有りけれ」（後撰集・一〇五七）がある。○ながくしよ 長々し夜。きわめて長い夜。「葦引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を一人かもねむ」（拾遺集・七七八、万葉集・二八一三（旧二八〇三）の異伝歌）の影響が見られる語か。

【所載】後撰集・秋下・三七三／続古今集・一九一八（異本歌・巻第五、四四九の次、紀友則）／友則集・一九【参考】作者名は「とものり」となっているが、後撰集ではよみ人知らず、続古今集（異本歌）では紀友則作となっており、友則集にも見える歌である。

九四二 めれぎぬをほすさをしかのこゑきけばいつかひよとぞなきわたりける

【異同】ナシ

【現代語訳】濡れた衣を干す竿、さ牡鹿の声を聞くと、いつか「ひよ（干よ、乾け）」といって鳴き続けていることだ、それはあらぬ疑いがいつか晴れよといって泣き続けているかのようだ。

【語句】○めれぎぬをほす 濡れ衣を干す。「さを（竿）」にかかる序詞。「めれぎぬ」は、「濡れた衣」と「無実の罪、あらぬ噂、疑い」を掛ける。「天の下のがるる人のなければや着てし濡れ衣干るよしもなき」（拾遺集・一二一六・道真）。○さをしか 「さを鹿」の「さ」は接頭語で、雄鹿を指す。「さを」は、濡れ衣を干す「竿（さを）」との掛詞。○いつかひよ 濡れ衣がいつか「干よ」（「乾け」と、疑いが「晴れよ」との両義）と、鹿の音の擬声表現「ひよ」との掛詞。鹿の音は、「ひよ」だけでなく、「秋の野に妻なき鹿の年を経てなぞわが恋のかひよとぞなく」（古今集・一〇三四）などの如く、「かひよ」とする例もある。当該歌も「いつかひよ」に「かひよ」を通底させるか。○なきわたりける なき続けていることだ。「なき」は「鳴き」に「泣き」を響かせる。

【所載】人麿集Ⅱ・五五九

九四三 なくしかはつまぞこふらしくさまくらたびゆく人にこゑなきかせそ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】鳴く鹿は妻を恋うているらしい。わびしい一人寝の旅を続ける者にどうかその声を聞かせないでくれ。

【語句】○くさまくら 草枕。「旅」にかかる枕詞だが、わびしい旅寝の意味を添える。○なきかせそ 「な…そ」は穏やかな禁止。どうか…しないでくれ。

【所載】貫之集Ⅰ・三八一／貫之集Ⅱ・八五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰには「天慶二年四月、右大将殿御屏風の歌二十首」、「男、旅のやどりに鹿の鳴くを聞く」とある。

九四四 こゝろしもかよはじものをやまちかくしかのねきけばまさるわが恋

【異同】ナシ

【現代語訳】必ずしも心が通い合っているわけではないものの、山近く鹿の鳴く音を聞くといいよつもの私の恋心。

【語句】○こゝろしもかよはじものを 「しも」は下に打消を伴うと部分否定。鹿とは必ずしも心が通じて合っているわけではないのに。妻を恋う鹿の鳴き声に、己の恋心を触発されるのは、「宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿の妻に恋ふらく我にはまさじ」（万葉集・一六一三〔旧一六〇九〕・丹比真人）など、万葉集から詠まれている類型である。

【所載】貫之集Ⅰ・四一一

【参考】作者名はないが貫之集に見える。貫之集では「朱雀天皇の御時の屏風歌」、「八月鹿の鳴くを聞く」。

九四五 かりくればはぎはちりぬとさをしかのなくなるこゑもうらぶれにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】雁がやってくると、萩が散ってしまったと牡鹿が鳴く声も力無く沈んでいることだ。

【語句】○かりくれば 雁来れば。雁がやって来ると。所載欄の万葉集歌は「雁来（かりはきぬ）」。「○はぎ 萩。萩が鹿の妻であるとするのは、万葉集以来の類型。一六九番歌参照。○うらぶれにけり 「うらぶれ」はしよん

ぼりと力なく、心のしおれるような状態をいう。妻である萩が散ってしまったので、鹿がわびしく思うということ。「君に恋ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩しのぎさを鹿鳴くも」(万葉集・二一四七(旧二一四三))。

【所載】玉葉集・秋上・五五六／万葉集・二一四八(旧二一四四) 鴈来 芽子者散跡 左小壮鹿之 鳴成音毛 裏触丹来 カリハキヌハギハチリヌトサヲシカノナクナルコエモウラブレニケリ かりはきぬはぎはちりぬとさをしかのなくなるこゑもうらぶれにけり／夫木抄・四五九四／綺語抄・六四三／和歌童蒙抄・八一三／奥儀抄・四七〇／袖中抄・一〇三〇

〔以上五首担当 中野〕

### 人まろ

九四六 あしひきの山よりきけばさをしかのつまよぶこゑもかつきかましを

【異同】ナシ

【現代語訳】山の中から聞いたなら、雄鹿が妻をよぶ声もすぐに聞くことができるだろうに。

【語句】○あしひきの 「山」に掛かる枕詞。○山よりきけば 山にいて山から聞けば。「きけば」は、結句「…ましを」との呼応から未然形でありたいところ。所載欄の万葉集は「やまよりきせば」、人麿集Ⅱは「やまならませば」。○さをしか 雄鹿。「さ」は接頭語。○つまよぶこゑ 雄鹿が雌鹿を求めて鳴く声。もの悲しい鳴き声は秋を感じさせる風物詩の一つ。○かつきかましを すぐに聞くことができるだろうに。「かつ」は副詞。一つの動作が終わるか終わらないかのうちにすぐに。「空蟬の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり」(古今集・七三)。鹿の声は、山でならばすぐに聞くことができる。

【所載】万葉集・二一五二(旧二一四八) 足日木笑 山從來世波 左小壮鹿之 妻呼音 聞益物乎 アシヒキノ ヤヨリキセバサヲシカノツマヨブコエヲキカマシモノヲ あしひきのやまよりきせばさをしかのつまよぶこゑをきかましものを／人麿集Ⅱ・一〇一

【参考】作者名「人まろ」とあり、人麿集Ⅱに収められているが、万葉集には作者名なしで載る。

九四七 さをしかのあさふすをのゝ秋はぎをおれぬばかりもおける露かな

【異同】秋はきを―秋萩に(大)

【現代語訳】雄鹿が朝、まだ寝ている野の秋萩であることよ。今にも折れそうなほどに露がおいっていることだなあ。

【語句】○をの 野。野原。「を」は接頭語。○秋はぎを 「を」は詠嘆の助詞と解し、訳を試みた。大久保本は「秋萩に」。その他の諸本も「を」のところに「に」の傍記がある。これらに拠って「秋はぎに」と読む方が、下句とのつながりは自然であるか。○おれぬばかりも をれぬばかりも。今にも折れそうなほどに。露がたくさん置いてあるさまの形容。

【所載】ナシ

【参考】類似歌に「さをしかの朝立つ野辺の秋萩に玉とみるまでおける白露」（万葉集・一六〇二（旧一五九八））がある。

九四八 秋はぎにしがらみかけてなくしかのこゑきゝつゝや山田もるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋はぎにからみつくようにして鳴く鹿の声を聞きながら、（田の見張りをする人は）山田を守っているのであらうか。

【語句】○秋はぎにしがらみかけて 秋萩の枝にからみつくようにして。○山田もる 山田守る。山田の番をする。「山田」は山の中にある田。収穫期の秋の農夫は、稲穂を鳥獣などから守る為に番をするのであるが、人里離れた山の中の粗末な小屋に寝起きする為、怪しい心情を詠む歌が多い。

【所載】ナシ

九四九 おぼつかかなをぐらのやまになくしかのこゑたかくともたれかしるべき

【異同】ナシ

【現代語訳】こころもとないことだなあ。薄暗い小倉の山で鳴いている鹿の声は、高く響いても誰がその声を聞きとめるであらうか。

【語句】○おぼつかかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。ぼんやりとしてはつきりしない。そのために不安に感じる気持がある。「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」（後撰集・二七一）。○をぐらの

やま 小倉山。二〇七番歌参照。ここでは「小暗（をぐら）」を掛けている。○たれかしるべき 「か」は反語。いったい誰が知るであろうか、誰も知らない。

【所載】ナシ

とら

九五〇 とらにのりふるやをこえてあをぶちに水とりとらむつるぎたちかも

【異同】 つるぎたちかも—つるよたちかも（桂）

【現代語訳】「意味のとりにくい言葉があるので完全な訳は示しにくい。」虎に乗り古屋を越えて真つ青な深い淵で水鳥を捕るという剣太刀であることだ。

【語句】◎とら 猫科の猛獣。獐猛なけだものとして恐れられていた。説話などでは人を食べる恐ろしい獣として伝えられる。○ふるや 古屋か。意味不明。○あをぶち 水が青々として見えるほど深い淵。○水とり 水鳥か。所載欄の文献では「みつち（蛟竜）。○つるぎたちかも 「き（支）」と「よ（与）」の行書体が似ている為、判別が難しいが、「き」と見て「つるぎたち」と解した。桂宮本を底本とする『新編国歌大観』は「つるよたち」とする。

【所載】万葉集・三八五五（旧三八三三） 虎尔乘 古屋乎越而 青淵尔 蛟竜取将来 劔刀毛我 トラニノリフルヤヲコエテアフチニサメ（ミツチ） トリテコムツルギタチモガ とらにのりふるやをこえてあをぶちにみつちとりこむつるぎたちもが／古来風体抄・一七五

【参考】所載欄の万葉集は題詞に「境部王詠数種物歌一首穂積親王之子也」とあり、穂積親王の御子、境部王作とする。「とら」「ふるや」「あをぶち」「水とり」「つるぎ」など、いろいろのものを詠みこんだ歌かと思われる。

〔以上五首担当 犬養悦・市東奈々〕

九五一 からくにのとらふすといふ山にだにたびにはやどる物とこそきけ

【異同】ナシ

【現代語訳】あのからくにの、虎のひそんでいるという山にだって、旅するときは宿るものだと聞きますよ。

【語句】○からくに 韓の国。「から」は、もと朝鮮半島南部にあった伽羅国のことであつたが、やがて半島全

体をさすようになり、さらに中国をもさすようになり、また漠然と半島・大陸方面の異国を言うようにもなった。ここはその漠然とした異国のことか。○ふす 伏す。ここではひそみ棲むの意。「とらふす山」とは、おそろしい虎がひそんでいるような、未開異境の山ということ。「とらふす野」ということもある。

【所載】ナシ

【参考】詠歌事情不明のため具体的なことはわからないが、人事的寓意のある歌と思われる。あるいは、男に対して泊ってゆくことを求めた女の歌か。

九五二 あさぢふのおのゝしのはらいかなればてるひのとらのとらのふしどころなる

【異同】てるひのとらの—てかひのとらの（御・桂・大） ふしどころなる—ふしどころなる（大）

【現代語訳】浅茅の生えまじった篠原よ。いったいどういうわけで、手飼いの虎の棲息場所になっているのだ。

【語句】○あさぢふ 浅茅の生えているところ。「あさぢ」は丈の低いチガヤ。○おの をの。小野。「を」は接頭語。「の」は野原。○しのはら 篠の生えている原。「しの」は幹が細く丈が低くて群生するたぐいの竹の総称。○てるひのとら 底本の本文では意が通じない。諸本の「てがひのとら」に従って解す。人間によって飼育されている虎。「てがひ」は人の手で餌を与えて飼うこと。○みる 底本の本文は不自然。大久保本の「なる」に拠って解した。

【所載】夫木抄・一二九二五

【参考】「あさぢふのおのゝしのはら」「てる（が）ひのとら」は、いずれも比喻と思われる。人事的な事情（おそらく恋）のもとで詠まれた歌であろう。あるいは、親の監視のきびしい娘に近づけないことを恨んだ男の歌か。

九五三 ありとてもいくよかはふるからくにのとらふすのべに身をもなげてん

【異同】身をもなげてん—身をそなげてん（大）

【現代語訳】たとえこのまま在りつづけたとしても、いったい幾世を生き経られるというのだろう。（そんなに幾世をも生きられはしない。）それならいっせ、あのからくにの虎のひそんでいるという野に、この身を投げてしまおう。

【語句】○ありとても 仮にこのまま生きてこの世に存在したとしても。○いくよかはふる 幾世かは経る。ど



れだけの世を生き経ることができようか。「よ」は、ここでは人の一生のこと。人は、幾世をも生き経ることはできない。「かは」は疑問を伴う反語。○からくにのとらふすのべ 九五一番歌参照。○身をもなげてん この身を投げ出してしまおう。虎のえじきになって死んでしまいたい、の意。「て」は完了の助動詞「つ」の未然形、「ん」は意志を表す助動詞「ん（む）」の未然形。「とらふすのべに身をなげ」という発想は、金光明経捨身品に見える捨身飼虎説話に拠っている。

【所載】拾遺抄・雜上・四五五／拾遺集・雜恋・一二二七／和歌童蒙抄・七九七

【参考】一見自棄ぎみの歌だが、拾遺抄の詞書には「を」とこ侍りける女をせちにけさうし侍りて、あるをとこのつかはしける」とあり、拾遺集にも、ほぼ同様の詞書がある。夫ある女に懸想した男が、強引に迫った歌のようなのである。

九五二・九五三番歌は、いずれも恋にかかわって詠まれた歌のようだが、第五帖「人づま」の題の下には、「人づまは森かやしるかからくにのとら伏す野辺か寝てころみん」（二九七八）の歌もあり、このころ「人づま」への恋に関しては「とらふすのべ」というような言い方があったのかもしれない。

#### くま

九五四 あらくまのすむといふなるしはせ山せめてとふともながないはじを

【異同】ナシ

【現代語訳】荒々しい熊が棲むというあのおそろしいしはせ山のように、おそろしい勢いで問い詰められても、あなたの名は言いますまいよ。

【語句】◎くま 食肉目くま科の獣。四足が太く頑丈な体をしていて、木にも登る。冬は穴ごもりする。人におそれられたためか、和歌にはあまり詠まれていない。○あらくま 野生の荒々しい熊。○しはせ山 万葉集では当該歌一例のみの山。所在不明。五代集歌枕は駿河にも筑前にもこの歌をあげ、八雲御抄は駿河としているが、いずれもその根拠は不明。初く三句は「せめてとふ」を言うための序詞。○せめてとふ きびしく問いつめる。詰問する。「せめ」は逃れられないまでにきびしく迫って窮地に追いつめること。ここで「せめてとふ」のは、おそろく親であろう。○ながな 汝が名。あなたの名前。「汝」は、親しい相手または目下に対して用いる第二人称。ここでは恋の相手の男性をさす。○いはじを 言いますまいよ。「じ」は意志をもつてする否定、ここは決意の表明。「を」は強調。

【所載】万葉集・二七〇四（旧二六九六）荒熊之 住云山之 師齒迫山 責而雖問 汝名者不告 アラクマノスマトイフヤマノシハセヤマセメテフトモナガナハツゲジ（イハジ） あらくまのすむといふやまのしはせやませめてとふともながなはのらじ／夫木抄・一二九二八／和歌童蒙抄・七九六

九五五 ますらをのたかまど山にせめつればさとおかたるむさゝびのこゑ

【異同】 さとおかたる―さとおちたる（大） むさゝひのこゑ―むさゝひのこゑ（大）

【現代語訳】 勇ましい男たちが高円山で追いつめたものだから、人里に逃げ落ちてきたむささびですよ、これは。

【語句】 ◎むさゝび 齧歯目りす科の動物。山林樹上に棲む。体と四肢のあいだに発達した飛膜があり、樹から樹へ滑空飛翔する能力を持つ。○ますらをの 雄々しい男子が。「ますらを」は、ここでは狩の勢子たちのこと。

「の」は主格を表わす助詞。「ますらをの」は「せめたれば」に対する主語。○たかまど山に 高円山は、現奈良市白毫町、春日山の東南方にある山。その西北山麓には聖武天皇の高円離宮があった。「に」は格助詞、「において」の意。「ますらを」が「せめ」た場所を示している。○せめたれば 追いつめたものだから、「せめ」は前歌九五四番参照。○おかたる 底本の本文では意が通じない。大久保本の「おちたる」に拠って解す。追われて逃げ落ちてきた。

【所載】万葉集・一〇三二（旧一〇二八）大夫之 高円山尔 迫有者 里尔下来流 牟射佐毘曾此 マスラヲノタカマトヤマニセメタレバサトニオリクルムザサビゾコレ ますらをのたかまどやまにせめたればさとおりにけるむささびぞこれ／夫木抄・一三〇五七

【参考】万葉集当該歌の題詞で見れば、この歌は、天平十一年聖武天皇高円山出獵の折、小獣が都の中へ逃げ込んで捕獲されたので、これを献上しようとして添えるべく詠まれた、大伴坂上郎女の歌である。ただし左注によれば、未だ奏を経ぬうちに小獣は死に、歌を奉ることも停められたという。

〔以上五首担当 山下〕

九五六 むさゝびはこずゑもとむとあし引の山のさとをにあひにけるかな 忠貴皇子

【異同】ナシ

【現代語訳】むささびは、梢を求めて飛び移ろうとして、山の獵師に見つけられてしまったなあ。

【語句】○むさゝび 九五五番歌参照。○こずゑ 木の先。枝の先。○もとむと 餌を求めて飛び移ろうとして。○あし引の 枕詞。山・峰（を）などにかかる。○さとを 諸本に異同はないが、所載欄の万葉集は「佐都雄」と表記され、「さつを」と訓じる。それを「さとを」とよみ違えたか。「さつを」は獵師のこと。「山のへにいゆくさつをはおほくあれど山にも野にもさをしなくも」（万葉集・二二五一（旧二二四七））。○あひにけるかな 偶然に出会い撃たれてしまったことだ。

【所載】万葉集・二六九（旧二六七） 牟佐佐婢波 木末求跡 足日木乃 山能佐都雄尔 相尔来鴨 ムササビ ハコズエモトムトアシヒキノヤマノサツヲニアヒニケルカモ むささびはこぬれもとむとあしひきのやまのさつをにあひにけるかも／綺語抄・一五二／和歌童蒙抄・八二三

【作者】作者名「忠貴皇子」は、御所本・桂宮本・大久保本の各本異同はないが万葉集は「志貴皇子」である。

## 山川

九五七 やまがはのたぎつこゝろをせきとめて人のきかくなげきつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】（あの人を恋い慕って）激しく湧き上がる心をこらえられず、人が聞きとがめるのに、長いため息をついてしまったなあ。

【語句】◎山川 やまがは。山の中を流れる川。谷川。○やまがはの 枕詞。流れの激しいことから、「あさ」「たぎつ」「音」「はやし」などにかかる。○たぎつこゝろ 激しく湧き返る心。○せきかねて こらえかねて。「かね」は……することができない。○人のきかくに 人が聞きとがめるのに。動詞「聞く」のク語法。「聞くこと」「聞くの」という意味を表す。「それをだに思ふ事とてわが宿を見きとないひそ人の聞かくに」（古今集・八一）○なげきつるかな ため息をついてしまったなあ。「なげき」は長い息をする。悲しみを態度や言葉に表す意。

【所載】新千載集・恋一・一一三二

九五八 こひくゝてあわずなりなば山川の人もわたらぬせとやなりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】恋い慕っているのに、逢わないことになるならば、今まで逢うときに渡っていたあの瀬が、人も渡らない荒れた瀬となるのだろうか。

【語句】○こひ／＼て 恋い慕っているのに。「て」はあとに述べる事柄の原因、理由をのべる。○人もわたらぬせ 「瀬」は川の浅い所。多く川を渡るのにここを通るが、逢わないことになる、人も渡らぬ瀬となる。

【所載】ナシ

九五九 わび人のそでをやかれる山がはのなみだのごともおつるたきかな  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】嘆きに沈む人の袖を借りているのだろうか。まるでわび人の涙のようにとめどなく、落ちてくる山川の急流だなあ。

【語句】○わび人 嘆きに沈んでいる人。「ふぢ衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける」（古今集・八四一）。○そで 嘆きの涙に濡れた袖。○かれる 借りている。かれ（動詞「借り」の命令形）＋る（完了の助動詞「り」の連体形）。○たき 傾斜した川瀬の流れの急な所。急流。

【所載】貫之Ⅰ・六四三

【作者】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九六〇 さをしかのつめだにひちぬ山がはのあさましきまでとはぬ君かな

【異同】ナシ

【現代語訳】雄鹿の足先の爪さえも濡れないような、山川の浅い流れ。（そのように浅い心で）あきれる程長く訪ねて来ないあなたなのねえ。

【語句】○さをしか 雄鹿。「さ」は接頭語。○ひちぬ 水に浸らない。濡れない。ひち（動詞「ひつ」の未然形）＋ぬ（打消の助動詞「ず」連体形）。○あさましきまで あきれるほどひどく。「あさまし」に山川の縁で

「浅」をかける。「さをしかのつめだにひちぬ山がはの」は「あさ」を言い出す序詞。〇とはぬ 訪れない。

【所載】拾遺集・恋四・八八〇／俊頼髓脳・一八二／綺語抄・六三九／奥儀抄・一五七

〔以上五首担当 林〕

九六一 水まさるときはふちなみやまがはのたきならねばやおとのたえせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】「歌意に不整合を感じるが、本文に従い解した。」水かさが増えるときは、浅瀬と淵の区別もなくなるので、音も静かになる。そのような山川のたぎつ瀬ではないので、音が絶えないのだらうか。

【語句】〇ふちなみ 重出の古今六帖一七三八番歌では「ふちなる」。九六一番歌の本文は「ふちなみ」で異同もないので、「淵無み」と取り、波が立ち騒ぐ浅瀬と静かな淵との区別が、水かさが増すとなくなり音が絶える意と解した。「底ひなき淵やは騒ぐ山河の浅き瀬にこそあだ波は立て」（古今集・七二二）。〇たき 当該歌では、たぎつ瀬、急流、の意。

【所載】古今六帖・第三帖「ふち」一七三八

【参考】山川のたぎつ瀬ならぬ、恋の思いにたぎつ心ゆえ、絶えずその思いを伝えるという思いを込めるか。あるいは、噂が絶えないことを詠んだか。

九六二 ことはかりよらせよ<sup>よ</sup>もとやまがはのたてのみだれてたゆたへるきみ

【異同】たゆたへるきみ―たゆたゆるきみ（桂）

【現代語訳】うまく取り計らって私があなたのもとへ行けるようにして下さい、いとしい人よ。山川の流れが乱れて滞るようにためらっているあなた。

【語句】〇ことはかり 事計り。事を計らって。工夫して。「うたてけに心いぶせし事計りよくせ我が背子逢へる時だに」（万葉集・二九六一（旧二九四九）、「……石枕苔むすまでに新た夜の幸く通はむ事計り夢に見えこそ……」（万葉集・三三四一（旧三三三七））。〇いも 妹。男性が、妻や恋人などの女性を親しんでいる語。「兄（せ）」の対。〇たての 「たて（経）」は、織物の縦糸。当該歌では「みだれて」を導く。「しづはた」（倭文機で織った、乱れ模様の布）の「たてぬき」（縦糸と横糸）が乱れることが和歌によく詠まれた。「見ずき聞か

ずあらましときはしづはたのたてぬき乱る思ひせましや」(伊勢集・三六八)。「よる」「たて」「みだれ」「たゆ」は糸に関わる縁語。○たゆたへる 水の流れが直流せずに乱れて滞っているように、心を決しかねているさま。「たゆ」に糸に関わる縁語「絶ゆ」を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】初・二句は、語句欄の万葉集二九六一(旧二九四九)番歌の「事計りよくせ我が背子」という類似表現を参照すると、「よらせよ」が、もとは「よくせよ」であった可能性もある。

山だ

九六三 あしひきの山田つくるを<sup>ひ</sup>ひでずとしめだにはつよもるとするべく

【異同】<sup>ひ</sup>ひでずとも―いてすとも(御・桂・大) しめたにはつよ―しめたにはへよ(桂・大)

【現代語訳】山の田を作っている男よ、まだ稲の穂は出ていなくても標縄だけでも張り渡しておきなさい。番をしているとわかるように。

【語句】◎山だ 山田。山の中の田。縄を張り、番をして鳥獣などから守ることや、その侘びしさが詠まれた。接頭語「小(を)」の付いた「小山田」という形でも詠まれている。○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○ひでずとも 秀でずとも。(稲の)穂がまだ出ていなくても。○しめ 標。占有や立入禁止の標識。縄を張り巡らしたり、木を立てたりした。また、それに用いた標縄の略。○はつよ 桂宮本などに「はへよ」とあるのによつて「延へよ」と解釈した。延り渡しなさい。「延ふ」は縄や綱などを長く伸ばす、張るという意。○もるとするべく 守ると知るべく。番をしているとわかるように。

【所載】万葉集・二二三(旧二二九) 足曳之 山田佃子 不秀友 縄谷延与 守登知金 アシヒキノヤマダツクルコヒデズトモシメダニハヘヨモルトシルガネ あしひきのやまだつくるこひでずともなはだにはへよもるとするがね／夫木抄・五〇五〇／人麿集Ⅱ・一五四／家持集Ⅰ・一八九／家持集Ⅱ・一三七

【参考】人麿集と家持集の両方に見え、夫木抄は作者を家持とするが、万葉集には作者名がない。なお、次のように、三句目以下が類似した歌がある。「石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へよ守りつつ居らむ」(万葉集・一三五七(旧一三五三))、「津の国のむろのはやわせひでずとも綱をばやく守ると知るべく」(新撰和歌・二二四)、「きの国のむろのはやわせいずとも標をばはへよ守ると知るがね」(古今六帖「しめ」二六〇八)。

九六四 あしひきの山田にはふるしめなはの秋田かるまでたえじとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】山田に張り渡した標縄は秋の田を刈るまで切れることはないだろう。そのように、私たちの仲も絶えることはあるまいと思うよ。

【語句】○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○はふる 延ふる。九六三番歌参照。○しめなは 標縄。占有や禁忌の目印とし、侵入を禁じるために張る縄。○たえじとぞおもふ 絶えることはあるまいと思う。標縄が切れることはないだろうという意と、自分たちの男女の仲がずっと絶えることはあるまいという意とを掛ける。初句から四句目までが、「たえじ」を導く序詞。

【所載】ナシ

【参考】「春霞たなびく田居に廬つきて秋田刈るまで思はしむらく」（万葉集・二二五四（旧二二五〇））も同様な詠法。

九六五 ことゝてはたれならなくに<sup>を</sup>子やま田のなはしろみづのなかよどみ<sup>す</sup>なる

【異同】ナシ

【現代語訳】言葉を掛けてきたのは他の誰でもない、あなたの方なのに、（小山田の苗代に引いた水が流れていかに淀んでいるみたいのに、）途中で通って来なくなるなんて。

【語句】○ことゝては 用例が見当たらないため、所載欄万葉集の「ことでは」に拠って解釈した。○をやま田 小山田。「を（小）」は接頭語。○なかよどみ 中淀み。水の流れが途中で停滞すること。また、事態の進行が停滞すること。「淵瀬をも分かじと思へど飛鳥川そなたの水や中淀みせむ」（うつほ物語・六六五）。「を山田のなはしろみづの」は、「なかよどみ」を導く序。

【所載】万葉集・七七九（旧七七六） 事出之者 誰言尔有鹿 小山田之 苗代水乃 中与杵尔四手 コトデシハタガコトニアルカラヤマダノナハシロミヅノナカヨドニシテ ことではたがことにあるかをやまだのなはしろみづのなかよどにして

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の万葉集では「紀女郎報贈家持歌一首」とする。

〔以上五首担当 長戸〕

九六六 かりてほす山田のいねのこきたれてねをこそなかめ人はうらみじ

【異同】ナシ

【現代語訳】刈りとって干した山田の稲の実がこぼれ落ちるように、私も涙をこぼしながら声をたてて泣いていましょう。あの人を恨むようなことはしますまい。

【語句】○かりてほす山田のいねの 「こきたれて」を導く序詞。○こきたれて しぎ落としたようにしきりに落ちるの意。ここでは、稲の実の落ちる様子と涙がこぼれ落ちるさまをいう。「あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつつ」（古今集・六三九）。○ねをこそなかめ 声をたてて泣いていよう。

【所載】ナシ

【参考】上句は「かりてほす山田の稲のこきたれてなきこそわたれ秋のうければ」（古今集・九三二）と重なり、下句は「あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ」（古今集・八〇七）と酷似する。

九六七 山田さへいまはつくるをちるはなのかごとはかぜにおほせつるかなざらなん

【異同】ナシ

【現代語訳】山田までも今は耕す時期になったというのに、散る花への恨み言は風におっしやらないで下さい。

【語句】○山田さへ 晩春であることを強調する。所載欄の貫之集には詞書に「三月田かへすところ」とある。

○つくる 耕す。「いくばくの田を作ればか時鳥死出の田長を朝な朝な呼ぶ」（古今集・一〇一二）。○かごと恨み言。ぐち。「露をおもみをれふしにける花の枝はかごとをかげにおほせざらなん」（公任集・一〇二）はこの歌を意識したもの。○おほせつるかな 底本「つるかな」をミセケチで「さらなん」と傍記する。ここではそれを採用し「おほせざらなん」で解釈する。おっしやらないでください。「なん」は他への願望を表わす終助詞。

【所載】新勅撰集・春下・九〇／貫之集Ⅰ・六／貫之集Ⅱ・四／袖中抄・三三三／和歌色葉・七八

九六八 かりてほすやま田のいねをかぞへつゝおほくのとしをつみてけるかな  
みつね



【異同】ナシ

【現代語訳】刈って干して置いた山田の稲を数えて積みながら多くの実りを重ねるように、多くの年を積み重ねてきたことだなあ。

【語句】○とし 年歳の意と収穫するの意を掛ける。「我が欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙げせずともとしは栄えむ」(万葉集・四一四八(旧四一二四))。○つみてけるかな 「つみ」に、稲を積み重ねるの意と年を重ねるの意を掛ける。「かりてほす山田のいねの数しらずつむべきあきぞひさしかりける」(元輔集・三四)。なお所載欄の躬恒集Ⅰでは「しはず」との詞書があり、述懐の歌とする。

【所載】拾遺抄・雜上・四一七／万代集・一〇六七／躬恒集Ⅰ・一〇五／躬恒集Ⅱ・九／躬恒集Ⅲ・九／躬恒集Ⅳ・三五六／躬恒集Ⅴ・四〇／元輔集Ⅰ・二四五

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。元輔集Ⅰでは、さまざまな歌人の屏風歌を集めた歌群に入る。なお、拾遺集・雜秋・一一二五に躬恒作として「かりてほす山田の稲をほしわびてまもるかりいほにいくよへぬらん」という類歌がある。

九六九 とを山田もるや人めのしげゝればほにこそいでねわすれやはする

【異同】ナシ

【現代語訳】遠くの山田を見張る人の目が多く、他人の目がわずらわしいので表には出ませんが、どうしてあなたのことを忘れることができましょうか。

【語句】○とを山田もるや とほ山田もるや。遠くに見える山田を見張る。「や」は語調をととのえる間投助詞。契沖は重出する第三帖での初句「かどわさだ」と比較し「遠山田は人めしげかるまじきなり」(『和歌拾遺六帖』)と疑義を記している。ここまで「人めのしげければ」を導く序詞。○人め 田を見張る人の目と、自分と関係のない他人の目と両方の意を持つ。○しげゝれば 「しげし」は、見張りの目が多いの意と、周りの人の目がわずらわしいの意を含む。○ほにこそいでね 「ほにいづ」は表に現れる、目立つようになるの意。「とを山田」の縁で用いる。「朝霧のおぼつかなきに秋の田のほに出でて雁ぞ鳴きわたるなる」(貫之集・八二)。○わすれやはする 「やは」は反語。忘れようか、いや忘れない。

【所載】古今六帖・第二帖「門」一三六七／続古今集・恋一・九八六／躬恒集Ⅱ・二五九

九七〇 やまだすき春のたねをばまきしかどあきのときにはなさじとぞ思  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】山田をたがやして春の種を蒔くように恋を始めたけれど、実りを迎える秋は来ようと、飽きられる時を迎えるようなことにはしますまいと思います。

【語句】○やまだすき 山田をたがやして。「すく」は田や畑を耕すの意。「あらを田をあらすきかへしかへして」も人の心を見てこそやまめ」（古今集・八一七）。○春のたね 春に蒔く種。苗代に蒔いた畝のこと。○まきしかど 種を蒔いたけれども。種を蒔いた時点を恋の始まりとする。○あきのとき 「あき」は「秋」に「飽き」を掛ける。「とき」は収穫にふさわしい時節の意に、（飽きられる）ちょうどその時の意を掛ける。

【所載】素性集Ⅰ・三二／素性集Ⅱ・四二／素性集Ⅲ・四〇

【参考】作者名「たゞみね」とあるが、忠岑集には見えない。

〔以上五首担当 青木〕

九七一 山かげにつくるやま田のこがくれてほにいでぬこひはくるしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山陰に耕す山田が木々に覆われて、稲の穂が出ないように、表面に出ない、そぶりにも見せられない恋は苦しいことだ。

【語句】○つくる 耕す。耕作する。「あしひきの 山田をつくり 山高み……」（古事記・七八）。○こがくれて 木々に遮られて。日照が不足して、の意であろう。○ほにいでぬ 「穂に出づ」は、穂となつて出る。転じて、表に現れる。人目につく。「花すすき我こそ下に思ひしか穂に出でて人にむすばれにけり」（古今集・七八）。こは打消を伴って、穂に出ない。表に現れない、の意。上三句は「ほにいでぬ」の序。

【所載】貫之集Ⅰ・五五一

【参考】新勅撰集・恋一・六四八には「山かげにつくる山田のみがくれてほにいでぬこひに身をやつくさむ」という、非常によく似た凡河内躬恒の歌がある。

九七二 しらつゆのおくての山田かりそめにうき世のなかをおもひけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白露が置く、晩稲の山田は刈り初めているが、このつらい世の中を、私は仮りそめのものとして思うようになってしまったことです。

【語句】○しらつゆのおくて 「白露の」は「置く」を導く枕詞のような働きをしており、「置く」に「晩稲（おくて）」を掛ける。○かりそめに 「刈り初め」に「仮りそめ」を掛ける。

【所載】古今集・哀傷・八四二／貫之集Ⅰ・七四五／貫之集Ⅲ・一三

【参考】古今集と貫之集Ⅰは、初句を「朝露の」とする。また古今集では「思ひに侍りける年の秋、山寺へまかりける道にてよめる」との詞書を持ち、哀傷の部に属する。

### 山ざと

九七三 やまざともおなじうきよのなかなればところかへてもすみうかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】世を逃れようと思って山里に来てみたが、その山里も、やはり同じ憂き世の中なので、場所を変えても住みづらいことだ。

【語句】◎山ざと 山の中にある人里。通常は人が住まない、日常生活から隔絶した場所、という意識で用いられることが多い。従って和歌では、「侘びし」「寂し」「住み憂し」などとともに詠まれることが多く、そこにわざわざ入っていく人は、この憂き世に絶望した人、隠遁者、という意味合いが強い。なお、小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店、一九九四年）所収の「美的空間としての山里」では、藤原公任あたりから「山里」に独自の美意識が見いだされていくと説かれている。

【所載】ナシ

九七四 山ふかきやどにはあれどもよゝもに春のこゝろはあさくぞなるらし

### つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山深い宿ではあるけれども、年とともに春の心は浅くなっているらしい。

【語句】○山ふかき 「あさくぞ」に対応する。山深い宿ならば、当然春の心も思いやりが深く、花も残っているはずなのに、の意であろう。○よとゝもに 一般には「住の江の浪にはあらねどよととも心に心を君に寄せわたるかな」（後撰集・恋二・六三八）や「一生に男せでやみなむといふことを、世とともにいひけるもしるく」（大和物語・一四二段）などのように、常々、いつも、の意に用いられているが、ここは「なるらし」にかかるので、年とともに、時が経つにつれて、の意か。○春のこゝろ 「春」を擬人化したもの。○あさくぞなるらし 浅くなっているらしい。初句の「ふかき」に呼応する。「らし」は根拠のある推量。すでに散っている花を見て、そこからの推量であろう。

【所載】貫之集Ⅰ・二五二

【参考】作者「つらゆき」については貫之集Ⅰにも見え、確認できる。ただし本文は「山ふかきやどにしあれば年ごとに花の心はあさくぞありける」とし、異同がある。

九七五 春くれどはなにもにほ<sup>は</sup>しぬ山ざとはものうかるねにうぐひすぞなく

【異同】春くれと―春くれは（御）

【現代語訳】春が来たけれども、花も美しく咲かない山里では、けだるそうな声でうぐいすが鳴いていることだ。

【語句】○はなにもにほはぬ 花も美しく咲かない。「はな」は必ずしも梅でなくともよいのだろう。春の景物として、春の象徴としての花。○ものうかるねに 「ものうかる」は、けだるそうな、大儀そうな、何となく気の進まないさま。「ね」は、音、声。

【所載】古今集・春上・一五／新撰万葉集・一九／寛平御時后宮歌合・一七／新時代不同歌合・四九／後六々撰・一三三

【参考】古今集では当該歌の作者を「在原棟梁」とする。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

九七六 ゆきやどりしらくもだにもかよはずはこの山ざとはすみうからまし

【異同】 しらくもたにも―しらへもたにも（御・大）

【現代語訳】 雪が泊まって、白雲でさえ（他へ行って泊まって）通わないとしたならば、この山里は住むのがつらいでしょうに。

【語句】 ○ゆきやどり 雪が宿って。「宿る」は宿泊する意。「ゆき」は「雪」と「行き」をかける。「行き」は「通ふ」の縁語。○すみうからまし 住むのがいやになるでしょうに。「まし」は仮定条件句を受け、仮定の上に立って推量する意を表す。

【所載】 貫之集Ⅰ・二〇八

【参考】 貫之集では「三条右大臣屏風のうた」のうちの一首。九八〇番歌参照。貫之集には「雪やどる白雲だにも通はずは此山里は住みよからまし（雪が宿っている白雲さえも通わなければ、この山里は住みよいだろうに）」とある。この方が整合性もあり、元はこちらの形か。

九七七 雪のみやふりぬとおもふ山ざとはわれもおほくのとしぞ<sup>へ</sup>つにける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 「ふりぬ」とは山里で降った雪のことばかりだと思えますか。いいえ、違います。私もそこで多くの年月を経て、老いたことです。

【語句】 ○雪のみやふりぬとおもふ 「や」は反語の係助詞。「ふり」は「降り」に「古り（老いる意）」を掛けらる。「あらたまの年の終はりになる」ことに雪もわが身もふりまさりつゝ」（古今集・三三九）。○としぞへにける 年月を経たことだ。所載欄の新古今集では「としぞつもれる」。

【所載】 新古今集・冬・六七六／貫之集Ⅰ・二四三

【参考】 貫之集では「延喜御時、内裏御屏風の歌 廿六首」のうちに「山里にすむ人の雪のふれるを見る」という題で詠まれている。九八〇番歌参照。

九七八 たちぬとは春をきけども山ざとはまちどをにこそはなはさきけれ

【異同】 ナシ

【現代語訳】春が立ったとは聞きましたが、（人里離れた）山里では待ち遠しく、なかなか花は咲かないのでした。

【語句】○たちぬとは春をきけども 立春が過ぎ、春になったと聞きましたが。所載欄の貫之集では「春を」ではなく「春は」。○まちどを まちどほ。待ち遠しいさま。「こがくれておそくいづればありあけの月まちどほにみゆる山ざと」（重之子僧集・一六）。

【所載】貫之集Ⅰ・二九九

【参考】貫之集では「馬車にのりて人おほく野に出でたり、さまぐゝの花咲きまじりたり」という詞書がある。九八〇番歌参照。

九七九 山ざとにすむかひあるは梅のはなみつゝうぐひすなくにぞざりける

【異同】なくにそざりける―なくにそありける（桂）

【現代語訳】山里に住む甲斐があるのは、梅の花を見ながら鶯が鳴く（のを聞く）時なのですよ。

【語句】○すむかひあるは 住む値打ちがあるのは。「かひ」は「甲斐」に山の縁語「峽」を掛ける。「山里のかひも有るかな郭公今年ぞまたで初音ききつる」（後拾遺集・一二二九）。○なくにぞざりける 「ざり」は「ぞあり」の約。本来は「なくにざりける」か桂宮本のように「なくにぞありける」が正しい。所載欄の貫之集では「きくにそ有ける」で、貫之集の方が整合性がある。

【所載】貫之集Ⅰ・一四一

【参考】貫之集では、「延喜一年五月中宮の御屏風の和歌廿六首」のうちの第三首。二月むめの花見る所」。穩子四十賀の屏風歌か。穩子は延喜ではなく延長二年に四十歳。九八〇番参照。

九八〇 山ざとはあきこそことになしけれしかのなくねにめをさましつゝ  
つらゆき 忠峯五首

【異同】ナシ

【現代語訳】山里は、秋こそことに悲しく思われるよ。鹿の鳴く音に何度も目を覚ましては。

【語句】○あきこそことになしけれ 秋はことに悲しいことだ。漢武帝の「秋風辞」・宋玉の「九弁」等に見

える「悲秋」の概念をふまえている。三〇一番歌参照。所載欄の古今集や忠岑集Ⅲでは第三句「わびしけれ」。○しかのなくね 鹿の鳴く音。「奥山に紅葉ふみわけなく鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」（古今集・二二五）に代表されるように、鹿の声は秋の悲しみを高めるものであった。○めをさましつゝ 何度も目を覚ましては。目を覚ますのは「一夜のうち」と「夜毎」の両説がある。

【所載】古今集・秋上・二一四／新撰朗詠集・五二五／忠岑集Ⅰ・二九／忠岑集Ⅱ・一九／忠岑集Ⅲ・三一／忠岑集Ⅳ・三一／是貞親王家歌合・二八

【参考】作者名表記の「つらゆき 忠岑五首」は不審。九七六／九七九番は貫之の詠であるが、当該歌は古今集では忠岑作となっている。

〔以上五首担当 三浦〕

九八一 山ざと<sup>は</sup>にしる人もがなうぐひすのなきぬときかばわれにつぐべく

【異同】ナシ

【現代語訳】山里に知り合いがほしいものだ。鶯が鳴いたと聞いたたら（すぐ）私に告げてくれるように。

【語句】○山ざと 山あいの人里。人の訪れもまれな世をのがれた所として平安和歌以降詠まれる。「春たてど花もにほはぬ山里はものうかる音に鶯ぞ鳴く」（古今集・一五）、「山里はもののわびしきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけれ」（古今集・九四四）など。○うぐひすの 所載欄の文献には第三句は「ほととぎす」とあり、季節が異なる。○われにつぐべく 動詞「告ぐ」に、助動詞「べし」の連用形が接続したかたち。告げることが出来るように。所載欄の文献には「つげにくるがに」とある。

【所載】拾遺集・夏・九八／亭子院歌合・四三

【参考】作者について、所載欄の拾遺集では「延喜御時御屏風に つらゆき」とあるが、貫之の家集にはない。また、亭子院歌合には「興風」と記す。

九八二 あられふる<sup>り</sup>み山のさとのかなしきはきてたはやすくとふ人もなき

【異同】ナシ

【現代語訳】霰降る（こ）山深い里に住む悲しさは、気軽にやってきて（私を）訪ねてくれる人もないことだ。

【語句】○かなしきは 所載欄の後撰集では、第三句「わびしきは」とある。○たはやすく 「たはやすし」の連用形。たやすく。下に打消の語を伴うことが多い。「たはやすく人寄り来まじき家を造りて」（竹取物語）。

【所載】後撰集・冬・四六八

九八三 山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】山里は冬こそさびしさが募るのだった。人も離（か）れ、草も枯れてしまふと思うと。

【語句】○人めも草もかれぬ 「かれぬ」は、動詞「かる」に、完了の助動詞「ぬ」が接続したかたち。「かる」は掛詞。「人目」が「かる」とは、人の遠のく、離れる、の意。「草」が「かる」とは、枯れる、の意。「秋来れば虫とともにぞなかれける人も草葉もかれぬと思へば」（是貞親王家歌合・三三）。

【所載】古今六帖・第六帖「ふゆ」三五七〇／古今集・冬・三一五／和漢朗詠集・五六四／宗于集・一五／陽成院一親王姫君達歌合・六／俊成三十六人歌合・六八／新時代不同歌合・五六／三十六人撰・九七／百人秀歌・二一／百人一首・二八／和歌用意条々・三一／桐火桶・一一七

【参考】作者名は、古今六帖には記載がないが、所載欄の文献は「源宗于」で一致する。

九八四 すみわびぬいまはかぎりぞ山ざとにつまきこるべきやどもとめてむ なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】もう生きてゆけない。もう限界だ。（世間を逃れ）山里に爪木を樵（こ）り集めて暮らす住処（すみか）を求めよう。

【語句】○すみわびぬ 動詞「住む」と「わぶ」の複合語、「すみわぶ」に完了の助動詞「ぬ」の接続したかたち。生き難い、生きることがつらい、の意。○つまきこるべきやど 「爪木」は、たきぎにする小枝。「こる」は樵る。木を切ること。俗世を離れ隠遁したい気持ちに「爪木こるべき宿求む」と言った。所載欄の文献の伊勢物語五九段では二句から四句は「今はかぎり山里に身をかくすべき」とある。○もとめてむ 動詞「求む」に完了の助動詞「つ」の未然形「て」と、意志の助動詞「む」の接続したかたち。



【所載】後撰集・雜一・一〇八三／業平集Ⅰ・七八／業平集Ⅱ・九／業平集Ⅳ・二七／古来風体抄・三三四／伊勢物語・五九段・一〇七

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

九八五 やまの井  
あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものは

【異同】ナシ

【現代語訳】あさか山の影まで映って見える（湧き水を囲った）山の井は浅く——浅くはあなたを思うのですか（どれほど深く思っていることか）。

【語句】◎やまの井 湧き水の周囲を囲い、清水を溜めたところ。通常の掘った井戸は底が見えないくらい深いのに対し、浅い。この「あさか山の」歌をもとに、相手を思う心の浅さ、深さを人々は表現しあった。○あさかやま 安積山。浅香山とも。陸奥の歌枕。福島県郡山市。○山の井 初句から第三句までは「浅く」を導く序。○おもふものは 「ものかは」は反語。思うものか、思いはしない。

【所載】古今集仮名序書き入れ／万葉集・三八二九（旧三八〇七）安積山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国 アサカヤマカゲサヘミユルヤモノサキコロワガオモハナクニ あさかやまかげさへみゆるやまのゐのあさきところをわがおもはなくに／夫木抄・八六八〇／小町集Ⅰ・一〇三／俊頼髓脳・三七／綺語抄・二一六／和歌童蒙抄・三八九／古来風体抄・六、一七二、二一四／和歌色葉・一〇七／八雲御抄・一六三／為兼卿和歌抄・六／和歌口伝・二七九／悦目抄・四五／和歌無底抄・二一、三九／井蛙抄・四三七／今昔物語集・一六五／十訓抄・八〇／古今著聞集・一三九／大和物語・一五五段・二六〇

【参考】手習いのはじめに習う歌として著名。「なには津に咲くやこの花冬ごもりいまははるべと咲くやこの花」とともに、「歌の父母」と古今集仮名序では言う。古く万葉集の巻十六・三八二九（旧三八〇七）では長い左注がある。「右歌伝云、葛城王遣于陸奥國之時国司 承緩怠異甚、於時王意不悦色顔面、雖設飲餞不肯宴樂、於是 有前采女、風流娘子、左手捧觴右手持水擊王膝而詠此歌、尔乃王意解悅樂飲終日」というもので、深い心を訴えて相手の不機嫌な態度を和らげた采女（うねめ）の作とする。

（以上五首担当 平野）

九八六 むすぶてのしづくに<sup>こる</sup>たき山の井のあかでも人にわかれぬるかな<sup>つらゆき</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】手を結んで掬うと、その落ちる雫で濁ってしまう山の井の閑伽水ではないけれど、飽かぬ思いのままであの人と別れてしまったことだよ。

【語句】○むすぶ 手を結んで水を掬うこと。○しづくに<sup>こる</sup> 手から漏れた水が雫となり、それにより山の井の水が濁る。○山の井 「山」は貫之集その他から「志賀の山」とわかる。志賀の山越えは、京都北白川から如意ヶ峰を経て崇福寺（志賀寺）へと続く道。上三句は次の「あかでも」にかかる序。○あか 「閑伽」と「飽」（か）の掛詞。閑伽とは仏教語で浄水のこと。

【所載】古今集・離別・四〇四／拾遺集・雜恋・一二二八／新撰和歌・一九七／貫之集Ⅰ・七八一／貫之集Ⅱ・八四／時代不同歌合・一〇五／綺語抄・二二七／奥儀抄・一二八／袖中抄・八二八／古来風体抄・二六六／西行上人談抄・一六／詠歌一体・五五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の古今集等の「紀貫之」と一致する。なお、当該歌は、所載欄に見るとおり、歌学書・注釈書の類に多く引用された。中でも、古来風体抄で「すべてことば、ことの続き、姿心、限りもなき歌なるべし。歌の本体はただこの歌なるべし」と絶賛された。

九八七 くやしくぞくみそめてけるあさければそでのみぬるゝ山のゐのみづ

【異同】ナシ

【現代語訳】悔しいことに汲みそめたことだよ。浅いので袖だけが濡れる、そんな山の井の水を。

【語句】○くやしくぞくみそめてける 悔しいことに汲みはじめたことだよ。山の井の水を汲みはじめるのが悔しい、の意。「おとにのみききてはやまじあさくともいざくみみてん山の井の水」（後撰集・一一六五）のように、山の井の水を汲むのは、男女の仲を始めることを示し、恋しはじめたことを悔いている。「くやしくぞのちにあらはむとちぎりけるけふをかぎりといはましものを」（大和物語・第一〇一段）。○あさければ 「あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは」（古今集・仮名序）のように山の井は「浅い」ものであり、相手の思いが「浅い」ことを言い重ねている。

【所載】ナシ

【参考】当該歌を引いたものとして源氏物語・若紫卷「汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき」(尼君)が挙げられる。

九八八 いつながらわかるゝときけば山の井のにごりしよりもわびしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】家にいてお別れするのは、山の井が濁ったときよりもっと飽き足らなくて、つらいことです。

【語句】○いつながらわかるゝときけば 所載欄の文献では「いへながらわかるゝときけば」。「いへ」の「へ」と「つ」の誤写と考え、「いへながら」で解釈する。「いへながら」とあれば、「家にいながら」と、山の井の「旅」と家の対比が見られるか。○山の井ののにごり (雫で) 濁る山の井の閑伽水。九八六番歌参照。この歌は、所載欄の拾遺集の詞書に「三条の尚侍方違へに渡りて帰る明日に、雫にに「ごるばかりの歌今はえよまじと侍りければ、車に乗らんとしけるほどに」とあり、貫之自身の作(九八六番歌)を踏まえた詠作。

【所載】拾遺集・雑恋・一二二九／貫之集I・八五三

九八九 あさからむことをだにこそうらみしかたえやはつべき山の井の水

【異同】ナシ

【現代語訳】二人の仲が浅いことを恨めしく思っていたけれど、だからといって絶えてしまつてよいのかというとそうではないでしょう。この山の井の水は。(想いが浅いことだけを恨みに思っているけれど、だからと言って、この縁が絶えはててしまつてよいかというとはないでしょう。)

【語句】○あさからむ 浅いであろう。「浅くなるような」ことを婉曲に言う。水が浅いことを男女の仲の浅さと掛けている。「草ふかみ浅せにしみづはぬるくともむすびし袖は今もかわかじ」(元輔集・二四一)。○たえやはつべき 絶えてしまつてよいものでしょうか。決してそうではありません。「たえはつ」は「絶え果つ」で山の井が湧き出なくなることと男女の仲が離れきつてしまうことを掛けた。「や」は反語。

【所載】続後撰集・恋五・九八九

九九〇 めづらしやむかしながらの山の井はしづめるかげぞくちはてにける  
おきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】珍しいことだ。昔ながらの山の井の様子は変わらないけれど、水に映る沈淪の身の私の影だけが、朽ち果ててしまった。

【語句】○むかしながらの山の井 昔のままの山の井（井戸）。「むかしながら」に地名の「長等」を掛ける。長等山は滋賀県大津市三井寺の裏山。○しづめるかげぞくちはてにける 沈淪のわが身の影は朽ち果ててしまった。「かげ」は水に映る自分の像。「しづめる」は水に影が沈むことと、沈淪の意の「しづむ」を掛けている。

【所載】後撰集・雑二・一一三五

【参考】作者名「おきかぜ」とあるが所載欄の後撰集ではよみ人知らず。なお後撰集では一首前（一一三四）に興風の歌がある。

〔以上五首担当 杉本〕

九九一 山びこはこゑのいほりのなければやおりひ／＼といへどこたへぬ  
やまびこ

【異同】ナシ

【現代語訳】山彦には声の庵が無いから、こちらから、思う思う、といくら言っても、（空しい返事ばかりで）私の気持ちに伝えてくれないのだろうか（あなたは）。

【語句】◎やまびこ 山の神。山の霊。また、山の妖怪。山に向かつて呼ぶと同じ声が返って来る現象を、現在（こたふ）と呼ぶが、古人はそれを、山に存在する山彦の答えと考えた。「声」「呼ぶ」「こたふ」などの語とともに詠まれる。「山びこ」は声ばかりで実態の伴わぬものとして、恋の嘆きの歌に詠まれる例が多い。広い邸などに音の反響するのも「やまびこ」といった例がある（源氏物語・夕顔巻）。○こゑのいほり 声の庵。用例なく、意味不明。庵は宿る所とみて、山彦の宿る所の意か。○思／＼ 思ふ思ふ。「おりひ／＼」をミセケチ。この場合の「思ふ」は好きだ、慕っている、の意。「いなりやまみなみし人をすきずきに思ふ思ふとしらせてしかな」（好忠集・五七九）。○いへどこたへぬ 「山彦」は同じ声で返事をするのだから、この場合の「こ

たへぬ」は、こちらの希望をかなえてくれない、の意であろう。

【所載】ナシ

九九二 つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】冷淡な人を恋して、答えて下さるまであきらめず呼び続け、（しかし少しも答えて下さらず）嘆き通してきました。

【語句】○山びこの 「こたへ」を導く枕詞と考える。現代語訳に入れない。枕詞ととらず、「山彦でさえこうして答えるほどの高い私の嘆き」と解する説（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』）もあるが、少し無理ではないか。○人をこふとて 所載欄の新撰万葉集では「ひとをまつとて」。○こたへするまで 所載欄の新撰万葉集では「おとのするまで」。

【所載】古今集・恋一・五二一／新撰万葉集・二〇五／寛平御時后宮歌合・一六四

九九三 山びこのこゑのまに／たづねいけばむなしき空をゆきやつかれん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山彦の声の方へ従い探し求めて行くと、誰もいず、むなく、ただ歩き回って、足が疲れてしまふのではないだろうか。

【語句】○こゑのまに／ 声にしたがつて。声のする方へ。「まに／」は、「かむなづき時雨にあへるもみぢばの吹かば散りなむ風のまにまに」（万葉集・一五九四（旧一五九二））など、……とともに、……につれて、の意。○たづねいけば 「いけば」は動詞「行く」の已然形に助詞「ば」が接続したかたち。「さをしかのふす草むらはみえねどもいもがあたりをいけばかなしも」（人麿集IV・一五）。所載欄の後撰集では「とひゆかば」、参考欄の貫之集では「尋ねゆかば」。○ゆきやつかれん 行きや疲れん。行き疲れるのではないか。「ゆきつかれ」は行くことよって疲れること。「たまほこの道行き疲れ稲むしろしきても君を見むよしもがな」（万葉集・二六五一（旧二六四三））など。所載欄の後撰集の下句は「むなしきそらにゆきやかへらん」。

【所載】後撰集・恋五・九七〇

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の後撰集「よみ人知らず」とは一致しない。ただし貫之集・六四六に「やまびこの声のまにまに尋ねゆかばいふ事もなく我やまどはん」という類似した歌がある。

九九四 山びこはきみにぞあるらし心みにわれとひやめばおとづれもなし<sup>せず</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】山彦はあなたであるらしい。（呼べば答えるけれど、それだけで、自分からは呼んでくださらない）、ために私が問うことをやめれば（あなたからは）何の音沙汰もない。

【語句】○心みに 試みに。○われとひやめば 我問ひ止めば。「とふ」は見舞う、訪問するなどの意。○おとづれもせず 「おとづれす」はサ変動詞。訪問する、手紙で安否を問うの意。

【所載】ナシ

【参考】拾遺抄・二九四「山びこは君にもにたるころかな我こそせねばおとづれもせず」（拾遺集・六四四にもある）は同じ内容の歌。答えはするがそれ以上の働きかけのない憂（うれ）いを歌う。

九九五 よも山のやまの山びこなければやわがよぶこゑにこたへだにせぬ

【異同】やまの山ひこ―やまのひこ（桂）

【現代語訳】四方の山という山に、山びこがいらないから、わたしの呼ぶ声に（あなたからの）返事さえないのか。

【語句】○よも山 四方の山。まわり全部の山。○やまの山ひこ 用例は多い。「嘆き樵る斧のひびきの聞こえぬは山のやまびこいつちにしぞ」（興風集・四二二）。○こたへだにせぬ 「こたへす」という動詞。「ぬ」は打ち消しの助動詞「ず」の連体形。「なければや」の係助詞「や」に呼応して、返事さえもしないのか、の意となる。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野〕

九九六 あふことのやまびこにしてそらならば人めもわれはよきずぞあらまし  
つらゆき

【異同】よきすそあらまし―よきすそ有らし（桂）

【現代語訳】お会いすることが、まるで山彦のようなもので実際にはないのであるならば、他人の目も私は避けずにいられますものを。

【語句】○あふことの 格助詞「の」は主格を表す。○やまびこにして 「にして」は、「に」が断定の助動詞「なり」の連用形で、……であつての意。○そらならば 「そら」は、実に対する虚の意味で、実際にはない状態を意味する。「山彦」がそら（空中）にあつて実在しないのと、「あふこと」が存在しない意とを掛ける。所載欄の貫之集には「よそならば」とある。○よきずぞあらまし 「よく」（他動詞・上二段）は、よける、避けるの意。「まし」は、反実仮想の意で、ここは、実際にその事実がないならば人目を避けなくて済むものなのに、現実には人目を気にして憚らねばならない、の意。

【所載】貫之集Ⅰ・五五八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九九七 うちわびてよば<sup>は</sup>むこゑにやまびこのこたへぬそらはあらじとぞ思

【異同】よは<sup>は</sup>むこゑに―よはむこゑに（御）

【現代語訳】つらい思いで呼び続ける声に、山彦が答えない空はあるまいと思う。恋の苦しい思いを訴えたなら、きつと何かの答えがもどってくるはずと思う。

【語句】○うちわびて 「うちわぶ」の「うち」は接頭語、「わぶ」は、悲観する、嘆く、思いわずらう、意。「葦引」の山田のそほううちわびてひとりかへる（「帰る」「蛙」の掛詞）のねをぞなきぬる」（後撰集・恋四・八〇六）。○よばはむこゑに 「よばふ」は、「呼ぶ」の未然形「よば」に、反復継続の意の助動詞「ふ」が付いたもので、助動詞「む」は、仮定の意味。ずっと呼び続けるとしたら、その声に。○山びこのこたへぬそらはあらじとぞ思 山彦は音声がこたまして返ってくるもの、相手からの反応がきつとあるはずだと思ふ、の意。「山彦の答へぬそらはよにもあらじ声をさへにも隔てつるかな」（西宮左大臣集・七七）。なお、所載欄の古今集には「こたへぬ山」。

【所載】古今集・恋一・五三九／後撰集・恋五・九六九／西宮左大臣集・四三／貫之集（新編国歌大観・陽明文庫本）・六五五

【参考】所載欄に示したように、貫之集と西宮左大臣集に見える。古今集によみ人知らず、後撰集では贈答歌仕立て三首中の第一首で、やはりよみ人知らずとするが、貫之集に見えるところから、片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、古今集のよみ人知らず歌の中に、貫之の歌が混じっている可能性も考えねばならぬと指摘する。なお、古今六帖・九九三番歌は、後撰集では当該歌の返歌である。

九九八 うぐひすのなくねをまねに山びこのこと<sup>を</sup>ありがほにもとめつるかな 伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】うぐいすが鳴く声をまねして答える山彦を、何か意味ありげな様子で返事を求めていることだよ。

【語句】○うぐひすのなくねをまねに 「まねに」は、例歌なく不審。所載欄の文献「まねぶ」で解す。鶯の鳴く声をまねして。何か特殊な事情がありそうだが、よくわからないので、完璧な解は示しにくい。○ことありがほに 何かわけのありそうな顔つき、様子で。意味ありげな様子で。「ながめつつことありがほに暮らしてもかならず夢に見えばこそあらめ」（後拾遺集・恋一・六七九）。なお、所載欄の文献では「友ありがほに」とある。○もとめつるかな 「山びこを」とあるので、答えを求めて音声を発している主体は、女性に返事を求めていると解した。

【所載】夫木抄・三七八／金葉集初度本・春・四三／伊勢集Ⅱ・三三五／伊勢集Ⅲ・三三八  
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

九九九 山びこのよそにこたへしこゑなれどこと○ひしこそうれしかりけれ

【異同】こと○ひしこそ—ことひしこそ（御）

【現代語訳】山彦が関係なしに答えた、あなたが他の人にお答えになった声ですが、ものを言っておられるのを聞きしたのは、嬉しかったことです。

【語句】○よそにこたへし 「よそに」とは、自分とは関係のないところで、の意。他人に。○こととひしこそ



詠歌事情が不明であるが、「こととふ」は、ものを言う、話す、意に解した。○うれしかりけれ 強意「こそ」の結びで「けり」の已然形。女性の声を聞いて、男が恋の思いを言いかけることができた。所載欄の文献には「恋しかりけれ」とある。

【所載】伊勢集Ⅰ・二六九／伊勢集Ⅱ・二六九／伊勢集Ⅲ・二七一

一〇〇〇 山びこのあひとよむまでつまごひに<sup>の</sup>しかなく山にひとりのみして  
やかもち

【異同】つまごひに―妻こひの（大）

【現代語訳】山彦が響きあうほどに妻を恋い慕って牡鹿が鳴く、その山に私はたった独りでいることよ。

【語句】○山びこのあひとよむまで 「あひとよむ」の「あひ」は接頭語、「とよむ」は、あたりに響きわたるほど声をたてること。○つまごひに 妻が恋しくて。

【所載】万葉集・一六〇六（旧一六〇二）山妣姑乃 相響左右 妻恋尔 鹿鳴山辺尔 独耳為手 ヤマビコノアヒトヨムマデツマゴヒニシカナクヤマニ（カナクヤマヘニ）ヒトリノミシテ やまびこのあひとよむまでつまごひにかなくやまへにひとりのみして

【参考】作者名「やかもち」は、所載欄の文献に一致する。万葉集では、家持が、妻の坂上大嬢を奈良京に残して、久邇京にあつた時の詠で、左注に「天平十五年癸未八月十六日作」とある二首の中の一つ、内舍人時代の作である。なお、当該歌の上句は、万葉集左注に古歌集にあるとする長歌「……山彦の あひとよむまで ほととぎす 妻ごひすらし さよなになく」（一九四一（旧一九三七））の一節に類似する。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

一〇〇一 いづかたにわれと<sup>まどへ</sup>よめとかやまびこのこたへしかたにおとづれもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】どちらの方向へ迷い行けと行って、山彦が応えるように返信をくれたところを私は訪ねることもしないのか。

【語句】○いづかた どの方向。どちら。○われまどへとか 「まどへ」は「まどふ（迷う、さまよう）」の命

令形。「山彦の声のまにまに尋ねゆかばいふ事もなく我やまどはん」(貫之集・六四六)。○やまびこ「やまびこ」は鈸(こたま)。九九一番歌参照。恋歌では、人の出した声が山に反射して帰って来る鈸を、恋人の応答によそえる。「こたへ」「おと」は「やまびこ」の縁語。○おとづれもせぬ「おとづれ」は訪問、音信、たより。たよりもよこさない。訪れることもない。「やまびこは君にも似たる心かな我声せねばおとづれもせず」(拾遺集・六四四)は、自分が声を出さなければ相手が答えないことを「やまびこ」に喩えているが、当該歌は「やまびこ」が答えたのに「訪れもせぬ」とあり、自らの心の迷いを詠んだものか。

【所載】ナシ

一〇〇二 いはほ いかならむいはほのなかにすまへかはよのうきことのたづねこざらむ

【異同】すまへかは―すまへかは(桂)、すまへかは(大)

【現代語訳】いったいどのような深い山の中の岩窟に隠れ住んだならば、世の中のつらいことがやって来ないだろうか(そんなところなどない)。

【語句】◎いはほ 「ほ」は「秀(ほ)」の意。地上に突き出た高く大きな岩。○いかならむ どんな、どのような。形容動詞「いかなり」の未然形+推量の助動詞「む」の連体形。ここでは「いはほ」にかかる連体修飾語。○いはほのなか 岩窟、洞窟の中。俗世を離れた山奥の住処のたとえ。○すまばかは 「かは」は疑問、反語の係助詞。ここでは反語。○よのうきことのたづねこざらむ 「よのうきこと」を擬人化した表現。この世のつらいことが訪ねて来ないだろうか。来ない場所などない。「すまばかは」の反語に呼応している。「らむ」は現在推量、実際は「世の憂きこと」が聞こえてくる所において、そうでない場所を想定している。「鳥の音も聞えぬ山と思ひしに世のうきことはたづねきにけり」(風葉集・一四〇四)。

【所載】古今集・雑下・九五二/奥儀抄・五六五/和歌色葉・二八七

【参考】顕昭から古今余材抄までの古今集の注釈書は、法句譬喩經・無常品の「梵志(バラモンの僧侶)の四人兄弟が、七日後に命が尽きると知り、神通力でそれぞれ大海、須彌山、虚空、市に隠れるが、無常殺鬼から逃れることはできなかった。」という話が本説であるとするが、新日本古典文学大系『古今和歌集』では、文選・遊仙詩七首の道士鬼谷子などを想像したものとする。

一〇〇三 みよしのゝいはきりとをしゆく水のおとにはたてじこひはしぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】吉野の、岩間をぬって激しく流れる水の音、そのようにはつきりと心中の思いを声に出しては言まい、たとえ恋死するとしても。

【語句】○みよしの 「み」は美称。吉野。○いはきりとをしゆく水 岩切り通（とほ）し行く水。岩間をぬって行く水。「岩間を貫き通して流れる」とする説もあるが、「石にさはりて横切り流れる水」とする古今余材抄の説をとる。「みよしの……ゆく水の」までが「音」にかかる序詞。○おと 「音」は、水の音と、言葉、声の両義。○こひはしぬとも たとえ恋い焦がれて死んだとしても。恋死は万葉集からみられる類型だが、水に因んだ例歌として「山高み下行く水の下にのみ流れて恋ひむ恋は死ぬとも」（古今集・四九四）がある。

【所載】古今集・恋一・四九二／家持集Ⅰ・二八三／家持集Ⅱ・二九七／奥儀抄・一八九、四九六

【参考】「高山の岩もとたぎち行く水の音には立てじ恋ひて死ぬとも」（万葉集・二七二七（旧二七一八））の類想歌と考えられる。

一〇〇四 あまごろもなづるちとせのいはほをもひさしきものとわがおもはななくに

【異同】なづるちとせの―なつはちとせの（桂・大）

【現代語訳】天人の衣が撫でる千歳の岩さえも、私には久しいものとは思われませんのに。

【語句】○あまごろも 「あまごろも」は、「難波潟潮満ちくらしあま衣田蓑の島にたづ鳴き渡る」（古今集・九一三）のごとく、通常は海人の衣の意で、「尼」「雨」と掛詞になる場合もあるが、当該歌は天人の衣の意。

天人の衣は、「これやこのあまの羽衣うべしこそ君がみけしと奉りけれ」（伊勢物語・十六段・二六）のごとく「あまの羽衣」とされることが多いから、そこから連想された語か。所載欄の平中物語では「天つ袖」となっている。○なづるちとせのいはほ 天人の羽衣が撫でる千歳の岩。「いはほ」は一〇〇二番歌参照。いわゆる

「盤石劫」といわれる伝説の故事で、奥儀抄によれば、天人が三年に一度地上に降りてきて、「三銖（さんしゆ）」しかない軽い衣で方四十里の石を撫で尽くすまでの時間を一劫とする、というもの。「君が代は天人の羽衣まれに來て撫づとも尽きぬいはほならなん」（拾遺集・二九九、是則集・二五）。○わがおもはななくに 私には思えないのに。私は思わないものを。「ななくに」は打消の助動詞「ず」のク語法に助詞の「に」がついたもので、詠

嘆的打消。「朝霜の消やすき命誰がために千年もがもと我が思はなくに」(万葉集・一三七九(旧一三七五))、「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」(万葉集・三八二九(旧三八〇七))など、文末の用法は上代に多い。

【所載】平中物語・一一四

【参考】平中物語(二九段)では、「いはほにも身をなしてしか年経てもをとめが撫でむ袖をだに見ん」という男の贈歌に対し、琴弾く女の返歌として載る。

一〇〇五 いかばかりひさしくもあらずあまごろもおとめがなづるいはづかりなり

【異同】ナシ

【現代語訳】そんなに長い時間でもありません。天人の衣で、天女が撫でるといふ岩(が無くなる)くらいです。

【語句】○いかばかり 平叙文においては程度のはなはだしさをいう副詞。どんなに。たいそう。非常に。○あまごろも 一〇〇四番歌参照。○おとめがなづるいは 「なづるいは」は一〇〇四番歌参照。「お(を)とめ」は天女。盤石劫の故事と乙女(天女)が結びつけられた早い例としては、「八乙女の袖かと見ゆる女郎花君を祝ひて撫ではじめけり」(亭子院女郎花合・四九、夫木抄・四二二八)があり、その後も「動きなきいはほのはても君ぞ見む乙女の袖の撫で尽くすまで」(拾遺集・三〇〇／元輔集・五七)、「いつしかも袖うちかけむ乙女子が世をへて撫づる岩の生ひ先」(源氏物語・澤標・二五〇)、「君が世に天つ乙女の行き通ひ撫づるいはほの動きなきかな」(続後拾遺集・六〇二、六条斎院歌合・二二)などがある。

【所載】ナシ

【参考】詠作事情は不明であるが、大和物語四十三段に、恵秀という僧が横川に籠もり、場所を聞かれた時、女に贈った「なにばかり深くもあらず世の常の比叡を外山とみるばかりなり」と似た構造を持つ。本当は大変なことなのに、いやたいしたことないと言つてみせた歌。

(以上五首担当 中野)

伊勢

一〇〇六 いはのうへをすみかにしたるあしたづはよをのどかにも思べきかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 盤石の岩の上を棲家している鶴は、世の中をきつと穏やかで変わらぬものと思っ

【語句】 ○あしたづ 葦の生えている水辺にいる鶴、の意から次第に、鶴の意を表す歌語となる。○のどかにも

「のどかなり」は穏やかで静かなさま。岩は不変のもの、その上に住む鶴は、千年の齢をさらにゆつたりとどかに過ぐすに違いないと歌う。所載欄の伊勢集ⅠⅡによると、八条大将藤原保忠の四十賀の折の屏風歌であり、伊勢集Ⅰの詞書に「岩の上に鶴立てるところ」とある。

【所載】 伊勢集Ⅰ・一八六／伊勢集Ⅱ・一九〇／伊勢集Ⅲ・一八八

【参考】 作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一〇〇七 こけながら□けるいはほはひさしくて君にくらぶるころあるかな  
を つらゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 苔の生えたまま置いてある大きな岩は久しくあつて、あなたの齢に並んでいるという気持があるのだなあ。

【語句】 ○こけながら 苔の生えたままで。岩に苔が生じるには長い時がかかる。所載欄の貫之集ⅠⅡに「苔ながく」。○をけるいはほは お（置）けるいはほは。「いはほ」は、一〇〇二番歌参照。所載欄の貫之集ⅠⅡに「生ふるいはほの」。○君にくらぶるころあるかな 苔むした岩は君の齢とつりあうという気持があるのだなあ。「君」は祝われる人。「比ぶ」は、比較できる、つりあうものとする、の意。君の幾久しさを祝う。所載欄の貫之集Ⅰに「……心やあるらん」、貫之集Ⅱに「……心あるらん」。

【所載】 貫之集Ⅰ・一九四／貫之集Ⅱ・八三

【参考】 作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。なお、所載欄の貫之集Ⅰによれば、宇多法皇四十賀の折の屏風歌の一首。

岑

みつね

一〇〇八 しがらきのみねたちかくす春がすみはれずもゝのおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】信楽山の頂をおおうように立ちこめた春霞はいつまでも晴れない、私も心晴れやらすものを思い続ける今日この頃であるよ。

【語句】◎岑 峰。山の頂上。「山尖高也」(十卷本和名抄)、「峰とは山の高き所也」(頭注密勘抄)。万葉集から詠まれる。山の名が付される時もあるが、付されない歌が多い。霞・雲・霧・雪・日・月・桜・紅葉・松・杉・鹿・鳥など、さまざまな景物と取り合わせて詠まれる。○しがらきのみねたちかくす 既出六〇八番歌参照、第二句「たちこゆる」とある他は当該歌に同じ。「たちかくす」は春霞が信楽山頂をおおいかくす、の意。

【所載】古今六帖・第一帖「かすみ」六〇八番既出

【参考】作者名「みつね」とあるが、他文献で確認できなかった。

一〇〇九 しらくものたえずたなびいたなびにだにすめばすみぬるよにこそありけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲が絶えずたなびいているこのような高い峰にでさえも、住めるものであったよ。人の世とはそんなものであったよ。

【語句】○みねにだに 人里から隔絶したこんな山の頂にすら、の意。○すめばすみぬる 住めば住みぬる。住んでみれば住むことのできた。「住みぬる」の、完了の助動詞「ぬ」には、こうして暮らしてこられたという気持がある。所載欄の貫之集には「住めば住まるる」。○よにこそありけれ 人の世というものであったなあ。上の句で様々な情況を示して、末の句でこのフレーズで歌いおさめる歌は多い。「手に結ぶ水にやどれる月影のあかなきかの世にこそありけれ」(拾遺集・一三三二・紀貫之)。

【所載】古今集・雑下・九四五／小町集Ⅰ・九八／貫之集(新編国歌大観・陽明文庫本)・五五七／新時代不同歌合・二一／万葉集時代難事・六三

【参考】古今集には、作者名を惟喬親王とする。ただし、所載欄の貫之集にも、また小町集にも見える。

一〇一〇 秋かぜのふきにし日よりおとはやまみねの木ずえも色づきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が吹き出したその日からずっと、音羽山は峰の梢もすっかり色付いてきたことだなあ。

【語句】○秋かぜのふきにし日より 秋風が吹きはじめたその日以来。秋の到来は風の音により知るところから、三句の「音羽山」を導く。○おとはやま 「音羽山」は山城の歌枕。京都市山科区と大津市の境の山で、逢坂の関とは峰続き。

【所載】古今六帖・第六帖「紅葉」四〇七五／古今集・秋下・二五六／貫之集Ⅱ・八六／秀歌大体・七五

【参考】作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一〇一一 通りのねもきこえぬたにのむもれ木はわが人しれぬなげきなりけり

たに

【異同】ナシ

【現代語訳】鳥の鳴く音も聞こえぬほど深い谷にある埋もれ木は、わたしの、人知れずもの思う嘆きの「木」であつたのだなあ。

【語句】◎たに 谷。台地や山地にはさまれて、低い地形が細長くつづくところ。和歌では、満たされぬ思いや疎外感の比喩として詠まれる場合がある。○むもれ木 埋もれ木。樹木が長い年月にわたって地中や水底に埋もれて硬くなったもの。「色好みの家に埋もれ木の人知れぬこととなりて」（古今集仮名序）のように、世に知られず人に顧みられないものの比喩として言われることが多い。○人しれぬなげき 他人に知られることなく、ひとり心の中にこめた悲嘆。「なげき」は長息（ながいき）の約。思いにたえかねてもらす溜息のこと。転じてもの思い、悲嘆。「嘆き」に「木」を掛け、深い谷にある「埋もれ木」は人に知られぬ「嘆き」の「木」であつた、としたもの。

【所載】貫之集Ⅰ・六四五

【参考】貫之集Ⅰでは、恋の部にある歌。

一〇二二 ひかりまつたにゝは春もよそなればさきてとくちるもの思もなし  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】光のさし入るのを待っているこの谷では、華やかな春も無縁のことだから、花が咲いてすぐ散るのを悲しむという、世の常のものの思いさえすることがないのだ。

【語句】○ひかりまつたに 光のさし入るのを待っている谷。不遇沈淪の状態にあるわが身の比喻。平地と違って谷では、陽の光のさしこむことが少なく、それだけに光を待つ気持ち強い。○春 花の咲く季節。ここでは時勢に恵まれた境遇の意。○よそ 自分とはかわりのないこと。○さきてとくちるもの思もなし 花が咲いたかと思えばすぐ散ってしまう、というはかなさに心を痛めることすらない。うち捨てられた者の疎外感。

【所載】古今集・雑下・九六七／新撰和歌・二九一／深養父集Ⅰ・三一／時代不同歌合・一四一  
【参考】作者名「ふかやぶ」は、所載欄の文献に一致する。

一〇二三 あさか山かすみのたにしふかければわがものおもひはるゝよもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】あさか山の、かすみのこめた谷が深いから、その谷底にいるようなわたしのもの思いは、深くとざされて晴れるときもない。

【語句】○あさか山 安積山。陸奥の歌枕。現福島県郡山市安積山公園のあたりという。○かすみのたにし 霞のこめた谷が。「し」は強意。○ものおもひ 霞の谷にこめられた身、というところから見て、おそらく不遇沈淪のものの思いであろう。○はるゝよ もの思いの晴れるとき。「よ」は、時期・時節の意。

【所載】夫木抄・九一二三／和歌童蒙抄・一八八

【参考】夫木抄では、当該歌は「よみ人知らず」だが、これと並んで、「あさ日山かすみの谷に冬ごもりわがもの思ひのはるよもなし」（九一二四）が、深養父の作としておさめられている。

一〇一四 宮木ひくあづ<sup>そま</sup>さのそまにたつなみのやむときもなく恋わたるかな  
イツミ



イツミ

【異同】 あつさのそまに―あつさのそまに（御・桂）、いつみのそまに（大） たつなみの―たつたみの（大）

【現代語訳】 宮木を引き出すあずまの柚に立つ波はやむときがない。おなじようにわたしもまた、やむときなくあの人を恋いつづけている。

【語句】 ◎そま 柚。木材を得るために植林してある山。○宮木 宮殿を造るための用材。○ひく 伐り出した木材を曳いて運び出すこと。○あづまのそま 東国の柚。万葉集では「いづみのそま」となっている。○たつなみの 柚に波の立つことは不審だが、次歌のように、木材を「そま山がは」に流して運び出すこともあり得るので、仮に、その意と見ておく。万葉集では「たつたみの」。上三句は「やむときもなく」を言うための序詞。○恋わたる 長い期間にわたって恋い続ける。

【所載】 新勅撰集・恋二・七二二／万葉集・二六五三（旧二六四五）宮材引 泉之追馬喚犬二 立民之 息時無  
態度可聞 ミヤギヒクイツミノソマニタツタミノヤムトキモナクコヒワタルカモ みやぎひくいつみのそまに  
たつたみのやむときもなくこひわたるかも／夫木抄・九〇一六／人麿集Ⅱ・三三二／人麿集Ⅲ・三三二／綺語抄  
・三四九／古来風体抄・一三一

【参考】 第二・第三句に異伝のある歌である。大久保本は万葉集の本文と一致し、その方がわかりやすいが、ここでは底本の本文に従って解した。なお、古今六帖で同じ「そま」題の下にある一〇一八番歌には、当該歌との類似性が認められる。

一〇一五 いかだおろすそま山がはのみなれざほさしてくれどもあはぬ君かな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 木材を筏にして流しおろす柚山川では、みなれ棹で棹さして下る。わたしもこうして、あなたをめぐしてやってくるのだけれども、逢ってくれないあなただよなあ。

【語句】 ○いかだおろす 木材を筏に組み、川の流れを利用して運びおろすこと。○そま山がは 柚山を流れ下る川。「そま」は一〇一四番歌参照。○みなれざほ みなれざを。舟を操って水になじみ馴れた棹。○さして 棹さすの意の「さして」に、めざすの意の「指して」をかける。上三句は「さして」を言うための序詞。

【所載】 新勅撰集・恋二・七二二

〔以上五首担当 山下〕

一〇一六 そま山にたつすぎくれのおもてく人ひかるゝ君はたのまじ

【異同】ナシ

【現代語訳】そま山に立つ杉の木がそれぞれの方向に向くように、会う人ごとにその人の方に向くあなたはもうあてにしません。

【語句】○そま山 植林した山。○すぎくれ 「くれ」は山から切り出したままの材木。ここでは杉の立ち木。

「そま山にたつすぎくれの」までが「おもてく」にかかる序詞。○おもてく それぞれ。各人それぞれ。「かくおもておもてに、とさまかくさまにいひなさるれど」（蜻蛉日記・中）。○ひかるゝ 心を惹かれる。木材を引き出す。「ひかるる」は心を惹かれるに木を引かれるを掛ける。○たのまじ あてにしません。信用しません。

【所載】ナシ

一〇一七 まきばしらつくるそま人いさくめのかりほのためとおもひけんやは

【異同】いさくめのーいさらめの（大）

【現代語訳】真木柱を植えて育てているそま人は、ほんのかりそめの小屋を建てるためと思つて樹を育てたかどうか。いや思いもしなかっただろう。

【語句】○まきばしら 檜や杉の立派な柱。宮殿や屋敷などに用いる。○つくる 木を育てる。植林する。○そま人 木を植えたり、伐り出したりする人。○いさくめ 万葉集では「伊左佐目」とあり、「いさくめ」のおどりが「く」と誤写されたもの。「いささめ」のこと。「いささめ」はほんのすこし。かりそめということ。「いささめ」にときまつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつつ」（古今集・四五四）。○かりほ かりいほ（仮庵）の略。仮に作つた旅宿用の小屋。○おもひけんやは 思つたかどうか。いや思いもしなかっただろう。「やは」は反語。

【所載】万葉集・一三五九（旧一三五五） 真木柱 作蘇麻人 伊左佐目丹 借盧之為跡 造計米八方 マキバシラツクルソマビトイササメニカリホノタメトツクリケメヤモ まきばしらつくるそまびといささめにかりほのためとつくりけめやも／和歌童蒙抄・一九一

一〇一八 みやぎひくいづみのそまにたつ雲のやむときもなくわがこふくは

【異同】ナシ

【現代語訳】宮木を引き出す泉のあるそま山に、立ちのぼる雲が絶え間ないように、やむ時もないのだ、わたしの恋する心は。

【語句】○みやぎ 宮殿を造営するための材木。「みやぎひく」はその材木を山から引き出すこと。○そま ま山の略。植林した山。○たつ雲の たちのぼる雲が。「みやぎひくいづみのそまにたつ雲の」までは「やむときもなし」にかかる序詞。○こふらくは 恋うことは。「恋ふ」のク語法。

【所載】ナシ

【参考】類歌として「みやぎひくいづみのそまにたつたみのやむときもなくこひわたるかも」（万葉集・二六五三（旧二六四五）・「みやぎひくあづさのそまにたつなみのやむときもなくこひわたるかな」（古今六帖「そま」一〇一四）があげられる。

一〇一九 おのゝえはくちなば又もすげかむうきよのなかにかへらずもがな

【異同】すけかむ―すへかへん（桂）

【現代語訳】山中で囲碁の見物に夢中になっていて斧の柄が朽ちたのなら、またすげかえればよいのだ。山を降りてつらいこの世に帰らずにいたいものだなあ。

【語句】◎おのゝえ 晋の王質が山へ木を伐りに行き山中で、仙童の囲碁を見ていたが、一局終わらないうちに、手にした斧の柄が腐ってしまい、村に帰るともとの人は既に亡くなっていた、という述異記にみえる故事から、ほんのしばらくと思っている間に久しい年月を過ごすことをいう。○うきよのなか つらい世の中。○もがな 願望し、期待する意を表す。……であつたらいいなあ。

【所載】俊頼髓脳・三五六／和歌童蒙抄・五一

一〇二〇 ふるさとはみしともあらずおのゝえのくちしところぞこひしかりける

とものり

【異同】 みしともあらず―みしこともあらず（御・大）

【現代語訳】 昔住んでいた所は、私が知っていた頃とは違ってしまった。斧の柄が朽ちるほど夢中になって暮らした所が恋しいことだなあ。

【語句】 ○ふるさと 昔住んでいた所。○みしとも 御所本・大久保本は「みしことも」なので、底本は「こ」が脱落したものであろう。「みしごとあらず」は以前知っていた所の様子でもない。○おのゝえのくちしところ 所載欄の古今集の詞書に「つくしに侍りける時にまかり通ひつつ碁うちける人のもとに京にかへりまうできてつかはしける」とあり、筑紫国で碁を打っていた友人の所。晋の王質が仙童の碁を見ていて、一局終わらないうちに斧の柄が朽ちてしまったという故事による。

【所載】 古今集・雑下・九九一／新撰和歌・二九五／新撰朗詠集・五〇六／友則集・五八／奥儀抄・五七三／和歌色葉・二八八

【参考】 作者名「どものり」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 林〕

一〇二一 よしの山なげきこるてふおのゝえのほと／＼しくもありしほどかな

【異同】 よしの山―ふしの山（御・大）

【現代語訳】 吉野山で投げ木を伐り出すという斧の柄がほとほとと音をたてる、私は嘆きが凝り固まってほとほと死にそうになっていたことですよ。

【語句】 ○よしの山 吉野山。大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。異同欄に示したように、「ふしの山」とする伝本もある。○なげきこる 「投げ木（薪として火に投げ入れる木）樵る」に「嘆き凝る」を掛ける。「なげきこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞまづつかれける」（古今集・一〇五六）。○おのゝえ をのえ。斧の柄。一〇一九番歌参照。○ほと／＼しく 「ほとほとし」は、死にそうだという意。「人のもとより、久しう心地わづらひてほとほとしくなんありつると言ひて侍りければ」（後撰集・一二四八）。斧の音の擬音語「ほとほと」を掛け、三句目までは「ほとほとし」を導く序。「なげ木こる人入る山の斧の柄のほとほとしくもなりけるかな」（拾遺集・九一二）、「宮つくる飛彈の匠の手斧音ほとほとしかる目をも見しかな」（拾遺集・一二二六・国用）。「投げ木」「樵る」「ほとほと」は、「斧」の縁語。

【所載】ナシ

【参考】木を伐るために斧を持って山に入ることについては、晋の王質が木を伐りに山に行き、仙童の碁を見らうちに斧の柄が朽ちていたという故事（述異記による）がある。一〇一九番歌・一〇二〇番歌参照。また、この故事を踏まえた道綱母の「薪（たきぎ）こることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄はここに朽たさむ」（道綱母集・三六）が、拾遺集・枕草子などに採られて有名。

### すみがま

一〇二二 たにふかくやくすみがまのけぶりだにみねはくもとはならぬものかは

【異同】ナシ

【現代語訳】谷の奥深くで炭を焼く炭竈の煙でさえ、山の峰まで立ち上れば雲とならないことがありましようか。必ず雲となりますよ。

【語句】◎すみがま 木材を蒸し焼きにして炭を作る竈。歌題として見えるのは古今六帖が早い例。人が訪れることもない山奥で煙を立てている炭竈の侘びしさ、もの寂しさが詠まれたり、「炭」に「住み」を掛けたりして詠まれた。○みねはくもとは 峰は雲とは。所載欄の文献では「峰の雲とは」。「杣山に立つ煙こそ神無月時雨を下す雲となりけれ」（拾遺集・一一三八・能宣）のように、煙が高く立ち上れば雲になるとされた。

【所載】続詞花集・四九五／万代集・一五二／夫木抄・七五四／兼盛集Ⅰ・八三／兼盛集Ⅲ・九二一  
【参考】恋の思いの火の煙が雲となるという発想により、自分の思いの強さを訴えるか。「限なき思ひの空に満ちぬればいくその煙雲となるらん」（拾遺集・九七一・円融天皇。所載欄の兼盛集Ⅰには「女の、いとおもひのほかになどいひけり」、兼盛集Ⅲには、「女の、などおもひのほかにといひければ」という詞書がある。

一〇二三 ときは木を猶すみがまにこりくべてたえじけぶりのそらにたつなは

【異同】ナシ

【現代語訳】常磐木を相変わらず伐って炭竈にくべて、それでは煙が空に立つのは絶えないでしょう。あらぬ噂が立つのは絶えることがないでしょうよ。

【語句】○ときは木 常磐木。常緑樹。不変のものという語感を持つ。火にくべるとくすぶる。○こりくべて

樵り焼(く)べて。伐つてくべて。○たえじ 絶えじ。絶えないだろう。「けぶりのそらにたつなはたえじ」を倒置して強調した。○けぶり 思いの火の煙が詠まれることも多かった。一〇二二番歌参照。「木」「樵り焼(く)べ」「煙」は、「炭竈」の縁語。○そらに 煙が空に立つ意の「空に」と、「虚に」とを掛ける。「世の人のあだに立つ名と秋霧の空に立つ名といずれまされり」(忠岑集・一〇六)、「まことかと見れども見えぬ七夕は空になき名を立てるなるべし」(貫之集・二三二)。「空」「立つ」は、「煙」の縁語。○な 名。噂。評判。

【所載】元良親王集・九

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の元良親王集では、次のように、親王の詠に対する女(一条藏人)の返歌として見える。

うかれめたきぐに住みたまふことを、世の人言ひ騒ぐを聞きたまで、  
くらむどに言ひつかはしける (ママ)

ひとりのみ世にすみがまにくぶる木の絶えぬ思を知る人のなさ (七)  
また

いとへどもうき世の中にすみがまのくゆる煙を消つよしもがな (八)  
御返し、女

ははきぎをまたすみがまにこりくべて絶えじ煙の空に立つ名は (九)

一〇二四 ながめつゝよにすみがまのわ<sup>れ</sup>ひ人もしたにもゆともたれかしるべき

【異同】ナシ

【現代語訳】ずつと物思いに耽りながら暮らしている私のことを、他人は、(炭竈の火がくすぶるように) 秘かに恋の思いに燃えているとも、誰が知るはずがあるうか。誰も知らないだろうよ。

【語句】○よにすみがま 「よに」の「世」は、世の中、世間。特に男女の仲の意を込める。「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(古今集・一一三・小野小町)。「すみ」は、「世に住み」の「住み」と、「炭竈」の「炭」とを掛ける。「くゆりつつ世にすみがまの煙たきを吹きつつ燃やせ冬の山風」(好忠集・三六〇)、「うちはへてくゆるも苦しいかでなほ世にすみがまの煙たえなん」(後拾遺集・八一九・藤原範永女)。○われ人も 底本「ひ」にミセケチがあるので、「我、人も」と解釈した。○したにもゆ 下に燃ゆ。秘かに恋の思いに燃える。炭竈の火がくすぶる意と、心の中で秘かに恋い焦がれる意を掛ける。「蚊遣火は物思

ふ人の心かも夏の夜すがら下に燃ゆるん」（拾遺集・七六九・能宣）。「燃ゆ」は、「炭竈」の縁語。  
【所載】ナシ

一〇二五 ひとめだにみえぬ山べにたつそ<sup>くも</sup>らをたれすみがまのけぶりといふらむ  
まとの左大臣

【異同】ナシ

【現代語訳】人が（住むことはおろか）訪れることさえもない山辺に立つ雲を、いったい誰が住んで焼いている炭竈の煙だと言うのだろう。

【語句】○ひとめだにみえぬ 人目だに見えぬ。人が訪れることさえもない。「人目」は、人の訪れ。「山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば」（古今集・三一五・源宗干）。○すみがま 炭竈。「すみ」は、「住み」に「炭」を掛ける。

【所載】後撰集・雜四・一二五七

【参考】作者名「まとの左大臣」は、所載欄の後撰集によると、「北辺左大臣」すなわち源信（まこと）のこと。恋の暗喩のある歌か。一〇二四番歌参照。

〔以上五首担当 長戸〕

せき

一〇二六 やくもたついつもものくにのてまのせきのなづけしよしもしられず  
せき

【異同】てまのせきの―てまのせき（御・大） なつけしよしも―てまとなつけしよしも（大）

【現代語訳】出雲の国の「てまの関」の名づけられた事情も知りません。

【語句】◎せき 関所。歌題としては堀河百首に採用されるのが早い例。○やくもたつ 「出雲」にかかる枕詞。「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」（古事記・一）。○てまのせき 手間の関。出雲国意宇郡に置かれた関。現在の島根県安来市伯太町安田関（旧能義郡伯太町）にあったと比定される。「國の東の境なると手間の刻（せき）に通るは、卅一里一百八十歩」（出雲国風土記）。「さりとともと思ひしかども八雲たつてまの

関にも秋はとまらず」（堀河百首・八六八）。○なづけしよしもしられず 本文不審。寛文九年版本では本文を「なづけしよしもしられず」とし、「本いかなるてまに君さはるらんイ」という傍記を付す。大久保本「てまとなづけしよしもしられず」によって解す。

【所載】ナシ

【参考】作者名「せき」とあるのは不審。作者名に人物を比定し得ない例としては一三六五番歌「みわの御」（三輪明神）がある。これと同様に関所を擬人化したものと解すべきか。また、他文献には、「八雲たついつもくのにてまのせきてまとなづけそよしまじられず」（夫木抄・九五六一）や「やくもたついつもくのにてまのせきいかなるてまに人さはるらむ」（奥儀抄・三五八、和歌色葉・一二九）など、よく似た歌が見える。

一〇二七 まてゝはゞ人もみむやわがせこをとゞめかねてぞてまとなづけし

【異同】まてゝはゞ―まてくはゞ（御）、まてしはし（大）

【現代語訳】「待て」と言えば気付いてくれるのでしょうか。あの人を引き留めることができなかったからこそ「てま」と名づけたのです。

【語句】○まてゝはゞ 「まてといはば」の約。「待て」と言えば。「まてといはば寝てもゆかなむしひて行く駒の足をれ前の棚橋」（古今集・七三九）。○てまとなづけし 「待て」と言っても戻ってこなかったたので、ひっくり返して「てま」と言えば戻ってくるという趣向か。

【所載】古今六帖・第五帖「とどまらず」三〇五三

【参考】歌枕名寄では「まてといはば人しるらむやわがせこをとゞめかねてぞ手まよひの関」（九六八三）という歌を「未勘国」の巻に載せる。また『校證古今歌六帖』は一〇二六番歌とこの歌を「此二首問答なるべし」と注記する。

一〇二八 あふことをなはしろ水にまかせてはこさむこざらばをやまだのせき

【異同】こさむこさらは―こさんこさしは（桂）

【現代語訳】逢瀬を苗代水に任せるとなると、越すも越さないというのも（逢坂の関ならぬ）「小山田の関」次第なのですね。



【語句】○なはしろ水 苗代に引いた水。○まかせては 「まかせ」は任せるの意と、水を引くの意の「引(まかせ)」を掛ける。「山田」の縁語。「はるくれば山田の水打ちとけて人の心にまかすべらなり」(拾遺集・四六)。○こさむこざらば この本文では「越さむ来さらば」となる。底本「ら」を「し」の誤写と見て、桂宮本「こさむこさじは」の本文で解す。○をやまだのせき 小山田の堰。「を」は接頭語。「堰」に「関」を掛ける。この「関」は恋の道の関。「なはしろの水こさせずとうらむるは君が心やをやまだのせき」(大斎院前御集・一三六)。

【所載】 夫木抄・九五三三／六百番陳状・一七八

一〇二九 かはぐちのせきのあらがきまもれどもいらでわれねぬしのび／＼に

【異同】 ナシ

【現代語訳】 河口の関の荒垣はしっかりと見張っているけれども、そこを入らずに私は夜を過ごしましたよ、ひそかに。

【語句】○かはぐちのせき 伊勢国一志郡に置かれたとされる関所。現在の三重県津市白山町川口(旧一志郡川口村)あたりに比定される。「岫田(くきた)の関」ともいい、枕草子に「関は 逢坂。須磨の関。鈴鹿の関。くきたの関。白河の関。衣の関。……」とある。○あらがき 荒垣。目の粗い垣根。○まもれども 見張りをしているけれども。「まもる」は、見張りをする。「衣手に水洩付くまで植ゑし田を引板我が延へまもれる苦し」(万葉集一六三八(旧一六三四))。○いらで 見張りのいる「荒垣」に入らずに。周囲の監視の目をくぐり逢うことができたという設定。参考欄にあげた催馬楽や、古今六帖の版本では「出でて」とあり、女性が厳しい監視の目を盗んで抜けだしたことになる。○しのび／＼に ひそかに。たいそう人目を避けて。「みちのくのあだちのまゆみわがひかばすすさへよりこしのびしのびに」(古今集・一〇七四)。

【所載】 ナシ

【参考】 催馬楽・河口に「河口の 関の荒垣や 関の荒垣や まもれども はれ まもれども 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣」とある。

一〇三〇 かはぐちのせきのあらがきいかなればよるのかよひをゆるさるらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】河口の関の荒垣はどういうわけで、夜の通いを許さないのでしょうか。

【語句】○かはぐちのせきのあらがき 前歌参照。○いかなれば どういうわけで。 どうして。

【所載】新千載集・恋三・一二九五／万代集・一九八〇／夫木抄・九五四一

〔以上五首担当 青木〕

一〇三二 たちよらばかげふむばかりちかきまにあひみ<sup>ぬ</sup>むせきをたれかすへけむ

【異同】あひみ<sup>ぬ</sup>むせきを―あひ見ぬせきを（御・桂・大）

【現代語訳】立つて寄つたら、影を踏むほど近い距離なのに、お目にかかれない関を誰が設けたのでしょうか。

【語句】○かげふむばかり 影法師を踏むぐらい。○あひみぬせきを 逢うことができない関、すなわち二人を遮る関を。○たれかすへけむ 誰か据えけむ。誰が据えたのだろうか。「か」は疑問の係助詞。

【所載】後撰集・恋二・六八二

【参考】後撰集には、

寛平のみかど御ぐしおろさせたまうてのころ、御帳の  
めぐりにのみ、人はさぶらはせたまうて、ちかうよせ

られざりければ、かきて御帳にむすびつけける 小八条御息所

たちよらば影ふむばかりちかけれど誰かなこそその関をすゑけん

とあり、語句にかなりの異同があるが、同じ歌と認めてよいであろう。「寛平のみかど」は宇多天皇、「小八条御息所」は大納言源昇女で、宇多天皇の更衣。

一〇三三 あからまのこしまのせきのかためてはいもがこゝろはうたがひもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】「あからまのこしまの関」が関を固めているように、しっかりと見守っている以上、彼女の心は疑う余地がありません。

【語句】○あからまの 「あからまの」は意味不明。万葉集や夫木抄では「あかごまの」とある。「こ」と「ら」は誤りやすい。○こしまのせきの 「こしまのせき」は所在不明。夫木抄でも「こしまのせき」とあるが、万

葉集の「越馬柵」を「こしまのせき」と読んだか。上二句は「かためては」の序であろう。

【所載】万葉集・五三三（旧五三〇） 赤駒之 越馬柵乃 緘結師 妹情者 疑毛奈思 アカゴマノコユルウマ  
ヲリノシメユヒシイモガココロハウタガヒモナシ あかごまのこゆるうませのしめゆひしいもがこころはうた  
がひもなし／夫木抄・九五六〇

【参考】万葉集の題詞には、「天皇賜海上女王御歌一首」とあり、「天皇」に注して「寧楽宮即位天皇也」とある。聖武天皇のことである。

はら

一〇三三 かみつけやいちしのはらのいちしろくわれとしみえ人にしらすな

【異同】われとしみえ―われとし見えぬ（大）

【現代語訳】はつきりと、私と逢ったとは人に知らせないください。

【語句】◎はら 広く平らなところ。歌ではたとえば「いちしのはらの」のように、しばしば固有名詞の一部として用いられる。○かみつけや 「かみつけ」は上野国。現在の群馬県。○いちしのはらの 「いちしのはら」は所在不明。上二句は「いちしるく」の序。○いちしるく 明白に。はつきりと。「人にしらすな」にかかるか。○われとしみえ 音数不足。大久保本に「われとし見えぬ」とあるが、平安期における副助詞「し」の一般的な用法は、たとえば「きつつなれにしつましあれば」（古今集・四一〇）や「まつとし聞かばいま帰り来む」（古今集・三六五）のように条件句の中で用いられる。ここも「われとし見えぬ」とでもありたいところ。現代語訳は大意を述べるにとどめた。

【所載】ナシ

【参考】万葉集・六九一（旧六八八）に、

青山を横ぎる雲のいちしろくわれと笑まして人に知らゆな  
とか、歌経標式・五に、

みちのべのいちしのはらの白妙のいちしろくしもあれ恋ひめやも  
などという、表現のよく似た歌がある。

一〇三四 きみがゝるこざゝのはらにゐる雲のたえてわかるゝこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが刈る小笹の原にかかっている雲が、やがて離れて行くように、もう二度と逢えない恋をするこすね。

【語句】○きみがゝるこさゝのはらにゐる雲の 「こさゝのはら」は小笹の生えている原を言うのであろうが、「雲」を導く語としては奇異な感じを免れない。上三句は「たえて」の序であろう。「風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」（古今集・六〇一）。

【所載】ナシ

【参考】類歌として、古今六帖・第五帖「かさ」三四六三に、

君が着る御笠の山にゐる雲のたえてはつがる恋もするかな

があり、同様の歌は、新千載・恋三・一四二一、万葉集・二六八三（旧二六七五）にも見える。

一〇三五 あさ日さすあちが原のしもよりもきえてこひしきふるきことのは

【異同】あちか原の―あさちか原の（御・桂・大）

【現代語訳】朝日が射す、浅茅の原の霜は消えやすいが、それ以上に消え入らんに恋しく思われる、あの人の、昔の言葉です。

【語句】○あちが原 他本文の「あさちが原」に従った。丈の低い茅が一面に生えている原。普通名詞である。○きえてこひしき 消え入らんに恋しい。無性に恋しい。「けさはしもおきけむ方もしらざりつ思ひいづるぞきえてかなしき」（古今集・六四三）。○ふるきことのは かつての恋人の愛の言葉でもあろうか。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一〇三六 なにしをへばいづれもかなしあさな／＼なで／＼おほし／＼うなひこがはら

山のうへのをくら

【異同】ナシ

【現代語訳】 毎朝撫でて養育した「うなぬこ（小児）」という名がついているので、どこもかしこも愛しくてたまりません、うなぬこがはらはら。

【語句】 ○なにしをへば 名にし負へば。名がついているので。「名にしおはばいざ言とはむ都鳥わが思ふ人はいりやなしやと」（古今集・四一一）。○あさな／＼ 毎朝。朝ごと。「あさなあさな立つ河霧のそらにのみうきて思ひのある世なりけり」（古今集・五二三）。○なで／＼おほし／＼ 「おほす」は成長させる、養育する意。「朝夕に撫でておほしし草なればおひてみゆるぞ我がやどの萩」（古今六帖・三七一九）。○うなひこがはら 未詳。「うなひこ」は、うなぬ髪（髪を襟首のあたりに垂らして切り揃えた子どもの髪型）にした子どもの意。「うなひこ」の例歌として、拾遺集一六番に「郭公をちかへりなけうなぬこがうちたれ髪のみさみだれの空」（貞文が家の歌合に・躬恒）がある。

【所載】 ナシ

【参考】 歌枕名寄九四七二番には「宇奈比児原」の題でこの歌がみえる。当該歌の作者名には「山のうへのをくら」とあるが、歌枕名寄九四七二番には作者名はない。

一〇三七 こひしくはみかたの原をいでゝみむまたあさがほのはなはさくやと

【異同】 ナシ

【現代語訳】 恋しく思うのならばみかたの原に出てみましょう。また（あの人の顔を思わせる）朝顔の花がさいているかどうかと。

【語句】 ○みかたの原を みかたの原に。「を」は動作の対象を示す。「武庫の浦の入り江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし」（万葉集・三六〇〇（旧三五七八）。「みかたの原」は、若狭国三方郡の原か。三方の海は風光明媚で知られる。「若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも」（万葉集・一一八一（旧一七七七））。○あさがほのはな 朝顔の花。「あさがほ」は現在の「むくげ（木槿）」とも言われている。すぐに枯れてしまうところから、はかないものとして詠まれることが多い。ここでは、顔の表象か。「もろともに折ることもなしに打ちとけて見えにけるかなあさがほの花」（あさがほの花前にありける曹司より、男のあけていで侍りけるに／後撰集・七一一六）。

【所載】 夫木抄・四五七四

一〇三八 秋かぜの日ごと<sup>をか</sup>にふけば水くきのをかのこのはも色づきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が日増しに吹くと、岡の木の葉も色づいてきましたよ。

【語句】◎をか 岡。周囲の土地よりも小高くなっている所。丘陵。古くは万葉集にも岡を詠んだ歌は散見される。固有の岡や歌枕としての岡を詠むことが多い。○日ごとに 日を追うごとに。○水くきのをか 「水茎の」は「岡」にかかる枕詞。固有名詞ととる説もある。「水くきの岡のやかたに妹とあれと寝てのあさけの霜の降りほも」(古今集・一〇七二)。

【所載】拾遺集・雑秋・一一一四／万葉集・二一九七(旧二一九三) 秋風之 日異吹者 水茎能 岡之木葉毛色付尔家里 アキカゼノヒニケニフケバミヅクキノヲカノコノハモイロヅキニケリ あきかぜのひにけにふけばみづくきのをかのこのはもいろづきにけり／夫木抄・五八三〇／人麿集Ⅰ・一二八、二二一／人麿集Ⅱ・一〇五／秀歌大体・七二／和歌童蒙抄・一八七

一〇三九 みこしをかい<sup>キツ</sup>くそのよにとしをへてゆふのみゆきをまち<sup>キツ</sup>てすぐらん  
びはの左大臣

【異同】ゆふのみゆきを―けふのみゆきを(桂・大) まちてすぐらん―まちてきたらん(大)

【現代語訳】「ゆふ」は「けふ」の誤写として解す」御輿岡はいく十の御世に年月を経て、今日の御幸を待つて過ぎたのだろう。

【語句】○びはの左大臣 藤原仲平。太政大臣基経の二男。枇杷殿に住んでいたので、枇杷左大臣とよばれた。貞観十七(八七五)年、天慶八(九四五)年、七一歳。○みこしをか 御輿岡。北野の西南、紙屋川の西岸の地にある岡。○ゆふ 桂宮本・大久保本や所載欄の後撰集では「けふ」。「けふ」の誤写と考えられる。○みゆき 天皇などがお出ましになること。○まちてすぐらん 待つて過ぎたのだろう。

【所載】後撰集・雑二・一一三三／袖中抄・七九五

【参考】作者名「びはの左大臣」は所載欄の文献に一致する。後撰集一一三二番の詞書に「延喜御時賀茂臨時祭の日、御前にてさかづきとりて」、一一三三番の詞書「おなじ御時、北野の行幸に、みこし岡にて」とあり、延

喜の御時の北野行幸に際しての詠であることがわかる。日本紀略の延喜十七（九一七）年十月十九日条に「天皇幸北野為遊覧」とある。

一〇四〇 みちのくのありといふなるかたをかのおかをわが身にそふるころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】陸奥にあるとかいう「片岡」、その岡の名に自分の身をなぞらえるころですよ。

【語句】○かたをかのおか 「かたをかの岡」の地名として二つの候補地がある。一つは、和名抄に見える下野国塩屋郡六郷の一つ、片岡郷で、現在の栃木県矢板市。もう一つは、常陸国風土記那賀郡条にみえる茨城県水戸市と笠間市の境にある嘯時臥（くれふし）山である。普通名詞の「片岡」は丘の一方が傾斜して高く、一方がなだらかな平地になっている丘のこと。「片」には「対のもの」一方、半分、ひとり等の意味があり、「かたをかのおか」には、満たされない思いが込められているか。初句から第三句までは「をか（岡）」を導く序詞。○そふる 「そふ」（下二段活用）は、「付け加える」「なぞらえる」意。「たな霧らひ雪も降らぬか梅の花咲かぬが代にそへてだに見む」（万葉集・一六四六（旧一六四二））。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 三浦〕

一〇四一 きみがよもわがよもしらにいはしろのおかのたか<sup>くさ</sup>ねをいざむすびてん

【異同】わかよもしらに―わかよもしらす（御・桂・大） おかのたか<sup>くさ</sup>ねを―おかのかやねを（大）

【現代語訳】君の命も私の命もどうなるか分からない。今はこの岩代の岡の草根をさあしつかりと結んで、幸せになりましょう。

【語句】○きみがよ 君の命。君の寿命。○しらに 知らない。「に」は打消しの助動詞「ず」の古い連用形。○いはしろのおか 岩代の岡。紀伊国の歌枕。和歌山県日高郡南部町岩代。「岩代の松」「岩代の浜」などの形で詠まれる。有間皇子の「いはしろの浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへりみむ」（万葉集・一四一）は有名。○たかね 「たかねをむすぶ」は意が通らない。所載欄の万葉集は「草根」とあるのでそれによって訳した。○いざむすびてん さあ結びましょう。草の葉を結んで愛情、幸福、健康を願う呪術があった。

【所載】古今六帖・第五帖「はじめてあへる」二五八〇／万葉集・一〇 君之齒母 吾代毛所知哉 磐代乃岡之草根乎 去來結手名 キミガヨモワガヨモシレヤイハシロノヲカノクサネライザムスピテナ きみがよもわがよもしるやいはしろのをかのくさねをいざむすびてな／夫木抄・九一三六

一〇四二 みちのくのつゝじのおかのそまつづらつらしといもをけふぞしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】みちのくのつつじの岡に生えているそまつづらよ、薄情な人だとあなたを今日はつくづく知ったことだ。

【語句】○つゝじのおか つつじのをか。陸奥の歌枕。宮城県仙台市つつじが岡の丘陵。「ひまもなく咲けるをみれば今日こそはつつじの岡の名にはおひけれ」（教長集・一六九）。○そまつづら 未詳。つづら（葛）は野山に生える蔓草なので、蔓草の類か。所載欄の夫木抄は「くまつづら」「くまつづら」は多年草、夏秋頃淡紫色の小花をつける。「みちのくのつゝじのおかのそまつづら」は、同音のくり返しによって「つらし」を導き出す序詞。○つらし つれない。薄情だ。○いも 男が妻や恋人を親しんで言う語。

【所載】夫木抄・九一六四

一〇四三 あしびきの山なしをかにゆくみづのたえずぞ君をこひわたるべき

【異同】ナシ

【現代語訳】山なし岡に流れる水が絶えないように、私はあなたを絶えることなくずっと恋い慕うつもりだ。

【語句】○山なしをか 山梨県東八代郡春日居町鎮目の岡。「甲斐がねに咲きにけらしなあしひきのやまなしをかの山なしの花」（能因集・四二二）。○ゆくみづの 流れる水が。流れる水が絶えないように恋い続けるというのは、当時の常套表現。上三句までは「たえず」を言い出すための序詞。○こひわたるべき 恋しく思い続けるつもりだ。

【所載】続古今集・恋一・一〇四六

一〇四四 ふなをかのともへにたてるしら雲のたちわかるともあはれとぞ思



【異同】ナシ

【現代語訳】船岡の船尾や船首と見えるあたりにたちこめている白雲が離れていく。あの雲のように君と別れ別れになったとしても、愛しいと思う気持は変わらないよ。

【語句】○ふなをか 山城国の歌枕。京都市北区紫野の大徳寺の西南にある丘陵。○ともへ 艫と舳。船尾と船首。「ふなをか」の縁で「ともへ」と言った。○たちわかつとも 立ち別れるとも。離れ離れになったとしても。上三句は「たちわかつとも」を言い出す序詞。○あはれとぞ思 ああ恋しいと思う。「たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波」(古今集・四七四)。

【所載】ナシ

一〇四五 あはぬみようしやのおかのかりはすれどなをだにたえぬとりにもあるかな

【異同】うしやのおかの―うしやのおかに(御・桂・大)

【現代語訳】恋しい人に逢えない我が身よ。うしやの岡に狩をしてあの人を手に入れようとするけれども、憂しやの岡という名さえ絶えないで恋の実現しない私だなあ。

【語句】○あはぬみ 逢はぬ身。恋しい人に逢えない身。○うしやのおか うしやのか。未詳。○かり 大鷹(鷹の雌)や小鷹(はやぶさ・はしたか)を使つて野山で雁、鴨、兎などを捕らえる狩猟。ここでは女を手折ることを喩える。○なをだにたえぬ 名をだに絶えぬ。「憂しやの岡」という名さえ絶えない。○とり 「狩」の縁で、自分を不甲斐ない「鳥」にたとえた。

【所載】ナシ

(以上五首担当 橋本智美・林)

もり

一〇四六 おほらきのもりのしたくさおいぬれとこまもすさめずかる人もなし

【異同】もり―ナシ(大)

おほらきの―おほあらきの(大)

【現代語訳】大荒木の森の下に生えた草は老いてしまって、馬も心を留めないし、刈る人もいない。

【語句】◎もり 杜・森。木立のある所。または神域の木の茂った所を言う。枕草子に「森は うへ木の森。石田の森。木枯の森。うたた寝の森。岩瀬の森。大荒木の森……」とあるように、単なる森としてよりも、歌枕として用いる場合が多い。○おほらきの 「おほあらき（大荒木）」の「に同じ。大荒木の森は山城国と大和国の二説がある。山城とするのは八雲御抄や扶桑京華誌で、現在の京都市伏見区淀水垂町だという。大和とするのは万葉集に「大荒木の浮田の杜の」（二八五〇（旧二八三九））とあるのを根拠とし、奈良県五条市今井町の荒木神社の森か、とされる。○したくさ 下草。下に生える草。日のあたらぬ身である自分の比喩。当該歌以降、大荒木の森は「下草」と共に詠まれることが多くなる。○すさめず 心に留めないで。

【所載】古今六帖・第六帖「したくさ」三五七四／古今集・雑上・八九二／新撰和歌・三〇五／和漢朗詠集・四四一

【参考】作者名「おのゝこまち」（小野小町）とあるが、所載欄の古今集ではよみ人知らずとする。

一〇四七 人しれぬおもひするがのくにゝこそ身を木がらしのもりはありけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れず私はもの思いをする、この駿河の国にこそ、（思いの火で）身を焦がす木枯らしの森はあ

るのだったよ。  
【語句】○人しれぬおもひするがの 人知れぬ思ひ駿河の。「する」に「駿河」を掛ける。「人しれぬおもひするがのふじのねのもえつつのみやこひわたるべき」（躬恒集Ⅳ・三三六）。○木がらしのもり 木枯らしの森。枕草子「森は」章段にも出てくる歌枕。静岡市葵区羽鳥の、葦科川の中州にある森を指す『角川日本地名大辞典』。夫木抄は「こがらしのもり 木枯 駿河又山城」としている。「木枯らし」に「焦がらし」を掛ける。

【所載】夫木抄・一〇〇七四

一〇四八 山しろのいはたのもりのはゝそはらいはねど秋は色づきにけり  
きのらう女

【異同】ナシ

【現代語訳】山城の石田の森の柞原よ、なにも言わなければ、秋になって葉が色づいているのだな。飽きの色になつてきたなあ。

【語句】○いはたのもりの 石田の森の。万葉集以来の歌枕で京都市伏見区石田周辺。上三句は「いは」の音で下句の「いはねど」を導く序詞。○はゝそはら 柞原。柞が生えている原の意。柞は現在のナラ・クヌギ。黄葉する。

【所載】 夫木抄・六〇六二

一〇四九 いづみなるしのだのもりのくずのはのちえにわかれてものをこそ思へ

【異同】 ちえにわかれて―ちゝにわかれて（御・大）

【現代語訳】和泉にある信太の森の葛の葉が千枝にわかれるように、心は千々に乱れて物思いをすることだ。

【語句】○いづみなるしのだのもり 和泉なる信太の森。大阪府和泉市の北部、葛葉稻荷社にあった森。安倍晴明の出生譚である葛の葉伝説で有名。○ちえにわかれて 千枝に分かれて。茎が沢山に分かれているさま。上三句は「ちえにわかれて」を導く序詞。

【所載】 夫木抄・一〇〇九三

一〇五〇 きみこふとわれこそむねをこがらしのもりとはなしにかげになりつゝ

【異同】 ナシ

【現代語訳】あなたを恋うて、私こそが胸を、木枯らしの森でもないのにひどく焦がして、影のようににはかなくなつてしまします。

【語句】○こがらしのもり 一〇四七番歌参照。○かげになりつゝ 恋をして、身も細る思いで影のようになつてしまふ、とする表現。「恋すればわが身は影と成りにけりさりとて人にそはぬものゆゑ」（古今集・五二八）。

【所載】 夫木抄・一〇〇七五／平中物語・一五段・七一

〔以上五首担当 杉本〕

一〇五一 ふくかぜになびきもせなむおもふことわれにもいはのもりのした草

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風になびきもしてほしい、いはのもりの下草よ、（私の方へ心を寄せてほしいと）思っていることを、私にも言わせて。

【語句】○なびきもせなむ なびいてほしい。「せなむ」は、サ変動詞の未然形「せ」に、詠えの助詞「なむ」が接続したかたち。所載欄の文献では「なびきもしなん」。○いはのもり 所在不詳。「言は（せ）」をかける。所載欄の文献では四句は「われにいはせの」。「いはのもり」は「いはせのもり」とは別らしい。

【所載】続後撰集・恋三・八一

一〇五二 いとはやもなきぬるかりかこがのもりきにはふつたもみぢあへなくに  
おほとものとら女

【異同】○おほとものとら女—おほとものらう女（桂）

【現代語訳】なんと早くも鳴いた雁か、久我の杜の木に這う鳶もまだ色変わりしそうでしていないのに。

【語句】○いとはやもなきぬるかりか いと早くも鳴きぬる雁か。北から飛来する雁の声を知らぬのだが、まだその時期ではないのに、という気持ち。「いとはやもなきぬるかりか白露のいろどる木々もみぢあへなくに」（古今集・二〇九）の初・二句に等しい。この言い回しは他にも例がある。古今六帖・三二七〇など。○こがのもり 久我（こが）の杜。山城国愛宕郡。久我神社については大日本地名辞書に賀茂氏の氏神であつて建角身（タケツノミ）、一名八咫鳥（ヤタガラス）を祭るとする。この神が石河瀬見小川（イシカハノセミノヲガハ）に鎮座し、これを賀茂（カモ）といったとの記述が袖中抄の「セミノヲガハ」の項にある。現在の下鴨神社より北。「賀茂」の名は古くは「久我」であつた。なお、「こがのもり」は古今六帖・第五帖「人をよぶ」の「うちむれてこん人はなほこがのもりきぎののみぢのまだらぬまに」（二八四四）にもある。○もみぢあへなくに もみぢしきらないのに。下二段動詞「もみづ」の連用形「もみぢ」に、「あへず」の連体形「あへぬ」のク語法「あへなくに」が接続したかたち。「あへぬ」はその上の動詞を受け、「……しきらない」の意味を加える。

【所載】夫木抄・六〇三五

【参考】作者名「おほとものとら女」は所載欄の文献に一致しない。夫木抄には「題不知六帖読人不知」とある。

一〇五三 おもふとはなにをかさらにみ山なるしげりのもりをわれとしらなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】「思う」とは何をさらに見るのだろうか。深山のしげりの森のふかさこそ私なのだと知ってほしいのです。

【語句】○おもふとはなにをかさらに 「思ふ」とは何をかさらに。自分の相手を思う気持ちの深さを強調する歌に「何をかさらに」を用いた例として「おもふとはなにをかさらにいし水こころをくみて人はしらなん」（古今六帖・一四五八）がある。この例歌では、「思う」とは何をさらに言おうか、言えない、の意。○み山なるしげりのもり 山深くある「茂りの森」。「み山」の「み」に「見」をかける。上からの続き「おもふとはなにをかさらにみ（む）」。「しげりの森」は固有名詞ではないだろう。「おほあらしのしらくさしげりあひて深くも夏のなりにけるかな」（古今六帖・一〇五）の名歌により、「み山なるしげりのもり」は深いものの例えとしたか。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄では「しげりのもり」の所在地を定めかね、第三十六未勘国上に「茂森」として「思ふとはなにをかさらにみ深山なるしげりの森を我としらなん」を挙げる。

一〇五四 いもがいへにいくたのもりのふぢのはないまこむ春もかくこそはみめ

【異同】ナシ

【現代語訳】生田の杜の藤の花の美しいこと！これからめぐりくる春もいつもこうして眺めたいものだ。

【語句】○いもがいへに 妹が家に。「イク」を導く。現代語訳には入れない。○いくたのもり 生田のもり、とすれば摂津国。ただし所載欄の万葉集には「いくりのもり」とある。○いまこむ春 これから来るであろう春。「む」は仮定を示す助動詞。○かくこそはみめ このようにしてこそ見よう。「みめ」は「見め」。「め」は助動詞「む」の已然形。上の「こそ」を受けて係り結び。

【所載】万葉集・三九七四（旧三九五二）伊毛我伊敝尔 伊久里能母里乃 藤花 伊麻許牟春毛 都祢加久之見牟 イモガイヘニイクリノモリノフヂノハナイマコムハルモツネカクシミム いもがいへにいくりのもりの

ふぢのはないまこむはるもつねかくしみむ／和歌童蒙抄・五四七

【参考】夫木抄・三一〇二「いもがいへにいくりの森の藤の花いまこんはるもかへらばぞ見ん」という酷似した歌があるが、同一歌とは認定しない。

一〇五五 きくからにもゆるおもひは山しろのいはたのもりになくよぶこどり

【異同】ナシ

【現代語訳】声をきくやいなや恋しさに燃えるような思いでいつぱいになるのは、山城のいはたのりに鳴く  
呼子鳥。

【語句】○きくからに 聞くやいなや。聞くとすぐに。○もゆるおもひ 燃ゆる思ひ。恋しく人を思い身を焦がすことを言う。「消えずのみもゆる思ひは遠けれど身もこがれぬる物にぞ有りける」（後撰集・九九〇）。所載欄の夫木抄では「もゆる歎」とある。○いはたのもり 一〇四八番参照。○よぶこどり 呼子鳥。春から夏にかけて鳴く鳥。現在の何の鳥にあたるかは不明。郭公（かつこう）、また「ほととぎす」などの説がある。万葉集には「呼児鳥」「喚児鳥」などの表記で九例あり、平安和歌では「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこどりかな」（古今集・二九）をはじめ「人を呼ぶ」をかけて多く詠まれた。

【所載】夫木抄・一八三五

〔以上五首担当 平野〕

一〇五六 かたらひもりのことのはちりぬらんおもひの山のまつぞかはらぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】語らって下さったあなたの言葉は、かたらい森の木が秋が来て散ってしまったように、今はなくなっていることでしょう。私の方は、思いの山の松と同じく、変わらぬお持ちしています。

【語句】○かたらひもり 語らひ森。初句は「かたらひの」の「の」が脱落したものと見る。「かたらひの森」の所在は不明。「かたらひのもり」「かたらひもり」は他に管見に入らないが、「かたらひ山」なら、「さよ更けてかたらひ山のほととぎす独り寝覚めの友と聞くな」（肥後集・七六）があり、「談山 多武峰」のこと『肥後集全釈』。また、枕草子「岡は」の段に「かたらひの岡」の名があがる。○ことのはちりぬらん ことばの意の

「こののは」に木の葉の「は」を掛けた。「深き思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風吹きて散りぬる」(伊勢集・二九四)。○おもひのやま 思ひの山。その所在は不明。「思ひ」は愛情の意。「あはれわがおもひの山をつきおかば富士の高根もふもとならまし」(夫木抄・八〇九六)。「かたらひの森」に「思ひの山」を対比させたか。○まつぞかはらぬ 松の葉の色が変らぬように、私の待つ気持ちも変らない。「松」に「待つ」を掛けた。

【所載】 夫木抄・一〇〇二一

【参考】 所載欄の夫木抄は古今六帖の二帖として当該歌をあげながら、「かたびらのもりのこのはは散りぬともおもひは山のまつぞかはらぬ」と全く別の趣の歌になっている。そして、「かたびらのもり」は、「国未勘之」とし、一本の「かたこひのもり」は「陸奥なり」とする。

一〇五七 たつた山たちなば君がなをゝしめ<sup>み</sup>いはせのもりのいはじとぞ思

【異同】 ナシ

【現代語訳】 もし噂に立ったならば、あなたの名譽が惜しまれるので、私は決して二人の間のこととは、人に漏らすまいと思っています。

【語句】 ○たつた山 竜田山。大和国の歌枕。奈良県生駒郡の西方にある山。同音の「たつ」によつて第二句の「たちなば」を導く。「君によりわが名はすでにたつた山たちたる恋のしげきころかも」(万葉集・三九五三(旧三九三一))。なお、所載欄の文獻は「たつた川」。○たちなば 噂に立ったならば。○なをゝしみ 名を惜しみ。名が汚れるので、の意。○いはせのもりの 同音の「言はじ」を導く。磐瀬森は、大和国の歌枕。奈良県生駒郡斑鳩町にある森か。「ほととぎす」「鶯」「呼子鳥」「蟬」など鳴くものや、「紅葉」とともに詠まれることが多い。「かむなびのいはせのもりのほととぎすけなしの岡にいつか来鳴かむ」(万葉集・一四七〇(旧一四六六))。○いはじとぞ思 言はじとぞ思ふ。口に出すまいと思っています。

【所載】 後撰集・恋六・一〇三三／和歌初学抄・二二五

【参考】 所載欄の後撰集には、作者名「元方」とあり、詞書に、「しのびて住みはべりける人のもとより、かか<sup>る</sup>けしき人に見すなと言へりければ」とあり、詠歌事情が知られる。当該歌は、所載欄の和歌初学抄「両所ヲ詠歌」中に見えるように、二つの地名が詠み込まれる。

一〇五八 かつみつゝいはねのもりにすむせみはときをしらずやなきわたるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】実際には相手の姿を見ていながら、どうしてあのいわねの森に住む蟬はいつもいつも鳴き続けているのだろうか。実際にはあの人の姿を見ていながらどうして私は思いを口に出せずに、いつも泣いているのだろうか。

【語句】○かつみつゝ 一方では姿を見ていて。実際に姿を見ながらも。○いはねのもり にすむせみは いわねの森に住んでいる蟬は。「いはねの森」の所在は不明。「いはねの森」は、当該歌と次の一〇五九番歌にしか見えない。所載欄の文献に、出典を「六帖」として、「いはせの森」とある。「いはせの森の蟬」を詠む歌は後世の歌合に見える（夫木抄・三五九一・「長久二年五月庚申夜祐子内親王家名所歌合」）。○ときをしらずやなきわたるらむ どうしていつもなき続けているのであろうか。「ときをしらず」とは、いつもいつも、の意。係助詞「や」は疑問。「なき」に、「泣き」と「鳴き」とを掛け、「わたる」はずっと……し続ける、の意。

【所載】夫木抄・三五九二、九九八八

一〇五九 つらきをもいはねのもりのしたにをふるくさのたもとぞつゆけかりける

【異同】したにをふる―下にせる（大）

【現代語訳】いはねの森に生える下草がいつも露に濡れている。辛い思いを口に出さずじっとこらえている私の袖は、涙に濡れがちです。

【語句】○つらきをもいはねのもりの つらきをも言はねの森の。森の名の「いはね」に「言はね」を掛ける。「いはねの森」については一〇五八番歌参照。なお、所載欄の文献には、「つらきをもいはての山の」とある。○したにをふるくさの 下に生（お）ふる草の。森の木々の下で生育する草、それと同じように、の意。なお、所載欄の文献「谷におふる草の」。○たもとぞつゆけかりける 袂ぞ露けかりける。私の袂は涙がちで濡れてばかりいる。木の雪で下草が濡れている景に、涙がちで袂が濡れている人事を重ねて言っている。

【所載】新勅撰集・雑四・一三二四

一〇六〇 わがゝどのわさともいまだかりあげねばかねてうつろふ神なみのもり  
いつのおとくろまる



【異同】 わさともいまたーわさたもいまた（大）

【現代語訳】 家近くの早稲田もまだ稲刈りが終わっていないのに、はやくも紅葉し始めているよ、かむなみの森は。

【語句】 ○わがゝどのわさとも 「わさど」は不審。大久保本や所載欄の文献「わさだ」に拠って現代語訳した。

○いまだかりあげねば まだ稲刈りも終わっていないのに。「刈りあぐ」は、稲刈りをすっかり終えること。接続助詞「ば」は、ここでは逆接の意。○かねてうつろふ まだその時期が来ていないのにはやくも紅葉している、の意。「かねて」は、前もって、あらかじめ、の意。「うつろふ」は、色が変わる、紅葉すること。○神なみのもり 「かむなびのもり」「かみなびのもり」とも。「かむなび」は、「神の辺」の意で、神が鎮座する神聖な山や森を表す普通名詞。なお、万葉集では、「かむなびの磐瀬の杜」（一四二三〈旧一四一九〉、一四七〇〈旧一四六六〉）、「……うまさけを神奈備山の帯にせる明日香の川の……」（三二八〇〈旧三二六六〉）が大和国として詠まれる。後には、摂津国や丹波国の歌枕としても詠まれる。

【所載】 家持集Ⅰ・一八五／家持集Ⅱ・二三三

【参考】 作者名「いつのおとくろまろ」は、万葉集に見える「忌部首黒鷹（いむべのおびとくろまろ）」を指すか。古今六帖に見える「忌部首黒鷹或本をとくろ」（三三四）「いべのおとくろまろ」（三五六・一四一一）は、同一人物か。古今六帖・三三四番歌の参考欄参照。

当該歌の上句をほぼ同じくするものに、「わが門のわさだもいまだかりあげぬにけさふく風に雁はきにけり」（古今六帖・一一二〇）があり、下句が同じ表現をとるものに、「神な月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびのもり」（古今集・二五三）がある。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

つらゆき

一〇六一 神無月しぐれにそむるもみぢばをにしきにをれるかみなびのもり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 神無月に、時雨によって紅く染められるもみぢ葉を、錦に織っている神南備の森よ。

【語句】 ○神無月しぐれにそむるもみぢば 神無月が、時雨によって紅葉させているもみぢ葉。「神無月」は陰

曆十月、時雨、紅葉と常套的に取り合わされる。ここでは擬人法の主語とみる。「そむる」は、他動詞マ行下二段活用「染む」の連体形。時雨がしみ込んで色をつける。所載欄の貫之集は「神無月時雨にそめて」とあり、わかりやすい。元の形であったか。○にしきにをれる 錦に織れる。一面の紅葉を錦に織ったと見立てる。上三句の垂直方向の表現を、水平方向への広がりへに転ずる。○かみなびのもり 奈良県生駒郡斑鳩町にあるが、普通名詞とする説もある。一〇六〇番歌参照。時雨、紅葉の名所。「錦に織れる」の主語で、擬人化された表現。初句の「神無月」と頭韻が響き合う。「神無月時雨もいまだ降らなくなにかねてうつろふ神なびのもり」（古今集・二五三）。

【所載】貫之集Ⅰ・五〇五／貫之集Ⅱ・八九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では、「天慶五年亭子院御屏風のれうのうた廿一首」の内の一首。

一〇六二 人につくたよりだになしおほあらきのもりのしたなるくさのな身なれば  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】他に頼りにできる伝手（つて）すらありません。大荒木の森の下草のように誰からも顧みられないわが身です。

【語句】○つく あるもののそばを離れずに従う。頼りになる者に添い従う。○たより 頼みとしてすがれるような縁故。よるべ。「たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり」（古今集・四八〇）の「たより」は消息、音信の意だが、人につくとしており、当該歌と表現が似る。○おほあらきのもりのしたなるくさの身 「おほあらきのもり」は奈良県五条市の荒木神社とする説、京都市伏見区の与杼（よど）神社とする説などがあり、死者を葬るまでの間、屍を仮に安置した「殯（あらき）」を意味するともいう。一〇四六番歌参照。「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今集・八九二、古今六帖・一〇四六）を本歌として、誰からも顧みられぬ我が身を、大荒木の森の下草に喩えた。

【所載】古今六帖・第六帖「したくさ」三五七六／後撰集・雑二・一一八六／躬恒集Ⅰ・二七九／躬恒集Ⅱ・一九七／躬恒集Ⅲ・三〇三／躬恒集Ⅴ・一六六

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。所載欄の後撰集の詞書には「もとより友達に侍りけれ

ば、貫之にあひ語らひて、兼輔朝臣の家に名簿を伝へさせ侍りけるに、その名簿に加へて貫之に送りける、「兼輔と主従関係を結ぶために名簿（なづき）。権勢家と主従関係を結ぶ際などに身分証明として贈る、自分の姓名を記した名札」を提出した折、仲介の労をとってくれた貫之に贈った歌とある。

一〇六三 おほあらきのもりの草とやなりにけむかりにきてとふ人のなきかな  
たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】わが身は、大荒木の森の草となつてしまつたのだろうか。ほんのかりそめにでも訪ねてくれる人もないよ。

【語句】○おほあらきのもり 一〇六二番歌参照。○かりにきて 草を「刈りに来て」に、仮初めにやつて来る意の「仮に来て」を掛ける。「山城の淀のわかごもかりにだに來ぬ人たのむ我ぞはかなき」（古今集・七五九）。

【所載】後撰集・雜二・一一七八／忠岑集Ⅰ・四七／忠岑集Ⅱ・一一一／忠岑集Ⅲ・六九

【参考】作者名「たぐみね」は所載欄の文獻に一致する。所載欄の後撰集の詞書には「暇にて籠りゐて侍りける頃、人のとはず侍りければ」と、忠岑が辞職したか、喪中で引きこもつていた頃の歌とする。

一〇六四 ゆふかけていのるみむろの神さびてたゝるにしあればねぎぞかねつる  
やしろ

【異同】ナシ

【現代語訳】木綿を懸けて祈るはずの御室がすっかり古くなつて神のように崇るのであるから、祈願しかねるのだ。

【語句】◎やしろ 神の來臨するところ。神を祀つてある建物。神社。○ゆふかけて 木綿を垂れかけて。ゆふ（木綿）は、楮の木を皮を剥ぎ、その纖維を蒸して水にさらし、細かに裂いて糸状にしたもの、祭具。○みむろ 神が降臨して依り付く所。鏡や木綿をかけて神をまつる神座や、木、山、神社など。○神さびて 古めかしくなつて。神々しくなつて。「木綿懸けて祭る三諸の神さびて齋むにはあらず人目多みこそ」（万葉集・一三八一（旧一三七七））。○たゝるにしあれば 崇るのであるから。「崇る」は神仏などが人間の行為をとがめて

禍をもたらずこと。「にし」は、断定の助動詞「なり」の連用形「に」＋副助詞「し」。「石上ふりにし恋の神さびてたゝるに我はねぎぞかねつる」(拾遺集・八六二)。○ねぎぞかねつる 祈願しかねるのだ。「ねぐ」は、祈ぐ。神の加護を受けるために祈願すること。「ゆふ」と取り合わされる例歌「ねぎかくる日吉の社の木綿だすき草のかきはもことやめてきけ」(拾遺集・神楽歌・五九三)。

【所載】ナシ

【参考】当該歌は、語句欄の万葉集・一三八一(旧一三七七)の上三句「木綿懸けて祭る三諸の神さびて」と、拾遺集・八六二の下三句「神さびてたゝるに我はねぎぞかねつる」を合わせたような形で作られている。

一〇六五 ちはやぶるかみのいがきもこえぬべしいまはわが身のをしからなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】(抑えがたい恋の思いは) 神域を囲む斎垣も越えてしまいそうだ、今となってはわが命も惜しくはないものを。

【語句】○ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。○いがきもこえぬべし 神聖な神の斎垣をも越えてしまいそうだ。「いがき」は斎垣。神社の垣。聖域を囲む垣根。「斎垣を越ゆ」は、禁忌を犯す恋、恋のために思慮分別を失った状態を表す語。「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」(伊勢物語・第七十一段・一三〇)の上三句と同じ表現。○わが身のをしからなくに 自分の命も惜しくはないものを。「かくのみし恋ひしわたればたまきはる命も我は惜しけくもなし」(万葉集・一七七三(旧一七六九)など、恋のためには我が身を捨ててもよいという万葉集以来の常套表現。「をしからなくに」の「なくに」は、詠嘆的打消。……ないものを。……ないことだなあ。「命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに」(古今集・六一五)。

【所載】拾遺集・恋四・九二四／万葉集・二六七一(旧二六六三) 千葉破 神之伊垣毛 可越 今者吾名之惜無 チハヤブルカミノイカキモコエヌベシイマハワガナノヲシケクモナシ ちはやぶるかみのいかりきもこえぬべしいまはわがなのをしけくもなし／人麿集Ⅰ・一九〇／人麿集Ⅱ・三二四／人麿集Ⅳ・一五九／古来風体抄・一三三

【参考】万葉集では神祇に寄せる恋八首の内にある。

〔以上五首担当 中野〕

一〇六六 かつまたのいけにとりゐしむかしよりこふるいをぞけふいまに見ぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】かつまたの池に水鳥がいた昔から思い焦がれている女性に、今日今に至るまで逢えない。

【語句】○かつまたのいけにとりゐし 勝間田の池に鳥がいた。勝間田の池は大和国の歌枕。「勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君が鬢なきことし」(万葉集・三八五七(旧三八三五))。和歌初学抄・歌枕名寄は「美作」、八雲御抄は「下総」、夫木抄では「美作又下総」とするなど諸説あるが、大和とする袖中抄の説が万葉代匠記以降支持されているようである。万葉集の左注を信ずれば、後に唐招提寺となる新田部親王邸付近にあったか。「鳥もめで幾代経ぬらんかつまたの池にはいひのあとだにもなし」(後拾遺集・一〇五三)とあるように、鳥もおらずはるか昔に水の失われた池とされる。初・二句は「むかし」を導く措辞。○いも 男性の側から親しみをこめて特定の女性を指す語。○いまに 過去から続いて今に至るまで。「年経ぬるおもひとだにもおもへかし今に忘れぬ心ながさを」(赤染衛門集・四七五)。

【所載】夫木抄・一〇七七

【参考】類歌として「みづがきの池に鳥ゐし昔よりこふるいをぞけふいまにみぬ」(夫木抄・一〇八三八)、「かつまたの池にとりゐしむかしよりよはうき物とおもひしりにき」(袖中抄・一四二)がある。また、当該歌を参考にしたかと思われる「かつまたの池にとりゐしにしへの過ぎにし程や君が行末」(夫木抄・一〇七七)がある。

なお、当該歌は神社に関する内容が詠まれておらず、「やしろ」題に入っている理由是不明だが、二句に「とりぬ(鳥居)」を詠み込むことによるか。

一〇六七 われみてもひさしくなりぬすみよしのきしのひめまついくよへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】私が見てからでも年久しくなった。住吉の岸の姫松はもう幾代経ているのだろう。

【語句】○われみても 私が見てからでも。「いにしへのことはしらぬをわれみても久しくなりぬ天の香具山」(万葉集・一一〇〇(旧一〇九六))。○すみよし 住吉。摂津国の歌枕。現在の大阪府住吉区の一帯。万葉集で「須

美乃延」「須美乃江」「住吉」「墨吉」などと表記して「すみのえ」と訓んだものが、平安時代には「すみよし」と訓まれるようになった。「住吉」は地名、「住の江」はその入り江と考えられており、どちらも「松」「浪」「忘れ草」などとともに和歌に多く詠まれる。○ひめまつ 姫松。海岸に多く見られる小柄な松の愛称。「ひめ」は他の語に冠して小さなかわいものの意を表す。

【所載】古今集・雜上・九〇五／新撰和歌・二三三／和漢朗詠集・四二八／奥儀抄・二／袋草紙・二〇七／伊勢物語・第一一七段・一九八

一〇六八 ちはやぶるかものやしろのゆふだすき一日もをこひぬひはなし

本のまゝ

【異同】一日もを―一日も君を(大)

【現代語訳】(ちはやぶる) 賀茂の神社の木綿だすき。(木綿だすきを毎日かけるように) 私もあなたを一日も恋しく思わない日はない。

【語句】○ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。「賀茂の社」にかかる例として「ちはやぶる賀茂の社のひめこまつよろづ世ふとも色はかはらし」(古今集・一一〇〇) などがある。○かものやしろ 賀茂の社。山城国の歌枕。京都市北区上賀茂にある賀茂別雷神社と左京区下鴨にある賀茂御祖神社の総称。山城国の一宮。平安京鎮護の神社とされ、斎院が祭事に奉仕する制度が平安初期より鎌倉時代初めまで続いた。○ゆふだすき 木綿だすき。神事に奉仕するときに掛けた、白く清浄な木綿で作ったすき。「かけ」「かかる」「結ぶ」などにかかる。「ちはやぶる神のたよりにゆふだすきかけてや人も我を恋ふらん」(貫之集・五〇四)。○一日もを 字足らずで、意味も不明。大久保本の「一日も君を」に拠って解した。○こひぬひはなし 恋しく思わない日はない。「するがなるたごの浦波たたぬ日はあれども君をこひぬ日はなし」(古今集・四八九)。

【所載】古今集・恋一・四八七／新撰和歌・三五二／和歌初学抄・一三〇

【参考】類歌に「ちはやぶる神のたむけのゆふだすきかけてや人のひとをこふらん」(続古今集・一二三一・つらゆき／万代集・一九三八) がある。また、当該歌を参考にしたかと思われる「ちはやぶる賀茂の社のゆふだすきちとせを君にかけよと思ふ」(千五百番歌合・二二八四) もある。

一〇六九 あめつちの神をねぎつゝわがこふる君にかならずあはざらんやも

やかもち

【異同】 あはざらんやも―あはざらんやは（桂）

【現代語訳】 天地の神々に祈りながら、私が恋しいと思うあなたに、逢わないというようなことがあるのか、いやきつと逢える。

【語句】 ○ねぎつゝ 祈念しながら。「ねぐ」は神などの心を鎮める、祈願する。「をやまだのみだえせしよりあめにますいはとのかみをねがぬ日ぞなき」（好忠集・一四五）。○あはざらんやも 逢わないということがあろうか、いやない。必ず逢うことができる。「やも」は活用語の終止形もしくは已然形を受ける。ここでは反語。

【所載】 万葉集・三三〇一（旧三二八七）乾坤乃 神乎禱而 吾恋 公以必 不相在目八方 アメツチノカミヲイノリテワガコフルキミニカナラズアハザラメヤモ あめつちのかみをいのりてあがこふるきみいかならずあはずあらめやも

【参考】 作者名「やかもち」とあるが、所載欄の万葉集では女性が詠んだものとして収められた相聞歌群中の反歌の一首である。

一〇七〇 いにしへの神のみよゝりあひけらしいまのこゝろもとくわすられず

【異同】 ナシ

【現代語訳】 はるか昔の神の御代以来男女は逢ってきたらしい。今の私の心もすぐには忘れることができない。

【語句】 ○あひけらし 逢ひけらし。逢ってきたらしい。「けらし」は過去の推定を表す助動詞。……したらしい。「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも」（古今集・五〇一）。○とくわすられず すぐには忘れられない。「疾し」は速度の速いさま、時間の進行の早いさまを表す。「あふことは猶よそながらながらへよとくわすれなばとくやなげかむ」（相模集・二〇一）。所載欄の万葉集では「つねわすらえず」とあり、そちらの方が歌の内容に合う。

【所載】 万葉集・三三〇四（旧三二九〇）古之 神乃時從 會計良思 今心文 常不所忘 イニシヘノカミノミヨヨリアヒケラシイマノココロモツネワスラレズ いにしへのかみのときよりあひけらしいまのこゝろもつねわすらえず

〔以上五首担当 犬養悦・諸井彩子〕

一〇七一 ちはやぶる神なび川<sup>山</sup>のもみぢばに思はかけじうつろふものを

【異同】 神なび川<sup>山</sup>の―神なび山の(大)

【現代語訳】あの神なび川のもみぢ葉には、思いをかけたりなどすまい。色変わりするんだもの。

【語句】〇ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。〇神なび川 「神なび」は神の鎮座する場所。「神なび川」は「神なび」の地を流れる川、普通名詞である。ただし、大久保本の「神なび山」の方が自然。底本も「山」を傍書しているが、ここは底本文のままに訳した。〇うつろふ 事物の相が時の経過と共に変化してゆくこと。ここは「もみぢば」の色が盛りを過ぎて枯れ色になってゆくこと。恋の寓意が感じられる。

【所載】古今集・秋下・二五四／新撰和歌・五四

一〇七二 まきもくのあらし<sup>ナ</sup>のやまの山人<sup>を</sup>は人もみるがね山かづらせよ

【異同】 あらしのやまの―あなしの山の(桂・大)

【現代語訳】巻向の穴師の山の山人<sup>を</sup>を人々が注目するように、山かづらをつけなさいよ。

【語句】〇まきもくのあらし 底本では「ら」のところに「ナ」の傍書があり、桂宮本・大久保本は「あなし」である。古今集でも「あなし」、地名としても「まきもくのあなし」が妥当。巻向の穴師は大和国の歌枕。巻向は現奈良県桜井市の三輪山の北側から東方へかけての一带。この地を巻向川が西へ流れ、川をはさんで三輪山の対岸にある里が穴師。〇山人 山に住んで樵や炭焼きなどの山仕事をなりわいとする人。〇人もみるがね 人が見るように。「がね」は動詞連体形に付いて、……するように、……するために、の意を表す終助詞。〇山かづら 山に自生する蔓性の植物で作った飾り。神事の折、頭につけたり舞人の採り物にしたりした。

【所載】古今六帖・第一帖「かづら」二二四／古今集・神あそびのうた・一〇七六／綺語抄・二六七／奥儀抄・五九二／袖中抄・三四六、三四七／和歌色葉・二九六

一〇七三 いがきしてまもるやし<sup>人</sup>ろ<sup>まろ</sup>のもみぢばもしめをばこえてちるてふものを

【異同】 ナシ



【現代語訳】斎垣を結いめぐらして斎き守る神のやしろののみじ葉でさえも、しめ垣を越えて外へ散るものだというのに。

【語句】○いがき 斎垣。神聖なもののみじにめぐらした垣。みだりにこれを越えることは許されない。○まもる やしろののみぢば 守る社の紅葉ば。恋の相手の女性の暗喩。親の守りがきびしくて逢いに出て来られないのである。○しめ 占め、また標（しめ）。占有のものであることをしめす標識。杭を立てたり、縄を張ったりしてそのしるしとした。○ちるてふものを 散るものだというのに。「ものを」に強い不満の情がこめられている。

【所載】ナシ

【参考】作者名「人まろ」とあるが、この歌が人麿の作であるかどうかは不明。万葉集二三一三（旧二三〇九）に「はふりがいはふ社のもみぢばもしめなは越えて散るといふものを」という類歌があり、その歌は古今六帖二六〇六番に、初句を「はふりこが」として収載されている。

#### 一〇七四 いその神ふるのやしろのすぎむらの思すぐべきゝみならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】石上の布留のやしろの杉むら、その「すぎ」ということばのように、忘れ去ってしまうことのできるような、あなたではないものを。

【語句】○いその神ふるのやしろ 「いその神ふる」は大和国の歌枕。現奈良県天理市。「いその神」は「石上」で大地名、「ふる」は「布留」でその中の小地名。「ふるのやしろ」は、布留の地にある石上神宮。○すぎむら 群れ立っている杉。上三句は「すぎ」と「すぐ」の類音によって「思すぐ」を導き出す序詞。○思すぐべき 「思すぐ」は自動詞。心の中の思いが通り過ぎていってなくなること、すなわち忘れ去ること。「べき」は、ここでは可能を表す。忘れ去ってしまえるような。○ならなくに 断定の助動詞「なり」の未然形「なら」に打消の助動詞のいわゆるク語法「なく」が付き、さらに助詞「に」が添えられたもの。……ではないのに。余意を残す言い方。

【所載】万葉集・四二五（旧四二二）石上 振乃山有 杉村乃 思過倍吉 君尔有名国 イソノカミフルノヤマナルスギムラノオモヒスグベキミニアラナクニ いそのかみふるのやまなるすぎむらのおもひすぐべきみにあらなくに／夫木抄・八六四一

【参考】万葉集によれば、石田王が卒したとき、丹生王が詠んだ挽歌（長歌と反歌二首）の中の歌である。

一〇七五 神つよのいがきにはへるもろかづらこなたかなたにむ<sup>けて</sup>こそみれ

【異同】ナシ

【現代語訳】いにしえからの斎垣に這いまどわっているもろかづらが、二つの葉を持っているように、わたしも、こうか、あかど、ふたとおりに考えてみているところだ。

【語句】○神つよ 上つ代。時代を遠くさかのぼったむかし。底本の表記は「神」の文字をあてているが、「神代」の意で「かみつよ」と言った例は他に見当たらない。○いがき 一〇七三番歌参照。○もろかづら フタバアオイのこと。山中の木陰に生える多年生草本。春になると伸びた茎の先から二枚の葉が出るので、フタバの名がある。上三句は「こなたかなた」を導く序詞。○こなたかなたに 此方彼方に。こうだろるか、あだだろるか、ふたとおりに。「もろかづら」の双葉の縁で言った。○むけてこそみれ ふたとおりのことを仮定しながら、それぞれについて思案している、ということ。あるいは、恋にかかわる迷いか。

【所載】ナシ

【参考】第五句のミセケチ部分の本行は「介天」の草書体かと見えるが、ミセケチで「けて」とされている。

〔以上五首担当 山下〕

一〇七六 行がうへにまたもゆけこま神かけやみむろの山のやまかづらせむ

【異同】ナシ

【現代語訳】急いで行くうえに、なお一層速く行け馬よ。そして神に誓って三室の山の山かづらを髪に飾ろう。

【語句】○行がうへにまたもゆけ 行くがうへにまたもゆけ。（馬が）駆けているうえにもっと速く駆けろ。○こま 馬の歌語。○神かけや 神に誓って。必ず。「や」は間投助詞。○みむろの山 神のいます御室の山の意。「神垣のみむろの山の榊葉は神の御まへに茂りあひにけり」（古今集・一〇七四）。○やまかづら 山鬘。ヒカゲノカヅラ、マサキノカヅラのことともいう。「かづら」は蔓草で作った髪飾り。神楽の時、舞い人が用いる。

【所載】夫木抄・八八四三／貫之集I・一四六

【参考】作者については、一〇七九番参考欄参照。

一〇七七 人もみなかづらかざしてちはやぶる神のみあれにあふ日なりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】誰もみな葵の蔓を髪にさして、なるほど今日は賀茂祭のみあれに会う日だったのだなあ。

【語句】○かづら 蔓草などで作った髪飾り。ここでは賀茂祭に髪に挿す双葉葵。○ちはやぶる 枕詞。「神」「我が大君」「斎宮」などにかかる。○神のみあれ 陰暦四月中の酉の日（申とも）の賀茂祭の前に行われる、神霊を神に移して神を迎える儀式。○あふ日 「会ふ日」に「葵（あふひ）」を掛ける。

【所載】万代集・五二三／夫木抄・二四八二／貫之集Ⅰ・一三〇

【参考】作者については、一〇七九番参考欄参照。

一〇七八 あればきにひきつれてこそちはやぶるかものはなみたちわたりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】賀茂祭のあればきのために連れだつて、川浪のたつ賀茂川を立ち渡ってきたことだ。

【語句】○あればき 「あれ」は祭神の出現の縁となるもので、神の木などという。それに鈴を付けた引き綱を結び、引いて多幸を祈願すること。○ひきつれて 人々が連なるように一緒になつて。接頭語「ひき」は「あればき」の韻をふんでいる。○ちはやぶる 枕詞。「神」「わが大君」「斎宮」などにかかる。ここでは「賀茂」の枕詞。○かものはなみ 賀茂神社を流れる賀茂川の波。○たちわたり 川波が「たつ」意に「たちわたる」の接頭語「たち」を掛ける。

【所載】貫之集Ⅰ・二四四

【参考】作者については、一〇七九番参考欄参照。

一〇七九 春がすみたちまじりつゝいなりやまこゆるおもひの人しれぬかな

已上四首 いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞が立なびく中にまじりながら、思いが成就するという稲荷山を越える私の思いは、あの人には知られないことだなあ。

【語句】○たちまじりつゝ 霞「たち」にたち混じりの接頭語「たち」をかける。霞の中にまじりながら。○いなりやま 山城国の歌枕。京都市伏見区にあり、東山三十六峰の南端の山。この山に稲荷神社、上中下の三社が祀られている。○こゆるおもひ 参詣して成就を祈願する思い。旧暦二月の初午に参詣すると思いが叶うとされた。○人しれぬかな あの人にはわかつてもらえないことよ。

【所載】貫之Ⅰ・三三六

【参考】左注「已上四首いせ」とあるが一〇七六番一〇七九番の四首はいずれも貫之の歌である。

一〇八〇 いなり山ゆきかふ人はきみがよをひとりこゝろのいのりやはせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】稲荷山詣でに行き交う人々は、君の長寿を皆おなじ心で祈ることです。

【語句】○いなり山 一〇七九番歌参照。○ゆきかふ人 稲荷山に参詣する人々。○きみがよ 祈願の対象となる人の寿命。○ひとつこゝろ 皆おなじ気持ち。○いのりやはせぬ 祈らないだろうか。いや必ず祈る。「やは」は反語。

【所載】伊勢集Ⅰ・二〇五／伊勢集Ⅱ・二〇九／伊勢集Ⅲ・二〇八

【参考】伊勢集には、「東三条の御息所の御賀を、中務宮したまふに、屏風に」として「いなりの山越ゆるところ」とある。作者は「いせ」である。

〔以上五首担当 林〕

一〇八一 かきくもりあやめもしらぬおほぞらにありとほしをばい<sup>オボユベシヤハ</sup>か<sup>ありとほしの神の本にてよめる</sup>ぐるべき

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】すっかり曇ってものの区別もつかない大空に星があるとは、どうして知ることができましょうか。

いや、わかりはしませんよ。蟻通の明神とは知りませんでした。

【語句】○あやめもしらぬ 物の区別もわからない。「ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな」(古今集・四六九)。○ありとほしをば 「ありと星をば」に「蟻通をば」を掛ける。暗い曇り空では星があつてもわからないと言ひ、同時に、蟻通の神とは知らなかったとも言つたもの。蟻通の明神は、現在の大阪府泉佐野市長滝に鎮座する蟻通神社。祭神は大名持命。所載欄の貫之集によると、当該歌は、紀貫之が紀伊国から帰京する途中、社前で馬が瀕死の状態となり、道行く人々に、それは蟻通の神の仕業だと言われて奉納した歌。蟻通明神の社名由来については枕草子二二七段にも見え、昔、帝の命に背いて老親を匿つていた中将が、七曲がりの玉に糸を通せという唐土の帝の難題を、蟻に糸を結んで通させるといふ老親の知恵で解決し、その人が神となつて、「七曲(ななわた)にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとは知らずやあるらん」と詠んだという話を伝える。この話は、袋草紙、奥儀抄などにも見える。○いかゞしるべき どうして知ることができようか、いや知ることではない、という反語表現。

【所載】貫之集Ⅰ・八〇六／袋草紙・二四七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。また、この話は俊頼髓脳や大鏡にも見え、謡曲「蟻通」の素材ともなっている。

## みち

一〇八二 くれなゐのすそびくみちをなかにをきてわれやゆくべき君やきまさむ

【異同】ナシ

【現代語訳】紅の裳裾を引いて通る道を中心に挟んで、私が行くべきでしょうか、それともあなたが来て下さるでしょうか。

【語句】◎みち 道。人や車などが通行するところ。また、道中、途中の意でも使われる。恋人のもとへ通う道が、特によく詠まれた。転じて、世間の道理や仏教の教えなど抽象的な意味にも用いられた。古今六帖の「みち」の項には、「たゞち」(近道の意)や「とを(ほ)みち」(遠道)という語を詠んだ歌も含まれる。○くれなゐのすそびくみち 女性が赤い裳の裾を引いて通る道。

【所載】万葉集・二六六三(旧二六五五) 紅之 欄引道乎 中置而 妾哉将通 公哉将来座 一云、須蘇衝河平 又曰、待香将待 クレナキノスソビクミチヲナカニオキテワレヤカヨハムキミヤキマサム 一云、スソツ

クカハヲ又曰、マチニカマタム くれなゐのすそびくみちをなかにおきてわれかかよはむきまかきまさむ 一云、すそつくかはを又曰、まちにかまたむ／夫木抄・九三〇三／人麿集Ⅱ・四七七／人麿集Ⅳ・一五五

一〇八三 いそのかみふるのなかみちなか／＼にみずはこひしと思はましやは

【異同】ナシ

【現代語訳】石上の布留の中道。なまじ逢わなければ、こんなに恋しいと思わなかっただろうに。

【語句】○いそのかみふるのなかみちなか／＼に「いそのかみふる」は大和国の歌枕。一〇七四番歌参照。参考欄の貫之集の詞書を勘案すれば、「布留」に「古（経）る」を掛けるか。「ふるのなかみち」は、布留を通つて行く道の意か。二句目までは「なか」の同音で「なかなかに」を導く序詞。「なかなか」は、なまじい、それくらいならいっそ、の意。また、「なか」は、「中」に（男女の）「仲」を掛けるか。○みずはこひしと思はましやは いっそのこと逢わなかった方がこれほど恋しく思わなくてすんだのに、以前逢つたことがあるためにますます恋しくてたまらないという気持ち。「あひ見ずは恋しきこともなからまし音を聞くべかりける」（古今集・六七八）。

【所載】古今集・恋四・六七九／貫之集Ⅰ・六九四／袖中抄・五三五

【参考】古今六帖に作者名はないが、貫之集Ⅰに「あひしりたる人のもとにしばしかよはぬほどになりて、なかたえて又思ひ返していひやる」という詞書とともに見える。古今集も作者を「つらゆき」とする。

一〇八四 つきよゝみいもにあはむとたゞちからわれはくれどもよぞふけにける

【異同】われはくれとも―われ立くれとも（御）

【現代語訳】月が明るく照らすので、あの娘（こ）に逢おうと、私は近道をしてまっすぐやって来たけれど、夜が更けてしまったよ。

【語句】○つきよゝみ 月夜良み。「つきよ」は、当該歌では、月、月光の意。月が良いので。月光が明るく照らすので。「ひとへ山へなれるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ」（万葉集・七六八（旧七六五））。○いも 妹。男性が妻や恋人を呼ぶ語。○ただちから 「ただち」は直道、直路。まっすぐに行ける近道。「恋ひわびて打ち寝（ぬ）る中に行きかよふ夢のただちはうつつならなむ」（古今集・五五八）。「から」は、経由を表

す格助詞。……を通して。暗い夜は、遠回りでも通行しやすい道を行かざるを得ないが、月光が明るいので近道をするということ。

【所載】万葉集・二六二五（旧二六一八）月夜好三 妹二相跡 直道柄 吾者雖来 夜其深去来 ツキヨヨミイモニアハムトタダチカラワレハクレドモヨゾフケニケル つくよよいもにあはむとただちからわれはきつれどよぞふけにける／人麿集Ⅱ・四六七

一〇八五 とゞむとも猶かよひなんたまほこのみちせばきまでしげきわがこひ

【異同】ナシ

【現代語訳】たとえ人が私を止めても、それでもやはり愛しい人の許へ通いましょう。道が狭くなるほど草木が繁るように、愛しい人への思いでいっぱいになっている私の恋なのです。

【語句】○かよひなん 通おう。「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「ん（む）」は意志・希望を表す助動詞の終止形。○たまほこの 「道」にかかる枕詞。○しげきわがこひ 「しげき」は、上からの続きでは草が繁茂する意を表し、下への続きでは、相手への思いでいっぱいになっていることを表す。「たまほこのみちせばきまで」は「しげき」を導く序詞。「津の国の難波の葦の芽もはるに繁きわが恋人知らめや」（古今集・六〇四・貫之）、「夏草のしげきわが恋住吉の岸の白波千重につもりぬ」（人麿集Ⅱ・三六五）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 長戸〕

一〇八六 いにしへのゝなかふるみちあらためばあらためられよのなかふるみち  
かしはゝらのみかど

【異同】ナシ

【現代語訳】ふるくなったむかしの野中の古道が新しくなるのならば新しくなられよ、野中の古道よ。

【語句】○かしはゝらのみかど 桓武天皇。橿原陵に埋葬される。○いにしへの 古くなったむかしの。○のなかふるみち 野原の中の古くなった道。

【所載】日本後紀・三

【参考】 日本後紀では、延暦十四（七九五）年四月の曲水宴で桓武天皇が誦じた古歌と伝える。

一〇八七 みちすらにしぐれにあひていとゞしくほしあへぬそでをぬらしつるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 道の途中でさえ時雨にあつてひどいの、その上、乾ききれない袖を涙で濡らしてしまったことだ。

【語句】 ○みちすらに 途中でさえ。「すらに」は副助詞。○いとどしく さらにいつそう。いつそうひどく。

【所載】 貫之集Ⅰ・一三六

一〇八八 ゆきやらぬこゝろやなにぞあきのゝのみちはちさともあらじと思を  
みつね

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あなたのもとに行こうとしても行ききれないこの気持ちは何なのでしょう。秋の野の、あなたと  
ころまでの道ははるか遠くまで続くわけでもあるまいと思うのに。

【語句】 ○ゆきやらぬ 行こうとしても行き続けることができない。○ちさと 「千里」を訓読したもの。た  
くさんの道のり。はるか遠くまで。平安和歌での用例は少ない。

【所載】 古今六帖・第五帖「遠道隔てたる」二七八／躬恒集Ⅰ・二二八／躬恒集Ⅱ・一四〇／躬恒集Ⅲ・一二  
四／躬恒集Ⅳ・四七三／躬恒集Ⅴ・一〇一

【参考】 作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一〇八九 たまほこのみちのちまたにいもまつとたちたるほどによはふけにけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 わかれ道のところであの人を待つて立っているうちに、夜は更けてしまったことだ。

【語句】 ○たまほこの 「道」に掛かる枕詞。○ちまた 道の分かれる所。

【所載】 ナシ



一〇九〇 夏山のかげをしげみやたまほこのみち行人もたちとまるらむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夏山の木陰がよく生い茂っているので、道行く人もここに立ち止まるのだろうか。

【語句】○夏山 夏の山。木々に葉が生い茂るので、人々は涼を求めて立ちどまる。○かげをしげみや 木々が生い茂って下蔭が深いからだろうか。「や」は疑問、歌末の「らむ」へひびく。○たまほこの「道」に掛かる枕詞。○みち行人 所載欄の貫之集では、「みちゆき人」。

【所載】拾遺集・夏・一三〇／貫之集Ⅰ・一／秀歌大体・四三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

一〇九一 たまほこのとをみちをこそ人はゆけなどかいまのまみぬはこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】人は遠い道のりであつても行きます。それなのに、どうして遠く離れているわけでもないのに、今少しの間も会えないあなたが恋しいのでしょうか。

【語句】○たまほこの「道」の枕詞。○とをみち とほみち。遠い道のり。貫之集に当該歌を含めて三例あり、勅撰集ではこの一例のみ。「ひとひだにみねば恋しき心有るに遠道さして君がゆくかな」（貫之集Ⅰ・七〇五）。

○いまのま わずかの間。「あはざりし時いかなりしもの」とてかただ今の間も見ねば恋しき」（後撰集・五六三）。

○みぬはこひしき 見ぬは恋しき。逢えないあなたが恋しいのだろうか。

【所載】拾遺集・恋二・七三七／家持集Ⅰ・二八五／家持集Ⅱ・二九九／貫之集Ⅰ・六七四、七八六  
【参考】拾遺集では恋の部に入集しているが、詞書に「源公忠朝臣日々にまかりあひ侍りけるを、いかなる日にありけむ、あひ侍らざりける日、つかはしける」とあり、ともに朱雀院別当であつた源公忠に貫之が贈った歌。貫之集の詞書も同様の詠歌事情を伝える。

一〇九二 わがやどの<sup>ハ</sup>みちもなきまであれにけりつれなき人を<sup>マツ</sup>こふとせしまに

【異同】こふとせしまに―まつとせしまに（大）

【現代語訳】私の家は、道もないほどにまで荒れてしまいましたよ。ちっとも訪ねてくれない薄情なあの人を恋慕っていた間に。

【語句】○つれなき人 薄情な人。冷淡な人。和歌では恋の相手の薄情さを表現することが多い。○みちもなきまで 道もなくなくなるまで。通う人がいないと「道」はなくなつた。「わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなければ」（古今集・三三二）。○こふとせしまに 恋していた間に。古今集以下の所載欄の他文献では傍記と同じ「まつとせしまに」で、「待つていた間に」の意となる。

【所載】古今集・恋五・七七〇／和漢朗詠集・六二三／遍昭集Ⅱ・三五／三十人撰・四三／三十六人撰・五一／八雲御抄・四九／愚問賢注・三七

一〇九三 こゝろにはちへにしき／＼おもへどもつかひをやらんすべもしらなみ  
つかひ

【異同】すへもしらなみ―すゑもしらなみ（大）

【現代語訳】心の中では千重にも頻りに思っているけれども、言伝ての使いをやる手立ても知らないので使いをやることもできない。

【語句】◎つかひ 使者。特に伝言を運ぶ人。万葉集では「君が使」「妹が使」など、恋の場面での使いが詠まれていることが多いが、古今六帖でも恋の使いの歌が並ぶ。○ちへにしき／＼ 千重にも頻りに。「しき／＼」はひき続いて起こるさま。「しくしく」に同じ。「一日にもちへにしきしきわが恋ふる妹があたりに時雨ふり見ん」（古今六帖・四九二）。○すべもしらなみ 手段を知らなくて。言外にそれを残念に思う気持ちがある。「すべ」は手段、方法、の意。「しらなみ」の「み」は原因・理由を表す接尾語。

【所載】万葉集・二五五七（旧二五五二）情者 千遍敷及 雖念 使乎将遣 為便之不知久 ココロニハチヘニシクシクオモヘドモツカヒヲヤラムスベノシラナク こゝろにはちへしくしくにおもへどもつかひをやらむすべのしらなく

一〇九四 かくばかりわれはこひつゝたまほこのキミガツカヒロマチャカネテン

【異同】キミカツカヒロマチャカネテン（底本、片仮名細字ニヨル補入）―きみかつかひをまちやかねてん（桂、本行）、使やらすとわすると思ふな（大、本行）

【現代語訳】これほどまで、私は恋しく思いながら、あの人からの使いを待ちあぐねてしまっているのでしょうか。

【語句】○かくばかりわれはこひつゝ、これほど私は恋しく思いながら。所載欄の万葉集では「かくだにもわれはこひなむ」。○たまほこの 玉梓の。「道」「里」にかかる枕詞。所載欄の万葉集では、「つかひ」の枕詞「たまづさの」となっている。ここは「玉梓の」の誤か。○マチャカネテン 待っている待ち受けることができないのでしょうか。「まちかぬ」は、「まちあぐむ」意。「や」は詠嘆の意のこもった疑問。

【所載】万葉集・二五五三（旧二五四八）如是谷裳 吾者恋南 玉梓之 君之使乎 待也金手武 カクダニモワレハコヒナムタマヅサノキミガツカヒロマチャカネテム かくだにもあれはこひなむたまづさのきみがつかひをまちやかねてむ／人麿集Ⅳ・二二〇

【参考】底本と御所本では下句は片仮名細字書きだが、桂宮本と大久保本では平仮名本行書き。大久保本では一〇九四と一〇九五の歌順が逆になっているなど文に乱れがある。

一〇九五 人ゴトノシゲキ、ミニハタマホコノつかひやらすとわするとおもふな

【異同】人コトノシゲキ、ミニハタマホコノ（底本、片仮名細字ニヨル補入）―人ことのしげきみにはたまほこの（桂・大、本行） つかひやらすとわするとおもふな―君かつかひをまちやかねてん（大）

【現代語訳】人の噂のうるさくたつあなたに使いを遣らないからといって、私があなたのことを忘れたとは思わないでください。

【語句】○人ゴトノシゲキ、ミニハ 人の噂がしきりであるあなたには。「人ゴト（ひとごと）」は世間の噂。「空蟬の世の人ごとのしげければわすれぬもののかれぬべらなり」（古今集・七一六）。○タマホコノ 所載欄の万葉集では「たまづさの」。一〇九四番参照。○つかひやらすと 使者を行かせないからといって。

【所載】万葉集・二五九一（旧二五八六）人事 茂君 玉梓之 使不遣 忘跡思名 ヒトゴトヲシゲクテキミニタマヅサノツカヒモヤラズワスルトオモフナ ひとごとをしげみときみにたまづさのつかひもやらずわするとお

もふな

【参考】底本と御所本では上句は片仮名細字書きだが、桂宮本と大久保本では平仮名本行書き。一〇九四番歌参照。  
〔以上五首担当 三浦〕

一〇九六 わぎもこやいたくなわびそたまほこのつかひかよはぬものならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい人よ。あまりふさぎ込んだりなさいますな。使いが通わないわけでもありませんので。

【語句】○わぎもこや 「わぎもこ」は「吾妹子」で、男性が女性を親しんでいる語。「や」は呼びかけの間投助詞。○いたくなわびそ 「な……そ」は禁止を示す助詞。「わぶ」は氣力を失って沈み込むこと。淋しく心細い思いをすること。○たまほこの 本来「道」「里」などにかかる枕詞。一〇九四番歌参照。○ものならなくに ものではないので。ものではないのに。「なくに」は打消の助動詞「ず」のク語法に、助詞「に」が伴った形。主として歌に用いられる。

【所載】ナシ

一〇九七 たまほこのみちゆく人も見えなくなげきをしつゝいできつるかも

【異同】ナシ

【現代語訳】道を行く人（あの人からの使い）も見えないので、嘆きを重ねながら、じっとしていられずにやっつけてしまったことだ。

【語句】○たまほこの 「道」「里」などにかかる枕詞。○みちゆく人 当該歌は「つかひ」の項に見える歌なので、当然使いの人と考えるべきなのであろう。○見えなくに 「なくに」については一〇九六歌参照。○なげきをしつゝ ため息をつきながら。

【所載】ナシ

一〇九八 こひしねとするわざならでたまほこのつかひもみえずなり行みれば

【異同】するわざならて―するわざならし（大）

【現代語訳】このまま恋死にをしるという仕打ちのようだ。あの人からの使いもふつりと来なくなつたところをみると。

【語句】○するわざならで 底本のままでは下句の「なり行（く）みれば」と照応しない。傍記ならびに大久保本の本文「するわざならし」によつて解した。「こひしねとするわざならしむばたまのよるはすがらに夢に見えつつ」（古今集・五二六、古今六帖・二〇三二）。「ならし」は「なるらし」の約。○たまほこの 一〇九四番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「こひしなばこひもしねとやたまほこのみちゆくひとのこともらなく」（万葉集・二三七四（旧二三七〇））や「恋しなばこひもしねとや玉ほこの道行人にことづてもなき」（人麿集Ⅰ・一九九、Ⅱ、Ⅲにも）などがある。

一〇九九 いつ人はみちもしげみにかよへどもわがまついもがつかひこぬかも

【異同】ナシ

【現代語訳】つまらない連中は道にあふれるほど行き来をしているが、私が待っている彼女からの使いは一向に來ないことだ。

【語句】○いつ人は 底本のままでは理解しがたい。万葉集には「家人者」とあり、本来「いへ人は」とあつたのを誤写したのであらう。「いへびと」は「家人（けにん）」を訓読した語。「家人（けにん）」は「奴婢（ぬひ）」などと同じく、律令制下における賤民の一。○みちもしげみに 道もいっぴいになるほどに。人の往來のはげしさをいう。○わがまついもが 「いも」は男性が女性を親しんでいる語。「いもが」の「が」は連体格助詞。

【所載】万葉集・二五三四（旧二五二九）家人者 路毛四美三荷 雖往來 吾待妹之 使不來鴨 イヘビトハミチモシミニミニカヨヘドモワガマツイモガツカヒコヌカモ イヘビとはみちもしみみにかよへどもわがまついもがつかひこぬかも／夫木抄・一六六二六／俊頼髓脳・三一九

一一〇〇 たれかれとゝはゞこたへむすべをなみ君がつかひをかへしつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あれは誰かと尋ねられたら答えようがなくて、せっかくのあなたの使いを帰してしまったことです。

【語句】○たれかれと 彼は誰かと。「たれかれと我をなとひそ長月の時雨にぬれて君まつ人を」（古今六帖・四九六）。ただし万葉集の「誰彼登」は、一般に「タヅカレト」と訓じられている。○こたへむすべをなみ「こたへむ」の「む」は連体形で、「すべ」にかかる。「すべ」は、術、手だて、方法。「なみ」は、形容詞「なし」の語幹に、原因、理由を表す接尾語の「み」が伴った形。答えようと思っても答える方法がなくて。

【所載】万葉集・二五五〇（旧二五四五） 誰彼登 問者将答 為便乎無 君之使乎 還鶴鳴 タヅカレトハバコタヘムスベヲナミキミガツカヒヲカヘシツルカモ たぞかれとはばこたへむすべをなみきみがつかひをかへしつるかも

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一一〇一 わがこひのことしかたらひなぐさめむきみがつかひをまちやかねてむ

【異同】きみかつかひを—きみか史を（大）

【現代語訳】私の苦しい恋のことをば語り慰めようと思うあなたの使いなのに、それさえも待ちかねていることだろうか。

【語句】○ことしかたらひなぐさめむ 「し」は強意の助詞。所載欄の万葉集や人麿集では「ことも」となっている。「かたらひなぐさむ」は語り合つて気持ちを慰める、ということ。「む」は意志の助動詞の連体形。○きみがつかひをまちやかねてむ あなたのお使いを待ちかねていることだろうか。「や」は疑問。男からの使いを待ちきれない気持ちを表す。一〇九四番歌参照。

【所載】万葉集・二五四八（旧二五四三） 吾恋之 事毛語 名草目六 君之使乎 待八金手六 ワガコヒノコトモカタラヒナグサメムキミガツカヒヲマチャカネテム あがこふることもかたらひなぐさめむきみがつかひをまちやかねてむ／人麿集Ⅱ・五四八／人麿集Ⅳ・二二六

一一〇二 わがやどのわさ田かりあげてかへすとも君がつかひをかへしはやらじ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の早稲田を刈りつくし（春になって）田を鋤き返しても、あなたの使いをそのまま帰しはすまい。

【語句】○わさ田 晩稲に対する早稲を植える田。「うち返し君ぞ恋しきやまとなるふるのわさ田のおもひいでつつ」（後撰集・五二二）。○かりあげてかへすとも 田を刈りつくして、田を耕すとしても。一首に「かへす」という語を重ねること、田を返しても（あなたの）使いをすぐには帰さない、と展開させる。「わすらるる時しなければ春の田を返す返すぞ人はこひしき」（拾遺集・八一）。

【所載】家持集Ⅱ・二二九／俊頼髓脳・二二〇／和歌童蒙抄・三二七

### むまや

一一〇三 あづまぢのむまや／＼とかぞへつゝあふみのちかくなるがうれしさ

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の駅を駅、駅……と繰り返し数える内に近江が近づいてくる。今か今かと数えているうちに、あなたにお逢いする時が近づいてくる嬉しさよ。

【語句】◎むまや 駅（うまや）。古代駅制により官道に設けられた駅舎。令の規定では三十里ごとに設置すべきものとされていた。○あづまぢ 近江の逢坂と常陸との間の道筋。○むまや／＼ 今か今か。「むまや（駅）」に「むまや（今や）」を掛ける。「しのづかのむまやむまやとまちわびし君はむなしくなりぞしにける」（大和物語・七〇段・一〇二）。○かぞへつゝ 繰り返し数えながら。○あふみ 「近江」と「逢ふ身」をかける。「けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖のつゆけき」（古今集・三六九）。

【所載】夫木抄・一四八七九

一一〇四 あづまぢのまとのとをさもあらなくにむまや／＼ときみをまつかな

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の的が遠いわけでもないのに、今か今かとあなたの訪れを待つことよ。

【語釈】○まと 目的。目当て。めど。「あづまち」との関連で「まと」が用いられる用例は他にはない。「むま」と「まと」との組み合わせについては和泉式部続集「とをつらのむまならねども君がのる車もまとにみゆるなりけり」(二八)に見られる。ただし、それは、車の輪を騎射の的の形にしていたという状況下でのもの。○あらなくに ……でもないのに。ただし「遠さもあらなくに」の用例は他に見られない。後代の例となるが金槐和歌集・五六四「玉ぼこの道は遠くもあらなくに旅とし思へばわびしかりけり」に「遠くもあらなくに」とつづく例がある。○むまや／＼ 「むまや」の「や」と「矢」とをかけるか。「矢」と「的(まと)」は縁語か。

【所載】ナシ

【参考】本歌第二句の「まと」については、意がよく通らない。一首の意としては、東路を行く際、駅(うまや)を通過する度に指折り数えて道のりの遠さを実感するが、恋人との距離はそう遠くないのに今か今かと訪れを心待ちにしている、ということであろうか。

### 春のた

一一〇五 このめはるはるのあらたをうちかへし思やみにし人ぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】木の芽が張る春には荒れた田を打ち返し、何度も繰り返し、私に愛情のなくなったあの人のことが恋しく思われることよ。

【語句】◎春のた 春の季節の田のことであるが、和歌では春に耕して田を作ることから「かへす」や「つくる」という語と共に詠われることが多い。○このめはる 木の芽張る。木の芽がふくらんでくること。ここでは「春」を導く枕詞。○あらたをうちかへし 荒田に鋤を入れて打ち返して。「あらた」は荒田、冬の間耕作せず荒れていた田。「うち返し」に繰り返し返しの意の「うち返し」をかける。「わが宿の前のあら田をうち返し春ふかきまで人をつつかな」(道濟集・一二二)。○思やみにし人 思いがなくなつた人。愛情のなくなつた人。「思ひやむ」は慕うことをやめる、ということ。「あやしきもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき」(後撰集・六〇八)。

【所載】後撰集・恋一・五四四／拾遺集・恋三・八二二

〔以上五首担当 橋本・尾高直子〕



一一〇六 あらきだをあらすきかへし／＼てもみてこそやまめ人のこゝろを

【異同】ナシ

【現代語訳】開墾したばかりの田を粗く、何度も鋤き返すように見て確かめて、見込みがないならば諦めよう。  
あの人の心を。

【語句】○あらきだをあらすきかへし 「あらきだ」は「新墾田」で開墾したばかりの田。万葉集に「ゆ種蒔くあらきの小田を」（一一四・旧一一〇）とある。「あらすきかへし」の「あら」の音の繰り返しにより、粗く鋤き返す様子を表現する。上三句は「かへしても」にかかる序詞。○みてこそやまめ この目で見て判断して、終わりにしよう、の意。

【所載】古今集・恋五・八一七

一一〇七 わきらるゝときしなければ春のたのかへす／＼ぞ人はこひしき  
つらゆき

【異同】わきらるゝ―わすらるゝ（御・大）

【現代語訳】あの人を忘れられる時など無いので、春の田圃をかえすように返す返すもあの人を恋しいことだ。

【語句】○わきらるゝときしなければ 「わきらるゝ」では意がとりにくい。底本「き」（字母「記」）は「す」（字母「須」）の誤写と見て、「わすらるゝ」で解す。忘れられる時がないので。○かへす／＼ぞ 「田を鋤き返す」意と、「繰り返し」「何度も何度も」の意の「かへすかへす」を掛ける。

【所載】拾遺集・恋三・八一―貫之集Ⅰ・一四二／元輔集Ⅰ・二二一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の拾遺集や貫之集Ⅰに一致する。なお、当該歌は古今集五一四番歌「忘らるる時しなければあしたつの思ひみだれてねをのみぞなく」と初二句が一致し、同五一五番歌「からころもひもゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人は恋しき」と下句が一致する。

一一〇八 春のたを人にまかせてわれはたゞはなにこゝろをつくるころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】春の田の耕作を人に任せて、私はただ、花に心を寄せているこの頃だよ。

【語句】○人にまかせて 一一〇七番歌にあるように、春の田には、鋤き返すつらい作業が伴うのだが、それを人に任せて、の意。「任せる」に、種を「蒔かせる」を掛ける。○つくる 心をつける、寄せるの意の「付く」に「作る」を掛ける。「蒔かせ」「つくる」は「田」の縁語。

【所載】拾遺集・春上・四七／和漢朗詠集・五六九

【参考】一一〇九番歌左注には「已上三首つらゆき」とあるが、当該歌は所載欄の拾遺集によれば斎宮内侍の作。

一一〇九 あしひきの山のさくららのいろみてぞおちかた人はたねはまきてる

已上三首 つらゆき

【異同】たねはまきてる―たねをまきける（御・桂）、たねはまきける（大）

【現代語訳】山の桜の色を十分に見てから、遠いあちらの人は（稲の）種は蒔くものなのだ。

【語句】○おちかた人は をちかた人は。遠方の人は。○たねはまきてる このままでは意が通じないので、他本により、「たねはまきける」で解した。種は蒔いている。

【所載】夫木抄・一八六五／貫之集Ⅰ・五一三

【参考】左注による作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

一一一〇 おりたてば身こそゝほつれ春のたのふみかくこともいまはやめてむ

【異同】ナシ

【現代語訳】降り立ったところ、（裾だけでなく）身こそが濡れてしまう。春の田に踏み入れ掻き均すように、文を書くことも今はやめてしまおう。

【語句】○おりたてば 田に降り立ったところ。○身こそゝほつれ 身こそそほつれ。「そほつ」は濡れるの意。○ふみかくことも 文を書くことも。「ふみかく」は、「文書く」に「踏み掻く」を掛ける。「掻く」は、田に水を入れて土を碎いてかきならす作業。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 杉本〕

一一一一 わぎもこがてさへぬれつゝうふるたをかりてをさめむくらなしの山 なつのゝ人まろ

【異同】 なつのゝ人まろ―なつの田 人まろ（大久保本ハ「なつの田」ト「人まろ」ノ間ニ空白部分が存ス）

底本二題ハ無ク、作者名ニ「なつのゝ人まろ」トアル。コレハ桂宮本・御所本モオナジ。大久保本ノミ「なつの田」ト題ヲ記シ、作者名ヲ「人まろ」トスル。

【現代語訳】 いとしいあの子が手まで濡らして植えた田を（夏もすぎ秋になるとたわわに実る稲を）刈り取って納める蔵がない、くらなし山よ。

【語句】 ◎なつのゝ 本来は「夏の田」。ここに「なつの田」という題があつたと推定される。題を列挙した部分には「田 はるのた 夏の田 あきのた ふゆのた……」と四季の田があるからである。作者名「なつのゝ人まろ」は他に例がない。大久保本のように「なつのゝ」の部分は位置がもつと上だつた可能性が高い。夏の田は梅雨の間の田植えの景を詠む。○わぎもこ 吾妹子。吾妹（わぎも）に同じ。「こ」は親愛の氣持を表す。男から恋人を親しんで呼ぶ呼称。○てさへぬれつゝ 手さへ濡れつつ。手まで濡らして。所載欄の万葉集では「赤裳ひづちて」。裳の裾を濡らし、泥に汚れて。○うふるた 植うる田。「植う」はワ行下二段活用 of 動詞。○をさめむくら おさめむくら。納めむ蔵。冒頭からこまでは「くらなし山」の「クラ」にかかる序詞。○くらなしの山 所在地不明。所載欄の万葉集では「くらなしのはま」。大分県中津郡龍王町の海岸（闇無浜また竜王浜）とする説があるが不明。

【所載】 古今六帖・第三帖「はま一九二三／拾遺集・雜秋・一一二三／万葉集・一七一四（旧一七一〇）吾妹兒之 赤裳泥塗而 殖之田乎 刈將蔵 倉無之浜 ワギモユガアカモヒツチテウエシタヲカリテヲサメムクラナシノハマ わぎもこがあかもひづちてうゑしたをかりてをさめむくらなしのはま／人麿集Ⅰ・一七五／人麿集Ⅱ・七二／人麿集Ⅲ・六六九

【参考】 本来のかたちと推定した「人まろ」は、所載欄の文献に一致する。

一一一一 ときすぎばさなへもいたくおいぬべしあめにもたごはさはらざりけり マタ つらゆき

【異同】 さなへもいたく—さなへもいまた (大) マタ

【現代語訳】 時期を逃したら (植えるべき) 早苗も、ひどく、とうがたつてしまいうだろう、(それで、あの) 田植えの者たちは雨の降るのもかまわず植えているのだったよ。

【語句】 ○ときすぎば 時過ぎば。「とき」は順当な時機。しかるべき機会。ふさわしい時期。「過ぎば」は過ぎてしまつたら。○あめにもたごはさはらざりけり 雨にも田子は障らざりけり。雨にも妨げられず農夫は田植えをしているのだった。「田子」は田に降りて働くひとをいう。「さはらざりけり」の「さはる」は妨げになるの意。「霜月、師走のふりこほり、水無月の照りはたたくにもさはらず来たり」(竹取物語)。

【所載】 続古今集・夏・二三五／和漢朗詠集・五七〇／万代集・六五一／貫之集Ⅰ・一四九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

### 秋のた

一一一二 あきのたのほにいでぬればうちむれてさ<sup>本のまゝ</sup>とをよりかりぞきにける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋の田の稲穂が実る時期となつたから、私たちは連れだつて里から遠く刈りにやつてきたのだ。狩りにやつてきた。

【語句】 ◎秋のた 秋の田。秋は稲が育ち穂に実が生ずる、米の収穫時である。田一面の稲穂の上に霧がかかると景のほか、風にそよぐ音を詠む。また、稲穂が見えるようになることによそえ、秘めていた心が外にあらわれることを「穂に出づ」と表現するものが多い。○ほにいでぬれば 穂となつてあらわれ出てきたから。「穂にいづ」は稲の内部から穂が現れてくること。○うちむれて 人々が集まつて一緒に。群がつて。○さとゝをより 意味不明。書写する人も不審であつたから傍記に「本のまゝ」すなわち、見た本にはこのように書いてあつた、と記した。所載欄の貫之集Ⅰは「里とをみより」。貫之集Ⅱは「さととをくより」。後者によつて現代語訳をした。○かりぞきにける 冒頭からの文脈では、秋の田の稲穂を「刈り」。それに「狩り」を掛ける。

【所載】 貫之集Ⅰ・一六／貫之集Ⅱ・一四

【参考】 所載欄の貫之集の詞書によれば、延喜二年月次の屏風の絵に添える歌として四五首奉った歌の一つ。

その絵は「小鷹狩り」であつた。したがつてここでも画中に群れている人の言葉として、現代語訳した。

一一一四 くもがくれなくなるかりのゆきてゐるうきたのほむきしげくしぞ思

【異同】ナシ

【現代語訳】雲に隠れて姿は見えず鳴きゆく雁の羽を休める渥田（うきた）、その稲穂は透き間なく繁く、わたしはあの人を忘れる時なく繁く思っている。

【語句】○くもがくれ 雲隠れ。雲に隠れて見えない。○なくなる 鳴くなる。「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。○ゆきてゐる 「ある」は止まる、じつとしている。○うきた 渥田。泥の深い田。○ほむき 稲穂がなびくこと。実つた稲穂のさまとも。「秋の田の穂向のよれるかたよりに君によりななこちたくありとも」（万葉集・一一四）、「秋の田のほむき見がてりわがせこがふさ手折りけるをみなへしかも」（万葉集・三九六五（旧三九四三））。所載欄の万葉集には「ほたち」とある。○しげくしぞ思 繁くしぞ思ふ。「繁く思ふ」を強める「ぞ」とその係り結び「思ふ」の連体形。「し」は強意の助詞。いつもいつも思う。思わないときはない。初句から四句までは「しげく」を導く序と考えられる。

【所載】万葉集・一五七一（旧一五六七）雲隠 鳴奈流鷹之 去而将居 秋田之穂立 繁之所念 クモガクレ  
ナクナルカリノユキテキムアキタノホタチシゲクシゾオモフ くもがくりなくなるかりのゆきてゐむあきたの  
ほたちしげくしおもほゆ／家持集Ⅰ・二四一／家持集Ⅱ・一三二

一一一五 あきのたのほにこそ人をいでゝざらめなどかこゝろにわすれしもせむ

【異同】こひ

【現代語訳】あの人に恋していると表にこそ出さないけれど、どうして心の中では忘れることがあるうか、片時も忘れない。

【語句】○あきのたの 秋の田の。「ほ（穂）」を導く措辞。○ほにこそ人をいでゝざらめ 「いでゝざらめ」の部分の底本だけが「て」のあと踊り字を書く。筆写の手が滑つたとみて、御所本・桂宮本の「いでざらめ」によつて現代語訳した。「穂にいづ」は稲の穂が内から現れること。目に見えるようになること。「こそ」のあとに已然形があると、多くは逆説の意を生じる。表面に表さないけれども。所載欄の古今集では、「ほにこそ人

をこひざらめ」。○わすれしもせむ 忘れようか、忘れはしない。「忘れむ」を強めた言い方。「し」「も」は強  
意の助詞。上の「なごか」を受けて反語となる。

【所載】古今集・恋一・五四七

〔以上五首担当 平野〕

一一一六 秋のたのほのうへきりあふあさがすみいづれのかたにわれこひやまむ  
いはひめのきさき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田の稲穂の上に一面に立ちこめている朝霧。心の中に晴れやらぬ私の恋うる気持は、どちらの  
方向で解消されるのだろうか。

【語句】○ほのうへ 稲穂の上。○きりあふ 霧り合ふ。「きらふ」に同じ。霧が立ちこめる。「奈良山の峰もき  
りあふむべしこそまがきの下に雪は消えけり」(古今六帖・一三五二)。○あさがすみ 朝霧をいう。万葉集では、  
時に秋の「霧」を「霞」と表現する例がある。「霞立つ天のかはらに君待つといゆき帰るに裳の裾濡れぬ」(一五  
三二・旧一五二八)。○いづれのかたに どちらの方向に。「夕さればわが身のみこそ悲しけれいづれの方に枕  
さだめむ」(後撰集・七三九)。なお、所載欄の万葉集「何時辺乃方二(いつへのかたに)」。○われこひやまむ  
所載欄の文献にすべて「わ(あ)が恋やまむ」とある。

【所載】万葉集・八八 秋田之 穂上尔霧相 朝霞 何時辺乃方二 我恋将息 アキノタノホノウヘニキリアフ  
アサカスミイツヘノカタニワガコヒヤマム あきのたのほのへにきらふあさかすみいつへのかたにあがこひやま  
む／和歌一字抄・一〇六四／奥儀抄・六一二／袋草紙・七二〇／六百番陳状・七〇／古来風体抄・二八

【参考】作者名「いはひめのきさき」は、所載欄の万葉集に一致する。磐姫皇后は、武内宿祢の孫で、葛城襲津  
彦(おそつひこ)の娘。仁徳天皇の后。

一一一七 ひとりしてものをぞおもふ秋のたのいなばのそよといふ人もなし  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】独りきりでももの思いにふけっている。秋の田の稲葉が風で「そよ」とかすかに音を立てるが、私には「そよ」（そうだ）と言ってくれる人もいない。

【語句】○ひとりして たった独りきりでいて。「夕されば寝にゆく鴛のひとりして妻ごひすなる声のかなしさ」（後撰集・一四〇〇）。所載欄の新撰和歌では「人しれず」。○ものをぞおもふ もの思いをしている。二句切れ。所載欄の文献はすべて「ものをおもへば」とあり、下に続く。○秋のたの 秋の田の。所載欄の古今集（底本は伊達本）は、「秋の夜の」だが、「秋のたの」とある本も、元永本・雅経筆崇徳天皇本・六条家本他の諸本及び古筆切など数多い。○いなばのそよと 「そよ」とは、稲の葉が、風に「そよ」と音を立てるの意に、「そよと言ふ」（そうだと言ふ）の意を掛ける。「人ならば語らふべきを思ふこと薄はそよといふかひぞなき」（好忠集Ⅰ・二二〇）。

【所載】古今集・恋二・五八四／新撰和歌・二七六／躬恒集Ⅰ・二九一／躬恒集Ⅱ・一六二

【参考】作者名「みつね（躬恒）」は所載欄の文献に一致する。

一一一八 人ごころいまはあきたのほになればいなばの露の思けぬべし  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人の気持が今や私に飽きているとはつきり見えるので、思い悩んで私は死んでしまいそうだ。

【語句】○人ごころ 人心。ここは、相手の人の気持を言う。「人心たとへて見れば白露の消ゆるまもなほ久しかりけり」（後撰集・一二六三）。○あきたのほになれば 飽きて愛情が薄いことがはつきりしている。「秋田」に「飽き」を掛け、稲の「穂」と「秀になる」（はつきり目につく）を掛ける。○いなばの露の思けぬべし 稲葉の露がはかなく落ちるように、私もこの思いゆえ死んでしまいそうだ。「思ひ消ぬ」は、「思ひ」の火で露が消えてしまうのと、思いで自分が絶え入る意とを掛ける。「消（け）」は、「消ゆ」の連用形、「ぬべし」は、：：：しまいにちがいない、の意。「音にのみきくのしら露夜はおきて昼は思ひにあへず消ぬべし」（古今集・四七〇）。

【所載】新続古今集・恋二・一二〇三

【参考】作者名「そせい（素性）」は所載欄の文献に一致する。

一一一九 あきのたのほなみをしわけをく露のきえもしなゝん恋てあはずは

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田に一面に実った稲を押し分けてびっしりと置いている露、その露が消えてしまうように、私は死んでしまいたい、恋いこがれるままもし逢えないのならば。

【語句】○ほなみ 穂波。稲穂が実り垂れて田一面に広がる様を波に見立てた表現。「山とほき門田のすゑは霧晴れてほなみにしづむ在明の月」（統拾遺集・三二七）。○をしわけをく露の おし分けおく露の。押し分けて置く露のように。上三句は「きえ」を導き出す序詞。露の重みで道を作るように稲穂が分かれている様を表現したものと解した。○きえもしなゝん 消えもしななむ。消えてしまつてほしい。消えてしまいたい。「なむ」は他へ詠え望む意の終助詞。ここは自分を露にたとえて、客体化して言つたか。○恋てあはずは 恋ひて逢はずは。恋して、その人に逢えないならば。「ずは」は、もし……ないならば、の意。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖・第一帖「つゆ」五六六番には、「秋の穂をしのおしなべ置く露の消えもしなまし恋ひつ逢はずは」という類似した歌がある。

一一二〇 わがゝどのわさだもいまだかりあげぬにけさふくかぜにかりはきにけり  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の門近くの早稲田もまだ稲を刈り上げていないのに、今朝吹いた風によって雁はやつて来たよ。

【語句】○わがゝどのわさだもいまだかりあげぬに この上句は、一〇六〇番歌に近似する。一〇六〇番歌参照。○けさふくかぜにかりはきにけり けさ吹く風とともに雁はやつてきたことだ。まだ「かり」あげていないのに、「かり」はやつてきた、というあそびもあるか。この歌の下句は古今六帖・一一三一番歌と同じである。

【所載】ナシ

【参考】作者名「そせい」とあるが、他文献で確認できなかった。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕



一一二二 秋の田のほにけのますらかたよりも君がよりなばこゝちよく〇らむ<sup>にほづみのわうじ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田の稲穂が一つの方向になびいているように、ひたすらあなたが寄り添ってくれたならば、どんなによい気分になるだろう。

【語句】○ほにけのますら 意味不明。所載欄の万葉集歌の西本願寺本の訓「ホムケノヨスル（穂向けの寄する）」を採り、稲穂が一方に靡き寄せている意とみる。○かたよりに 「かたより」は、中央、あるいは標準の位置からはずれて一方に寄る状態。ひたすら。○よりなば 私に好意を寄せてくれたら。「寄る」は好意を寄せる。「なば」は事柄が完了した時を予想して仮定する。……てしまつたら。○こゝちよくならむ あまり例のない表現。近い表現として「心地よくおぼされん」（浜松中納言物語）がある。形容詞ク活用「心地好し」の連用形「こゝちよく」＋補助動詞ラ行四段「なり」の未然形「なら」＋推量の助動詞「む」の終止形。所載欄の万葉集の「言痛くありとも」（世間の噂がひどくても）が本来の形であつたと考えられるが、ここでは底本の本文通りに解した。

【所載】万葉集・一一四（旧一一四）秋田之 穂向乃所縁 異所縁 君尔因奈名 事痛有登母 アキノタノホムケノヨスルカタヨリニキミノヨリナナコチタカリトモ あきのたのほむきのよれるかたよりにきみによりななこちたくありとも

【参考】作者名「ほづみのわうじ」とあるが、万葉集では但馬皇女の作。「但馬皇女在高市皇子宮時 思穂積皇子御作歌一首」とあり、但馬皇女が高市皇子の宮に在った時に穂積皇子を思つて作つた歌とされる。「秋の田の穂向きの寄れる片寄りに我は物思ふつれなきものを」（万葉集・二二五一（旧二二四七））は、所載欄の万葉歌と上三句が共通する類歌。

ふゆ

一一二二 あきはてゝ人もてふれぬひつちほのわがこゝろもておいゝづるなり

【異同】ふゆ―冬の田（大）

【現代語訳】秋も終わり、誰も手を触れないひつち穂が自然に生えてくるように、飽き果てた思ひは、自分の

心から生じたものののだ。

【語句】◎ふゆ 底本の永青文庫本では「ふゆ」とあるが、「春の田」「夏の田」（永青文庫本では「野」）「秋の田」の続きなので、ここは本来大久保本の本文のように「冬の田」とあるべきところ。一一三番歌以下の「野」題でも、「春の野」「夏」「秋」「冬」の順となっている。○あきはてゝ 秋が終わる「秋果てて」に、相手のことに厭きる意の「飽き果てて」を掛けた。○ひつちほ ひつじ（穠・稻孫）の穂。「ひつじ」は刈り取った後の株から再び出た稲。誰も刈り取らない。「穠 唐韻に穠は音を呂と云ふ、後漢書に、穠は於路賀於比と読む、俗に比豆知と云ふ、自生の稲也。」（倭名類聚抄・元和古活字本）とあり、室町時代末期まで清音の「ひつち」であったという。類歌に「枯れる田におふるひつちの穂にいでぬは世を今更に秋はてぬとか」（古今集・三〇八）がある。○わがころもて 自分自身の意志で。自分の心から求めて。○おいゝづる 生ひ出づる。生え出る。

【所載】ナシ

一一二二 ころもておふる山田のひつちほはきまもらねどかる人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】自分から生えてきて実もならない、山田のひつち穂のような私は、あなたが守ってくださいられないけれども刈り取って下さる方などおりませんわ。

【語句】○ころもて 一一二二番歌参照。○ひつちほ 一一二二番歌参照。○まもらねど 守らなくても。「まもる」は、害をなすものの侵入を防ぎ守護する。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。「ど」は、逆接恒常条件。現にその事実があるわけではないが、その事実が現われた場合でも、必ずそれに反する結果になることを示す。たとえ……ても。

【所載】後撰集・秋上・二六九

【参考】所載欄の後撰集では、「二人の男に物いひける女の、一人につきにければ、今一人がつかはしける」という詞書のある歌「あけ暮らしまもるたのみをからせつつ袂そほづの身とぞなりぬる」（後撰集・二六八）に対する返歌で、男の歌の「たのみ（田の実）」に対し、自らを「ひつちほ」として、そんな自分を守ってくれる男などいないという言い逃れをしている。

かりほ

一一二四 秋たかるかりほをみつゝこきくればころもでさむしつゆおきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋田を刈るための仮廬を見ながら稲扱きをしてくると、袖が寒々とする。露が置いているのだ。

【語句】◎かりほ 仮廬。「かりいほ」の略。万葉集時代は旅宿のための仮小屋も指したが、中古以降は収穫期の秋の田を監視し、刈り取るために一時的に設けた仮小屋をいう場合が多い。○こきくれば 扱きくれば。「扱き」は稲などをしごき落とすこと。「そのわたりの家の娘などひきもて来て、五、六人して扱かせ……」（枕草子・九五段）という例がある。所載欄の万葉集では「吾居れば」。○ころもで 衣手。袖。袂。

【所載】新古今集・秋下・四五四／万葉集・二一七八（旧二二七四）秋田苅 借廬乎作 吾居者 衣手寒 露置 尔家留 アキタカルカリイホヲツクリワレヲレバコロモデサムシツユオキニケル あきたかるかりいほをつくりわがをればころもでさむくつゆぞおきにける／人麿集Ⅰ・一二三、二四一／人麿集Ⅲ・一七六／六百番陳状・七三

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集歌は、「秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ」（後撰集・三〇二、百人一首・一）の原歌と見られる。一一二九番歌参照。

一一二五 み山田のをくてのいねをほしわびてまもるかりほにいくよへぬらん  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】深い山にある田の晩稲の稲を干しかねて、わびしい時間を見張りの仮廬で幾夜過ごしたことだろうか。

【語句】○み山田 深山田、深い山を切り開いて作った田。○をくて 晩稲。遅く成熟する稲。○ほしわびて 干しかねて。「わび」は補助動詞「わぶ」の連用形。……しかなる、……することが困難であるの意。

【所載】拾遺集・雑秋・一一二五／新撰朗詠集・五三二／万代集・一〇六八／夫木抄・五〇〇六／躬恒集Ⅰ・九三／躬恒集Ⅱ・二二三／躬恒集Ⅲ・一三九／躬恒集Ⅳ・一五四／躬恒集Ⅴ・二八

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野〕

一一二六 かりほにてひさにへにけりあきかぜにわさだかりがねはやもなかなん  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】仮小屋で久しく日を過ごしてしまった。早稲田の稲を刈り取る時分を知らせる雁が、はやく秋風につて来て鳴いてほしいものだなあ。

【語句】○かりほ 仮廬。仮小屋。番小屋。一一二四番歌参照。○ひさに 久しく。所載欄の文献では「日さへ」。

○あきかぜに 秋風につて。雁は秋風が吹くと飛来してくると考えられた。八雲御抄に「八月柳のすゑに風吹く時、常世の国より来て、二月に帰るといへり」とある。「秋風にさそはれわたる雁がねは雲あはるかに今日ぞ聞こゆる」(後撰集・三五五)。○わさだかりがね 「わさ田刈り」と雁の意の「かりがね」を掛ける。○はやもなかなん はやく鳴いて欲しい。雁が渡来しその鳴き声を聞くころが、稲刈りの時分。「綱はへて守(も)りわたりつるわが宿のわさだかりがね今ぞ鳴くなる」(貫之集・五二二)。

【所載】万代集・八九九／貫之集I・一五三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では屏風歌。

一一二七 秋はぎをかりほにつくりいほりしてあるらんきみとみるよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の萩を仮小屋に葺いて廬を作りその中に住んでいる、そういうあなたとして逢えるような手だてがほしいものです。難なく逢えるように。

【語句】○秋はぎをかりほにつくり 秋萩を「かりほ」に作りなして。「かりほ(仮廬)」はかりそめに作った小屋。仮廬を作る際に萩の枝を用いた例歌に、「秋津野(あきつの)の尾花刈りそへ秋萩の花を葺かさね君が仮廬(かりいほ)に」(万葉集・一二九六(旧二二九二))がある。○あるらんきみとみるよしもがな そのようなあなたとして見るすがほしい。「……きみと」の格助詞「と」は、……というふうに、……として、の意。仮廬の中に君がいるならば、たやすく逢えるから、と言ったもの。「よし」は、手だて・手段の意。「もがな」は、願望を表す助詞。「秋の田のかりほに作りいほりしてひまなく君をみるよしもがな」(人丸集・一四五)。

【所載】万葉集・二二五二（旧二二四八） 秋田叫 借廬作 五百入為而 有藍 君叫將見依毛欲得 アキノタヲカリイホツクリイホリシテアルラムキミヲミムヨシモガモ あきたかるかりいほをつくりいほりしてあるらむきみをみむよしもがも／人麿集Ⅰ・一四八／人麿集Ⅱ・四一四

【参考】当該歌と次の一一二八番歌は、万葉集の連番歌。

一一二八 たづがねのきこゆるなへにいほりしてたびにありきといもにつげなん

【異同】ナシ

【現代語訳】鶴のものの悲しい声を聞きながら、私が仮の庵をこしらえて旅の途にあつたと、鶴よ、私のことをあの愛しい人に告げてほしい。

【語句】○たづがね 鶴が音。鶴の鳴き声。旅路に鶴の鳴き声は悲しく聞こえたらしい。「……鶴が音の 悲しく泣けば はろばろに 家を思ひ出（で）……」（万葉集・四四二二（旧四三九八））。○なへに ……とともに、……と同時に、の意を表す助詞。所載欄の文献に「たぬに」。○いもにつげなん 恋人に告げてほしい。「なん」は願望の意の終助詞。鶴が人の上を告げるから鶴に聞いてほしいと詠む例に、軽太子が伊予に流された時の歌、「天飛ぶ鳥も使ひそ鶴がねの聞こえむときは我が名問はさね（空を飛ぶ鳥は私の使いなのだから、鶴の声が聞こえるときは私のことを尋ねてくれ）」（古事記・八五）がある。

【所載】玉葉集・旅・一一二五／新後拾遺集・羈旅・八九六／万葉集・二二五三（旧二二四九） 鶴鳴之 所聞田井尔 五百入為而 吾客有跡 於妹告社 タヅガネノキコユルタキニイホリシテワレタビナリトイモツゲコソ たづがねのきこゆるたぬにいほりしてわたれたびなりといもにつげこそ

【参考】当該歌と一一二七番歌は万葉集の連番歌。

### 天地天皇御

一一二九 あきのたのかりほすいほのとまをせみわがこゝろもではつゆにぬれつゝ

【異同】かりほすいほの―かりほはいほの（桂） とまをせみ―とまをあらみ（大）

【現代語訳】稲を刈り干す秋の田の番小屋に暮いてある苦の目は粗いので、私の袖は露に濡れていることです。

【語句】○天地天皇御 「天智天皇御」の宛字。「御」は御歌の意。○かりほすいほの 刈り干すための仮小屋

の。○とまをせみ 「とま」(苦)は、菅や茅などをむしろのように編んだもので、仮小屋の屋根や周囲を覆う。傍記「あらみ」ならば、苦で編んだ目は粗いのでとわかりやすい。現代語訳は「あらみ」に拠った。「秋の田の庵にふけるとまをあらみもりくる露のいやはねらるる」(和泉式部集・四四)。

【所載】後撰集・秋中・三〇二／新時代不同歌合・七／秀歌大体・五四／百人秀歌・一／百人一首・一／定家十体・一二／和歌童蒙抄・二〇九／万葉集時代難事・二三／古来風体抄・三十三／近代秀歌・四二／詠歌大概・三四／八雲御抄・六九／心敬私言・九

【参考】百人一首の巻頭歌。作者名天智天皇は所載欄の文献に一致する。一一二四番歌参照。

### いなおほせどり

たぐみね

一一三〇 山田もるあきのかりほにをくつゆはいなおほせどりのなみだなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】山田の番をする秋の仮小屋に露が降りているが、それはいなおほせ鳥の涙なのであったよ。

【語句】◎いなおほせどり 稲負鳥。秋、稲が実ったところにやって来て、稲刈りを促すように鳴くと詠まれる。収税役人の意の「稲課(おほ)せ取り」を掛ける例もある。古今伝授の秘説「三鳥」の一つで、中世の歌論書に鳥の名はいろいろ挙がるが、未詳。○山田もる 山田の番をする。「もる」は、守る、番をする、の意。

【所載】古今集・秋下・三〇六／新撰万葉集・一四九／新撰朗詠集・五三三／忠岑集Ⅰ・三五／忠岑集Ⅱ・一六／忠岑集Ⅲ・二四／忠岑集Ⅳ・二八／是貞親王家歌合・一／和歌一字抄・一〇九四／綺語抄・五七五／和歌童蒙抄・九五八／袋草紙・七五五／袖中抄・一〇五三／桐火桶・一一三

【参考】作者名「たぐみね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

人まろ

一一三一 わがやどにいなおほせどりのなくなへにけさふくかぜにかりはきにけり

【異同】いなおほせどりの―いなおほ鳥の(大)

【現代語訳】わたしの家にいなおせ鳥が来鳴くにつれて、けさ吹く風と共に雁がやってきたことだ。  
【語句】○いなおせどり 前歌（二一三〇）参照。○なくなへに 鳴くのにつれて。「なへに」は、活用語の連体形に付いて、一つの動作・状態と同時に、別の動作・状態が生起することを表す。……と同時に。……につれて。……の折しも。上三句は「来にけり」にかかる。○かぜに 風によつて。風と共に。風に乗つて。  
【所載】古今集・秋上・二〇八／猿丸集Ⅰ・四〇／猿丸集Ⅱ・四二／俊頼髓脳・三〇五／綺語抄・五七六／奥儀抄・四六五／袖中抄・一〇五二／和歌色葉・二四三  
【参考】作者名「人まろ」とあるが、この歌を人麿の作とする典拠は見出せない。なお、古今六帖・一一二〇番歌は、下句がこの歌と同じである。

### そぼづ

一一三二 そぼづたつ山田のいけはいまもなをこゝろふかしなうきせはあれど

【異同】ナシ

【現代語訳】かかしの立っている山田にある池は、いまでもなお思うこころが深いのですよ。いろいろつらいことはあるけれども。

【語句】◎そぼづ 「そぼど」の転。かかしのこと。古事記神代記に「少名毘古那の神を顕（あらはし）し白（まう）せしいはゆる久延毘古は、今に山田のそぼど（曾富騰）といふぞ。」とある。○そぼづたつ かかしの立っている。「山田」を修飾する句。○山田のいけ 山あいの田にある池。この歌の作者の暗喩。○いまもなをこゝろふかしな いまでもやはりあなたを思う気持ちは深いのだよ。「なを」は「なほ」。「ふかしな」の「な」は詠嘆を表す終助詞。池の深さが「深い」ことに、相手を思う気持が「深い」ことを重ねて言っている。○うきせはあれど いろいろつらいことはあるけれども。「泥（うき）」に「憂き」を掛ける。「せ」は「瀬」、状況・局面などの意。「ふかし」「うき」「せ」は「いけ」の縁語。

【所載】夫木抄・五〇四五

【参考】なにかの事情で隔てられている恋であろう。

一一三三 あきのたにたえぬばかりぞ君こふる袖のそぼづにならぬひるなし

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたに飽きられて、絶え入るばかりの苦しい思いです。あなたを恋い思う袖がびしょぬれにならぬ日はありません。

【語句】○あきのたに 秋の田に。「秋」に「飽き」を掛ける。○たえぬばかりぞ 命も絶えんばかりの苦しい思いをしている。「ぞ」で愁訴を強めた。○そほづ 「かかし」の意の「そほづ」に「濡（そほ）つ」を掛ける。

【所載】ナシ

一一三四 あしひきの山田にたてるそほづこそおのがたみを人にかくなれ

【異同】おのかたみを―おのかたのみを（御・桂・大）

【現代語訳】山あいの田に立っているあのかかしこそ、自分の頼みを人にかけるものだそうだ。（わたしも、あなたのところに期待をかけている。）

【語句】○おのがたみを このままでは意が通じない。諸本の「おのがたのみを」に拠って解釈する。自分の期待を。「田の実」に「頼み」を掛ける。「田の実」は田に実った稲の実。「頼み」はあてにすること、願ひ、期待。「明け暮らしまもるたのみを刈らせつたもとそほづの身とぞなりぬる」（後撰集・二六八）。○かくなれ かけるものなのだそうだ。「かく」は下二段動詞「掛く」の終止形、「なれ」は伝聞の助動詞「なり」の已然形。

【所載】ナシ

春のゝ

一二三五 くさも木もみどりにみゆるはるのゝに雨ふりそめば色やまさらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木もみな緑に見える春の野に、雨が降り始めて野を染めたならば、草木の色はいっそうまざることであろうか。

【語句】◎春のゝ 「野」は自然のままの状態にある広い平地のこと。「春のゝ」は四季のうちの春の季節の野。古今六帖は「野」の項目の下に、「春の野」「夏の野」「秋の野」「冬の野」「雑の野」「かり」「とし」「わし」「おはたか」「こたか」「きじ」「はと」「うづら」「大たかがり」「こたかがり」「みゆき」の十六題を立てており、「野」



を四季の季感によってとらえると同時に、狩の場としてもとらえていることが窺われる。○ふりそめば ふりはじめたならば。雨の「降り初めば」に草木の色の「振り染めば」を掛ける。「春雨のふりそめしより青柳の糸のはなだぞ色まさりゆく」(躬恒集Ⅰ・一四五)。

【所載】ナシ

(以上五首担当 山下)

一一三六 春ふかくなりぬるときののべみればくさのみどりもいろまさりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春が深まってきた時の野辺を見ると、草の緑も一層色が濃くなっていることだなあ。

【語句】○春ふかくなりぬるとき 春がきて、日が経ちその季節が深まってきた時。「春深き色にもあるかな住の江のそこも緑に見ゆるはま松」(後撰集・一一一)。○いろまさりけり 緑の色が一層濃くなったなあ。「けり」は初めて気がついて感動する意。

【所載】貫之集Ⅰ・一一六

【参考】当該歌は貫之集Ⅰに「延喜八年承香殿御屏風歌 人の春の野にあそぶところ」と詞書があり、作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一三七 こまなべてめもはるのゝにまじりなむわかなつみつる人もありやと

【異同】ナシ

【現代語訳】馬を連ねて、目の届く限り広い春の野に分け入ってしまおう。そこに若菜を摘んでいる人もいるかと。

【語句】○こまなべて 馬を一列に並べて。「なべ」は「なめ」の子音交替形。「駒なめていざ見にゆかんふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ」(古今集・一一一)。○めもはるのゝ 目の届く限り遥かな春の野。「めもはる」に「目のみえる限り遥かに」と「芽も張る」春の野の意を掛ける。○わかなつみつる人 正月子の日に長寿を祈って若菜を摘み、それを羹(あつもの)にして食すため摘んでいる人。

【所載】新撰万葉集・一三／寛平御時后宮歌合・二一

【参考】類歌に「おしなべていざ春の野にまじりなむ若菜つみくる人もあふやと」（続千載集・三四、万代集・六〇）があげられる。

一二三八 なか／＼になにあひみてむかすがのゝやくるほのをゝよそにみましを

【異同】やくるほのをゝやくるほのみゝ（桂）

【現代語訳】なまじつか、どうしてあの人と逢ってしまったのだろう。もしこんな仲になっていなかったら春日野の野焼きの焰を、自分と関係のないものとして見ただろうものを。

【語句】○なか／＼に 中途半端に。なまじつか。○なにあひみけむ なぜあの人と親しい仲になったのだろう。○かすがの 春日野。大和国の歌枕。奈良市街の丘陵地。「春日の原」「春日の山」とも言う。○やくるほのを やくるほのほ。春日野で早春新芽を萌えやすくするために行う野焼きの焰。「春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり」（古今集・一七）を念頭に詠んでいる。○よそにみましを 自分と関係のないものとして見ただろうものを。「まし」は反実仮想の助動詞。「を」は強めの助詞。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「なか／＼になにに知りけむ吾山にもゆる煙のよそにみましを」（万葉集・三〇四七〈旧三〇三三〉）がある。

一二三九 春のゝにわかなつまんとしめしのにちりかふはなにみちもまがひぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の野に若菜を摘もうとして標をつけておいた野に、時が経って今は花が一面に散り乱れ、道も分からなくなってしまった。

【語句】○わかな 初春に摘む菜。また正月子の日に摘んで、食したり人に贈る菜。「あすよりは若菜つまむとしめしのに昨日も今日も雪はふりつつ」（万葉集・一四三一〈旧一四二七〉）。○しめしの 占有の印をつけておいた野。○ちりかふはな 入り乱れて散る花。○まがひぬ 交じり合って見分けがつかなくなってしまった。

【所載】古今集・春下・一一六／寛平御時后宮歌合・八

一一四〇 わすらるゝときしなければかすがのゝとふひありやとまつぞ<sup>わび</sup>かなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人を忘れられるときなど全くないので、訪ねてくる日があるかとあてのない日を空しく待つのは、どうしようもなくつらいことです。

【語句】○わすらるゝときしなければ 恋人を忘れられるときが全くないので。「るゝ」は可能的助動詞。「し」は強く指し示す意の助詞。○かすがの 一一三八番歌参照。○とふひ 恋人が訪れる日。「訪ふ日」に「飛ぶ火」をかける。「飛ぶ火」は大和国の歌枕。奈良市内にあり、昔春日野に外敵の侵入を知らせるのろしの「烽火」（とぶひ）が設けられたことから、この野を「飛ぶ火野」と呼ぶようになった。「飛ぶ火」に「訪ふ日」を掛けた例として「春日野の雪の下草人しれずとふひありやとわれぞ待ちつる」（斎宮女御集Ⅱ・五六）がある。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 林〕

なつ

ひとまろ

一一四一 なつのゆくをじかのつのゝつかのまもみねばこひしき君にもあるかな

【異同】なつ―夏の野（大）

【現代語訳】古今六帖・第二帖「しか」九三二番歌既出。

【語句】◎なつ 夏。第二帖巻頭の目次によると「野」の項目のうちの「夏の野」。大久保本にも「夏の野」とある。「夏野」もしくは「夏の野」は、夏草が繁茂する様が詠まれることが多い。

【所載】古今六帖・第二帖「しか」九三二番既出

一一四二 くさしげみしたしげりゆく夏のゝをわくとわくればそでぞひちぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】草が生い茂っているので、下蔭が盛んに茂っていく夏の野を分けて通って行くと、すっかり袖が濡れてしまった。

【語句】○くさしげみ 草が茂っている。「しげ」は形容詞「しげし」の語幹。「み」は、原因・理由を表す接尾語。○したしげりゆく 下が茂っていく。木の下蔭などの下草が盛んに繁茂していく意。「大荒木の森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」(拾遺集・一三六)。「しげりゆく」の「ゆく」に、自分が行く意の「行く」を響かせるか。○わくとわくれば 分くと分くれば。かき分けかき分けて通ると。「夏草のしげきをわけし君なれど今は心にあきぞ来にける」(重之集・二五八)。同じ動詞を重ねた間に格助詞「と」を挿入するのは、強意の用法。○そでぞひちぬる 茂った草をかき分けて通ったため露で袖が濡れたことに、朝、女と別れて帰らなければならないため涙に泣き濡れた寓意を込める。「秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさりける」(古今集・六二二)。

【所載】ナシ

【参考】寛平御時后宮歌合に「草しげみ下葉枯れゆく夏の日もわくとしわけば袖やひちなん」(五三二)、新撰万葉集に「草繁 芝多放往 夏之夜裳 別手別者 袂者沾南 クサシゲミシタハナレユクナツノヨモワケテワカレハソデハヌレナム」(三〇九)という歌がある。

## 秋

一一四三 あきのゝにみだれてさけるはなの色のちぐさにものを思ころかな

【異同】秋―秋の野(大) あきのゝに―秋の野の(大)

【現代語訳】秋の野に咲き乱れている花の色は様々で、私も様々に思い乱れて物思いをするこの頃だよ。

【語句】◎秋 第二帖巻頭の目次によると「野」の項目のうちの「秋の野」。大久保本にも「秋の野」とある。古今六帖のこの項では、十一首中、十首が「秋の野」という語句を詠み込んだ歌で、他の一首も、秋風の吹く武蔵野を詠んでいる。秋の野に咲き乱れる種々の花・露・草葉の紅葉して枯れる様が詠まれ、時には、それらの秋の野の景が、人事と重ね合わせられている。○ちぐさに 千種に。様々に。上句からの続きでは花の色の種類が多いことを表し、あれこれと千々に思い乱れる意で下に続く。初句から三句目までは「ちぐさに」を導く序詞。「春来れば野辺のまにまにおひしげるちぐさにものを思ふ比かな」(古今六帖・三五四九)。

【所載】古今六帖・第六帖「秋(秋の草)」三五六五／古今集・恋二・五八三／貫之集I・五九二

【参考】作者名については一一四五番歌参照。所載欄の古今六帖・三五六五番歌では、初・二句が「秋の野のちぐさにさける」、四句が「みだれて物を」となっている。

## 一一四四 秋のゝうつろふみればつれなくてかれにし人をくさばとぞ思

【異同】秋のゝ―秋のゝの（桂・大）

【現代語訳】秋の野が色褪せていくのを見ると、薄情で私との仲を絶ってしまった人は草葉と同じだったのだと思うよ。

【語句】○秋のゝ 桂宮本・大久保本に「秋のゝの」とあるのによつて、解釈した。「秋」に「飽き」を掛ける。○うつろふ 変わっていく。秋の野の草葉の色が褪せて枯れてゆく意の「うつろふ」に人の心変わりの意の「うつろふ」を掛けた。○かれにし人をくさばとぞ思 私から離れてしまった人を草葉と同じだったと思う。「山吹の花取り持ちてつれもなくかれにし妹を偲ひつるかも」（万葉集・四二〇八（旧四一八四））。「かれ」は、「離（か）れ」に「草葉」の縁語「枯れ」を掛け、あの人は、草葉だったから「かれ」てしまったんだなあ、と見立てた。「霜さやぐ野辺の草葉にあらねどもなどか人めのかれまさるらむ」（延喜御集・三）。

【所載】貫之集I・五九〇

【参考】作者名については一一四五番歌参照。

## 一一四五 あきの野のくさもわけぬとわが袖のもの思なへにつゆけかるらん

已上 つらゆき

【異同】くさもわけぬと―くさもわけぬに（御・桂・大）

【現代語訳】秋の野の、露が置いた草をかき分けたわけでもないのに、どうして私の袖は物思うにつれて露に濡れたようになるのだろう。

【語句】○くさもわけぬと 他本には「くさもわけぬに」とあるのによつて解釈した。野の草を分けるということについては、一一四二番歌及びその語句欄の古今集六二二番歌参照。○なへに 一つの動作・事態と同時に、他の動作・事態が伴うことを表す。……とともに。……やいなや。……につれて。○つゆけかるらん なぜこのように露っぽいのだろう。なぜこのように涙がちなのだろうかの意を含む。涙で濡れているのを露に濡れ

たように見立てた。「らん」は原因推量を表す助動詞。

【所載】後撰集・秋中・三一六／貫之集Ⅰ・六〇一／貫之集Ⅱ・八七／貫之集Ⅲ補遺・三三五

【参考】「已上つらゆき」とある通り、一一四三番歌「一一四五番歌の作者は貫之であることが所載欄の文献によつて確かめられる。拾遺集に「秋の野の草葉も分けぬわが袖の露けくのみもなりまさるかな」（八三二・よみ人知らず）、一条摂政御集に「秋の野の草葉も分けぬわが袖のあやしやなどて露けかるらん」（一四三）という歌がある。

〔以上五首担当 長戸〕

一一四六 あきのゝにいまこそゆかめものゝふのおとこ女のはなにほふみに

ヲミナ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に今こそ行こう。宮仕えする男女の美しく着飾った姿を見に。

【語句】○もののふ 上代、朝廷に仕えた文官・武官の総称。「もののふの臣（おみ）の壮士（をとこ）」は大君の任（ま）けのまにまに聞くといふものぞ」（万葉集・三七二（旧三六九））。○おとこ女 をとこをみな。男女の別なく、着飾って出かける宮廷人たちをいう。○はなにほふ 咲き誇る花のように美しく照り映える。着飾った宮廷人のさまをたとえた。

【所載】万葉集・四三四一（旧四三一七） 秋野尔波 伊麻己曾由可米 母能乃布能 乎等古乎美奈能 波奈尔保 比见尔 アキノニハイマコソユカメモノフヲトコヲミナノハナニホヒミニ あきのにはいまこそゆかめものふのをとこをみなのはなにほふみに／袖中抄・三〇八、五四八

一一四七 あきのゝにしきのごともみゆるかな色なきつゆはをかじとぞ思

もとかた

【異同】あきのゝあきのゝの（桂）、秋の野の（大）

【現代語訳】秋の野が錦のようにも見えることだ。色の無い露は置かないだろうと思うよ。

【語句】○あきのゝ 本文は字足らず。桂宮本・大久保本の「秋の野の」に拠つて解す。○にしきのごと まるで錦のように。秋の野の色づいたさまを言った。「秋ののくさばを人もおりきしをにしきのごとも見えわたる

かな」（古今六帖・三七七五）。○色なきつゆはをかじとぞ思 「をかじ」は「おかじ」。色のない露は置かないだろうと思う。意の通りにくいところもあるが底本のまま解釈した。所載欄の後撰集では「色なき露は染めじと思ふに」とあり、その方がよくわかる。

【所載】後撰集・秋下・三六九

【参考】作者名「もとかた」とあるが、所載欄の後撰集では「よみ人知らず」とする。

一一四八 秋のゝにいかなるつゆのをけばかはちぐにくさばのいろかはるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野にいったいどんな露が置いたからというので、こんなにもさまざまに草葉の色が変わるのだろうか。

【語句】○いかなるつゆのをけばかは おけばかは。いったいどのような露が置いたからというのか。「かは」は疑問。○ちぐに 千々に。さまざまな色に紅葉したさまをいう。「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちちにそむらん」（古今集・一五七）。

【所載】後撰集・秋下・三七〇／和歌一字抄・一〇七三／袋草紙・七三一

一一四九 あきのゝにをくしらつゆはたまなれやつらぬきとむるくものいとすぢ  
あさやす

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に置く白露はまるで玉であるよ。つらぬいて留めかけている蜘蛛の糸筋よ。

【語句】○たまなれや 「や」は詠嘆の終助詞（日本古典文学大系『古今和歌集』解説参照）。三句切れ。「風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり」（古今集・六七一）。○つらぬきとむる 露を玉と見て、それを貫きとどめている。○くものいとすぢ 蜘蛛の糸を露の玉を貫く糸に見立てる。「くもの糸を片糸によりて白玉の緒にしたりとも我たえめやは」（古今六帖・三一九四）。

【所載】古今六帖・第六帖「くも」四〇二〇／古今集・秋上・二二五／新撰万葉集・三八二／新撰和歌・七六  
【参考】作者名「あさやす」は所載欄の古今集に一致する。

一一五〇 あきのゝにわけゆくからにうつりつゝわがころもでははなのかぞする  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に分け入るとすぐに、色や香りを染みこんで、私の袖は花の香りがすることだ。

【語句】○わけゆくからに 分け入るとすぐに。「からに」は接統助詞で二つの動作や状態が続いて生じる意を表わす。「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ」(古今集・二四九)。○うつりつゝ 香移りがして。「うつる」は花の色や香りが衣装に染みこむの意。「つゝ」は、そのことが反復または継続して行われるさまをいう。○わがころもでは 私の袖は。「ころもで」は袖の意。

【所載】新古今集・秋上・三三五／躬恒集Ⅰ・二一九／躬恒集Ⅱ・二三七／躬恒集Ⅳ・四七四／躬恒集Ⅴ・一〇四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

一二五一 ゆく／＼とみれ〇もあかぬあきのゝはゆきもやられずとまるともなし  
伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】歩みを進めるにつれて、どんなに見ても見飽きない秋の野は、行き過ぎてしまうこともできず、だからといって立ち止まるわけにもいかない。

【語句】○ゆく／＼と 行くに従って。次第に行くにつれて。「君がすむやどのこずゑのゆくゆくとかくるまでにかへりみしはや」(拾遺集・三五二)。ただし所載欄の続古今集では「さくはなを」、伊勢集では諸本すべて「行く」と来ととする。○ゆきもやられずとまるともなし 行き過ぎることもできず、また立ち止まることもできない。さまざまな花が美しく咲いている秋の野のすばらしさをいうのであろう。

【所載】続古今集・秋上・三三三／伊勢集Ⅰ・二四二／伊勢集Ⅱ・二四三／伊勢集Ⅲ・二四二  
【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。



一一五二 秋かぜのふきと吹ぬるむさしのはなべてくさ木の色かはりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が吹きつのるあの武蔵野は、すべて草木の色が変わってゆくことだ。

【語句】○ふきと吹ぬる 吹きに吹く。しきりに吹く。吹きつのる。○むさしの 武蔵国（今の東京都と埼玉県を中心とした地方）に広がる野原。○なべて すべて。全体にわたって。

【所載】古今集・恋五・八二一

【参考】古今集の当該歌は恋五に属し、配列の上からも「秋かぜ」には「飽きかぜ」が掛けられていて、相手の心変わりを嘆いている心境を詠んだ歌と解するのが普通だが、本集の場合は一般的な移ろいの哀感を詠んだものと解すべきか。なお「むさしのはなべて」という表現から、「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今集・八六七）の影響を考える頭註密勘や古今余材抄などの解もある。

一一五三 よのなかのつねとはみれどあきのゝのうつろひかはるときぞわびぬる  
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】これが世の中の常の姿とは見るけれど、やはり、秋の野の移ろい変わる時はわびしい気持ちになることだ。

【語句】○あきのゝのうつろひかはるとき

秋の野の草木が枯れはじめ、移ろい変わる時。

【所載】新拾遺集・釈教・一四九〇

【参考】作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

## 冬

一二五四 しもがれの人とわが身をおもひせばもえても春をまたさしものを  
こまちがあね ま

【異同】冬―冬の野（大）

【現代語訳】古今六帖・第一帖「しも」六六六番既出。

【語句】◎冬 巻頭目次には「冬の」とある。第二帖の「野」という大項目のもとに属している項目なので、正確には大久保本の「冬の野」に従うべきであろう。一面冬枯れの状態となった、荒涼たる野をいう。○人とわが身を 既出六六六番歌では「のべとわが身を」とある。

【所載】古今六帖・第一帖「しも」六六六番既出

【参考】作者名「こまちがあね」は不審。伊勢集に見え、古今集でも「伊勢」とする。

一一五五 かやのゝべいともかくなるみねのうへの松かへともにひさしきものを

【異同】松かへともに―松かえともに（大）

【現代語訳】かやの野辺は本当にまあこんな状態になってしまったことだ。嶺の上の青々とした松や柏はともにいつまでも変わらないもののなに。

【語句】○かやのゝべ 「かや」は、チガヤ、ススキなどイネ科の植物で、屋根を葺いたりする時に用いられる草の総称。茅。萱。○いともかくなる 本当にこのような。まったくこうした。冬の野の見渡す限り茅の枯れた状態をいうか。ただし「かくなる」と連体形になっているのは不審。古今六帖・三七八九にもこの歌は重出しており、そこでは「いともかるゝか」とする。○松かへともに 「かへ」は「柏」で、ヒノキ科の総称。「長歌」……しらたまの みがほしみおもわ ただむかひ みむときまでは まつかへ（松栢）の さかえいまさね たふときあがきみ」（万葉集・四一九三（旧四一六九））。

【所載】古今六帖・第六帖「かや」三七八九

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

さぶのゝ

一一五六 冬ごもりはるのおほのをやく人はやきやかねばや人のむねやく

タラネハヤ

【異同】やきやかねはや―やきたらねはや（大）

【現代語訳】春の原野を焼く人は、焼ききれないので、人の胸を（恋心で）焦がすのだろうか。

【語句】◎さぶのゝ 雑の野。四季の野に続き、四季の範疇外の野の歌を集めた。○冬ごもり 「春」の枕詞。

○おほの 山すそなどの大きな野。広野。「小野」の対。○やきやかねばや 「ばや」は接続助詞「ば」＋係助詞「や」で、已然形に接続し確定条件の疑いを表す。傍記の「ヤキタラネバヤ」は「焼き足らないので」の意。春野を焼くのは焼畑の作業。所載欄の万葉集では「やきたらぬかも」「やきたらねかも」。

【所載】万葉集・一三四〇（旧一三三六）冬隠 春乃大野乎 焼人者 焼不足香文 吾情熾 フユコモリハルノオホノヲヤクヒトハヤキタラヌカモワガココロヤク ふゆこもりはるのおほのをやくひとはやきたらねかもわがころやく

一一五七 むさしのゝくさのゆかりときくからにおなじのべともむつまじきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】武蔵野の草、紫草と縁があると聞くだけで、（紫草の生えている）同じ野辺とも懐かしく思われますよ。

【語句】○むさしのゝくさのゆかり 古今集・八六七番「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」を踏まえたもの。武蔵野は、武蔵国一帯の平野で「草」と共に多く詠まれる。○きくからに 聞くだけで。○むつまじきかな 「むつまじ」は「心がひかれる。なつかしい。」意。「をみなへしにほへる秋のむさしのは常よりも猶むつまじきかな」（後撰集・三三七）。

【所載】ナシ

一二五八 あふことをいなびのにすむしかこそはかりの人にはあはじてふらめ

【異同】あふことを―あふことは（大） いなひのにすむ―いなゐのにすむ（桂）

【現代語訳】逢うことがいやだという名の印南野に住む鹿こそは、狩人には会わないといひますでしょう。私もかりそめの愛情しか持たない人には逢いませんわ。

【語句】○いなびの 播磨国印南郡の野。今の明石市から加古川市（加古川以東）にかけての一带。「否び」を掛ける。「かり人のたづぬるしかはいなびのにあはでのみこそあらまほしけれ」（女のほかは侍りけるを、そこにと教ふる人も侍らざりければ、心づからとぶらひて侍りける返事につかはしける・後撰集・一〇〇九）。桂宮本は「いなゐ」の「ゐ」に「ひ」と傍記がある。○かりの人 「狩人」と「仮の人」（二時的、かりそめの愛情

しか持つていない人」を掛ける。○あはじてふらめ 会わないというでしょう。「てふ」は「といふ」の約。「らめ」は助動詞「らむ」の已然形で推量を表す。

【所載】 夫木抄・四六九六

【参考】 作者を男性と考えて、「あなたは鹿ではないのだから私に逢ってほしい」と解することも可能か。

一二五九 わするやとのにいでゝみればはなごにふくめるものはあはれなりけり  
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】 忘れられるだろうかと、野に出てみれば、花の一つ一つが中に含めるようにもっているのは（あの人への）愛しさでしたよ。

【語句】 ○わするやと 苦しい恋を忘れることができるかと。○ふくめるものは 「ふくめる」（下二段活用）は、「中に含みもつようにする」意。「梅の花さきたるなかにふくめるは恋やこもれるゆきをまつかも」（家持集・八）。○あはれなりけり いとしいと思われる。「あはれ」はここでは、愛情、好意の意。

【所載】 ナシ

【参考】 作者名「そせい」とあるが根拠不明。

一二六〇 はつかにもひとをみまくのすゝきのゝほにいでゝいまぞこひしかりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 ちらりとでもあなたを見るだろうという、すすき野のすすきが穂にでるように、私のあの人への気持ちも表面に出て、今、恋しいのですよ。

【語句】 ○はつか 瞬間的にちらりと見えたり聞こえたりする様子。○みまく 「見む」のク語法で、見ることに意。○すゝきの 所載欄の夫木抄は伊勢国とするが未詳。○ほにいでゝ 穂に出でて。それとわかるように。はつきりと表に現われ出て。「穂に出づ」は、すすきの穂が出るの意に、表面に現れる、人目につくようになる、の意を掛ける。「秋の野の草のたもとか花すすきはにいでてまねく袖と見ゆらむ」（古今集・二四三）。上三句は「穂に出づ」を導く序詞。

【所載】 夫木抄・九八三八

〔以上五首担当 三浦〕

一一六一 いなびのゝあさちをしなみさねしよのけながくしあればいもをこそ思へ

【異同】 いなひのゝーいなみ野の(大)

【現代語訳】 印南野の浅茅を押し均(なら)して寝る夜が幾日も続くので、妻のことばかりが思われることだ。

【語句】 ○いなびの 稲日野(いなびの)。印南野(いなみの)ともいう。兵庫県南部の加古川・明石川二流域にまたがる野。溜め池が多いことで有名。一一五八番歌参照。○あさち 浅茅。丈の低いちがや。○をしなみ

「押し靡む」の連用形。「押し並ぶ」と同義で、上から押さえつけて平らにして、押し均(なら)して。「あさちをしなみさねしよ」とは、旅中での不如意な旅寝の表現。○けながく 日数が多く経ち。日数が重なり。

【所載】 万葉集・九四五(旧九四〇) 不欲見野乃 浅茅押靡 左宿夜之 氣長有者 家之小篠生 イナミノアサチオシナミサヌルヨノケナガクアレバイヘシノフル いなみののあさちおしなべさぬるよのけながくし

あればいへししのはゆ／夫木抄・一三三五〇／袖中抄・五八五／六百番陳状・一五九／古来風体抄・六九

【参考】 作者名はないが、万葉集では山部赤人の作。神亀三(七二六)年十月七日から二十九日まで、聖武天皇が播磨国印南野へ行幸した時に作った歌。

かり

やかもち

一一六二 ますらをのよびたてしかばさをしかのむなわけ行ぞあきのはぎはら

【異同】 むなわけ行そーむな分て行そ(大)

【現代語訳】 ますらおが大声で追い立てたので、雄鹿が胸で押し分けて行ってしまうことだ、秋の萩原を。

【語句】 ◎かり 山野で鳥や獣を追いついて捕らえること。鹿狩り、鷹狩りをいう場合が多い。和歌では主に鷹狩りが詠まれるが、当該歌は鹿狩りである。○ますらを 強く勇ましい男。上代では朝廷に使える大宮人を指す場合が多い。○よびたてしかば 「呼び立て」は大声で呼ぶ意。狩においては、勢子が茂みに潜む鳥獣を追いつくために大声を発する。○むなわけ行ぞ むなわけ行くぞ。胸で押し分けて行くぞ。「胸分く」は、鹿な

どが胸で草むらや茂みなどを押し分けてゆくさまをいう。「さ雄鹿の胸別けにかも秋萩の散り過ぎにける盛りかも去ぬる」(万葉集・一六〇三(旧一五九九))。所載欄の万葉集歌は「むなわけゆかむ」と、推量の「む」が用いられる想像の景であるが、当該歌は現実の景として詠む。

【所載】万葉集・四三四四(旧四三二〇) 麻須良男乃 欲妣多天思加婆 左乎之加能 牟奈和氣由加牟 安伎野波疑波良 マスラヲノヨビタテシカバサヲシカノムナワケユカムアキノハギハラ ますらをのよびたてしかばさをしかのむなわけゆかむあきのはぎはら

【参考】作者名「やかもち」は、所載欄の文献に一致する。

一一六三 いなびのにかりするしたひくさふかみむつきはみえでゆみのはずみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】印南野で狩られる鹿は、草が深く茂っているので、六か月は見ることができず、弓の筈だけが見える。

【語句】○いなびの 一一六一番歌参照。○したひ 未詳。所載欄の夫木抄の「かりするしかは」をとり「鹿は」として解す。○くさふかみ 草が深く茂っているの。○むつき 六か月。「数ふれば今いつつきになりにけり」「むつきにならばとふ人もあらじ」(実方集・六二・連歌)。○ゆみのはず 弓の筈。「筈」は弓の両端の弦をかけるところ。「弓」は「むつき」の「月」の縁語。

【所載】夫木抄・一六九八四

一一六四 山のべにさをちのねらひいをろしみおしかなくなりつまのめをほり

【異同】ナシ

【現代語訳】山辺では猟師の狙いが恐ろしいけれど、雄鹿が鳴いているよ、妻に逢いたいばかりに。

【語句】○山のべ 山辺。○さをち 未詳。傍記の「さつを」(猟師、狩人)として解す。所載欄の万葉集にも「さつを」とある。○いをろしみ 未詳。所載欄の万葉集の西本願寺本の訓「おそろれど」に拠って解す。○おしか をじか。雄鹿。○めをほり 「……が(の)目を欲る」は対象に逢うことを欲する意。「朝露の消やすき我が身他国(ひとくに)に過ぎかてぬかも親の目を欲り」(万葉集・八八九(旧八八五))。

【所載】万葉集・二一五三（旧二一四九）山辺庭 薩雄乃祢良比 恐跡 小壮鹿鳴成 妻之眼乎欲焉 ヤマヘニハサツヲノネラヒオソルレドヲシカナクナリツマノメヲホリ やまへにはさつをのねらひかしこけどをしかなくなりつまがめをほり／夫木抄・四六四六／綺語抄・六四四／和歌童蒙抄・四五三／袖中抄・四六四

一一六五 あづさゆみすゑのとはけにとがりする君ゆづるのたえんと思へばや

【異同】君ゆづるの―君かゆつりの（大）

【現代語訳】末の腹野で鷹狩りをするあなたの弓弦が途中で断ち切れる、そんなふうに関係が絶えると思えましょうか。

【語句】○あづさゆみ 梓弓。「末」にかかる枕詞。○すゑのとはけ 未詳。所載欄の万葉集「すゑのはらの（末の腹野）に」に拠って解す。「腹野」は所在未詳、「原野」の当て字とする説もある。○とがり 鳥狩。鷹狩のこと。○君ゆづるの 「弓弦（ゆづる）」は弓に張る糸。初句から第四句までが、第五句の「たえ（絶え）」を導く序詞。所載欄の万葉集には「きみがゆづるの」とあり、「が」が入ったものが本来の形と考えられるので、「が」を入れて解した。○思へばや 「思うからだろうか」の意となるが、歌意が通らない。「別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて恋しき」（古今集・三七二）と文中に置かれた場合は、下にかかつてゆく形で解釈が可能だが、当該歌の如く文末に置かれた場合、上の文脈とうまく繋がらないため、所載欄の万葉集に拠り、「おもへや」として解した。「や」は反語。

【所載】新勅撰集・恋四・八七〇／万葉集・二六四六（旧二六三八）梓弓 末之腹野尔 鷹田為 君之弓食之 将絶跡念甕屋 アツサユミスエノハラノニトガリスルキミガユヅルノタエムトオモヘヤ あづさゆみすゑのはらのにとがりするきみがゆづるのたえむとおもへや／夫木抄・九八三三／和歌童蒙抄・四五四

〔以上五首担当 中野〕

一一六六 たつかゆみてにとりもちてあさかりにたゝしらぬたなくこの木もと  
左大弁きのいひまろ

【異同】左大弁―底本・御所本・桂宮本・大久保本イズレモ題ノ位置ニアル。参考欄参照。 たゝしらぬたな

くーたゝしからぬたなく(御・大) この木もとーこの木のもと(大)

【現代語訳】手束弓を手に取り持つて、朝狩りにあなたはお立ちになった、棚倉の野へと。「下句は所載欄の万葉集に拠って解した。」

【語句】○左大弁 題の位置に書かれているが、作者名「きのいひまろ」に冠された官職名であろう。参考欄参照。○たつかゆみ 手で握る部分を太くした弓か。袖中抄は雄山(おのやま)の関守が持つ弓とする紀伊国風土記の説を載せる。○たゝしらぬたなくこの木もと 意味不明。所載欄の万葉集歌「きみはたたしぬたなくらのに」に拠って解す。あなたは出立なさった、棚倉の野に。棚倉の野は、山城国の歌枕。綴喜(つづき)郡田辺町の棚倉の地とする説もあるが、ここでは万葉集歌の左注に「久迩の京都の時の歌」とあることから、相良郡山城町の平尾・綺田(かばた) 辺りかと思われる。

【所載】万葉集・四二八一(旧四二五七) 手束弓 手取持而 朝獺尔 君者立去奴 多奈久良能野尔 タツカユミテニトリモチテアサカリニキミハタチヌタナクラノノニ たつかゆみてにとりもちてあさがりにきみはたたしぬたなくらのに／夫木抄・一六九六〇／俊頼髓脳・二二五／綺語抄・五三三／和歌童蒙抄・四二二【参考】「左大弁 きのいひまろ」は作者名であり、所載欄の万葉集四二八一(旧四二五七) 番歌の題詞に「十月廿二日於左大弁紀飯膳朝臣家宴歌三首」とあり、同歌左注に「治部卿船王伝誦之久迩京都時歌未詳作主也」とある。すなわちこの歌は、左大弁紀飯膳家の宴の場で詠まれた作者不詳の歌である。なお、隆源口伝には「手束弓手に取りもちてあさかりの君は立たれぬ手枕のうし」(四七) という第二句までが同じ歌がある。

ともし

一一六七 さ月山このしたやみにともす火はしかのたちどのしるべなりけり ちぶ経はゝの大ききとも つらゆき

【異同】ちぶ経―ちふら(御・桂・大)

【現代語訳】五月の山の、木の葉が生い茂る下蔭の暗がりに灯す照射の火は、鹿が立っている場所を知らせるものであったのだなあ。

【語句】◎ともし 照射。山中で篝火を焚いたり松明をともしたりして鹿をおびき寄せ、目に火影が反射するのを的に弓矢で射る狩。夏から秋にかけて行われたが、五月の景物として月次屏風に詠まれる。○ちぶ経はゝの大ききとも 参考欄参照。「ちぶ経」は「治部卿」の意か。○さ月山 摂津国の歌枕とする説(歌枕名寄)もある



が、本来は五月の山の意で固有名詞ではない。郭公、鹿、照射などを詠み込む例が多い。○このしたやみに「このしたやみ」は、葉が生い茂り、樹下が暗くなっていること。○しかのたちどの 鹿の立っているところ。「たちど」は立っている場所。○しるべなりけり 手引きであったのだなあ。「しるべ」は、物を知るための手引き、導き。「あしまより見ゆるながらのはしはしら昔のあとのしるべなりけり」（拾遺集・四六八）。

【所載】拾遺抄・夏・七六／拾遺集・夏・一二七／貫之集Ⅰ・九

【参考】「ぢぶ卿はゝの大きみとも」は、一一六六歌の左注と関係するか。一一六六番歌参考欄参照。作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一六八 おぐら山ともしの松のいくそたびわれしかのねをなきてへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】暗いという名を持つ小倉山に、照射の松明がいくつもいくつも灯され、鹿の鳴く声をする。私は幾夜も幾夜もこのように泣いて過ごすのだろうか。

【語句】○おぐら山 小倉山。山城国の歌枕。鹿が景物として歌に詠まれた。「小暗し」の意と掛けて詠まれることも多い。二〇七番歌参照。○ともしの松の 照射（ともし）の松明（たいまつ）の。照射は一一六七番歌参照。○いくそたび 幾十度。回数が多いものについていう。初・二句は「いくそ」を導く序詞。○われしかのねをなきてへぬらん 私はこのように泣いて過ごすのだろうか。「鹿」に「然（しか）」、鹿の「鳴く」に自身の「泣く」を掛ける。「われもしかなきてぞ人にこひられしまこそよそに声をのみきけ」（新古今集・一三七三、大和物語・一五八段・二六三）。

【所載】ナシ

一一六九 あふことをともしのしかのうちむきてめをだにみせばいるべきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】照射の鹿が、顔を向けて目さえ見せたならば、射ることができるのに。（逢うことが少なくて、逢瀬のきつかけさえつかめたならば、入り込むことができるのに。）

【語句】○あふことをともしの 「ともし」によって「しかの」を導く措辞。恋の文脈における「逢ふことぞし」

を掛ける。同様の掛詞は「れふし（獵師）」にもあらぬ我こそ逢ふことをともしの松のもえこがれぬれ」（順集・四九）に見える。「ともし」（照射）は一一六七番歌参照。○うちむきて「うちむく」は特定の方向に向くこと。「うち」は接頭語。和歌の用例は少ないが、「おもふことなりもやすとうちむきてそなたさまにぞ礼し奉る」（実方集・三六）がある。○めをだにみせば 目をだに見せば。（鹿が）目をさえ見せてくれたならば。鹿狩では、鹿の目が照射の光に反射することを利用して居場所を知る。○いるべきものを 射ることができのに。「射る」に「入る」を掛け、恋の相手の許に入ることができるのに、の意をこめる。「射る」は照射の縁語。ここでの「べし」は可能。

【所載】和歌初学抄・二七

一一七〇 ほとゝぎすまつにつけてやともしする人もやまつによをあかすらん  
したがふ

【異同】まつにつけてや―まつにけてや（桂）

【現代語訳】郭公が鳴くのを待つということで、照射をする獵師も松を灯して夜を明かすのだろうか。

【語句】○ほとゝぎすまつにつけて ほととぎすを待つにつけて。「待つ」に「松」を掛ける。○ともしする照射（ともし）をして鹿狩りをする。「ともし」は一一六七番歌参照。ほととぎすと同様に五月の景物。○人もやまつに 底本では疑問の「や」が二度出てきて不審。所載欄の文献では「人も山辺に」とあり、「やまへ」の「へ」を「つ」と誤ったか。ここでは照射をする獵師が松明を灯す意と解した。

【所載】拾遺抄・夏・七八／拾遺集・夏・一二六／順集Ⅰ・一一／順集Ⅱ・一七二

【参考】作者名「したがふ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本・諸井〕

一一七一 つくばねにかくならわしのねをのみかなきわたりなばあふとはなしに  
わし

【異同】かくならわしの―かくなくわしの（大）

【現代語訳】筑波山でかつかつと声高くなく驚のように声ばかりをたてて泣き続けるとしたら。あなたに逢うこ

とはなくて。

【語句】◎わし ワシタカ科の鳥の総称。万葉集には三例みられ、筑波山と二上山の鷺について詠まれている。○つくばね 筑波嶺。常陸国の歌枕。○かくならわしの 不詳。所載欄の文献の「かかなくわしの」に拠って解した。「かか」は擬音語で鷺の鳴き声を表す。○ねをのみかなきわたりなば 声を立てて泣いてばかりいたならば、か。語法的に不審。「なきわたり」は鳥が鳴きながら渡っていく「鳴き渡る」と泣きつづけるの意の「泣き渡る」とをかける。所載欄の万葉集以下の諸文献では、第四句は「なきわたりなむ」となっている。

【所載】万葉集・三四〇八（旧三三九〇）筑波祢尔 可加奈久和之能 祢乃未乎可 奈伎和多里南牟 安布登波奈思尔 ツクハネニカカクワシノネノミヲカナキワタリナムアフトハナシニ つくはねにかかなくわしのねのみをかなきわたりなむあふとはなしに／和歌童蒙抄・七七五／袖中抄・三九九

一一七二 しぶたにのふた神山にわしぞこむてふむさしのはにもきみがめにわしぞこむてふ

【異同】わしそこむてふ―わしそこむてふ（大）

【現代語訳】渋谷の二上山で鷺が子を産むという。鷺の材料にもと、わが君のために鷺が子を産むという。

【語句】○しぶたにのふた神山 越中国の歌枕。渋谷も二上山も富山県高岡市の地名。渋谷は二上山の麓、富山湾に面する。○わしぞこむてふ 大久保本の「わしぞこむてふ」に拠って解した。鷺が子を産むという。所載欄の文献のいずれも「わしぞこむといふ」。第六句にも「わしそこむてふ」とあり、鷺の営巢のあったことを旋頭歌体で詠ったとみられる。○むさしのはにも 意味不明。所載欄の文献の「さしはにも」に拠って解した。「さしは」は鳥の羽や絹を張った長いウチワのような道具で、貴人の外出時などに従者がさしかけた。○きみがめにわが君のために。「た」の脱落とみて「きみがために」で訳す。

【所載】万葉集・三九〇四（旧三八八二）渋谷乃 二上山尔 鷺曾子産跡云 指羽尔毛 君之御為尔 鷺曾子生跡云 シブタニノフタガミヤマニワシジコウムトイフサシハニモキミガミタメニワシジコウムトイフ しぶたにのふたがみやまにわしぞこむといふさしはにもきみのみためにわしぞこむといふ／夫木抄・一二六六三／和歌初学抄・一五五／井蛙抄・四五二

おほたか

一一七三 やかたをのましろのたかをひきすへて君がみゆきにあはせつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】屋形尾の真白の鷹を腕にとまらせて、わが君の行幸にあわせたことですよ。

【語句】◎おほたか 全長五〇〜六〇センチメートルの大きな鷹。大鷹の雌を使って冬に狩を行なった。和歌では「大鷹狩」の題で詠まれることが多い。○やかたを 屋形尾。鷹の尾の模様の一首。「屋形尾のましろのたかをやどにすゑかきなでみつつかはくしよしも」（万葉集・四一七九（旧四一五五））。○ひきすへて ひきすゑで。腕に止まらせて。「はしたかをてにひきすゑて山ざとのやどかりにこそけふはきにけれ」（能宣集・四〇一）。○あはせつるかな あわせたことです。「みゆき」の時機に「合はせ」たことに、鷹を放つ意の「あはせ」をかける。

【所載】ナシ

【参考】後葉集・四四二に「とやがへるましろのたかをひきすゑて君が御狩にあはせつるかな」という類歌がある。

一一七四 あらたかのいまは雲井になりぬればきてもやいとみするてだぬき

【異同】ナシ

【現代語訳】荒鷹がいまはもう遙か遠くの雲の彼方に行ってしまったので、こつちに來ては止まるかと見せているてだぬきですよ。

【語釈】○あらたか 荒鷹。新鷹。鷹狩の訓練がまだ十分にできていない、まだ人に馴れていない鷹。「やまがへりまだ手ならさぬあらたかをけふのみ狩にあはせつるかな」（教長集・六一一）のように「手なれぬ」という語句と共に詠まれることが多い。○きてもやいと きてもやあると。來てもや居ると。こちらへ來ては止まるかと。○てだぬき 手手貫（てだぬき）か。「手貫（たぬき）」は革製の籠手で、手や腕をおおうもの。鷹狩の際に使用した。和名抄では「鞆」を「たかたぬき」と訓じている。

【所載】夫木抄・一二七六七／和歌童蒙抄・七八〇／和歌色葉・一六八

一二七五 うらむべきこゝろおほたかてにすへてかりにのみくる人やなになり

【異同】ナシ

【現代語訳】恨めしい気持は多いですよ。大鷹を手に止まらせてただ狩にばかり来る、ほんのかりそめにばかりやってくるあなたは、いったい何なのでしょう。

【語句】○おほたか 大鷹。鳥の「大鷹」に、恨む気持ちが「多」いことを掛ける。○かりにのみくる ほんのかりそめにだけ来る。「かりそめ」に「狩り」をかける。「冬草のかれもはてなでしかすがにいまとしなればかりにのみくる」(貫之集・五四五)。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野・尾高〕

一一七六 へをつきて山にいりにしあらたかのいとをきにくきそらごとなせそ

【異同】ナシ

【現代語訳】足に紐をつけたまま山に入ってしまった馴らしていない若鷹は、呼び戻しにくい。憎らしい嘘をどうか言わないで。

【語句】○へをつきて 「へを」をつけたままで。「へを」は、綜緒・攀。鷹狩に用いるために鷹を飼いならすとき、鷹の足に結び付けておく紐。足緒ともいう。「つきて」は、ついたままの状態で、の意。なお、所載欄の夫木抄には「へをとけて」。○あらたか 荒鷹。新鷹。捕まえたばかりで飼ひ馴らしていない若鷹。一一七四番歌参照。○いとをきにくき いとおきにくき。まことに手なづけにくい。「をきにくき」は、招きよせにくい、手なづけにくい、の意。同時に「憎き」を掛ける。上三句は、「いとをきにくき」を導く序詞。「わがためにをきにくかりしはしたかの人の手に有り」と聞くはまことか」(後撰集・一二二五)。○そらごとなせそ 嘘をついてくれるな。

【所載】夫木抄・一二七七〇

こたか

一一七七 にわくさをうつらすむまではらはせじこたかてにすへみむ人のため  
おちのわう女

【異同】ナシ

【現代語訳】庭草を鶉が住みつくまで刈り払わせることはすまい。小鷹を手には据えて狩りを試しみる人のために。

【語句】◎こたか 小形の鷹。隼（ハヤブサ）・鶉（ハシタカ、ハイタカ）・鶇（サシバ）などの総称。これらの小鷹を馴らして、鶉（ウズラ）や雲雀（ヒバリ）など小鳥を捕るのを小鷹狩といい、男性貴族たちの遊びであった。屏風絵に描かれたり、歌題ともなった。○にわくさを にはくさを。庭の草を。○うづらすむまではらはせじ 鶉が棲みつくほどのくさむらになるまで手入れはさせまい。「はらふ」は、庭の木や草を刈りこんだり抜いたりして手入れすること。○こたかてにすへ こたかてにする。小鷹を手には据えて。「手に据ゑ」とは、鷹を調教したり狩りをする時に、腕に鷹をとまらせること。

【所載】ナシ

【参考】作者名「おちのわう女」は、未詳。他文献でも確認できない。

一一七八 かりしてのほどなき身にもはしたかのねはなきはらふものにざりける

【異同】ねはなきはらふ—ねかなきはらふ（御・大）ものにざりける—ものにざりけり（大）

【現代語訳】「下句の文意がとれないので、完全な現代語訳が示せない。」狩りをしてまもない我が身でありまして、はしたかの「ねはなきはらふ」ものでありました。

【語句】○かりして 狩りして。○ほどなき身 狩りの経験があまりないわが身とも、卑しい我が身とも解せる。○はしたか 鶉。鷹のなかでも小形の鷹で、小鷹狩に使われる。○ねはなきはらふ 異同欄の「ねかなきはらふ」を採っても、歌意が通らない。○ものにざりける 「ものにぞありける」に同じ。ものなのであります。

【所載】ナシ

一一七九 つらしともうらみざらなんはしたかのとがへる山のしゐもゝみぢず

【異同】ナシ

【現代語訳】冷淡であると私を恨まないでほしい。あのはしたかのとがへる山の椎の木が紅葉しないのと同じで、私の気持ちは少しも変わらないのですから。

【語句】○つらしともうらみざらなん 冷淡だところらのことを恨まないでくれ。「なん」は他へあつらえ望む

助詞。○はしたかのとがへる山 「はしたかの」は、「とがへる」にかかる枕詞。「とがへる」とは、鷹の毛が抜け変わることを。「とがへる」とも。「はしたかのしら斑（ふ）に色やまがふらむとがへる山に霰降るらし」（金葉集・二七六）。○しゑもみぢず しひもみぢず 常緑の椎も紅葉しない。「も」で、わが心もまた変わらな、と言ったもの。所載欄の文献では「椎はもみぢず」が多い。

【所載】後撰集・雑二・一一七一／兼盛集Ⅰ・四八／兼盛集Ⅲ・五七／綺語抄・六二八／奥儀抄・三九七／袖中抄・三六七／和歌色葉・一六七

【参考】作者名はなく、後撰集にも「よみ人知らず」。兼盛集Ⅰ・Ⅲによれば、女のもとより、私を忘れたのかと言って寄こしたのに対して返した歌。

一一八〇 かりにてもす<sup>ゑ</sup>へじとぞ思はしたかのす<sup>ゑ</sup>ろなるなをたちもこそすれ

【異同】す<sup>ゑ</sup>へしとぞ思<sup>ゑ</sup>す<sup>ゑ</sup>らしとぞ思（御）、す<sup>ゑ</sup>へらしとぞ思（大）

【現代語訳】かりそめにもここに居させまいと思ひます。根も葉もない噂が立てられましたら困りますので。

【語句】○かりにても 仮りにても。かりそめにも。「仮りに」に「狩り」を掛ける。○す<sup>ゑ</sup>じとぞ思<sup>ゑ</sup>す<sup>ゑ</sup>じとぞ思<sup>ゑ</sup>ふ。ここに居させまいと思う。「す<sup>ゑ</sup>」は、人や物を安定した状態でそこに置くこと。ここでは、ある人物を自分の身近に置くことはすまいと言ったものであろう。その「す<sup>ゑ</sup>」に、鷹狩の鷹を手を「す<sup>ゑ</sup>る」を掛けた。○はしたかの 鷹につける「鈴」から「す<sup>ゑ</sup>るなる」にかかる枕詞。○す<sup>ゑ</sup>ろなるなを 根拠のない浮き名を。「す<sup>ゑ</sup>ろ」に「鈴」を掛け、「狩り」「据え」「鈴」は、「はしたか」の縁語。「はしたかのす<sup>ゑ</sup>る歩きにあらばこそかりとも人の思ひなされめ」（清正集・二二）。なお、所載欄の文献「す<sup>ゑ</sup>ろなる名の」で現代語訳した。○たちもこそすれ 立ったりしたら困るから。

【所載】万代集・一九二三／和歌初学抄・二九

【参考】『古今和歌六帖標注』に、仁徳天皇紀四十三年秋九月の鷹狩の由来ともいうべき記事を引用する。仁徳天皇が珍しい鳥を献上され、酒君はその鷹を飼ひ馴らしてのち、「韋（をしかは）の縉（あし）を以て其の足に著け、小鈴を其の尾に著け、腕（ただむき）の上に居（す）<sup>ゑ</sup>て天皇に献上、その日に百舌鳥野（もずの）で鷹狩りがあり、あまたの雉を捕らえた、と見える。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

一一八一 としをへてかへりかたのゝすもりこのきみにしあへばとびたちぬべし  
きじ

【異同】ナシ

【現代語訳】何年たってもなかなか帰ることができない交野にいる巣守子のようなあなたに逢うと、うれしくて飛び上ってしまうに違いない。

【語句】◎きじ 雉。古名は「きぎし」、「きぎす」ともいう。林や草原に住むキジ科の野鳥。雄は長く美麗な尾羽をもち、高い声で鳴く。和歌では鳴き声が詠まれ、妻を恋い、子を思う鳥とされる。鷹狩の場面が詠まれることもある。○としをへて 年月を経て。○かへりかたのゝ なかなか帰れない交野の。「帰り」に「孵り」を掛け、地名「交野」に「難し」の語幹「かた」を掛けた。○すもりこ 巣守子、巣守児。「巣守」ともいう。他の鳥が巣立つた後も孵化しないで残った卵のことで、いつまでも家で大切に育てられている娘を喩える。「かへり（孵り）」、「とびたち」は「すもりこ」の縁語。「すもりこのかへらぬほどは冬の夜の鴨のうきねぞわびしかりける」（宇津保物語・九八三）。「としをへてかへりかたのゝすもりこの」までは「きみ」を導く序辞。

【所載】ナシ

【参考】当該歌には、題である「きじ」の語がみられないが、「交野」は雉の名所であり、「すもりこ」は鳥に關わる語である。

一一八二 すゝきのにさをどるきゝすいちしるくなきしもなかむこもりづまはも  
やかもち

【異同】こもりづまはも—こもりづまめも（大）

【現代語訳】薄の野で跳ねている雉は、妻をもとめて、人に知られるほどはつきりと鳴きに鳴くのだろう、そのように、たまりかねて声をあげて泣く、人目を避ける隠り妻よ。

【語句】○すゝきのに 「すゝき」は薄の生えた野原。所載欄の万葉集では「杉の野に」。○さをどるきゝす 「さ」は接頭語。「をどる」は跳ね回る意で、雄雉の求愛行動。例歌はあまり見られないが、拾遺集に「きじのをどり」として「河ぎしのをどりおるべき所あらばうきに死にせぬ身は投げてまし」（物名・四〇一）がある。「きぎす」は一一八一番歌参照。○いちしるく 明白に、はつきりと。初句「すゝきのに」から第三句「いち



しるく」までは、「なきしもなかむ」を導く序詞とみることもできる。○なきしもなかむ 「なきになく」の「に」を、強意の副助詞「しも」に置き換えた形で、同じ動詞を繰り返して、動きの程度が甚だしいことを強調するが、あまり例のない用法。雉が「鳴きしも鳴かむ」と、こもり妻が「泣きしも泣かむ」を掛ける。○こもりづまはも こもり妻よ。「こもりづま」は人目をはばかって隠れている妻。「はも」は強い詠嘆。「こもり」は「いちしるく」に対する語。

【所載】古今六帖・第五帖「かくれづま」三二一〇／万葉集・四一七二（旧四一四八）梶野尔 左平騰流鳩 灼然 啼尔之毛将哭 己母利豆麻可母 スギノノニサヲドルキギスイチシロクネニシモナカムコモリヅマカモスぎののにさをどるきぎしいちしろくねにしもなかむこもりづまかも／夫木抄・一七七七／和歌童蒙抄・七八二

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。一一八三番歌の参考欄参照。

一一八三 あしひきのやまをのき<sup>みねイ六ニハ山ヲ</sup>ずなきとよむあさけのすがたみればかなしも

【異同】ナシ

【現代語訳】山峰（やまを）にいる雉が大きな声で鳴きたてている、その夜明けの姿を見るとなんと悲しい。

【語句】○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○やまをのきず 「やまを」は山峰。山の稜線。所載欄の万葉集では「八つ峰（数多くの峰）」。きず「は一一八一番歌参照。○なきとよむ 大きな声で鳴きさわぐ。」「とよむ（響む）」は、あたりにひびきわたるさまの形容。鳴り響くほどの大きな音を立てる。大声をたてて騒ぐ。

○あさけのすがた 朝明けの姿。「あさけ」は朝明。明け方。夜明け。「春霞朝立つ野辺に立つ鳥もしのぼぬ音にや人もしるらむ」（中務集・三六・きじのこゑ）の如く、雉を擬人化し、恋する相手との朝の別れになく姿を「かなしも」とみた。

【所載】万葉集・四一七三（旧四一四九）足引之 八峰之鳩 鳴響 朝開之霞 見者可奈之母 アシヒキノヤツヲノキギスナキトヨム（ミ）アサケノカスミミレバカナシモ あしひきのやつをのきぎしなきとよむあさけのかすみみればかなしも／夫木抄・一七六六

【参考】一一八二番歌と当該歌は、万葉集では「聞曉鳴鳩歌二首」（四一七二（旧四一四八）と四一七三（旧四一九九））という題の連続した二首である。

一一八四 春きじのなくたかまとにさくらばなちりながらふるみむ人もな

【異同】ナシ

【現代語訳】春の雉が鳴く高円山に桜花が流れるように散っている。見ようという人があるといいのになあ。

【語句】○たかまと 高円山。奈良市東方の春日山の東南にある山。桜が詠まれた例として「春雨のしくしく降るに高円山の山の桜はいかにかあるらむ」（万葉集・一四四四（旧一四四〇））がある。○ちりながらふる 散り流らふる。「ながらふる」は、「流らふ」の連体形で、散りながら風に漂い流れるさま。○みむ人もがな 見ようという人があるといいなあ。「む」は意志を表す。

【所載】万葉集・一八七〇（旧一八六六）春雉鳴 高円辺丹 桜花 散流歴 見人毛我裳 キギスナクタカマトノヘニサクラバナチリナガラフルミムヒトモガモ きぎしなくたかまとのへにさくらばなちりてながらふみむひとものも

一一八五 春のゝにおもぬきじのひとつがひわがこわだかにおちやしぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】春の野で互いに相手のことを思つて寝る雌雄の雉は、私の高い声に怯えてしまったのだろうか。

【語句】○春のゝ 春の野。○おもぬきじの おもひぬきじの。互いに思い合つて共寝する雉の。「おもぬね」は思ひ寝。恋人を思つて寝ること。「衣手ぞ今朝はぬれたる思ひ寝の夢路にさへや雨は降るらむ」（躬恒集・四五）。○ひとつがひ 雌雄の一对。「滝つ瀬の石間をみれば一つがひ鴛鴦ぞすみける山川の水」（能因集・二三一）。○わがこわだかに 我が声高に。「声高」は声の高いこと。私が声高に言つたその声によつて。○おちやしぬらん おびえてしまったのだろうか。「おち」は「おづ（怖づ、懼づ）」の連用形で、恐れる、怖がる意。「や」は疑問、「らん」は現在推量、怯えて出てこない番いの雉の様子を想像する。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

一一八六 ねぐらなるしもうちはらひたつきじのそらにこそとれ人のこゝろを

【異同】ナシ

【現代語訳】ねぐらにおりている霜を打ち払い雉は空へと飛び立つ。あなたの心はうわの空であてにならないと思われることです。

【語句】○しもうちはらひ 霜を打ち払って。霜は涙の隠喻でもあるか。「あかつきの霜うちはらひなく千鳥も  
の思ふ人の心をや知る」(源氏物語・総角・六七七)。○たつきじ 飛び立つ雉。雉が飛び立つ様に、男が朝方、  
寝所を去っていく様を重ねるか。「ゆきすぐる秋の草ばにやどりして立つらんきじのことまたのまじ」(小馬命  
婦集・一九)。○そらにこそとれ あてにならないと思う。「空」に、あてにならず空虚である意の「そら」を  
掛ける。「頼みくるひとのころのそらなればくもぬのかはに袖ぞぬれぬる」(斎宮女御集・一〇四)。「たつき  
じのそらにこそ」で、雉が空へと飛び立つ様を表わし、「そらにこそとれ人のころを」で、相手の心があてに  
ならないという思いを表わすか。上三句は「そら」を導く序詞。

【所載】ナシ

一一八七 はるのゝにあさなくきじのつまごひにおのがありかを人にしられて

ルキッスノイ

シレッツ、

【異同】ナシ

【現代語訳】春の野で朝方鳴く雉は、妻を恋しがって鳴くその声によって、自分の居場所を人(狩人)に知ら  
れてしまうのです。

【語句】○はるのゝにあさなくきじの 春の野で朝なく雉の。雉は繁殖期の春に雌を恋しがって鳴く。その鳴  
き声によって人(狩人)に居場所を知られてしまう様が詠まれる。「かりにくる人もこそきけ春の野にあさなく  
きじの近くも有るかな」(順集・二〇三)。○つまごひに 妻を恋慕って鳴くので。「に」は原因・理由を表す。

【所載】拾遺集・春・二一／万葉集・一四五〇(旧一四四六) 春野尔 安佐留雉乃 妻恋尔 己我当乎 人尔  
令知管 ハルノニアサルキギスノツマゴヒニオノガアタリヲヒトニシレッツ はるのにあさるきぎしのつ  
まごひにおのがあたりをひとにしれつつ／金玉集・一八／赤人集I・一一六／三十人撰・四七／三十六人撰・  
四三／深窓秘抄・二二／能因歌枕・二四／隆源口伝・五五／袖中抄・一五四

【参考】古今六帖に作者名の記載はないが、所載欄の文献の多くが作者を大伴家持とする。

一一八八 くりこまの山にあさたつきじよりもわれをばかりにおもひけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】くりこまの山で一夜を過ごして朝飛び立って別れていく雉。（雉に狩りはつきものですが）あなたは私を、その雉よりもかりそめのもんと思つていらつしやるのですね。

【語句】○くりこまの山 栗駒山。現在の京都府宇治市の丘陵地。栗駒山は、大和物語に「みかりするくりこまやまのしかよりもひとりぬる身ぞわびしかりける」（一四〇段・二二二）とあり、狩獵地として知られていた。○われをばかりにおもひけるかな 私のことをかりそめのもんと思つていたのですね。「かりそめ」の意の「かり」に雉の「狩り」を掛ける。「くりこまの山に朝たつきじよりもかりにはあはじと思ひしものを」（大和物語・八二段・一一六）。

【所載】夫木抄・八五七三

一一八九 われをあきとふ<sup>はと</sup>ゆ<sup>る</sup>つゆなれば山ばとのなきこそわたれきみまつのえに

【異同】ナシ

【現代語訳】秋につゆが降るように私に飽きたあの人だから、私は山鳩のように松の枝でいつまでも泣き続けている。来ないあなたを待ちながら。

【語句】◎はと ハト科の鳥の総称。特にそのもの寂しい声の風情が取り上げられた。○われをあきと 「飽き」と「秋」を掛ける。○ふるつゆなれば 降る露であるから。「露が」降る」と古くなる意の「古る」を掛ける。「今はとてわが身時雨にふりぬればことのはさへにうつるひにけり」（古今集・七八二）。「つゆ」は涙の隠喩。○なきこそわたれ ずっと泣いている。鳩が「鳴く」ことに人が「泣く」ことを掛ける。「はつかりのなきこそわたれ世中の人の心の秋しうければ」（古今集・八〇四）。○きみまつ<sup>はと</sup>のえに 「松」と「待つ」を掛ける。「こぬひとをまつのえだにふる雪の消えこそかへれあかぬおもひに」（元良親王集・一〇八）。

【所載】夫木抄・一二八三二

うづら

やかもち

一一九〇 うづらなくふるきさとよりおもへどもなにぞもいもにあふよしもなき

【異同】ナシ

【現代語訳】（鶉鳴く）昔の都に居た頃からあなたを思っています、いったいどうしてあなたに会う機会もないのでしょうか。

【語句】◎うづら キジ科の鳥。荒廃し草深くなった土地に住み、寂寥感を感じさせる鳥として詠まれる。○うづらなく うづらが鳴く。「古る」の枕詞。「うづら鳴くふるしと人はおもへれど花橘のにほふこのやど」（万葉集・三九四二（旧三九二〇））。○ふるきさと 昔の都。ここでは旧都の藤原京を指す。「藤原のふりにし里の秋萩はさきてちりにき君ましかねて」（万葉集・二二九三（旧二二八九））。○なにぞも 代名詞「何」に強意の係助詞「ぞ」「も」がついたもの。どうして……なのか。

【所載】万葉集・七七八（旧七七五）鶉鳴 故郷従 念友 何如裳妹 相縁毛無寸 ウヅラナクフルキサトヨリオモヘドモナニゾモイモニアフヨシモナキ うづらなくふりにしさとゆおもへどもなにぞもいもにあふよしもなき／夫木抄・五六九五

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・市東〕

一一九一 のとならばうづらとなりてなきをらんかりにだにやは人のこざらん

【異同】ナシ

【現代語訳】もしここが野となってしまったら、わたしは鶉になって鳴いていきましょう。そうすれば、せめて狩になりと、かりそめにも、あなたが来てはくださらないでしようか。きつと来てくださるはずです。

【語句】○なきをらん 鳴いておりましょう。「鳴き」に「泣き」を掛ける。○かりにだにやは人のこざらん せめて狩になりと、かりそめにも、あなたは来ないだろうか、いや、きつとくるはずだ。「狩に」に「仮に」を掛ける。「やは」は反語。「人」は、ここでは第二人称、相手をさしている。

【所載】古今集・雑下・九七二／業平集Ⅰ・六三／業平集Ⅱ・七八／業平集Ⅲ・三八／伊勢物語・一二三段・二〇七

【参考】古今集では、「年を経て住み来し里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ」（九七二）という業平歌

に対する返歌。業平集・伊勢物語でも同じ。

一一九二 うづらなくふるきみやこを<sup>の</sup>あきはぎをおもふ人どちあひみつるかな  
さみがうた

【異同】 おもふ人とち―おもふ人とは（御・大）

【現代語訳】 この古都の秋萩を、親しい者同士でいっしょに見たことだなあ。

【語句】 ○さみがうた この歌は、万葉集巻八にある「故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首」の中の二首目の歌。一首目の歌には「丹比真人国人」という左注があり、後の二首には「右二首沙彌尼等」の左注がある。「さみ」はこの場合沙彌尼、仏門に入つて十戒（沙彌戒）を受けた尼僧のこと。○うづらなく 「古る」にかかる枕詞。「うづらなくふるしと人はおもへれど花たちばなのにはふこの宿」（万葉集・三九四二（旧三九二〇））。○ふるきみやこ ここでは飛鳥の古京をさす。○おもふ人どち 心の通じ合った親しい者同士。

【所載】 万葉集・一五六二（旧一五五八）鶉鳴 古郷之 秋芽子乎 思人共 相見都流可聞 ウヅラナクフリニシサトノアキハギヲオモフヒトドモアヒミツルカモ うづらなくふりにしさとのおきはぎをおもふひとどちあひみつるかも／夫木抄・五六九三／家持集Ⅰ・一三四／家持集Ⅱ・一二五／綺語抄・六二三

【参考】 作者名「さみがうた」とあるのは、万葉集の所伝に一致する。和漢朗詠集には、「うづら鳴くいはれの野辺の秋萩をおもふ人ともあひ見つるかな」（二二八）という一首が丹比国人の作としてあり、この歌は、新拾遺集・秋上・三五三に「題しらず よみ人知らず」として収載されている。

おほたかざり

一一九三 おほきたかいまとしなればおほはらきのもりのしたくさ人もかりけり

【異同】 おほはらきの―おほあらきの（大）

【現代語訳】 いよいよ大鷹狩の時期となつたので、「刈る人もなし」と詠まれたあのおおあらきの森の下草を人も刈つて、狩に備えている。

【語句】 ◎おほたかがり 大鷹を使つて雁や鴨など大形の鳥をとる狩。冬季のものである。○おほきたか 大鷹。ワシタカ科の鳥で、馴致調教して大鷹狩りに使う。○おほはらきのもり おほあらきの森。「おほあらき」

は、古代において、貴人の死後本葬までのあいだ、遺体を仮に安置しておくこと。「おほあらきのもり」は、「おほあらき」の場となった森、の意で、本来は普通名詞であったはずである。万葉集に「かくしてやかくや守らむおほあらきのうきたの森のしめにあらなくに」（二八五〇（旧二八三九））と詠まれた「おほあらきのうきたの森」は大和国であるが、五代集歌枕は「おほあらきの森」を山城国とする。歌枕としての所在地はたしかには言えない。○もりのしたくさ人もかりけり 森の下草を人も刈ったことだ。古今集・八九二番の「おほあらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今六帖・一〇四六）を下に敷いている。

【所載】 夫木抄・七三七三／貫之集Ⅰ・二四〇

【参考】 作者については一一九六番参照。貫之集Ⅰでは、「延喜御時内裏御屏風の歌」二十六首の中の「おほたかりりしたるところ」二首の中の一。次歌（一一九四番）参照。

一一九四 しもがれになりにしのとしらねばやはかなく人のかりにきつらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】 霜枯れとなりはてた野辺だと知らないから、はかなくも人は、狩に来るのであろうか。（すっかり気持ちの離れてしまったわたしだと知らないから、はかなくもあの人は、かりそめに来るのであろうか。）

【語句】 ○しもがれになりにしのと 霜枯れになつてしまった野辺。「しもがれ」は、霜によつて草木が枯れること。ここでは作中人物の暗喩。気持ちの離れてしまったわたし。「枯れ」に「離れ」を掛ける。○はかなく「きつらん」へかかる。貫之集Ⅰでは「かひなく」となっており、その方が歌意はわかりやすい。○かりにきつらん 狩に来るのであろうか。「狩に」に「仮に」を掛ける。「らん」は第三句「や」の疑問を受けた推量。……なのだろうか。伊勢物語一二三段の二〇七番歌「野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」（古今集・九七二、古今六帖・一一九二）を意識して詠んでいる。

【所載】 続後撰集・恋四・九三五／貫之集Ⅰ・二四一

【参考】 作者については一一九六番参照。貫之集Ⅰでは、前歌（一一九三）と同じ詞書の下にある屏風歌。前歌参照。

一一九五 冬くさのかれは<sup>は</sup>してなでしかすがにいまとしなればかりにのみる

【異同】ナシ

【現代語訳】冬草が枯れはてるようには離（か）れてしまわずに、それでもさすがに、今の季節となれば、ほんのかりそめにばかり、狩にだけにあの人が来ることよ。

【語句】○冬くさの 「かれ」を導き出すための措辞。同時に「おほたかがり」の季節をも表す。○かれははてなで 枯れはててはしまわずに。草の「枯れ」に人事の「離れ」を掛ける。「なで」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、打消の助詞「で」が付いたもの。……しないで。○しかすがに それでもさすがに。○かりにのみくる 狩のためにだけ来る。「狩に」に「仮に」を掛ける。前歌と同様伊勢物語二〇七番の歌を意識して詠んでいる。

【所載】貫之集Ⅰ・五三二

【参考】作者については、一一九六番参照。貫之集Ⅰによれば、天慶八年二月「うちの御屏風のれう二十首」の中の「おほたかがり」の歌。年次の判明している中では、貫之最晩年の屏風歌である。

〔以上五首担当 山下〕

一一九六 しもがれのくさばをうしとおもへばや冬のゝのべを人のかるらむ

已上四首 なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】霜枯れの草葉は、疎ましいと思うから、それで冬野の野辺を人は狩りをするのだろうか。

【語句】○うしとおもへばや（霜枯れの野は見所もなく）うとましいと思うから……か。「や」は疑問を表す係助詞。○かるらむ 狩りをするのだから。「くさば」の縁で「狩る」に「刈る」を掛ける。

【所載】古今六帖・第六帖「ふゆ」三五六八／貫之集Ⅰ・二〇／貫之集Ⅱ・一八

【参考】左注「已上四首なりひら」とあるが、一一九三番―一一九六番の四首は、いずれも貫之の屏風歌である。

一一九七 かりくらししたなばたつめにやどからむあまのかはらにわれはきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】一日中狩りをして目を暮らし、今夜は織女に一夜の宿を借りよう。天の川原に、私は来てしまった



のだから。

【語句】○かりくらし 狩りをして日を暮らし。○たなばたつめ 織女。「あまのかは」という地名の縁でこう言った。○やどからむ 宿を借りよう。○あまのかは 今の大阪府枚方市を流れる川の名。七夕の「天の川」を掛ける。

【所載】古今集・羈旅・四一八／新撰和歌・一九〇／業平集Ⅰ・四五／業平集Ⅱ・四七／業平集Ⅲ・二〇／業平集Ⅳ・四三／今昔物語集・八八／伊勢物語・八二段・一四七

【参考】伊勢物語では「交野を狩りて、天の川のほとりにいたる」の題で在原業平が詠んだ歌。

一一九九 ひとゝせにひとたびきます君まてばやどかす人もあらじとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一度逢いにいらつしやる、彦星だけを待っているの、あなたに宿を貸す人などいないだろうと思いますよ。

【語句】○ひとゝせにひとたびきます君 一年に一度いらつしやるあの方。彦星。○やどかす人もあらじとぞおもふ 彦星以外に宿を貸す人はないだろうと思う。

【所載】古今集・羈旅・四一九／業平集Ⅰ・四六／業平集Ⅱ・四八／業平集Ⅲ・二一／今昔物語集・八九／伊勢物語・八二段・一四八

【参考】伊勢物語では一一九七番歌に対する返歌。作者紀有常。古今六帖では「大鷹狩」の部にあるが歌の中に「かり」の言葉はない。

一一九九 すまのせき秋はぎしのぎこまなべてたかづりをだにせでやわかれん

【異同】ナシ

【現代語訳】須磨の関に、秋萩を踏みしだき馬を並べて、一緒に鷹狩をしたいのに、それすらしないで別れるのだろうか。

【語句】○すまのせき 須磨の関。摂津国と播磨国の境にあった関所。「須磨の浦」と共に歌枕。「淡路島かよふ千鳥のなく声にいく夜寝覚めぬ須磨の関守」（金葉集・二七〇）。○秋はぎしのぎ 秋萩を踏みつけのりこえて。

○こまなべて 馬を並べて。○たかざり 飼いならした鷹を使つてする狩獵。小鷹を使う秋の狩を「こたかがり」、大鷹を使う冬の狩を「おほたかがり」という。一一九三番歌参照。

【所載】新拾遺集・離別・七四三／万葉集・四二七三（旧四二四九）伊波世野尔 秋芽子之努芸 馬並 始鷹獵 太尔 不為哉將別 イハセノニアキハギシノギウマナメテハツト（コタカ）ガリダニセデヤワカレム いはせのにあきはぎしのぎうまなめてはつとがりだにせずやわかれむ／夫木抄・五六五〇

こたゝかり

やかもち

一二〇〇 おもひいでゝこひしくもあるかあはづのゝこはぎがしたにわがゆきし<sup>か</sup>るり

【異同】こたゝかり—こたかゝり（御・桂・大）

【現代語訳】思い出すと恋しいことだなあ、栗津野の小萩の下をわけ入って、その昔私が行った狩のことが。

【語句】◎こたゝかり 「こたかがり」の誤り。小鷹狩り。秋に行う鷹狩。はやぶさ、はいたかななどの小型の鷹を使つて、うずら、ひばりなどの小鳥を狩る。○こひしくもあるか 恋しいなあ。「も」「か」は呼応して詠嘆の気持ちを強める。○あはづの 栗津野。近江国の歌枕。今の滋賀県大津市膳所。風景の寂しさを詠んだ歌が多い。栗津野の狩りを詠んだ例としては後世のものだが「わがせこがかりにのみくるあはづ野にうづらなくなり草がくりつつ」（堀河百首・一四〇六）がある。○こはぎ 小さな萩。萩の美称。○わがゆきしかり 私がその昔行つたあの狩が。

【所載】夫木抄・四一四三

【参考】作者名「やかもち」とあるが、所載欄の夫木抄では作者名「伊勢」。ただし家持集・伊勢集には当該歌はない。

〔以上五首担当 林〕

一二〇一 あきのゝにかりぞくれぬるおみなへしこよひばかりのやどもかさなん

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野で狩りをして日が暮れてしまった。女郎花よ、今宵一夜だけの宿でも貸しておくれ。

【語句】 ○おみなへし をみなへし。女郎花。山野に自生する多年生草本。初秋に黄色の花が咲く。秋の七草の一つとして愛好された。その名前から、当該歌と同様に、女性に擬人化して歌に詠まれることが多い。「をみなへし我に宿貸せ印南野のいなといふともここを過ぎめや」（拾遺集・三四八）。○やどもかさなん 宿も貸さん。宿を貸してほしい。「も」は、強意の係助詞。「なん」は、「……してほしい。……してもらいたい。」と他者に対してあつらえ望む意を表す終助詞。

【所載】 後拾遺集・秋上・三二四／貫之集Ⅰ・一五／貫之集Ⅱ・一三／元輔集Ⅰ・二四六

【参考】 作者名については、一二〇四番歌参照。貫之集によると、延喜六（九〇六）年に、醍醐天皇の下命によって詠んだ月次屏風の歌の一首で、題は「小鷹狩り」。なお、元輔集Ⅰにも見え、後拾遺集でも清原元輔作とされている。しかし、元輔集Ⅰの当該歌を含む巻末部は先人の歌を集積した部分であり、後拾遺集はそれによって元輔作としたと考えられ、当該歌の作者は貫之とみなされる（参考、後藤祥子『元輔集注釈』貴重本刊行会、一九九四年）。

一二〇二 かりにとてわれはきつれどおみなへしみるにこゝろぞ思つきぬる

【異同】 ナシ

【現代語訳】 狩りをしようとして、私は来たけれど、女郎花を見たら心が引かれてしまった。（ほんの仮初めの気持ちで私は来たのだけれど、女に逢ったらすつかり心を奪われてしまったよ。）

【語句】 ○かりにとて 狩りをしようとして。「かりに」は、「かりにのみ人の見ゆれば女郎花の袂ぞ露けかりける」（貫之集・二七五）という例のように、「狩りに」に「仮に」を掛ける。それによって「かりにとて」は、「狩りをしようとして」の意と「仮初めにといいうので」の両意を表す。「かりにとて来ばかりけりや秋の野の花見るほどに日も暮れぬべし」（拾遺集・一六三）。○おみなへし をみなへし。女郎花。一二〇一番歌語句欄参照。

【所載】 拾遺集・秋・一六五／貫之集Ⅰ・三九

【参考】 作者名については、一二〇四番歌参照。貫之集によると、延喜十四（九一四）年十二月に、宇多天皇の下命によって、醍醐天皇の第一皇女勸子内親王のための屏風歌を詠んだ中の一首。

一二〇三 はなのいろをひさしきものとおもはねばわれはの山をかりにこそみれ

【異同】ナシ

【現代語訳】花の色をいつまでも変わらないものとは思わないので、私は野山を狩りのためにだけ、仮初めに  
見るんだよ。

【語句】○はなのいろを 花の色を。「花」は、女性を暗示する。○かりにこそみれ 狩りのためにだけ見るの  
だ。「かりに」は、「狩りに」と「仮に」とを掛ける。一二〇二番歌参照。「こそ」は強意の係助詞。「をみなへ  
しうつろひがたになる時はかりにのみこそ人は見えけれ」（貫之集・八二）。

【所載】貫之集Ⅰ・一一〇

【参考】作者名については一二〇四番歌参照。貫之集によると、延喜一八（九一八）年四月、醍醐天皇皇子保  
明親王のための屏風歌を詠んだ中の一首。題は「小鷹狩りしたる所」。

一二〇四 もゝくさのはなはみゆれどをみなへしさけるなかにとかりくらしてん

已上四首 つらゆき

【異同】已上四首―ナシ（御）、已上（大）

【現代語訳】様々な草の花は見えるけれど、女郎花が咲いている中をめざして、一日中狩りをして日を暮らし  
てしまおう。

【語句】○もゝくさのはなは 百草の花は。「百草」は、百種類の草、種々さまざまな草の意。多数の女性、の  
意を寓する。○をみなへし 一二〇一番歌語句欄参照。ここでは、多数の女性の中のひとりの人だけ、の意。  
○かりくらしてん 狩りをして日を暮らしてしまおう。一一九七番歌参照。「てん」の「て」は強意を表す助動  
詞「つ」の未然形、「ん」は意志の助動詞「む」の終止形。

【所載】貫之集Ⅰ・三八〇

【参考】貫之集Ⅰ、三六六番歌の詞書に「天慶三年四月右大将殿御屏風の歌廿首」とあるが、「天慶三年」は「天  
慶二（九三九）年」の誤りで、天慶元年から同八年まで右大将だった藤原実頼の、恐らく四十の賀の屏風歌（実  
際には二十二首）の中の一（参考、木村正中『土佐日記 貫之集』新潮日本古典集成 新潮社、一九八八年）。  
当該歌の題は「小鷹狩り」。「已上四首つらゆき」とある通り、一二〇一番歌から一二〇四番歌までの作者は貫  
之。すべて屏風歌。

一二〇五 かりにとてのべにぞきつるすゞむしのこゑはさやけきしるべなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】狩りをしようとして、野辺にやって来た。（私はほんの仮初めの気持ちで来たのだけれど）鈴虫の声は清らかに澄みとおつてはつきりとした道案内であつたよ。

【語句】○かりにとて 「狩りに」に「仮に」とを掛けた。一二〇二番歌参照。この掛詞と虫の声とが詠まれた例として、貫之の「かりに来る我とは知らで秋の野になく松虫の声を聞くかな」（貫之集・五四一）という歌がある。○すゞむし 鈴虫。現在の松虫の古称と言われる。狩りをする野辺の鈴虫の声を詠んだ例としては、「みかりする人やことなるはし鷹のとがへる野辺の鈴虫の声」（長能集・一七八）という歌がある。「鈴」は、鷹狩りに使う鷹につける鈴の意をも込めたか。「尾本繫小鈴、雖入茂林、鷹主慕其鈴音尋之」（雍州府志『古事類苑』。○さやけきしるべなりけり はつきりとしてよくわかる道案内であつた。「さやけき」は、鈴虫の声が清らかに澄みとおつていることと、明瞭な「しるべ」となっていることを表す。「しるべ」は道案内。手引き。虫の音を「しるべ」と詠んだ例として、「紅葉折る野辺の便りに来る人は松虫の音ぞしるべなりける」（元輔集・二四）という歌がある。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖・第六帖「すずむし」に、「かりにきて野辺にぞまどふ鈴虫の声はさやけきしるべなれども」（四〇〇一）という類似した表現の歌がある。

〔以上五首担当 長戸〕

のべ

そせい

なば

一二〇六 いざけふは春の山べにまじりなむくれ○なげのはなのかげかは

【異同】ナシ

【現代語訳】さあ今日は春の山辺に分け入ろう。暮れてしまったら無くなるような花の陰だろうか。いや夜を過ぎすのに立派な花の宿なのです。

【語句】◎のべ 野辺。野原。歌では春秋の野の花を連れ立つて見たり、楽しむ場として詠まれている。○まじりなむ 分け入ろう。○くれなげなげの 暮れてしまつたら無くなるような。「なげ」は形容動詞「なげなり」の語幹。いいかげんな。かりそめの。実体がなくなる。○はなのかげ 花の陰。花の下。花の宿。「今日のみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかげかは」（古今集・一三四）。

【所載】古今集・春下・九五／新撰和歌・五七／素性集Ⅰ・一三／素性集Ⅱ・二四／綺語抄・四四〇／奥儀抄・四四六／和歌色葉・二三一／西行上人談抄・三／近代秀歌・三一／詠歌大概・一一

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

一一二〇七 はるのゝあさぢがうへにおもふどちあそべるけふはわすられめやは

【異同】はるのゝ―春のゝの（桂・大）

【現代語訳】春の野の浅茅の上で、親しい者同士が遊山している今日のことは、忘れられようか、忘れられはしない。

【語句】○はるのゝ 春の野。底本は「の」を一字脱落させているので、桂宮本、大久保本の本文によつて訳す。○あさぢ 丈の低い茅萱。○おもふどち 親しい者同士。気のあつた者同士。○あそべる 遊山して過ごしている。「る」は完了の助動詞「り」の連体形で遊山して過ごしている状態が引き続き継続しているさま。○わすられめやは 忘れられようか。「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「やは」は反語。

【所載】玉葉集・雑二・一一〇六一／万葉集・一八八四（旧一八八〇）春日野之 浅茅之上尔 念共 遊今日 忘目八方 カスガノノアサヂガウヘニオモフダアソベケフワバワスラレメヤモ かすがののあさぢがうへにおもふどちあそぶけふのひわすらえめやも／夫木抄・一七〇〇

一一二〇八 はるがすみたつかすがのをたちかへりわれはあひみんいやとしのはに

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞の立ちこめる 春日野を繰り返し私は友と一緒に見よう。これからもずっと毎年。

【語句】○かすがの 春日野。大和国の歌枕。奈良市街東方の丘陵地。「飛火野」とも言う。○たちかへり 繰り返し。つくづく。「わが宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ」（古今集・一二二〇）。○あひ

みんな 相見ん。接頭語「あひ」は互いに、一緒に、の意を添える。一緒に見よう。互いに見よう。○いや いやよ。ますます。○としのはに 毎年。「年のはに春の来たらばかくしこそ梅をかざしてたのしく飲まめ」(万葉集・八三七(旧八三三))。

【所載】万葉集・一八八五(旧一八八二)春霞 立春日野平 往還 吾者相見 弥年之黄土 ハルカスミタツカスガノユキカヘリワレハアヒミミヤトシノハニ はるかすみたつかすがのをゆきかへりわれはあひみむいやとしのはに／人麿集Ⅲ・六三／赤人集Ⅰ・一七四(第五句欠)／家持集Ⅰ・四

一二〇九 はるのゝにこゝろやらむとおもふどちぢりしけふはくれずもあらなん

【異同】こゝろやらむと—こゝろやらへと(桂)

【現代語訳】春の野に気晴らしをしようとして親しい者同士が約束して出かけて来た今日は、暮れないであつてほしいものだ。

【語句】○こゝろやらむと 心を晴らそうと。気晴らしをしよう。○おもふどち 一二〇七番歌参照。

【所載】玉葉集・春上・一一五／万葉集・一八八六(旧一八八二)春野ル 意將述跡 念共 来之今日者 不晩毛荒粳 ハルノニココロヤラムトオモフドチキタリシケフハクレズモアラヌカ はるののにこころのべむとおもふどちこしけふのひはくれずもあらぬか／人麿集Ⅲ・六二／赤人集Ⅰ・一七五

### つらゆき

一二一〇 こゝにしてけふはくらさむ春のひのながきこゝろをおもふかぢりは

【異同】ナシ

【現代語訳】ここにいて今日は一日過ぎそう。この長い春の日のように、いつまでも心変りしない思いのうちは。【語句】○こゝにして ここにおいて。ここ。に」は格助詞。○春のひの 春の日の。「長き」を導く言葉。

「あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ」(古今集・六二四)。○ながきこゝろ いつまでも心変わりしない思い。

【所載】貫之集Ⅰ・三四

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木・林〕

一二二一 はるくればはなみむと思こころこそこのべのかすみとゝもにたちいづれ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来ると、花を見ようと思う心が野辺の霞とともにわき起こってくるのだ。

【語句】○はるくれば 春が来ると。已然形接続の「ば」には、①「……ので」の意を持ち、原因、理由を示すもの、②「常に」「いつも」という意を持ち、恒常的な関係を示すもの、③必然的な関係ではなく、「……したところ」と偶然的関係を示すもの、などがあり、あることがらに気づいた折の感動がうたわれる和歌では理屈や説明になることを嫌い、一般に③の用法で解されることが多いと思われるが、この場合は順接恒時条件か。いつも、という気持ちであろう。○はなみむと思 花を見ようと思う。「思」は連体形で、「思ふ」の「ふ」が無表記。○たちいづれ 「たちいづ」の已然形。「こそ」の係り結び。霞が立つ意に、心がそぞろわき起こる意を掛ける。

【所載】後撰集・春下・一二二／新撰万葉集・二五一／寛平御時后宮歌合・一二／袋草紙・六一八／八雲御抄・七六

一二二二 あだにこそこのべのはなみにわがこしかなが／＼しひをくらしつるかを<sup>な</sup>

【異同】わかこしか―わかこしは（桂）

【現代語訳】ほんの気まぐれで野辺の花を見に私はやってきたのだったが、花の美しさに酔いしれ、長い長い一日をそこで暮らしてしまったことだ。

【語句】○あだにこそ 「あだ」は実のないこと。はかないさま。浮気なこと。心から野辺の花をめぐるつもりではなく、漫然と野辺の花を見に来たことをいう。「あだにこそ散ると見らめ君にみなうつろひにたる花の心を」（後撰集・五四一）。○わがこしか わが来しか。私はやってきたのだけれど。「こしか」は、力変動詞「来」の未然形に回想の助動詞「き」の已然形がついた形。「こそ」の係り結び。逆接的に「……だが」「……けれど」の意となる用法。

【所載】ナシ



一二二三 のべにいでゝみるともはなのさかざらばなにゝこゝろをなぐさめてこむ

【異同】ナシ

【現代語訳】野辺に出て見まわしてみても、もし花が咲いていなかったら、何によって心を慰めてこようか。

【語句】○みるもとはなのさかざらば たとえ見るにしても花が咲かなかったら。「とも」は逆接仮定条件、「ば」は未然形接続で順接仮定条件。「たとえ……しても、もし……だったら」の意で、すべて仮定。

【所載】ナシ

一二二四 おもふどち春の山べにうちむれてそこもしらぬたびねしてしか

【異同】たひねしてしか―たひねしけしか(御)

【現代語訳】心の通じ合っている者同士、春の山辺にうち群れて、どこでもいい、興の趣くまま、旅寝をしたものだ。

【語句】○おもふどち 心の通い合う者同士。「春の野に心のべむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか」(万葉集・一八八六(旧一八八二))。○そこもしらぬ そこが具体的にどこということもわからない。興の至ったところで、の意。指示代名詞の「そ」に打消が伴った形は、あるもの、ある事柄が、具体的に……でない、という意を表す。「山のかひそことも見えずをとつひも昨日も今日も雪の降れば」(万葉集・三九四六(旧三九二四))、「寂しさはその色としもなかりけり横立つ山の秋の夕暮れ」(新古今集・秋上・三六一)。○たびねしてしか 旅寝をしたいものだ。「てしか」は願望を表す終助詞。

【所載】古今集・春下・一二六／素性集Ⅰ・一七／素性集Ⅱ・九／素性集Ⅲ・三二

一二二五 もゝくさのはなのひもとく秋のゝにおもひみだれん人などがめそ

【異同】ナシ

【現代語訳】さまざまな花の咲きはじめる秋の野で、花と親しみ、われとわが心をなくしてしまおうでしょう。人よ、そんな私を咎めないでください。

【語句】○もくさの 多くの種類の。無数の。○ひもとく 本来は「紐解く」で、万葉の昔から下裳の紐を解き、異性と会う意に用いられてきた。ここでは花の蕾がほころぶ意。女性が男性に心を許して下紐を解く気持も籠める。「夕露に紐解く花はたまぼこのたよに見えし縁にこそありけれ」（源氏物語・夕顔）。○おもひみだれん 「思ひ乱る」は常軌を逸して取り乱すこと。「ん」は推量の助動詞で、ここは連体形ではなく終止形であろう。四句切れ。○人ながめそ 人よ、咎めるな。「人」は呼びかけ。「な……そ」は禁止をあらわす。

【所載】古今集・秋上・二四六／小町集Ⅰ・四三

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一二二六 あきのくはみちもゆかれずともすればはなのあたりにめのみとまりて

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野は、道を進むこともままなりません。どうかすると、花のあたりに目ばかりとまってしまつて。

【語句】○ともすれば ややもすると。どうかすると。「思ふとはいふものからにともすればわする草の花にやはあらぬ」（後撰集・五五二）。○めのみとまりて 目ばかりが奪われて。「とまる」は「ゆく」の対比。

【所載】ナシ

一二二七 みや人のかずはしりにきをみなへしいづことくはぐいかぐこたへん

【異同】ナシ

【現代語訳】宮人の数は知っていました。女郎花が、（来なかった宮人は）どこかと聞いたならば、何と答えたら良いのでしょうか。

【語句】○みや人 宮仕えをする人。官人。参考欄の躬恒集の詞書によると、共に行く約束した人。○をみなへし 秋の七草の一つ。山野に自生し、黄色い花を傘状につける。歌では、女性をたとえることが多い。○いづことくはぐ どこと聞いたら。

【所載】躬恒集Ⅳ・一八七／躬恒集Ⅴ・二九〇

【参考】躬恒集Ⅳには「おなじ年の九月廿八日殿上の人々ちぎりて、いはて山のほとりに行きて遊ばんなどちぎ

る、人々うこの少将（三字分空白）少将（七字分空白）その日になりておの／＼さはりありてきたらず、二首の歌をつかひに付けておくる」との詞書で、一八六番歌「いつしかと待つしるしなき紅葉ばのおのが散り／＼散りやしなまし」に続き当該歌がみえる。

一二二八 かりにとてくべかりけりや秋のゝのはなみるほどに日はくれにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】狩りにといて、かりそめに來るべきだったのでしようか、いや、そうすべきではありませんでした。秋の野の花を見るうちに日は暮れてしまいましたよ。

【語句】○かりに 「仮に」（一時的な間に合わせ）と「狩に」とを掛ける。「かりにとて我はきつれどをみなへし見るに心ぞ思ひつきぬる」（拾遺集・一六五・貫之）。○日はくれにけり 日は暮れてしまったよ。

【所載】拾遺集・秋・一六三

一二二九 もみぢみに君にをくれてひねもすにおもはぬ山をおもひつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】紅葉の見物であなたと一緒にに行けずに後に残り、一日中、思いもよらなかった山を思ったことです。

【語句】○君にをくれて 君におくれて。「おくる」はとどまる、後に残るの意。○ひねもすに 一日中。○おもはぬ山をおもひつるかな 「おもはぬ山」は、今までに思いもよらなかった山。「思はぬ山を思ふ」は世を逃れて出家したい意にもつながるか。「身を捨てゝ心のひとりたづぬれば思はぬ山も思ひやるかな」（一条撰政御集・一八四）。

【所載】ナシ

一二三〇 かぎりなくわがおもふ人のゆくのはいろやちらさめはなぞさきける

【異同】ナシ

【現代語訳】私が限りなく思う人の行く野辺は、色を散り散りにしたのだろうか、（色とりどりの美しい）花が

咲いたことですよ。

【語句】○かぎりなくわがおもふ人 限りなく私が敬慕する人。所載欄の貫之集の詞書によると、この歌は藤原清貫の六十賀に際して、清貫女の依頼で詠まれたもの。○いろやちらさめ 色を散り散りにしたのだろうか。係助詞「や」は連体形と結ぶので「ちらさめ」は文法的好かしい。所載欄貫之集の「色やちぐさに」の方が整合性がある。

【所載】貫之集Ⅰ・一八一

【参考】元輔集Ⅰ・二三に「限なくわが思ふ人の行末は稲や千種に花ぞ散りける」という類歌がみられる。

〔以上五首担当 三浦〕

一一二二 秋かぜはすゞしくなりぬこまなべていざのにゆかんはぎのはなみ<sup>に</sup>は

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風は涼しくなった。馬を並べてさあ野に行こう。萩の花を見に。

【語句】○こまなべて 馬を並べて。「こまなべてめもはるのにまじりなんわかなつみつる人もありやと」(古今六帖・一一三七)。○はぎのはな 萩の花。秋風が吹き始めると咲き始める秋の景物。万葉集では露と共に詠まれることが多い。「秋風のひにけにふけば露をおもみ萩のしたばはいろづきにけり」(万葉集・二二〇八(旧二二〇四))。

【所載】新拾遺集・秋上・三五六／万葉集・二一〇七(旧二二〇三) 秋風 冷成奴 馬並而 去来於野行奈 芽子花見尔 アキカゼハスズシクナリヌウマナメテイザノニユカナハギノハナミニ あきかぜはすゞしくなりぬうまなめていざのにゆかなはぎのはなみに／新撰朗詠集・二七〇／人麿集Ⅱ・六一

山のうへのおくら

一二三二 秋のゝにさきたるはなをてをゝりてかきかぞふればなゝくさのはな

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に咲いている花を指折り数えてみると、それは七種の花だよ。

【語句】○てをゝりて 指を折って。「手を折る」は指折り数える動作。「手を折りてあひ見しことをかぞふれば

十といひつつ四つは経にけり」(伊勢物語・一六段・二四)。○かきかぞふれば 数えてみると。「かき」は接頭語。「かきかぞふ ふたがみやまに かむさびて たてるつがのき もともえも……」(万葉集・四〇三〇(旧四〇六))。○ななくさのはな 七種の草花。春の七草と秋の七草とがあるが、この場合は秋。万葉集一五四二(旧一五三八)によると、萩・尾花・葛・撫子・女郎花・藤袴・朝顔のこと。一二三番歌参照。

【所載】万葉集・一五四一(旧一五三七) 秋野尔 咲有花乎 指折 可伎数者 七種花 アキノノニサキタルハナヲテヲリテカキカゾフレバナナクサノハナ あきののにさきたるはなをおよびおりかきかぞふればななくさのはな/夫木抄・四五三九/袖中抄・五四五

【参考】作者名「山のうへのおくら」は所載欄の文献に一致する。

一二三三 はぎのはなおばななくでしこをみなへし又ふぢばかまあさがほのはな

【異同】ナシ

【現代語訳】萩の花、尾花、などでしこ、女郎花、それに藤袴、朝顔の花。

【語句】○はぎのはな 萩・芽子の花。マメ科の落葉低木で、秋に紅紫色または白色の花を咲かせる。秋の野の華やかさは「秋の野の萩のにしきは女郎花たちまじりつつをれるなりけり」(貫之集I・四五四)などにみられる。○おばな をばな。ススキの花穂。「さを鹿の入野のすすき初尾花いづれの時か妹がてまかむ」(万葉集・二二八(旧二二七七))。○などでしこ 瞿麦・石竹・撫子。多年草で七月十月に茎の先に淡紅色の花が咲く。平安期には「常夏」という異名と共に夏の景物として詠まれることも多いが、万葉集では「野辺見ればなでしこの花咲きにけりわが待つ秋は近づくらしも」(一九七六(旧一九七二))のように秋の景物という認識が高い。○ふぢばかま 藤袴。キク科の多年草。秋に淡紫色の花をつける。茎や葉に香気がある。古今集以後の用例が多い。「ぬし知らぬ香こそほへれ秋の野に誰がぬぎかけしふぢばかまぞも」(古今集・二四一)。○あさがほ 植物の名ではあるが、一種に特定し難い。「朝顔は朝露おひて咲くといへど夕かげにこそ咲きまさりけれ」(万葉集・二一〇八(旧二一〇四))のように夕暮れにも咲くので、万葉の時代には現代の朝顔とは別の、秋を代表する植物であったか。また、新撰字鏡に「桔梗……加良久波又云阿佐加保」や「桔梗……阿佐加保又云岡止、支」とあり、「あさがほ」は平安初期以前に桔梗の異名であったらしい。

【所載】万葉集・一五四二(旧一五三八) 芽之花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又藤袴 朝貌之花 ハギノハナヲバナクズハナナデシコノハナヲミナヘシマタフヂバカマアサガホノハナ はぎのはなをばなくずはななでし

このはなをみなへしまたふぢばかまあさがほのはな  
 【参考】当該歌は秋の七草を詠んでいるが、六種しか詠まれていない。所載欄の万葉集歌より「葛花」が欠けた形になっている。万葉集では山上憶良を作者とする。

みゆき

一二三四 ふるさとはよしのゝ山しちかければひとひもみゆきふらぬ日はなし

【異同】ナシ

【現代語訳】故郷は吉野の山が近いので、一日として雪の降らない日はない。

【語釈】◎みゆき み雪。雪の美称。また御行（みゆき）のこと。天皇や上皇が皇居を出て他所へ行くこと。天皇の場合には「行幸」とも書く。一二五番歌から一二三番歌までは御幸について詠まれている。○ふるさと 昔のなじみの土地。古い都を指すこともあるがここは前者。「み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり」（古今集・三三五）。

【所載】古今集・冬・三三二／新撰和歌・一三二／俊頼髓脳・五〇／近代秀歌・五三／詠歌大概・六一／桐火桶・一一九

一二三五 たまつしまいりえのこまつおいにけりふるきみやこのことやとはまし

【異同】ふるきみやこの―ふるきみゆきの（大）

【現代語訳】玉津島の入江の小松は年老いてしまった。古い行幸のことをできることなら尋ねるのだが。

【語句】○たまつしま 紀伊国の歌枕。和歌山市和歌浦にある玉津島神社周辺の地。現在は陸続きだが、古くは島が点在していたらしい。続日本紀などによると、神亀元（七二四）年十月の聖武天皇の行幸を初めとし、称徳天皇の天平神護元（七六三）年十月、桓武天皇の延暦二三（八〇四）年十月に玉津島行幸があった。○いりえのこまつ 入江にある小松。古今六帖・一六六五に「玉津島入江の小松人ならばいくよか経しとはましものを」とあり、玉津島の入江と松という景観が窺える。○ふるきみやこの 当該歌は「みゆき」題の中の一首であるので、大久保本「ふるきみゆきの」の本文に拠って解した。昔あった行幸の。聖武天皇を初めとした玉津島行幸のことを指すか。○ことやとはまし（できることなら）……（ことを尋ねるのだが。「や……まし」はためらいの

気持ちを表す。「秋ののに道もまどひぬ松虫のこゑする方にやどやからまし」（古今集・二〇二）。

【所載】 夫木抄・一〇四七八

【参考】 是則集には「このかはの入江の松は老いにけり古きみゆきのことやとはまし」（四二）という類歌がある。

〔以上五首担当 橋本・尾高〕

うみのうへ<sup>上</sup>の女わう

一二二六 あづさゆみつまつくよとのとほにも君がみゆきをきくがうれしさ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 梓弓を弾き鳴らす音が夜中遠くから聞こえるように、はるかにでも大君がお出ましなるということを聞くのは嬉しいございます。

【語句】 ○あづさゆみつまつくよとの 「つまつく」では歌意不通、所載欄の万葉集「つまびく」に拠り解す。

「よと」は「よおと（夜音）」の縮まった表現。「梓弓つまびく夜音」とは、夜中に禁中警護の衛士が弓弦を引き鳴らす音、邪気などを退散させる鳴弦の音のこと。大伴家持の長歌「……梓弓 爪びく夜音の とほおにも聞けば悲しみ……」（万葉集・四二三八（旧四二二四））にも同じ表現が見える。上三句は「とほと」を導く序詞。○とほと 「とほおと（遠音）」の約。遠くから聞こえる音。遠くからの知らせ。「とほおとにも君が嘆くと聞きつれば音のみし泣かゆあひ思ふ我は」（四二三九（旧四二二五））。○みゆき 天皇や上皇のお出まし一般を指す。○きくがうれしさ 聞くのが嬉しいことだ。「いとどしくこゑうきものを都鳥関のこなたに聞くが嬉しさ」（宇津保物語・三七五）。

【所載】 万葉集・五三四（旧五三二） 梓弓 爪引夜音之 遠音尔毛 君之御幸乎 聞之好毛 アツサユミツマビクヨトノトホトニモキミガミユキヲキクハシヨシモ あづさゆみつまびくよとのとほにもきみがみゆきをきかくしよしも

【参考】 作者名「うみの上女わう」は、海上女王（うなかみのおおきみ）のことで、所載欄の万葉集に「志貴皇子之女也」とある。

左大臣たちばなのあそむ

一二二七 むぐらはふいやしきやどもおほきみのみゆきとしらばたましかましを

【異同】ナシ

【現代語訳】葎の生えるような卑しい家も、大君をお迎えすると知っていたならば、玉を敷き詰めましたものを。

【語句】○むぐらはふ 葎のおい茂る。自分の家を謙遜した表現。「むぐらふ」とも。「むぐらはふ下にも年はへぬる身の何かは玉のうてなをもみむ」(竹取物語・一三)。○おほきみのみゆき 天皇のお出まし。所載欄の続後拾遺集や万葉集は「おほきみのまさむ」、古今六帖「おほ君のこむ」。○たましかましものを 玉を敷きつめておきましたのに。「たま」は、美しい宝石や宝玉の総称。貴人の訪問に準備が不十分であったことを詫げる表現。同じ橘諸兄が元明上皇難波宮御幸に詠んだ歌に「堀江には玉敷かましを大君を御船漕がむとかねて知りせば」(万葉集・四〇八〇(旧四〇五六))。

【所載】古今六帖・第六帖「むぐら」三八七〇／続後拾遺集・雑中・一〇九七／万葉集・四二九四(旧四二七〇)

牟具良波布 伊也之伎屋戸母 大皇之 座牟等知者 玉之可麻思乎 ムグラハファイヤシキヤドモオホキミノマサムトシラバタマシカマシヲ むぐらはふいやしきやどもおほきみのまさむとしらばたましかましを

【参考】作者名「左大臣たちばなのあそむ」は、橘諸兄で、所載欄の文献に一致する。諸兄(天武十三(六八四)年～天平勝宝九(七五七)年)が左大臣に任ぜられたのは、聖武朝の天平十五(七四三)年。なお、所載欄の万葉集によれば、聖武上皇が天平勝宝四(七五二)年十一月八日に左大臣橘諸兄宅を訪れた折の、「肆宴歌四首」のうちの一首。

一二二八 松かぜのきよきかはべにたましかば君きまさむかきよきかはべに

右大弁 やつか山

【異同】松かせの―松かけの(御・桂・大)

【現代語訳】松の木陰の、清らかな河辺に玉を敷いたならば、君はまたおいでくださるでしょうか、この清らかな河辺に。

【語句】○松かぜの 底本は「松かぜの」だが、他本や所載欄の「松かけの」に拠って現代語訳した。○きよきかはべに 「きよし」は、汚れない清らかなさま。万葉集や平安時代の和歌には、「きよきかはら」「きよきかはせ」なら見えるが、「きよきかはへ(べ)」と続く歌は見えない。夫木抄の「神風のきよき川べにみそぎしてちと



せの秋のはじめをぞまつ」(三七九三)という寛喜元(一二二九)年女御入内屏風歌が早い例か。所載欄の万葉集「きよきはまへ」なら、一二二七番歌と同じく橘諸兄邸での歌なので、庭の池を海に見立てて賞賛した表現となり、他例も見える。○たましかば 玉を敷いたなら。一二二七番歌参照。○君きまさむか 「まさ」は尊敬の意を表す「ます」の未然形、「む」は推量、「か」は疑問の意。○きよきはまへに 二句と五句とで同じ表現を繰り返すのは、古代の歌謡によく見られるとの指摘がある。

【所載】万葉集・四二九五(旧四二七一) 松影乃 清浜辺尔 玉敷者 君伎麻佐牟可 清浜辺尔 マツカゲノキヨキハマヘニタマシカバキミキマサムカキヨキハマヘニ まつかげのきよきはまへにたましかばきよきまさむかきよきはまへに／夫木抄・一五三三

【参考】作者名「右大弁やつか山」は、所載欄の万葉集に「右一首右大弁藤原八束朝臣」とあり、八束であることは確かだが、「山」が不審。八束(靈龜元(七二五)年(天平神護二(七六六)年)は、藤原房前息、後に真楯と改名。極官は大納言。なお、所載欄の万葉集によれば、当該歌は、一二二七番歌と同じ折に詠まれた歌で、古今六帖では連番で採ったことになる。

一二二九 しらさきにみゆきかくあらばおほぶねのまかぢしらなみ又かへりこむ<sup>にゲヌキ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】白崎にまた行幸がこのようにあつたなら、大船を仕立てて、左右の櫓を使って、白波が返るように再び帰ってこよう。

【語句】○しらさきに 「しらさき(白崎)」は、和歌山県日高郡由良町にある岬。石灰岩から成る山が海岸線に目立つ。なお、所載欄の万葉集漢字表記は「白埼者」とあり、「……に」の読みは出てこないが、第二句の表現と関わっているよう。○みゆきかくあらば 行幸がこのようにあつたなら。所載欄の綺語抄「さちありとまて」。

○まかぢ 真梶。左右揃った櫓。○しらなみ 「白崎」「白波」と繰り返す。傍記「ゲヌキ」とある。「まかぢしげぬき」(左右そろった櫓を隙間のないようにたくさん取り付けて、の意は、歌では中世期以降にのみ見える。○又かへりこん 「かへり」は波の縁語。波が返ると自分が帰るのを掛ける。

【所載】万葉集・一六七二(旧一六六八) 白埼者 幸在待 大船尔 真梶繁貴 又将顧 シラサキハサキクアリマテオホブネニマカヂシジヌキマタカヘリミム しらさきはさきくありまておほぶねにまかぢしじぬきまたかへりみむ／綺語抄・五六四

【参考】所載欄の万葉集によれば、大宝元(七〇一)年十月持統上皇と文武天皇が紀伊国牟呂(むろ)の湯に行幸した折の一首。

一二三〇 おほきみのみゆきのまにはわぎもこがたまくらまかず月ぞへにける

【異同】ナシ

【現代語訳】 おおきみの行幸の間には(供奉しているので)、我が妻の手枕をしないで、月を経てしまったことだ。

【語句】○みゆきのまには みゆきのあいだは。行幸の期間中は。「まには」は、和歌には例がなく、所載欄の文献「まにま」(……にまかせて、……まに)の方が自然な詠みぶり。○たまくらまかず 手枕まかず。手枕をしないで。「手枕まく」は、相手の腕を枕にして寝ること、共寝をすること。

【所載】万葉集・一〇三六(旧一〇三二)天皇之 行幸之随 吾妹子之 手枕不卷 月曾歴去家留 スメロキノ ミユキノ マニマワギモコガタマクラマカズツキゾヘニケル おほきみのみゆきのまにまわぎもこがたまくらまかずつきぞへにける／夫木抄・一六四八八

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集によれば、大伴家持が狭残(ささ)の行宮(かりみや)で詠んだ歌。

〔以上五首担当 杉本・加藤〕

にわじせりかはに行幸し給時ニ

ゆきひらの中納言

チヨノ

一二三一 さがの山みゆきふりにしせりかはのべのふるみちあととありけり

【異同】ナシ

【現代語訳】 いにしえの嵯峨天皇の行幸から時が経ってしまったが、野辺の古道は今なお失せることがなく、跡が残っていることだ。

【語句】○にわじせりかはに行幸し給時ニ 詞書の形で入れられている、古今六帖では例外的な形。光孝天皇が芹川に行幸された時、の意。「にわじ」は仁和寺。仁和寺は、仁和二(八八六)年光孝天皇の勅願により着工され、子の宇多天皇の仁和四(八九〇)年に完成した寺。現在の京都市左京区にある。ここでの「にわじ」は光

孝天皇のこと。光孝天皇の芹川行幸は仁和二（八六六）年十二月十四日のこと。○ゆきひらの中納言 在原行平のこと。弘仁九（八一八）年生、寛平五（八九三）年没。平城天皇皇子である阿保親王の子。在原業平の異母兄。○さかの山 嵯峨天皇の御代をいう。○みゆきふりにし 嵯峨天皇の行幸からすっかり時が経ってしまつた。嵯峨朝では遊獵行幸が盛んであつた。○せりかは 芹川。山城国紀伊郡にあつた川。周辺一帯は平安時代初期からの遊獵地で、古くから行幸が多くあつた。○のべのふるみちあととはありけり 野辺の古道は今もなお跡が残っている。清和・陽明朝で絶えていた芹川出遊が光孝朝で復活したので、昔の遺風が残っていると言つたもの。

【所載】後撰集・雜一・一〇七五／時代不同歌合・二九／秀歌大体・一〇八／和歌初学抄・一九六／袖中抄・二四二／古来風体抄・三三三／近代秀歌・一〇二

【参考】作者名「ゆきひらの中納言」は所載欄の文献に一致する。

一二三二 さゝなみのしがのからさきみゆきしておほ宮人のふなよそひせり

【異同】ナシ

【現代語訳】志賀の唐崎に行幸があり、大宮人たちは出船の準備をしている。

【語句】○さゝなみの 「志賀」、「近江」、「大津」など琵琶湖周辺の地名に掛かる枕詞。○しがのからさき 志賀の唐崎（幸崎）。現在の滋賀県大津市、琵琶湖岸にあり近江八景の一つ。志賀には天智天皇の時代に大津宮が置かれていた。○ふなよそひ 出船の準備。「おしるや難波の津ゆり船よそひ我は漕ぎぬと妹に告ぎこそ」（万葉集・四三八九（旧四三六五））。

【所載】ナシ

【参考】この歌と上二句が同じものに、「ささなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」（万葉集・三〇）がある。

みやこ

一二三三 おほきみは神にしませば水とりのすだくみぬまをみやこになしつ

大ともの大納言やす丸

【異同】 神にしませは―神なしませは（御） すたくみぬまを―すたくみぬまの（桂）

【現代語訳】 大王は神であられるので、水鳥が集まる水沼を都に造営なさった。

【語句】 ◎みやこ 皇居のある所、天皇のいる所。和歌では旧都を詠む場合や、都の外にいて都を懐かしむ場合などがある。○大ともの大納言やす丸 大伴宿禰安麿。天武朝から元明朝の頃の官人。慶雲二（七〇五）年に大納言に任ぜられ、和銅七（七二四）年に没した。○すたくみぬま 集く水沼。「すたく」は集まる、群がるの意。「葦鴨のすたく池水溢（あぶ） るともまけ溝（みぞ）の方（へ）に我越えめやも」（万葉集・二八四四（旧二八三三））。

【所載】 万葉集・四二八五（旧四二六一） 大王者 神尔之座者 水鳥乃 須太久水奴麻乎 皇都常成通 才オキミハカミニシマセバミヅトリノスダクミヌマヲミヤコトナシツ おほきみはかみにしませばみづとりのすたくみぬまをみやことなしつ／夫木抄・一一三五二／綺語抄・五九一

【参考】 作者名「大ともの大納言やす丸」は、所載欄の万葉集に一致する。夫木抄はよみ人知らず、綺語抄は作者記載なし。

一二三四 いその神ふりにしならのみやこにもいろはかはらずはなさきにけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 古びた奈良の都にも、昔と変わることなく美しい花が咲くのだった。

【語句】 ○いその神 いそのかみ。現在の奈良県天理市石上地方をいう。同所の小地名「布留」にかかる枕詞。○ふりにしならのみやこ 古くなった奈良の都。平城京のこと。「古りにし」に地名「布留」を掛けた。○いろはかはらずはなさきにけり 色は昔と変わることなく花が咲いている。懐旧の情を述べたもの。

【所載】 ナシ

【参考】 類似した歌に「古里となりにし奈良の都にも色は変はらず花咲きにけり」（古今集・九〇）がある。

一二三五 みわたせばやなぎさくらをこきまぜてみやこぞはるのにしきなりける  
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】見渡してみると、柳を桜を混ぜ合わせて、都こそ一面の美しい織物、春の錦であったよ。

【語句】○こきまぜて 「こき」は動詞の上につき、その動作の意味を強める接頭語。混ぜ合わせて。「春なれば梅に桜をこきまぜてながすみなせの川のかぞする」(紀師匠曲水宴和歌・二二)。○はるのにしき 春の錦。柳の緑と桜の花とが混じり合っている景観を錦と喻えた。

【所載】古今集・春上・五六／新撰和歌・五一／和漢朗詠集・六三〇／素性集Ⅰ・九／素性集Ⅱ・八／素性集Ⅲ・三一／三十人撰・五二／三十六人撰・五五／綺語抄・七三七／古来風体抄・二二三

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野・吉田優子〕

一二三六 山かくすかすみぞはるはうらめしきい〇れ宮このさかひなるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】山を隠す霞の仕打ちが、春には恨めしいものです。いったいどこが都なのでしょいか。

【語句】○いづれ宮この いづれ都の。「いづれ」は指示代名詞の不定称。多数の物事や広範囲の中から、不特定の一つを指している。どれ、どこ。「霞たつみねやいづれぞたづねむ花の遠目をまぎらはすかな」(惠慶集・三〇〇)。○さかひなるらむ 「さかひ」は境。境界や境目をいう場合と、土地や場所をいう場合がある。古今集における諸注釈を見ても、その解釈には両説あるが、ここでは後者と解した。「思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢ぢにあふ人のなき」(古今集・五二四)。

【所載】古今集・羈旅・四一三

一二三七 ふぢなみのはなはさかりになりにけりならのみやこを思ほゆはきみ

おほとものよつな サバキミ

【異同】おほとものよつな—おほとものよへな(御・大)

【現代語訳】藤の花は満開となったことだよ。奈良の都をお思いになりますか、あなた様は。

【語句】○ふぢなみの 「ふぢなみ」は藤の花のこと。花房が風に揺れるのを波に見立てた表現。○思ほゆはきみ 「思ほゆ」はヤ行下二段活用動詞。「おもはゆ」の転。おのずと思われてくること。他人の心情についてい

う例はみえない。傍記は「思ほさば君」で、「お思いになるならば、あなた」と解せるが、上三句と意がつかない。所載欄の万葉集では「思ほすや君」、家持集では「思ひ出つや君」。ここでは万葉集に従って解した。

【所載】万葉集・三三三(旧三三〇) 藤浪之 花者盛尔 成来 平城京乎 御念八君 フヂナミノハナハサカリニナリニケリナラノミヤコヲオモホスヤキミ ふちなみのはなはさかりになりけりならのみやこをおもほすやきみ／夫木抄・二一〇一／家持集Ⅰ・四四／家持集Ⅱ・四五／袋草紙・三四六

【参考】作者名「おほとものよつな」は所載欄の万葉集「防人司佑大伴四綱」に一致する。この歌に続いて「帥大伴卿歌五首」と題する歌が並ぶことから、万葉集歌における「君」は大伴旅人を指すものとみられる。

一二三八 いつしかもみやこにゆきてたけくまのまつをみつとも人にかたらむ

【異同】まつをみつ—松は見き(大)

【現代語訳】いつか早く都に行つて、(あの有名な)武隈の松を見た人と人に語りたいものです。

【語句】○いつしかも 「いつしか」は、これから起こる事態を待ち望む意。早く。「も」は強意の係助詞。「いづしかもこの夜の明けむうぐひすのこづたひちらす梅の花見む」(万葉集・一八七七(旧一八七三))。○たけくまのまつ 武隈の松。陸奥国の歌枕。宮城県岩沼市。「栽ふし時契りやしけん武隈の松をふたたびあひみつるかな」(後撰集・一二四一)の詞書の影響から、枯れたあと植えかえられて存在し続ける松というイメージが定着した。また、「武隈のはなはの松は親も子もならべて秋のかぜはふかなん」(宇津保物語・六五五)にみえるように相生の松として認識されており、二木(ふたき)であることから、「見き(三木)」と対応させて詠むようになった。当該歌でも傍記や大久保本の「まつはみき」をとると、「二木」なのに「三木(見き)」と語っておもしろさが生きる。当該歌の影響を受けたとみられるものに「武隈の松はふたきをみやこ人いかがととはばみきとこたへむ」(後拾遺集・一〇四二)がある。

【所載】ナシ

一二三九 みやこ人いかにとゝはゞやまたかみはなぬくもゐにわぶとこたへよ

【異同】ナシ

【現代語訳】都の人が、私のことをどうしているかと問うたならば、山が高いために雲も心も晴れることのない

遠い地で、つらい思いをしていると答えてください。

【語句】○はれぬくもゐに 雲の晴れることのない遠い地で。「晴る」は、雲が晴れる意と、心が晴れる意の掛詞。ここでの「雲居」は、雲が留まり続ける様子と、都の人にとって遠い空の果てであることを表す。「ふるさとをかすみへだててよしの山はれぬくもゐにとほさかるらん」(重之子僧集・一〇)。○わぶとこたへよ つらい思いをしていると答えてください。「わぶ」は、つらさを嘆くこと。「わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ」(古今集・九六二)。

【所載】古今集・雑下・九三七／新撰和歌・三四七／伊勢物語・二三四

一二四〇 みやこぢをとほみやいもがたのころはうけひてぬれどゆめにみえこぬ<sup>キミ一本こ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】都までの道が遠いからだろうか。この頃は神に誓いを立てて寝るけれど、いとしいあなたが、夢にも出てこない。

【語句】○みやこぢ 都へ行く道。○とほみやいもが 遠いからだろうか、いとしいあなたが。「とほみ」は、遠いので、の意。「みちとほみゆきてはみねどさくら花こころをやりて今日はくらしつ」(後拾遺集・九七)。「や」は疑問。○うけひてぬれど 誓いを立てて寝るけれど。「うけふ」は神に誓うことによつて吉凶・成否を占うこと。誓約。「あひ思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひてぬれど」(万葉集・二五九四(旧二五八九))。

【所載】万葉集・七七〇(旧七六七) 都路乎 遠哉妹之 比来者 得飼飯而雖宿 夢尔所見来 ミヤコヂヲトホクヤイモガコノコロハウケヒテヌレドユメニミエコヌ みやこぢをとほみかいもがこのころはうけひてぬれどいめにみえこぬ／袖中抄・一〇一四

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

一二四一 わたつみはみやこゝぞりていにけらしよをうち山の神もみなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】海の神々は、都を挙げて一人残らず立ち去ってしまったらしい。世を憂しとする宇治山の神も見えないのに。

【語句】○わたつみ 海の神々。第二句に「こぞりて」とあるから複数と見る。○ゝ(こ)ぞりて 挙りて。一人残らず。だれもかれも。○いにけらし 立ち去ってしまったらしい。「往ぬ」の連用形に「けるらし」の転化した「けらし」がついた形。○よをうち山の神 「うち山(宇治山)」の「う」に「憂」を掛ける。「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」(古今集・九八三)をもとに発想された語か。わたつみが立ち去るとあるから、「よをうち山(やま)」に「世をうち止む」の意を物名として潜ませ、「世をうち止む、宇治山の神」とした可能性も考えられる。宇治山の神が世をうち止む恐ろしい神であるとする例はないが、「宇治山」を詠み込んだ物名歌「わたつみの波うちやまば浜にいでてひろひををらむ恋忘れ貝」(躬恒集・三四)に、「わたつみの波」が「うちやむ(打ち止む)」とした例がみられる。

【所載】ナシ

【参考】どのような状況で詠まれたか不明。歌意をとりにくいが、「海の神」と「山の神」を対比させ、「海の神」が「宇治山の神」を恐れ、皆で逃げ出したという構図。「わたつみ」に「たつみ」を潜ませ、「みやこ」という語が使われていることを考えると、語句欄に挙げた喜撰歌の言葉を組み替えたアナグラムの歌で、誹諧歌、物名歌の系列に属するとみることが出来る。

一二四二 けにし身に又もけぬべしはるがすみかすめるかたをみやことおもへば  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】一度(人間界から)消えてしまった我が身に、再び消え失せそうな思いがある。春霞にかすむ彼方が(帝のいらつしやる)都だと思うと。

【語句】○けにし身に 消えて(死んで) しまった身に。「けにし」は下二段「消(く)」の連用形「け」+完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」+過去の助動詞「き」の連体形「し」。伊勢集I(西本願寺本)では、「きえし身に」となっている。○又もけぬべし もう一度消え果てて(死んで) しまいそうになる。「おとにのみきくの白露夜はおきて昼は思ひにあへずけぬべし」(古今集・四七〇)。上二句は下三句と倒置され、自らの消え果ててしまいたい思いを強調する。

【所載】伊勢集I・五九/伊勢集II・六二/伊勢集III・五八

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集Iには、宇多天皇が「長恨歌」の屏風を描かせ、



歌を作らせた時、伊勢が玄宗皇帝の立場と楊貴妃の立場で五首ずつ詠んだ歌の中の一首で、楊貴妃の立場に立ったものである。「長恨歌」における「頭を回して下のかた人寰を望む処 長安を見ずして塵霧を見る（死後、仙山に住んでいる楊貴妃が、彼女を訪ねあてた方士に、帝の恩愛を感謝して語るところ）」という詩句に相当するが、当該歌の上二句は、詩の内容を膨らませて、楊貴妃の帝に対する思慕の情を歌うものとなっている。

一二四三 あをによしならのみやこはさくらばなのほひのごとくいまさかりなり  
大ざいのそち をのゝ

【異同】 さくらはなの―さくらはな（桂）

【現代語訳】 奈良の都は、桜花が咲き誇るはなやかな美しさに似て、今真つ盛りでありますよ。

【語句】 ○あをによし 奈良にかかる枕詞。奈良坂の辺で青土（あをに）を産したことによるという。○ならのみやこ 平城京。○さくらばな 桜花。所載欄の万葉集では「さくはなの」。奈良の都の美しさ、はなやかさの比喩。○にほひのごとく 「にほひ」は本来赤い色が外に発散する意で、つややか、華やかな色の美しさを表し、後に嗅覚にも転用される。所載欄の万葉集では「にほふがごとく」（西本願寺本の訓）、「にほへるがごとく」（現代訓）。

【所載】 万葉集・三三一（旧三二八） 青丹吉 寧楽乃京師者 咲花乃 薰如 今盛有 アヲニヨシナラノミヤコハサクハナノニホフガゴトクイマサカリナリ あをによしならのみやこはさくはなのほへるがごとくいまさかりなり

【参考】 作者名「大ざいのそち をのゝ」は、万葉集では「大宰少弐小野老朝臣」の作となっている。「大ざいのそち をのゝ」は「大宰帥 小野の」。「大ざいのそち」は、「をのゝ」に冠せられた官職名と思われるが不審。大宰帥はこの歌が詠まれた邸宅のあるじの官職名。「をのゝ」は大宰小弐小野老のことと思われる。大宰帥であった大伴旅人の邸宅で開かれた宴で詠まれた歌とみられ、上京して戻ってきた小野老が、大宰府の官人たちに都の様子を報告する形で歌ったものであるという（伊藤博『万葉集訳注』二 集英社、二〇〇五年）。

みやいづり

なりひら

一二四四 なにしをはぐいざことゝはむみやこどりわがおもふ人はありやなしやと

【異同】ナシ

【現代語訳】都という名を持つているならば、さあ尋ねよう。都鳥よ。私が思う人は無事でいるかどうかと。

【語句】◎みやこどり ミヤコドリ科の大型の鳥（頭と背が黒く、腹部が白く、嘴と足は赤い）だが、歌や物語で「みやこどり」とされるのはカモメ科のユリカモメであるという。○なにしをはゞ 名にし負はば。「都」という名を背負い持つならば。「名にしおはば逢坂山のさねかつら人にしられくるよしもがな」（後撰集・七〇〇）。○いざことゝはむ さあ尋ねよう。「いざ」は自分からある行動を実行に移そうとする時に発する声。「ことゝふ」は、ものを言いかける、尋ねる。○ありやなしやと 「ありやなしや」は無事でいるかどうか。生きているか死んでいるかの意とみる説もあるが、単に安否を気遣ったものとみてよい。「心ありてとふにはあらず世の中にありやなしやのきかまほしきぞ」（拾遺集・一一九三）。

【所載】古今集・羈旅・四一一／新撰和歌・一九四／業平集Ⅰ・八一／業平集Ⅱ・二五／業平集Ⅲ・五七／業平集Ⅳ・四二／和歌体十種・四〇／平家物語（延慶本）異本歌／今昔物語集・一八五／伊勢物語・九段・一三【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の文献に一致する。伊勢物語、第九段において、昔男が東下りをして、武蔵国と下総国の間にある隅田川の岸辺に着き、舟に乗って川を渡ろうとすると、嘴と脚が赤い白い鳥が川べりで遊んでおり、名を尋ねると、渡し守が「これこそが、あの都鳥だ」と答えたのを聞いて詠んだ歌とある。

一二四五 めづらしくなきもきたるかみやこどりいづれのそらにとしをへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】珍しく鳴きつつやってきたことだなあ。あの都鳥は、いったいどここの空で年月を過ごしてきたのだろうか。

【語句】○なきもきたるか 鳴きも来たるか。鳴きつつやって来たものだなあ。「……も……か」は詠嘆の意。「夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするかさ桧の隈廻を」（万葉集・一七五）。○みやこどり 一二四四 四首歌参照。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

一二四六 わび人のすみふるやどはみやこどりことつてたえてとしぞへにける

【異同】ナシ

【現代語訳】世をはかなむ人が暮らしてきた古い住まいには、京からの便りもすっかり絶えて長い歳月が経ってしまったことよ。

【語句】○わび人 世をはかなんでいる人。岩井宏子『わび人』の周辺「『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年」によれば、「わび人」とは、古今集初見の語であり、歌人により時代により意味の差異はあるものの、「何らかの形で不本意な人生を歩むこととなり、心底に失意の念を持つ人で」「社会的に隔絶した孤独な生活を送りがちな人」と定義づけられるという。○すみふるやど 住み経て古くなった住みか。「住み経る」に「古る宿」を掛ける。○みやこどり 一二四四番歌参照。都鳥は、京より便りを運んでくる鳥の意から、「こと（言）つて」を導く。○ことつて 物や人に託してものごとを人に伝えること、伝言。日葡辞書に、「ことつて」よりも「ことつて」の方がまさると見えるので、清音で読んだ。○としぞへにける 年ぞ経にける。所載欄の夫木抄に「年をへつらん」。

【所載】夫木抄・一二八五四

おとまろ

一二四七 ふなきはふほりえのかはのみなきはにきゐつゝなくは宮こどりかも

【異同】ふなきはふ—ふなきほふ（桂・大）

【現代語訳】舟が漕ぎ競う堀江の川の川べりにやって来て鳴いているのは、都鳥であろうか。

【語句】○ふなきはふ 桂宮本・大久保本や所載欄の万葉集「ふなぎほふ」により現代語訳した。「ふなぎほふ」は、舟が先を競うように漕ぐこと。○ほりえ 「堀江」は人工的に作られた水路、掘割のこと。ここは普通名詞ではなく、難波堀江のこと。参考欄参照。○みなきは 陸地の水に接するところ、水の際。「きは」は清音。○きゐつゝなくは やつて来て鳴いているのは。都鳥が鳴くのを歌う例は数少ない。「きゐつゝ」と詠むのも少ないが、「鶯のきゐつゝなければ春雨にこのめさへこそ濡れて見えけれ」（貫之集・二九九）などがある。

【所載】万葉集・四四八六（旧四四六二）布奈芸保布 保利江乃可波乃 美奈伎波尔 伎為都都奈久波 美夜故 杼里香蒙 フナギホフホリエノカハノミナキハニキヤツツナクハミヤコドリカモ ふなぎほふほりえのかはのみ

なきはにきあつつなくはみやこどりかも／夫木抄・一二八四九

【参考】作者名「おとまろ」は不審。夫木抄に「読人不知」とあるが、万葉集卷二十の目録によると、天平勝宝八（七五六）年二月に聖武上皇・孝謙天皇・光明皇后らが河内離宮を経て難波宮に御幸した折のもので、当該歌は、同じく目録に、「二十日、大伴宿祢家持の、興に依りて作りし歌五首」（四四八四〇～四四八四一）とある中の一首。これに拠れば作者は供奉していた家持となる。

もゝしき

一二四八

もゝしきのおほ宮人はおほ<sup>か</sup>けれどわが思人はことにぞありける

ひとまろ

【異同】もゝしきの—もゝしきの（御・桂・大） おほ<sup>か</sup>けれど—おほかれと（桂・大）

【現代語訳】宮中に仕える人は数多くいるけれど、わたくしが思う方は、それは際立って素晴らしいのでありますよ。

【語句】◎もゝしき 万葉集では「ももしきの」のかたちで、「大宮人」に掛かる歌がほとんどであり、古今集以後には「ももしき」のみで内裏・宮中をあらわすようになる。「百石城」で、「百」（沢山の）、「石」（イシの頭音が脱落）の「城」（または「木」）の意で、大宮の規模をほめ讃える意味かという。○やま川のおほみや人 「やま川」の訂正は、次の一二四九番歌にすべきところを誤ったものと見られる。ここはミセケチで訂正される前の「もゝしきの」でないかと歌意が通じない。「大宮人」は宮中に仕える人。○おほけれど 多けれど。多いけれども。傍記「おほかれ」は「多し」のかり活用已然形。『新編国歌大観』にあたると、歌でも詞書でも、本行「おほかれ」（已然形）よりも、傍記「おほかれ」の用例数が断然多い。平安和歌では「おほかれ」がほとんどだが、古今六帖・一五七や秋萩帖に数少ない「おほかれ」が見える。「松のうへに霜のさむければ来むやとたのむよこそおほかれ」（秋萩集・九）。○ことに 「異なり」「殊なり」の連用形で、他に比べて際立っている、すぐれている、の意。

【所載】ナシ

【参考】作者名に「人麿」とあるが、他文献で確認できなかった。

伊勢

一二四九 もゝしきのおとにのみきくもゝしきを身をはやながらみるよしもがな

【異同】 もゝしきの—やま川の（御・桂・大）

【現代語訳】今は噂に聞くだけの内裏であるが、かつてのわが身のままで見る手だてがあればいいのになあ。

【語句】○もゝしきの 本来は他本のように、一二四八番に訂正された「やま川の」があるべき箇所。「山川の」は「音」にかかる枕詞。○おとにのみきく 人づてに聞くだけの。噂に聞くばかりの。○身をはやながら 「み」を「は、身を」と「水脈」を掛け、「はやながら」は、昔のわが身のままでの意の「早ながら」に、水の流れが急な意の「速ながら」を掛ける。「水脈」「速ながら」は「山川」の縁語。○みるよしもがな 見る手だてが欲しいなあ。「よし」は、方法、手だて。「もがな」は願望を詠嘆的に言う終助詞。上代の「もがも」に代わって中古以降用いられるようになった。

【所載】古今集・雑下・一〇〇〇／後撰集・雑四・一二九一／伊勢集Ⅰ・三二／伊勢集Ⅲ・三一／東野州開書・一二二

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。なお、所載欄の古今集や伊勢集によれば、醍醐天皇より歌を召された折に献上した家集の奥に書きつけた歌。宇多天皇退位後、中宮温子に従って内裏を離れた後（一二五〇番歌参照）、歳月を経過してからの歌である。

一二五〇 しらつゆはおきかはれどももゝしきのをうつろふ秋はものぞかなしき  
おなじ

【異同】 ナシ

【現代語訳】白露は置いて草木の色が変わるけれど、御代がわりがあつて宮中を去るこの秋はいろいろ悲しいこととです。

【語句】○しらつゆはおきかはれども 白露は置き変はれども。露が置いて草木が紅葉するけれど。接続助詞「ども」は漢文訓読語的で不審。所載欄の伊勢集Ⅰ「白露のおきてかかれる」、伊勢集Ⅲ「白露のおきしかはれば」、新古今集「白露はおきてかはれど」。○もゝしきを 「ももしき」は内裏宮中のこと。所載欄の文献「ももしきの」とある方が自然な表現。○うつろふ秋 移り変わる秋。「うつろふ」は、草木が変色する意と、宮中から離れ住まいが変わる意とを掛ける。参考欄参照。○ものぞかなしき 伊勢集Ⅰに「（秋の）ことぞかなしき」。

【所載】新古今集・雑下・一七三二／伊勢集Ⅰ・二三八／伊勢集Ⅱ・二三八／伊勢集Ⅲ・二三八

【参考】作者名「おなじ」とあるのは、前歌において表示されている伊勢を指し、所載欄の文獻に一致する。伊勢集Ⅰ詞書に、「亭子のみかどのおりさせたまはむとせさせたまひしときの秋」とある。宇多天皇の譲位は、寛平九（八九七）年七月のこと。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一二五一 わかるれどあひも思はぬもゝしきの<sup>を</sup>みざらむことやなにかゝなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】こうして別れても（こちらは内裏のことを決して忘れないのに）、こちらのことを相思つてはくれないこの内裏を、こののち見ることがないだろうということが、なぜこんなにまでかなしいのであろうか。

【語句】○ていじのみかど 亭子の帝。宇多天皇のこと。退位後の一時期、東七条の亭子院を御所としたので、そう呼ばれた。○あひも思はぬ 双方が互いに思い合うことのない。こちらがどんなに「もゝしき」のことをなつかしく思っても、「もゝしき」の方はすこしもこちらのことを思はない、ということ。「もゝしき」を擬人化している。○もゝしき 内裏のこと。

【所載】後撰集・離別・一三三二／寛平御集・一六／伊勢集Ⅰ・二三九／伊勢集Ⅱ・二三九／伊勢集Ⅲ・二三九／大鏡・六六／大和物語・一段・一

【参考】寛平九（八九七）年七月三日の宇多天皇退位の直後、天皇と中宮温子がまだ内裏にとどまっていた時期に、伊勢が詠んで弘徽殿の壁に掲げた内裏への惜別歌。伊勢集によれば、前歌（一二五〇番）と同時詠である。「ていじのみかど」という作者名はあやまり。

人まろ

一二五二 もゝしきの大宮人はあめつちと月日とゝもによろづよにかも

【異同】ナシ

【現代語訳】この大宮人たちは、天地と共に、また月日と共に、万代まで栄えるであらう。

【語句】○もゝしきの「大宮」にかかる枕詞。○大宮人 宮中に仕える人々。○よろづよにかも 万代にわたつて永く栄えるであろう。「かも」は詠嘆。

【所載】万葉集・三二四八(旧三三三四) 百磯城之 大宮人者 天地与 日月共 万代尔母我 モモシキノオホミヤヒトハアメツチトヒツキトモニヨロゾヨニモガ ももしきのおほみやひとはあめつちひつきとともによろづよにもが

【参考】万葉集の長歌三二四八(旧三三三四)番の末尾五句が、古今六帖で一首の短歌とされている。万葉集では、この長歌には題詞がなく、詠歌事情は審らかでないが、長歌全体の内容からみて、伊勢方面へ行幸あったときのもののようである。作者名「人まろ」の根拠は不明。

一二五三 もゝしきのおほ宮人のたまほこのみちにもいでぬにこふるこのごろ

【異同】みちにもいでぬに―底本最後ノ「に」ニミセケチトシタアト、ミセケチノシルシヲ消ス。

【現代語訳】大宮人たちが道にも出ないで、(春の野山を)恋いこがれているこのごろであるよ。

【語句】○もゝしきのおほ宮人 前歌(一二五二番) 参照。○たまほこの 「道」にかかる枕詞。○いでぬに出ないことによつて。出ないので。活用語の連体形を受ける接続助詞「に」は、順接・逆接いずれにもはたらくが、ここは順接と見ておく。

【所載】万葉集・九五三(旧九四八) 百磯城之 大宮人之 玉梓之 道毛不出 恋比日 モモシキノオホミヤヒトノタマホコノミチニモイデズコフルコノコロ ももしきのおほみやひとのたまほこのみちにもいでずこふるこのころ

【参考】万葉集の長歌九五三(旧九四八)番の末尾五句が、古今六帖で一首の短歌とされている。万葉集における左注によれば、聖武朝の神龜四(七二七年正月、諸王子や諸臣の子らが春日野に出て打毬に興じていた折にわか雷鳴起り、宮中に侍従・侍衛がいけないという状態になった。ために諸王子・諸子らは、罰として外出を禁じられたが、それを悞憤して詠んだ長歌だという。

くに

中納言いしかはのとしなり

一二五四 あめつちもいほつゝなはふよろづよにくにさかえむといほつゝなはふ

【異同】くにさかえむとくにさくむと(御・大)、くにさかへんと(桂)

【現代語訳】天地もあまたの綱を張りわたしている。万代にわたって国が栄えるであろうと、あまたの綱を張りわたしている。

【語句】◎くに 国土、または国家。ひとつの政治的統治権力の及んでいる区域。またその国家の下にある地方行政区域をも「くに」と言った。古今六帖の「くに」題の下では、最初の一首(一二五四番)のみが前者の「くに」を詠んだ歌、二首目以下はみな後者の「くに」を詠んだ歌である。○中納言いしかはのとしなり 淳仁朝天平宝字六(七六二)年に没した大納言御史大夫石川年足のこと。蘇我馬子の孫連子の末裔、聖武朝の参議であつた石川石足の長子。ただし、年足が中納言となつたのは、孝謙朝末期のこと、この歌の詠まれた時(参考欄参照)はまだ参議であつた(公卿補任)。○いほつゝなはふ 「いほつ」は「五百つ」、数の多いこと。「ゝ(つ)なはふ」は「網延ふ」、綱を長く張りわたすことか。「いほつゝなはふ」については、確かな解を示し難いが、新嘗会の場の設営を称えて寿いだものか。鴻巣盛広『万葉集全釈』は、「上代の建築は黒木を葛の類で結んで作つたので、おのづからその結びあまりが見えてゐるわけであるが、この歌のは、主として屋根の棟などに、結び堅めたあまりの綱をさしてゐる。」としている。

【所載】万葉集・四二九八(旧四二七四)天尔波母 五百都綱波布 万代尔 国所知牟等 五百都都奈波布 アメニハモイホツツナハフヨロヅヨニクニシラレムトイホツツナハフ あめにはもいほつつなはふよろづよにくにしたらさむといほつつなはふ

【参考】作者名「中納言いしかはのとしなり」とあるが、万葉集の題詞によれば、この歌は、孝謙天皇の天平勝宝四(七五二)年十一月二十五日、新嘗会肆宴の際の応詔歌六首の中の一首である。左注には「式部卿石川年足朝臣」という作者名もあるが、また歌のあとには「似古歌而未詳」の注も見られる。

一二五五 山しろのこはたのもりにむまはあれどおもふがためはあゆみてぞくる  
人まろ

【異同】こはたのもりに―木幡のさとに(大)

【現代語訳】山城の国の木幡の森に馬はあるのだけれども、(馬を使えば人に知られやすいから)心に思う人のためには、こうして歩いて来るのです。



【語句】○山しろのこはた 山城国の木幡。現在の京都府宇治市木幡の一带。「やましなのこはた」と言われることが多い。○おもふがためは 思う人のためには。すなわち、あなたのためには、の意。「おもふ」は動詞の体言的用法。○あゆみてぞくる 馬を使わずに、徒歩で来るのだ。人に知られぬための用心である。

【所載】拾遺集・雑恋・一二四三／万葉集・二四二九(旧二四二五)山科 強田山 馬雖在 歩吾来 汝念不得  
ヤマシナノコハタノヤマニウマハアレドカチヨリワレク(ジクル)ナレヲ(キミヲ)オモヒカネ やましなのこはたのやまをうまはあれどかちよりわがこしなをおもひかねて／夫木抄・一三〇〇一／人麿集Ⅱ・四二八／人麿集Ⅲ・五六五／俊頼髓脳・一三三三／古来風体抄・一二二

【参考】作者名「人まろ」とあり、人麿集Ⅱ・Ⅲにも見られる歌だが、万葉集では、人麿歌集の歌となっている。  
〔以上五首担当 山下〕

一二五六 しきしまややまとのくにゝ人はふたりありとし思はゞなになげかむ

【異同】ナシ

【現代語訳】このやまとの国に私の恋しい人が二人いると思うのなら、どうしてこんなに嘆きましようか。ただあなたひとりが恋しいのです。

【語句】○しきしまや 枕詞。「やまと」「たかまとやま」「みむろのやま」「みわのやま」などにかかる。○やまとのくに 畿内五か国の一つ。今の奈良県。日本国の称でもあるが当該歌が「くに」の項目にあるので「やまと」の国と解した。○ありとし思はゞ (恋しい人が二人) いると思うのなら。「し」は強めの助詞。○なになげかむ どうして嘆こうか。

【所載】万葉集・三二六三(旧三二四九)式嶋乃 山跡乃土丹 人二 有年念者 難可將嗟 シキシマノヤマト  
ノクニニヒトフタリアリトシオモハバナニカナゲカム しきしまのやまとのくににひとふたりありとしおもはば  
なになげかむ

一二五七 かくちのやかたなのやまのかたきしにゆきかはなかなみぞよせける<sup>く</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】かくちのの、かたなの山の一方が崖になっている岸に、雪か花と見まがうように波が寄せてくるよ。

【語句】○かくちのやかたなのやま 不明。所載欄の夫木抄・八三二には「かふちのやかたの山のかたきしに雪か花かと波ぞよせける」とあり「河内のや交野のやま」の誤写の可能性が考えられる。「河内」は畿内五か国の一つ。今の大阪府の東部。「交野」は河内国の歌枕。今の大阪府交野市、枚方市にまたがる地方。「さみだれは交野の浦のかたもなくしほみつ海の心ちこそすれ」（忠盛集・二五）の歌があり、当該歌第五句の「なみぞよせくる」のような所があったらしい。○かたきし 一方が崖になっている岸。○ゆきかはなかと 雪か花かと見まがうように。

【所載】夫木抄・八三二

一二五八 つのくにのあしのやえぶきひまをなみこひしき人にあらぬころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】津の国の、葦を沢山使って葺いた屋根の隙がないように、私は少しも暇がないので、恋しい人に逢わないこの頃だなあ。

【語句】○つのくに 「つのくに」は摂津の国。今の大阪府と兵庫県にまたがる地方。「つのくにの」は枕詞。「いくた」「こや」「なには」「あし」などにかかる。「つのくにの難波のあしのめもはるにしげわが恋人知るらめや」（古今集・六〇四）。○あしのやえぶき あしのやへぶき。葦の八重葺き。葦で幾重にも厚く葺いた屋根。○ひまをなみ 暇がないので。「隙」に「暇」をかける。

【所載】ナシ

【参考】類歌として「つの国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺き」（和泉式部集Ⅰ：六九〇）がある。

一二五九 こひせんとなれるみかはのやつはしのくもでものをおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】恋をしようと生まれてきた身でしうか。そうではないのに、三河の八橋のくもでのようにあれこれと心が乱れて、物思いをする頃です。

【語句】○こひせんとなれるみかは 恋をしようと生まれてきた身でしうか。「かは」は反語。「身かは」に「三

河」をかける。「三河」は東海道十五か国の一つ。今の愛知県の東部。○やつはし「八橋」は三河国の歌枕。今の愛知県知立市。灌漑用の水路が八方に流れており、それぞれに橋をかけたのでこの名がある。「みかはのやつはし」は「くもで」に掛かる。○くもでに 蜘蛛が足を八方に広げたさまをいうが、ここでは「ものを思ふ」に掛かる修飾語。「くもでにもものをおもふ」は、あれこれと心が乱れるさま。「うちわとし長き心は八橋のくもでに思ふ事はたえせじ」(後撰集・五七〇)。

【所載】続古今集・恋一・一〇四四／俊頼髓脳・二二二／綺語抄・一八七／和歌童蒙抄・三八五／袖中抄・八八六

一二六〇 とをたふみいなさほそえのみをつくしわれをたのめてあらましものを

【異同】ナシ

【現代語訳】遠江（とおとうみ）のいなさほそえの滞つくしを舟がたよりにしているように、私をあてにさせていたらよかったのに。

【語句】○とをたふみ とほたふみ。遠江。とほつあはうみの約。東海道十五か国の一つ。今の静岡県の西部。

○いなさほそえ 引佐細江。今の静岡県引佐郡。浜名湖の北側あたりにある町。○みをつくし 「水脈（みお）の串」の意。海や川の船の通る水路と定められた場所に、杭を並べ立てて目印としたもの。○われをたのめて私をあてにさせて。「今ははや恋しなましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりける」(古今集・六一三)。○あらましものを そういう状態であつたらよかったのに。

【所載】万葉集・三四四八(旧三四二九) 等保都安布美 伊奈佐保曾江乃 水乎都久思 安礼乎多能米弓 安佐麻之物能乎 トホツアフミイナサホソエノミヲツクシアレヲタノメテアサマシモノヲ とほつあふみいなさほそえのみをつくしあれをたのめてあさましものを／夫木抄・一〇六四四／袖中抄・九三五／古来風体抄・一六〇

(以上五首担当 林)

一二六一 としふればするがなるてふうどはまのうとくのみなどなりまさるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】年月が経つと、駿河にあるという有度浜の「うと」という言葉のように、ますますうとうとしく

疎遠にばかり、どうしてなっていくのだろうか。

【語句】○するが 駿河。現在の静岡県の一部。○うどはま 有度浜。駿河国の歌枕。現在の静岡市にある有度山の南麓の海岸。三保の松原から西南に延びる細長い浜。「東遊歌」の駿河舞歌に「駿河なる有度浜」とあり、駿河舞発祥の地とされる。「するがなるてふうどはまの」は、「うと」の音の相通により「うとく」を導く序。「あやしきは駿河のかみといひしよりなど有度浜のうとくなくなるらん」（兼盛集・一三七）。

【所載】ナシ

【参考】類似した歌に「いつとなく恋するがなる有度浜のうとくも人のなりまさるかな」（相模集・五八四）がある。

一二六二 かひのくにつるのこほりのいたのなるしらたまこそすげかさにぬひてん

【異同】ナシ

【現代語訳】甲斐の国の都留の郡の板野に生えている白玉小菅を、きつと笠に縫おう。（白玉のように美しいあの娘とぜひ結び結ばれたいものだ。）

【語句】○かひのくに 甲斐の国。現在の山梨県。○つるのこほり 都留の郡。甲斐の国の歌枕。現在の山梨県都留地方（富士吉田市・都留市・大月市等）。「甲斐へまかりける人につかはしける」という詞書の歌の例に、「君が世は都留の郡にあえてきね定（さだめ）なき世の疑ひもなく」（後撰集・一三四四）とある。○いたの甲斐の国の「いたの」は未詳。影響歌と見られる近世の詠に「風寒み白玉小すげ乱れあひて甲斐の板野は霰降るなり」（林葉累塵集・七二二）とある。同じく近世の『甲斐名勝志』に「井戸と云地に板野と云野有。菅多く茂れり。里人いたやと唱ふ。」と見える。『甲斐叢記』は、当該歌とともに「はるく」と甲斐の高根は見えがくれ板野の小菅すゑ靡くなり」という宗祇の歌を挙げて、板野は井戸の支村の板屋であろうとし、近くに小菅村があつて昔は此辺りから小菅笠を縫出したと伝える（引用は、『甲斐叢書』（第一書房、昭和四十九年）による。句読点を補った）。○しらたまこそすげ 白玉のように美しい小菅の意か。嘉元百首に一例ある他は、前掲の林葉累塵集七二二番歌の例しか見あたらない。「菅」は、カヤツリグサ科の草の総称。「しらたまこそすげ」の類似表現「玉小菅」・「白菅」（菅の一種で葉が白味を帯びる）・「小菅」は、万葉集以来和歌に詠まれている。「みなと」のや葦が中なる玉小菅刈り来我が背子床のへだしに」（万葉集・三四六四（旧三四四五）、「いざこども大和へ早く白菅の真野のはり原手折りて行かむ」（万葉集・二八三（旧二八〇））。また、現在の北都留郡に小菅村があ

る。○かさにぬひてん 笠に縫ってしまおう。「笠に縫ふ」とは、笠に縫い綴ること。女性と結ばれる意を寓する。「真野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名を立つべきものか」(万葉集・二七八二(旧二七七二))。「てん」は、強意を表す助動詞「つ」の未然形に、意志を表す助動詞「む」の終止形が付いたもの。

【所載】 夫木抄・一四五七

一二六三 むさしのくさばもそむきともかくもきみがまにくわれはよりにき

【異同】 ナシ

【現代語訳】(靡きやすい) 武蔵野の草葉もそむいていますが、私は、どのようにでも、あなたの意のままに靡き寄ってきました。

【語句】○むさしの 古くは「むさしの」と濁音。武蔵野。武蔵国の歌枕。現在の東京都と埼玉県にまたがり、神奈川県の一部も含む広大な野。○くさばもそむき 「草葉」が「そむく」と詠んだ例は見あたらない。所載欄の万葉集では「久佐波母呂武吉」。「そ」は「ろ」の誤写の可能性があるか。一応底本の本文によつて、「靡きやすい武蔵野の草葉もそむいているが」の意と仮に解釈した。○きみがまにく 君がまにまに。あなたの意のままに。「新室の壁草刈りにいましたまはね草のごとよりあふをとめは君がまにまに」(万葉集・二三五五(旧二三五一))。

【所載】 万葉集・三三九五(旧三三七七) 武蔵野乃 久佐波母呂武吉 可毛可久母 伎美我麻尔末尔 吾者余 利尔思乎 ムザシノクサハモロムキカモカクモキミガマニマニワレハヨリニシヲ むさしののくさはもろむきかもかくもきみがまにまにわはよりにしを

一二六四 ひたちなるあさかのうらのたまもこそひけばねたゆれわれはたえせじ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 常陸にあるあさかの浦の玉藻こそ引けば根が絶えるけれど、私のあなたへの思いは決して絶えずまい。

【語句】○ひたち 常陸。現在の茨城県の大部分。○あさかのうら 常陸の国の「あさかのうら」は未詳。所載欄の万葉集では「なさかのうみ」。歌枕としての「あさかのうら」は、摂津の国の浅香の浦が知られる。「夕

さらば潮満ち来なむ住吉（すみのえ）の浅香の浦に玉藻刈りてな」（万葉集・一二二）。○たまも 玉藻。藻の美称。

【所載】万葉集・三四一五（旧三三九七）比多知奈流 奈左可能宇美乃 多麻毛許曾 比氣波多延須礼 阿杵可多延世武 ヒタチナルナサカノウミノタマモコソヒケバタエスレアドカタエセム ひたちなるなさかのうみのたまもこそひけばたえすれあどかたえせむ／夫木抄・一〇三三〇、一一六一二

一二六五 あふみのうみゆふなみ千どりなくなればこゝろもしらぬむかし思ほゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】近江の海で夕波千鳥が鳴く声が聞こえると、心もわからないような昔のことが思われる。

【語句】○あふみのうみ 近江の海（淡海）。近江国の歌枕。滋賀県の琵琶湖の古名。○ゆふなみ千どりで、古来和歌に多く詠まれた。○こゝろもしらぬむかし思ほゆ 当時の事情や人々の気持ちも知らない昔のことと思われる。所載欄の万葉集では、「こゝろもしのいにしへおもほゆ」とあつて人麿が近江朝時代を偲ぶ思いを表す。

【所載】続後拾遺集・冬・四五七／万葉集・二六八（旧二六六）淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所念 アフミノウミユフナミチドリナガナケバココロモシノニイニシヘオモホユ あふみのうみゆふなみちどりがなげなばこゝろもしのいにしへおもほゆ／夫木抄・六八四二／人麿集Ⅲ・七二一／綺語抄・四七一、五八七、六〇一／和歌童蒙抄・七五六／袖中抄・五七六／古来風体抄・三八

【参考】古今六帖には作者名がないが、所載欄の万葉集には「柿本朝臣人麿歌一首」とあり、人麿集にも見える。

〔以上五首担当 長戸〕

一二六六 みの山にしげりかさなるたまがしはとよのみあかりにあふがたのしさ

サカユル

くろぬし  
トヨノアリニ

【異同】ナシ

【現代語訳】美濃山に重なりあつて繁る玉柏、その柏を用いる豊の明かりにめぐり会える楽しさよ。

【語句】○みの山 美濃国の山々を総括して言う。○しげりかさなる 「繁り重なる」の意。ただし所載欄の夫木抄では、「六帖」の第二帖から採つたとして「みの山にしげりさかゆる山かざし豊のあかりにあふがうれしさ」とする本文を伝える。参考欄参照。○たまがしは 「柏」の美称。柏の葉は祭祀の際に食器として用いる。○とよのみあかりに 「み」は美称。「とよのあかり」は、豊の明かりの節会。新嘗祭、または大嘗会の翌日に行われる宴会。天皇が新穀を摂り、群臣にも賜り、五節の舞などが行われる。なお傍記の「トヨノアリニ」は、他本では「トヨノアカリニ」とある。○あふがたのしさ 大嘗会での豊の明かりの節会に同席できたことを喜ぶ。美濃国が大嘗会の悠紀国になった折の詠。

【所載】夫木抄・八八七七

【参考】万代集・一六二五番には、「承和大嘗会悠紀方美濃国風俗歌」との詞書を付し、作者を「読人不知」として、「みのやまに四時におひたるたまがしはとよのあかりにあふがたのしさ」を挙げる。同じ歌の異伝歌かと思われるが、夫木抄には、万代集の冬歌として、当該歌に並べて八八七八番に掲げる。少なくとも夫木抄では両歌を同じ歌と認識していないことになる。なお、古今集・志香須賀本では「神遊びの歌」の末尾（一〇八六番の次）に、作者を「黒主」として、「美濃山に繁（しじ）に生ひたる玉柏豊のあかりにあふがうれしさ」を載せ、催馬楽（五五）にも「美濃山に 繁に生ひたる 玉柏 豊の明かり あふがたのしさや あふがたのしさや」とある。

### 木の女わう

一二六七 ひだくくみふりぬいたまもあるものをいつの露ぞや袖にもりつゝ

【異同】 一つの露ぞや―一つの露にや（大）

【現代語訳】飛驒匠の手になる古びない板間もあるというのに、一つの露なのか、袖に洩れているのは。

【語句】○ひだくくみ 飛驒から上京し、都の造宮や修理にあたつた大工。「飛驒のたくみ」とも。「とにかくに物は思はずひだたくみうつ墨縄のただひとすちに」（拾遺集・九九〇）。○ふりぬいたま 古くならない板間。「板間」は屋根の合わせ目の隙間で「君まさであれたるやどの板間より月の洩るにも袖はぬれけり」（古今六帖・二四八四）などと光が洩れたり、また「杉板もてふける板間のあはざらば如何せんとかわが寝そめけん」（拾遺集・七四六）のように、板の合わないことと二人が逢えないことを掛け、叶わぬ思いを詠む場合に用いられるこ

とが多い。ここでは飛驒匠の腕前をたたえ、古びないので露に濡れることはないという前提に立つ。「ふりぬ」を古くならない意で用いた例としては「年ごとにとこめづらなる鈴虫のふりてもふりぬ声ぞきこゆる」（公任集・一一二）がある。○袖にもりつゝ 袖に露が洩れている状態をいう。濡れるはずのない袖が濡れているのは、実は忍びきれぬ涙によるものであるとする。「知る人もなくてやみぬるあふことをいかで涙の袖に洩るらん」（後拾遺集・六七七）。

【所載】ナシ

【参考】作者名「木の女わう」については未詳。万葉歌人の「紀女郎」あるいは「紀皇女」のことか。いずれにしても当該歌は他文献には見出だせない。

一二六八 しなのなるちりまのかはのさざれいしのきみしふみてばたまとひろはむ

【異同】さざれいしの―さざれ石（大）

【現代語訳】信濃を流れる千曲川の小さな石が、もしあなたが踏んだなら、珠と思って拾いましょう。

【語句】○ちくまのかは 千曲川。信濃国を経て越後国で日本海にそそぐ。現在では信濃川の上流部をいう。○さざれいし 小石。「わが君は千代にましませさざれいしのはほとなりて苔のむすまで」（古今六帖・二二三四）。○きみしふみてば 「てば」は完了の助動詞「つ」の未然形に仮定条件の接続助詞「ば」の付いたもの。……たならば。「梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし」（古今集・四六）。

【所載】万葉集・三四一八（旧三四〇〇）信濃奈流 知具麻能河泊能 左射礼思母 伎弥之布美弓婆 多麻等比呂波牟 シナノナルチグマノカハノサザレシモキミシフミテバタマトヒロハム しなのなるちぐまのかはのさざれしもきみしふみてばたまとひろはむ／夫木抄・一〇九九六

一二六九 かはつけのさのゝくゝたちおりはやしわれはまたむしことしらずかも

【異同】○ことしらすかも―ことしらすとも（大）

【現代語訳】上野国の佐野の青菜の茎を「折りはやし」て私は待ちましょう。「来なさい」と言うのも知らずになあ。

【語句】○かはつけの 上野の。「かんづけ」「かみつけ」とも。上野国は現在の群馬県。万葉集・卷十四には「上



野国」の歌が二十二首収められ、当該歌もその一つ。○さの 佐野。現在の群馬県高崎市、烏川の北岸一帯の地。○くくたち 青菜。茎が伸びることによる名。「山たかみ花の色を見るべきにくくたちぬる春がすみかな」(拾遺集・物名・三九八、四句に「くくたち」を隠す)。○おりはやし をりはやし。折り栄やす意。「栄やす」はよいものにするの意であることから、手折って料理にする(窪田空穂『萬葉集評釋』)とも、折ったものを植え立てて翌年の豊作を予祝する(伊藤博『萬葉集釋注』)ともいう。○われはまたむし 私は待とう。「し」は強意の副助詞か。ただし一般的には強意の「し」が文末に用いられることはない。所載欄の万葉集では「またむゑ」とある。「ゑ」は感嘆を表す間投助詞。○ことしらずかも 難解。万葉集では「ことしこずとも」とあり、今年来ずとも(中西進)、来とし来ずとも(今はちつとも来なくても、伊藤博)などと解されている。同じく夫木抄では「ことし見ずとも」とあり、今年見ずとも、と解せる。ここでは仮に「こ」を「来」の命令形と取っておく。【所載】万葉集・三四二五(旧三四〇六)可美都気野 左野乃九久多知 乎里波夜志 安礼波麻多牟恵 許登之 許受登母 カミツケノサノククタチヲリハヤシアレハマタムエコトシコ(ミ)ズトモ かみつけのさのくくたちをりはやしあれはまたむゑことしこずとも/夫木抄・九八〇三

一二七〇 みちのくにありといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり  
たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】陸奥にあるという名取川、そんな名前のように、なき名、あらぬ噂を立てられては苦しいことだなあ。

【語句】○みちのくにありといふなる 同様の歌い出しの例として「みちのくにありといふなるたま川の玉さかにてもあひみてしかな」(古今六帖・一五五六)などがある。○なとり河 名取川。現在の宮城県名取市を流れ、仙台湾にそそぐ川。「いぬがみ」とこの山なるなとり河いさこたへよわがなもらすな」(古今集・一一〇八)。初句からここまで、「なきなとり」を導く序詞。○なきなとり 「なき名」はあらぬ噂。ここでは、実際にはまだ何もないのに、逢瀬を重ねているなどという噂。「名取り」は噂が立つことをいう。

【所載】古今集・恋三・六二八/人麿集Ⅱ・五六三/忠岑集Ⅰ・二五/忠岑集Ⅱ・四七/忠岑集Ⅲ・四九/忠岑集Ⅳ・六七/宝物集・四二三

【参考】作者名「たゞみね」は、人麿集を除き、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木・久保木〕

一二七一 いではなるあねとのせきのすみだがはながれてもみむ水やに」と

【異同】ナシ

【現代語訳】出羽にある姉戸の関のほとりを流れるすみだ川のように、流れて、年月が経っても、見てみよう、この水が濁るかどうかと。清らかなままで心変わりしないかどうかと。

【語句】○いでは 出羽。現在の山形県と秋田県にほぼ相当する。○あねとのせき 姉戸の関。『大日本地名辞書』（改訂版）には、「補」として羽後国（今の秋田県）の最後に付されている。もつとも所載欄の夫木抄では「あねはのせき」、参考欄の歌枕名寄では「阿保登関」とする。○すみだがは 歌枕名寄では「澄田河」とする。また前掲『大日本地名辞書』には「清田川」の項に、「在阿保登関址、在大戸、清田川（古今六帖）」とある。「清田川」と書いて「すみだがは」と読むか。○ながれても 川の「流れ」に時間の「経過」の意をこめているのであろう。

【所載】夫木抄・一一三三五

【参考】歌枕名寄、卷二十六「出羽」の項に、

阿保登関 付澄田河

六帖

いではなるあほとのかのすみだ川ながれてもみんな水やに」と（六八五一）と見える。

一二七二 わかさなるのちのせ山のちもあはむわがおもふ人にけふならずとも

【異同】のちのせ山のちもあはむ―のちのせ山のちもあはむ（御）、後せの山のちもあはむ（桂・大）

【現代語訳】若狭にある後瀬の山の、「後」にまた逢いましょう。私のいとしい人に、今日でなくても。

【語句】○わかさ 若狭。現在の福井県南部。○のちのせ山のちもあはむ 底本字足らず。異同欄に見える「後せの山のちもあはむ」によった。所載欄の夫木抄も同じ。のちに逢いましょう。「後瀬の山」は、福井県小浜市にある小山。「かにかくに人はいふとも若狭路の後瀬の山の後も逢はむ君」（万葉集・七四〇（旧七三七））。初

・二句は「のち」を導く序。

【所載】 夫木抄・八五二五

一二七三 たばちのやおほえの山のさねかづらたえむものとはわがおもはな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 丹波路の大江山のさねかづらが絶えるだろうとは思えないように、あなたとの仲が絶えるだろうな  
どと私はまったく思っていないよ。

【語句】 ○たばちのや 丹波路の。「丹波路」は山城国（現在の京都府南部）から丹波国（現在の京都府、兵庫県、大阪府のそれぞれ一部にまたがる地域）に行く道。「や」は間投助詞。○おほえの山の 大江の山の。「大江山」は山城国と丹波国との間にある山。「大江山いくの道の遠ければふみもまだみず天の橋立」（金葉集・五五〇）。○さねかづら モクレン科のつる性常緑低木。上三句が下二句の序。○わがおもはななくに 私は思わないことなのに。「なくに」は、打消の助動詞「ず」のク語法「なく」に、助詞「に」がついた形。ないことなのに。  
【所載】 万葉集・三〇八五（旧三〇七二） 丹波道之 大江乃山之 真玉葛 絶牟乃心 我不思 タニハミチノオホエノヤマノサネカツラタエムノココロワレハオモハズ たにはちのおほえのやまのさねかづらたえむのこころわがおもはななくに／袖中抄・一〇〇九

一二七四 たぢまなるゆきのしらはまもろよせにおもひしものひとのとやみむ

【異同】 おもひしもの―おもひしものを（御・桂・大）

【現代語訳】 但馬にある雪の白浜の諸寄ではないが、もろ寄せ、お互いに心を寄せ合っていたと思っていたのに、あなたのことを他の人のものとして見るようなことがあるでしょう。

【語句】 ○たぢま 但馬。現在の兵庫県北部。○ゆきのしらはま 兵庫県美方郡新温泉町諸寄にある浜。一面白砂で覆われ、「雪の白浜」と呼ばれる。上三句が「もろよせ」を導く序。○もろよせに 地名の「諸寄」に「もろ寄せ」を掛ける。「もろ寄せ」の用例は見あたらないが、「もろ」は、二つが対になっているものの両方（「もろ手」「もろ矢」など）、あるいは、多くのものすべて（「もろ人」「もろ心」など）の意を持つ。こゝは、お互いに心を寄せ合う、相思相愛の意か。なお地名の「諸寄」は、枕草子に「浜は、……打出の浜 諸寄の浜、……」

と見える。○おもひしもの 底本は字足らずなので、他本の「おもひしものを」によって解した。所載欄の古今六帖における重出歌でも「おもひしものを」とある。○ひとのときやみむ 解しにくいが、「や」は反語か。人のものとして見るだろうか、見はしないだろう。

【所載】古今六帖・第三帖「はま」一九二〇／夫木抄・一一八五四

一二七五 たちわかれいなばの山のみねにおふるまつとしきかばとくかへりこむ<sup>いま</sup>

【異同】とくかへりこむ―いま帰こん（大）

【現代語訳】あなた方とお別れして私はこれから任地の因幡に行きますが、その因幡の山の峰に生えている「松」のように、あなた方がもし私を「待つ」と聞いたら、すぐにでも帰って来ましよう。

【語句】○いなばの山の 因幡国（現在の鳥取県東部）にある稲羽山。「往なば」を掛ける。○みねにおふる「おふる」は「生ふる」。峰に生えている。○まつとしきかば もし待っていると聞くならば。「まつ」は「待つ」に「松」を掛ける。上三句は「まつ」を導く序。「し」は強めの副助詞。

【所載】古今集・離別・三六五／時代不同歌合・二五／百人秀歌・九／百人一首・一六／定家十体・一五四／和歌初学抄・六九／古来風体抄・二六四／近代秀歌・六三／詠歌大概・七二／桐火桶・一四一／井蛙抄・三二二

【参考】作者名の記載はないが、所載欄の古今集などでは「在原行平朝臣」とする。通説では、行平が因幡赴任に際し、都の人と別れを惜しんで詠んだ歌とするが、任果てて帰京する際の歌とする説もある。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一二七六 いはみのやたかつの山のこのまよりわがそでふるといもみつらむや<sup>ひとまろ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】石見の高角山の木の間から、私が袖を振っていると彼女は見ただろうか。

【語句】○いはみのや 「いはみ」は国名、石見国。島根県の西部。「や」は感動の助詞。所載欄の拾遺集では「いはみなる」、万葉集・一三九や人麿集Ⅲ・六五三では「いはみのうみ」。○たかつの山 角の地にある高い山

の意か。所載欄の拾遺集では「たかまの山」、万葉集・一三九では「打歌山（うつたのやま）」、人麿集Ⅲ・六五三では「うつるのやま」。所在については諸説ある。○このまより 木の間から。万葉集・一三四では「このまゆも」。○わがそでふると わが袖振ると。私が袖を振っていると。万葉集はじめ、所載欄の文献では「わがふるそでを」が多い。袖を振るのは妻との別れを惜しんでのこと。○いもみつらむや 妹見つらむや。妻は見たであらうか。所載欄の文献では「いも見けんかも」「いもみつらむかも」「いもみつらむか」等。

【所載】拾遺集・雑恋・一二三九／万葉集・一三二（旧一三三）石見乃也 高角山之 木際従 我振袖乎 妹見都良武香 イハミノヤタカツノヤマノコノマヨリワガフルソデライモミツラムカ いはみのやたかつのやまのこのまよりわがふるそでをいもみつらむか、一三四（旧一三四）石見尔有 高角山乃 木間従文 吾袂振乎 妹見監鴨 イハミナルタカツノヤマノコノマニモワガソデフルライモミケムカモ いはみにあるたかつのやまのこのまゆもわがそでふるをいもみけむかも、一三九（旧一三九）石見之海 打歌山乃 木際従 吾振袖乎 妹将見香 イハミノウミウツタノヤマノコノマヨリワガフルソデライモミツラムカ いはみのうみうつたのやまのこのまよりわがふるそでをいもみつらむか（左注）右は、歌の体同じといへども、句々相替れり。これに因りて重ねて載せたり。／夫木抄・八三九、八五〇八／人麿集Ⅰ・一／人麿集Ⅱ・二二四／人麿集Ⅲ・六五三、七二四、七二五／和歌初学抄・一五三／柿本人麻呂勘文・六二／袖中抄・一七〇／古来風体抄・三三／正徹物語・二

【参考】作者名「ひとまろ」は所載欄の文献に一致する。石見相聞歌の一首。万葉集の三種の歌詞の關係には諸説あつて、松田好夫氏は一三四—一三九—一三二の順序で作者の推敲が行われたとし、伊藤博氏は一三九—一三四—一三二の順序による推敲を推定している。

一二七七 はりまなるいくたのうらによをつくすあまのつりぶねこがるればなど

【異同】ナシ

【現代語訳】播磨にある生田の浦に一生を終える海人の釣舟は漕ぐことができるが、（私があの人）恋焦がれるのはなぜなのでしょう。

【語句】○はりまなるいくたのうら 播磨なる生田の浦。播磨は旧国名で現在の兵庫県西部。生田は、現在の神戸市中央区を中心とする一帯で、摂津国の歌枕。「津の国」に伴つて用いられることが多く、「はりまなる」と詠まれたのはこの歌のみ。○よをつくす 一生を終える。「白波の寄する渚によをつくす海人の子なれば宿も定めず」（新古今集・一七〇三）。○こがるればなど 思い焦がれるのはなぜでしょうか。初句から第四句までは「漕

「がるれ」と同音の「焦がるれ」を導く序詞。「おくれずぞ心にのりてこがるべき波にもとめよ舟みえずとも」(後撰集・一三四五)。「浦」「釣舟」「漕がる」は「海人」の縁語。「已然形十ば」は「……すると」「……するので」など、と順接の確定条件を表す。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄・四一五六番に「生田篇・釣舟」の題でこの歌がある。

一二七八 まかねふくきびの中山<sup>びに</sup>おいこせるほそたにがはのおとのさやけさ  
くろぬし

【異同】おいこせる―おぬこせる(御)、おひにせる(桂・大)

【現代語訳】吉備の中山が帯にしている細い谷川の川音のさわやかなことよ。

【語句】○まかねふく 鉄の精錬が行われた地名につく枕詞。○きびの中山 「吉備」は美作・備前・備中・備後の総称。現在の岡山県と広島県東部にあたる。「中山」は備前、備中の国境にある高くない山で、吉備津の宮があった。○おいこせる 意味不明。傍記「おびにせる」に拠って解する。帯にしている。帯が腰をとりまくように川が山の麓をめぐり流れているさま。「帯にする細谷河に見ゆる火は螢もまかねふくにやあるらん」(夫木抄・三二五五)。○ほそたにがは 細い谷川。「妹背山細谷川を帯にして霞の衣けさやきぬらん」(夫木抄・五一七)。

【所載】古今集・神遊びの歌・一〇八二／綺語抄・二二三／和歌童蒙抄・一七九／奥儀抄・五九七／和歌初学抄・二二四／袖中抄・二六五／和歌色葉・二九八

【参考】作者名「くろぬし」とあるが、所載欄の他文献に作者名はない。催馬楽「真金吹」に「真金吹く 吉備の中山 帯にせる なやや らいしなや さいしなや 帯にせる 帯にせる はれ／帯にせる 細谷川の 音のさやけさや らいしなや さいしなや 音のさや 音のさやけさや」とみえ、また、万葉集・一一〇六(旧一一〇二)、人麿集Ⅰ・二三、人麿集Ⅱ・一九四には「おおきみのみかさのやまの帯にせる細谷川の音のさやけさ」と類歌がみられる。川をほめることによって、それを帯にしている山をもほめる国ぼめ歌。

一二七九 すわうなるいはくに山をこえくればたむけよせくにあらしその山

【異同】すわうなる―周防なる(大) たむけよせくに―たむけよくせよ(御・桂・大)

【現代語訳】周防の国にある磐国山を越えて行くと、手向けをよくしなさい。険しくて危険ですよ、その山は。  
【語句】○すわうなるいはくに山 「すわう」は周防で、現在の山口県東部。「いはくに山」は山口県岩国市から西南の玖珂町にいたる間の山か。山陽道中最大の難所といわれる。○こえくれば 越えて行くと。所載欄の文献の「こえむひは」の方が合理的。○たむけよせくに このままでは意が通らないので他本に従い「たむけよくせよ」で解する。手向けを心をこめてなさい。「たむけ」は、旅の無事を祈って、峠など道の難所で神に幣などを供えること。○あらしその山 荒しその山。危険である、その山は。倒置した言い方。

【所載】万葉集・五七〇（旧五六七）周防在 磐国山平 将超日者 手向好為与 荒其道 スハウナルイハクニ ヤマヲコエムヒハタムケヨクセヨアラキノミチ すはにあるいはくにやまをこえむひはたむけよくせよあらしそのみち／夫木抄・八一九／和歌童蒙抄・一六九

【参考】万葉集の左注によれば、大宰帥旅人が病床に伏し、遺言を語ろうとして、異母弟の稻公と甥の胡麻呂との派遣を乞うたが、数十日して病が癒えたので、京に戻る二人のために饞の宴を開いた時の歌であるという。

一二八〇 ながとなるおきつかりしまをくましてわが思人はちとせにもせむ

【異同】ナシ

【現代語訳】長門にある沖の借島のように、心の奥にいらして私が思っているあの方は、千年も長生きしていただきたいものです。

【語句】○ながとなる 長門なる。長門にある。長門は山口県西北部。○おきつかりしま 所在未詳。下関市の蓋井島など諸説ある。上二句は「をくまして」を導く序詞。○をくまして 奥にいらして。所載欄の文献では「おくまへて」で、「おく」を心の奥と解し、「心の奥に秘めて」とする説と、時間にかかわる将来と解し、「行く末をかけて」とする説がある。○わが思人は 私が心に思う人は。○ちとせにもせむ 千年も長生きしてほしい。「む」は意志の強調表現に「希望」の意をあてたもの。

【所載】万葉集・一〇二八（旧一〇二四）長門有 奥津借嶋 奥真経而 吾念君者 千歳尔母我毛 ナガトナル オキツカリシマオクマヘテワガオモフキミハチトセニモガモ ながとなるおきつかりしまおくまへてあがおもふ きみはちとせにもがも／夫木抄・一〇五六五／綺語抄・四二六、四八〇

〔以上五首担当 三浦〕

一一八一 きのくにのさかひのうらをみわたせばあまのとし火なみまよりみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】紀の国のさかひの浦を見渡すと、海人のともし火が、波間から見えるよ。

【語句】○きのくにのさかひのうら 所在不明。所載欄の万葉集では、「きのくにのさひかのうら」で、それなら現和歌山市和歌の浦の雑賀崎あたりの浦。○あまのとし火 漁師が漁のためにともしている火。○なみまよりみゆ 波の間を通してその向こうに見える。

【所載】万葉集・一二一三（旧一九四）木国之 狭日鹿乃浦尔 出見者 海人之燎火 浪間従所見 キノクニノサヒカノウラニイデミレバアマノモシビナミマヨリミユ きのくにのさひかのうらにいでみればあまのとしびなみのまゆみゆ／夫木抄・一一六三四／綺語抄・二四九

一二八二 もゝつちのやそのしまをばこえくれどあはぢのしまをみれどあかぬかも  
人まろ

【異同】もゝつちの—もゝつての（大）

【現代語訳】数多くの島々を越え過ぎてきたけれども、あはぢの島を、見てもなお見あかぬことだなあ。

【語句】○もゝつちの 語義不明。万葉集では、「ももつたふ」で、それならば「やそ」にかかる枕詞。○やそのしま 八十の島。あまたの島々。○こえくれど 越えくれど。越え過ぎてきたのだが。船旅をして「やそのしま」を通り過ぎてきたのであろう。○あはぢのしま 島の名と思われるが、所在不明。所載欄の万葉集では、「あはのこじま」。ただし、その「あはのこじま」も所在は不明。

【所載】万葉集・一七一五（旧一七二一）百伝之 八十之嶋廻乎 榜雖来 粟小嶋者 雖見不足可聞 モモツテノハ（ヤ）ソノシマワヲユギクレドアハノコシマハミレドアカヌカモ ももつたふやそのしまみをこぎくれどあはのこじまはみれどあかぬかも／人麿集Ⅲ・六一一

【参考】作者名「人まろ」とあるが、万葉集では、左注によつて「右二首或云、柿本朝臣人麿作」とされている中の一首である。

一二八三 とよくにのかぢみの山にいはとたてくもりとけらしまでときまさず



【異同】くもりとけらしーくもりにけらし(御・桂・大)

【現代語訳】豊の国の鏡の山に岩戸を閉ざして(かくれられたために)、曇ってしまったらしい。いくら待っても、もうおいでにならない。

【語句】○とよくに 豊の国。九州東北部、豊前国と豊後国とを併せた区域。現在の大分県全域と福岡県東部に相当する。○かゞみの山 豊前の鏡山。現福岡県田川郡香春(かわら)町にあり、歌枕として八雲御抄に登載されている。○いはとたて 岩の戸を閉め切ってしまったて。「たて」は戸を閉ざすこと。○くもりとけらし 意味が判然としないが、「くもり」を「曇り」と見、かつ諸本の「くもりにけらし」に拠って現代語訳した。曇ってしまったらしい。所載欄の万葉集では「こもりにけらし」で、意味分明である。「くもり」は「かがみ」の縁語。

【所載】万葉集・四二一(旧四一八)豊国乃 鏡山之 石戸立 隠尔計良思 雖待不来座 トヨクニノカガミノ ヤマノイハトタテカクレニケラシマテドキマサズ とよくにのかがみのやまのいはとたてこもりにけらしまでどきまさず／夫木抄・一四九五／和歌童蒙抄・一六一／和歌色葉・一一四／井蛙抄・四四〇

【参考】万葉集では「河内王葬豊前国鏡山之時手持女王作歌三首」とある中の第二番目の歌。河内王は大宰帥在任中に没し、鏡山に葬られた。現在の香春町鏡山には、宮内庁が陵墓参考地としている河内王陵がある。

一二八四 わがためにつらきこゝろはおほすみのけしきのもりのさもしるきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人(わたし)に対して抱いている冷たい気持は、まるであの大隅の国にあるけしきの森の、その「けしき」ということばのように、外から見えるようすにあらわれて、いかにもはっきりとわかることだなあ。【語句】○わがために わたしに対して。○つらきこゝろ 冷淡な気持。薄情なこころ。○けしきのもり 大隅の国にありとされていた森。歌枕として八雲御抄に見える。「けしき」とは、こころの内奥のさまがそぶりやふるまいとなつて外に表れ出るようすのこと。○さも 然も。いかにもまことに。○しるき 著き。顕著である。歴然としている。

【所載】夫木抄・一〇〇六〇

一二八五 いづみなるひねのこほりのひねもすにこひてぞくらすきみがしるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】和泉の国にある日根の郡、その「ひね」の名のように、わたしはひねもす恋しく思つて暮らしています。このことは、あなたが知つてくださるでしょう。

【語句】◎こほり 郡。律令の国郡制下における地方行政組織のひとつ。「国」の下に置かれ、その下に里・郷・村などを包括していた。令制初期には「評」の文字が宛てられている。○いづみなるひねのこほり 和泉国日根野。現大阪府泉佐野市日根野。初・二句は「ひね」の音をくりかえして「ひねもすに」を導き出すための措辞。○ひねもすに 一日中。○きみがしるらん あなたが知つてくれるであらう。所載欄の夫木抄では下句が「こひてくらすと人はしらなん」となっており、この方がわかりやすい。

【所載】夫木抄・一四五二〇

〔以上五首担当 山下〕

一二八六 君がためいのちかひへてぞわれはゆくつるのこほりのよはひうるなり

ありはらのしげはる

【異同】われはゆく―われはゆけ(御) つるのこほりの―つるのこほりに(桂)

【現代語訳】あなたのために、命を買いに、甲斐の国へ行くのです。(甲斐の国の)都留の郡には鶴の千年の齢を売つていて、それを得ることができるといふのである。

【語句】○君がため あなたのために。命との組み合わせで詠まれるのは、当該歌と一二二六番歌が早い例である。○いのちかひへぞ 「かひ」に、命を「買ひ」と国名「甲斐」を掛ける。また、「かひ(買ひ)」と第五句の「うる(売る)」とは縁語。「東路にここをうるまといふことはゆきかふ人のあればなりけり」(後拾遺集・五・一五)。○つるのこほりのよはひうるなり 「つるのこほり」の名にあやかつて鶴のように千年の齢を得るといふことだから。都留の郡は、一二二六番歌の語句欄参照。ここでは、地名と千年の齢を持つという「鶴」を掛ける。

【所載】新千載集・雑・一二六六／夫木抄・一四五二六／忠岑集Ⅱ・五三／忠岑集Ⅳ・七九

【参考】作者名「ありはらのしげはる」とあるが、所載欄の忠岑集他全て忠岑作とする。在原滋春は在原業平の

二男、自身が甲斐国へ下行途中で亡くなった際の歌が古今集（哀傷・八六二）にある。当該歌は所載欄の忠岑集IV詞書に「甲斐の国の罷り申しに」とあるように忠岑が甲斐国へ下る時の歌。

さと

一二八七 おほはらのふりにしさとに君をゝきてわれいねかつゆめにみえたへ

【異同】われいねかつ―われいねかねつ（桂） ゆめにみえたへ―ゆめにみえたく（桂）

【現代語訳】大原の古里にあなたを置いてきてしまったので、私は眠ることができない、あなたが夢にずっと見えているので。

【語句】◎さと 里。または郷。律令の国郡里制下における地方行政区画の一つ。または、人家のある場所のこと。和歌ではそうした風景としての「里」の他、古里は「懐旧」「旧都」、伏見の里は「荒廢」など特定のイメージを伴って詠まれた。○おほはらのふりにしさと 大原の古びた里。大原は、現在の奈良県高市郡明日香村の小原（おはら）の古称。「吾里に大雪降り大原の古りにし里に降らまは後」（万葉集・一〇三二）。○われいねかつ 意味不通。桂宮本「われいねかねつ」に拠って解した。私は眠りかねて。○ゆめにみえたへ 底本「みえたへ」、桂宮本「みえたく」では意が通じない。万葉集以外の所載欄文献に拠り、「みえつつ」として解した。見えるので。「つつ」はそのことが反復継続して現れるさまを表す助詞。

【所載】風雅集・恋四・一二三〇／万葉集・二五九二（旧二五八七）大原 故郷 妹置 吾稻金津 夢所見乞  
オホハラノフリニシサトニイモヲオキテワレイネカネツイメニミエコソ おほはらのふりにしさとにいもをお

きてわれいねかねつためにみえこそ／夫木抄・一四二四七／人麿集IV・二三四  
【参考】作者名はないが、所載欄の文献のうち夫木抄は作者を人麿とする。人麿集IVにも見えるが、万葉集には作者名がなく未詳。類似歌に「大原のあらのにわが妹ををきていねこそかねつ夢にみゆれば」（人麿集II・四六二）がある。

コ、ニ

一二八八 いざこゝにわがよはへなんすがはらやふしみのさとのあれまくをし

【異同】ナシ

【現代語訳】さあここに住みかを定めて我が生涯を過ぐすでしょう。菅原の伏見の里が荒れてしまうのがしの

びないから。

【語句】○いざこゝにわがよはへなん さあ、ここで私は生涯を過ごそう。「よ」は生涯、一生の意。「へなん」は「経なん」。送ろう、過ごそう。○すがはらやふしみのさと 菅原の伏見の里。大和国生駒郡の地名。現在の奈良市菅原町のあたり。○あれまくもをし 荒れまくも惜し。荒れてしまうのが惜しいから。「まく」は推量の助動詞「む」のク語法、「も」は強意の助詞。

【所載】古今集・雑下・九八一／新撰和歌・二七四／定家十体・一五九／奥儀抄・五七一／袖中抄・四九五／六百番陳状・一四九／古来風体抄・二九三／井蛙抄・三二八

【参考】古今伝授の秘伝歌の一つで神仙の歌とされた。

一二八九 久かたのつきのかつらのさとなればひとり<sup>か</sup>をのみぞたのむべらなる  
伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】こちらは月影のさす桂の里ですので、ただその月の光ばかりを頼みにしております。

【語句】○久かたのつきのかつら 「久かたの」は月に掛かる枕詞。また、「月の桂」とは月の中に桂の木が生えるという中国の伝承（初学記「月中仙人桂樹」）からきた表現。「久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ」（古今集・一九四）。○ひかりをのみぞたのむべらなる 光をのみぞ頼むべらなる。光ばかりを頼みにしています。所載欄古今集九六八番歌の詞書「桂に侍りける時に、七条の中宮のとはせ給へりける御返事」にたてまつれりける」に拠れば、「月の光」は中宮温子の愛顧・恩寵を意味する。

【所載】古今集・雑下・九六八／伊勢集Ⅰ・二三／伊勢集Ⅱ・二五／伊勢集Ⅲ・二二／井蛙抄・一四八  
【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。

一二九〇 いまぞしるくるしきものと人またんさとをばかれずとふべかりけり  
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】今こそ思い知ったことだ、苦しいものだ。私のことを待っているであろう里を、疎遠にならず

に訪れるべきだったのだ。

【語句】○いまぞしる 今、思い知ったことだ。「くるしきものと」倒置されている。○人またんさと 人待たん里。人を待っているであろう里。○かれず 離れず。足を絶やすことなく。疎遠にならずに。

【所載】古今集・雑下・九六九／新撰和歌・三〇三／業平集Ⅰ・六五／業平集Ⅱ・六／業平集Ⅲ・四〇／業平集Ⅳ・二六／三十人撰・四六／三十六人撰・四九／伊勢物語・四八段・八九

【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本・吉田〕

一二九一 おそくいづる月にもあるかな山のはのあなたのさともをしむなるべし

【異同】ナシ

【現代語訳】なかなか出て来ない月だなあ。これはきつと、山の端の向こう側の里でも月との別れを惜しんでいるせいだろう。

【語句】○おそくいづる 「おそく……する」は、現在の「なかなか……しない」の意。「門おそく開くとて歸りにける人のもとにつかはしける」(後拾遺集・九六七詞書)。○山のはの 山の端の。「山の端」は山の稜線、尾根。○あなたのさともをしむなるべし 向こう側の里でもきつと惜しんでいるからだろう。

【所載】古今六帖・第一帖「雜月」三三七番既出

一二九二 夏のはつきにぞあかぬやまのはのあなたのさにすむべかりけり

【異同】あなたのさに―あなたの里も(桂)

【現代語訳】夏の夜は短くて、月を見ても満足することがない。月の沈む山の端のあちら側の里に住めばよかった。

【語句】○夏のはつき 夏の夜は短く、すぐに明ける。○つきにぞあかぬ 月にぞ飽かぬ。月の出ている間が短く、見ても満足しない。「明く」と「飽く」を掛け、対比させた。

【所載】新拾遺集・夏・二九九

【参考】所載欄の新拾遺集は作者を業平とするが、未詳。

一二九三 ふるさとにあらぬものからわがために人のこゝろのあれてみゆらむ いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】（人々が去って荒れているという）古里ではないのだが、私にはあなたの心が離れて見えるのです。  
【語句】○ふるさと かつて起居した場所、旧都をいう。「荒れ」ているものとされる。○人のこゝろ あなたの心。ここの「人」は第二人称。○あれてみゆらむ 離れてゆくように見える。「あれ」は「離（あ）れ」で、離れてゆくさまをいう。古里が「荒れ」ることに、人の心が「離れ」ることを掛ける。

【所載】古今集・恋四・七四一／伊勢集Ⅱ・一四五

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一二九四 あきのゝのうつろひゆけばすがはらやふしみのさとおもほゆるかな

【異同】おもほゆるかな—おもゆるかな（大）

【現代語訳】秋の野の草葉の色が変わってゆくのをを見ると、「荒れまくも惜し」と歌われた）菅原の伏見の里が思い起こされることですよ。

【語句】○うつろひゆけば 色が変わってゆくと。○すがはらやふしみのさと 一二八八番歌の語句欄参照。

【所載】ナシ

一二九五 あづまぢのいさめのさとははつかりのながよをひとりあかすわがな ッ

【異同】あかすわがな ッ—あかすわか名そ（大）

【現代語訳】東路の「いさめの里」とは、初雁の来る秋の長い夜をひとりで明かす我が名であるのだろうか。

【語句】○はつかりの 初雁の声で秋が来たのを知るといふ詠み方は多い。○ながよ 長夜。長い夜。

【所載】古今六帖・第一帖「初秋」一三一番既出

〔以上五首 平野・吉田〕

一二九六 こひわびぬねをだになかむこゑたてゝいづれなるらんおとなしのさと

【異同】ねをたになかむ―侘ねをなかむ(大)

【現代語訳】人を恋う思いは耐え難いほどになつてしまった。こうなつたらせめて、声を上げて泣きたい。声の外には聞こえないという、音無の里はどこなのだろう。

【語句】○こひわびぬ 恋しさに耐えられなくなつてしまった。「こひ侘びぬしほしもねばや夢のうちにみゆればあひぬみねば忘れぬ」(小町集・五〇)。○ねをだになかむ せめて声を上げて泣きたい。「音を泣く」は、声に出して泣くこと。「だに」は、意志、希望を表す語(ここでは「なかむ」を伴い、取りあげた事柄が最小限であることを示す。「せめて……だけでも」の意。○おとなしのさと 音無の里。音や声が聞こえないという架空の里。夫木抄では紀伊国とするが確証はない。「おとなしのさと」とはみれどこゑたててなくべきまになれる我が恋」(輔親集・一九七)。

【所載】拾遺抄・恋下・三〇七／拾遺集・恋五・七四九

一二九七 あすからはあすかのさとをいでゝいなばきみがあたりをみずやなりなん

【異同】あすからは―あすかゝは(大)

【現代語訳】明日から、この明日香の里を出て行くならば、あなたの家のあたりを、もう、見ることもなくなつてしまふでしょう。

【語句】○あすからは 明日からは。「あす」の音の繰り返しによつて「あすか」を導くための措辞か。○あすかのさと 現在の奈良県高市郡明日香村飛鳥一帯を指す。○いでゝいなば 出て行くならば。「いなば」は「往ぬ」の未然形「往な」に順接仮定条件を表す接続助詞「ば」の付いたもの。「年をへてすみこしさとをいでゝいなばいとど深草野とやなりなむ」(古今集・九七一)。○きみがあたりを あなたの家のあたりを。

【所載】新古今集・羈旅・八九六／万葉集・七八 飛鳥 明日香能里乎 置而伊奈婆 君之当者 不所見香聞安良武(一云 君之当乎 不見而香毛安良牟) トブトリノアスカノサトヲオキテイナバキミガアタリハミエズカモアラム(一云、キミノアタリヲミズテカモアラム) とぶとりあすかのさとをおきていなばきみがあたりはみえずかもあらむ(一云、きみのあたりをみずてもあらむ)

一二九八 わがやどにおほゆきふればおほはらやふりにしさとにふらまはうし  
きよむらのみかど

【異同】 くらまはうし—ふらまはうし(大)

【現代語訳】私の家の方に大雪が降ったのだから、大原よ、その古い里に雪が降るような様子なんて、気の毒で見ていられないというものよ。

【語句】 ○わがやどに 私の家に。 屋戸(家の戸口) から転じて、家屋、すみか、の意。 ○おほはらやふりにしさとに 一二八七番歌参照。「おほはらや」の「や」は間投助詞。呼びかけを表す語について、感動の意を添える。大原よ。 ○ふらまはうし 降るであろうことが気の毒だ。「まく」は、推量の助動詞「む」の古い未然形「ま」に、上接の活用語を名詞化する接尾語「く」の付いたもの。 降るだろうこと、降るようなこと。「うし」は辛い、心苦しい。 所載欄の万葉集では「ふらまはのち」。

【所載】 万葉集・一〇三 吾里尔 大雪落有 大原乃 古尔之郷尔 落卷者後 ワガサトニオホユキフレリオオハラノフリニシサトニフラマクハノチ わがさとおほゆきふれりおほはらのふりにしさとにふらまはのち  
【参考】 作者名「きよむらのみかど」とあるが、所載欄の万葉集は「明日香清御原宮天皇」と呼ばれた天武天皇の歌とする。「きよむらのみかど」は、「清御原宮天皇」の転訛であろう。

一二九九 家人にこひずあらめやかはづなくいづみのさとにとしのへぬれば  
いしかはのひろなり

【異同】 ナシ

【現代語訳】妻を恋しく思わずにいられようか、いやいられまい。(妻と離れて) この蛙の鳴く泉の里で何年も年を過ごしてしまっていると。

【語句】 ○家人に 「家人」は家族や妻、同じ家の人。当該歌では妻。 ○こひずあらめや 恋せずにおれようか、いやおれまい。「めや」は推量の助動詞「む」の已然形に係助詞「や」が付いたもの。反語を表す。 ○かはづなく 「かはづ」は小型のカジカガエルのこと。谷川に住み、夏から秋にかけて、澄んだ声で鳴く。 ○いづみのさと 五代集歌枕、八雲御抄に山城国とある。京都府相楽郡木津町、加茂町などの泉川(現木津川)に沿った地で



あるという。○としのへぬれば 年久しくなったので。

【所載】万葉集・六九九（旧六九六）家人尔 恋過目八方 川津鳴 泉之里尔 年之歴去者 イヘビトニコヒス  
ギメヤモカハヅナクイヅミノサトニトシノヘユケバ いへびとにこひすぎめやもかはづなくいづみのさととし  
のへゆけば／夫木抄・一九三六

【参考】作者名「いしかはのひろなり」は、所載欄の万葉集に一致する。

ふるやう

一三〇〇 こまなべていざみよゆかむふるさとはゆきとのみこそはなはちるらめ

【異同】こまなへて―駒なめて（大） いさみよゆかむ―いさみにゆかむ（御・桂・大）

【現代語訳】馬を並べて、さあ、見に行こう。旧都は今、雪そのものとばかりに、花が散っているだろうよ。

【語句】◎ふるさと 古都、あるいは昔なじんだ土地、生まれ育った土地。飛鳥時代には都が頻繁に移り、平城京において、また平安京遷都後もしばらくは、旧都はかつて住んだ土地でもあった。遷都の行われなくなった平安期には旧都の奈良を指すことが多く、忘れ去られ、荒れてしまった土地というイメージで捉えられるようになる。○こまなべて 馬を並べて。「こま」は子馬から転じた語。主として乗用の、小さい馬をいう。中古以降は「馬」の歌語。「なべて」は「なぶ」（巴行下二段活用）の連用形に接続助詞「て」の付いた形。並べての意。○いざみよゆかむ 校合した三本及び所載欄の文献では「いざみにゆかむ」。これによって解した。「いざ」は、他に対して行動を促す意の感動詞。さあ、見に行こう。○ふるさとは こは旧都を指すか。「ふるさとはよしの山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし」（古今集・三二二）。○ゆきとのみこそはなはちるらめ まるで雪のように花が散っているであろう。

【所載】古今集・春下・一一一／新撰和歌・七九／桐火桶・六一

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

つらゆき

一三〇一 みしごとあらずもあるかなふるさとははなの色のみぞあせずありける

【異同】はなの色のみそ―花の色のみ（大）

【現代語訳】かつて見たようでもなく、すっかり変わってしまったことだ。ふるさととは花だけが色あせないで咲いているよ。

【語句】○みしごとあらず 以前見たようでもない。「ごと」は「ごとし」の語幹。「ふるさとは見しごと」あらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋しかりける（古今集・九九一）。○ふるさと 一三〇〇番歌参照。旧都奈良、あるいは、かつて住んでいた、また行ったことのあるなじみの土地。ここでは後者であろう。「ふるさと」の荒廃と、変わらずに咲く花の対照は、「ふるさととなりにし奈良の都にも色は変はらず花は咲きけり」（古今集・九〇・平城帝）を基点として、「ふるさとに咲けるものから桜花色は少しもあれずぞ有りける」（貫之集Ⅰ・三七七）、「人はいさ心もしらずふるさととは花ぞ昔の香にほひける」（古今集・四二二）という形で、しばしば貫之によって取り上げられた。

【所載】貫之集Ⅰ・四二六

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集では天慶二年、宰相中将（敦忠）屏風の歌の一首である。

一三〇二 ちりちらずきかまほしきをふるさとのなみてかへる人もあはなむ 伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】もう散ってしまったか、まだ散らずにいるか聞いてみたいものを。ふるさとの花をみて帰る人にもゆき逢わないかなあ。

【語句】○ふるさと 一三〇一番歌参照。○きかまほしきを 聞いてみたいものを。「を」は詠嘆の間投助詞だが、理由をあらわす軽い順接の意を含む接続助詞的用法。「君により言の繁きを故郷の明日香の川にみそぎに行く」（万葉集・六二九（旧六二六））。○あはなむ 逢わないかなあ。「なむ」はあつらえ望む意の終助詞。ゆき逢うことを仮想し、望んだ言い方。

【所載】拾遺抄・春・三〇／拾遺集・春・四九／金玉集・一九／伊勢集Ⅰ・九五／伊勢集Ⅱ・九七／伊勢集Ⅲ・九五／前十五番歌合・四／和歌体十種・二八／三十人撰・三四／三十六人撰・三四／深窓秘抄・二四／今昔物語集・七一／無名草子・九三

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰでは「御屏風歌」、伊勢集Ⅱと拾遺集では「斎院

屏風」とある。無名草子では「若宮の御袴着の御屏風」、今昔物語集では「皇子の御袴着の屏風の和歌」とある。

一三〇三 きつゝのみなくうぐひすのふるさとはちりにしむめのはなにざりける  
おきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】ひたすらやって来ることを繰り返しては鳴く鶯のふるさは、既に散ってしまった梅の花であつたのだなあ。

【語句】○きつゝのみ 何度もやって来ることを繰り返してばかりいる。「つゝ」は反復継続の接続助詞。「のみ」は取り立てて強調し、限定する副助詞。……だけ。……ばかり。ひたすら。もっぱら。そうした鶯の動作と呼応して「ふるさと」が導かれる。「つゝのみ」は、「鶯のきつゝのみなく青柳をうしろめたくも折らせつるかな」（躬恒集Ⅳ・四一七）など、躬恒集に多い表現。○うぐひすのふるさと 「ふるさと」は古くからのなじみの場所。一三〇一番歌参照。鶯と梅との取り合わせは万葉集以来の伝統。「我が宿の梅の下枝に遊びつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ」（万葉集・八四六（旧八四二））、「梅が枝にきある鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつつ」（古今集・五）など。○むめのはなにざりける 梅の花にざりける。「ざりける」は……だったのだなあ。梅の花が鶯のふるさとしてあったことに気づいた詠嘆。

【所載】新勅撰集・春上・三六／興風集Ⅰ・一二／興風集Ⅱ・六／躬恒集Ⅰ・五一／躬恒集Ⅱ・九〇／躬恒集Ⅲ・七八、一五四／躬恒集Ⅳ・四二九／躬恒集Ⅴ・七二／是則集・七／亭子院歌合・五／袋草紙・六八四

【参考】作者名「おきかぜ」は、新勅撰集では坂上是則、亭子院歌合、袋草紙では躬恒となっており、興風集、躬恒集、是則集に見える。亭子院歌合では、当該歌（躬恒、左、勝）と、「三千代へてなるてふ桃は今年より花さく春にあひぞしにける」（是則、右、負）が番になっているため、混同された可能性がある。

一三〇四 ひとりのみながめてとしをふるさとのあれたるさとをいかにみるらむ  
しきぶ経あつみのみこ

【異同】しきぶ経あつみのみこ—しきぶ羅あつみのみこ（御）、しきぶ卿あつみのみこ（桂）、しきぶらあつみのみこ（大）

【現代語訳】一人で物思いにふけてばかりいて年月を過ごしている、このゆかりの地である荒れ果てた里をあなたはどうか覧になったでしょうか。

【語句】○ひとりのみながめてとしをふる ひとりで物思いにふけてばかりいて過ごす。「としをふる（年を経る）」の「ふる」は、「ふるさと」の「ふる」との掛詞。「ひとりのみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞおひける」（古今集・七六九）。「ふるさと」は所載欄の後撰集の詞書によれば仁和寺（参考欄参照）。

【所載】後撰集・雜一・一一九

【参考】作者名「しきぶ経あつみのみこ」は、所載欄の文獻に一致する。「しきぶ経あつみのみこ」は、式部卿敦実親王のこと。敦実親王は、宇多天皇第八皇子、醍醐天皇の同母弟。時平の女（京極御息所の妹）と婚し、天曆四（九五〇）年出家（日本紀略）、仁和寺宮と呼ばれた（小右記、本朝皇胤紹運録）。所載欄の後撰集の詞書に拠れば、「京極の御息所、尼になりて戒受けん」とて、仁和寺にわたりて侍りければ」とあり、敦実親王が、戒を受けるために仁和寺を訪ねてきた京極御息所に贈った歌とされる。京極御息所は、宇多法皇の寵愛を受け、三親王を儲けたが、出家の時期は不明。宇多天皇が開き、法皇として入寺した仁和寺は、敦実親王と京極御息所にとってゆかりの深い地。

やど

伊せ

一三〇五 あれにけ<sup>る</sup>ふあはれいくよのやどなれやすみけむ人のおとづれもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】荒れてしまった、ああ、いったい幾世を経た家なのだろうか。かつて住んでいたであろう人が訪れもしないことよ。

【語句】◎やど 万葉集では家の戸や戸口付近の庭先を意味していたが、後に家そのものも指すようになる。庭先の景や荒れ果てた寂しさが歌われることが多い。○あれにける 荒れてしまった。連体形であるから、「やど」にかかるとみて解する。所載欄の古今集の「あれにけり」という終止形がもとの形であったと考えられる。○おとづれもせぬ 訪ねてくることもないなあ。「ぬ」は打消の助動詞の連体形で、「人の」の「の」を受けて詠嘆の意を表す。

【所載】古今集・雑下・九八四／新撰和歌・二七一／袖中抄・五五九／和歌無底抄・二九／伊勢物語・五八段

・一〇四

【参考】作者名「伊せ」とあるが、古今集ではよみ人知らず。和歌無底抄は斎宮とするが、所載欄の他の文獻に作者名はなく、伊勢集には見られない。伊勢物語第五八段では、長岡京に家を造った色好みの男に対して、こともなき女どもが詠んだ歌とある。

〔以上五首担当 中野〕

一三〇六 とふ人もなきやどなれどくる秋はやへむぐらにもさはらざりけり

【異同】くる秋は―くる春は（大）

【現代語訳】訪れる人もいない宿であるが、秋の訪れは八重葎にも妨げられないことだ。

【語句】○くる秋は 訪れる秋は。「わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまづぞかなしき」（古今集・一八六）。大久保本及び所載欄の文獻では全て「くる春は」である。○やへむぐら 幾重にも生い茂った雑草。多く荒廃した住居の様子をいうのに用いる。「やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋はきにけり」（拾遺集・一四〇）。○さはらざりけり 妨げられないことだなあ。八重葎に妨げられないという例に、「花ざかり山辺をおもふ心をばやへむぐらにもさはらじとしれ」（定頼集・五七）、秋が妨げられないでやってくるという例に「葦引の山の山もりもる山も紅葉せさする秋はきにけり」（後撰集・三八四）がある。

【所載】新勅撰集・春上・八／新撰和歌・七七／貫之集Ⅰ・二〇七／三十人撰・一一／三十六人撰・一一／深窓秘抄・四

【参考】作者については一三二〇番歌参照。

一三〇七 やへむぐらおひこしやどこからころもたがためにとかうつこゑのする

【異同】ナシ

【現代語訳】八重葎が生えてきた宿に、誰のためにであろうか、衣を砧で打つ音が響く。

【語句】○おひこし 生ひ来し。生えてきた。○からころも ここでは衣の美称。○うつこゑのする 打つ声のする。槌で衣を柔らかくするために打つ砧の音がする。「から衣うつこゑきけば月清みまだねぬ人を空にしるかな」（貫之集・二五）。漢詩文では李白の「子夜呉歌」に代表されるように、遠征から帰ってくる夫を待ち、

孤閨を守る妻が歌われている。当該歌では、訪れる人がいない家で衣を打つ悲哀を詠んだもの。

【所載】 貫之集Ⅰ・八四

【参考】 作者については一三二〇番歌参照。

一三〇八 よとゝもとりのあみはるやどなればみえかゝらむとくる人もなし

【異同】 ナシ

【現代語訳】 つねづね、鳥を捕まえる網を張るような、訪れる人のない宿なので、対面して「このようである」、と訪れる人もいない。

【語句】 ○よとゝもとに 世とともに。 つねづね。 いつも。「世とともになげきこりつむ身にしあればなぞやまもりのあるかひもなき」（後撰集・七六一）。○とりのあみはるやど 鳥の網張る宿。 門前雀羅を張った住まい。訪れる人のない住居を表す。 史記の汲鄭列伝賛の翟公の故事に、廷尉となつたときは多くの人が訪れていたにも関わらず、その職を廃せられると訪れる人がいなくなり「門前雀羅を設くべし」という状態であつたとある。○みえかゝらむと 見え斯からむと。 対面して、このようであると。「みえ」は「対面し」の意。「このようである」の意の「斯からむ」に鳥が網に「かからむ」を掛ける。 所載欄の貫之集や夫木抄では「身はかからんと」である。

【所載】 夫木抄・一二五五九／貫之集Ⅰ・三二二

【参考】 作者については一三二〇番歌参照。

一三〇九 きくのはなおちてながるゝみづにさへなみのしりなきやどに<sup>さり</sup>げける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 菊の花が落ちて流れる水にまでも、波が立たない宿であることだなあ。

【語句】 ○きくのはな 菊の花。 芸文類聚などに見られる菊水伝説をふまえるか。 菊水は河南省にある川で、上流に菊の花があり、そのしずくがしたり落ちた川の水は甘く、飲めば寿命を延ばすという。 当該歌では、菊の呪力で水に波が立たない、という発想と考えられる。「菊の花下行く水に影見ればさらに波なく老いにけるかな」（貫之集・一九七）。○なみのしりなき 意味不明。 所載欄の貫之集の「波の皺なき」に拠って解した。

波を皺と表現する例は「なにはのうらに たつ浪の 浪のしわにや おぼはれむ」（古今集・一〇〇三）がある。  
○にざりける 「にぞありける」の約。……であることだ。「よのなかにひさしきものはゆきのうちにもと色かへぬ松にざりける」（貫之集・二七九）。

【所載】貫之集Ⅰ・三四八

【参考】作者については一三二〇番歌参照。

一三二〇 つれぐととしふるやどはむまたまのよる<sup>も</sup>ひもながくなりぬべらなり

已上五首 つらゆき

【異同】むまたまの—むは玉の（大）

【現代語訳】変化も無く年を経る家では、夜も昼も長くなってしまったようだよ。

【語句】○つれぐと 変化も中断もなく単調な様子が長く続くさま。○むまたまの 「むばたまの」に同じ。  
黒に関係ある「髪」「夜」「闇」などに掛かる枕詞。ここでは「夜」に掛かる。「むまたまのよるひるくもり暗くとも妹がことばははやくつげてよ」（赤人集・二八〇）。○よもひも 夜も昼も、の意味で解した。○ながくなりぬべらなり 長くなってしまったようだよ。「べらなり」は、古今集時代に多く用いられた、非現実的な虚構表現を示す確定推量の助動詞（中野方子『古今集』における「べらなり」——喩に承接される助動詞——『国文』八十六号 平成九年一月）。六一番歌参照。

【所載】貫之集Ⅰ・四四〇

【参考】「已上五首つらゆき」とあり、一三〇六番から一三二〇番までの五首とも貫之集に収められている。

〔以上五首担当 犬養悦・諸井〕

一三二一 春にさへわすられにけるやどなれば色くらぶべきはなだにぞなき<sup>いせ</sup>

【異同】ナシ

【現代語訳】わたくしの家は、春にまでも忘れ去られた宿ですから、（いただいた花と）美しさを比べられるような花すらありません。

【語句】○春にさへわすられにけるやど 人にばかりでなく、春にまでも忘れられてしまった宿。自分の家について謙辞。詠まれた季節が春だったのであらう。○色くらぶべきはなだにぞなき 色の美しさを比べることのできるような花さえもない。「色」は、花の色彩的な美しさのこと。

【所載】伊勢集Ⅰ・二二三／伊勢集Ⅱ・二二九／伊勢集Ⅲ・二二五

【参考】作者名「いせ」は、伊勢集諸本と一致する。伊勢集Ⅰの詞書は、「となりなる人の、そこにくらべよとて、花をおこせたるに」とあり、伊勢集Ⅱ・Ⅲの詞書もほぼこれと同じである。隣家より贈られた花に対する謝礼の歌。

一三二二 わがやどをさしてこざりし月だにもいらではたゞにかへる物かは

【異同】ナシ

【現代語訳】特にわたくしの家をめざしてやってきたわけでもない月でさえ、家の中にさし入ることなくして、徒らに帰ってゆくでしょうか。(いいえ、ちゃんと家の中までさし入ってくれます。まして、月ならぬあなたが、わたくしの家にお入りにもならずにお帰りになりますとは。)

【語句】○さして 「めざして」の意の「指して」に、月光がさし入るの意の「射して」を掛ける。○いらで 入らずして。人が家の中に入らぬ意の「入らで」に、月光がさし入らぬ意の「入らで」を掛ける。○たゞに なにもしない。徒らに空しく。○物かは ……するものだろうか、いやそうではない。「かは」は反語。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖第五帖「くれどあはず」の項に、「君がためいでてこざりし月だにもいらではただにかへるものかは」(三〇二六)があり、第三句以下がこれと一致する。

伊勢

一三二三 やへむぐらしげるやどにはまつむしのこゑよりほかにとふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】やえむぐらの繁る荒れはてたこの家には、人を待つというあの松虫の声よりほかに、おとずれてくる人もない。



【語句】○やへむぐら 幾重にも深く繁ったむぐら。荒れた家や庭の形容に用いられることが多い。「むぐら」は、カナムグラ・ヤエムグラなど蔓性の雑草の総称。○まつむし 鈴虫の古名と言われる。歌では「待つ」に掛けて詠まれることが多い。ただし、所載欄の文献の歌はすべて、第三句「夏虫の」である。

【所載】後撰集・夏・一九四／詠歌一体・一三／三五記・一九三  
【参考】作者名「伊勢」の根拠は不明。後撰集ではよみ人知らず。

一三二四 おもひあまりわびぬるときはやどかれてあくがれに<sup>ぬ</sup>べきこゝちこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いがこころに余ってつらいときは、ひとりでに家を出て、上の空でさまよい歩きそうな気持ちになってしまふよ。

【語句】○おもひあまり 思ひ余り。もの思いが昂じて、こころのうちに収まりきれなくなつて。○わびぬるときは やりきれなくなつたときは。つらくてたまらなくなつたときは。○やどかれて 宿離れて。家を出て。○あくがれぬべき ふらふらとさまよい出てしまふような。「あくがれ」は動詞「あくがる」の連用形。対象に心ひかれるあまりに、心身が本来あるべき場所を離れてさまよい出ること。

【所載】万代集・二四〇三／夫木抄・一七〇九四／貫之集Ⅰ・六一五

一三二五 わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しななければ

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしの家は、雪がいちめんに降り積もつて人の通う道もない。この雪を踏みわけて訪ねてきてくれる人もいないものだから。

【語句】○ふりしきて 降り敷きて。雪がいちめんに地を覆つたさま。

【所載】古今集・冬・三三二／新撰万葉集・四〇四

【参考】底本第五句「人しなければ」の「し」は、本行に薄く「も」とあるのを消して「し」と重ね書きしてある。底本では「人もなければ」であると見て解釈した。

〔以上五首担当 山下〕

一三二六 わがせこはきませりけらしわがやどのくさもなびけり露もおちたり

【異同】ナシ

【現代語訳】私の夫は、気がついてみるともうおいでになつていたらしい。なぜなら庭の草も踏まれて倒れ伏しているし、葉の露も零れ落ちているから。

【語句】○わがせこ 夫または恋人である男性を親しんで呼ぶ語。○きませりけらし おいでになつていたらしい。「ませ」は尊敬の意をあらわす。「り」は動作の存続をあらわす。「けらし」は回想の助動詞「けり」の連体形「ける」に推定の助動詞「らし」が付いた「けるらし」から変化したものといわれる。所載欄の新撰和歌は「きませりけりな」。○くさもなびけり 草も倒れ伏している。

【所載】新撰和歌・三一九

一三二七 さとはあれて人はふりにしやどなれやにはもまがきも秋のゝらとなる  
そう正へせう

【異同】そう正へせう―そう正へんせう（桂） 秋のゝらとなる―秋のゝとなる（御・桂・大）

【現代語訳】里は荒廃し、住んでいる人は年老いて、手入れの行き届かない家だからでしょうか、邸内も垣根も、すっかり秋の野らの風情でございます。

【語句】○さと 里。山野にたいして、人家の有る所。○人はふりにしやど そこに住んでいる人は年老いて、手入れの行き届かぬ家。「しぐれつゝふりにし宿の言の葉はかき集むれど留まらざりけり」（拾遺集・一一四一）。○には 邸内の敷地。○まがき 柴・竹などであらく編んで作った垣根。○秋のゝらなる 秋の原野のようになっている。校合に用いた三本は「秋のゝとなる」であるが、所載欄の古今集・遍昭集Ⅰ・綺語抄は「秋の野らなる」である。

【所載】古今集・秋上・二四八／遍昭集Ⅰ・二〇／遍昭集Ⅱ・二〇／綺語抄・一六八

【参考】作者名「そう正へせう」は所載欄文献に一致する。光孝天皇が石上（いそのかみ）の滝へ行幸し、遍昭の母の家に立ち寄られた時、遍昭が詠んだ歌。

一三二八 つゆわけてさらにやとはむもみぢばのふりからしてしやどゝみながら

【異同】ナシ

【現代語訳】露の置いた草を踏み分けて、わざわざ訪ねるでしょうか。もみじ葉が散ってすっかり枯れ葉としてしまった庭としりながら。

【語句】○さらにやとはむ わざわざ訪うであろうか。「さらに」はこのうえ。わざわざ。「や」は疑問を表す。○ふりからしてしやど もみじ葉が散ってすっかり枯れ葉と化してしまった庭先。所載欄歌の古今集は「ふりかくしてしみち」。

【所載】古今集・秋下・二八八

やどり

一三二九 あしひきの山べにいまはやどりせじかすみもふかしとふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】山のほとりに、今となつては、仮住まいなどしないつもりだ。霞も濃いし、訪ねてくる人もいないから。

【語句】◎やどり 一、旅先で宿泊すること。二、仮の住みかとすること。当該歌では二、の意味。○山べ 山のほとり。○今は 今となつては。

【所載】続古今集・雑・一四八九

【参考】所載欄の続古今集には作者僧正遍昭とあるが、遍昭集Ⅰ・Ⅱには無い。

つらゆき

一三三〇 やどりして春の山べにねたるよはゆめのうちにもはなぞちりける

【異同】ナシ

【現代語訳】旅先で春の山べに一夜の宿をとった夜は、夢の中にも、昼間見た桜の花が散っていたよ。

【語句】○やどりして 旅の宿をとって。所載欄の古今集詞書によれば、「山寺にまうでたりけるによめる」と

あり、山寺の宿。○ゆめのうちにも 昼間見た花の映像が、夢の中にまで。

【所載】古今集・春下・一一七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 林〕

一三三二 いづこにかやどりとりらむあさひこがさすやほかべのたまざゝのうへに

【異同】さすやほかへの―さすや岡への（御・桂・大）

【現代語訳】古今六帖・第一帖「てるひ」二六九番歌既出。

【語句】○ほかべの 他本に「岡べの」、底本にも二六九番歌では「をかべの」とあるのにより、誤写とみなす。

【所載】古今六帖・第一帖「てるひ」二六九番既出

一三三二 山がつかきほのさけるあさがほはしのゝめならでみるよしもなし

【異同】かきほのさける―垣ねにさける（大）

【現代語訳】山賤の家の垣に咲いている朝顔は、東雲に、篠竹の垣の間からでなくては見るすべもない。

【語句】◎かきほ 垣穂。垣のこと。「ほ」は「秀」の意で、突き出ているさま、人目につくものを表す。そこに生える植物の名と共に歌に詠まれることが多い。「あな恋し今も見てしか山がつかきほにさける大和なでしこ」（古今集・六九五）。○山がつか 山人。山中で暮らす、身分の賤しい者。樵など。○あさがほ 植物名に、

女性の寝起きの顔の意の「朝顔」を掛ける。「垣ほなる君が朝顔見てしかなかへりてのちはものや思ふと」（大和物語・一一一）。植物名としての「あさがほ」は、具体的に何を指すか未詳だが、当該歌では早朝に咲いて日がたけるとしほむ現在のアサガオ（牽牛子）か。○しのゝめ 早朝、東の空がわずかに明るくなる時を指す「東雲」に、「垣」の縁語の「篠の目」を掛ける。「宿近き竹の林にねぐらしてしのめごと」に驚ぞ鳴く」（為忠家初

度百首・二四）。また、東雲は、男女が逢った後の後朝（きぬぎぬ）の別れの時刻でもあった。「東雲のほがらほ

がらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」（古今集・六三七・よみ人知らず）。

【所載】新古今集・秋上・三四四

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の新古今集によると作者は貫之。山賤の家の女の顔は、垣間見でなければ見られないという意を込めるか。

一三三三 こひしともいふ人なしや山がつかきほのはなをなにゝをるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】「恋しい」とも言う人はいないよ。それなのに、山賤の家の垣に咲く花をどうして折り取るのだろう。

【語句】○山がつかきほのはな 一三三二番歌語句欄参照。そこに挙げた古今集・六九五番歌を踏まえて、山賤の家の垣に咲く花に、女性の意を込めるか。

【所載】ナシ

一三三四 山がつかきほにのみやこひわびむわが身も人もつゆのいのちに

【異同】ナシ

【現代語訳】山賤の家の垣ばかり（人知れず）恋の思いに悩むのだろうか。自分自身も恋しい人も、露のようにはかない命なのに。

【語句】○山がつかきほにのみやこひわびむ 一三三三番歌語句欄に挙げた古今集・六九五番歌を踏まえる。「のみ」は限定の副助詞。ただ……だけ。……ばかり。○つゆのいのち 露が消えやすいようにはかない命。「ながらへば人の心も見るべきに露の命ぞ悲しかりける」（後撰集・八九四）。

【所載】ナシ

一三三五 あさぢふの野べやかるらむやまがつかきほの草は色もかはらず

【異同】ナシ

【現代語訳】浅茅の生えている野辺は、今頃はもう枯れていることでしょうか。山賤の家の垣の草は色も変わリません。

【語句】○あさぢふ 浅茅生。丈の低い茅萱の生えている所。浅茅は、秋に色づき枯れていくさまを心変わりに喩えて、歌に詠まれた。「浅茅」で心が浅いことを寓する。「思ふよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことになる」(古今集・七二五)。○かる 「枯る」に、「離(か)る」を掛ける。「時すぎてかれゆく小野の浅茅には今は思ひぞ絶えず燃えける」(古今集・七九〇)。○やまがつかきほ 一三二二番歌語句欄参照。○色もかはらず 浅茅と違つて枯れるどころか色も変わらないということ、心が浅いあなたは心変わりして居るだらうけれど、それに対して、私の心は少しも変わらないという意を込めた。

【所載】新古今集・恋四・一二四五／延喜御集・四

【参考】古今六帖に作者名はないが、延喜御集によると、作者は、三条右大臣藤原定方女、醍醐天皇女御能子(山下道代『歌語りの時代―大和物語の人々―』筑摩書房、一九九三年)。当該歌は、「三条右大臣の女御、久しう参り給はざりけるに／霜さやぐ野辺の草葉にあらねどもなどか人めのかれまさるらむ」という歌に対する返歌で、歌に続いて「と、きこえ給けるを、ちゝおとゞめで給て、御手づからおりて、なでしこにつけてぞ参らせ給ける」とある。

〔以上五首担当 長戸〕

一三二六 なにしをはぐながつきごとにきみがためかきほのくさのつゆのいのちを

伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】「ながつき」という名を持つのならば、毎年長月となることに、「長」というその名にあやかつて、あなたのために、垣の上に置く露のようなはかない命を、長かれと願うことです。

【語句】○なにしをはぐ なにしおはば。……というその名を持つのならば。ここでは、下につづく「ながつき」の「長」にことよせて、「長い」というその名を持つのならば」と言つたもの。○ながつきごとに 毎年長月となるごとに。「ながつき」は陰暦九月の称。下旬にある「つゆ」の語などから推して、九月九日重陽の節に合せて詠まれた歌か。○かきほのくさ 垣の上に生えている草。「かきほ」の「ほ」は秀(ほ)。上にぬきんでているもののこと。「かきま(垣間)」、「かきね(垣根)」などに対する語。○つゆのいのちを 下に「長かれと願う」の意が省略されているものと見る。「つゆのいのちを」とあるのは、「きみ」のいのちをさすものと見ておく。初句「なにしをはぐ」に対する末の句の語法対応がはつきりしないので、完全な現代語訳が示しにくい。

【所載】ナシ  
【参考】作者名「伊勢」の根拠は不明。他文献においても、これが伊勢の作であることを確認することはできない。後撰集・秋下・三九八番には「名にし負へば長月ごとに君がためかきねの菊はにほへとぞ思ふ」という上三句の近似した題しらず・よみ人知らずの歌がある。

一三二七 かきほなる人といへどもこまにしきひもとときあくるきみもなきかな<sup>も</sup>  
人まろ

【異同】ナシ  
【現代語訳】垣ほのように人が取り巻いている、と世の人は言うけれども、ほんとうは、私の衣の紐を解きあけてくれるような恋人は、いないことだ。

【語句】○かきほなる人 「かきほ」は前歌（一三二七番）参照。本文のままならば「かきほ」のような人ということで、取り巻く人の存在が「かきほ」のように目立つ、と解せざるをえない。所載欄の万葉集の歌では「かきほなす人は言へども」であって、「恋の噂があたかも垣のように取り巻いて」というような意味になり、その方が歌意の整合性は高い。○こまにしき 高麗錦。高麗伝来の錦、または高麗風の錦。ここでは「ひも」にかかる枕詞。「こまにしき紐解きあけて夕べだに知らずある命恋ひつつかあらむ」（万葉集・二四一〇（旧二四〇六））。

○ひもとときあくるきみ 着ている衣の紐を解きあけてくれるあなた、すなわち夜を共にする夫または恋人。  
【所載】古今六帖・第五帖「ひも」三三四七、第五帖「にしき」三五三〇／万葉集・二四〇九（旧二四〇五）垣廬鳴 人雖云 狛錦 紐解開 公無 カキホナス（ナル）ヒトハイヘドモコマニシキヒモトキアクルキミモナキカモ かきほなすひとはいへどもこまにしきひもとときあけしきみならなくに／人麿集Ⅲ・四二七  
【参考】作者名「人まろ」は、人麿集Ⅲとは一致するが、万葉集では作者不明歌。夫木抄・一五六五二番には、「かぎりなく人は言へどもこまにしきわがかたひも結びあへなくに」という類似した歌がある。

一三二八 あづさゆみは<sup>る</sup>な<sup>る</sup>の山べにいへゐしてわれまつきかんうぐひすのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の山辺に住まいして、私がまず聞こう、うぐいすの声を。

【語句】◎家 人が生活の本拠としている住居。住まいとしての建築物をさすだけでなく、家庭、あるいは家族と共に居住しているところ、という意味でも用いられる。○あづさゆみ 「はる」にかかる枕詞。○いへゐして 家居して。居住して。家を構えて住んで。

【所載】新古今集・春上・二九／万葉集・一八三三（旧一八二九）梓弓 春山近 家居之 続而聞良牟 鶯之音 アヅサユミハルヤマチカクイヘキシテツギテキラムウグヒスノコエ あづさゆみはるやまちかくいへをればつぎてきくらむうぐひすのこゑ／人麿集Ⅲ・七〇／赤人集Ⅰ・一一八／赤人集Ⅱ・二／家持集Ⅰ・六／家持集Ⅱ・六

一三三二九 春くればうぐひすのねもなつかしきいざぬなかいづくうちむれてゆかむ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来れば、鶯の鳴き音もなつかしく思われます。さあ、鶯のいるいなかはどこなのか、みんなで連れ立ってたずねて行きましょう。

【語句】○ぬなか 京（みやこ）から離れた地方。ひな。「むかしこそ難波ぬなかといはれけめいまはみやこひき都びにけり」（万葉集・三二五（旧三二二））。○うちむれて うち群れて。「うち」は接頭語。みんなでいっしょに連れ立って。

【所載】ナシ

【参考】この一首の中に直接「家」の語は用いられていないが、「ぬなか」の中に「家居」の意が含まれると見て、この題の下に収めたのであろう。

一三三三〇 山かぜにかをたづねてやむめのはなにほへるやどにいへるそめけむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山風によってその香のありかをたずねてきて、この梅の花の咲きにおう宿に、住まいはじめたのでしょうか。



【語句】○山かぜにかをたづねてや 梅の香を運んでくる山風によって、その香のありかを尋ねてであろうか。「や」は疑問の係助詞、結句の「けむ」と呼応している。○いへるそめけむ 住まいを定めて、住みはじめたの  
であろうか。

【所載】貫之集Ⅰ・三一

【参考】貫之集Ⅰで見れば、延喜十四（九一四）年に詠まれた貫之の屏風歌。作者名「つらゆき」は、これと一致する。新勅撰集・春上・三五番には、「山風に香を尋ねてや梅の花にほへる里にうぐひすのなく」と、下句が異なる形で収められている。

〔以上五首担当 青木・山下〕

一三三二 いもがいへのはあいにたてるあをやぎのいまやなくらむうぐひすのころ  
みつね

【異同】はあいにたてる―はひいりにたてる（大）

【現代語訳】あの子の家の入り口に立っている青柳に、今ごろは鶯が来て鳴いていることだろうか。

【語句】○はあいに 這ひ入り。入り口の意。

【所載】後撰集・春上・四一／躬恒集Ⅰ・二三四／躬恒集Ⅱ・一〇／躬恒集Ⅲ・二五八

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一三三三 おとめこがはなるゝ神をゆふやまのくもなくしそいへのあたりみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】少女の振り分け髪を結う、由布山の雲よ、どうか隠さないでおくれ、あの子の家のあたりを見た  
いから。

【語句】○おとめこが をとめこが。少女の。「が」は連体格助詞。○はなるゝ神を このままでは意味が通じ  
ない。所載欄の万葉集には「放髪乎」とある。「髪」を「かみ」と書写し、「神」と誤認したのであろう。「放（は  
な）りの髪」は少女の振り分け髪をいう。伸びるにまかせていた髪を成人すると結い上げる。「くらべこし振り  
分け髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき」（伊勢物語・二三段・四八）。初・二句は「ゆふ」の序詞。○ゆ

ふやまの「ゆふ」は「結ふ」と「由布山」の掛詞。「由布山」は大分県由布市にある山。由布岳。○くもなかくしそ 雲よ隠してくれるな。「な……そ」は禁止をあらわす。

【所載】万葉集・一二四八(旧一二四四) 未通女等之 放髪乎 木綿山 雲莫蒙 家当将見 ヲトメラガフリ  
ワケガミヲユフノヤマクモナカクシソイヘノアタリミム をとめらがはなりのかみをゆふのやまくもなたなび  
きいへのあたりみむ／夫木抄・八八三六

つらゆき

一三三三 かへるかりわがことつてよくさまくらたびはいつこそこひしかりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】帰って行く雁よ、私の言葉を伝えておくれ。旅は、家が本当に恋しいことだ。

【語句】○かへるかり 帰る雁。漢の蘇武が匈奴に捕らえられた時、雁の足に手紙をつけて放ったという故事による。○わがことつてよ 私の言葉を伝えて欲しい。「つてよ」は伝える意の下二段動詞「伝(つ)つ」の命令形。○くさまくら 「旅」の枕詞。○たびはいつこそ 「いつこそ」は、「いづこそ」であれば、旅はどこか、の意。ただし、所載欄の風雅集では、「旅はいもこそ」、貫之集Iでは「旅はいへこそ」、とあり、題の「家」や「こひしかりけれ」との係り結びを考えると、「つ」は「へ」の誤りで、「たびはいへこそ」が本来の姿と思われる、現代語訳はその本文に従った。

【所載】風雅集・恋四・一二二七／貫之集I・七六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

きのらう女

一三三四 人ごとをしげしときみをうづらなくひとのふるいへにあひてやりつる

【異同】きのらう女―きのわう女(桂)

【現代語訳】人の噂をやかしいと、あの人を、(うずらの鳴く)他人のあばら屋に呼び出して、こっそり逢って帰したことだ。

【語句】○人ごとを 人言を。人の言うことを。人の噂を。○しげしと 「繁しと」で、甚だしいと。○うづ

らなく「うづら」はきじ科に属し、人の住まない荒れ地に棲む習性があるところから、「古」に掛かる枕詞。○ひとのふるいへ 自分の所有でない廃家。人目につかない逢い引きの場所として用いた。

【所載】万葉集・二八〇九（旧二七九九）人事平 繁跡君平 鶉鳴 人之古家 爾 相語而遣都 ヒトゴトヲシゲシトキミヲウヅラナクヒトノイニシヘニ（フルイヘニ）アヒイヒテヤリツ ひとことをしげみときみをうづらなくひとのふるいへにかたらしひてやりつ／夫木抄・五六九四

【参考】作者名「きのらう女」は「紀郎女（きのいらつめ）」であろうが、他文献では確認できない。ただし「きみを」と言っている内容から考えても女の歌であろう。

一三三五 思にしあまりにしかばすゑをなみいでゝぞゆきしいへのあたりみよ<sub>に</sub> 人まろ

【異同】すゑをなみ―すへをなみ（大）

【現代語訳】何とも思案にあまつてしまったので、どうしようもなく、出かけていったことだ。あの子の家のあたりを見るに。

【語句】○思にしあまりにしかば 「思にし」は、「思ひにし」とも、「思ふにし」とも読めそうだが、一応「思ひにし」と読んで、「思ひ」を名詞として解した。思いにあまつてしまったので。「し」は強めの副助詞。ここは順接確定条件の「……ば」と対応する。○すゑをなみ 大久保本に「すへをなみ」とあり、所載欄の万葉集にも「為便無三」とあるので、本来「すべをなみ」だったのであろう。「すべ」は、手段、方法。どうしようもなく。仕方がなくて。

【所載】万葉集・二五五六（旧二五五一）念之 余者 為便無三 出曾行之 其門平見尔 オモフニシアマリニシカバスベヲナミイデテゾユキシノカドヲミニ おもひにしあまりにしかばすべをなみいでてぞゆきしそのかどをみに

【参考】作者名を「人まろ」とするが、他文献では確認できない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一三三六 いもがありてつぎてみてましやまとなるおほしまみねにいへもあらましを

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいて、（私はそのあなたを）いつもいつも見ていたいの。大和の大島嶺に家もあればよいものを。

【語句】○いもがありて あなたがいて。「いも」は「せ」に對する親しい女性の称。○つぎてみてましを 間をおかずにいつも見ていたいのに。「つぐ」は「続けてする」意。「まし」は事実に反する仮定の上にたつて推量・意向を表すので、不満や希望の意をこめて使われることが多い。○おほしまみね 所在未詳。○いへもあらましを 家もあつたら良いのに。

【所載】新千載集・恋四・一四四六／万葉集・九一 妹之家毛 繼而見麻思乎 山跡有 大嶋嶺尔 家母有猿尾 一云、妹之当 繼而毛見武尔 一云、家居麻之乎 イモガイヘモツギテミマシラヤマトナルオホシマミネイヘモアラマシラ 一云、イモガアタリツギテモミムニ 一云、イヘホセマシラ いもがいへもつぎてみましをやまとなるおほしまのねにいへもあらましを 一云、いもがあたりつぎてもみむに 一云、いへをらましを／夫木抄・九〇五一／井蛙抄・四〇五

【参考】万葉集の詞書によれば天智天皇が鏡王女に賜った歌。万葉集九二番には「秋山之 樹下隠 逝水乃 吾許曾益目 御念從者 アキヤマノコノシタガクレユクミヅノワレコソマサメミオモヒヨリハ あきやまのこのしたぐくれゆくみづのわれこそまめおもほすよりは」（鏡王女奉和御歌一首）がみえる。

## となり

伊勢

一三三七 かきごしにみればかひなしさくらばなねごめにかぜはふきもこさなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】垣根越しに見ると、（美しい）桜の花もだいなしです。風はいつそのこと桜を根ごと吹き送ってほしいものです。

【語句】◎となり 家や土地が相接する状態。用例は万葉集からあるが、歌題としては永久百首（一一一六年）に見える。後拾遺集一三八番詞書には「隣花」とある。古今集・一〇二二番歌「冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」のように時間的に隣接する季節をさす用例もあるが、古今六帖では隣家に関する歌が並ぶ。○かきごしにみればかひなし 垣根越しに見たのでは甲斐がない。○ねごめに 根ごとに。根こそぎに。所載欄

の伊勢集では全て「ねながらかぜの」。○ふきもこさなむ 吹きよこしてほしい。「吹き越す」は、へだての向こう側にあるものを、こちら側へ吹きよこすこと。「なむ」は願望を表す終助詞。

【所載】後撰集・春下・八五／新撰朗詠集・五三七／伊勢集Ⅰ・三六四／伊勢集Ⅱ・三七〇／伊勢集Ⅲ・四九〇  
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では一三三九番と贈答になっている。

一三三三八 ちかければあはむとおもふに春なれどはなのゆきにぞふりへだつめる

【異同】ナシ

【現代語訳】近いのでお会いしようと思うのですが、春なのに雪のように降る花に隔たれているようです。

【語句】○はなのゆき 花を雪にたとえた表現。「またやみむかたののみの桜がり花の雪ちる春のあけぼの」（新古今集・一一四）。

【所載】ナシ

一三三三九 さくらばなうへてわれのみみむとやはとなりありきは人やしるとぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】桜の花を植えて、私ひとりだけで見ようというのでしょうか、そうではありません。人（あなた）が隣歩きを知っていらつしやるかと思つて（そして来てくださると思つて）のことなのでしょう。

【語句】○さくらばな 桜花。所載欄の伊勢集Ⅲでは「梅花」。○うへて うゑて。植えて。○みむとやは 見ようとしてのことであろうか。いやそうではない。「やは」は反語を表す。○となりありき 隣歩き。隣まで歩くこと。○人やしるとぞ あなたが知っているかと思つて。ここの「人」は第二人称。相手のこと。隣人の隣歩きを期待している。

【所載】伊勢集Ⅰ・三六五／伊勢集Ⅱ・三七一／伊勢集Ⅲ・四九一

【参考】伊勢集では一三三七番歌に対する朝忠の返歌。

井

やかもち

一三四〇 わがやどのいた井のしみづさとゝをみ人しくまねばみくさおゐにけり

【異同】 いた井のしみづ―坂井の清水（大）

【現代語訳】 私の家の板井の清水は、人里が遠いので、人が汲まないものだから、水草が生えてしまいましたよ。

【語句】 ◎井 泉や川から水を汲みとる所と、地を掘り下げて地下水を汲みとる所があった。万葉集に「御井」という表現があるように、古代では井戸聖視の傾向が強かった。この他万葉集では「走り井」「石井」「山の井」等様々な井が詠まれたが、古今集以後は「山の井」が主流となる。○わがやどの 私の家の。古今集では「わがかどの」。○いた井のしみづ 「板井」は、板を筒として囲った井。「清水」は清く澄んだ水。○みくさおゐにけり みくさおゐにけり。水草が生い茂ってしまいましたよ。

【所載】 古今集・神遊びの歌・一〇七九／綺語抄・二一九

【参考】 作者名「やかもち」とあるが、所載欄の文献に作者名はない。古今集では、神前で樂人が手に持つて舞う採物についての歌で、これは水を汲む柄杓を採物とする歌。

〔以上五首担当 三浦〕

一三四一 おほはらやせがゐのみづをてにくみてとりはなくともあらひてゆかむ

【異同】 あらひてゆかむ―あそひてゆかむ（桂・大）

【現代語訳】 大原の清和井（せがい）の水を掌に汲んで、一晚中神樂や管弦などを演奏していこうよ。夜明けをつげる鶏がないても。

【語句】 ○おほはら 山城国の歌枕。大原と呼ばれる地は二つあり、一は京都市左京区の「大原」。寂光院、三千院があり、隠遁する土地のイメージとして詠まれる。二は京都市西京区の「大原野」。小塩山、大原野神社を中心に藤原氏の神社として慶賀の場で詠まれることが多い。○せがゐ 清和井。山城国の歌枕。京都市左京区の三千院や、西京区の大原野神社境内に遺跡と伝える所があるが実地は不明。「大原やせがゐのみぐさかきわけておりやたたまし涼みがてらに」（好忠集・一三七）。○てにくみて 掌で汲んで。所載欄の歌はいずれも「ひさごもて」。○あらひて 「あそびて」の誤りであろう。桂宮本・大久保本及び所載欄の歌はいずれも「あそびて」。現代語訳はこれによって訳した。あそびは神樂を演じたり、詩歌、管弦などを奏すること。

【所載】 夫木抄・一二四七九／袖中抄・四二四

一三四二 おちたぎつはしりゐのみづきよければすてゝはわれはさかりかねてむ 伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】湧き出る水のあふれ落ちて激しく流れる走り井の水は、あまり清らかなので、此所を素通りして離れて行くことなど、私はとてもできないだろう。

【語句】○おちたぎつ 勢いよく落ちて湧きかえる(水のさま)。○はしりゐ 本来は水が勢いよく湧き出て流れる井戸の意であったが、次第に逢坂の関に近い特定の井戸を言うようになった。「井は、ほりかねの井。玉の井。走り井は逢坂なるがをかきなり。」(枕草子・井は)。「逢坂の関とはきけどはしりゐの水をばえこそとどめざりけれ」(後拾遺集・五〇〇)。○きよければ 澄んでいるので。○すてゝは 放つておいては。○さかりかねてむ 離れることがどうしてもできないだろう。「さかり」は離れる、遠ざかるの意。「かね」は……しかねるの意の接尾語。「てむ」はきつと……だろう、と強い意志をあらわす。「て」は完了の助動詞「つ」の未然形。「む」は推量の助動詞。

【所載】万葉集・一一三一(旧一一二七) 隕田寸津 走井水之 清有者 度者吾者 去不勝可聞 オチタギツハシリミミヅノキヨケレバワタラバワレハユキカテヌカモ おちたぎつはしりゐみづのきよくあればおきてはわれはゆきかてぬかも

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献には無し。伊勢集にも無し。

一三四三 わくがごとめにはみゆれどわがやどのいしゐのしみづぬれまさりけり

【異同】めにはみゆれと―目には見ゆると(大)

【現代語訳】こんこんと湧き出ている我が家の石井の清水は、あたかも沸き立っているかのように目には見えるが、少しも温むことなく清冽な冷たさを保っているなあ。

【語句】○わくがごと 湯が沸騰するように。水が噴き出ている様子の「湧く」と掛ける。○いしゐのしみづ 岩間に湧く清水。石で囲った井戸の清水。○ぬれまさりけり 所載欄の歌はみな「ぬるまさりけり」であるので現代語訳はこれによって訳した。なま暖かくはならないなあ。「ぬるむ」は生暖かい、ぬるいの意。「けり」は眼

前の事実にはっと気づいた驚きや詠嘆の気持ちを表す。

【所載】玉葉集・雜二・二〇六八／伊勢集Ⅰ・六六／伊勢集Ⅱ・六八／伊勢集Ⅲ・六五

一三四四 みくなすのなかにむかへるさくらゐのたえずかよはむソコニツマモカそらにつゝむか

【異同】ナシ

【現代語訳】みくなすの中にむきあっている桜井の水が絶えないように、私は絶えず通って来よう。君はうわの空で逢うのを気兼ねするのか。

【語句】○みくなすの 不明。○むかへる 真正面にむきあっている。○さくらゐ 山城、摂津、伊予の歌枕（能因歌枕）。奈良県桜井市とも、大阪府三島郡島本町桜井ともいわれる。上三句までは「たえず」にかかる序詞。

○そらに 心が落ちつかず。うわのそらで。○つゝむか 気兼ねするのか。隠すのか。

【所載】万葉集・一七四九（旧一七四五）三栗乃 中余向有 曝井之 不絶将通 彼所余妻毛我 ミツクリノナカニムカヘルサラシキノタエズカヨハムソコニツマモガ みつぐりのなかにむかへるさらしゐのたえずかよはむそこにつまもが／夫木抄・一二四五―

一三四五 むさしなるほりかねのゐのそこをあさみおもふソコろをなにとへん

【異同】ナシ

【現代語訳】武蔵の国にある堀兼の井戸は底が浅いので、私の深く思っている心を何にたとえたらいいのだろうか。

【語句】○むさしなる 武蔵の国にある。○ほりかねのゐ 武蔵国の歌枕。埼玉県狭山市堀兼にある井戸。「ほりかねの井」は掘ることが困難な、掘りにくい井戸のことです、すぐに土砂が崩れて底が浅い意味にも、水源が深く掘りにくい意味にも理解されていた。後者の例として「いかでかと思ふ心は堀兼の井よりもなほぞ深さまされる」（伊勢集・三九四）がある。○おもふソコろ 相手を深く思っている心。

【所載】夫木抄・一二四七四

〔以上五首担当 林〕



一三四六 あしびなすさかえし君がほりし井のいは井のみづはめとあかぬかも

【異同】めとあかぬかも―めにあかぬかも（御・大）

【現代語訳】栄華を誇った君が掘らせた井戸の、石井の水は、飲んでも飲み飽きることがない。

【語句】○あしびなす 「栄ゆ」を修飾する措辞。馬酔木の花は、房状の小花を一斉に咲かせることから、その様子を人の栄華に喩えた。○さかえし君が 栄えられた君が。「はしきやし栄えし君のいましせば昨日も今日も我を召さましを」（万葉集・四五七（旧四五四））。○いは井のみづ 石間から沸く水、また石で囲って造った井の水。○めとあかぬかも 意味不通。所載欄の万葉集歌「のめどあかぬかも」に拠って解す。飲んでも飲み飽きることがない。

【所載】万葉集・一一三二（旧一一二八） 安志妣成 栄之君之 穿之井之 石井之水者 雖飲不飽鴨 アシビナスサカエシキミガホリシキノイハ井ノミツハノメドアカヌカモ あしびなすさかえしきみがほりしゐのいしゐのみづはのめどあかぬかも

まがき

一三四七 ゆふぐれのまがきはやまとみえなむよるはこえじとやどりとるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】夕暮れのころの籬は山に見えて欲しい。そうすれば、夜のうちには（山を）越えられまいと、ここで宿を取るようになるから。

【語句】◎まがき 竹や柴などで目を粗く編んだ垣。女郎花、撫子、虫など多種多様な題材と共に詠まれ、特に「籬の菊」は好んで詠まれた。単に風景として詠まれる他、家の内と外とを隔てる物であることから、恋に関連して詠まれることも多い。○まがきはやまとみえなむ 籬は山と見えて欲しい。

【所載】古今集・離別・三九二／新撰和歌・一八九／遍昭集Ⅰ・七／遍昭集Ⅱ・七／和歌用意条々・七／井蛙抄・一五二

一三四八 ゆふぐれのまがきにさけるなでしこのはなみるときぞ人は恋しき

【異同】ナシ

【現代語訳】夕暮れの籬に咲いている撫子の花を見る時こそ、あの人のことが恋しくてたまらなくなることだ。  
【語句】○なでしこ ナデシコ科の多年草。秋の七草の一つ。山野に自生するが、庭にも植栽された。異名の「常夏」に「床」を掛けることから愛しい女性、恋の相手を想起させる花。○はなみるときぞ人は恋しき 花を見る時こそあの人のことが恋しくてたまらない。

【所載】ナシ

一三四九 ふゆながらはるのとなりのちかければなぐさよりぞはなはちりける  
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家はまだ冬のままなのだが、春は隣まで来ていて近いので、家を隔てている中垣から雪がもう花のように散ってきたのだよ。

【語句】○ふゆながら まだ冬のままであるのに。「ながら」は、……のままで、……であるのに、の意。「冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ」（古今集・三三〇）。○はるのとなり 春に近いこと。冬から春に移ろうとする、変わり目の時期。「梅の花匂ひの深く見えつるは春の隣のちかきなりけり」（拾遺集・一一五六）。当該歌では所載欄古今集の詞書に「明日春立たむとしける日……」とあることにより、立春前日を指していることが分かる。○なぐさき 中垣。隣家との隔ての垣根。物と物との隔て。○はなはちりける 花は散りける。所載欄古今集の詞書に「隣の家のかたより風の雪を吹き越しけるを見て」とあることにより、ここにいう花は雪の喩である。

【所載】古今集・雑体・一〇二一／深養父集・一八

【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、「春は東から隣まで来ているというのも大げさな設定だが、実は隙間だらけの中垣を越えてというのも大げさである。つまりすべて大げさに構えて言っていると、この歌の誹諧性があった」とする。

つらゆき

一三五〇 春はむめあきはまがきのきくのはなおのがゝかくぞあはれなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】春は梅、秋は籬に咲く菊の花。その各々の花の香りは、このように心惹かれるものなのだ。

【語句】○春はむめあきはまがきのきくのはな 春は梅、秋は籬の菊の花。春秋を代表する花を挙げた。○おのがゝかくぞ 己が香、斯くぞ。それぞれの花の香りがこのように。

【所載】ナシ

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、その根拠は不明。貫之集Ⅱには「春は梅秋は籬の菊の花おのがじしこそ恋しかりけれ」（八八）と上三句の一致する歌がある。

〔以上五首担当 杉本・吉田〕

一三五一 春さればそのはななくたしわがこえしいもがかきほはあれゆかむかも

【異同】そのはななくたし—うのはななくたし（御・桂・大）

【現代語訳】春になると、花をいためてひそかにわたしが越えたあの子の家の垣根は、今は荒れてゆくのか（もう通えなくなつて）。

【語句】○そのはな 底本は「そのはな」だが、右傍に「う」と書く。諸本は「うのはな」。所載欄の万葉集にも「うのはな」とある。「うのはな」は「うつぎ」のこと。○くたし くだす。朽ちさせる。くさらせる。○いもがかきほ 妹が垣ほ。「垣ほ」の「ほ」は、上にあらわれて見えるものの意。垣、垣根。○あれゆかむ 荒れ行かむ。荒れていくだろう。「む」は推量の助動詞。

【所載】万葉集・一九〇三（旧一八九九）春去者 宇乃花具多思 吾越之 妹我垣間者 荒来鴨 ハルサレバウノハナグタシワガコエシイモガカキマハアレニケルカモ はるさればうのはなぐたしわがこえしいもがかきまはあれにけるかも

一三五二 なら山のみねもきりあふむべしこそまがきのしたにゆきはきえけれ

【異同】なら山の—なか山の（大） ゆきはきえけれ—ゆきは消けり（桂）

【現代語訳】なら山の峰も霧が覆っている。なるほどその時期になったから垣根の下に雪は消えたのだった。  
【語句】○なら山 奈良山。平城山とも。奈良市の北にある山。○きりあふ 霧り合ふ。霧があたりをおおう。  
「霧る」は動詞。○むべしこそ うべしこそ、ともいう。まことにもつともだ。

【所載】万葉集二二二〇（旧二二一六）奈良山乃 峰尚霧合 宇倍志社 前垣之下乃 雪者不消家礼 ナラヤ  
マノミネナホキリアフウベシコソマガキノシタノユキハケズケレ ならやまのみねなほきらふうべしこそまが  
きがもとのゆきはけずけれ／人集曆Ⅲ・一九五

【参考】所載欄の万葉集では「垣根の下に雪はきえずに残っている」、とちやうど反対の表現となる。

一三五三 うつたへにまがきのすがたみまほしみゆくとはいもをみにこそきつれ  
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】決して、まがきの様子を見たくて行くのではありません。あなたを見にきたのです。

【語句】○うつたへに 決して……ではない。下に否定を伴うのが一般的だが、ここには否定の言葉がない。「ゆくとほ」のあとに「言はじ」などを補う。○まがきのすがた 垣根の様子。○みまほしみ 見たくて。「見る」に形容詞「まほし」が接続し「見まほし」。原因を表す接尾語「み」がついたかたち。○いもを 男性は恋人を「イモ」と呼ぶ。○みにこそきつれ 他でもない……を見るためやってきたのだ。「こそ」は強意。「梅の花見にこそきつれ鶯の人來（ひとく）人來といとひしもをる」（古今集・一〇一一）。

【所載】万葉集・七八一（旧七七八）打妙尔 前垣之酢堅 欲見 将行常云哉 君平見尔許曾 ウツタヘニマ  
ガキノスガタミマクホリユカムトイヘヤキミヲミニコソ うつたへにまがきのすがたみまほりゆかむといへ  
やきみをみにこそ／奥儀抄・三五四／袖中抄・七六〇／和歌色葉・一二四

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。所載欄の万葉集では、巻すべて相聞歌ばかりの巻四  
にあり、紀女郎に贈った家持の連作五首の一つである。

一三五四 おもふ人こむとしりせばやへむぐらはゐこるにはにたましかましを  
には

【異同】 はゐこるにはに―はひこる庭に（桂・大）

【現代語訳】 大切なあの方がいらつしやると知っていたら、雑草の所狭しと生えるこの庭に一面美しい玉を敷き詰めるものを。（そうは出来なかった。）

【語句】 ◎には 庭。広い場所。家の庭を指す場合も、また宴会や行事などが催される場所を指す場合もある。○こむとしりせば 来むと知りせば。来ると知っていたら。「せば……まし」は反実仮想の表現で、実際とは異なることを仮定する。○やへむぐら 八重葎。アカネ科の蔓性の雑草を指す場合もあるが、ここでは普通名詞として解す。生い茂る蔓草。○はゐこる 「はひこる」の表記の「ひ」が「ゐ」とされた。古く訓点語に「滂」「ハヒコリ」とある。満ちる、充滿する、の意。一面に生えるさま。「はひこれる葛の下ふく風の音も誰かは今は聞くべかりける」（斎宮女御集Ⅰ・三九）。○たましましを 玉敷かましを。玉を敷こうものを。「玉」は、寶石。「玉敷く」は、玉を敷き並べる。「むぐらはふいやしき宿もおほきみのみゆきと知らば玉しましを」（古今六帖・一二二七）。

【所載】 万葉集・二八三五（旧二八二四） 念人 将来跡知者 八重六倉 覆庭尔 珠布益乎 オモフヒトコム トシリセバヤヘムグラハヒタルニハニタマシカマシヲ おもふひとこむとしりせばやへむぐらおほへるにはにたましましを／和歌童蒙抄・三八一

一三五五 おとめごがたまもすそびくこのにはに秋かぜふきてはなはちりつゝ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 少女たちが美しい裳裾をひいて歩むこの庭に、秋風吹いて花はあちこちに散っている。

【語句】 ○おとめご をとめご。若い娘。○たまもすそびく 玉裳裾びく。所載欄の万葉集では「須蘇婢久」と記し濁音である。美しい衣裳の裾を引く。参考欄の万葉集の詞書では、宮中での詠歌であったことがわかる。○このには この庭。宴は「内南安殿（うちのみなみのやすみどの）」であった。この場所を「庭」といったことがわかる。○はな 秋の花である。風に散る光景。参考欄参照。

【所載】 万葉集・四四七六（旧四四五二） 平等壳良我 多麻毛須蘇婢久 許能尔波尔 安伎可是不吉弓 波奈波知里都都 ヲトメラガタマモスソビクコノニハニアカルゼフキテハナハチリツツ をとめらがたまもすそびくこのにはにあきかぜふきてはなはちりつゝ／夫木抄・四五四〇／和歌童蒙抄・四八二一

【参考】 同じ場で詠じた歌に、「秋風の吹き扱（こ）き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも」（万葉集・

四四七七（旧四四五三）がある。

〔以上五首担当 平野〕

一三五六 ありそうみのはまにもあらぬにはきてかずしられぬはわすれでぞつむ

【異同】ナシ

【現代語訳】荒磯海の浜でもない庭に来て、数限りない砂子は、忘れないで積んでくださったのですね。

【語句】○ありそうみのはまにもあらぬ 荒磯海の浜でもない。「ありそうみ」は荒波の打ちつける浜。「昔より思ふ心はありそ海の浜の真砂は数も知られず」（大和物語・一一八段）のように、砂の多さを詠む例がある。○にはきて 庭に来て。所載欄の伊勢集では「にはにても」。○かずしられぬは 数限りないことは。砂の数の限りなさど解した。伊勢集では「かずしらねば」。○わすれでぞつむ 忘れないで積む。「有そ海の浜のまさごとたのめしは忘るる事のかずにぞ有りける」（古今集・八一八）の「忘るる事のかず」を逆転させ、当該歌では忘れていないことを表現したか。

【所載】伊勢集Ⅰ・二二二／伊勢集Ⅱ・二二七／伊勢集Ⅲ・二二四

【参考】所載欄の伊勢集の歌の詞書によれば、庭の砂子を提供してくれた人に対する謝礼の歌。

にはとり

一三五七 こぬ人をいまや／＼とよますがらまつにはとりのこゑのみぞする

【異同】ナシ

【現代語訳】訪ねて来ない人を、今来るか今来るかと夜通し待っていると、（待つ人は一向に来ないで）鳥の声が聞こえてくるばかりだ。

【語句】◎にはとり 鶏。キジ科の鳥。肉や卵を食べるために古来飼育されてきた。和歌では夜明けを告げ、後朝の別れを促すものとして詠まれる。古今六帖の「にはとり」題に「ゆふつけ鳥」の歌が見えることから「ゆふつけ鳥」は鶏の異名とされる。○よもすがら 夜通し、終夜。「すがら」は、初めから終わりまで続く意を表す。「なにごとと思ふともなくよもすがらねぬにわけぬる夜をぞうらむる」（中務集・二二四）。○まつにはとりの待つには鳥の。「にはとり」の語を詠み込む。

【所載】ナシ

一三五八 くれたけのふしてねぬべきよもすがらまつにはとりのなきあかすまで

【異同】ナシ

【現代語訳】（呉竹の）臥して寝るはずの一晚中、（起きて恋しい人を）待っていると、鳥が鳴き明かすほどだ。  
私も泣きながら夜を明かすほどだ。

【語句】○くれたけのふしてねぬべきよもすがら 臥して寝るはずの一晚中。「くれたけ」は淡竹（はちく）の異名。「くれたけの」は「節（ふし）」や「節（よ）」に掛かる枕詞。当該歌と同様「ふし」に掛かる例として「くれたけのゆくすゑ遠きふしなるをまだき夜がれと人やみるらん」（一条撰政御集・二七）などがある。「ふし」は「臥し」と「節（ふし）」の掛詞。「よ」は「夜」と「節（よ）」の掛詞。「節（ふし）」「節（よ）」は「くれたけ」の縁語。○まつにはとりの 一三五七番歌参照。○なきあかすまで 鳴き明かすほどだ。「なきあかす」はなきながら夜を明かすこと。「人知れぬ思ひやしげきほととぎす夏の夜をしも鳴き明かすらん」（新撰万葉集・八三）。「なき」に鶏が鳴く意と、人が泣く意を掛ける。「まで」は事柄の程度を表す助詞。

【所載】ナシ

一三五九 にはとりのかけのたりをのしだりをのなが／＼しよをひとりかもねん

【異同】ナシ

【現代語訳】鶏の長く垂れ下がっている尾のように長い夜を、一人で寝るのであるうか。

【語句】○かけのたりをのしだりをの 鶏の長く垂れ下がっている尾。「かけ」は鶏の古名。神楽歌に「には鳥はかけると鳴きぬなり」とあり、鳴き声によるもの。「たりを」「しだりを」はいずれも長く垂れ下がる尾。上三句は「長々し」を導く序。「庭つ鳥かけの垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも」（万葉集・一四一七〔旧一四一三〕）。○ひとりかもねん 一人で寝るのであるうか。「かも」は、係助詞「か」＋係助詞「も」。疑問の意を表す。

【所載】夫木抄・一二七五九

【参考】三句以降が同じ歌として、百人一首にも採られて有名な「あしひきのやまどりのをのしだりをのながな

がしよをひとりかもねむ」(万葉集・二八一三、古今六帖「山どり」九二四)がある。

一三六〇 こひく／＼てまれにこよひぞあふさかのゆふつけどりはなかずもあらなん

【異同】ナシ

【現代語訳】恋し続けて、稀に今夜は逢うのだ。(夜明けを告げる)逢坂のゆふつけ鳥は鳴かないでほしいものだ。

【語句】○こひく／＼て 同じ語を重ねて、その語の意味の継続を表す。恋し続けて。○まれにこよひぞあふさかの逢坂は近江国の歌枕。奈良時代以来逢坂の関が置かれ、畿内と東国の境界として交通の要地であった。和歌では「逢ふ」という言葉に掛けて恋歌で詠まれる例が多い。こしも「稀に今宵ぞ逢ふ」の「逢ふ」と「逢坂」の掛詞。○ゆふつけどり 鶏の異称。呼称の由来は不明であるが、尾が白い木綿を垂らしたように見えることから名付けられたとする説もある。古今集に逢坂の関とともに詠まれた例が三首見られ、院政期の歌学書には、都に疫病が流行すると、疫病を追い払うために逢坂など都を守る四つの関で「四境祭」が行われて鶏に木綿をつけて放つと説明するが、明証はない。古今和歌集打聴に「関には暁を告る鶏をおくべき也」とあり、函谷関の故事のように、逢坂の関と鶏には関わりがあったか。「相坂のゆふつけどりもわがごとく人や恋しきねのみなくらん」(古今集・五三六)。

【所載】古今集・恋三・六三四

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

一三六一 あふさかのゆふつけどりにあらばこそ人のゆきくをなきつゝもみめ いせ ナク／＼モミメ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関のゆふつけ鳥であるならば、あなたの行き来を鳴きながら(泣きながら)見送るのでしようけれど、逢うこともない私にはそれでもできません。

【語句】○あふさか 逢坂。近江国の歌枕。逢坂の関付近。四三三番歌、四七二番歌参照。所載欄の古今集の詞書には、「中納言源昇の朝臣の近江介に侍りける時、よみてやれりける」とあり、近江介である源昇が、任地



の近江と京の往復にしばしば逢坂の関付近を通ったために女が詠んでやった歌。○ゆふつけどり 世の中が騒がしい時、都の四境の関で、木綿（ゆふ）を付けて放った鶏という。「逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や恋しき音のみなくらん」（古今集・五三六）。○あらばこそ 「ば」は順接仮定条件。……であるならばこそ。○なきつゝもみめ 鳴きながらも見ることでしよう。鶏が鳴きながら見ることと、自分が泣きながら見送ることを掛ける。「も」は強意の副助詞。「め」は推量の助動詞「む」の已然形で「こそ」の結び。「逢坂」のゆふつけ鳥であるなら、あなたの行き来を見られるが、逢うこともできない自分はそれがかなわない、ということ。「人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りも乱れめ」（古今集・七八三）。

【所載】古今集・恋四・七四〇／綺語抄・六〇八／和歌童蒙抄・七八八／奥儀抄・五三九／袖中抄・一〇四五／和歌色葉・二七一

【参考】作者名「いせ」とあるが、古今集、和歌童蒙抄、袖中抄では閑院の作、綺語抄、奥儀抄、和歌色葉は作者名なし。

一三六二 たがみそぎゆふつけどりぞからころもたつたの山にたちかへりなく

オリハヘデ

【異同】ナシ

【現代語訳】誰の襖のために木綿を付けた鳥であるのか、竜田の山で繰り返し鳴いているよ。

【語句】○みそぎ 罪や穢れを洗い流して身を清浄にすること。○ゆふつけどりぞ 木綿つけ鳥なのか。「ゆふつけ鳥」は、一三六一番歌参照。大和と河内の境の竜田山にも放ったことがあったか。……であるのか。○からころも 「裁つ」の連想から、「たつたの山」を導く枕詞。「ゆふつけ鳥」の「ゆふ（木綿）」、「たつたの山」の「たつ（裁つ）」は「唐衣」の縁語。○たつたの山 奈良県北西部三郷町立野の竜田本宮の西方の山。大和と河内を結ぶ「竜田越え」で知られる。四三六番歌、一〇五七番歌参照。○たちかへり 何度も繰り返し。

【所載】古今集・雑下・九九五／新撰和歌・二二三／猿丸集Ⅰ・四七／俊成三十六人歌合・二二／時代不同歌合・四七／俊頼髓脳・三一四／綺語抄・六〇七、六〇九／袖中抄・一〇四六／六百番陳状・一三六／近代秀歌・一〇八／心敬私語・九八／大和物語・二五八

【参考】大和物語（二五四段）には、京から来た男が大和の国に住む美しい娘を盗んで逃げ、日暮れて竜田山に宿った時、泣き止まぬ女に詠みかけた歌として載る。

一三六三 あかつきととりぞなくなるよしへやしひとりぬるよはあけばあけなん

【異同】ナシ

【現代語訳】 曉だからといって鳥が鳴いているのが聞こえる。もうどうにでもなれ、一人で寝る夜は明けるなら明けてしまえ。

【語句】 ○あかつきと あかつきだからと。「あかつき」はこれから夜が明けようとするまだ暗い時分。○とりぞなくなる 鳥ぞ鳴くなる。鶏が鳴くのが聞こえる。「なる」は音声の存在や聴覚による推定を表す「なり」の連体形。○よしへやし よしゑやし。副詞「よし」に上代の間投助詞「ゑ」、「やし」が付いたもの。ある事態をやむをえないと容認する。どうなるうとも。「天の原ふりさけみれば夜ぞふけにけるよしゑやし」一人ぬる夜はあけばあけぬとも（万葉集・三六八四（旧三六六二））。○あけばあけなん 明けるなら明けられいい。「あけば」は、下二段動詞「明く」に順接仮定条件の接続助詞「ば」がついた形。「あけなん」の「なん」は希求の終助詞。

【所載】 万葉集・二八一〇（旧二八〇〇） 旭時等 鶏鳴成 縦恵也思 独宿夜者 開者雖明 アカツキトトリ ハナクナリヨシエヤシヒトリヌルヨハアケバアクトモ あかときとかけはなくなりよしゑやしひとりぬるよはあけばあけぬとも

かど

一三六四 わがやどはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど  
みわの御

【異同】ナシ

【現代語訳】 私の住まいは三輪山のもと。恋しいなら訪ねて来て下さい。杉の立っている門です。

【語句】 ◎かど 家の周囲に巡らした囲いの出入り口。また家の出入り口。門。門口。○みわの山もと 三輪山の山のもと。三輪山は大和の国の歌枕。現在奈良県桜井市の東北部。大神（おおみわ）神社があり、山自体が御神体となっている。○こひしくは 「は」は形容詞の連用形「く」「しく」を受けて順接仮定条件を表す接続助詞的用法の係助詞。恋しいなら。恋しかったら。「恋しくは見てもしのばむもみちばを吹きならしそ山おろしの風」（古今集・二八五）。○とぶらひきませ 訪ねてきてください。「ませ」は、尊敬の補助動詞「ます」

の命令形。○すぎ スギ科の常緑針葉樹。万葉集に「味酒を三輪の祝がいはふ杉手触れし罪か君にあひがたき」(万葉集・七一五(旧七一三))と見え、既に三輪山の神木として歌われているが、以後の歌に大きな影響を与えたのは当該歌である。古今榮雅抄には、「宿を教へたる也。三輪の山をたづねしるしの杉などよむことは此歌よりおこれり。」とある。

【所載】古今六帖・第六帖「すぎ」四二七六／古今集・雜下・九八二／新撰和歌・三一六／俊賴髓腦・六四／綺語抄・七二二／和歌童蒙抄・七〇七／奥儀抄・三九〇／袋草紙・二〇三／袖中抄・三五八／古来風体抄・二九四／和歌色葉・一五五、一五七／八雲御抄・一九五

【参考】作者名「みわの御」は三輪明神の御神詠の意。俊賴髓腦、綺語抄、奥儀抄、袋草紙、古来風体抄、和歌色葉(二首)は三輪明神、和歌童蒙抄は神女の作とする。古今六帖の四二七六番歌、袖中抄、八雲御抄には作者名なし、古今集ではよみ人知らずとなっている。古今集註(顕昭)、両度聞書などの古今集の古注は三輪明神の歌とするが、古今集勘物・書入(寂恵)は、三輪明神の歌とする説を挙げ、「慥(たしか)ニシリガタシ。ミワノ山ノホトリニスミケル人ノヨメルナメリ」とする。当該歌の作者名が古今和歌六帖成立期からのものであるとすれば、この歌を三輪山説話に付会し、三輪明神作とするかなり早い例である。

一三六五 わがゝどのまつのかはなみうちすぎてみしがごとくもあらぬきみかな

【異同】わがゝとの―わかことの(桂)

【現代語訳】(わが家の門の松の)川波が通り越してゆく、そのように時が過ぎていってみると、かつてお逢いした時のようではなくなつてしまつたあなたよ。

【語句】○わがゝどのまつのかはなみ わが門の松の川波。「わがゝどのまつ」と「かはなみ」の関係は定かではないが、「わがゝどのまつのかはなみ」が「うちすぎて」を導く序詞と見ておく。○うちすぎて 「うちすぎ」は、時間的、空間的に過ぎる、経過する。○みしがごとくもあらぬきみかな 見しがごとくもあらぬ君かな。かつて見たようでもなくなつてしまつたあなたよ。類語「見しごとく」を用いた例歌に「見しごとくもあらずもあるかな古郷は花の色のみぞあれば有りける」(貫之集・四三六)がある。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

一三六六 いづこより思ひいもてかまどふらむこひはかどなきものところそきけ

【異同】思ひいもてか―思ひいりてか（御・桂・大）

【現代語訳】いったいどこから恋の思いが入ってきて、このように思いつめ悩むのであろうか。恋というものは門などないと聞いているが、まさしくこのことだなあ。

【語句】○いづこより思ひいもてかまどふらむ 底本「思ひいりてか」は、他本「思ひいりてか」に拠って解した。こんな、苦しいもの思いがいったいどこからやって来て、心がこのように惑乱するのか。「いかばかり恋路はすゑのとほければ思ひいりても年のへぬらん」（続古今集・一〇四二）。○こひはかどなきものところそきけ 恋は門なきものところそ聞け。恋にはその入口となるような門などないと聞いていたが、まさしくその通りであった、の意を含む。恋の思いは神出鬼没、「家にある櫃（ひつ）に鍵さしをさめてし恋の奴（やつこ）がつかみかかりて」（万葉集・三八三八（旧三八一六））は、家の中にある櫃に入れ鍵をかけておいたはずなのに恋の思いは不意に自分につかみかかるとある。

【所載】ナシ

一三六七 かどわさだもるやひとめのしげゝればほにこそいでねわすれやはする

【異同】ナシ

【現代語訳】家近くの早稲田を守っている人の目、人の目は多く煩わしい、だから私はそぶりにも出さないけれど、あなたを片時も忘れたりするものですか。

【語句】○かどわさだ 門早稲田。『新編国歌大観』を検索してもこの一例のみ。「門田の早稲」や「門田早稲」と同じく、家の門前あるいは家周辺にある、早稲の稲田をいうのである。なお、所載欄の歌集には、初句すべて「とほやまだ（遠山田）」の第二句以下は、既出九九九番歌参照。

【所載】古今六帖・第二帖「山田」九九九／続古今集・恋一・九八六／躬恒集Ⅱ・二五九

【参考】作者名の記載はないが、所載欄の続古今集に躬恒とあり、躬恒集Ⅱに見える。

一三六八 うきよにはかどさせりともみえなくになどかわが身のいでがてにする  
さだふむ

【異同】ナシ

【現代語訳】このつらい世には門に鍵をかけているとも見えないのに、どうしてわが身は出家しがたいのであるか。

【語句】○うきよ 憂き世。つらい世の中。○かどさせり 門鎖せり。門に鍵をかけている。憂き世という抽象世界に「門」などあるはずはないが、行き場のない閉塞感を擬人的に表現。○みえなくに 見えないのだけれど。○などか どうしてか。係助詞「か」は疑問。○いでがてにする 出でがてにする。出ることができにくいのであろうか。連語「がてに」は、……できないで、の意。「憂き世」から「出（い）でがてにする」とは、なかなか出家できないことをいう。

【所載】古今集・雑下・九六四／拾遺集・雑上・四八一／大和物語・拾穂抄付載附一・二九五／平中物語・一段・一

【参考】作者名「さだふむ」（平貞文）は所載欄の勅撰集に一致する。なお、古今集の詞書に「官（つかさ）解けて侍りけるととき詠める」と、官職を剥奪されたときの歌とする。

一三六九 よのつねにわがおもひせばかくばかりかたきみかどをまたいでめやは

【異同】ナシ

【現代語訳】並一通りにあなたのことを私が思っているのであったなら、こんなに守りの厳重な御門を一度ならずもまた抜け出して逢いにくるなどありますでしょうか。

【語句】○よのつねにわがおもひせば もし私があなたをごく普通に愛しているのなら。「よのつねに」は、普通に、世間なみに。「世のつねに思ひやすらむ露ふかき道のささ原分けて来つるも」（源氏物語・総角・六六三）。「おもひせば」は、「思ひす」の未然形に接続助詞「ば」が接続した形。○かくばかり これほどまでに。「かたき」に掛かる。○かたきみかど 難き御門。出入りに厳しい、守りの厳重な御門。○またいでめやは また出てきたりするだろうか、いやそんなことはない、の意。「やは」は反語。

【所載】万葉集・二五七三（旧二五六八）凡 吾之念者 如是許 難御門乎 退出米也母 オホヨソニワレシオモハバカクバカリカタキミカドヲタチ（マカリ）イデメヤモ おほろかにわれしおもはばかりかたきみかどをまかりいでめやも

【参考】「おほかたはわが思ふことかくばかりかたきみかどをまかり出でなん」（古今六帖・第四帖・二一六六）は、所載欄の万葉集の異国歌かと思われるが、当該歌と言葉の重ね方はよく似ているが歌の内容が異なるようなので、所載欄には入れなかった。

と

一三七〇 君やこむわれやゆかむのやすらひにまきのいたどをさゝでねにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】貴方が来て下さるのか私の方から出かけようかと躊躇って、板戸に鍵せぬまま寝てしまったことです。

【語句】◎と 邸内に出入りする戸口。「戸」で単独に歌われることも、「真木の戸」「朝戸」「天（あま）の戸」「岩戸」など他の語と組み合わせることもある。なお、万葉集から「門（かど）」と「戸（と）」とは分化しているが、それは漢語の用法差を意識するようになったためであろうという『古語大辞典』。○君やこむわれやゆかむの あなたが来るか、私が行くかの。「君」と「我」、「来む」と「行かむ」と対照させる。○やすらひに躊躇のために。ためらって。○まきのいたどをさゝでねにけり 真木の板戸を鎖さで寝にけり。真木の板戸を戸じまりもないままで寝てしまった。「まき」は「真木」、「真」は美称の接頭語で、りっぱな木を意味し、杉・檜・イヌマキ・コウヤマキなどを指す。「真木の板戸」は、「真木の戸」と同じで、男が女に会いに行くため通る戸として詠まれた。

【所載】古今集・恋四・六九〇／奥儀抄・五二七／袖中抄・九五九／和歌色葉・二六四

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一三七一 かぜふくと人にはいひてとはさゝじあはむと君にいひてしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】風が吹いてそれで戸が開くのだと、人には言いつくろって、戸はしめないでおきましょう。今夜逢いましようと、あなたに言ったのですもの。

【語句】○かぜふくと 風吹くと。風が吹いてそのせいで戸が開くのだと。○とはさゝじ 戸は鎖すまい。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖・四四二、四四三番歌と下句が類似している。

一三七二 あまのとのさもあけがたくみえしかなこやなつのよのみじかゝりける

【異同】ナシ

【現代語訳】（お帰りの時の）明け方の戸が、いかにも開けにくく見えましたよ。これがまあ、夏の夜というもののなかでしょうか。（逢瀬は）ほんとに短いことでした。

【語句】○あまのとの 「あけ」にかかる措辞。二句「あけがたく」との関係から、あるいは、天の岩戸伝説にことよせて「あまのと」と言ったものか。○さも 然も。いかにも。まことに。○あけがたく 夜の「明け方」に戸の「開け難」を掛けた。○こや 此や。近称の代名詞「こ（此）」に疑問の助詞「や」が付いた形。これがまあ。言外に「……だろうか」の意を伴う。「あさぼらけひぐらしのこゑ聞こゆなりこやあけぐれと人の言ふらむ」（拾遺集・四六七）。

【所載】ナシ

一三七三 ゆかなくにわれくらむかとあさとあけてあはれわざもこまちつゝをらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしはきようは行かないのに、（そうとは知らず）わたしが来るだろうかと朝の戸を開けて、ああ、わが恋人は、待っていることだろうか。

【語句】○ゆかなくに わたしが行かないのに。なにかの事情で行けなくなったのであるう。「ゆく」は、作者の側から言ったことば。○くらむかと 来るであろうかと。「く（来）」は、恋人の側から言ったことば。○わざもこ 吾妹子。男性が妻あるいは恋人を親しんで呼ぶ語。

【所載】万葉集・二五九九（旧二五九四）不往吾 来跡可夜門 不問 何怜吾妹子 待箇在 ユカヌワレクトカヨカドモササズシテアハレワギモコマチツツアラム ゆかぬわをこむとかよるもかどささずあはれわざもこまちつつあるらむ

一三七四 あさといでのきみがすがたをよくみずてながきはるひもこひやくらさむ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の戸を開けて帰って行ったあなたの姿をよく見なかったので、この長い春の日も、わたくしはひもすがら恋い暮らすことでしょうか。

【語句】○あさといで 朝の戸を開けて出てゆくこと。ここは、夜来ていた恋人が朝帰って行ったこと。○みずて 見ずして。見なかったのだ。

【所載】万葉集・一九二九（旧一九二五）朝戸出乃 君乃儀乎 曲不見而 長春日乎 恋八九良三 アサトイデノキミガヨソヒヲヨクミズテナガキハルヒヲコヒヤクラサム あさといでのきみがすがたをよくみずてながきはるひをこひやくらさむ／赤人集Ⅰ・二〇六／赤人集Ⅱ・八七

一三七五 あしひきのやまさくらとをあけをきてわがまつ君をたれかとむる

【異同】ナシ

【現代語訳】山ざくらの戸を開けたままにしてわたくしが待っているあの人を、いったいたれが引きとめているのだろう。

【語句】○あしひきの 「やま」にかかる枕詞。○やまさくらと 山桜の木で作った戸。万葉集初出の語だが、中古の用例は古今六帖のこの一語のみ。中世和歌には用例多く、夫木抄には「山ざくら戸」の項が設けられている。○あけをきて あけおきて。開けた状態にしておいて。○たれかとむる いったいたれがあの人を引きとめているのだろう。恋人がなかなか来ないと、待ちかねる気持を言っている。

【所載】続後拾遺集・恋三・八〇二／万葉集・二六二四（旧二六一七）足日本能 山桜戸乎 開置而 吾待君乎 誰留流 アシヒキノヤマサクラトヲアケオキテワガマツキミヲタレカトドムル あしひきのやまさくらとをあけおきてわがまつきをたれかとむる／夫木抄・一四九三一／人麿集Ⅱ・四六六

〔以上五首担当 山下〕

一三七六 まきのとのかりそめにしもしにけるがいたづらいねをなにゝつゝまゝし  
なりくに



【異同】 かりそめにしも―かりそめふしも(御・桂・大) なにゝつゝまゝし―なにゝつゝまし(御・桂・大)

【現代語訳】 槨の戸の外で仮そめ臥しもしてしまったが、むなししい独り寝をどうしてかくそうか。「第二句を」かりそめふし」で訳す。」

【語句】 ○まきのと 槨の戸。檜・杉・松など良質の堅い木で造った戸。「夜もすがらくひなよりけになくなくぞまきの戸口に叩きわびつる」(新勅撰集・一〇一九)。○かりそめにし 校合した三本、及び所載欄の歌は「かりそめふし」であるのでそれによつて訳す。「かりそめふし」は仮りそめに臥すこと。所載欄の後撰集の詞書に「人のもとにまかりて待るに、呼び入れねば、すのこにふしあかしてつかはしける」とある。○いたづらいねむなし独り寝すること。「いね」は動詞下二「いぬ(寝)」の連用形。「かりそめふし」の「かり(刈り)」の縁で「稲」を掛ける。「徒ら稲」は役に立たない稲。○なにゝつゝまゝし どうして包み隠そうかなあ。「何に」はどうして。「つつむ」は隠す。秘める。「まし」は「何に」をうけて迷つたり躊躇いの気持ちであらわす。

【所載】 後撰集・恋四・八四五／俊頼髓脳・一八五／奥儀抄・一六〇／和歌初学抄・四〇

【作者】 作者名「なりに」は所載欄の文献と一致する。

一三七七 千はやぶる神のいがきもこゆる身はくさのとざしにさはるものかは

【異同】 ナシ

【現代語訳】 神社の垣根だつて平気で越えられるこの身は、茂った草で閉ざされた門なんか障害になるものか。

【語句】 ○千はやぶる 枕詞。「神」「わが大君」「齋宮」などにかかる。○神のいがき 神の齋垣。「い」は清められた、神聖な意の接頭語。神社の垣根。○くさのとざし 草で門戸を閉ざすこと。「秋の夜の草のとざしのわびしきはあくれどあけぬものにぞありける」(後撰集・八九九)。○さはるものかは 障害になるものか。「かは」は反語。

【所載】 ナシ

一三七八 おく山のまきのいたどをとく／＼としらでわがひかむにいでゝきなさね

【異同】 ナシ

【現代語訳】槨の板戸を早く早く、とんと叩いているのもしらないで、私がこんなに引っ張っているのだから無理をしても、出て来てほしいなあ。

【語句】○おく山の 枕詞。「深き」「まき」にかかる。○まきのいたど 槨の板戸。檜・杉・松などの板で造った戸。○とく／＼と 形容詞「疾(と)し」の連用形が副詞化した「疾く」に、槨の戸を叩く擬声語「とくとく」をかけた。○わがひかむに 私が引っ張っているのだから。「に」はあとに述べる事柄の理由やより所を示す。○いでゝきなさね 無理にも出て来てほしい。「なさ」は動詞なすの未然形でことさら何々するの意。「ね」は未然形につき、他にたいする希望をあらわす終助詞。

【所載】万葉集・三四八六(旧三四六七) 於久夜麻能 真木乃伊多度乎 等杼登之旦 和我比良可武余 伊利伎弓奈左祢 オクヤマノマキノイタドヲトドシテワガヒラカムニイリキテナサネ おくやまのまきのいたどをとどとしてわがひらかむにいりてきなさね

# すだれ

## ぬかだのみこ

ウゴカシ

一三七九 ひとりしてわがこひをればわがやどのすだれとほりて秋かぜぞふく

【異同】ナシ

【現代語訳】一人であの人を恋しく思つて、訪れを待っていると、我が家のすだれを通り抜けて、秋風が吹いてゆく。

【語句】◎すだれ 細く削った竹や葦などを使つて糸で編み連ねたもの。部屋の内外を隔てたり、牛車や輿などの出入り口にたらしめた。「ころもだに隔てしよひは恨みしにすだれのうちの声ぞかなしき」(中務集・一九二)。

○ひとりして たったひとり。所載欄歌の初句、二句「君まつとこひつつふれば」、四句「すすきうこきて」。

【所載】古今六帖・第一帖「あきの風」四〇一番既出

【参考】作者名「ぬかだのみこ」は四〇一番歌の所載欄の万葉集・四九一(旧四八八)、一六一〇(旧一六〇六)の作者名に一致する。万葉集には「額田王思近江天皇作歌一首」とある。

一三八〇 たまだれのこすのすだれをゆきがてにいねられぬ<sup>ね</sup>どきみはかよはす

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の美しいすだれを通り抜けられず、内でゆっくりと寝ることはできないけれど、それでもあなたはお通いになります。

【語句】○たまだれの 枕詞。「こす」「をす」「をち」などにかかる。「たまだれ」は玉で飾った美しいすだれ。すだれの美称。○こすのすだれ 小簾（こす）のすだれ。美しいすだれ。○ゆきがてに 通り抜けることができる。○「がてに」は何々できないで。○いはねられねど 寝ることはできないけれど。「い」は名詞「寝ること」。「ね」は動詞下二「ぬ（寝）」の未然形。「られ」は可能の助動詞「らる」の未然形。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。○かよはす お通いになる。「す」は尊敬の助動詞。

【所載】万葉集・二五六一（旧二五五六）玉垂之 小簾之垂簾平 往褐 寝者不眠友 君者通速為 タマダレノ コスノタレスヲユキカチニイラバネネドモキミハカヨハス たまだれのをすのたれすをゆきかちにいはなさずともきみはかよはせ／夫木抄・一五四二〇

【参考】通い婚時代の歌。男は通つて来ても、女の親の目を盗んですだれの内に入ることが難しく、女は外で密かに逢つていた、と解した。

〔以上五首担当 林〕

一三八一 われならぬ人にや人にたまだれのみすなやみすなあらはなりとも

【異同】ナシ

【現代語訳】私以外の人に、決して顔を見せてはいけませんよ。たとえあらわな場合であっても。

【語句】○人にや人に 「人に」の意を、繰り返しによる強調表現。「や」は間投助詞。○たまだれの 玉を貫いて飾りとしたところから、「御簾」「緒」などの枕詞。ここは「御簾」に「見す」を掛け、「見すな」を導く。

○みすなやみすな 「みすな」は、見せるな。「夢よ夢よ駒わたりこし逢坂の関の清水に影みすな君」（四条宮主殿集・一八）。こしも繰り返すしによる強調表現。

【所載】ナシ

と一

中納言ゆきひら

一三八二 ときのまにはやなぐさめよいその神ふりにしとこをうち<sup>七</sup>はらふべく

【異同】ナシ

【現代語訳】今すぐ、早く私を慰めてください。疎遠になってしまった床の上におく塵をうち払って、再び二人の仲を取り戻すために。

【語句】◎とこ 寝床。特に男女の関係で用いられることが多く、二人が疎遠になることを床に塵がおくという。○ときのま ほんの少しの間。○いその神 「古」「振る」「降る」などにかかる枕詞。ここでは「ふりにし」にかかる。一般には「石上」と書き、「布留」とともに、現在の奈良県天理市にある地名。○ふりにし床 古くなつてしまった床。二人の関係が途絶えていることをいう。○うちはらふべく 床の上に積もった塵を払うのである。関係の復活を意味する。

【所載】後撰集・恋三・七五六／業平集Ⅱ・七四／業平集Ⅲ・一八／伊勢集Ⅰ・一四／伊勢集Ⅱ・一五／伊勢集Ⅲ・一四／袋草紙・三九／古来風体抄・三二五

【参考】所載欄の他の文献では、当該歌と次の一三八三番歌とは贈答歌である。伊勢と関係のあった男性は枇杷左大臣藤原仲平であるから、作者表記は本来「なかひら」とあるべきで、「ゆきひら」あるいは「業平集」所載は誤りであろう。

一三八三 わたつみとあれにしとこをいまさらにはらはぐそでやあはときえなん 伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】涙が溜まって大海のように荒れた床、あなたが離れていつてしまったその床の塵を、今再びあなたとの共寝のために払ったら、その袖は泡のように消えてしまうでしょうか。

【語句】○わたつみと 「わたつみ」は海。海と同じように。○あれにし 海が「荒れ」と、男が「離(あ)れ」とを掛ける。○あはときえなん 「あは」は「泡(あわ)」。袖は泡のように消えてしまうだろうか。関係修復はむずかしいという意味表示であろう。

【所載】古今集・恋四・七三三／後撰集・恋三・七五七／業平集Ⅱ・七五／伊勢集Ⅰ・一五／伊勢集Ⅱ・一六／伊勢集Ⅲ・一五／袋草紙・四〇／古来風体抄・三二六

【参考】 作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一三八四 ふしてぬるところはくさばにあらねども秋くるよひはつゆけかりけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 横になって寝る床は草の葉ではないけれども、秋がやって来るころの宵は、草葉に露が置くように涙でしめつぽかったことだ。

【語句】 ○ふしてぬる 臥して寝る。「ぬる」は下二段活用動詞「寝（ぬ）」の連体形。○つゆけかりけり 露でしめつぽい。涙がちである意に用いられることが多い。

【所載】 古今集・秋上・一八八／清正集・七二

【参考】 所載欄の清正集には初句を「一人ぬる」として収めるが、古今集では「よみ人知らず」とする。

一三八五 ふしてぬるところめづらなる君なればいましもあへるこゝちこそすれ  
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】 共寝をするあなたは、いつも新鮮で愛らしいから、たった今、はじめて逢っている感じがすることだ。

【語句】 ○とこめづらなる 臥して寝る「床」と「常（とこ）珍らなる」の掛詞。「常珍らなる」は、常に新鮮だの意。「難波人葦火たく屋はすすたれとおのがつまこそとこめづらなれ」（拾遺集・八八七）。

【所載】 ナシ

【参考】 他の文献に見えず、作者が「素性」であるかどうかについては確認できない。

〔以上五首担当 久保木〕

一三八六 ゆめならであふことかたきよのなかはおほかたとこをゝきずやあらまし  
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】夢以外には逢うことが難しいあのひとの仲なので、ほとんど床から起きずにいようかしら。

【語句】○ゆめならであふことかたき 夢の中でなくては逢うことが難しい。現実にはなかなか恋しい人に逢えず、夢でしか逢えないという意。「夢ならで逢ふことかたき君ゆへに我もたつ名をたゞにやは聞く」（人麿集Ⅱ・五七一）。○よのなかは 世の中においては。世の中では。当該歌の「世の中」は、男女の仲の意。○おほかた ほとんど。たいてい。総じて。

【所載】伊勢集Ⅰ・一八〇／伊勢集Ⅱ・一八四／伊勢集Ⅲ・一八四

【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。

一三八七 けさのそこつゆをきながらかなしきはあかぬゆめぢをこふるなりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】今朝の床を涙の露で濡らしながら起きて悲しくてならないのは、飽き足りない夢での逢瀬を恋しく思うためだったんだなあ。

【語句】○つゆをきながら つゆおきながら。涙を流しながら起きて。（床を）涙で濡らしながら起きて。「露」の縁語の「置（お）き」に、「起（お）き」を掛ける。「露」は、涙の比喩。「思ひしる人に見せばやよもすがらわがとこ夏におきあたる露」（拾遺集・八三二・清原元輔、仲文集・一六）。○あかぬ 飽かぬ。十分ではない。満ち足りない。もっと逢っていたいのという気持。○ゆめぢ 夢路。夢の中で恋しい人に逢うための通い路。「限なき思ひのままに夜も来む夢路をさへに人はとがめじ」（古今集・六五七）。

【所載】貫之集Ⅰ・六五四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

一三八八 ゆめにてもこひしき人をみつるよはあしたのそこぞおき<sup>う</sup>かりける

【異同】ナシ

【現代語訳】夢の中でも恋しい人を見た夜は、その翌朝の床が起きづらいものだったんだなあ。

【語句】 ○おきうかりける 起き憂かりける。起きるのがつらいものだったんだなあ。起きにくいものだったんだなあ。「限りとは思はぬものを暁の別れの床は起き憂かりけり」(陽成院親王二人歌合・三五)。

【所載】 古今集・恋二・五七五／素性集Ⅰ・五九／素性集Ⅱ・三六／素性集Ⅲ・一

【参考】 古今六帖に作者名はないが、所載欄の文献によると、作者は素性。

一三八九 ひとりぬるところちめやはあやむしろおになるまでも君をばまたむ  
むしろ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 独りで寝る寝床が朽ちるものでしょうか、そんなことはありませんまい。だから、その寝床の綾筵が擦り切れて緒になるまでも、ずっとあなたをお待ちしましょう。

【語句】 ◎むしろ 筵。わら・真菰などを編んで作った敷物の総称。古今六帖では、「あやむしろ」「苔むしろ」「いなむしろ」と詠まれた三首が、「むしろ」の項にある。一般的にも、「さむしろ」など、「むしろ」に素材や状態などを表す語を冠して用いることが多い。○ところちめやは 床朽ちめやは。床が朽ちることがあるだらうか、いや朽ちない。「とこ」は、所載欄の万葉集では「菱」とあり、「コモ」と「トコ」の両様の訓がある。「めやは」は、助動詞「む」の已然形「め」に係助詞「やは」が付いたもので、反語の意を表す。○あやむしろ 綾筵。模様を織り出した筵。○おになるまでも 緒(を)になるまでも。擦り切れてはつれ、編み紐だけになるまでも。当該歌では、独り寝の寝床の綾筵がすっかり傷んでしまうまでも、ずっと(待ち続ける)という意か。「あや筵緒になるまでの年月も朽ちぬは人の契りなりけり」(新千載集・一二五〇・後醍醐院)。

【所載】 新千載集・恋二・一二四九／万葉集・二五四三(旧二五三八) 独寝等 菱朽目八方 綾席 緒尔成及 君乎之将待 ヒトリヌト(ヌル) コモ(トコ) クチメヤモアヤムシロヲニナルマデニキミヲシマタムひとりぬところちめやはあやむしろをになるまでにきみをしまたむ／人麿集Ⅱ・四三九／人麿集Ⅳ・二二五／綺語抄・五四七／和歌童蒙抄・四九九／古来風体抄・一二七

【参考】 『古今和歌六帖標注』は、第五帖の「にしき」と「いと」の間に、「あや」の題で、作者を「ひとまろ」とし、「獨ねのこもくちめやも綾むしろをに成までに君をしまたん」(『新編国歌大観』では、古今六帖の異本歌四四九六番として掲出)という小異のある重出歌を補っている。

一三九〇 かすがのゝあをねがみねのこけむしろたれかをりけんたてぬきなしに

【異同】ナシ

【現代語訳】春日野の青根が峰の苔の筵は、いったい誰が織ったのだろうか。縦糸も横糸もなくて。

【語句】○かすがのゝあをねがみね 春日野の青根が峰。春日野は大和国の歌枕、現在の奈良市東郊の野。青根が峰も大和国の歌枕であるが、現在の吉野郡、金峰山の東北にある山である。すなわち「かすがのゝあをねがみね」は地理的に不審。所載欄の万葉集の歌では「みよしのの青根が峰の」である。○こけむしろ 苔が一面に生えているさまを筵に見立てた語。「白雪の降りしきぬれば苔むしろ青根が峰も見えずなりゆく」（祐子内親王家紀伊集・六五）。○たれかをりけん たれかおりけん。誰か織りけん。誰が織ったのだろうか。○たてぬき 経緯。（織物の）縦糸と横糸。「経もなく緯も定めずをとめらが織れる錦に霜な降りそね」（万葉集・一五一六（旧一五一二）・大津皇子）。

【所載】万葉集・一二二四（旧一二二〇）三芳野之 青根我峰之 蘿席 誰將織 経緯無二 ミヨシノノアヲネガミネノコケムシロタレカオリケムタテヌキナシニ みよしののあをねがたけのこけむしろたれかおりけむたてぬきなしに／夫木抄・九〇六三、一五四一七／袋草紙・八〇〇、八三二／和歌初学抄・一九一

〔以上五首担当 長戸〕

一三九一 たまほこのみちゆきつかれいなむしろしきても君がこひらるゝかな

【異同】ナシ

【現代語訳】旅の道を行き疲れて休むのにいなむしろを敷く、その「しく」ということばのように、しきりにあなたのが恋しく思われるなあ。

【語句】○たまほこの 「道」にかかる枕詞。○いなむしろ 稲筵。稲のわらで編んだむしろ。○しきても 稲筵を「敷く」ことに、「しきりに」の意の「頻く」を掛けた。「あかときの夢に見えつつ梶島の磯越す波のしきて思ほゆ」（万葉集・一七三三（旧一七二九））。上三句は「しきても」を導く序詞。○こひらるゝかな 恋しくなることだ。「らるゝ」は自発の助動詞。ひとりでにそうなつてゆくさまを表わす。

【所載】新勅撰集・恋四・八八〇／万葉集・二六五一（旧二六四三）玉戈之 道行疲 伊奈武思侶 敷而毛君平 将見因毛鴨 タマホコノミチユキツカレイナムシロシキテモキミヲミムヨシモガモ たまほこのみちゆきつか



れいなむしろしきてもきみをみむよしもがも／人麿集Ⅰ・一三／人麿集Ⅱ・三九四／綺語抄・五五一／奥儀抄・四〇三／袖中抄・二四四／和歌色葉・一七四

おきな

一三九二 あぢきなしなにのまがこといまさらにわらはごとするおきなにしても

【異同】ナシ

【現代語訳】ばかばかしい。なんとつまらぬことばだ。いまさら子どもじみたことを言うのだ、いい年をした翁の身でもって。

【語句】◎おきな 翁。年老いた男性。おうな（嫗）の対。その白髪は雪にたとえて詠まれることが多い。○あぢきなし ばかばかしい。どうしようもない。対象に対して愛想をつかし、さじを投げている気持。○まがこと 禍言。まちがったことば、よくないことば。○わらはごとする 「わらはごと」は童言。子どもの言いそうな、おとなげないことばを言うのだ。○おきなにしても 翁の身でもって。いい年をした翁でありながら。「に」は指定の助動詞「なり」の連用形、「し」は強意の助詞、「もて」は「もちて（以て）」の音便形「もって」が転じたもの。

【所載】万葉集・二五八七（旧二五八二） 小豆奈九 何枉言 今更 小童言為流 老人二四手 アヂキナクナニノマガコトイマサラニワラハゴトスルオイヒトニシテ あづきなくなにのたはこといまさらにわらはごとするおひひとにして

一三九三 しらゆきのやへふりしけるかへる山かへるぐもおいにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪が幾重にも降り重なったかえる山よ。私は、つくづくと年老いてしまったなあ。

【語句】○しらゆきのやへふりしける 白雪が幾重にも降り重なった。「ふりしく」は降り頻く。しきりに降り重なること。この句には、白髪の老翁のイメージがある。○かへる山 越前国の歌枕。現福井県南越前市（旧南条郡今庄町）鹿蒜（かひる）にある山。歌では「帰る」を意識して詠まれることが多い。「からにきたちて越路のかへる山かへるがへるものうかりしか」（元良親王集・三七）。上三句は、同音によって「かへるぐ」を

導き出すための序詞。○かへるくも 「かへすがへすも」に同じ。つくづく。何度考えてもまったく。

【所載】古今集・雜上・九〇二／新撰万葉集・一六九／業平集Ⅱ・一〇七／寛平御時后宮歌合・一三四

一三九四 おいらくのこむとしくせばかどさしてなしとこたへてあはざらましを

【異同】ナシ

【現代語訳】老いがやってくるかとわかっていたならば、門を鎖して、不在だと答えて、逢わないだろうになあ。  
【語句】○おいらく 老いというもの。動詞「老ゆ」のク語法。「老い」を擬人化した言い方。○しりせば 知っていたならば。「せば」は、第五句の「まし」と呼応する反実仮想の語法。○かどさして 門を鎖して。○なしとこたへて あるじは不在だと答えて。○あはざらましを 逢うことをしないだろうになあ。実際には門内に入れてわが身に迎え入れてしまった、ということ。「を」は詠嘆。

【所載】古今集・雜上・八九五／暮春白河尚齒会和歌・二二／俊頼髓脳・七六／古今著聞集・一七〇

一三九五 わたつみのおきなもはなはかざしけり春のいたらぬところなければ

【異同】ナシ

【現代語訳】（年老いた）翁でさえも、花はかざしとして挿している。折しも、春の到らぬところはないから。  
【語句】○わたつみのおきな 「わたつみの」は「沖」にかかる枕詞。「沖」に「おきな」を掛けた。○かざしけり かざしとして挿している。「かざし」は「カミサシ」の転。草木の花や枝を髪や冠に挿したもの。

【所載】夫木抄・一六五四一

〔以上五首担当 青木・山下〕

一三九六 おきなさび人などがめそかりころもけふばかりぞとたつもなくなり  
なりひら

【異同】けふはかりそとーけふはかりとそ（大） たつもなくなりーたつも啼なる（大）

【現代語訳】年寄りじみしていると皆さん咎めないでください。この狩衣を着るのも今日限りだ（今日は狩だ）

と鶴も鳴いているようです。

【語句】○おきなさび 老人くさい。年寄りくさい。「さぶ」は接尾語。いかにもそのものらしい、その属性を発揮する、の意。「神さぶ」「乙女さぶ」など。○人なとがめそ 人よ咎めるな。「な……そ」は禁止をあらわす。○けふばかりぞと 「今日ばかりぞと」に「今日は狩ぞと」を掛ける。○たづもなくなり 「たづ」は鶴。多く歌語として用いられる。「なり」は耳で聞いて推定する意。

【所載】古今六帖・第五帖「かりころも」三三〇七／後撰集・雜一・一〇七六／業平集Ⅱ・一〇九／俊賴髓腦・三二六／和歌童蒙抄・三一四／奥儀抄・三二一／万葉集時代難事・六四／袖中抄・二三三／和歌色葉・三三六／宝物集・一一／伊勢物語・一一四段・一九五

【参考】作者名「なりひら」については、業平集Ⅱや伊勢物語にも見えるが、後撰集をはじめ歌書類ではすべて「行平」とする。なお後撰集や伊勢物語によれば、当該歌は仁和二（八八六）年十二月十四日に行われた仁和の帝（光孝天皇）の芹川行幸の折の詠で、業平没より六年後の作。作者名「なりひら」は誤りである。

一三九七 ふりそめてともまつゆきはむばたまのくろかみのまたかはるなりけり

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】降りをはじめてあたりを白く染め、あとから降ってくるのを消えずに待っている雪は、実は、黒髪がまた白く変わっていくことだったのですね。

【語句】○ふりそめて 「降り初めて」に「降り染めて」を掛ける。○ともまつゆきは 「とも」は「友」で、はじめに降った雪の立場から、次々とあとから降ってくる雪をいうのであろう。漢語でも、そうした雪を「待伴」という。○むばたまの 黒、あるいは黒と関係のある、髪、鬘などにかかる枕詞。○かはるなりけり ここでは黒髪が白髪に変わることをいう。降りをはじめてあたりを徐々に白くしてゆく雪は、実はまた黒髪が徐々に白くなってゆくことだったのだ、の意。「なりけり」ははじめて気がついたという気持ちを表す。

【所載】後撰集・冬・四七一／兼輔集Ⅳ・五五／貫之集Ⅰ・八一七／貫之集Ⅱ・九〇／袖中抄・七二三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

かねすけの中納言

一三九八 くろかみのいろふりしかはるしらゆきのまちつるともはうとくもあるかな

【異同】いろふりしかはる―いろふりしくる（御・大）、いろふりしかはる（桂）

【現代語訳】降ることによって黒髪の色が変わる白雪、その白雪が友を待っているとのことですが、友といっても私には縁のないものですよ。

【語句】〇うとくもあるかな 「うとし」は、疎遠だ、親しみがない、関係が薄い意。

【所載】後撰集・冬・四七二／兼輔集Ⅲ・九四／兼輔集Ⅳ・五六／貫之集Ⅰ・八一八／袖中抄・七一四

【参考】作者名「かねすけの中納言」は所載欄の文献に一致する。後撰集等によれば、当該歌は一三九七番歌への返歌である。貫之の年齢は不詳だが、兼輔の方が大分年少だったらしいから、まだ私は若いのに、と戯れているのか。

一三九九 としごとにしらがのかずをますかゞみつゝぞゆきのともはましける

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年毎年白髪の数が増えてゆき、くりかえし鏡を見ながら、「雪の友」、共に白髪になる友は増えたことでした。

【語句】〇ますかゞみ 「真澄鏡」の略とも、また「まそかがみ」の転ともいう。澄んだ、りっぱな鏡。ここは「増す」との掛詞。〇ともはましける 「ましける」は一応「増しける」と解したが、あるいは敬語「いましける」の意で、友がいらいしやったことでした、とわざわざ大袈裟にふざけたか。なお、所載欄の文献ではすべて「ともはしりける」とする。その場合は、一緒に白髪になってゆく友がいることを知ったという意になり、両者の絆の深さを再確認する詠となろう。

【所載】後撰集・冬・四七四／兼輔集Ⅲ・九五／兼輔集Ⅳ・五八／袖中抄・七一五

【参考】作者名無表記だが、所載欄の文献によれば、当該歌もまた貫之の一三九七番歌に対する兼輔の詠。

一四〇〇 いたづらにおひにけるかなたかさこのまつやわが身のはてをかたらむ  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】私はなすこともなく年老いてしまったことだなあ。あの高砂の松がわが人生の終わりを語ることであろうか。

【語句】○いたづらに 無為に。無駄に。○おひにけるかな 「生ひにけるかな」ではなく、「老いにけるかな」であろう。○たかさご 本来普通名詞だったらしいが、古今集の仮名序では歌枕として扱われている。現在の兵庫県高砂市加古川の河口付近とされ、長寿の松とともに詠まれることが多い。「誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」(古今集・九〇九)。

【所載】続後拾遺集・雑上・九六八／万代集・三〇八二／貫之集Ⅰ・一九九／貫之集Ⅱ・九一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集によれば屏風歌である。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一四〇一 わかなつむ春のたよりにとしふればおいつむ身こそわびしかりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】若菜を摘むという春到来の知らせを聞くと、私は年をとっているの、(若菜ならぬ)老いを積み重ねるこの身にはわびしいことですよ。

【語句】○わかな 正月子の日あるいは春の初めに食用に摘む菜。若菜の「若」は「老い」の対。○春のたより 春が来たという知らせ。「たが里の春のたよりに鶯の霞にとづる宿をとふらん」(千載集・九六二)。○おいつむ身 老いを重ねる身。「積む」に「摘む」を掛ける。「なき名ぞといふ人もなし君が身においのみつむときくぞくるしき」(和泉式部なき名たつことありてなげきけるころ、若菜をつかはして侍りけるかへりごとに 大江雅致朝臣 万代集・三〇六四)。○わびしかりけれ やりきれないことだ。「わびし」は物事が思うようにならずつらくてやりきれない意。「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」(古今集・八)。

【所載】貫之集Ⅰ・二八〇

なりひら

一四〇二 たのまれぬうきよのなかをなげきつゝひけにおいぬる身をいかにせん

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あてにならない憂き世の中を嘆きつつ、日ごとに老いてしまうこの身をどうしましょうか。

【語句】 ○たのまれぬ あてにならない、期待できない。「うきながら消ぬる泡ともなりなむ流れてとだにたのまれぬ身は」(古今集・八二七)。○ひけに 「日増に」の意か。「ひけに」の用例はないが、万葉集には「いやひけに」「いやひにけに」「ひにけに」の用例がみられる。「恋にもそ人は死にする水無瀬川下ゆ我瘦す月に日に異に」(万葉集・六〇一(旧五九八))。所載欄の他文献では業平集Ⅱ以外、下句は「日かげにおふる身をいかにせん」である。あるいはこちらが本来の形か。○おいぬる身 老いてしまう我が身。

【所載】 後撰集・雑二・一一二五／業平集Ⅰ・七三／業平集Ⅱ・一〇／業平集Ⅲ・四八／綺語抄・四六二

【参考】 作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。業平集・後撰集の詞書によると、我が身の不遇を前太政大臣(藤原良房か)に訴えた歌である。

一四〇三 おいぬとてなどかわが身をせめぎけむおいずはけふにあはましもの<sup>か</sup>を<sup>かし</sup>

としゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 年老いたといって、どうして自分を恨んで嘆いたりしたのでしょうか。もし老いるまで長く生きなかつたとしたら、今日という日を迎えることはできなかつたでしょうよ。

【語句】 ○などかわが身を どうして自分を。○せめぎけむ 「せめぐ」は、「恨み嘆く」意。「いたづらにあたらいのちをせめぎけんながらへてこそけふにあひぬれ」(拾遺愚草・一〇九九)。○あはましものか 「まし」は反実仮想。「か」は反語。長寿のおかげで、今日という晴儀に参加できたことを喜んでいる。

【所載】 古今集・雑上・九〇三／敏行集・二／暮春白河尚歯会和歌・一八／古今著聞集・一六七

【参考】 作者名「としゆき」は所載欄の古今著聞集以外の文献に一致する。敏行集、古今集では寛平の御時に殿上人たち到大御酒を賜うて管弦の御遊びのあつた折に献上した歌である。古今著聞集では、承安二(一一七二)年に藤原清輔が白河宝莊厳院で催した尚歯会で、清輔が人々とともに誦した歌としてみえる。尚歯会は白楽天が行ったのが最初で、七叟(七人の高齢者)・垣下(相伴者)ともに詩歌をつくり遊宴する敬老会。通常は詩会で、和歌会は承安二年が最初。

とう三条の左大臣

一四〇四 うぐひすのかさねにぬふてふむめのはなりおもてかざゝむおひかくるやと

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が笠に縫いあげるといふ梅の花を折ってかざしとしよう。私の老いが隠れるかと思つて。

【語句】○とう三条の左大臣 源常。嵯峨天皇皇子。弘仁三（八二二）年もしくは弘仁五年生。仁寿四（八五四）年六月十三日没。○うぐひすのかさにぬふてふむめのはな 鶯が笠に縫うといふ梅の花。古今集一〇八一番「青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」を本歌とする。「ぬふてふ」は縫うという、の意。○おひかくるやと おひかくるやと。老いが隠れるかと思つて。

【所載】古今六帖・第六帖「むめ」四一二七／古今集・春上・三六／秀歌大体・一六／奥儀抄・四四四

【参考】作者名「とう三条の左大臣」は所載欄の文献に一致する。

一四〇五 かひがねを山ざとみればあしたづひきのいのちをもたる人ぞすみける つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】甲斐が嶺の山里を見ると、（千年の寿命を持つという）鶴の長寿をもった人が住んでいましたよ。

【語句】○かひがねを 「かひがね」は甲斐の国の山。「富士山」とする説と「白根山」とする説がある。所載欄の他文献では「かひがねの」「かひがねを」では意が通じないので、ここでは「かひがねの」で解する。○あしたづのいのち 千年の寿命をもつ鶴と同じ長寿。「あしたづ」は鶴の歌語。甲斐の国には鶴と同音の「都留の郡」があることにひかれたか。「君がため命かひにぞわれは行くつるのこほりに千世はうるなり」（新千載集・二一六六、古今六帖・一二八六）。

【所載】夫木抄・一四四三三／貫之集I・一六一／和歌童蒙抄・三三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集の注釈書によると、延長二（九二四）年、左大臣藤原忠平の北の方、源順子（宇多天皇皇女。実頼の母。）の四十の賀の屏風歌か（田中喜美春・恭子説）。木村正中説は、延長二年、左大臣忠平室、源昭子（源能有女）の賀の屏風歌とみる。貫之集からこの屏風が名所絵屏風であることは明らかで、西本願寺本貫之集の題に「鶴」とあるのは、時雨亭文庫素寂本にある「つるのこほり」

からの脱落であろう。

〔以上五首担当 三浦〕

一四〇六 春にあふとおもふころはうれしくていまひとせを<sup>の</sup>おいぞひける  
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】春にあうと思う、その心はうれしくて、しかし一方、考えてみると、もう一年老いが加わることだなあ。

【語句】○春にあふと 新しい春を迎えると。春を迎えることはすなわち新年を迎えることである。○おいぞひける 満年齢と違って、数え年では年が改まると皆一斉に年齢が一歳増え、老いが添うことになる。

【所載】拾遺集・雑春・一〇〇〇／躬恒集Ⅰ・一三五／躬恒集Ⅱ・四六、二二八／躬恒集Ⅲ・三四／躬恒集Ⅳ・一四〇

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

おむな

一四〇七 いにしへのなむにしもてかくばかりこひにしづまむてわらはの<sup>を</sup>ごと  
いしかはのひめ

【異同】なむにしもて—おんなにしもて（桂・大）

【現代語訳】年をとったばあさんで、どうしてこれほどまでに恋に溺れるのだろう、まるで幼な子のように。

【語句】◎おむな 「おきな」につづく配列や、列記されている歌の内容、また万葉集等の表記から考え、ここは「をんな（女）」の意ではなく、「おうな（嫗）」の意であろう。老女。○をむにしもて 題や他本により「おむなにしても」の意に解する。老女でもって。「し」は強めの副助詞か。「もて」も「以て」の意か。なお、所載欄の万葉集には「嫗爾為而也 オウナニシテヤ」とあり、自嘲的な口調の歌で、ここは疑問・反語の助詞「や」の欲しいところであろう。○てわらは 手で抱くほどの幼児。

【所載】万葉集・一二九 古之 嫗爾為而也 如此許 恋尔将沈 如手童児 イニシヘノオウナニシテヤカクバ



カリコヒニシヅマムタワラハノゴト　ふりにしおみなにしてやかくばかりこひにしづまむたわらはのごと  
【参考】作者の「いしかはのひめ」については、万葉集に「天津皇子宮侍石川女郎」とある。

一四〇八　おちつもる松をひろひてとしふればおいのつま木と人やみるらむ  
たゞふさ

【異同】ナシ

【現代語訳】落ち積もる松を拾って年月を過ごしているので、あれは老いというたぎぎを拾っているのだと人は  
見ているであろうか。

【語句】○おちつもる松をひろひて　松が落ち積もるとはどういう状態をいうのか、またそれを拾うことが題  
の「おむな」とどうかかわるのか、いまひとつわかりにくい。○おいのつま木　「つま木」は、たぎぎにする  
小枝。木ぎれ。あるいは「老いの妻」が掛けられているか。

【所載】夫木抄・一六七一〇

【参考】作者名「たゞふさ」は、所載欄の夫木抄に「藤原匡房」とある。「たゞふさ」が正しければ、「藤原忠  
房」は古今集作者で、中古歌仙三十六人の一人。

一四〇九　もゝとせにおいくちひそみなりぬともわれはわすれずこひやますとも  
やかもち

【異同】われはわすれず―我は忘れし（大）

【現代語訳】あなたが百歳にもなり、年をとって口がゆがむようになっても、私は忘れないでしょう、恋い募る  
ことはあっても。

【語句】○もゝとせに　「なりぬとも」にかかる。○おいくちひそみ　老い、口ひそみ。「ひそみ」は、ゆがむ、  
しかめる、べそをかく意。○こひやますとも　たとえ恋が増したとしても。「や」は間投助詞。「とも」は逆接  
の仮定条件を表す接続助詞。

【所載】万葉集・七六七（旧七六四）百年尔　老舌出而　与余牟友　吾者不厭　恋者益友　モモトセニオイシタ  
イデテヨムトモワレハイトハジコヒハマストモ　ももとせにおいしたいでてよむともわれはいとはじこひは

ますとも／和歌童蒙抄・三一二

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集に一致する。紀女郎が家持に贈った歌二首、神さぶと否にはあらずはたやはたかくしてのちにさぶしけむかも玉の緒を沫緒に縊りて結べらばありてのちにも逢はずあらめやもに対する「和ふる歌」となっている。

おや

一四一〇 たらちねのおやのまかせで君もわれあふとはなしにとしぞへぬべき

【異同】ナシ

【現代語訳】親が自由にさせてくれないで、あなたも私も、逢うこともなく年が過ぎてしまうことでしょう。

【語句】◎おや 父親、両親、あるいは広く祖先も意味するが、どちらかというと母親を指すことが多い。特に「たらちねの」に導かれる場合はほとんど母親と考えてよい。○たらちねの 「おや」「はは」にかかる枕詞。○おやのまかせで 親がまかせないで。「おや」が主語なので、「まかせて」は「まかせで」と打ち消しに読むべきであろう。

【所載】古今六帖・第五帖「としへていふ」二五六〇／万葉集・二五六二（旧二五五七）垂乳根乃 母白者 公毛余毛 相鳥羽梨丹 年可経 タラチネノハハニマウサバキミモアレモアフトハナシニトシハヘヌベシ たらちねのははにまをさばきみもあれもあふとはなしにとしぞへぬべき

〔以上五首担当 久保木〕

いべのおとくろまろ

一四一一 たらちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにまかせて

【異同】いへのおとくろまろ―いゑのをとくろまろ（大）

【現代語訳】（親の飼う蚕がまゆの中にこもって鬱々とした気分だろうが）あなたにまかせていては逢うこともできず、気分が晴れないことだ。

【語句】○たらちねの 「親」にかかる枕詞。○おやのかふこ 親の飼う蚕（こ）。万葉集では当該歌の他二例。

「たらつねの母がかふこのまよごもりこもれる妹を見むよしもかも」(二五〇〇〈旧二四九五〉)、「あらたまの年はきさきて……たらちねの 母がかふこの まよごもり いきづきわたり……」(三二七二〈旧三二五八〉)。

○まゆごもり 蚕が繭の中にこもること。○いぶせくもあるか 「いぶせし」は気分が晴れ晴れとしないで、鬱陶しい気持ちという。「こもりのみ居ればいぶせみ慰むといでたちきけばきなくひぐらし」(万葉集・一四八三〈旧一四七九〉)のように、上三句は閉じこもってばかりいると気分が晴れないということを踏まえた上で「いぶせくもあるか」を導く序詞。○いもにまかせて あなたに任せて。「いも」は男性から相手の女性をさすことば。「まかせて」は「春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくるころかな」(拾遺集・四七)のように相手に意のままに委ねるという意。万葉集の「いもに逢はずして」の方が、歌意の整合性は高い。

【所載】古今六帖・第五帖「わぎもこ」三〇八七／古今集仮名序／拾遺集・恋四・八九五／万葉集・三〇〇四(旧二九九一) 垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而 タラチネノオヤ(ハハ) ガカ フコノマユゴモリイブセクモアルカイモニアハズシテ たらちねのははがかふこのまよごもりいぶせくもあるか いもにあはずして／人麿集Ⅰ・一八五／人麿集Ⅱ・三二一／和歌童蒙抄・八四四

【参考】作者名「いべのおとくろまろ」とあるが、所載欄の万葉集に作者名はない。

## 一四二二 人のをやのころはやみにあらねどもこをおもふみちにまどひぬるかな かねすけ

【異同】まどひぬるかな—まよひぬるかな(御・桂)

【現代語訳】人の親の心というものは闇ではないのに、子を思う道に迷う、子を思うあまり分別がつかなくなることよ。

【語句】○人のをやの 人のおやの。人の親の。○ころはやみにあらねども 心は暗闇ではないのだが。「かきくらす心のやみにまどひにき夢うつとは世人さだめよ」(古今集・六四六)。○まどひぬるかな まよつてしまふことよ。惑乱してしまうことだ。道に迷うという意の「まどふ」に分別のつかない意の「まどふ」をかける。「まどふ」は「闇」「道」の縁語。

【所載】後撰集・雑一・一一〇二／兼輔集Ⅰ・一二六／兼輔集Ⅱ・一〇六／兼輔集Ⅲ・九六／兼輔集Ⅳ・七七／兼輔集Ⅴ・一一一／前十五番歌合・一一／三十人撰・五三／三十六人撰・六七／深窓秘抄・八六／宝物集・四五八／大和物語・四五段・六一

【参考】作者名「かねすけ」は所載欄の文献に一致する。

一四一三 たらちねのおやのまもりとあひそふるこゝろばかりはせきなどぐめそ

【異同】ナシ

【現代語訳】（私の身は子と共にには行けないが、せめて）親が「お守り」として添える心だけは塞き止めないでほしい。

【語句】○まもり お守り。その人を守護してくれるもの。「見るほどのまもりと思へどみをごろもこだにかたみのなきぞ悲しき」（赤染衛門集・五四五）。○こゝろばかりは 心だけは。身は共に行けないが心だけは、という意。○せきなどぐめそ 塞きとめないでほしい。「せきとどむ」は水などの流れを堰などで遮ること。「な……そ」は禁止の語法。

【所載】古今集・離別・三六八

【参考】所載欄の古今集の詞書には「小野千古が陸奥のすけにまかりける時に、母のよめる」とある。

一四一四 おなじいろのまつと竹とはたらちねのおやこひさしきためしなりけり  
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】同じ常緑の松と竹とは、親子が幾久しく暮らしていくというしるしなのだなあ。

【語句】○おなじいろのまつと竹とは 同じ常緑の松と竹とは。松も竹も常緑なので長寿を寿いだ歌は多い。「色かへぬ松と竹とのすゑの世をいづれひさしと君のみぞ見む」（拾遺集・二七五）。○おやこ 親子。貫之集の詞書によると、藤原忠平とその娘貴子。参考欄参照。○ためしなりけり しるしなのだなあ。「おきかはる霜にまぎれて立つ霧は久しき秋のためしなりけり」（公任集・一三五）。

【所載】夫木抄・一六五五八／貫之集Ⅰ・三三四、八八二／貫之集Ⅱ・五六

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。所載欄の貫之集Ⅱには「忠平と申す太政大臣の東なる殿より西なる殿にうつり給はんとて、かの西なる殿のひとつ屋に御むすめの内侍のかみのおはするかと我がおはすべきかたの隔ての障子に松竹鶴など絵にかきてありけるを、題にてよませてかかせ給ひける」とあり、忠

平と娘貴子とが同じ邸宅に住むことになった折の歌と知られる。

一四一五 たらちねのおやにまかせでわがもたるころはゆかずきがまに／＼

【異同】ナシ

【現代語訳】親の意向に従わないで、私の気は進みませんが、あなたの思うとおりにいたしましたしよう。

【語句】○おやにまかせで 親の思う通りに従わないで。「まかす」は「相手の意のままに委ねる」という意。  
「で」は打消の助詞。○ころはゆかず 気持ち晴れない。さっぱりとしない。○きみがまに／＼ あなた  
の思うままにいたしましたしよう。

【所載】万葉集・二五四二(旧二五三七) 足千根乃 母尔不知所 吾持留 心者吉恵 君之随意 タラチネノハ  
ハ(オヤ)ニシラセズ(セズ)ワガモタルコロハヨシエキミガマニマニ たらちねのははにしらずわがもて  
るころはよしゑきみがまにまに

【参考】万葉集・二五四二(旧二五三七)には「たらちねの母にしらずわがもてる心はよしゑ君がまにまに」という類歌がある。また、同じく万葉集・三二九九(旧三二八五)には「たらちねの母にもいはずつつめりし心はよしゑ君がまにまに」という歌もある。

〔以上五首担当 杉本・尾高〕

うのなぬ

一四一六 うなひこが神ふりつるふぢのはなきるなつかしく思ほゆるかな

【異同】きるなつかしく―きはなつかしく(桂)

【現代語訳】少女の髪がゆれていような藤の花、(その花のような)衣を着ると、あの子がなつかしく思われる。

【語句】◎うなぬ 髪を襟足に垂らしたままにしている子供の髪型、また髪をそのようにしている子供のこと。  
髪をあげずに振り分け髪のままにしていることを「はなり」言い、合わせて「うなぬはなり」と言った。特徴で  
ある髪型を比喻した歌が多い。○うなひこ うなぬこ。髪を「うなぬ」型にした子ども。○神ふりつる 字足  
らずでこのままでは意味不通。所載欄の文献に拠り「かみふりしつる」として解す。髪ふりしつる。振り分け

髪にしている、の意か。○きるなつかしく 着る懐かしく、か。意が通りにくい、仮に解した。所載欄文献には「袖なつかしく」とある。

【所載】夫木抄・二二二二／和歌童蒙抄・二九八

一四一七 さねかづらいまするいもがうらわかみゑみゝいかりみきつゝひもとく  
やかもち

【異同】きつゝひもとくーきつゝひもと（御）

【現代語訳】さねかづらを今（初めて）付ける愛しい子はうら若いので、笑ったり、怒ったりして、着ている紐を解く。

【語句】○さねかづら びなんかづら。さなかづらとも言いつル性の植物。○ゑみゝいかりみ 笑み怒りみ。笑ったり怒ったりして。「み」は連用修飾語を作る接尾語。対照的な動作が並行して繰り返される状態を表す。○きつゝ 着つつ、か。

【所載】万葉集・二六三四（旧二六二七）波祢縹 今為妹之 浦若見 咲見・見 著四紐解 ハネカヅライマ スルイモガウラワカミエミミイカリミキテシヒモトク はねかづらいまするいもがうらわかみゑみみいかりみつけしひもとく／夫木抄・一三三八七／袖中抄・一〇〇四

【参考】作者名「やかもち」とあるが、所載欄文献には作者名はなく、その根拠は不明。

一四一八 たちばなのてれるながやにわがゐねしうなゐはなれはかみあげつらん

【異同】かみあげつらん―はかみあげつらん（大）

【現代語訳】橘の実の光っている長屋に誘って共寝をしたあの少女は、今はもう成人して髪を上げただろう。

【語句】○たちばなのてれるながや 照り光っている橘のそばにある長屋。長屋は細長い形の家。○わがゐねし 我が率寝し。私が誘い、共寝をした。○うなゐはなれは 意味不通。所載欄万葉集の「うなゐはなり」に拠って解した。一四一六番歌参照。○かみあげつらん 髪を上げたことだろう。「かみあげ」は女の子が成人に達した時、それまで垂らしていた髪を結い上げることをいう。裳着と同時に行為される。「くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき」（伊勢物語・二三段・四八）。

【所載】古今六帖・第二帖「てら」一四三三／万葉集・三八四四（旧三八二二）橘 寺之長屋尔 吾率宿之  
童女波奈理波 髪上都良武可 タチバナノテラノナガヤニワガキネシウナキハナリハカミアゲツラムカ たちば  
なのてらのながやにわがみねしうなみはなりはかみあげつらむか、三八四五（旧三八二三）橘之 光有長屋尔  
吾率宿之 宇奈為放尔 髪拳都良武香 タチバナノテレルナガヤニワガキネシウナキハナリハカミアゲツラ  
ムカ たちばなのてれるながやにわがみねしうなみはなりにかみあげつらむか／夫木抄・一六四二六／和歌童  
蒙抄・二九七

わかいこ

一四一九 ころもでにとりとゞこほりなくらめとまされるわれをきていかにせむ

【異同】ナシ

【現代語訳】（児は）袖にまとわりすがって泣くのだろうが、それにまさって嘆く私をあとに残してどうなさるのか。

【語句】◎わかいこ 「わかいこ」では他に用例を見出せないが、「若い子」または「稚い子」の意と思われる。みどり子、幼子の意。○ころもで 袖。○とりとゞこほり 動作の邪魔になる、からみつく。○なくらめも意味不通。所載欄の万葉集にはこの部分「なくこにも」とある。古今六帖でこの歌が「わかいこ」の題の下にあるところを見れば、本来この第三句は「なくこにも」であつたのだと思われる。但し、ここではミセケチ傍記に拠らない本文「なくらめど」で訳した。泣くのだろうが。○われをきて このままでは意味不通。所載欄万葉集に拠り「われをおきて」と解する。私を残して。

【所載】万葉集・四九五（旧四九二）衣手尔 取等騰己保里 哭児尔毛 益有吾乎 置而如何将為 コロモデニトリトドコホリナクコニモマサレルワレヲオキテイカニセム ころもでにとりとゞこほりなくこにもまされるわれをおきていかにせむ

【参考】この歌が「わかいこ」の題の下にあるのは、語句欄でも述べたとおり、第三句が本来「なくこにも」であつたからであらう。

一四二〇 かつ見つゝあな井におちるみづとりのまどへるこひもわれはするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】姿を見ている一方で、穴井に落ちる水鳥が戸惑っているように、どうしていいか分からない恋を私はしているのだ。

【語句】○かつ見つゝ 一方では姿を見ていながら。「かつ」は、ある行動や心情が並行して存在する状態を表す。○あな井におちる 穴井に落ちこんだ。「あな井」は穴のような井戸。そこに落ちるとなかなか外に出られずもがかなければならない。「おちる」は「おちいる」が縮まった語。○みづとりの 所載欄の和歌童蒙抄にはこの部分「みどりこ」とある。古今六帖でこの歌が「わかいこ」の題の下にあるところを見れば、本来この第三句は「みどりこの」であつたのであろう。但し、ここでは本文通り「みづとりの」で訳した。○まどへるこひ 心かき乱される恋。二句、三句は「まどふ」を導く序詞。

【所載】和歌童蒙抄・二九六

【参考】この歌が「わかいこ」の題の下にあるのは、語句欄でも述べたとおり、第三句が本来「みどりこの」であつたからであらう。

〔以上五首担当 平野・吉田〕

くるま

ひろかはの女わう

一四二一 こひくさをちからくるまになゝくるまつみてもあまるわがこゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】草の生い茂るように激しくつのる思いを、荷車に何台積んでも余ってしまう、そんな計り知れないほど激しい私の恋の恋どころであることよ。

【語句】◎くるま 心棒を中心にして、その周りを回るようになっていた輪状のもの。また車輪を回して、動かしたり進めたりするようになっている乗り物や運搬具。平安期では牛車を指す例が多い。○こひくさ 恋の募ることを草の茂るのに喩えた語。「七車積むとも尽きじ思ふにもあまるわが恋草は」(狭衣物語・一八九)。○ちからくるま 物を積んで人の力で引く車。荷車、大八車の類。「なげきつむちから車のわをよわみたちめぐるべき心地こそせね」(散木奇歌集・一四八九)。○なゝくるま 七車。「七」は数の多いことを表す序数。「ななくるま積むこひぐさの重ければうしとみれどもやるかたもなし」(江帥集・二三四)。○つみてもあまるわ



がこころかな 積んでもなお余る、私の恋ごころであるよ。恋の思いの激しさを表す。

【所載】新勅撰集・恋二・七二七／万葉集・六九七（旧六九四）恋草呼 力車二 七車 積而恋良苦 吾心柄  
コヒクサヲチカラクルマニナナクルマツミテコフラクワゴコロカラ こひくさをちからくるまになくなるまつ  
みてこふらくわがこころから／古来風体抄・五七

【参考】作者名「ひろかはの女わう」は、所載欄の文献に一致する。

一四二二 をぐるまのまひてにほひのたふますはにしきのひもとかむとぞ思

【異同】たふますは―たふさすは（御・桂・大）

【現代語訳】牛車が巡って来て、（乗っている人の香の）匂いが絶えないとしたら、下紐を解いて睦び合いたい  
と思うことだ。「第三句」「たふますは」は所載欄の袖中抄「たえせずは」で解した。」

【語句】○をぐるま 小車。車、特に牛車のこと。「をんなにかはりて／よひよひに錦のひもはとくれどもなど  
をぐるまの音だにもせぬ」（江帥集・二八一）。○まひてにほひの「舞ひて匂ひの」か。明確に意がとりにくい。  
「舞ふ」には巡る、あちこち走り回るの意がある。「良正独り因縁を追慕して、車の如くに常陸の地に舞ひ廻る。」  
（将門記）。○たふますは 意味不詳。所載欄の袖中抄により「たえせずは」で解した。絶えないとしたら。「せ  
きとむる涙いづみに絶えせずは流るるみをぞとどめざりける」（伊勢集・二九三）。○にしきのひもとかとんとぞ  
思 錦の紐を解いて共寝をしようと思う。「錦の紐を解く」は、錦の下紐を解いて男女が共寝をすること。「小車  
錦の 紐解かむ 宵入（よひり）を忍ばせ夫（せ） よやな 我忍ばせ子 我忍ばせ そよ まさに寝てけらし  
も」（風俗歌・小車）。「にしきの」と冠されたのは、初句の「をぐるま」とともに「小車錦（小車の形を織り出  
した錦で、伊勢神宮の神宝が包まれる）」という語からの発想。

【所載】袖中抄・六〇六

うし

一四二三 わがのもしことをうしとやおもひけんくさばかりけるつゆのいのちを

【異同】わかのもし―わかのもし（御・桂・大）

【現代語訳】私が乗ったことを、つらく嫌だと牛は思ったのだろうか（それで死んだのだろうか）。草葉に置き

た、このようにはかない露のような命であつたことよ。【初句「わがのもし」は、「わがのりし」で解した。】

【語句】◎うし 偶蹄目ウシ科の家畜。大形で、雌雄ともに二本の頭角をもち、四肢は短い。草食性。和歌では牛車を引く動物として詠まれるのが一般的で、「憂し」との掛詞で詠む例、あるいは法華経譬喩品の故事に拠り、火宅から救済する大乘仏法を「牛の車」に喩える例もある。○わがのもしことをうしとやおもひけん 「わがのもし」は不審。他本の「わがのりし」に拠つて解した。私が乗つたことを牛は嫌だと思つたのだらうか。「うし」は「牛」と「憂し」の掛詞。所載欄の文献によれば、牛を人から借りた後、その牛が死んだことを聞いて詠んだ歌。○くさばにかゝるつゆのいのちを 草葉にかかる露のようにはかない命であることだ。「かゝる」は露が置く意と「かくある」の意の掛詞。「たのむ世か月のねずみのさわぐまのくさばにかかるつゆのいのちは」（高光集・三四）。「を」は、牛の死に心動かされたことを表す間投助詞。

【所載】後撰集・雑二・一一三〇／大和物語・一〇九段・一七二

【参考】古今集の元永本卷十九・一〇六八の次にもこの歌を載せる。

一四二四 あしひきの山とことひのうしなればおもしろくこそけふはひきけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】（あしひきの）大和琴なので、感興が湧いて心楽しく弾いたことだ。——大和国の強健な牡牛なので、感興が湧いて今日は心楽しく牽いたことだ。

【語句】○山とことひのうし 「大和の国のことひの牛」の意に「大和琴」を掛けた。「ことひのうし」は、強健で大きな牡牛。○おもしろくこそ 「おもしろし」は、目の前が明るくなる感じを原義とし、音楽や花や月などの景、絵や詩歌、催しなどに接して引き起こされる、明るく晴れやかな気持ちを表す言葉（松尾聰「中古の作品における「おもしろし」——源氏物語を中心にして——」『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』有精堂、一九七二年）。牛を牽くような場合に用いられた例はなく、当該歌では琴の文脈に導かれた表現となっている。○けふはひきけれ 今日はいいたことだ。「ひく」は牛を「牽く」と琴を「弾く」の掛詞。

【所載】夫木抄・一二九六〇／和歌童蒙抄・八〇八

むま

かさのかなむら

一四二五 しはつ山いはさかばかりわれのれるむまぞつまづくいへこひぬらし

【異同】かさのかなむら—ナシ（御・太）

【現代語訳】四極山（を越えていく道）は岩の坂ばかりで、私の乗っている馬がつまずく。家の者が私を恋しく思っているにちがいない。

【語句】◎むま ウマ科の家畜。体高一・二から一・七メートルくらい。首は長く、まえがみとたてがみがあり、尾は長毛で覆われる。草食性。古典文学では乗るための動物として登場する。平安期には歌語「駒」が主として用いられ、古今六帖でも八首中六首は「こま」と詠む。○しはつ山 四極山。摂津、三河の両説があるが、現在地未詳。「四極山うち越え見れば笠縫の嶋こぎかくる棚無し小船」（万葉集・二七四（旧二七二））。○いはさかばかり 岩の坂ばかり。○むまぞつまづく 馬の足がつまずく。「妹が門出入の河の瀬をはやみあが馬つまづく家思ふらしも」（万葉集・一九五（旧一九一））とあるように、旅行中馬がつまずくのは、留守宅の者が思っているしるしという俗信があった。

【所載】万葉集・三六八（旧三六五）塩津山 打越去者 我乗有 馬曾爪突 家恋良霜 シホツヤマウチコエユケバワガノレルウマゾツマヅクイヘコフラシモ しほつやまうちこえゆけばわがのれるうまぞつまづくいへこふらしも／夫木抄・八九〇八／和歌童蒙抄・八〇二／和歌色葉・二二六

【参考】作者名「かさのかなむら」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

一四二六 君こふといねぬあさけにたがのれるこまのあしをとわれにきかすな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたを思つて眠らなかつた夜明けに、誰が乗った駒の足音だというのか、私に聞かせないで。

【語句】○いねぬあさけ 眠らなかつた夜明け。「あさけ」は「朝明（あさあけ）」の変化した形で、夜明け方。

「物思ふといねぬ朝明に霍公鳥鳴きてさ渡るすべなきまでに」（万葉集・一九六四（旧一九六〇））。○たがのれるこまのあしをと たがのれるこまのあしをと。誰が乗っている馬の足音なのか。「こま」は、一四二五番歌の語句欄の「むま」参照。所載欄の万葉集には「ぞ」が添えられるが、当該歌には「たが」に呼応する助詞がない。ここの蹄の音は、よその男が他の女のもとから帰るのを羨んだとも、相手の男がよその女に通つて帰るの

を恨んだともとれるが、一応前者とみる。

【所載】万葉集・二六六二（旧二六五四） 君恋 寝不宿朝明 誰乗流 馬足音 吾聞為 キミコフトイネヌアサケニ（ヌレドネラレズ）タガノレルウマノアシオトゾワレニキカスル きみにこひいねぬあさけにたがのれるうまのあしおとぞわれにきかする

一四二七 ませごしにむぎはむこまのはるぐとおよばぬこひもわれはするかな

【異同】はる／＼と―はる／＼に（御・桂・大）

【現代語訳】柵越しに麦を食べる駒のように、はるかに及ばない恋を私はすることだなあ。

【語句】○ませごしにむぎはむこまの 柵越しに麦を食べる馬の。「こま」は、子馬、馬の総称。一四二五番歌の語句欄の「むま」参照。「ませ」は、「馬柵（ませ）」。馬が逃げださないように作った柵。「馬柵越しに麦食む駒の罵らゆれどなほし恋しく思ひかねつも」（万葉集・三二一〇（旧三〇九六）。「これ、ませ越しにさぶらふ」（枕草子・二三九段、三條の宮におはしますころ）。初・二句は「はる／＼と」を導く序詞。○はる／＼とはるばると。はるかに遠いさま。「天雲のはるばるみゆるみねよりも高くぞ君を思ひそめてし」（元良親王集・八七）。柵越しに馬が首を伸ばして麦を食べようとするがはるかに及ばないことを、遠く及ばぬ恋に転ずる。○およばぬ 手の届かない。

【所載】ナシ

【参考】万葉集には「くへ越しに麦はむ子馬はつはつにあひ見し子らしあやにかなしも」（三五五八（旧三五三七）、「うませ越し麦はむ駒のはつはつににひ肌ふれしころしかなしも」（三五五九（旧三五三七、或本歌）の類似した歌がある。

一四二八 わがこまのあしがきはやくくもぬにもかくれ行ともまたむわぎもこ

【異同】ナシ

【現代語訳】私の駒の足が早い、雲の彼方に隠れてしまおうとしても、待っているだろう、いとい妻は。

【語句】○こま 一四二七番歌、一四二五番歌参照。○あしがき 「脚掻き」は、馬が勇んで前足で地面を蹴るようにすること。「青駒が足掻きを早み雲居にぞ妹があたりを過ぎて来にける」（万葉集・一三六（旧一三六））。

○くもぬにもかくれ行とも 雲居にもかくれてゆくとも。「くもぬ（雲居）」は、雲、雲のあるところ、大空。馬の速度が速いので雲のある所まで行つて隠れてしまふとしても。所載欄の万葉集歌は、女性を訪れる前の男のはやる心を歌っているが、当該歌のこの措辞は、第五句「またむわざもこ」との繋がりが今一つ明確でない。

【所載】万葉集・二五一五（旧二五一〇） 赤駒之 足我枳速者 雲居尔毛 隠往序 袖卷吾妹 アカゴマノアガキハヤクバクモ申ニモカクレユカムゾソデマク（マカム）ワギモ あかごまがあがきはやけばくもぬにもかくりゆかむぞそでまけわざも／人麿集Ⅲ・五三三

一四二九 とをくありて雲ぬにみゆるいもがいへにはやくいたらむあゆめくろこま  
ひとまろ

【異同】いもかいへに―いもかうへに（御・大）

【現代語訳】はるか遠方にあつて雲のかたにみえる愛しい妻の家に、早くたどり着きたい、歩め、黒駒よ。

【語句】○とをくありて とほくありて。はるか遠いところにあつて。○雲ぬ 一四二八番歌参照。○くろこ

ま 黒駒。黒毛の馬。「こま」は一四二五番歌の語句欄の「むま」参照。

【所載】拾遺抄・恋上・三〇一／拾遺集・恋四・九一〇／万葉集・一二七五（旧一二七一） 遠有而 雲居尔所見 妹家尔 早将至 歩黒駒 トホクアリテクモ申ニミユルイモガイヘニハヤクイタラムアユメクロコマ とほくありてくもぬにみゆるいもがいへにはやくいたらむあゆめくろこま、三四六〇（旧三四四一） 麻等保久能 久毛為尔見由流 伊毛我敝尔 伊都可伊多良武 安由亮安我古麻、マトホクノクモ申ニミユルイモガイヘニツカイタラムアユメアゴコマ まとほくのくもぬにみゆるいもがいへにいつかいたらむあゆめあがこま／人麿集Ⅰ・二二三／人麿集Ⅱ・五二七／人麿集Ⅲ・六二四

【参考】作者名「ひとまろ」は、拾遺集に一致する。拾遺抄では「おとまろ」、万葉集では「柿本朝臣人麿之歌集」の歌、人麿集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに載る。

一四三〇 久かたの月げのこまをうちはやめきぬらんとのみ君をまつかな

【異同】ナシ

【現代語訳】月毛の駒を急がせてやってくるところにちがいない、とばかり思つてあなたを待つことだ。

【語句】○久かたの 天、空、月、光などにかかる枕詞。○月げのこま 月毛の駒。「月毛」は、鵠（とき。古名は鵠（つき））の羽のような赤みのある毛色。「秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる雲みをかけれ時の間も見ん」（源氏物語・明石）。○きぬらん 来るところにちがいない。「ぬらん」は、確述・強調の「ぬ」に現在推量の「らん」を続けた形。……てしまっているだろう。きつと……いるだろう。「夜ふけ侍りぬらむ。とく帰らせ給へ。」（蜻蛉日記・中巻）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

一四三二 おがさはらへみのみまきにあるゝむまもとればぞなつくこのわがそでとれ

コナカ

【異同】ナシ

【現代語訳】小笠原の速見の御牧の荒馬も捕えればなつく。あなたも私の袖を取ってなつてくたさい。

【語句】○おがさはら 甲斐国の御牧の名。今の山梨県北杜市明野町に小笠原の地名があることから、この辺りとする説がある。○へみのみまき 速見の御牧。和名抄には、甲斐国巨麻郡の項に「速見」（訓は「倍見」）とある。所載欄の文献は「みづのみまき」または「へみのみまき」とする。○なつく 馬が馴れておとなしくなる様。また、人と人が慣れ親しみ親密になる様をいう。○このわがそでとれ この我が袖取れ。（荒馬がなつくように）あなたも私の袖をとってなつてくたさいという意かの恋の歌か。平中物語には次のような男女の贈答がある。「春の野に荒れてとられぬ駒よりも君が心ぞなつけわびぬる」、「とる袖のなつくばかりに見えばこそつみのの駒も荒れまざるらん」（平中物語・三三段・一二五、一二六）。

【所載】和歌体十種・一／和歌十体・一／奥儀抄・一〇五／袖中抄・一五六

【参考】夫木抄一〇一一六は「へみのみまき」の項で古今六帖第二帖歌として当該歌を引くが、第五句を「なつてぞとる」とする。

一四三二 とへあまりよつよをこゆるたつのこま君すさめずはおいはてぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】十八丈（の谷）を飛び超える竜のような立派な馬も、あなたが心に留めないならば老い果ててしま

うでしょう。

【語句】〇とへあまりよつよ 意味不明。所載欄の文献に拠り「とつゑあまりやつゑ」として解した。「とつゑ(十丈)あまりやつゑ(八丈)」は、十八丈の意。「丈」は長さの単位。令義解の雑令に「十尺為丈」とあることから、一丈は十尺にあたる。〇たつのこま 漢語「竜馬」の訓読。優れて立派な馬。〇君すさめずは あなたが心に留めてくれないならば。「すさむ」はそのものの良さをもてはやし、愛すること。

【所載】夫木抄・一二九九七／日本紀竟宴和歌・二六

【参考】古今六帖では詠歌事情が不明であるが、所載欄の日本紀竟宴和歌に拠れば、当該歌は、延喜六(九〇六)年に、日本紀講の講了後に催された竟宴で詠まれた歌である。日本書紀の卷十九、欽明天皇七(五四六)年七月の条にある、十八丈の谷を越えたという優れた馬の話をもとに詠んだ歌。

てら

一四三三 たちばなのてらのながやにひとめみしうなるはいまはかみあげつらん

【異同】ナシ

【現代語訳】橋の寺の長屋で一目見たうない髪の少女は、もう今は成人して髪を上げてしまったのだろうか。

【語句】◎てら 仏教の礼拝や修行のために仏像を安置し、僧や尼が住まう建物。〇たちばなのてら 奈良県高市郡明日香村にある橋寺。日本書紀の卷二九、天武天皇九(六八一)年四月の条に「橋寺尼房失火以焚十房。」とあることから、尼寺であったと考えられる。〇ひとめみし 恋歌に用いられる表現。「ひとめみし人はたれともしら雲のうはのそらなる恋もするかな」(千載集・六四七)。〇うなる 髪を垂らした子供の髪型。また、その髪型をした子供を指す。〇かみあげつらん 既出一四一八番歌参照。

【所載】古今六帖・第二帖「うなる」一四一八番既出

一四三四 はつせめとおもひたつたの山とほみこまにとづめてをるすべもなし

ヒキトメデ

【異同】ナシ

【現代語訳】初瀬へと思ひ立つ、というその竜田山が遠いので、駒に(わが身を)留めてその場に居ることもできないことだ。

【語句】○はつせめ 「初瀬」は大和国城上郡長谷郷。今の奈良県桜井市初瀬を中心とした地域、またはこの地にある長谷寺を指す。第一句は所載欄の文献に拠り「はつせへ」として解した。○おもひたつたの山「たつ」に「思ひ」立」と「竜田山」を掛ける。「はつせめとおもひ」は「たつたの山」を導き出すための措辞。○こまにとめて 「駒に（我が身を）留めて」か。解しにくい。所載欄の文献は「こまひきとめて」。○をるすべもなし 居るすべもなし。その場に留まる手段がない、留まることができないという意味か。歌意が通りにくい。

【所載】 夫木抄・一六四四三

【参考】 類似歌に「いつしかとおもひたつたの山とほみこまひきとめてくるすべもなし」（夫木抄・一六八七三）がある。

一四三五 さゝなみやしがの山ぢのつづらおりくるひとたえかれやしぬらん

【異同】 くるひとたえーくるひとたえて（大）

【現代語訳】 志賀の幾重にも曲がりくねる山道。来る人が途絶え、人の足が遠のいてしまうのだろうか。

【語句】 ○さゝなみや 「志賀」に掛かる枕詞。○しがの山ぢ 京都の北白河から志賀の里へ出る山道。志賀寺参詣にも利用された。○つづらおり 幾重にも折れ曲がる山道のさま。「近うて遠きもの……鞍馬のつづらわり」といふ道（枕草子）「近うて遠きもの」。○くるひとたえ 来る人絶え。大久保本、所載欄の文献は「くるひとたえて」。字足らずなので、これらに拠つて「くるひとたえて」と見る。「くる」は「来る」とつるを「繰る」を掛ける。「たゆ」は人の行き来が途絶える意とつるが切れる意を掛ける。○かれ 「離れ」と「枯れ」を掛ける。当該歌の上三句は「くる」を導く序。また、「繰る」「絶ゆ」「枯る」は「つづら」の縁語。

【所載】 夫木抄・八八九八

〔以上五首担当 犬養悦・市東〕

一四三六 しらかはゝたましけりともみえなくくものはやしをあらしつるかな

【異同】 あらしつるかなーあかしつるかな（御・桂・大）

【現代語訳】 白川は玉を敷いているとも見えないのに、雲林院を明るくしていることだなあ。

【語句】 ○しらかは 白川。山城国の川。比叡山四明岳と如意岳の間の山中に源を発し、末は賀茂川に注ぐ。上



流域から白川石と呼ばれる白く美しい花崗岩を産出、そのため川砂が白く見えるので白川の名がある。○たましけり 玉敷けり。玉を敷いている。○くものはやし 雲林院のこと。平安京外船岡山の東にあった。はじめは淳和天皇の離宮、仁明天皇皇子常康親王へ伝領され、親王の出家により寺とされた。のち遍照に付嘱されて元慶寺の別院となり、菩提講の催される寺として知られるようになる。十四世紀、大徳寺の創建に際しその子院として施入された。「木のもとに織らぬ錦のつもれるは雲の林のもみぢなりけり」（後撰集・四〇九）。○あらしつるかな 底本は「ら」の右側に小さく「か」の傍書がある。異同欄で見るとおり他本はみな「あかし」なので、ここでは「あかし」として現代語訳した。「あかし」は他動詞「明かす」の連用形と見ておく。明るくしているなあ。

【所載】 夫木抄・一六四五

【参考】 歌意から見れば「しらかは」を詠んだ歌であるが、雲林院が詠まれているので、古今六帖はこれを「てら」の項に収めたのであろう。夫木抄でもこの歌は「雲林・山城」の「寺」の題の下に置かれている。

### 伊勢

一四三七 ながたにはしりがほにせよ山びともむかしのこゑはきゝしれるらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 長谷は、どうかわたくしを知りびととして遇してほしい。山びこも、むかしここに来たわたくしの親の声は、きつと聞き知っていることでしょうから。

【語句】 ○ながたには 「ながたに」は「長谷」。ここは初瀬の長谷寺のことと見ておく。参考欄参照。所載欄の伊勢集Ⅰでは、初句「なくをだに」。○しりがほにせよ わたくしを知りびととして遇してほしい。「ながたに」に対して命じ、要求している。「しりがほ」は、それを知っているというようすをはっきりと外に表すさま。○むかしのこゑ むかしここに来た人の声。ここでは今は亡きわが親の声。参考欄参照。

【所載】 伊勢集Ⅰ・二五二／伊勢集Ⅱ・一三二

【参考】 作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰの詞書には、「初瀬にまうでて親ありしときをおもひいでて」とあり、伊勢集Ⅱにも同じ詠歌事情を伝える詞書がある。伊勢は父の大和守時代に、母に伴われて長谷寺に詣でたことがあり、この歌は、母の死後長谷寺に詣でて詠んだものである。歌に寺そのものが詠まれているにもかかわらず、古今六帖がこれを「てら」の項に収めたのは、伊勢集の所伝どおり、これを長谷寺での詠と認めたからであろう。

一四三八 よるのかね<sup>み</sup>つかざるさきにゆあみよといひてしものをみゝつまなくに  
かね

【異同】 よるのかね—よひのかね (大)

【現代語訳】 宵の鐘をつかないうちに湯浴みしなさい、と言ったのだったのに、耳をつねらずに。

【語句】 ◎かね 鐘。時報や警報としてつく梵鐘、または仏事のときに鳴らす鉦などの総称。○よゐのかね 「夜の鐘」かとも考えられるが、ここは時を知らせる「よひのかね (宵の鐘)」と見ておく。「よひ」は、日が暮れてから夜中までの時間帯の前半あたりをいう。令制下宮中では、時刻を知らせるために太鼓と鐘を鳴らしたことが、延喜式陰陽寮の規定から知られる。また寺院でも時刻を知らせるために鐘をついた。○ゆあみよ 湯浴みよ。入浴しなさい。○いひてしものをみゝつまなくに 四句と五句は倒置されているものと見る。袋草紙では、「耳つまなくにいひてしものを」となっている。「みゝつむ」は耳をつねること。あるいはそれがまじないであつたか。参考欄参照。耳をつねらずに言ったのだったのに。

【所載】 袋草紙・二八七

【参考】 袋草紙でこの歌は、「誦文歌」の項に収められ「沐浴間槌鐘誦文歌」という題がある。「誦文歌」とはまじないのために唱える歌。当該歌は、入浴中鐘が鳴った場合に唱える誦文歌であつたらしい。

一四三九 みな人のねよとのかねはつくなれど君をまつとてた<sup>え</sup>みてねぬかも  
かさの女わう

【異同】 ナシ

【現代語訳】 もうみんな寝なさい、と知らせる鐘はついているけれども、あなたを待っていて、わたしはとても寝られはしない。

【語句】 ○かさの女わう この歌の万葉集における作者名は「笠女郎」。笠女郎は生没年不明だが、大伴家持への恋のあつたことが万葉集から知られる。この歌も「笠女郎贈大伴家持歌二十四首」の中の一首である。○ねよとのかね もう寝なさい、と知らせる鐘。時の鐘のことは前歌(一四三八番)参照。○つくなれど 鐘をついてるのが聞こえるけれども。「なれ」は伝聞の助動詞「なり」の已然形。○たえてねぬかも まったく寝られな

いのだ。「たえて」は、まったく、とても、の意。下に打消の語を伴ってこれを強める。

【所載】万葉集・六一〇（旧六〇七）皆人乎 宿与殿金者 打礼杼 君乎之念者 寐不勝鴨 ミナヒトヲネヨトノカネハウツナレドキミヲシオモヘバイネカタニカモ みなひとをねよとのかねはうつなれどきみをしおもへばいねかてぬかも／夫木抄・一五二五二／綺語抄・五五五／古来風体抄・五四

【参考】作者名「かさの女わう」は、語句欄に述べたとおり、万葉集の所伝により「笠女郎」と考えられる。

## 法師

けうげいほうし

一四四〇 かたちこそみ山がくれのくちななれこゝろははなになさばなりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】いかにもわたしは、姿かたちこそ深い山にかくれた朽ち木のようにみすばらしい者だ。しかしこころは、みごとに花になそうとすればなるだろうよ。

【語句】◎法師 語義としては法の師、すなはち仏法に通じ師となって人を導く僧のこと。出家して具足戒を受けた男子の通称。○み山がくれのくちき 深い山の中にかくれて人目にとまることもない朽ち木。見るかげもないものの比喩。○はな 花。美しくて人目をひくものの比喩。「み山がくれのくちき」に対して言ったことば。

【所載】古今集・雑上・八七五

【参考】作者名「けうげいほうし」は、古今集では「けむげいほうし（兼芸法師）」となっている。詞書には「女どもの見てわらひければよめる」とある。

〔以上五首担当 山下〕

一四四一 神無月しぐればかりを身にそへてしらぬ山ちにふるぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】この神無月に、しぐれだけを身に添えて、濡れながら知らぬ山路に暮らすのは、思えば悲しいことだなあ。

【語句】○神無月 旧暦十月。○しぐれ 晩秋から初冬にかけてのころ、降ったりやんだりする通り雨。「神無

月しぐれしぐれて冬の夜の……」（古今集・雑体・一〇〇二）。○しぐればかりを身にそへて ただしぐれだけを身に添えて。法師であるから、他のものは何も持たずにの意。○ふる 年月を過ごす。暮らす。「しぐれ」の縁で「降る」を掛ける。

【所載】後撰集・冬・四五三／新撰朗詠集・五七三／定家十体・二三一／古来風体抄・三一七

一四四二 ものごしにはなをうちみて人しれずにびたるころろいろめきぬべし  
つらゆき

【異同】にひたるころろ―わひたる心（桂）

【現代語訳】垣根ごしに花をちらりと見て、物に動じないはずの僧も、ひそかに華やかな心になるにちがいない。  
【語句】○ものごし 几帳・簾・垣根などが間を隔てていること。参考欄の貫之集三三五番歌によれば、この歌は承平五（九三五）年に詠まれた内裏屏風歌十首の中の一首で、「をむな簀子にさし入りたる桜の花折りたる、馬に乗りて道行く法師垣越しにうち寄りて見る」という詞書がある。○人しれず 人に知られず。密かに。○にびたるころろ ねずみ色のような心。情に動かされない心。出家した僧のころろ、ということ。○いろめきぬべし 華やかになるにちがいない。「ぬべし」はきつと……だ、必ず……だ、の意。「にびたる」と「いろめき」の対比。

【所載】私家集大成にはナシ。

【参考】『新編国歌大観』第三巻・私家集編・貫之集・三三五。『新編国歌大観』の底本、陽明文庫本は当該歌を脱しているが西本願寺本、御所本で補っている。作者名「つらゆき」は参考欄の文献に一致する。

一四四三 いづれをかありともわかむ山ぶしのおつるなみだもふちにこそなれ

【異同】ナシ

【現代語訳】どこを君がいる所だと見わけようか。山伏の私が流す涙も、降る雨もすべて淵になっていますよ。  
【語句】○いづれをか どこを……か。○ありともわかむ いるとはつきり分かるうか。○山ぶし 山野に伏して仏道修行する人、僧。ここでは作者。○ふちにこそなれ 淵になっているから。「ふち」は水の淀んで深くなっている所。所載欄後撰集の詞書によれば「戒仙がふかき山寺にこもり侍りけるに、こと法師まうできて雨に降

りこめられて侍りけるに」とあり、第五句は「降りにこそ降れ」である。

【所載】後撰集・雑二・一一三三

一四四四 このみゆき千とせをかへであらせばやかゝる山ぶしときにあふべく

【異同】ナシ

【現代語訳】この行幸を、千年にもわたって変えることなく続けたいのよ。このような山伏が、光榮な機会にあうことができるように。

【語句】○このみゆき 所載欄後撰集によれば、宇多天皇が昌泰元（八九八）年十月に吉野の宮滝や竜田山などを廻られたことをさす。○千とせをかへで 千年にわたって変えることなく。○あらせばや 続けたいのものだ。○かゝる山ぶし このような山伏。後撰集によれば素性法師。○ときにあふべく 良い機会にあつて栄えることができるように。

【所載】後撰集・雑一・一〇九二／素性集Ⅰ・四五／素性集Ⅱ・四五／和歌童蒙抄・五一九

【参考】作者については一四四七番歌参照。

一四四五 こけのそで雪げのみづにすゝぎつゝおこなふみにもこひはたえせず

【異同】ナシ

【現代語訳】墨染めの衣を雪解けの水で洗い清めては、厳しい仏道修行に励んでいるこの身にも、恋の心は絶えることがないなあ。

【語句】○こけのそで 僧・隠者などの衣服。「こけのころも」「こけのたもと」などとも言う。「年くれし涙のつららとけにけり苔の袖にも春や立つらん」（新古今集・一四三六）。○雪げのみづ 雪解けの水。○おこなふ 仏道修行をする。○たえせず 絶えることがない。サ変動詞「絶えず」の未然形「絶えせ」に打消の助動詞「ず」が付いたもの。

【所載】ナシ

【参考】作者については一四四七番歌参照。

〔以上五首担当 林〕

一四四六 よをいとふこゝろはこゝにとまらなむいでもよをばともなきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】世を厭う気持ちはこちらにとどまってほしい。言わないでも、この世をば、友がないので。

【語句】○いほでもよをば 以下、下句は解しがたい。「いほでも」は、何を言わないというのか。「よをいとふこゝろ」をか。また一首の中でどういう意味を持つのか。「よをば」も、それを受ける文節が見当たらない。本文に混乱があるか。

【所載】ナシ

【参考】作者については一四四七番歌参照。

一四四七 いまさらにむべことのねにひきかゝりこけの山ぢをわすれやはせん

已上四首 そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】いまさら、確かに琴の音にひかれて、苔の生えているあの山路を忘れることがあるうか、忘れることはできません。

【語句】○いまさらに 「わすれやはせん」にかかる。○こけの山ぢ 「苔の袂」「苔の筵」などと同じ用法で、隠遁者の辿る山路を意味するのであろう。

【所載】ナシ

【参考】この歌は河海抄（明石）に、源氏が明石の君に詠みかけた歌、

むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと

の注として引用されているが、二句を「むつことのねに」、五句を「忘れやらなん」とする。現存伝本の中には「むつことのねに」とする本文はないが、「むつことのねに」の場合は「睦言」に「琴の音」が掛けてあると考へるべきなのであろう。なお「已上四首そせい」は、一四四四番の「このみゆき」以外は確認できない。

一四四八 よをいとひこのもとごととにたちよりてうつぶしぞめのこけのころもぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】俗世を厭い、あちこちの木の下に立ち寄っては頭を垂れる、そのふし染めの苔の衣なのですよ、これは。

【語句】○このもと 木の下。仏教でいう「樹下（じゅげ）」の和訳であろう。○うつぶしぞめ 動詞の「うつぶし」に「ふし染め」を掛ける。「ふし染め」の「ふし」は「五倍子」と書き、ぬるでという木に寄生する虫によつて生じたこぶ状のもので、粉末にして衣類やお歯黒の染料とする。ここは黒く染めた僧衣。なお「うつぶす」は、下を向いて寝る意ではなく、単に、下を向く、うつむく意であると、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』ならびに片桐洋一『古今和歌集全評釈』は言い、その上で片桐は「修行する姿勢」と言っている。○こけのころも 苔で作ったような粗末な衣。隠遁者などの着る着物をいう。

【所載】古今集・雑体・一〇六八／遍昭集Ⅱ・四六／和歌童蒙抄・四七八／古来風体抄・二九八

あま

一四四九 そむくとてくもにはあらぬものなれどよのうきことぞよそになるてふ

【異同】くもにはあらぬ―くもにはのらぬ（桂・大）

【現代語訳】世をそむくからといって、雲に乗るわけではないけれど、俗世のいやなことは遠くになるとかいふことです。

【語句】◎あま ここは、「寺」「かね」「法師」と題がつづき、歌の内容から考えても、「海人」ではなく、「尼」であろう。女性で、出家し、仏門に入った人。○そむく 出家する。○くもにはあらぬ 傍記ならびに他本や所載欄の文献により「雲にはのらぬ」で解した。勢語臆断は、莊子逍遙遊第一に見える、藐姑射の山の神人についての記述「乗雲氣御飛龍而遊乎四海之外」を引く。仙人のように雲に乗るわけではない、の意。

【所載】新後拾遺集・雑上・一三〇二／業平集Ⅰ・七一／業平集Ⅱ・一四／業平集Ⅲ・四六／業平集Ⅳ・三三／伊勢物語・一〇二段・一七八

さい院

一四五〇 濤みながらそでぞぬれぬるあまをぶねのりをくれたるわが身と思へば

【異同】ナシ

【現代語訳】波の立つまま、涙で袖が濡れたことだ。尼になるための、仏法の舟に乗り遅れたわが身と思うと。

【語句】○濤みながら「なみながら」の意で解した。桂宮本は「濤みながら」の「濤」をミセケチにして右傍に「な」と書く。○あまをぶね 海人が乗る小舟。「尼」を掛ける。○のりをくれたる「乗り遅れたる」に「法」を掛ける。「わたつ海はあまの舟こそありときけのりたがへてもこぎいでたるかな」（拾遺集・五三〇）。

【所載】ナシ

【参考】作者の「さい院」が具体的に誰であるかは特定できないが、斎院は賀茂神社に奉仕する、いわば神に仕える身であり、たとえば大斎院と呼ばれた村上天皇皇女選子内親王なども、強く仏教を信じながら斎院を退下するまで出家できなかった。この「さい院」も、古今六帖の成立年次との関係で時代的には微妙だが、選子内親王の可能性はあるか。

〔以上五首担当 久保木〕

一四五 一 ゆくふねのたちもとまらぬこのしたにいかなるあまかながめかるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】漕ぎ行く舟が停泊することも木の下で、どんな海人が長海布を刈っていることだろうか。

【語句】○たちもとまらぬ 立ち止まりもしない。「招くとして立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれたたる花すすきかな」（拾遺集・二二三・好忠）。当該歌では、漕ぎ行く船が停泊することもないという意に、人（男）が立ち止まることもない、すなわち、来訪したり泊まったりすることもないという意を込めるか。「かりにぞといはぬさきより頼まれずたちとまるべき心ならねば」（赤染衛門集・三四八）。○このしたに 木の下に、か。参考欄の拾遺集三七八番歌に見える「このしまに」が正しい本文だったかと思われる。○あま 海人。海藻を刈ったり、魚貝を捕ったりなどして、海で漁業に従事する人。当該歌は「仏事」の中の「あま」という題の歌として収載されていることから、「尼」を掛けて詠み込んだ歌とみなされる。○ながめ 長海布。丈の長い海藻。物思いにふける意の「眺め」を掛けた。「人（男）が立ち止まって訪れるはずもない所で、思い悩んだとて何のこないのに、尼が物思いにふけていることだろうか。」という寓意が一首全体にあるか。「海人」と「尼」、「長海布」と「眺め」の掛詞が併用された例として、「舟流すほどは久しといふなるをあまとなりてもながめかるて



ふ」(多武峰少将物語・四三・京の殿)等がある。

【所載】ナシ

【参考】『校證古今歌六帖』は、拾遺集三七八番に「このしまにあまのまうでたりけるを見て」という詞書とともに見える「水もなく舟もかよはぬこのしまにいかでかあまのなまめかるらん」の転じたものかとする。拾遺集の「このしま」は、京都市太秦の木島神社のこと。

〔以上一首担当 長戸〕

一校了

【異同】一校了―一校記(桂)、禁裡以御本書写校合畢(大)

